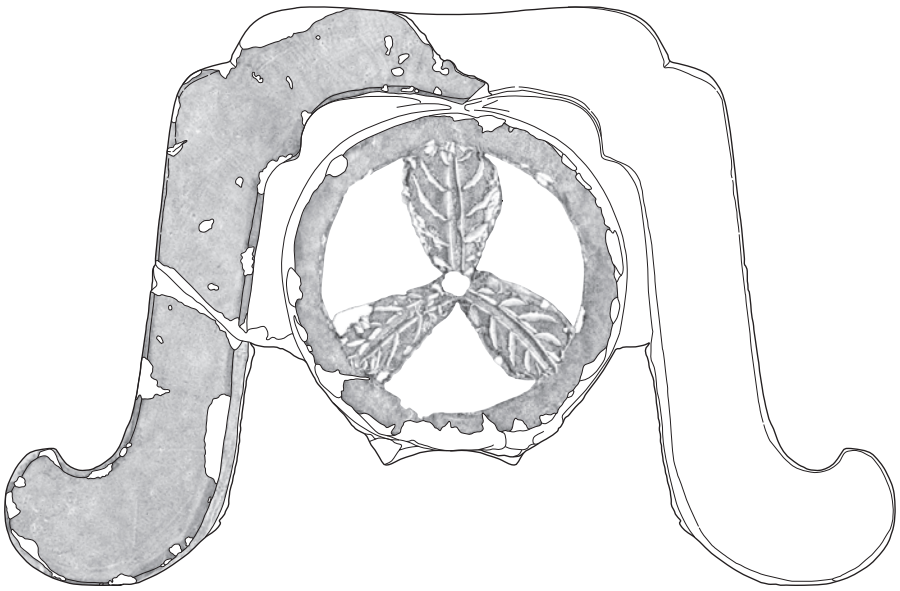
高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 152 集

高知城跡北曲輪

（こうちじょうせききたくるわ）

高知県保健衛生総合庁舎建設に伴う発掘調査報告書



2019.3

高 知 県

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知城跡北曲輪

高知県保健衛生総合庁舎建設に伴う発掘調査報告書

2019.3

高 知 県
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

高知城跡北曲輪は，史跡高知城のある大高坂山の丘陵裾部に位置し，江戸時代の絵図によると藩の諸施設が並び，また江ノ口川に接しており，城内への物資を運ぶ重要な場所でありました。現在ではこの地が高知城跡内であることはあまり知られていませんが，かつて江戸時代には江ノ口川や北御門より多くの物資や人が往来する活気ある場所であったことが伺われます。

今回の調査は高知県保健衛生総合庁舎の建て替えに伴うもので，高知城跡内の発掘調査としては最大面積となりました。調査では高知城跡に関連する遺構や多量の瓦が出土し，瓦には藩主山内家の家紋である三ツ葉柏文の鬼瓦や高知城跡の発掘調査では初めての出土となる鯱の破片も見つかり，大きな成果があがっています。

この報告書により，多くの人が当時に思いを馳せ，より歴史に興味を持ち，高知城跡の文化的価値を再認識して頂くきっかけとなれば幸いです。

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長　松田直則

例言

1. 本書は高知県保健衛生総合庁舎の建設に伴い，平成27・29年度に実施した高知城跡北曲輪の発掘調査報告書である。
2. 本調査及び整理作業は，高知県の委託を受け，公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査地は，高知市丸ノ内2丁目34に位置する。
4. 調査期間は，庁舎建設の工程により平成27年9月28日～12月18日及び平成29年8月30日～12月15日の2期に分けて実施した。
5. 調査・整理作業体制は以下の通りである。

平成27年度

総　　括：所長　松田直則
総　　務：次長　東勝彦，総務係長　吉森和子，主任　黒岩千恵
調 査 総 括：調査課長兼調査第一班長　吉成承三
調 査 担 当：調査第三班長　坂本裕一，主任調査員　徳平涼子
調査補助員：大原直美
事務補助員：奥宮千恵子
整理作業員：岡宗真紀，小林貴美

平成29年度

総　　括：所長　松田直則
総　　務：次長　和田安弘，総務係長　吉森和子，主任　三谷有紀
調 査 総 括：調査課長兼調査第一班長　吉成承三
調 査 担 当：主任調査員　下村裕・徳平涼子
調査補助員：大原直美，松井喬行
事務補助員：笹野女怜
整理作業員：岡﨑千枝，岡宗真紀，黒石和加，土居初子，藤原ゆみ

平成30年度

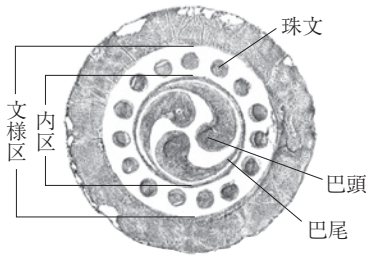
総　　括：所長　松田直則
総　　務：次長　和田安弘，総務係長　吉森和子，契約職員　今田琴美
調 査 総 括：調査課長兼調査第一班長　吉成承三
調 査 担 当：専門調査員　徳平涼子
調査補助員：大原直美
事務補助員：笹野女怜
整理作業員：岡﨑千枝，岡宗真紀，黒石和加，田島歩

6. 本書の執筆は，第Ⅰ・Ⅱ章を坂本，第Ⅲ・Ⅴ章を徳平，第Ⅳ章をパリノ・サーヴェイ株式会社と一般社団法人文化財科学研究センターが行い，編集は徳平が行った。

7. 本書に掲載した現場写真は坂本・下村・徳平，遺物写真は徳平が撮影した。
8. 遺構については，SB（掘立柱建物跡），SA（塀・柵列跡），SK（土坑），SD（溝跡），SX（大型土坑），SE（井戸跡），P（ピット）で表記した。また，掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Ｎは世界測地系のGNである。
9. 遺物については，原則として縮尺1/3，瓦については縮尺1/5で掲載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを記している。また，遺物番号は通し番号とし，挿図と写真図版の遺物番号は一致している。
10. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては，下記の方々にご指導及び貴重なご教授を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。
    高知県立高知城歴史博物館，パリノ・サーヴェイ株式会社，有田町教育委員会村上伸之氏，岡山理科大学白石純氏，掛川市教育委員会戸塚和美氏，高知市教育委員会浜田恵子氏，公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏
11. 木簡などの墨書の解読は，高知県立高知城歴史博物館にご協力を頂き，墨書の内容等についてご指導及び貴重なご意見を賜った。記して感謝の意を表したい。
12. 調査にあたっては，高知県，高知県教育委員会，高知市教育委員会のご協力を頂いた。また，地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き，厚く感謝の意を表したい。
13. 整理作業及び発掘作業については，多くの方々に労を厭わず作業に従事して頂いた。感謝の意を表したい。
14. 出土遺物は「15－4KK」「17－4KK」と注記し，高知県立埋蔵文化財センターで保管している。
15. 木製品の保存処理については公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託した。また，一部の遺物については，徳平が行った。
16. 自然科学分析については，パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

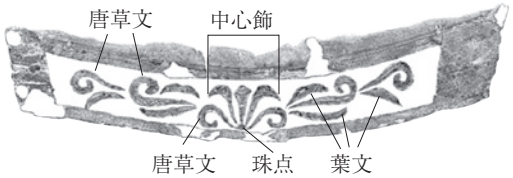
凡例

1.軒丸瓦の部位及び文様名称

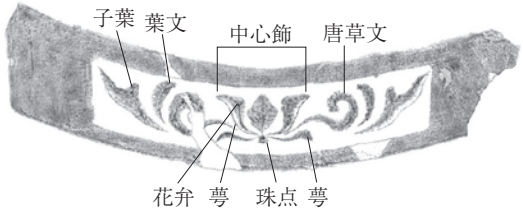


2.軒平瓦の文様名称

三葉文



橘文



本文目次

第Ⅰ章　序章
1. 調査に至る経緯 1
2. 試掘確認調査 1
3. 調査の概要 2
4. 調査の方法 3
5. 調査日誌抄 4
第Ⅱ章　遺跡の環境
1. 地理的環境 9
2. 歴史的環境 9
3. 高知城跡の沿革 11
4. 絵図にみる北曲輪 12
第Ⅲ章　調査の成果
1. 層序 15
2. 堆積層出土遺物 16
3. 遺構と遺物 28
4. 近世の瓦類 123
第Ⅳ章　自然科学分析
1. 高知城跡北曲輪の珪藻分析 167
2. 大型植物遺体同定 173
3. 骨同定 186
4. 高知城跡北曲輪地区出土木製品における樹種同定 190
第Ⅴ章　まとめ
1. 古代・中世の遺構について 197
2. 近世の遺構について 198
3. 近世の遺物について 203
4. 近世の瓦について 207
遺物観察表 215
瓦観察表 251
写真図版 267

挿図目次

図１　高知城跡位置図 1
図２　調査地位置図(S=1/3,000) 2
図３　グリッド設定図(S＝1/800) 3
図４　周辺の遺跡位置図(S＝1/50,000) 10
図５　寛文己酉高知絵図 12
図６　高知城の圖 13
図７　1－Ⅰ区東壁セクション 15
図８　2－Ⅳ区西壁セクション 16
図９　第Ⅰ層出土遺物実測図1 17
図10　第Ⅰ層出土遺物実測図2 19
図11　第Ⅰ層出土遺物実測図3 20
図12　第Ⅱ層出土遺物実測図1 22
図13　第Ⅱ層出土遺物実測図2 24
図14　第Ⅱ層出土遺物実測図3 25
図15　第Ⅲ層・第Ⅵ－6層出土遺物実測図 27
図16　SK－1・2 28
図17　SD－2～4・7 29
図18　SD－3・4西部 29
図19　SD－3・4中央部 29
図20　SD－3出土遺物実測図 30
図21　SD－4出土遺物実測図 31
図22　SD－4・6出土遺物実測図 32
図23　SD－5 33
図24　SD－6 33
図25　SD－4・7中央部 34
図26　SD－4・7東部 34
図27　SD－7出土遺物実測図 35
図28　SD－8出土遺物実測図 36
図29　SD－8・9 37
図30　SD－9出土遺物実測図 37
図31　SB－1 38
図32　SB－2 38
図33　SA－1 39
図34　SA－2 39
図35　SK－3桶出土図 39
図36　SK－3・4，SD－13，SX－1 40
図37　SK－3・4・6～8出土遺物実測図 41
図38　SK－10 43
図39　SK－11，SX－3 43
図40　SK－9～11・14出土遺物実測図 44
図41　SK－13，SX－5 44
図42　SK－14 45
図43　SK－15出土遺物実測図 45
図44　SK－16 46
図45　SK－17出土遺物実測図 46
図46　SK－17 46
図47　SK－18・19 47
図48　SK－18・19出土遺物実測図 48
図49　SK－20 48
図50　SK－21 49
図51　SK－23 49
図52　SK－21・23・24出土遺物実測図 50
図53　SK－29・30 51
図54　SK－28・29・31出土遺物実測図 51
図55　SK－31 51
図56　SK－33 52
図57　SK－33出土遺物実測図 53
図58　SK－35・36 53
図59　SK－35・36出土遺物実測図 54
図60　SK－37 54
図61　SK－37出土遺物実測図 55
図62　SK－37・38出土遺物実測図 56
図63　SK－38 57
図64　SK－39 57
図65　SK－40 58
図66　SK－41・42 58
図67　SK－39～42出土遺物実測図 59
図68　SK－43 60
図69　SK－44 60
図70　SK－45 61
図71　SK－46 61
図72　SK－43～45出土遺物実測図 62

図 73　SK－47，P－14 63
図 74　SK－48 63
図 75　SK－49 64
図 76　SK－49～51出土遺物実測図 64
図 77　SK－52出土遺物実測図 65
図 78　SK－50 65
図 79　SK－51・52 65
図 80　SK－53 66
図 81　SK－53出土遺物実測図 66
図 82　SK－54 67
図 83　SK－55 68
図 84　SK－56・58，SD－26 68
図 85　SK－54～56出土遺物実測図 69
図 86　SK－57 70
図 87　SK－57・58出土遺物実測図 71
図 88　SK－59 72
図 89　SK－60 72
図 90　SK－59・60出土遺物実測図 73
図 91　SD－10・12 73
図 92　SD－10～12出土遺物実測図 74
図 93　SD－11・12 75
図 94　SD－13中央部 76
図 95　SD－13南部 76
図 96　SD－13出土遺物実測図 77
図 97　SD－15 78
図 98　SD－16 78
図 99　SD－18，P－5 79
図100　SD－20・21 79
図101　SD－14・16・22出土遺物実測図 79
図102　SD－22 80
図103　SD－23・24 80
図104　SD－23石列検出状態 80
図105　SD－23・25 81
図106　SD－23・27出土遺物実測図 81
図107　SD－27 82
図108　SD－28 82
図109　SX－2，SD－10・11 83
図110　SX－4，SD－13 83
図111　SX－1・2出土遺物実測図 84
図112　SX－3出土遺物実測図 85
図113　SX－4・6出土遺物実測図 86
図114　SX－7 87
図115　SX－7出土遺物実測図1 88
図116　SX－7出土遺物実測図2 89
図117　SX－8出土遺物実測図1 91
図118　SX－8出土遺物実測図2 92
図119　SX－8出土遺物実測図3 93
図120　SX－8出土遺物実測図4 94
図121　SX－9出土遺物実測図1 97
図122　SX－9出土遺物実測図2 98
図123　SX－9出土遺物実測図3 99
図124　SX－9出土遺物実測図4 100
図125　SX－9出土遺物実測図5 102
図126　SX－9出土遺物実測図6 103
図127　SX－9出土遺物実測図7 104
図128　SX－9出土遺物実測図8 105
図129　SX－9出土遺物実測図9 106
図130　SX－9出土遺物実測図10 107
図131　SX－10 108
図132　SX－10出土遺物実測図1 109
図133　SX－10出土遺物実測図2 111
図134　SX－11・12出土遺物実測図 112
図135　SX－12，SD－13 113
図136　SE－1 113
図137　SE－1・2出土遺物実測図 114
図138　SE－2 115
図139　P－3・7・8・10・15出土遺物実測図 117
図140　近代遺構出土遺物実測図1 119
図141　近代遺構出土遺物実測図2 121
図142　近代遺構出土遺物実測図3 122
図143　軒丸瓦実測図1(三ツ葉柏文A－1類) 124
図144　軒丸瓦実測図2
(三ツ葉柏文A－1・A－2類) 125
図145　軒丸瓦実測図3(三ツ葉柏文A－2類ほか)
126
図146　軒丸瓦実測図4(三ツ葉柏文B類) 128

図147　軒丸瓦実測図5(連珠三巴文Ａ－1類)　129
図148　軒丸瓦実測図6(連珠三巴文Ａ－2類)　131
図149　軒丸瓦実測図7(連珠三巴文Ａ－2類)　132
図150　軒丸瓦実測図8(連珠三巴文Ａ－2類)　133
図151　軒丸瓦実測図9(連珠三巴文Ｂ類)　134
図152　鳥衾瓦実測図(三ツ葉柏文・連珠三巴文)　136
図153　軒平瓦実測図1(三葉文Ａ類)　137
図154　軒平瓦実測図2(三葉文Ｂ類)　138
図155　軒平瓦実測図3(三葉文Ｃ類・五葉文)　139
図156　軒平瓦実測図4(橘文Ａ・Ｂ類)　141
図157　軒平瓦実測図5(橘文Ｃ・Ｄ類)　143
図158　軒平瓦実測図6(丁字文または花文・蔦文・三ツ葉柏文・宝珠文・その他)　145
図159　軒桟瓦実測図(巴文・その他)　146
図160　鬼瓦実測図1(三ツ葉柏文)　147
図161　鬼瓦実測図2(花文・その他)　149
図162　丸瓦実測図1　150
図163　丸瓦実測図2　151
図164　丸瓦実測図3　152
図165　丸瓦実測図4　153
図166　平瓦実測図1　154
図167　平瓦実測図2　155
図168　平瓦実測図3　157
図169　平瓦4・桟瓦実測図　158
図170　丸瓦系道具瓦実測図　159
図171　平瓦系道具瓦実測図1　161
図172　平瓦系道具瓦実測図2　162
図173　陶器鯱実測図　163
図174　主要珪藻化石群集　168
図175　第Ⅲ層モモ核の大きさ　177
図176　人体骨格各部の名称　187
図177　寛文9(1669)年『寛文己酉高知絵図』と調査地　199
図178　明治6(1873)年『高知城の圖』と調査地　199
図179　方形土坑位置図(S＝1/400)　201
図180　三ツ葉柏文軒丸瓦分類(S=1/5)　208
図181　軒平瓦分類1(S=1/5)　209
図182　軒平瓦分類2(S=1/5)　210
図183　軒平瓦分類3(S=1/5)　211

表目次

表１　珪藻分析結果表　169
表２　大型植物遺体同定結果　174・175
表３　第Ⅲ層出土モモ核の計測値　176
表４　SK－59出土葉の計測値　178
表５　骨同定結果　186
表６　高知城跡北曲輪地区木製品における樹種同定結果　192
表７　方形土坑計測表　202
表８　SX－8器種別出土点数　205
表９　SX－8陶磁器産地別組成表　205
表10　SX－9器種別出土点数　206
表11　SX－9陶磁器産地別組成表　206
表12　出土瓦器形別組成表　207
表13　丸瓦凹面のコビキ痕　207

付図目次

付図1　高知城跡北曲輪上面遺構平面図(S＝1/200)
付図2　高知城跡北曲輪下面遺構平面図(S＝1/200)

第Ⅰ章　序章

1. 調査に至る経緯

国史跡高知城跡の城山北東側に隣接する高知市丸ノ内2丁目34において，高知県保健衛生総合庁舎の建替工事が高知県により計画された。計画地は，高知城跡の北東部分にあたり，城山と江ノ口川の間の北曲輪地区に位置する。国史跡指定範囲に隣接し，周知の埋蔵文化財包蔵地として文化財的価値の高い地区に位置づけられている。17世紀中頃の絵図には江ノ口川沿いに北門があり「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」等の施設が描かれており，明治6(1873)年に公園として整備される際に作られた『高知城の圖』でも同様の施設が描かれている。また，計画地から北西約100mの地点では平成18年度に高知市教育委員会により発掘調査が行われ，高知城下町では非常に数少ない古墳時代から中世の遺構とともに高知城跡に関連すると見られる石列や土坑などが確認されているため，高知城跡に関連する遺構･遺物が存在する可能性が非常に高い場所である。

そこで高知県教育委員会が平成25年度に試掘確認調査を実施した結果，江戸時代のものと考えられる遺構や整地層が確認されたため事業者である高知県と協議を行い，委託を受けた公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

調査は工事計画との調整を図り，平成27年度に北側庁舎と北駐車場部分(1区)，平成29年度に南側庁舎と南駐車場部分(2区)を実施することとなった。

2. 試掘確認調査

試掘確認調査は，高知県教育委員会により平成25年7月25･26日に実施された。調査対象地には旧庁舎があったため，掘削可能な南駐車場に3×3mの試掘坑が１箇所設定された。調査地はアスファルトで舗装されており，アスファルトの下に約1mの客土層が堆積していた。客土下には近現代の撹乱を受けていたものの，江戸時代の北曲輪整備に伴う整地層が認められた。また，ピット2個も検出され，本調査が必要であると判断された。

図1　高知城跡位置図

図2　調査地位置図(S=1/3,000)

3. 調査の概要

1区とした平成27年度の調査区は，高知県保健衛生総合庁舎の北側庁舎及び立体駐車場部分である。基礎撤去の際の遺構面への影響を確認するために，既存建物上部を撤去後に3箇所で下層確認を行った結果，調査区全体に客土層が0.9～1.0mあり，駐車場基礎及び建物の地中梁は客土内で収まることが確認された。そこで，基盤層に至る杭基礎は残し，地中梁の撤去工事後に調査を行うこととした。また，建物部分のうち西側半分は地下機械室があった部分であり，床面の掘削深度が深く遺構はすでに破壊されていると判断し，調査区南西部は調査範囲から除外した。廃土置き場を調査区内で確保するため，Ⅰ～Ⅲ区に分けて調査を行った。調査面積は890㎡（延べ面積903㎡），調査期間は平成27年9月28日～12月18日で，実働62日であった。

調査では，客土の下の撹乱を受けていない部分に江戸時代の整地層が残存していた。厚さは10～35cmを測り，酸化鉄を多く含んでいた。整地層の下面で江戸時代前期から後期にかけての遺構が検出された。検出面の標高は北から南へと緩やかに傾斜する。検出遺構は，土坑24基，大型土坑11基，溝跡9条，ピット56個であった。検出された遺構には，方形を呈する瓦の廃棄土坑が多数あり，多量の瓦が出土した。また，Ⅰ・Ⅲ区では絵図に描かれていた南北溝跡も確認した。出土遺物は，江戸時代の陶器・磁器・土師器・土師質土器・瓦・石製品・木製品・金属製品などである。

2区とした平成29年度の調査区は，高知県保健衛生総合庁舎の南側庁舎及び駐車場部分である。南側庁舎があった部分は基礎が深くまで残存しており，地表下約1.7mまでは撹乱を受けていた。庁舎建設工事と併行して調査を行っていたことや，廃土置き場を調査区内で確保するため，Ⅳ～Ⅶ区の4箇所に分けて調査を行った。調査面積は1,300㎡(延べ面積1,864㎡)，調査期間は平成29年8月30日

～12月15日で，実働81日であった。

調査では建物のあったⅣ区南部とⅤ区南部・Ⅵ区は著しく撹乱を受けており，撹乱を取り除いた標高約0.7～1.0mで遺構検出を行ったため，本来の遺構検出面よりは低い位置での遺構検出となった。検出された遺構も深いものが多く，その他の遺構は削平された可能性が高い。近世の整地層が認められたのは，調査前に建物がなかったⅣ区北部とⅦ区，撹乱の影響が少なかったⅤ区北部であった。検出遺構は，土坑53基，大型土坑1基，溝跡26条，井戸跡2基，ピット157個であった。調査地東部には平成27年度調査で確認されたのと同様な，方形を呈する瓦の廃棄土坑が多数あり，多量の瓦が出土した。また，Ⅶ区では当初は想定していなかった古代から中世にかけての遺物包含層が確認された。この時期の遺構は高知城跡がある丘陵裾部に沿って伸びる溝跡で，11～15世紀にかけての遺構とみられる。出土遺物には，江戸時代の陶器･磁器･土師器･土師質土器･瓦･石製品･木製品･金属製品のほか，古代から中世にかけての土師器･須恵器･土師質土器･瓦器･瓦質土器･白磁･青磁･瓦などがみられる。

4. 調査の方法

測量については，調査区付近にGPS測量により3級基準点を2点設置し，放射トラバースにより調査区周囲に4級基準点を2点設置した。基準点の設置は株式会社アンプルに依頼した。また，調査区北西部のX=62,456，Y=2,948を原点としてA1と呼称し，A1より東に算用数字，南にアルファベットを配し，調査区内に4mグリッドを組み，遺構等の測量を行った。

土層掘削については，客土を重機，遺物包含層及び整地層・遺構については人力で行った。また，

図3　グリッド設定図(S＝1/800)

客土層が1.2～1.5mと厚く，客土層の下は保水層となっていたため，土留めと調査区内への浸水防止のために，各調査区外周に鋼矢板を敷設した。しかし，遺構は砂層まで掘り抜かれており，湧水が著しく，排水作業を常時行いながらの遺構掘削を余儀なくされた。

5. 調査日誌抄

平成27年

廃土置き場を確保するため1区をⅠ～Ⅲ区に分けて調査を行った。実働62日，延べ作業員506人であった。

9 .28(月)　先行確認トレンチにより遺構面の確認を行う。
9 .29(火)　引き続き確認トレンチにより遺構面の確認を行う。
9 .30(水)　Ⅰ区を設定し，東部より重機による表土掘削を開始する。
10. 1 (木)　雨のため作業を中止する。
10. 2 (金)　引き続き表土掘削を行う。
10. 5 (月)　表土掘削と矢板敷設を行う。
10. 6 (火)　表土掘削と遺構検出を開始する。
10. 7 (水)　引き続き表土掘削と遺構検出を行う。客土中で近代の遺構を確認する。
10. 8 (木)　遺構検出を完了し，Ⅰ区の遺構検出状態の写真撮影を行う。撹乱の掘削を開始する。
10. 9 (金)　調査区東部より遺構の調査を開始する。
10.13(火)　引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。
10.14(水)　調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.15(木)　引き続き調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.16(金)　引き続き調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.19(月)　引き続き調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.20(火)　引き続き調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.21(水)　引き続き調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.22(木)　引き続き調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.23(金)　引き続き調査区東部･中央部の遺構の調査を行う。
10.26(月)　調査区中央部の遺構の調査を行う。
10.27(火)　測量及び瓦の分別･計量を行う。
10.28(水)　引き続き調査区中央部の遺構の調査を行う。
10.29(木)　調査区南部の遺構の調査を行う。平面測量及びレベル測量を行う。
10.30(金)　測量及び瓦の分別･計量を行う。
11. 2 (月)　午前中は排水作業，午後より調査区中央部の遺構の調査を行う。
11. 4 (水)　調査区西部の遺構の調査を行う。精査を始める。

Ⅰ区作業風景

Ⅱ区水没風景

Ⅲ区作業風景1

Ⅲ区作業風景2

11.5 (木)　精査を完了し，Ⅰ区の遺構完掘状態の写真撮影を行う。午後より下層確認を行い，埋め戻しを開始する。
11.6 (金)　引き続き重機による埋め戻しを行い，埋め戻しを完了する。
11.7 (土)　Ⅱ区の表土掘削を開始する。
11.9 (月)　引き続き表土掘削を行う。
11.10(火)　引き続き表土掘削を行う。調査区西部より遺構検出及び撹乱の掘削を開始する。
11.11(水)　調査区中央部の遺構検出及び撹乱の掘削を行う。
11.12(木)　遺構検出を終了し，Ⅱ区の遺構検出状態の写真撮影を行う。調査区西部より遺構の調査を開始する。
11.13(金)　雨のため排水作業を行う。
11.16(月)　引き続き遺構の調査を開始する。
11.17(火)　雨のため排水作業を行う。
11.18(水)　雨のため排水作業を行う。
11.19(木)　調査区中央部･西部の遺構の調査を行う。
11.20(金)　調査区中央部･東部の遺構の調査を行う。
11.21(土)　引き続き調査区中央部･東部の遺構の調査を行う。
11.23(月)　引き続き調査区中央部･東部の遺構の調査を行う。午後より雨のため作業を中止する。
11.24(火)　引き続き調査区中央部･東部の遺構の調査を行う。
11.25(水)　引き続き調査区中央部･東部の遺構の調査を行う。午後より雨のため作業を中止する。
11.26(木)　調査区東部の遺構の調査を行う。
11.27(金)　引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。調査区西部より精査を始める。
11.28(土)　遺構の調査及び精査を完了し，Ⅱ区の遺構完掘状態の写真撮影を行う。午後より埋め戻しを開始する。
11.30(月)　補足調査及び埋め戻しを行う。
12.1 (火)　Ⅱ区の埋め戻しを完了し，Ⅲ区の表土掘削を開始する。
12.2 (水)　表土掘削及び遺構検出を完了し，Ⅲ区の遺構検出状態の写真撮影を行う。
12.3 (木)　調査区東部より遺構の調査を開始する。
12.4 (金)　調査区中央部の遺構の調査を行う。
12.5 (土)　引き続き調査区中央部の遺構の調査を行う。
12.7 (月)　調査区中央部･西部の遺構の調査を行う。
12.8 (火)　引き続き調査区中央部･西部の遺構の調査を行う。
12.9 (水)　引き続き調査区中央部･西部の遺構の調査を行う。
12.10(木)　雨のため排水作業及び瓦の計量を行う。
12.11(金)　排水作業の後，調査区西部の遺構の調査を行う。
12.12(土)　遺構の調査及び精査を完了し，Ⅲ区の遺構完掘状態の写真撮影を行う。
12.14(月)　下層確認調査を行い，埋め戻しを開始する。瓦の計量，機材の搬出，事務所の撤去を行う。
12.15(火)　引き続き埋め戻しを行う。矢板などの機材の返却を行う。
12.16(水)　引き続き埋め戻しを行う。
12.17(木)　埋め戻しを終了する。
12.18(金)　産廃処理及び機材を返却･撤去し，すべて完了する。

平成29年

廃土置き場を確保するため，また，建設工事と併行して調査を行う必要があったため，Ⅳ～Ⅶ区に分けて調査を行った。実働81日，延べ作業員602人であった。

8 .29㈫ 調査に備え，調査前風景の写真撮影を行い，基準点を設置し，重機を搬入する。
8 .30㈬ Ⅳ区北部より機械掘削を開始する。現場事務所の搬入と設置,電気敷設工事を行う。
8 .31㈭ 引き続き機械掘削を行う。電気・水道敷設工事が完了する。倉庫とトイレを設置し，事務所に備品を搬入する。
9 . 1 ㈮ 機械掘削を終了し，整地層の人力掘削及び遺構検出を行う。
9 . 4 ㈪ 遺構検出及び精査を終了し，Ⅳ区の遺構検出状態の写真撮影を行う。
9 . 5 ㈫ 雨のため排水作業を行う。
9 . 6 ㈬ 前日の雨のため排水作業を行う。北部の遺構の調査を行う。
9 . 7 ㈭ 引き続き北部の遺構の調査を行う。
9 . 8 ㈮ 引き続き北部の遺構の調査を行う。
9 .11㈪ 遺構の調査及び精査を終了し，Ⅳ区上面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。
9 .12㈫ 重機で下層掘削を行う。
9 .13㈬ 遺構検出及び精査を終了し，Ⅳ区下面の遺構検出状態の写真撮影を行う。遺構の調査を開始する。
9 .14㈭ 古代及び近世の遺構を確認する。近世の井戸跡を確認し，桶側が出土する。雨のため3時30分に作業を中止する。
9 .15㈮ 遺構の調査及び精査を終了し，Ⅳ区下面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。Ⅳ区南部から埋め戻しを開始する。台風に備えて養生する。
9 .19㈫ 下層確認調査を行い，土層セクション図を作成する。平面測量及びレベル測量を終了し，Ⅳ区の調査を完了する。Ⅴ区の機械掘削を開始する。
9 .20㈬ Ⅳ区の埋め戻し及びⅤ区上面の機械掘削を行う。雨のため2時30分に作業を中止する。
9 .21㈭ Ⅳ区の埋め戻しを完了する。引き続き機械掘削及び，撹乱の人力掘削を行う。
9 .22㈮ 雨のため排水作業を行う。
9 .25㈪ 西部の機械掘削及び撹乱の人力掘削を行う。
9 .26㈫ 引き続き西部の機械掘削及び撹乱の人力掘削を行う。
9 .27㈬ 中央部の機械掘削を行う。雨のため午後の作業を中止する。
9 .28㈭ 機械掘削を終了し,遺構検出を行う。
9 .29㈮ 西部の遺構検出を行う。グリッド杭を設置し遺構配置図の作成を行う。
10. 2 ㈪ 雨のため排水作業を行う。
10. 3 ㈫ 東部の遺構検出及びグリッド杭の設置,遺構配置図の作成を行う。
10. 4 ㈬ 遺構検出を終了し，Ⅴ区上面の遺構検出状態の写真撮影を行う。撹乱及び遺構の調査を開始する。
10. 5 ㈭ 北部の遺構の調査を行う。撹乱の下で遺

Ⅳ区作業風景

Ⅴ区作業風景

構を検出する。
10．6 (金)　雨のため排水作業を行う。
10.10(火)　引き続き遺構の調査を行う。
10.11(水)　遺構の調査を完了し，精査を行う。Ⅴ区上面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。
10.12(木)　重機で下層掘削を行う。遺構検出を終了し，Ⅴ区下面の遺構検出状態の写真撮影を行う。遺構の調査を開始する。近世の土坑と古代の溝跡を確認する。
10.13(金)　引き続き遺構の調査を行う。
10.16(月)　雨のため排水作業を行う。
10.17(火)　雨のため排水作業を行う。
10.18(水)　遺構の調査を完了し，精査を行う。Ⅴ区下面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。Ⅴ区下面の平面測量及びレベル測量を終了し，Ⅴ区の調査が完了する。埋め戻しを開始する。
10.19(木)　排水作業を行い，埋め戻しを行う。
10.20(金)　引き続き埋め戻しを行う。台風に備えて養生する。
10.23(月)　Ⅴ区の埋め戻しを完了する。Ⅵ区の東部より機械掘削を開始する。
10.24(火)　東部の機械掘削及び人力による撹乱掘削･遺構検出を行う。
10.25(水)　中央部の機械掘削及び人力による撹乱掘削･遺構検出を行う。
10.26(木)　西部の機械掘削及び人力による撹乱掘削･遺構検出を行う。
10.27(金)　西部の機械掘削及び人力による撹乱掘削・遺構検出を終了する。Ⅵ区の遺構検出状態の写真撮影を行う。撹乱及び遺構の調査を開始する。
10.30(月)　東部の遺構の調査を行う。
10.31(火)　東部･中央部の遺構の調査を行う。
11．1 (水)　引き続き東部・中央部の遺構の調査を行う。
11．2 (木)　引き続き東部・中央部の遺構の調査を行う。
11．4 (土)　中央部･西部の遺構の調査を行う。
11．6 (月)　引き続き中央部・西部の遺構の調査を行う。
11．7 (火)　引き続き中央部・西部の遺構の調査を行う。
11．8 (水)　引き続き中央部・西部の遺構の調査を行う。

Ⅶ区作業風景

11．9 (木)　遺構の調査を完了し，精査を行う。Ⅵ区の遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面測量及びレベル測量を終了し，Ⅵ区の調査を完了する。埋め戻しを開始する。
11.10(金)　引き続き埋め戻しを行う。
11.11(土)　Ⅵ区の埋め戻しを完了する。
11.13(月)　事務所･倉庫･トイレを移動し，電気･水道を設置する。Ⅶ区西部より機械掘削を開始する。
11.14(火)　Ⅶ区南部の機械掘削を行う。
11.15(水)　Ⅶ区中央部の機械掘削を行う。
11.16(木)　Ⅶ区東部の機械掘削を行う。西部の遺構検出を行う。
11.17(金)　機械掘削及び遺構検出を終了し，Ⅶ区上面の遺構検出状態の写真撮影を行う。遺構の調査を開始する。
11.20(月)　西部の遺構の調査を行う。
11.21(火)　引き続き西部の遺構の調査を行う。
11.22(水)　雨のため排水作業を行う。
11.24(金)　西部･中央部の遺構の調査を行う。
11.25(土)　引き続き西部･中央部の遺構の調査を行う。
11.27(月)　中央部･東部の遺構の調査を行う。
11.28(火)　引き続き中央部・東部の遺構の調査を行う。
11.29(水)　引き続き中央部・東部の遺構の調査を行う。
11.30(木)　引き続き中央部・東部の遺構の調査を行う。
12．1 (金)　東部の遺構の調査を行う。
12．2 (土)　引き続き東部の遺構の調査を行う。
12．3 (日)　遺構の調査を終了し，精査を行いⅦ区上

面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面測量及びレベル測量を終了する。

12.4 (月)　Ⅶ区下面の機械掘削及び遺構検出を行う。

12.5 (火)　遺構検出を終了し，Ⅶ区下面の遺構検出状態の写真撮影を行う。遺構の調査を開始する。

12.6 (水)　西部の遺構の調査を行う。

12.7 (木)　中央部･東部の遺構の調査を行う。

12.8 (金)　東部の遺構の調査を行う。

12.9 (土)　東部の遺構の調査を行い，遺構の調査を終了する。精査し，Ⅶ区下面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面測量及びレベル測量を終了し，Ⅶ区の調査を完了する。埋め戻しを開始する。撤収作業を行う。

12.10(日)　埋め戻しを終了する。

12.11(月)　撤収作業及び重機の搬出を行う。

12.12(火)　倉庫内の機材の撤収を行う。

12.13(水)　引き続き事務所及び倉庫内の機材の撤収を行う。

12.14(木)　水道の撤去工事を行う。

12.15(金)　電気及び事務所の撤去工事を行う。トレンチシートなど機材の返却を行う。作業をすべて完了する。

第Ⅱ章　遺跡の環境

1. 地理的環境

高知城跡が所在する高知市は高知県中央部に位置し，東を南国市，北を土佐町，西をいの町と土佐市に接する。面積308.99㎢，人口約33万人を有し，高知県の政治，経済，文化の中心地であるとともに中央部を流れる鏡川，久万川，江ノ口川，国分川，舟入川，下田川の各河川が市の南側に位置する浦戸湾に注いでいるため，古来より交通の要衝でもあった。

北部から西部にかけては標高400～600mの山地が連なり，南方を300m級の帯状の山地，西方をなだらかな丘陵に囲まれた平野で，東部には高知平野が広がる。現在の平野部は中世頃まではそのほとんどが内海であったが，鏡川の河川堆積や隆起，近世になってからの干拓により現在の状態になっている。そのため中世以前の遺跡については山地や丘陵部に限られ，高知城跡が所在する大高坂山もその小丘陵の一つである。

今回の調査地である高知城跡北曲輪は，高知城跡がある独立丘陵の北側に位置し，丘陵裾から江ノ口川南岸に広がる平坦地に当たる。

2. 歴史的環境

中世以前の高知市は現市街地が中世頃までそのほとんどが内海であったため，平地からの遺跡の発見は少なく，大部分が丘陵部とその縁辺で確認されている。

旧石器時代の遺跡や遺物はほとんど確認されておらず，高知市東部の高間原1号古墳より終末期のチャート製細石刃が1点発見されているのみである。

縄文時代では，市域の北部丘陵に位置する正蓮寺不動堂前遺跡で中期初頭の舟元Ⅰ式土器や石錘，後期から晩期の条痕文土器や磨研土器が出土しているほか，福井遺跡，宇津野遺跡でも遺物が確認されている。南部の浦戸湾に面した段丘上に位置する長浜チドノ遺跡では前期の羽島下層式土器，西部の柳田遺跡では後期から晩期の土器が出土している。

弥生時代では，柳田遺跡から前期末，鴨田遺跡からは中期の竪穴住居跡が確認され，これまで不明であった平野部での集落の存在が明らかになり始めた。その他に，かろーと口遺跡や城山遺跡，福井遺跡では中期から後期の遺物が出土している。注目される遺物として県下最古の中広形銅矛2本が長崎遺跡から，県下唯一の有柄式石剣が秦泉寺遺跡から出土している。また，大高坂山の北西側の尾戸遺跡からは石斧が出土し，南西側の高知城伝下屋敷跡では終末期の土坑が確認されている。[(1)]

古墳時代では，高知城跡の北に位置する愛宕山山麓に愛宕山古墳群，北西丘陵部には秦泉寺古墳群，吉弘古墳などが分布し，高知市西部から南部にかけての丘陵部には朝倉古墳群，塚ノ原古墳群等が分布している。また，平野部では中島町遺跡や西秦泉寺遺跡等で遺物が確認されている。平成18年度に高知市教育委員会が行った高知城跡北曲輪の調査では，城山の北裾部で古墳時代初頭の土坑3基が少量の遺物とともに確認されている。[(2)]

古代では，白鳳期の瓦が出土する秦泉寺廃寺跡や，その北方にある吉弘遺跡，松葉谷遺跡があり，松葉谷遺跡では柱穴が確認されているため集落の可能性がある。この時期の高知市域では高坂郷の

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	高知城跡(大高坂城跡)	中世～近世	28	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	55	宇津野2号古墳	古墳
2	中の谷遺跡	弥生	29	シルタニ遺跡	弥生・中世	56	宇津野1号古墳	古墳
3	横内遺跡	弥生	30	神田南遺跡	中世	57	宇津野遺跡	縄文
4	福井別城跡	中世	31	ゲシカ端遺跡	弥生	58	秦泉寺新屋敷古墳	古墳
5	福井古墳	古墳	32	高神遺跡	古墳・古代	59	吉弘古墳	古墳
6	高知学園裏遺跡	中世	33	神田遺跡	弥生～中世	60	秦泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
7	かろーと口遺跡	中世	34	高座古墳	古墳	61	吉弘遺跡	古代
8	鹿持雅澄邸跡	近世	35	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	62	日の岡古墳	古墳
9	福井遺跡	縄文～中世	36	尾戸遺跡	弥生	63	松葉谷遺跡	古代～中世
10	嘉式保宇城跡	中世	37	尾戸窯跡	近世	64	秦泉寺廃寺跡	古代
11	万々城跡	中世	38	西弘小路遺跡	古代～近世	65	秦泉寺別城跡	中世
12	初月遺跡	弥生	39	高知城伝下屋敷跡	近世	66	秦小学校校庭古墳	古墳
13	福井西城跡	中世	40	弘人屋敷跡	古代～近世	67	愛宕神社裏古墳	古墳
14	福井中城跡	中世	41	追手筋遺跡	中世～近世	68	愛宕不動堂前古墳	古墳
15	福井元尾城跡	中世	42	帯屋町遺跡	古墳・中世～近世	69	北秦泉寺遺跡	弥生
16	井口城跡	中世	43	本町遺跡	近世	70	淋谷古墳	古墳
17	杓田遺跡	弥生	44	金子橋遺跡	近世	71	秦泉寺城跡	中世
18	加治屋敷跡	古代～中世	45	南御屋敷跡	近世	72	土居の前古墳	古墳
19	鴨部城跡	中世	46	中島町遺跡	古墳	73	前里城跡	中世
20	柳田遺跡	縄文～古墳	47	国沢城跡	中世	74	薊野城跡	中世
21	鷺泊橋付近遺跡	弥生・中世	48	小石木山古墳	古墳	75	薊野遺跡	古代
22	船岡山遺跡	弥生	49	小石木町遺跡	弥生	76	一宮別城跡	中世
23	船岡山古墳	古墳	50	潮江城跡	中世	77	一宮2号古墳	古墳
24	能茶山窯跡	近世	51	開成館跡	近世	78	一宮城跡	中世
25	神田旧城跡	中世	52	安楽寺山城跡	中世	79	吸江庵跡	中世～近世
26	鴨部遺跡	縄文～近世	53	東久万池田遺跡	古代～中世	80	五台山法華経塔	中世
27	石立城跡	中世	54	西秦泉寺遺跡	古代	81	竹林寺	古代

図4　周辺の遺跡位置図(S=1/50,000)

存在が記録に残っており，周辺の開拓が進んでいたと推測される。また，この時期からの寺院として五台山山頂にある竹林寺や北部の蓮台寺等をあげることができる。

中世には，高知城跡の前身である大高坂城跡をはじめ多くの山城が丘陵部に築かれる。大高坂城は南北朝期に大高坂山にあった大高坂氏の居城である。高知市周辺は戦国期に長岡郡本山に拠点をもつ本山氏の勢力下の城跡が多く，朝倉城跡，神森城跡，久万城跡，浦戸城跡などがあげられるが，永禄年間(1558～1570)頃に岡豊城を本拠とする長宗我部氏に破れ，大高坂城をはじめこれらの城は長宗我部氏の支配下となる。発掘調査では，浦戸城跡で石垣や瓦が出土しているほか，高知城跡では天正期(1573～1592)の石垣や桐文瓦が出土している。(3)

近世では高知城跡のほか，高知城伝下屋敷跡，弘人屋敷跡，金子橋遺跡，西弘小路遺跡などがある。高知城跡では平成5年に御台所屋敷跡調査が行われ，数多くの遺構・遺物が確認されている。(4)高知城下では，追手筋遺跡や弘人屋敷跡，西弘小路遺跡などの発掘調査が行われ，追手筋遺跡では，庭園の池跡が確認され貴重な資料となっている。(5)邸跡では万葉集の研究で知られる鹿持雅澄邸で発掘調査が行われ，県史跡となっている。

窯跡として高知城跡の北西部に土佐藩の陶器を焼いた尾戸窯跡があるが，現在は宅地となっており遺構等は不明である。文政3(1820)年に能茶山磁器窯が開かれたことに伴い，陶製地は能茶山に移された。

寺社跡としては，五台山の西山麓に吸江庵跡がある。この地は夢窓疎石が鎌倉時代臨済宗の道場として開いた寺で，土佐の中世臨済宗文化の中心となっている。近世に吸江寺として再興されるが，その後廃寺となっている。調査では近世陶磁器や瓦などが出土しており，江戸時代に再興された際の吸江寺に関連する基段状遺構や溝状遺構が検出されている。(6)

3. 高知城跡の沿革

高知城跡の所在する大高坂山及び北山麓の北曲輪周辺は，古代には高坂郷に属していた。高坂郷の名称は，10世紀初めの『和名類聚鈔』にみえており，そこには「土佐郡　五郷　土佐・高坂・鴨部・朝倉・神戸」とある。こうした記述から律令体制下における高坂郷の開発は，平安時代にはすでに進められていたと考えられる。

大高坂山の城郭の歴史は南北朝期に大高坂松王丸が築いた大高坂城に始まる。『佐伯文書』によると，「大手」「一城戸」「西大手」「西之城戸」などがあったとされている。暦応3(1340)年の松王丸戦死後，戦国時代に至るまでの状況は不明であるが，大高坂氏の子孫は続いており，戦国時代に本山氏に属した後，長宗我部氏に従っている。その後，天正16(1588)年には長宗我部元親が居城を岡豊城から大高坂山に移し，近世城郭と城下町の建設を行う。『長宗我部地検帳』によると「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などがみられ，一定の築城がされていたことが推察される。本丸南側石垣や三ノ丸石垣の改修工事に伴う発掘調査により長宗我部期の石垣が確認されている。その後，長宗我部氏は豊臣秀吉の朝鮮出兵に協力するため天正19(1591)年頃に浦戸城へと居城を移すこととなる。

関ヶ原の合戦(1600年)の後，新しい国主に任命された遠州掛川城主であった山内一豊は，浦戸城に入城する。浦戸は浦戸湾に突き出した要害の地であったものの，領地経営を行う首都としては狭小であったことから，大高坂一帯に城下町形成を求めた。この地に造築された平山城が現在の高知城(本丸地点の標高44.4m)である。大高坂の地は，南北を鏡川と江ノ口川に挟まれており，築城時に

は「河中山」と命名された。しかし，城下町建設を進める過程でも度々水害に悩まされており，「高智山」と改めた。これが現在の高知の由来となっている。築城は昼夜兼業で行われ，慶長8(1603)年に本丸と二ノ丸が完成し，山内一豊が入城した。その後も工事が行われ，慶長16(1611)年に三ノ丸完成を持って終了した。

しかし，享保12(1727)年には大火によって追手門ほかを残して大半の建物は焼失する。享保14(1729)年に幕府の許可を得て再建に着手し，延享2(1745)年に二ノ丸，寛延2(1749)年に本丸，宝暦3(1753)年に三ノ丸が完成し旧状に復した。

明治4(1871)年の廃藩置県に伴い高知城は廃城となり，明治政府により本丸と追手門などを残しほとんどの建物は解体，撤去が行われ，明治6(1873)年には高知県の管理となり，北曲輪は公園となっている。

昭和に入ると老朽化や南海地震の影響もあり，改修工事が行われた。昭和26(1951)年には追手門や天守，本丸御殿などが国の重要文化財に指定され，また城域全体は昭和34(1959)年に国史跡として指定を受けた。

4. 絵図にみる北曲輪

北曲輪の土地利用の変遷について絵図等を参考に知ることができる。17世紀前半は，寛永4(1627)年『かうち之城』，正保年間(1644～1647)『正保土佐国城絵図』，慶安5(1652)年『慶安五年高知廓中絵図』などの絵図がみられ，いずれの絵図でも「侍屋敷」として利用されており，北東部には門とみられる建物も描かれている。『かうち之城』では門の南側に土手に沿って南北に長い建物も描かれている。その後，寛文9(1669)年『寛文己酉高知絵図』では北曲輪中央付近には「馬渕八右衛門」の名がみえ，「馬渕八右衛門」屋敷の北側で江ノ口川に面する箇所に「御武具蔵」，「馬渕八右衛門」屋敷

図5　寛文己酉高知絵図

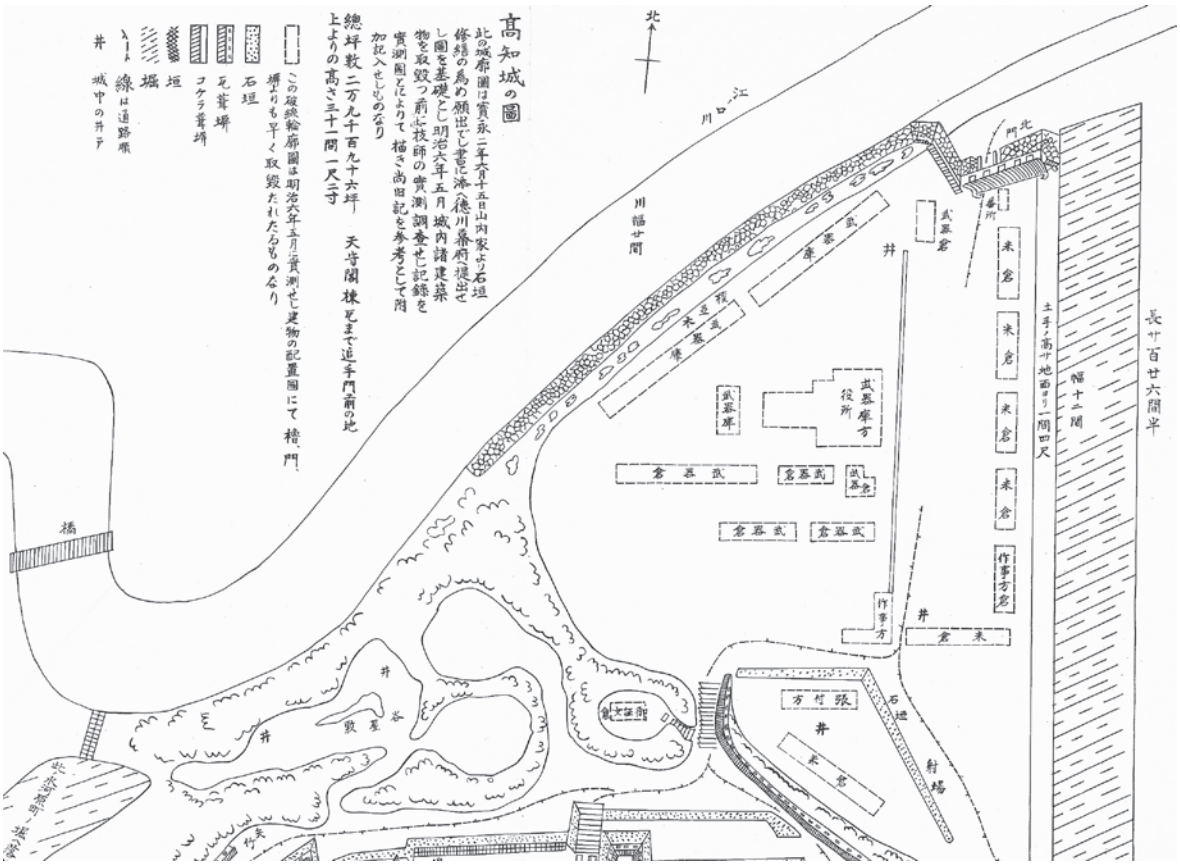


図6　高知城の圖

の南側に「御作事場」，北曲輪東側の土手に沿って「御米蔵」と記された瓦葺とみられる建物が並び，この時期には北曲輪東側に藩の施設が新たに造られている。「御米蔵」が描かれている場所は，『かうち之城』で南北に長い建物が描かれており，「御米蔵」は『かうち之城』が描かれた寛永4(1627)年にすでに存在していた可能性もある。その後，北曲輪の様子が描かれている絵図は天保5(1835)年『天保元年高知城之圖』までみられない。この絵図では，北東部に「北ノ口」と記された御門と，その内側には「御番所」が描かれている。東の土手沿いには南北に建物が並び「北御蔵」の文字がみえ，その西側の江ノ口川に面する箇所には「御武具方」と記された1棟の建物と「武具蔵」と記された数棟の建物が描かれ，柵などで区画されている。その南側には「御作事場」が配置され，各建物は塀などで区画されている。

明治6(1873)年，高知城公園化が決まった際に作成された『高知城の圖』は城内取り壊し直前の残存施設と，かつて存在した諸施設を復元して記している。それによるとすでに取り壊された建物として，内堀沿いには南北に「米倉」が並び，その南には「作事方倉」，「作事方」の建物が並ぶ。さらにその南には石垣に囲まれた箇所に「張付方」と「米倉」が建ち，石垣の外側は「射場」となっている。その西側部分は，「武器庫方」，「武器庫」などの建物がみられる。これらの絵図からは17世紀後半から幕末まで土地の利用はほぼ変わっておらず，北東部に門と番所，その南側に内堀に沿って米倉と作事方，その西側には武器庫方と武器庫などの諸施設が絶えず存在したものとみられる。

明治以降についても絵図等を参考に土地利用の変遷を知ることができる。明治11(1878)年の河田小龍による『高知市街全圖』には江ノ口川に繋がる内堀が描かれているが，明治23(1890)年測量

とされる『高知市街実測圖』ではすでに埋められている。明治30(1897)年『土佐國高知市街圖』では現在の丸ノ内高校付近が県立農学校，教育会館が図書館，保健衛生総合庁舎と高知県警察本部の付近に施設の記載はないが着色から公園と思われる。大正10(1921)年『高知市街圖』では農学校が県立高等女学校に変わり，西側は公園グラウンドとなっている。以後の土地利用には大きな変化はないが，学校と公園との間の南北道が昭和10(1935)年『最新大高知市街地圖』までは直線であり，昭和12(1937)年『高知都市計画図』では学校側を拡張し現在のように西側に膨らんだ形となっている。終戦後の昭和22(1947)年の米軍航空写真では，保健衛生総合庁舎の場所に警察学校の建物が確認できる。

註

(1) ㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2002『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集

(2) 高知市教育委員会　2011『史跡高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知市文化財調査報告書第35集

(3) 高知県教育委員会・㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2010『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第114集

(4) 高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡1－御台所屋敷跡発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財調査報告書第37集

(5) 高知県教育委員会・高知市教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2015『追手筋遺跡－新図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第145集

(6) 高知市教育委員会　1987『吸江庵跡発掘調査及び新指定高知市保護有形文化財』

参考文献

高知市　2012『描かれた高知市　高知市史　絵図地図編』

高知市教育委員会　2011『史跡高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知市文化財調査報告書第35集

絵図所蔵

『寛文己酉高知絵図』　高知市立市民図書館平尾文庫所蔵

『高知城の圖』　高知市立市民図書館平尾文庫所蔵

第Ⅲ章　調査の成果

1. 層序

(1) 1区(図7)

調査区全面に客土がみられ，厚さは約0.8～1.0mを測る。砂と礫を多く含み，一部ではコンクリートの基礎が埋設されており，撹乱を受けている箇所も多くみられた。

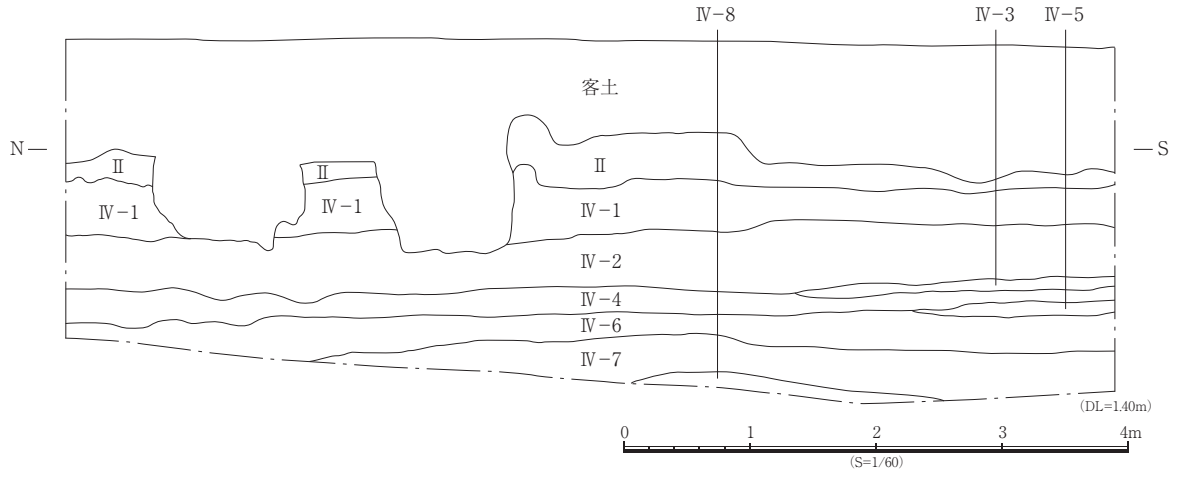
第Ⅱ層は近世の整地層で，撹乱を受けていない箇所で確認された。厚さは10～35cmを測り，酸化鉄を多く含んでいた。第Ⅱ層の下面で江戸時代前期から後期にかけての遺構が検出された。検出面の標高は北東(1.136m)から南西(0.841m)へ傾斜する。

2区で確認された古代から中世の遺物包含層である第Ⅲ層は確認されず，第Ⅱ層の下で自然堆積層である第Ⅳ層が認められた。第Ⅳ－1・2層は粘土質シルト，第Ⅳ－3～7層は砂質シルトまたはシルト質砂で，第Ⅳ－5～7層には木片が含まれていた。第Ⅳ－8層はシルトであった。自然堆積層は南から北へ傾斜する。標高約0.6m以下では湧水がみられた。

(2) 2区(図8)

1区の南に位置し，高知城跡のある大高坂山の丘陵裾部に当たる。1区と同様に，調査区全面で厚さ0.7～1.0mを測る現代の客土がみられ，その下で近代の整地層である第Ⅰ層がみられた。2区北側では調査前は建物があったため1区よりも撹乱を受けている箇所が多くみられた。

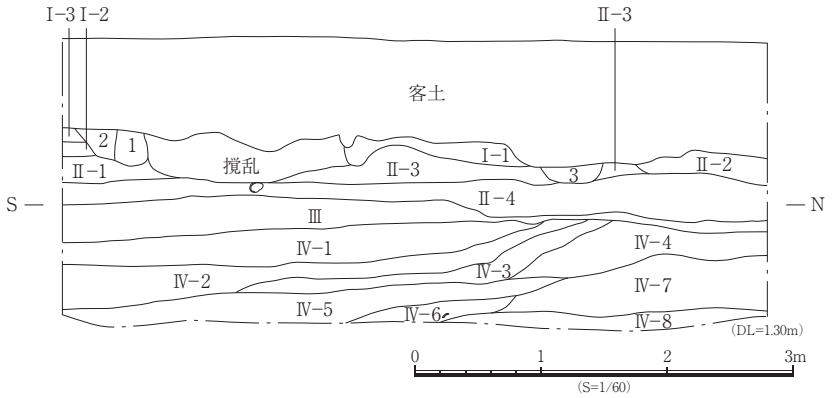
第Ⅱ層は近世の整地層で，Ⅳ区北部とⅤ区北部，Ⅶ区でみられた。撹乱を受けており残存状況は不良であるが，厚さは約20～30cmを測る。検出面の標高はⅣ区北部が約1.3m，Ⅶ区が約1.1～1.2m



層位

第　Ⅱ　層	褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で，酸化鉄を多く含む(近世整地層)
第Ⅳ－1層	黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト層で，酸化鉄を含む
第Ⅳ－2層	黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト層
第Ⅳ－3層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層
第Ⅳ－4層	黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト層
第Ⅳ－5層	オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂シルト層で，木片を僅かに含む
第Ⅳ－6層	オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質中粒砂層で，木片を多く含む
第Ⅳ－7層	灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト層で，木片を多く含む
第Ⅳ－8層	黄灰色(2.5Y4/1)シルト層

図7　1－Ⅰ区東壁セクション



層位

第Ⅰ−1層　褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層で, 3cm大の礫を多く含む(近代整地層)
第Ⅰ−2層　褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で, 1cm大の礫を少量含む(近代整地層)
第Ⅰ−3層　明褐色(7.5YR5/8)中粒砂質シルト層(近代整地層)
第Ⅱ−1層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト層で, 0.5〜1cm大の礫を多く含む(近世整地層)
第Ⅱ−2層　褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂層で, 1〜5cm大の橙色の角礫を多く含む(近世整地層)
第Ⅱ−3層　褐色(10YR4/4)中粒砂質シルト層で, 0.5cm大の礫を多く含み土器を含む(近世整地層)
第Ⅱ−4層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルト層で, 0.5cm大の礫を多く含み, 炭化物を少量含む(近世整地層)
第 Ⅲ 層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で, 中粒砂を少量含む
第Ⅳ−1層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で, 粗粒砂を含む
第Ⅳ−2層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で, 細粒砂及び木片を含む
第Ⅳ−3層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト層で, 粗粒砂を含む
第Ⅳ−4層　灰色(5Y4/1)粗粒砂質シルト層で, 0.5cm大の礫及び土器細片を含む
第Ⅳ−5層　オリーブ黒色(5Y3/1)シルト層で, 粗粒砂を少量含む
第Ⅳ−6層　黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト層
第Ⅳ−7層　灰色(5Y4/1)シルト層で, 粗粒砂を少量含む
第Ⅳ−8層　灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト層

遺構埋土

1. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で, 3cm大の礫を含む
2. 褐色(10YR4/4)シルト質粗粒砂で, 0.5cm大の礫を多く含む
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂で, 0.5〜1cm大の礫を含む

図8　2−Ⅳ区西壁セクション

で北から南に緩やかに傾斜し，丘陵裾部が谷状に落ち込んでいた可能性がある。また，近世の整地層が削平されていたⅤ区南部・Ⅵ区は撹乱の下で遺構検出を行ったため，検出面の標高は0.7〜1.0mを測る。

第Ⅲ層は古代から中世にかけての遺物包含層で, 2区でのみ確認され, 厚さは約10〜30cmを測る。検出面の標高はⅣ区北部が約1.2m，Ⅶ区では0.5〜0.7mで北から南へ大きく傾斜する。

第Ⅳ層以下は自然堆積層とみられるが，第Ⅳ−6層からは土錘と漆器椀が出土しており，自然流路の可能性もある。北から南へ大きく傾斜する。

2. 堆積層出土遺物

(1) 第Ⅰ層

第Ⅰ層は近代の整地層であるが，江戸時代の遺物が含まれていたため報告する。1〜45を図示した。江戸時代以降の瓦は第Ⅲ章4でまとめて報告する。

① 陶器(図9−1〜17)

1〜7は碗である。1〜3は肥前産の唐津系灰釉陶器碗で，内面から体部外面まで灰釉を施す。1は体部下半から高台は回転ケズリ調整で無釉，2・3は高台は削り出しで無釉である。4は肥前産の陶器刷毛目文中碗である。全面に灰釉を施した後，内外面に白化粧土で刷毛目文を描き，透明釉を掛ける。5は全面に灰釉を施し，畳付を釉ハギする。6は中碗で，全面に光沢のある灰釉を施し，畳付は釉ハギする。釉には貫入が入る。7は瀬戸・美濃産の碗で，内面から高台付近まで光沢のあ

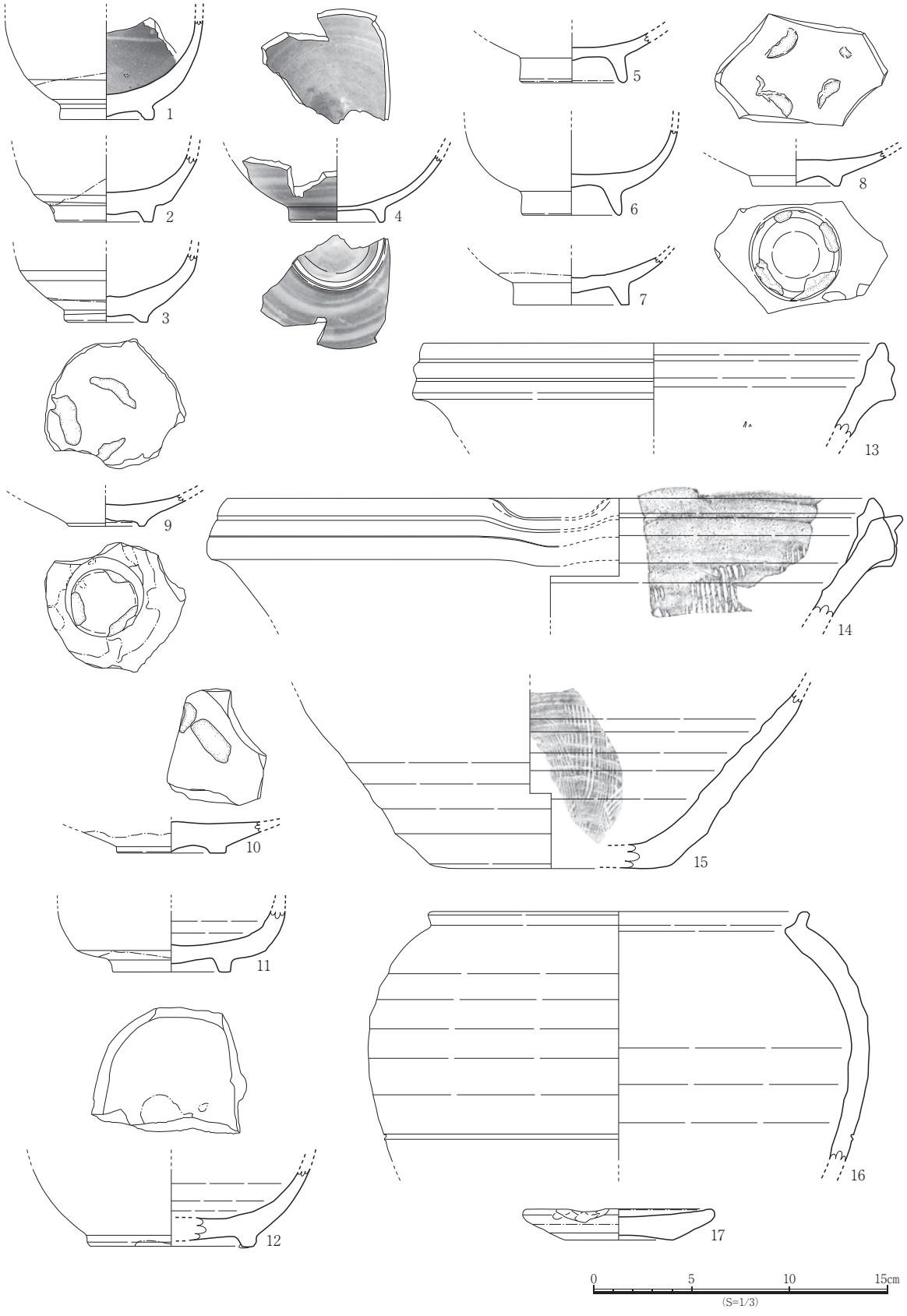


図9　第Ⅰ層出土遺物実測図1

る灰釉を施す。高台は削り出しで無釉である。

8～11は肥前産の唐津系灰釉陶器皿である。8は全面に灰釉を施し，見込と畳付の一部には砂目痕が残る。9は小皿で，内面から外面体部下半まで施釉する。灰釉とみられるが被熱し白色化する。見込と高台内に砂目痕が残る。10は内面から高台付近まで灰釉を施し，見込と畳付には砂目痕が残る。体部外面は回転ナデ調整で，高台は削り出しで無釉である。11は内面から高台付近まで灰釉を施す。高台は削り出しで無釉である。

12は鉢または瓶である。内面は回転ナデ調整で，一部に灰釉が流れる。外面には灰釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。13～15は焼締陶器擂鉢で，備前焼である。13は回転ナデ調整で，内面には僅かに擂目，口縁部外面には凹線が2条みられる。14は口縁部に片口を有し，内面には10条単位の擂目，口縁部外面には2条の凹線がみられ，重ね焼痕が残る。調整は回転ナデである。15は内面には摩耗する擂目がみられる。体部は回転ナデ調整で，外底は無調整である。16は焼締陶器甕で，全面に回転ナデ調整を施す。口縁部は受口状を呈し，蓋が付くものとみられる。胴部には沈線が巡る。備前焼か。17は陶器窯道具ハマである。上面から体部は回転ナデ調整，底部は回転ケズリ調整である。口縁部には鉄釉が掛かる。

② 磁器(図10･11−18～35)

18・19は碗である。18は肥前系の染付小碗で，全面に透明釉を施す。内面に雷文，外面に草花文の染付がみられる。19は能茶山窯の染付広東碗で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。見込には亀文，外面には圏線と染付の一部が残り，高台内に「サ」銘がみられる。染付は呉須の発色が悪く，灰色味が強い。見込にはピン痕が残る。

20～28は皿である。20は肥前産の色絵皿で，全面に透明釉を施し，畳付を釉ハギする。見込は二重圏線内に花文の染付，外面には蝶文とみられる朱色の上絵付の一部が残る。高台外面には圏線と櫛歯文の染付，高台内には二重方形枠に銘がみられる。21は肥前産の色絵皿で，全面に透明釉を施し，畳付を釉ハギする。見込には朱色で菊文の上絵付と染付，外面には圏線の染付と文様の一部が残る。22は肥前有田産の色絵皿で，口縁部は輪花形で，蛇ノ目凹形高台である。型打成形で，全面に透明釉を施し，高台内は蛇ノ目釉ハギする。内面は菊文の染付と朱色で蕾と葉脈の上絵付，茶色で直線文の上絵付，外面には圏線と染付の一部が残る。高台内には「年製」の銘がみられる。23は肥前産の染付小皿で，蛇ノ目凹形高台を呈し，全面に透明釉を施したのち高台内を蛇ノ目釉ハギする。見込は草花文，外面には花文と圏線の染付がみられる。24は肥前産の色絵皿で，口縁部は輪花形を呈する。全面に透明釉を施し，内外面に朱色の花文の上絵付，内面に窓絵と四方襷文の染付，外面に窓絵と四方襷文・源氏香の染付がみられる。25は肥前産の青磁中皿で，全面に青磁釉を施す。内面には陽刻による文様，外面には陰刻による圏線がみられる。26は肥前波佐見産の青磁皿である。内面から体部外面には青磁釉を施し，外底には錆釉を刷毛塗する。見込にはヘラ彫による文様がみられる。27は肥前波佐見産の青磁中皿である。全面に青磁釉を施し，高台内は蛇ノ目釉ハギ後，錆釉を塗り，重ね焼痕が残る。28は肥前有田産の染付中皿で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。内面には土坡と草文・圏線，外面には文様の一部と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。

29は肥前有田産の染付蓋物蓋で，摘は欠損する。全面に透明釉を施し，かえり部は釉ハギする。外面には草花文と圏線の染付がみられる。30・31は肥前産の小杯で，端反形である。30は白磁小

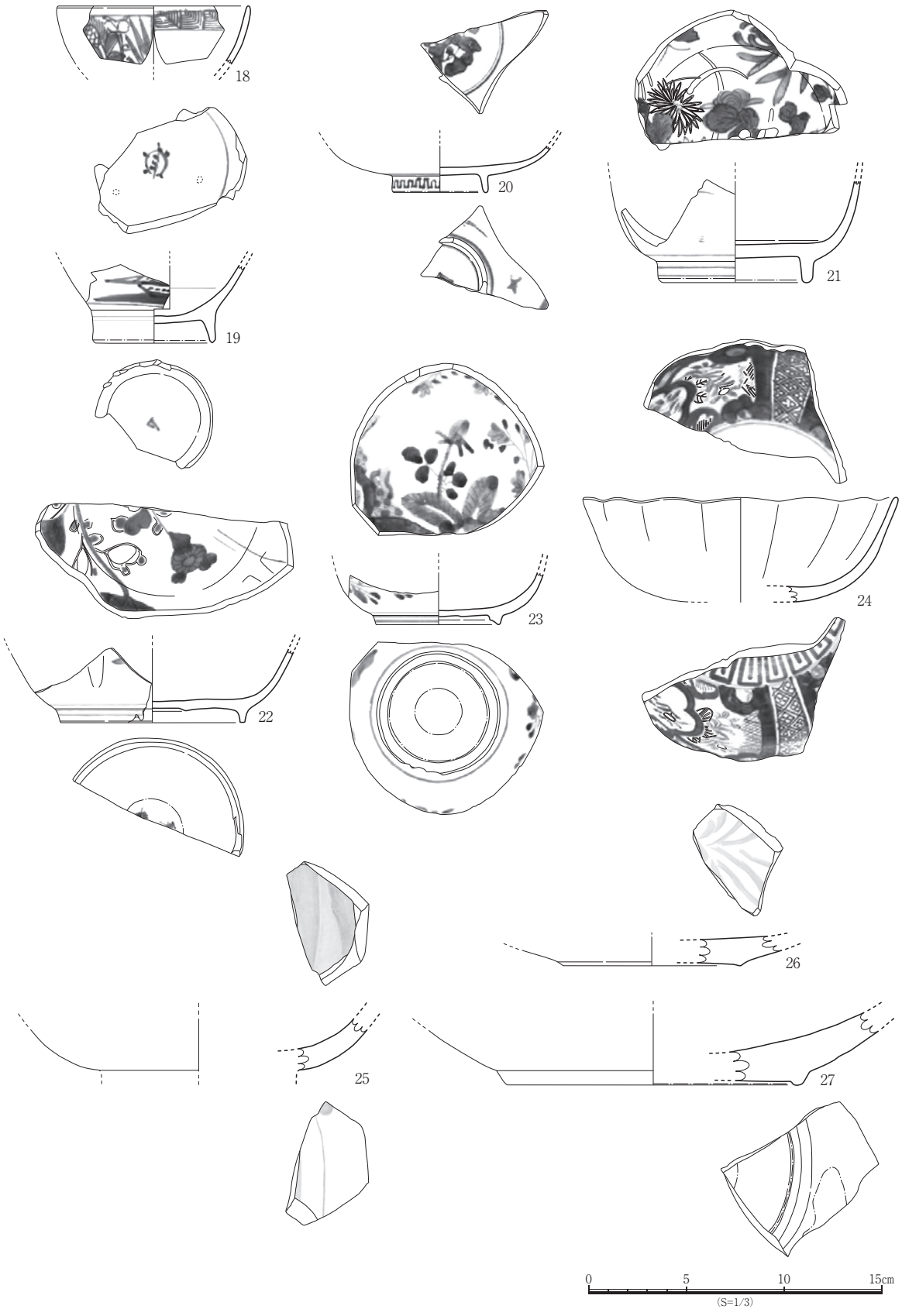


図10　第Ⅰ層出土遺物実測図2

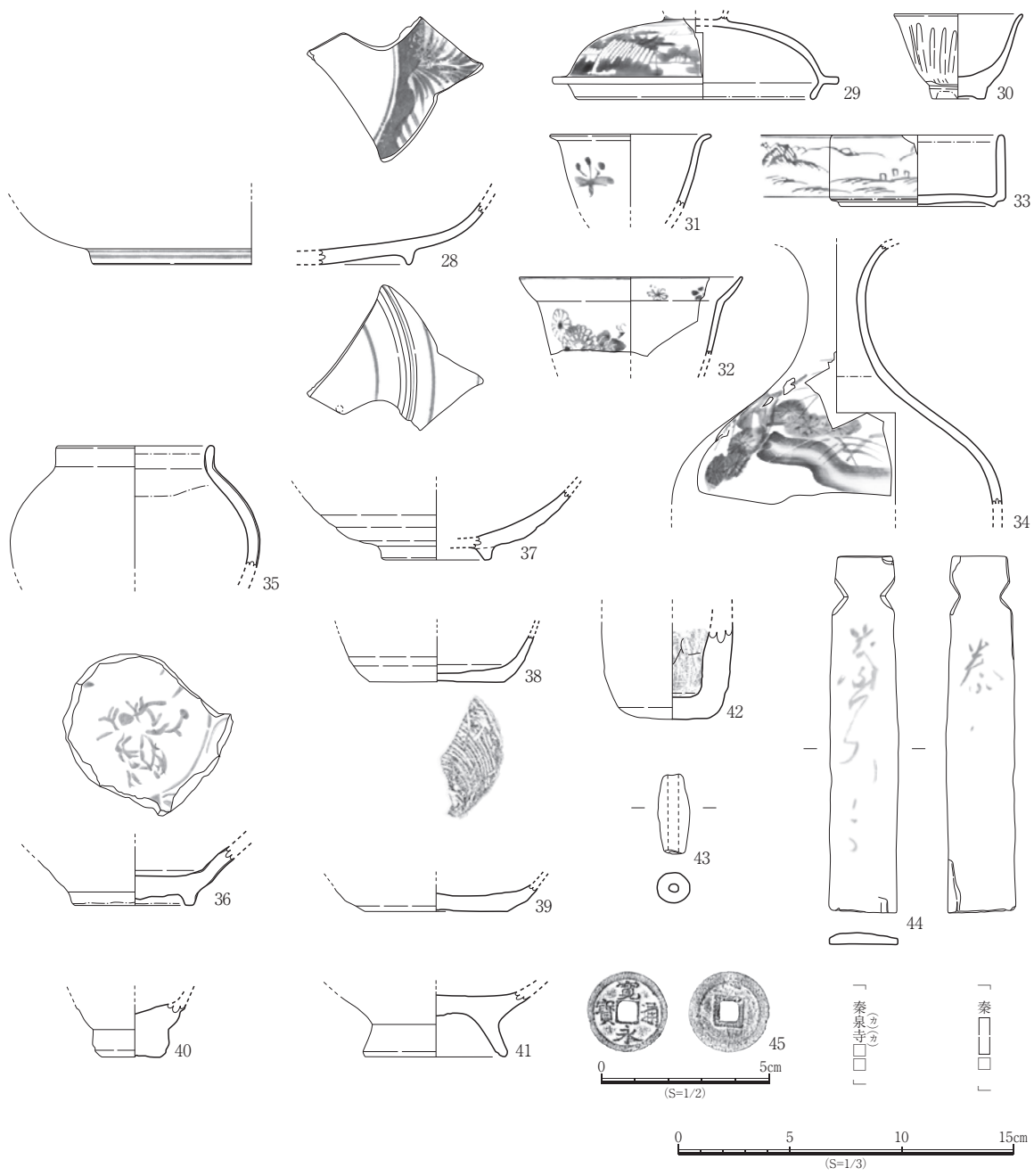


図11　第Ⅰ層出土遺物実測図3

杯で,内面から高台付近まで白磁釉を施す。外面には丸彫による縞文がみられる。31は染付小杯で,外面には草花文の染付がみられる。32は肥前有田産の色絵猪口で，折縁形である。全面に透明釉を施し，口縁端部には口錆，内面には朱色と黒色の花文，外面には朱色と黒色の菊文の上絵付がみられる。33は肥前系の染付蓋物で，全面に透明釉を施し，口縁部と外底脇は釉ハギする。外面には山水風景文と圏線がみられる。34は肥前系の染付瓶で，端反辣韮形を呈する。口縁部内面から外面に透明釉を施す。外面には梅樹文と笹文の染付がみられる。内面は回転ナデで無釉である。35は肥前有田産の青磁壺である。口縁部内面から外面に青磁釉を施し，口縁端部は釉ハギする。胴部内面は回転ナデ調整で無釉，煤が付着する。

③ 青磁(図11−36)

36は中国龍泉窯系の碗で，内面から高台内まで青磁釉を施し，高台内は輪状に釉ハギする。見込はスタンプによる花文,内面は陰刻による圏線と文様の一部が残る。高台内には輪状に粘土が付着する。

④ 土師質土器(図11−37～41)

37は椀で，輪高台を貼付する。回転ナデ調整とみられるが，摩耗するため調整は不明瞭である。38～41は杯である。38は回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りである。39は著しく摩耗するため調整は不明である。40は柱状高台を有する。内面は回転ナデ調整で，外面は著しく摩耗するため調整は不明である。41は台付杯で，底部には高い脚が付く。脚は横方向のナデ調整，その他は著しく摩耗するため調整は不明である。

⑤ 土師器(図11−42)

42は焼塩壺で，輪積成形である。内面は粗雑なナデ調整で布目痕が残り，外面はナデ調整で指頭圧痕が僅かに残る。外底に板状圧痕が残る。

⑥ 土製品(図11−43)

43は土錘で，紡錘形を呈する。須恵質で，摩耗するため調整は不明である。

⑦ 木製品(図11−44)

44は木簡で完存する。長方形を呈し，上部の左右に切り込みを入れる。両面に粗い加工痕が残る。表面に「秦泉(ヵ)寺(ヵ)□□」，裏面に「秦…」の墨書がみられる。

⑧ 金属製品(図11−45)

45は銭貨である。寛永通寶で，新寛永である。

(2) 第Ⅱ層

第Ⅱ層は近世の整地層で,46～100を図示した。江戸時代以降の瓦は第Ⅲ章4でまとめて報告する。

① 陶器(図12−46～61)

46～48は碗である。46は肥前産の唐津系鉄釉陶器碗で，内面から高台付近まで鉄釉を施す。外面体部下半は回転ケズリ調整で無釉である。47は中碗で，内面から外面体部下半まで灰釉を施す。外面には錆絵がみられる。48は全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。

49～56は皿である。49は美濃産の志野織部皿で，全面に長石釉を施し，内面には鉄錆による文様がみられる。50は肥前産の絵唐津小皿で，内面から口縁部外面に灰釉を施す。見込には錆絵がみられ，胎土目痕が残る。51～54は肥前産の唐津系灰釉陶器皿である。51は小皿で，内面に灰釉を施し,外面は回転ナデ調整,高台は削り出しで無釉である。見込には胎土目痕が残る。52は小皿で，内面に灰釉を施し，砂目痕が残る。外面は無釉で，回転ケズリ調整を施す。畳付には糸切痕が残る。53は小皿で，内面から高台付近まで灰釉を施し，見込と畳付には砂目痕が残る。54は全面に灰釉を施し，見込と畳付には砂目痕が残る。55は陶器角皿である。型打成形で，脚が付く。脚裾部を除き灰釉を施す。56は肥前産の刷毛目二彩手陶器中皿である。内面には灰釉を施した後，白化粧土による刷毛目文と緑釉の流し掛けを行う。見込に砂目痕が残る。外面は無釉である。

57は焼締陶器擂鉢である。回転ナデ調整で，体部外面は回転ケズリ調整を施す。内面には擂目を密に施し，口縁部には凹線が2条みられる。58は甕で，口縁部を肥厚させ丸く収める。口縁部内面から外面には灰釉を施し，外面の肩部には3条の沈線が巡る。59は焼締陶器甕で，備前焼である。口縁は玉縁形を呈し，全面に回転ナデ調整を施す。60は焼締陶器甕とみられ，内外面に横方向の

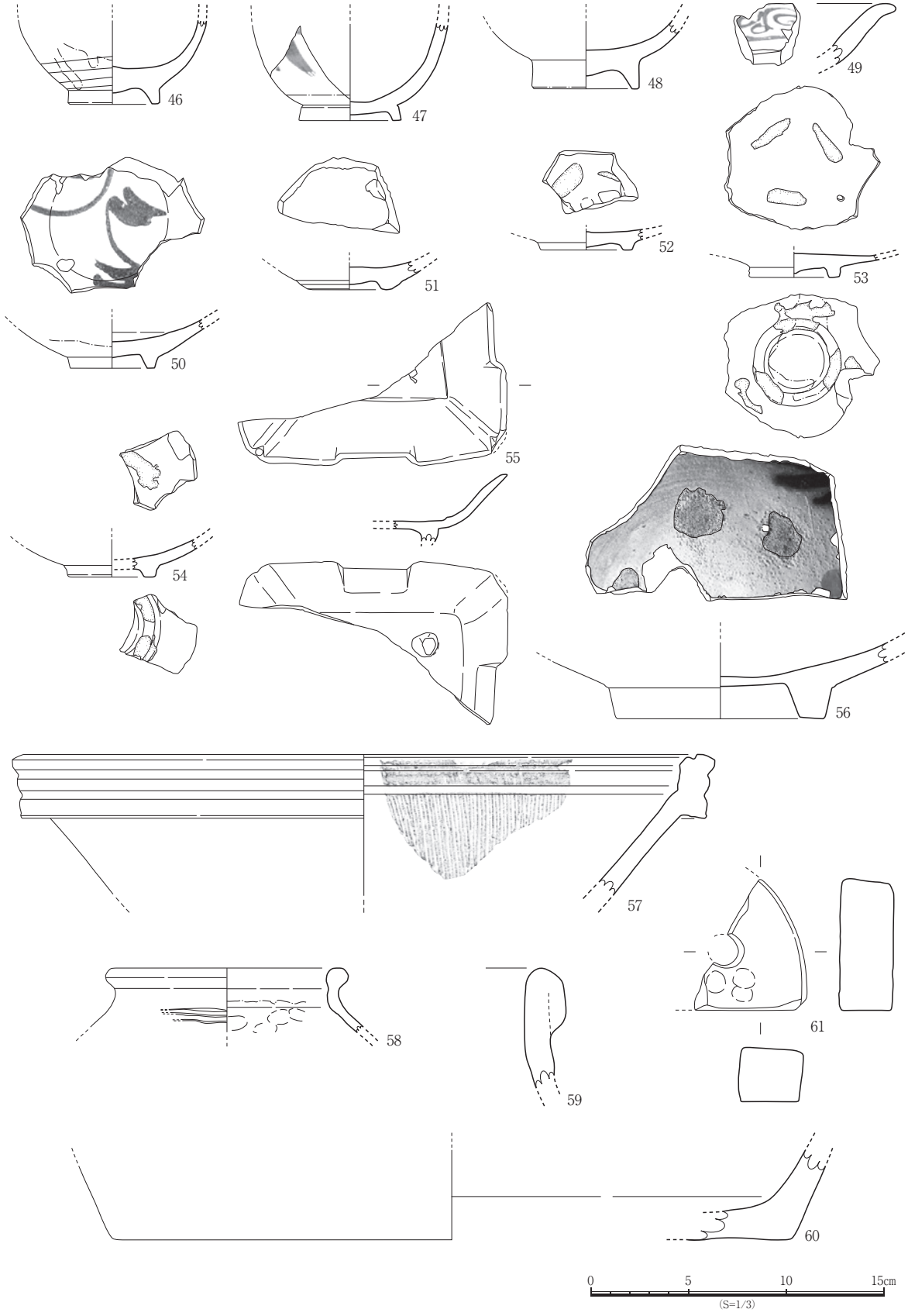


図12　第Ⅱ層出土遺物実測図1

ナデ調整を施す。61は窯道具とみられ，板状で半円形を呈し，径1.9㎝の円孔を穿つ。両面をケズリ調整，側面にナデとケズリ調整を施し，板状圧痕が残る。

② 磁器(図13−62～74)

62～66は碗である。62は肥前産の染付中碗である。外面に圏線と染付の一部が残る。畳付は釉ハギし，砂が付着する。63は肥前産の染付小広東碗である。内面に圏線，外面は区画割に草花文の染付がみられる。64は肥前有田産の染付丸碗である。外面は人物と建物・草花文，高台内には草花文と圏線の染付を施す。65は肥前産の筒形染付小碗で，外面には梅文の染付がみられる。66は青磁碗で，内面から高台外面まで青磁釉，高台内には錆釉を施す。

67～71は皿である。67は肥前有田産の色絵皿で，全面に透明釉を施す。内面は濃地に唐草文の染付，外面には色絵の痕跡が残る。被熱する。68は肥前系の染付変形皿で，ロクロ成形後に型打成形を行う。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。内面は斜格子地に蝶文の染付，外面には点繋文の染付がみられる。69は肥前産の青磁皿で，全面に青磁釉を施す。内外面にヘラ彫による文様の一部が残る。70は肥前有田産の染付小皿で，口縁部は輪花形を呈する。内面は草花文と圏線，外面は唐草文と圏線，高台内には銘と圏線の染付がみられる。畳付は釉ハギする。71は肥前産の染付五寸皿で，内面に草花文と圏線，外面に唐草文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。畳付は釉ハギし，砂が付着する。72は肥前有田産の染付広東碗蓋である。内面は「寿」字と二重圏線，外面に暦手文の染付がみられる。73は肥前産の染付小杯で，端反形である。外面に松葉文とみられる染付が残る。74は肥前産の染付小瓶である。内面は回転ナデ調整で無釉，外面には透明釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。体部外面には梅文と笹文の染付がみられる。

③ 青磁(図13−75)

75は中国産の皿で，全面に青磁釉を施す。口縁部内面には陰刻による圏線がみられる。

④ 土師質土器(図13−76～81)

76～78は椀で，底部には輪高台を貼付する。76は摩耗するため調整は不明である。77は高台が横方向のナデ調整，高台内はナデ調整，内外面は摩耗するため調整は不明である。78の輪高台は断面半円形を呈する。著しく摩耗するため調整は不明である。79は杯で，水挽成形である。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。80は皿で，回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。81は小皿で，回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

⑤ 土師器(図13･14−82･83)

82は杯とみられ，輪高台を貼付する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。83は関西系の焙烙である。底部は型押成形で無調整，口縁部と内面には回転ナデ調整を施す。口縁部外面には煤が付着する。

⑥ 須恵器(図14−84･85)

84は椀で，回転ナデ調整の後，内面にはミガキ調整を施す。外面には火襷がみられる。85は壺で，高台が付くものとみられる。調整は回転ナデである。

⑦ 瓦質土器(図14−86)

86は鍋で，口縁部は直立する。内面は横方向のナデ調整で，外面は指頭圧痕が残るが摩耗するため調整は不明である。

⑧ 土製品(図14−87～91)

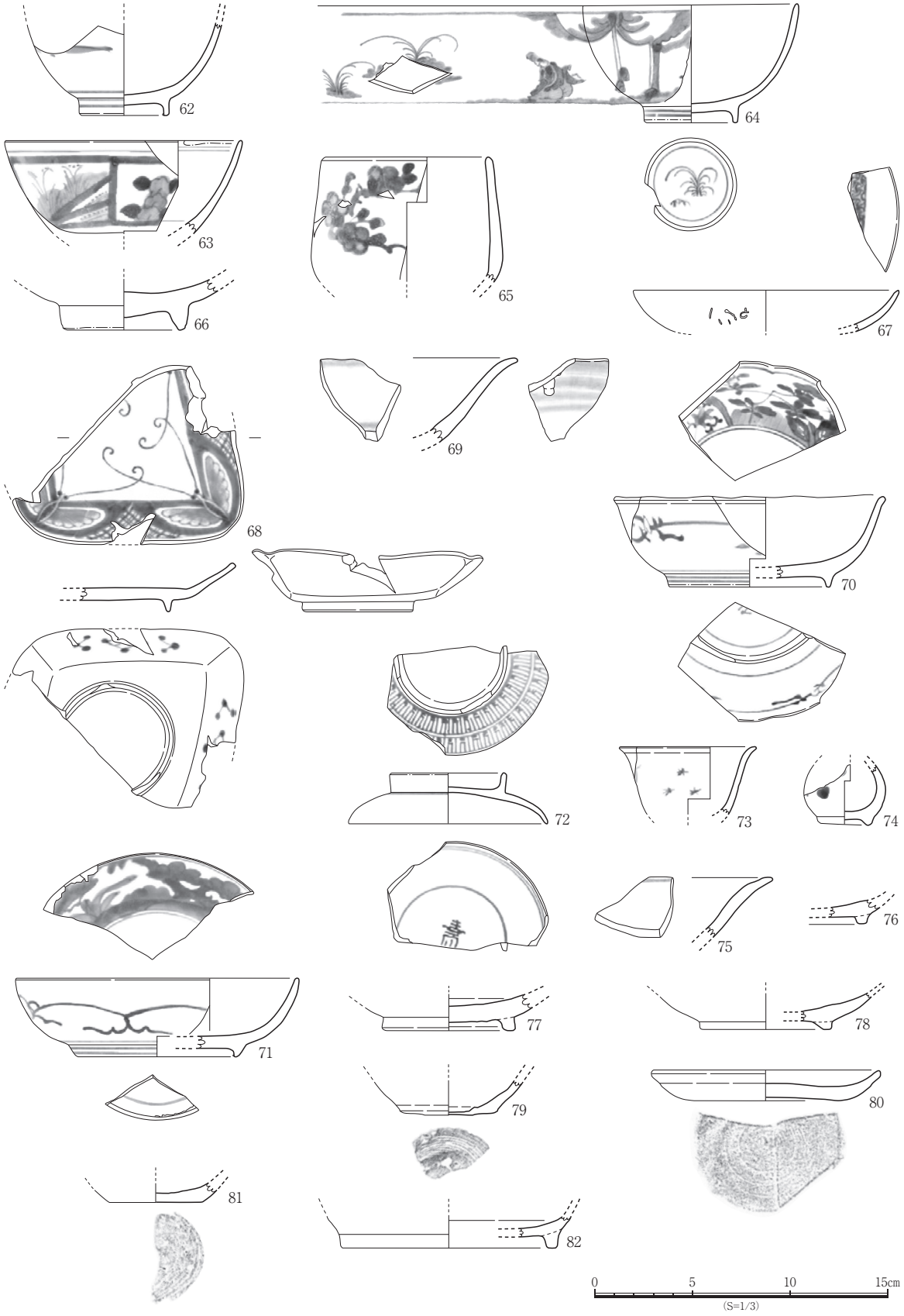


図13　第Ⅱ層出土遺物実測図2

87～90は泥面子で，型押成形である。上面は型押による文様で，87は「福」字，88は花文，89は古銭とみられる文様，90は「相原」字がみられる。下面はナデ調整で，88～90には指頭圧痕が残る。91は箱庭道具で，堂形を呈する。型押成形で，一部にナデ調整を加える。外面の下部は白色と緑色の釉で彩色する。下面は凹み，ナデ調整で指頭圧痕が顕著に残り，無釉である。

⑨ **木製品**(図14-92・93)

92は木簡で一部が残存する。片面に「定来(米ヵ)」の墨書がみられる。93は舟形で，完存する。刳物で，上面中央を方形に刳り，中央に径0.3cmの貫通しない円孔を穿つ。船首と船尾に切り込みを入れる。全面に加工痕が残る。

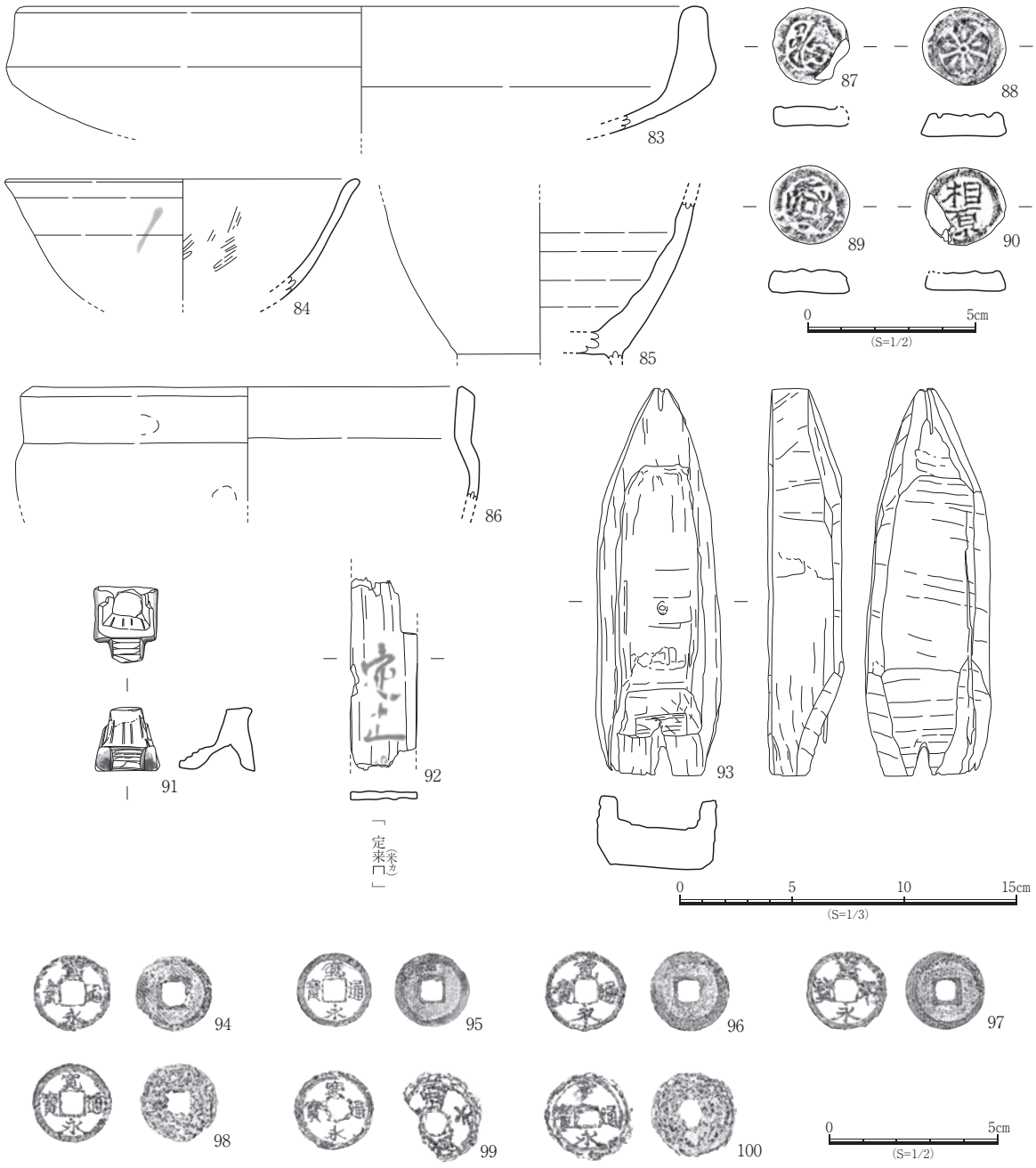


図14　第Ⅱ層出土遺物実測図3

⑩ 金属製品(図14−94～100)

94～100は銭貨で，すべて寛永通寶である。完存し，全面に錆化する。94は錆化するため不明瞭であるが，古寛永とみられる。95は新寛永である。98・99はいずれも2枚が癒着し，1枚は新寛永である。100は4～5枚が癒着する。

(3) 第Ⅲ層

第Ⅲ層は江戸時代以前の遺物包含層で，8～15世紀にかけての遺物が出土し，101～126を図示した。

① 青磁(図15−101)

101は中国龍泉窯系の碗で,内面から高台外面まで青磁釉を施す。高台内は削り出しで無釉である。

② 土師質土器(図15−102～116)

102～109は椀である。102は平高台を有し，回転ナデ調整とみられるが，摩耗するため一部の調整は不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。103も平高台を有し，調整は回転ナデである。底部の切り離しは回転糸切りで，板状圧痕が残る。104～109は輪高台を有する椀である。104は高台が横方向のナデ調整，内面は摩耗するため調整は不明である。105は高台脇に回転ケズリ調整を施すとみられるが，摩耗するため調整は不明瞭である。106は底部に断面方形を呈する低い輪高台を貼付する。高台は横方向のナデ調整で，その他は著しく摩耗するため調整は不明である。107は高台が横方向のナデ調整，内面は摩耗するため調整は不明である。108は高台付近が横方向のナデ調整で，内面は摩耗するため調整は不明である。109は底部に扁平な輪高台を貼付する。高台は横方向のナデ，底部の切り離しは回転糸切りである。内面と体部外面は摩耗するため調整は不明である。

110～114は杯である。110は器壁が薄く，体部は底部から緩やかに湾曲して立ち上がる。摩耗するため調整は不明である。111は回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。底部には亀裂がみられ，見込には煤が付着する。112は回転ナデ調整とみられるが，摩耗するため調整は不明である。113は底部の切り離しは回転糸切りである。摩耗するため調整は不明である。114は摩耗するため調整は不明で，底部の切り離しは回転糸切りである。

115は小皿である。調整は回転ナデ後，内面の一部にナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りで,その後一部にナデを加える。116は高台を有する小皿である。摩耗するため調整は不明である。

③ 土師器(図15−117)

117は製塩土器とみられる。内面は布目圧痕が残り，外面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明瞭である。

④ 須恵器(図15−118～122)

118は杯で，底部には輪高台を貼付する。回転ナデ調整で，見込にナデ調整，外面に回転ケズリ調整を加える。119は皿で，口縁部内面に僅かに稜を有する。調整は回転ナデで，外底はナデとみられる。120は蓋である。調整は回転ナデで，外面の一部にケズリを加える。口縁部には自然釉が掛かる。121は甕で，頸部内面は横方向のハケ調整のちナデ調整，口縁部は外面に平行タタキ調整を施した後，回転ナデ調整である。122は壺または甕である。回転ナデ調整で，外底には不定方向のケズリ調整を加える。

⑤ 瓦器(図15−123)

123は楠葉型の椀である。内面はナデ調整と指頭圧痕の後，内面に密な平行ミガキ調整，外面は

口縁部に横ナデ調整の後，やや粗いミガキ調整を施す。

⑥ 瓦質土器(図15−124・125)

124は畿内産の鍋で，口縁部は受口状を呈する。調整は体部内面が横方向のナデ，口縁部が横ナデで，体部外面には煤が付着するため調整は不明である。125は土佐型の釜で，口縁部外面に断面三角形の鍔が付く。調整は内面がナデで一部ヘラナデを加え，口縁部は横ナデ，鍔は横方向のナデ，

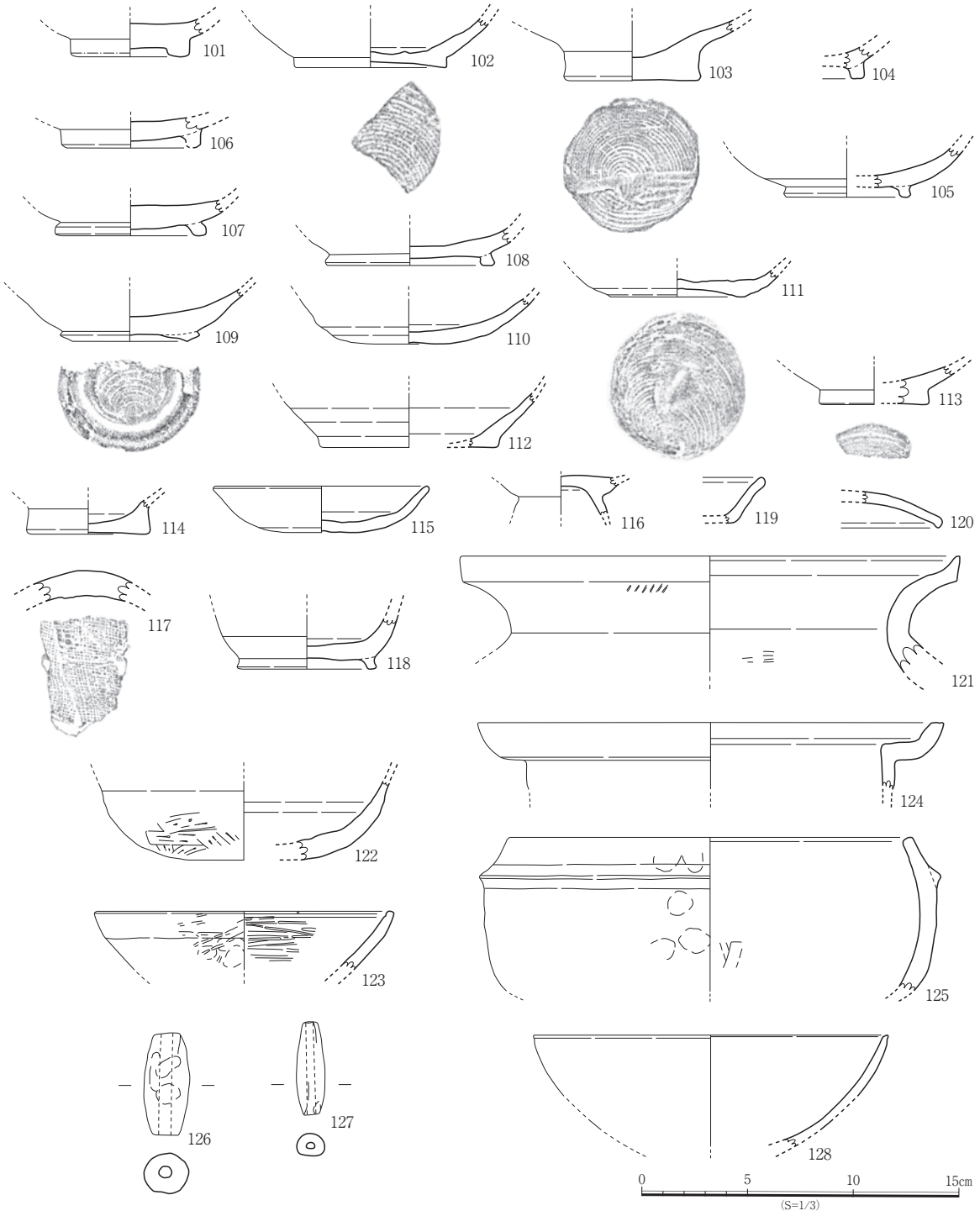


図15　第Ⅲ層・第Ⅵ－6層出土遺物実測図

外面はナデで指頭圧痕が残る。

⑦ 土製品(図15－126)

126は土錘で，紡錘形を呈する。須恵質で，全面にナデ調整を施し，指頭圧痕が残る。

(4) 第Ⅳ－6層

第Ⅳ層は古代あるいはそれ以前の自然堆積層とみられるが，第Ⅳ－6層からは遺物が僅かに出土しており自然流路の可能性もある。

① 土製品(図15－127)

127は土錘で，紡錘形を呈する。全面にナデ調整を施す。

② 木製品(図15－128)

128は漆器椀で，内外面とも赤塗である。

3. 遺構と遺物

遺構番号は1区・2区の通し番号である。江戸時代以降の瓦は第Ⅲ章4でまとめて報告する。

(1) 古代・中世

2区のⅣ区北部，Ⅴ区南西部，Ⅶ区で古代から中世の遺構が検出された。この時期の遺構は1区では確認されておらず，大高坂山に近い丘陵裾部でのみ確認された。Ⅴ区は撹乱の下で検出され，一部は削平を受けていた。

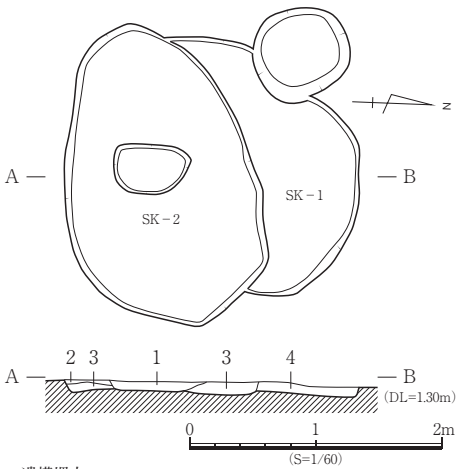
① 土坑

SK－1(遺構：図16)

2区北部で検出した土坑で，SK－2とピットに切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ，検出長2.01m，検出幅1.52m，深さ18cmを測る。埋土はオリーブ黒色細粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器8点(椀1，杯1，細片6)，須恵器2点(椀1，細片1)がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SK－2(遺構：図16)

SK－1の南で検出した土坑で，SK－1を切る。平面形態は楕円形を呈し，長径2.47m，短径1.55m，深さ21cmを測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器4点(小皿1，細片3)がみられたが，図示できる遺物はなかった。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)中粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を多く含む(ピット)
2. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を少し含む(SK－2)
3. オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を含む(SK－2)
4. オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を含む(SK－1)

図16　SK－1・2

② 溝跡

SD－1

2区北部で検出した南北溝跡で，全長2.34m，幅0.43m，深さ21cmを測る。断面は舟底形を呈し，基底面は南(1.071m)から北(1.038m)へ傾斜する。埋土は黄灰色中粒砂質シルトで，0.5cm大の黄色礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片29点，土師器片3点(1点は布目痕あり)がみられたが，図示できる遺物はなかった。

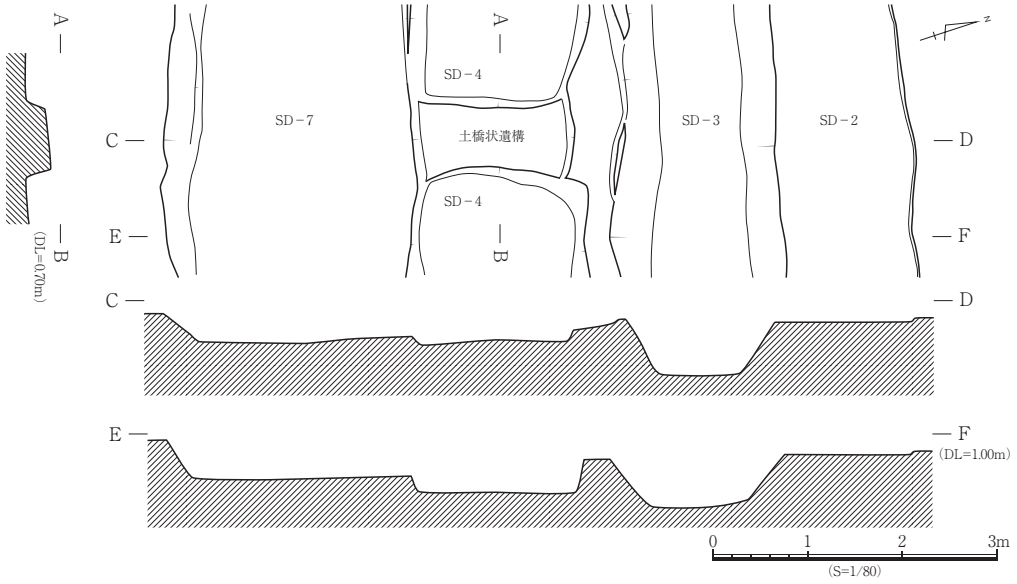
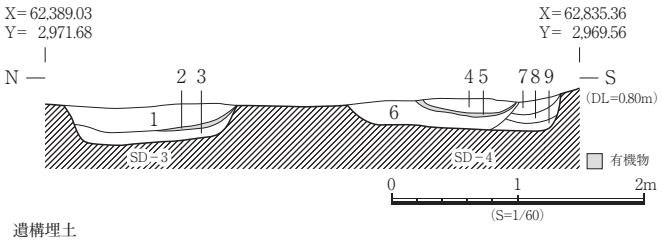


図17　SD－2～4・7

SD－2（遺構：図17）

2区南部で検出した東西溝跡である。東端は撹乱に切られ，南はSD－3に切られる。検出長13.14m，検出幅1.50m，深さ9cmを測り，断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器37点（椀1，杯1，細片35），土師器片3点（1点は布目痕あり），須恵器甕1点，瓦器椀1点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

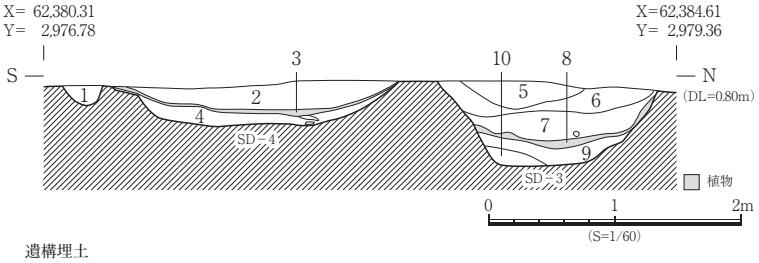


遺構埋土
1. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトで，木片と腐植のブロックを含む(SD－3)
2. 黒色(10YR2/1)シルトで，木片と葉を非常に多く含む(SD－3)
3. 灰色(5Y4/1)粘土質シルトで，腐植を少し含む(SD－3)
4. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトで，炭化物と腐植を含む(SD－4)
5. 黒色(10YR2/1)腐植土で，木片を非常に多く含む(SD－4)
6. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトで，灰色(5Y5/1)・黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトのブロックを多く含む(SD－4)
7. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトで，腐植のブロックを含む(SD－4)
8. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルトで，中粒砂～粗粒砂を含む(SD－4)
9. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトで，粗粒砂と灰色(5Y4/1)粘土質シルトのブロックを含む(SD－4)

図18　SD－3・4西部

SD－3（遺構：図17～19　遺物：図20－129～135）

SD－2の南で検出した東西溝跡で，両端は撹乱に切られる。SD－2を切り，SD－4に切られる。検出長31.72m，検出幅2.04m，深さ73cmを測る。基底面は西(0.319m)から東(0.294m)に緩やかに傾斜する。断面は逆台形を呈し，埋土は6層に分かれる。西部の中位では植物の堆積層が見られ，東部の底付近では径約2cmの木片や棕櫚状の植物を格子



遺構埋土
1. 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(土坑)
2. 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトで，中粒砂と0.5～1cm大の礫を含む(SD－4)
3. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで，葉と枝・木片を非常に多く含む植物の堆積(SD－4)
4. 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトで，1～5cm大の礫を少し含む(SD－4)
5. 黒褐色(5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SD－3)
6. 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SD－3)
7. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで，5cm大の礫と中粒砂質シルトのブロックを含む(SD－3)
8. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで，葉と枝・木片を非常に多く含む植物の堆積(SD－3)
9. 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を含む(SD－3)
10. 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトで，5cm大の礫を含む(SD－3)

図19　SD－3・4中央部

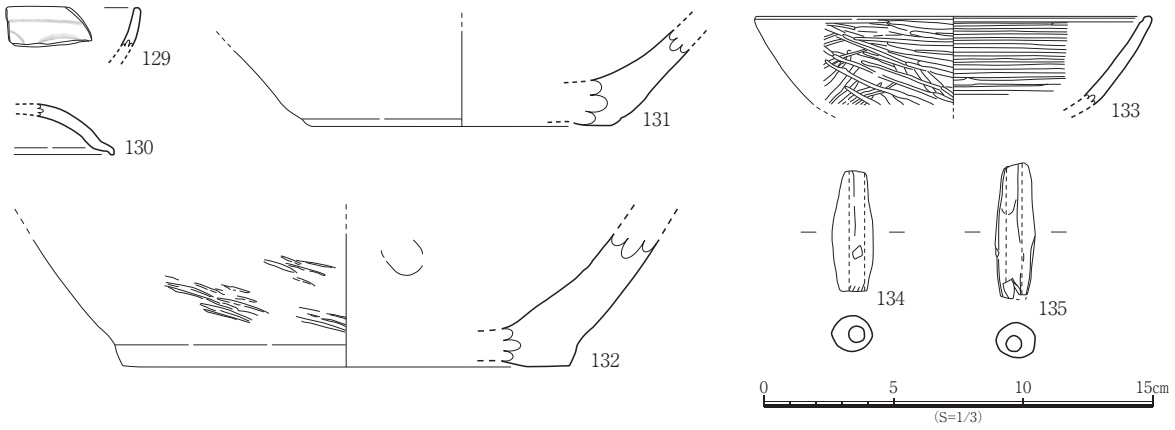


図20　SD－3出土遺物実測図

状に編んだものが敷かれていた。出土遺物には，陶器2点(甕1，細片1)，白磁4点(皿1，細片3)，土師質土器318点(椀14，杯15，小皿8，細片281)，土師器12点(蓋1，高杯1，壺1，甕1，細片8(1点は布目痕あり))，須恵器13点(壺1，甕10，細片2)，瓦器9点(椀8，細片1)，瓦質土器片1点，土製品土錘2点がみられ，129～135の7点を図示した。

129は中国産の白磁皿で，全面に白磁釉を施す。内面には陰刻による文様がみられる。130は下層より出土した土師器蓋で，全面に回転ナデ調整を施す。131は上層より出土した土師器壺で，内面及び体部外面は横方向のナデ調整である。外底は無調整とみられるが，摩耗するため調整は不明である。132は須恵器甕である。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。体部外面はタタキ調整の後ナデ調整，外底は無調整とみられ砂が付着する。133は上層より出土した楠葉型の瓦器椀である。内面は緻密な平行ミガキ調整，外面は分割ミガキ調整を施す。134・135は土製品土錘で，紡錘形を呈する。全面ナデ調整で，指頭圧痕が残る。いずれも孔径0.6cmを測る。

SD－4(遺構：図17～19・25・26　遺物：図21・22－136～171)

SD－3の南で検出した東西溝跡である。東は調査区外へ続き，西は撹乱に切られる。SD－3・7を切り，SD－5に切られる。検出長29.78m，検出幅2.40m，深さ54cmを測る。基底面は東(0.449m)から西(0.421m)に緩やかに傾斜する。断面は逆台形を呈し，埋土は西部では6層に分かれ，中位では植物の堆積層が見られた。2箇所で溝と垂直方向に土橋状に溝の底より浅くなっており，東の土橋状遺構は幅約63cmを測る。出土遺物には，陶器5点(碗1，細片4)，白磁13点(碗9，皿2，細片2)，青磁皿1点(同安窯系)，土師質土器887点(椀53，杯57，小皿19，細片758)，土師器32点(蓋1，甕7，細片24(2点は布目痕あり))，須恵器47点(椀1，杯4，皿1，壺2，甕31，細片8)，緑釉陶器片1点，瓦器11点(椀4，小皿2，細片5)，瓦質土器4点(釜1，甕2，細片1)，石製品砥石1点，木製品箸2点，平瓦4点，骨1点がみられ，136～171の36点を図示した。

136～140は中国産の白磁で，全面に白磁釉を施す。136は碗で，口縁部は小さな玉縁状を呈する。137は下層より出土した碗で，口縁部は玉縁状を呈する。138も下層より出土した碗で，口縁端部を外へ細く摘む。139・140は皿で，内面には陰刻による花文がみられる。141～144は土師質土器椀で，輪高台を貼付する。141は回転ナデ調整で，高台外側は回転ケズリ調整を加える。高台と高台内は横方向のナデである。142は内面にナデ調整の後，ヘラナデ調整を加える。外面はナデ調整の後ミガキ調整で，高台脇には回転ケズリ調整を施す。高台は横方向のナデ調整，高台内はナデ

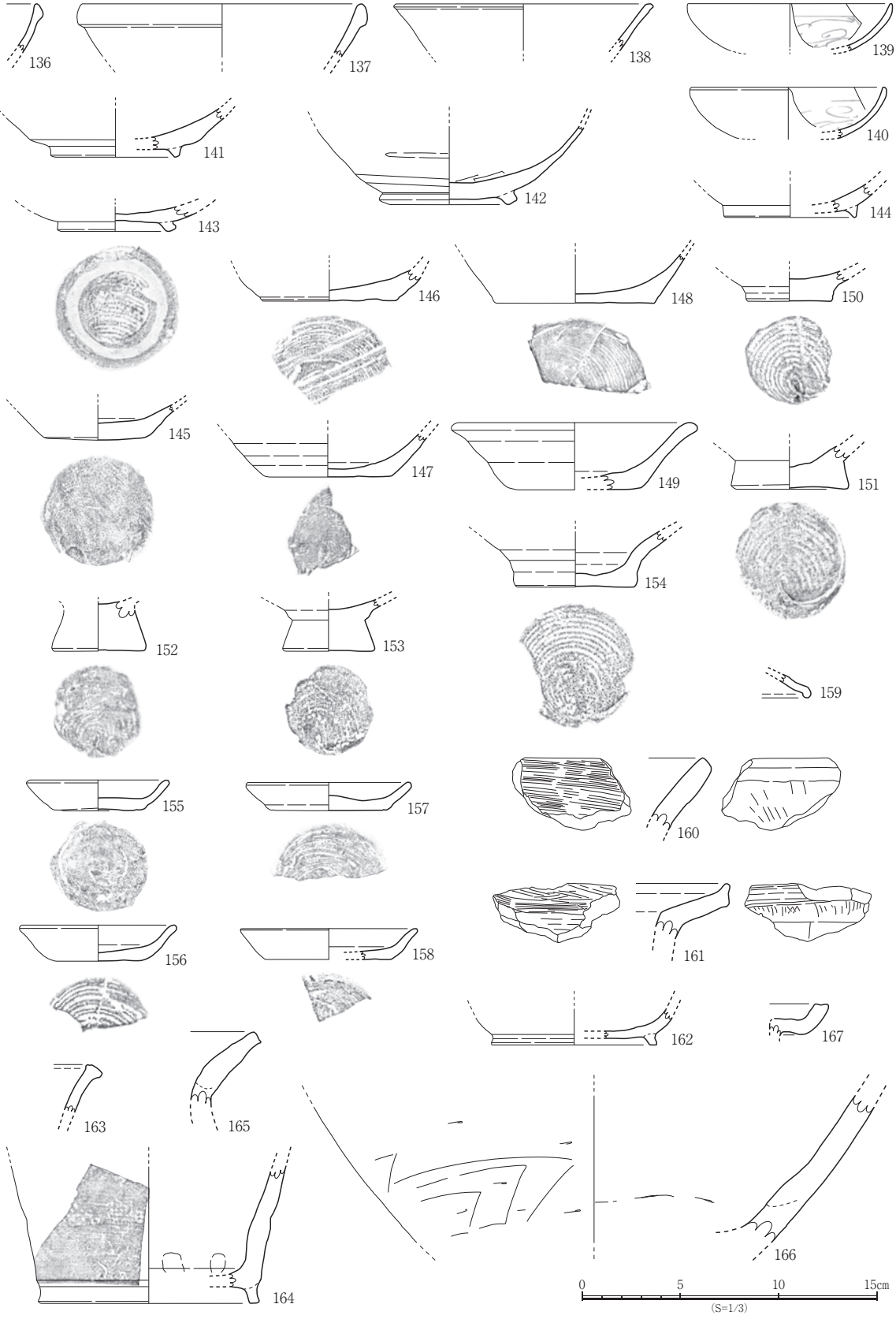


図21　SD－4出土遺物実測図

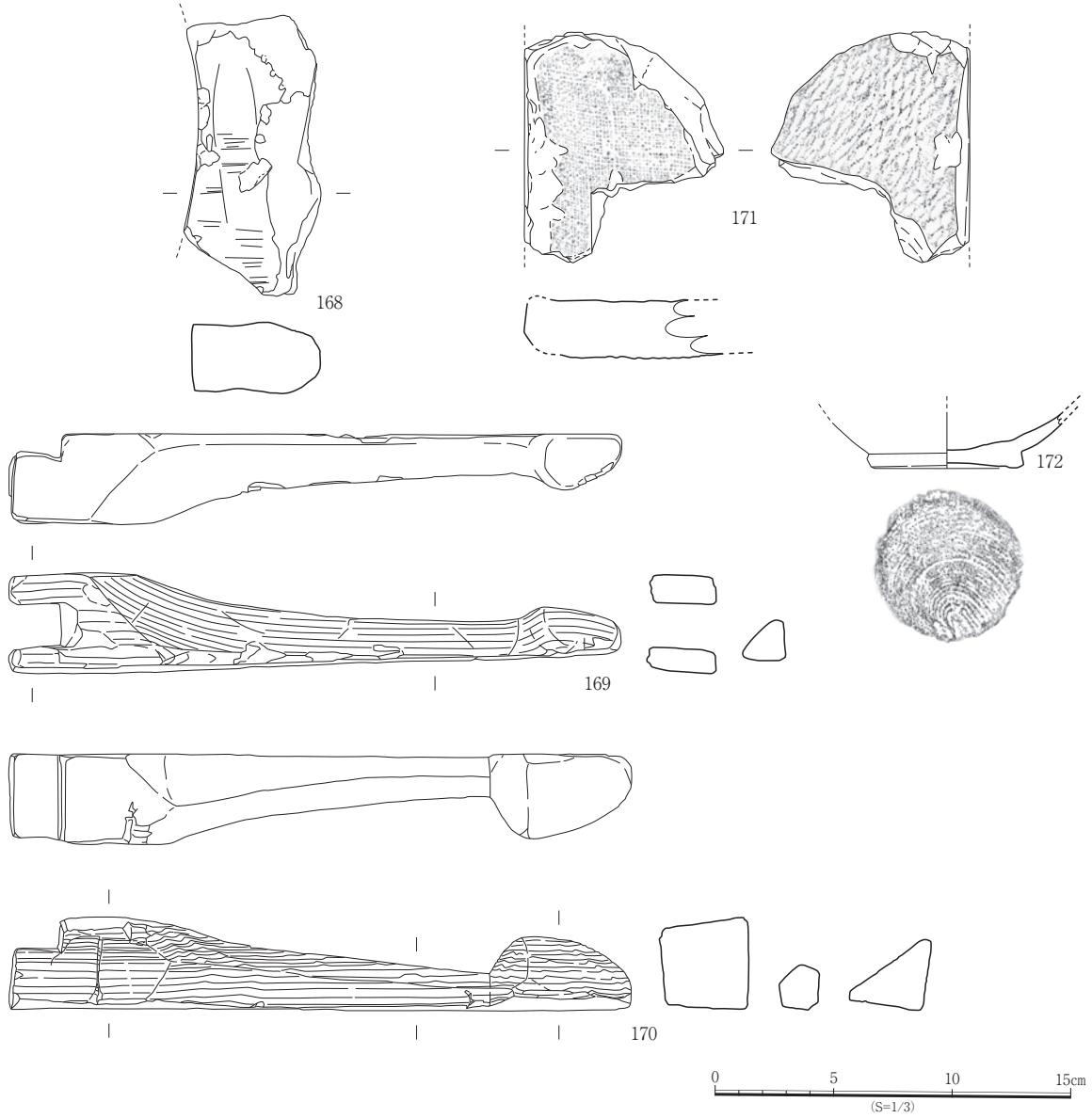


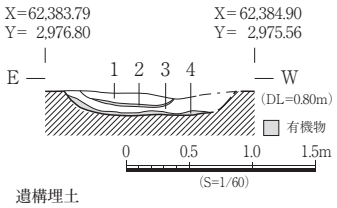
図22　SD－4・6出土遺物実測図

調整である。143は下層より出土した。底部に断面方形を呈する低い輪高台を貼付する。内面は回転ナデ調整，高台は横方向のナデ調整である。底部の切り離しは回転糸切りである。144は高台は横方向のナデ調整，内面は著しく摩耗するため調整は不明である。145～154は土師質土器杯である。145・146は著しく摩耗するため調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。146の外底には板状圧痕が残る。147・148は回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。149は上層より出土した。著しく摩耗するため調整は不明である。150も上層より出土した。回転ナデ調整とみられるが，内面の調整は摩耗するため不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。151～154は柱状高台を有する杯である。151は上層より出土した。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。152・153は著しく摩耗するため調整は不明で，底部の切り離しは回転糸切りである。154は上層より出土した。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。155～158は土師質土器小皿で，調整は回転ナデである。155は上層より出土した。底部の切り離しは回転ヘラ

切りである。156は東の土橋状遺構付近から出土した。底部の切り離しは回転糸切りで，見込には僅かに煤が付着する。157は回転ナデ調整とみられるが，外面は摩耗するため不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。158は底部の切り離しは回転糸切りである。159は上層より出土した土師器蓋で，端部は肥厚して丸く収める。著しく摩耗するため調整は不明である。160は土師器甕で，内面は横方向のハケ調整である。外面は縦方向のハケ調整とみられるが，摩耗するため不明瞭である。搬入品とみられる。161も土師器甕で，口縁部内面に横または斜方向のハケ調整，外面に縦方向のハケ調整の後，口縁端部は横ナデ調整を施す。頸部外面はナデ調整である。搬入品とみられる。162は上層より出土した須恵器杯で，回転ナデ調整で，高台は横方向のナデ調整，高台内はナデ調整である。163は東の土橋状遺構付近から出土した須恵器壺で，口縁端部は肥厚する。回転ナデ調整である。164は下層より出土した須恵器壺で，底部には高台が付く。内面は当具痕のち横方向のナデ調整，外面は格子目タタキ調整の後，回転ナデ調整で，一部に指頭圧痕が残る。高台は横方向のナデ調整である。165・166は須恵器甕である。165は回転ナデ調整で，外面には自然釉が掛かる。166は内面がナデ調整，外面は横方向のケズリ調整を施す。167は畿内産の瓦質土器鍋で，口縁部は受口状を呈する。横ナデ調整で，外面には煤が付着する。168は石製品砥石で，一部が残存するものとみられる。断面は五角形を呈し，3面に使用痕が残る。石材は砂岩である。169・170は木製品で組になるものとみられるが，用途は不明である。169の先端は膨らみ，断面が三角形を呈し，一辺は角を取り丸く加工する。軸部は断面方形を呈し，基部は二又に分かれ，組み合わせ式となっている。170は先端と軸部の形状は169と同様で，やや太い。基部は断面がL字状を呈する。171は古代または中世の瓦で，平瓦である。凹面には布目圧痕，凸面は縄目状タタキが残る。

SD－5（遺構：図23）

2区南部で検出した南北方向の溝跡で，SD－3・4に切られる。検出長0.44m，検出幅1.89m，深さ24㎝，基底面の標高は0.463mを測る。埋土は4層に分かれ，埋土2と4には有機物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

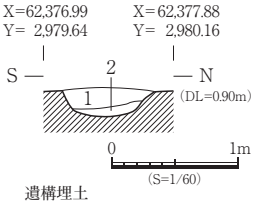


遺構埋土
1. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト中粒砂で，小礫と黒褐色シルト質粗粒砂のブロックを含む
2. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで，有機物を多く含む
3. 黄灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで，小礫とオリーブ黒色細粒砂質シルトのブロックを含む
4. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで，有機物を多く含む

図23　SD－5

SD－6（遺構：図24　遺物：図22－172）

2区南西部で検出した東西方向の溝跡で，西は調査区外に続き，SD－8に切られ，SD－7を切る。検出長12.90m，幅0.79m，深さ28㎝を測る。基底面は東(0.696m)から西(0.551m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し，埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器79点(椀2，杯4，小皿2，細片71)，土師器片2点，須恵器4点(甕1，細片3)，瓦器椀1点，骨2点がみられ，上層から出土した土師質土器椀(172)を図示した。172は平高台を有し，底部の切り離しは回転糸切りである。著しく摩耗するため調整は不明である。



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，1～3㎝大の礫と中粒砂のブロックを含む
2. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで，0.5㎝大の礫を少し含む

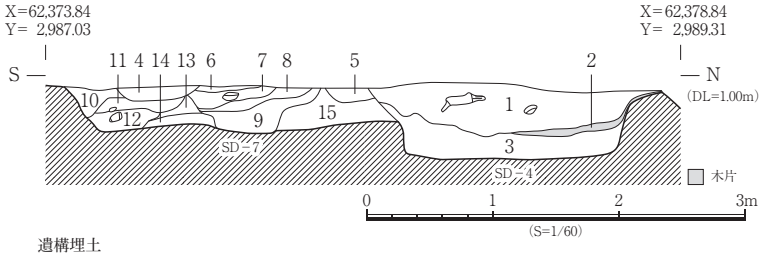
図24　SD－6

SD－7（遺構：図17・25・26　遺物：図27－173～185）

2区南東部で検出した東西方向の溝跡で，東は調査区外に続き，SD－4・6に切られる。検出長14.85m，検出幅2.65m，深さ35㎝を測る。基底面は西(0.660m)から東(0.578m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し，埋土は12層

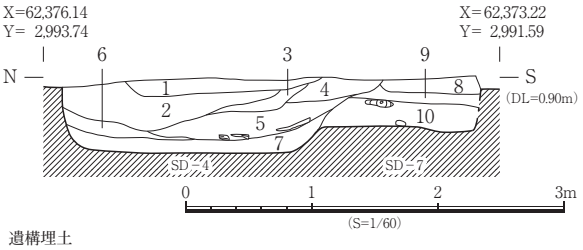
に分かれる。出土遺物には陶器3点(壺2，細片1)，白磁4点(碗3，細片1)，土師質土器333点(椀18，杯17，小皿8，細片290)，土師器15点(甕2，釜2，細片11)，須恵器36点(椀2，皿2，蓋1，甕25，細片6)，東播系須恵器椀1点，瓦器9点(椀5，細片4)，瓦質土器甕1点，土製品土錘2点，瓦2点(丸瓦1，平瓦1)がみられ，173～185の13点を図示した。

173は上層より出土した備前焼壺で，内面は粗雑なナデ調整，外面は横方向のケズリ調整で，下部はナデ調整で指頭圧痕が残る。外底は無調整で砂が付着する。174・175は上層より出土した土師質土器椀で，平高台を有する。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。176・177は上層より出土した土師質土器小皿である。176の調整は回転ナデで，見込にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。177は柱状高台を有する。調整は回転ナデとみられるが，内面は摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。178・179は播磨型の土師器釜で，口縁部外面に断面三角形を呈する鍔が付く。178は下層より出土した。内面が横方向のナデ調整，口縁部は横ナデ調整，外面には僅かにタタキ目が残る。外面には煤が付着する。179は上層より出土した。横方向のナデ調整及び横ナデ調整で，外面には煤が付着する。180は上層より出土した土師器甕で，内面は横方向のナデ調整及び横ナデ調整，口縁部外面はナデ調整で，指頭圧痕と一部にハケ調整の痕跡が残る。搬入品とみられる。181は上層より出土した須恵器椀で，底部には輪高台を貼付する。回転ナデ調整で，内面にはナデ調整を加え一部に火襷がみられる。高台は横方向のナデ調整，高台内はナデ調整である。182は上層より出土した須恵器甕で，内面は体部から頸部に横方向のナデ調整，口縁部は回転ナデ調整，体部外面は平行タタキ調整である。183は下層より出土した須恵器甕で，内面は横方向のナデ調整で，頸部には指頭圧痕が残る。外面は細かい平行タタキ調整である。184は上層より出土した土製品土錘で，紡錘形を呈する。摩耗するため調整は不明である。孔径



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を含む(SD－4)
2. 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトで，木片を多く含む(SD－4)
3. 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトで，1cm大の礫と粗粒砂のブロックを含む(SD－4)
4. オリーブ黒色(7.5Y3/2)極粗粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を非常に多く含む(SD－7)
5. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで，黄灰色(2.5Y4/1)シルトのブロックを多く含む(SD－7)
6. オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SD－7)
7. オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粗粒砂で，1～3cm大の礫を多く含む(SD－7)
8. オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトで，1cm大の礫を僅かに含む(SD－7)
9. オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SD－7)
10. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を少し含む(SD－7)
11. 暗オリーブ灰色(5Y4/3)中粒砂で，僅かにシルトを含み，粗粒砂を含む(SD－7)
12. オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を少し含む(SD－7)
13. オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SD－7)
14. 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を少し含む(SD－7)
15. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SD－7)

図25　SD－4・7中央部



遺構埋土
1. 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を含み，一部では酸化鉄を多く含む(SD－4)
2. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで，粗粒砂と炭化物を少し含む(SD－4)
3. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を含む(SD－4)
4. オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を少し含む(SD－4)
5. オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を含み，下部に葉と枝・木片が少し堆積する(SD－4)
6. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで，下部に木片が少し堆積する(SD－4)
7. オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトで，下部に粗粒砂の地山ブロックを多く含む(SD－4)
8. オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を少し含む(SD－7)
9. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，極粗粒砂と粗粒砂・1cm大の礫を多く含む(SD－7)
10. オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を少し含む(SD－7)

図26　SD－4・7東部

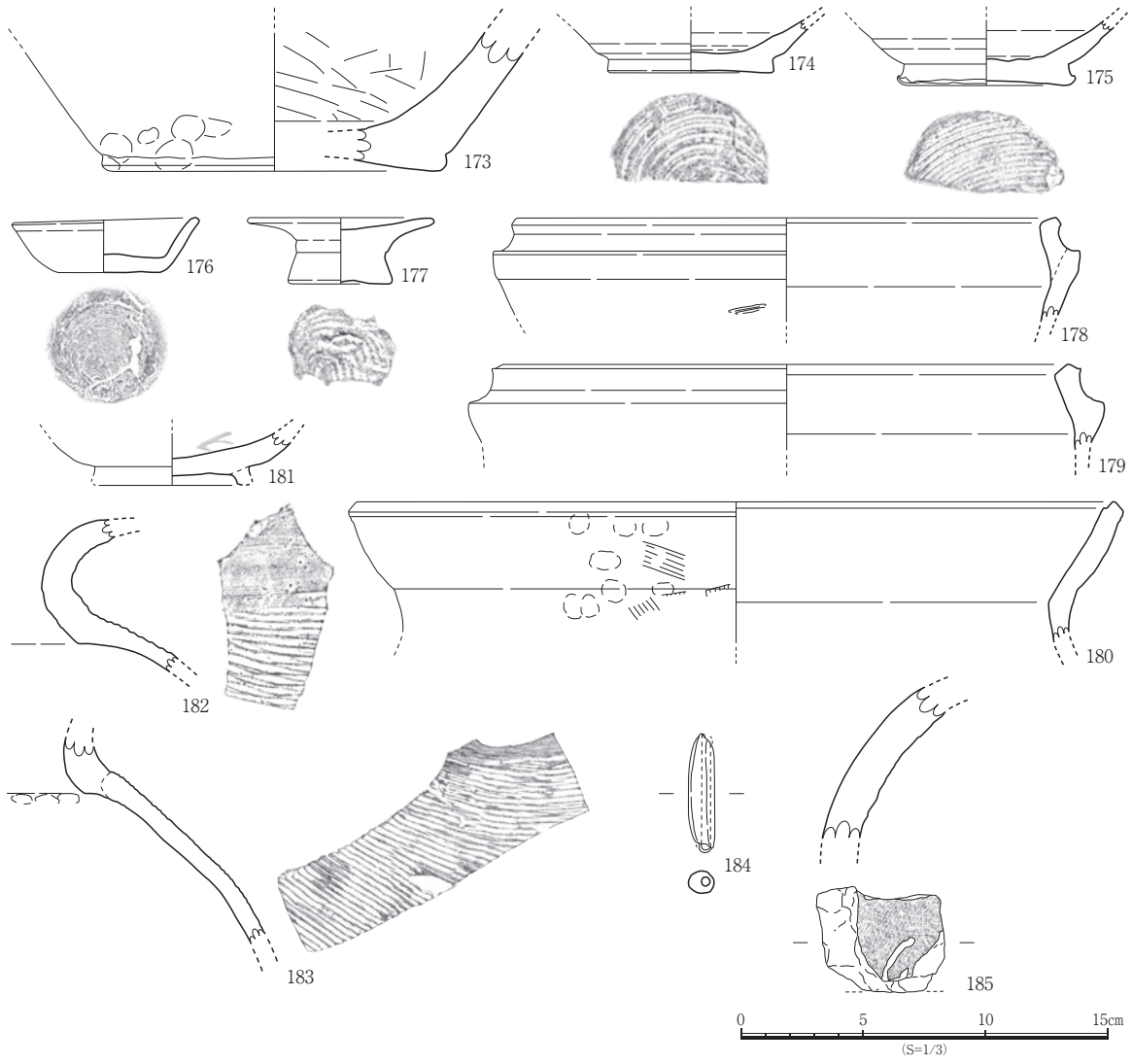


図27　SD－7出土遺物実測図

0.4cmを測る。185は上層より出土した古代または中世の丸瓦で，凹面には布目圧痕が残り，凸面は横方向のナデ調整を施す。

SD－8(遺構：図29　遺物：図28－186～203)

2区南西部で検出した東西方向の溝跡で，両端は調査区外に続き，SD－9に切られ，SD－6を切る。検出長8.12m，検出幅2.50m，深さ75cmを測る。基底面は東(0.423m)から西(0.388m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し，埋土は5層に分かれる。出土遺物は陶器2点(鉢1，細片1)，白磁碗3点，青磁片1点，土師質土器439点(椀27，杯12，小皿5，細片395)，土師器13点(釜1，細片12(1点布目痕あり))，須恵器13点(椀2，杯1，甕10)，瓦器3点(椀2，細片1)，瓦質土器釜1点，土製品土錘4点，人骨1点(頭蓋骨)，種1点がみられ，186～203の18点を図示した。

186は焼締陶器鉢で埋土1より出土した。全面に回転ナデ調整を施す。187は中国産の白磁碗で，埋土4より出土した。口縁部は僅かに外傾する。内面から外面下部まで白磁釉を施し，体部下部は回転ケズリ調整で無釉である。188～194は土師質土器椀である。188は埋土3より出土した椀で，平高台を有する。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。189は口縁端部が肥厚し

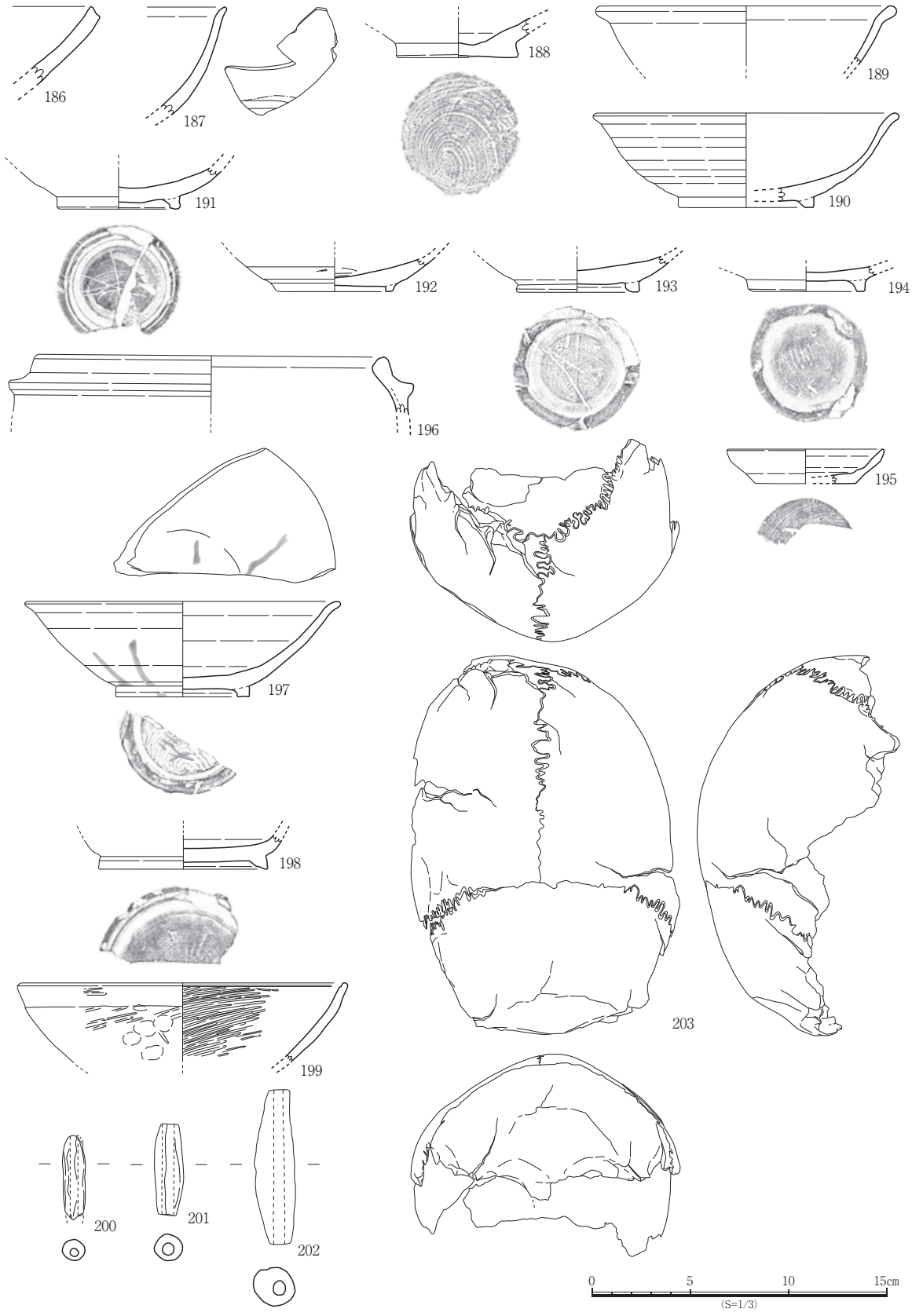
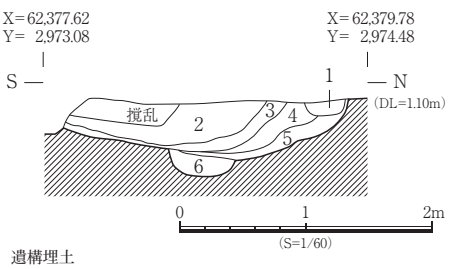


図28　SD－8出土遺物実測図

外傾する。著しく摩耗するため調整は不明である。190～194は底部に断面方形を呈する低い輪高台を貼付する。190は埋土2より出土した。回転ナデ調整の後，見込にナデ調整を加え，高台は横方向のナデ調整である。191は埋土2より出土した。高台が横方向のナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。高台内には線刻がみられる。内面と体部外面は著しく摩耗するため調整は不明である。192は体部外面に回転ケズリ調整，内面はヘラナデ調整とみられるが，著しく摩耗するため調整は不明瞭である。高台は横方向のナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。193は体部外面が回転ナデ調整で，内面は著しく摩耗するため調整は不明である。高台は横方向のナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。194は埋土3より出土した。内面が回転ナデ調整，高台は横方向のナデ調整，底部の切り離しは回転糸切りである。畳付に板状圧痕が残る。195は土師質土器小皿で，埋土4より出土した。調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。196は埋土4より出土した播磨型の土師器釜で，断面三角形の鍔を貼付する。調整は横ナデで，口縁部と鍔の下に煤が付着する。197は須恵器椀で，埋土2より出土した。底部には輪高台を貼付する。調整は回転ナデで，高台は横方向のナデ，底部の切り離しは回転糸切りである。内外面に火襷，高台内には墨書がみられる。198は須恵器杯で，埋土1より出土した。底部には断面三角形を呈する輪高台が付く。調整は回転ナデで，見込にナデを加える。高台は横方向のナデ調整で，高台内は回転ケズリ調整とみられ放射状に鉋痕が残る。199は楠葉型の瓦器椀で，埋土1より出土した。ナデ調整で指頭圧痕が残り，口縁部には横ナデ調整，内面には緻密な平行ミガキ調整，外面は口縁部にミガキ調整を施す。200～202は土製品土錘で，200は埋土1より，201は埋土2より，202はトレンチより出土した。紡錘形を呈し，調整はナデで，200には指頭圧痕が残る。203は人骨で，頭蓋骨である。埋土4より出土した。

SD－9(遺構：図29　遺物：図30－204・205)

2区南西部で検出した東西方向の溝跡で，両端は調査区外に続き，SD－8を切る。検出長18.06m，幅0.76m，深さ33cmを測る。基底面は東(1.067m)から西(0.926m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し，埋土はオリーブ黒色粗粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器片1点，土師質土器95点(椀3，杯4，小皿3，細片85)，土師器4点(甕1，細片3)，瓦質土器釜1点，木製品漆器椀1点，種14点がみられ，瓦質土器釜(204)と木製品



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を多く含む(SD－9)
2. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトで，粗粒砂と1cm大の礫を多く含む(SD－8)
3. 黒色(N1.5/0)中粒砂質シルトで，1cm大の礫を少し含む(SD－8)
4. 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を少し含む(SD－8)
5. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を多く含む(SD－8)
6. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，1～5cm大の礫を多く含む(SD－8)

図29　SD－8・9

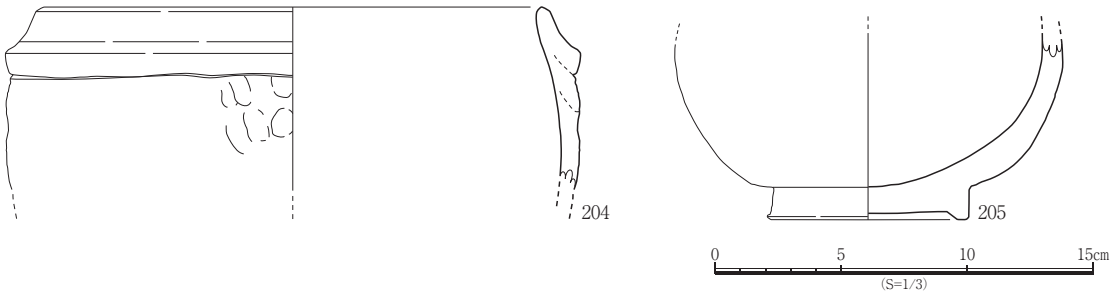


図30　SD－9出土遺物実測図

漆器椀(205)を図示した。204は土佐型の瓦質土器釜で，断面三角形を呈する扁平な鍔を貼付する。内面は横方向のナデ調整，口縁部は横ナデ調整，外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。体部外面には煤が付着する。205は木製品漆器椀である。大振りで，高台内の抉りは浅い。内外面とも黒塗である。

③ ピット

P－1

2区北西部で検出したピットで，平面形態は楕円形を呈し，長径36cm，短径31cm，深さ20cmを測る。埋土は灰色粘土質シルトで，中粒砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

P－2

2区北西部で検出したピットで，平面形態は円形を呈し，径34cm，深さ33cmを測る。埋土は灰色粘土質シルトで，中粒砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

(2) 江戸時代以降

この時期の遺構は全面で確認されたが，Ⅳ～Ⅵ区は調査前に建物があったため，著しく撹乱を受けていた。

① 掘立柱建物跡

SB－1(遺構：図31)

1区北西部で検出した南北棟掘立柱建物跡で，SD－16･17を切る。梁間1間(1.20m)，桁行2間(4.20m)を確認し，柱間寸法は梁間が1.20m，桁行が2.00mと2.20mを測る。柱穴は楕円形を呈し，径38～51cm，深さ13～21cmを測り，埋土は黄灰色粘土質シルトで，細粒砂と橙色礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。埋土よ

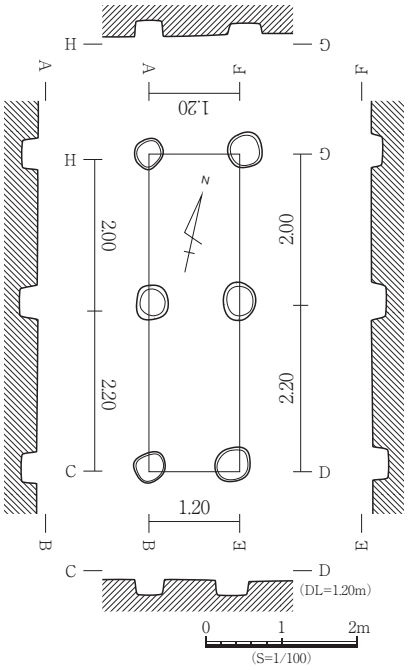


図31　SB－1

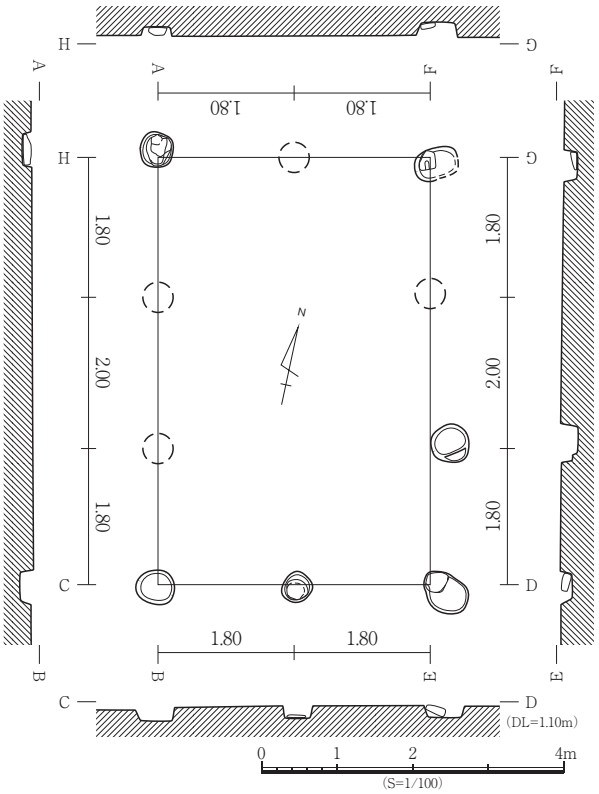


図32　SB－2

り近代の遺構である可能性も考えられる。

SB－2（遺構：図32）

1区南東部で検出した南北棟掘立柱建物跡である。梁間2間（3.60m），桁行3間（5.60m）を確認し，柱間寸法は梁間が1.80m，桁行が1.80mと2.00mを測る。柱穴は円形または楕円形を呈し，径36～68cm，深さ11～16cmを測り，埋土はオリーブ褐色粘土質シルトで，1cm大の礫を多く含んでいた。柱穴内には25～62cm大の扁平な石を礎板として使用しているものもみられた。出土遺物は北西隅の柱穴より陶器片が1点みられた。

② 塀・柵列跡

SA－1（遺構：図33）

1区北西部で検出した南北塀跡で，SD－16を切る。2間（3.70m）を検出し，柱間寸法は1.80mと1.90mを測る。柱穴は楕円形を呈し，径36～50cm，深さ11～26cm，柱径12cmを測り，埋土は黄灰色粘土質シルトで，細粒砂と橙色礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。埋土より近代の遺構の可能性も考えられる。

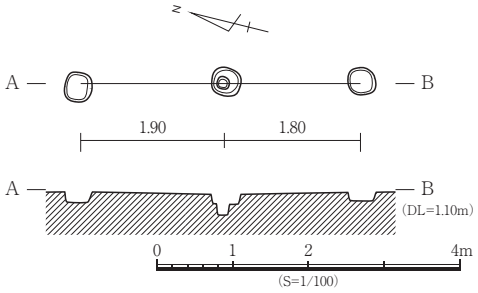


図33　SA－1

SA－2（遺構：図34）

1区南東部で検出した東西塀跡で，SK－20を切る。3間（5.10m）を検出し，柱間寸法は1.30mと1.90mを測る。柱穴は円形または楕円形を呈し，径30～35cm，深さ17～28cm，柱径9～11cmを測り，埋土はオリーブ褐色粘土質シルトで，1cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

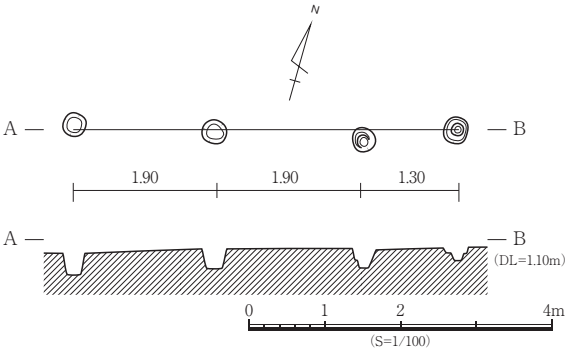


図34　SA－2

③ 土坑

SK－3（遺構：図35・36　遺物：図37－206～208）

1区北東部で検出した明治期の土坑で，SK－4とSX－1を切る。平面形態は楕円形を呈し，長径2.40m，短径2.30m，深さ54cmを測る。埋土中には径1.91mを測る桶が据えられており，一部で残存していた桶側は高さ42cmを測る。底板は厚さ8.5cm，幅約25cmの板材で，竹を楔状に加工して継がれていた。底板の板材の側面には「明治二巳年五月吉日　潮江村□中作人□□□□」の墨書がみられた。埋土は2層に分かれ，桶の下の埋土はオリーブ黒色粘土，桶側の外側は暗灰黄色粘土であった。出土遺物は陶器21点（碗2，皿1，鉢4，擂鉢2，甕1，台付灯明受皿2，鍋3，火鉢1，細片5），磁器9点（碗1，大皿1，瓶1，細片6），近代陶器瓶1点，近代磁器10点（碗2，皿7，鉢1），土師質土器2点（皿1，細片1），土師器8点（焜炉4，焙烙3，焼塩壺1），木製品4点（下駄1，桶側1，桶底1，加工木1），瓦10点（軒丸瓦2，丸瓦2，平瓦5，桟瓦1），獣骨がみられた。図示した遺物は埋土1から出土した磁器碗（206），掘方である埋土2から出土した陶器鉢（207）と陶器火鉢（208）である。

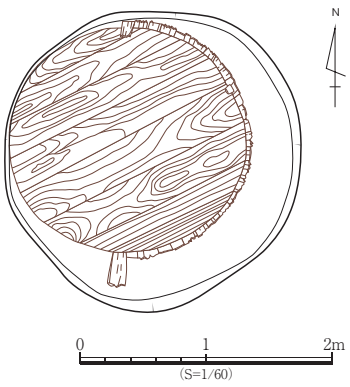
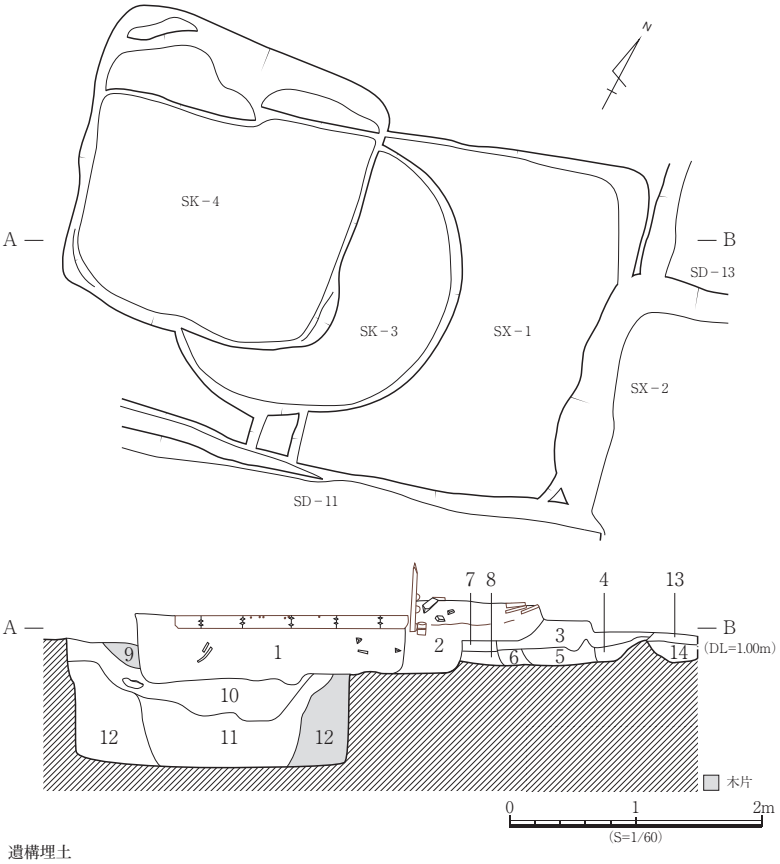


図35　SK－3桶出土図

206は肥前産の磁器染付望料碗である。見込に「恵」字と圏線，内面に四方襷文，外面は土坡に草文の染付がみられる。畳付は釉ハギし，砂が付着する。207は瀬戸・美濃産とみられる陶器鉢である。全面に白濁した釉を施し，釉には貫入が入る。外面には陽刻文がみられる。208は瀬戸・美濃産の陶器火鉢で，口縁部内面から高台まで緑釉を施す。外面には押印による文様と，陰刻による圏線がみられる。内面は回転ナデ調整で，一部に布目痕が残る。



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土で，細粒砂を多量に含み，0.5～2cm大の円礫と炭化物を含む(SK－3)
2. 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土で，細粒砂と0.2～0.5cm大の円礫を多く含み，酸化鉄が斑に入る(SK－3)
3. 明黄褐色(10YR7/6)シルト質粗粒砂(SX－1)
4. にぶい橙色(7.5Y6/4)シルト質粗粒砂(SX－1)
5. 灰色(5Y6/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SX－1)
6. 灰色(5Y6/1)粘土質シルトで，細粒砂を含む(SX－1)
7. 灰色(7.5Y6/1)粘土質シルト(SX－1)
8. 灰色(7.5Y5/1)シルト(SX－1)
9. 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂で，暗オリーブ色の粘土と0.5～2cm大の円礫・炭化物・木片を多く含む(SK－4)
10. 灰色(7.5Y4/1)粘土で，粗粒砂と黒色粘土のブロックを含む(SK－4)
11. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土で，黒色粘土のブロックを含む(SK－4)
12. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土で，細粒砂と0.5～1cm大の円礫・炭化物・木片を多く含み，底面に腐植の堆積(SK－4)
13. 褐灰色(10YR5/1)シルト質細粒砂(SD－13)
14. 黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルトで，粗粒砂を含む(SD－13)

図36　SK－3・4，SD－13，SX－1

SK－4（遺構：図36　遺物：図37－209～212）

1区北東部で検出した土坑で，SK－3に切られ，SX－1を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.51m，短辺2.27m，深さ1.07mを測る。埋土は4層に分かれ，最下層には炭化物と木片を多く含み，底面には腐植が敷かれていた。出土遺物には，陶器7点(碗1，皿3，細片3)，磁器2点(碗1，皿1)，白磁杯1点，青磁皿1点，土師質土器3点(皿2，小皿1)，土師器焼塩壺1点，瓦73点(軒丸瓦2，軒平瓦1，丸瓦16，平瓦54)がみられた。図示した遺物は，磁器碗(209)，白磁杯(210)，青磁皿(211)，土師器焼塩壺(212)と瓦3点(三巴文軒丸瓦：821・824，橘文軒平瓦：919)である。

209は肥前産の磁器染付丸碗である。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。外面には染付がみられ，高台内には砂が付着する。210は白磁杯とみられ，高台の4箇所をアーチ状に抉る。畳付を除き光沢のある白磁釉を施す。211は中国産の青磁中皿で，全面に青磁釉を施す。212は土師器焼塩壺である。輪積成形で，体部内面はナデ調整で指頭圧痕が残り，口縁部は横ナデ調整，外面は横方向のナデ調整である。

SK－5

1区北部で検出した瓦の廃棄土坑で，SD－11・12を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.35m，短辺2.20m，深さ77cmを測る。埋土は4層に分かれ，オリーブ黒色または灰色を呈する中粒砂質シル

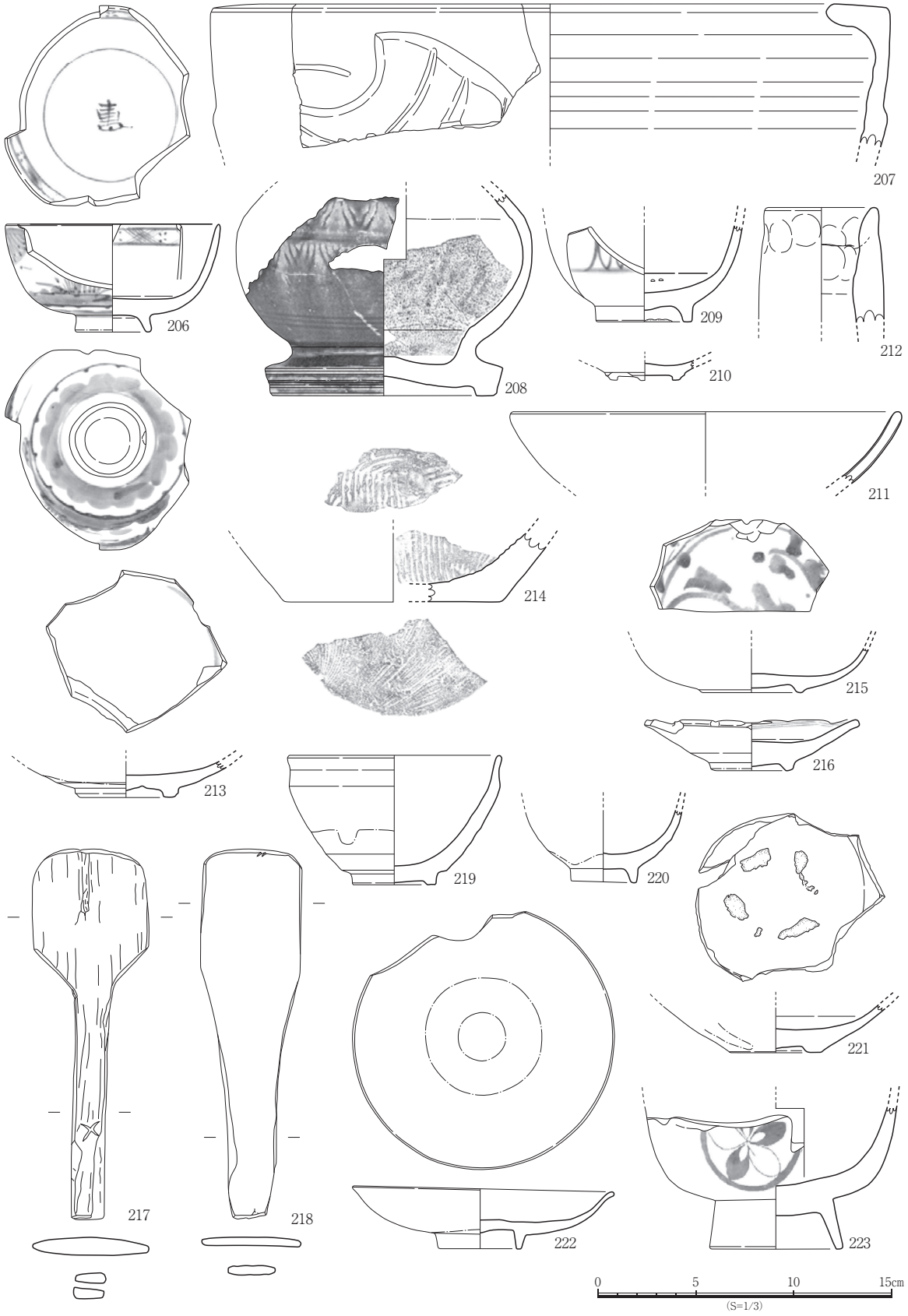


図37　SK－3・4・6～8出土遺物実測図

トで，多量の瓦を含んでいた。出土遺物には，瓦544点(軒丸瓦1，軒平瓦6，丸瓦84，平瓦453)がみられた。

SK－6(遺物：図37－213～218)

1区中央部で検出した瓦の廃棄土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.21m，短辺2.05m，深さ1.05mを測る。埋土はオリーブ黒色中粒砂質シルトで，多量の瓦を含んでいた。出土遺物には陶器11点(碗1，皿6，擂鉢1，細片3)，磁器2点(皿1，小杯1)，青磁皿1点，土師質土器片1点，木製品杓文字2点，瓦1,417点(軒丸瓦35，軒平瓦4，丸瓦260，平瓦1,117，道具瓦1)がみられた。図示した遺物は，陶器皿(213)と陶器擂鉢(214)，磁器皿(215)，青磁皿(216)，木製品杓文字(217・218)，瓦9点(三ツ葉柏文軒丸瓦：726～728・763，橘文軒平瓦：893・921・929，平瓦：1016，平瓦系道具瓦：1051)である。

213は肥前産の絵唐津小皿である。内面から高台付近まで灰釉を施し，高台は削り出しで無釉，畳付には砂が付着する。見込に僅かに鉄錆による文様がみられる。214は陶器擂鉢である。内面には擂目がみられ，外面は回転ケズリ調整，底部の切り離しは回転糸切りである。内面には鉄釉を施し，外面は鉄釉を刷毛塗したものとみられる。215は肥前産の磁器染付小皿である。内面には草花文とみられる染付と圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。216は中国産の青磁稜花皿で，内面から高台まで青磁釉を施し，高台内と畳付は無釉である。口縁部内面にはヘラ彫による陰刻文様がみられる。217・218は木製品で杓文字とみられる。217は端部をすべて面取し，身部は端を薄く加工する。柄部に「×」の刻書がみられる。218は端部を面取し，柄の下端は黒色化する。

SK－7(遺物：図37－219)

1区北部で検出した土坑で，北は調査区外へ続く。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ，検出長2.36m，全幅2.70m，深さ83cmを測る。埋土は2層に分かれ，上層は灰色極粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を多く含み，下層はオリーブ黒色極粗粒砂質シルトで，腐植と0.5cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には，陶器2点(碗1，擂鉢1)，土師器片1点，瓦40点(軒丸瓦1，丸瓦8，平瓦31)がみられ，陶器碗(219)と軒丸瓦(三ツ葉柏文軒丸瓦：748)を図示した。219は瀬戸産の陶器天目碗である。内面から体部外面まで光沢のある鉄釉を施す。高台は削り出しで無釉である。

SK－8(遺物：図37－220～223)

SK－7の西で検出した土坑で，北は調査区外へ続き，SK－9に切られる。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ，検出長2.29m，検出幅1.66m，深さ1.18mを測る。埋土は2層に分かれ，上層はオリーブ黒色粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を含み，下層はオリーブ黒色中粒砂質シルトで，0.3cm大の礫と腐植を多量に含んでいた。下層の上部には蓆を敷き詰めていた。出土遺物には，陶器8点(碗2，皿3，細片3)，磁器5点(皿1，細片4)，木製品漆器椀1点，瓦67点(軒丸瓦1，丸瓦10，平瓦56)がみられ，陶器碗(220)と陶器皿(221)，磁器皿(222)，木製品漆器椀(223)を図示した。

220は唐津系鉄釉陶器小碗で，内面から体部外面まで鉄釉を施す。高台は削り出しで無釉である。221は唐津系灰釉陶器小皿で，内面に灰釉を施す。釉は被熱し白色化する。見込には砂目痕が残る。外面は回転ナデ調整で，一部に灰釉が流れる。高台は削り出しで無釉である。222は肥前波佐見産の青磁小皿である。内面から体部外面まで青磁釉を施し，見込を蛇ノ目釉ハギする。高台は削り出しで無釉である。223は木製品漆器腰丸椀で，外面は黒塗，内面は赤塗である。外面には金彩の丸に花文がみられる。高台が高く，器底付近まで高台内を抉る。

SK－9(遺物：図40－224)

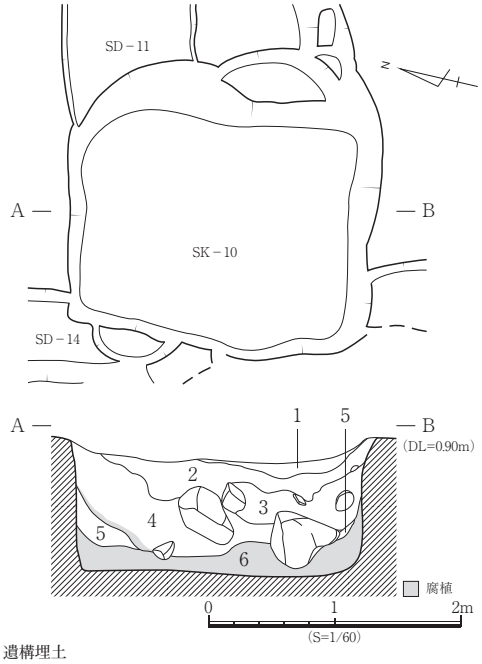
1区北部で検出した土坑で，北は調査区外へ続き，SK－8とSD－14を切る。平面形態は不整隅丸方形を呈するものとみられ，検出長2.20m，検出幅1.42m，深さ1.29mを測る。埋土は2層に分かれ，上層はオリーブ黒色粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫とシルトのブロックを含み，下層はオリーブ黒色粘土質シルトで，粗粒砂を多く含み，下部には蓆を敷き詰めており，腐植を多く含んでいた。出土遺物には，陶器皿1点，磁器皿1点，土師質土器片2点，瓦31点（丸瓦8，平瓦23）がみられ，磁器皿（224）を図示した。224は肥前産の磁器染付小皿である。折縁形で，見込には扇文とみられる染付を描く。畳付は釉ハギし，砂が付着する。

SK－10（遺構：図38　遺物：図40－225）

1区西部で検出した土坑で，SD－11・14を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.45m，短辺2.26m，深さ1.51mを測る。断面は方形を呈し，埋土は6層に分かれ，埋土中には腐植を敷き詰めた痕跡がみられ，最下層は腐植土であった。出土遺物には，磁器皿1点，木製品漆器椀1点，瓦11点（軒丸瓦1，丸瓦6，平瓦4）がみられ，木製品漆器椀（225）を図示した。225は木製品漆器腰丸椀で，内外面とも赤塗である。高台は低く，無文である。

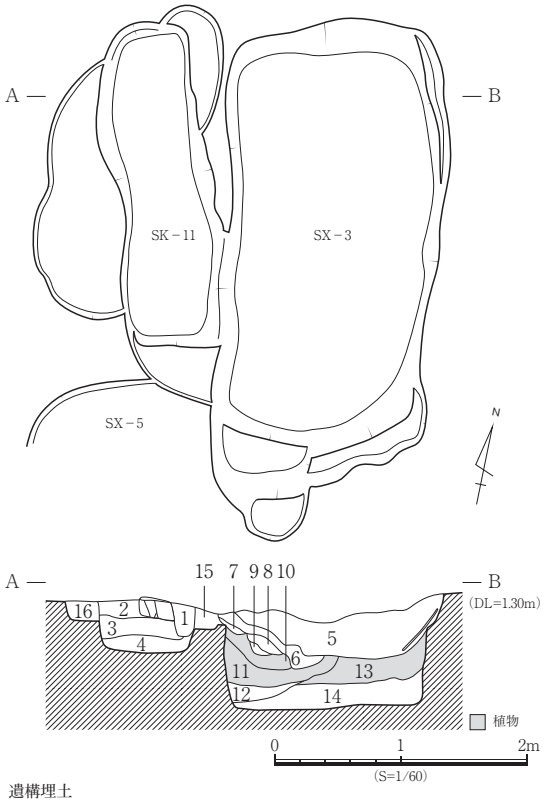
SK－11（遺構：図39　遺物：図40－226）

1区東部で検出した土坑で，SX－3・5とピットを切る。平面形態は溝状を呈し，全長2.92m，検



遺構埋土
1. にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質シルトで，0.5cm大の礫と暗オリーブ褐色・灰オリーブ色粘土のブロックを含む
2. 灰オリーブ色（5Y4/2）粘土質シルトで，中粒砂を含む
3. オリーブ黒色（10Y3/2）粘土質シルトで，0.5cm大の礫を多く含む
4. 暗オリーブ灰色（5GY3/1）粘土質シルトで，1～3cm大の礫を多く含み，暗オリーブ色粘土質シルトのブロックと下部に腐植の堆積を含む
5. 黄灰色（2.5Y4/1）粘土質シルトで，中粒砂を含む
6. 腐植土

図38　SK－10



遺構埋土
1. 暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を含む（ピット）
2. 褐灰色（10YR6/1）細粒砂質シルトで，0.5cm大の黄色礫を含む（SK－11）
3. 褐灰色（10YR5/1）シルト質極細粒砂で，0.3cm大の礫を少し含む（SK－11）
4. 灰オリーブ色（5Y6/2）シルト（SK－11）
5. 褐灰色（7.5Y4/1）中粒砂質シルトで，5cm大の礫を少量含み，瓦・木片を多量に含む（SX－3）
6. 灰黄褐色（10YR5/2）シルト質細粒砂で，3cm大の礫と木片を含む（SX－3）
7. 黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂質シルト（SX－3）
8. 灰色（7.5Y5/1）細粒砂質シルト（SX－3）
9. 黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂質シルト（SX－3）
10. 黄灰色（2.5Y4/1）シルト質中粒砂で，腐植を多く含む（SX－3）
11. 褐灰色（10YR4/1）中粒砂質シルトで，3cm大の礫と腐植を多く含む（SX－3）
12. 黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂質シルトで，5cm大の礫を少量含み，0.5cm大の礫と木片を含む（SX－3）
13. 黄灰色（2.5Y4/1）中粒砂質シルトで，1cm大の礫と木片を多く含む（SX－3）
14. 褐灰色（10YR4/1）シルト質極粗粒砂で，1cm大の礫を多量に含み，木片を含む（SX－3）
15. 灰色（N6/0）シルト（ピット）
16. 褐灰色（10YR6/1）粘土質シルト（ピット）

図39　SK－11，SX－3

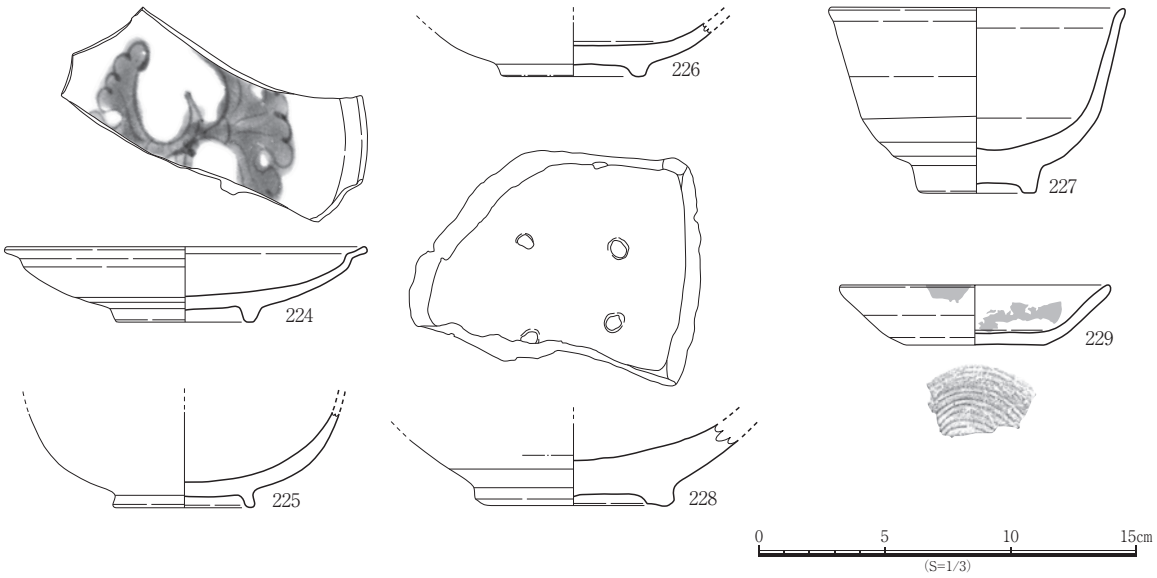


図40　SK－9～11・14出土遺物実測図

出幅0.82m，深さ40cmを測り，埋土は3層に分かれる。出土遺物は陶器2点（皿1，瓶1），瓦30点（軒丸瓦1，丸瓦24，平瓦5）がみられた。図示した遺物は，226の陶器皿で，唐津系灰釉陶器小皿である。全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。見込には段を有する。

SK－12

1区東部で検出した埋桶で，周囲を板材で方形に囲んでいた。板材で方形に囲まれた範囲は幅約70cm，深さ28cm，桶は径44cmを測り，桶底には内側から竹製の栓が差し込んだ状態であった。埋土は灰色粘土質シルトで，桶内からは磁器碗1点が出土している。

SK－13（遺構：図41）

1区東部で検出した土坑で，SX－5に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.35m，短辺1.93m，深さ36cmを測る。埋土は2層に分かれ，上層が黒褐色極細粒砂質シルト，下層が灰色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SK－14

（遺構：図42　遺物：図40－227～229）

1区中央で検出した土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し，西は一段浅くなっている。長辺2.55m，短辺2.30m，

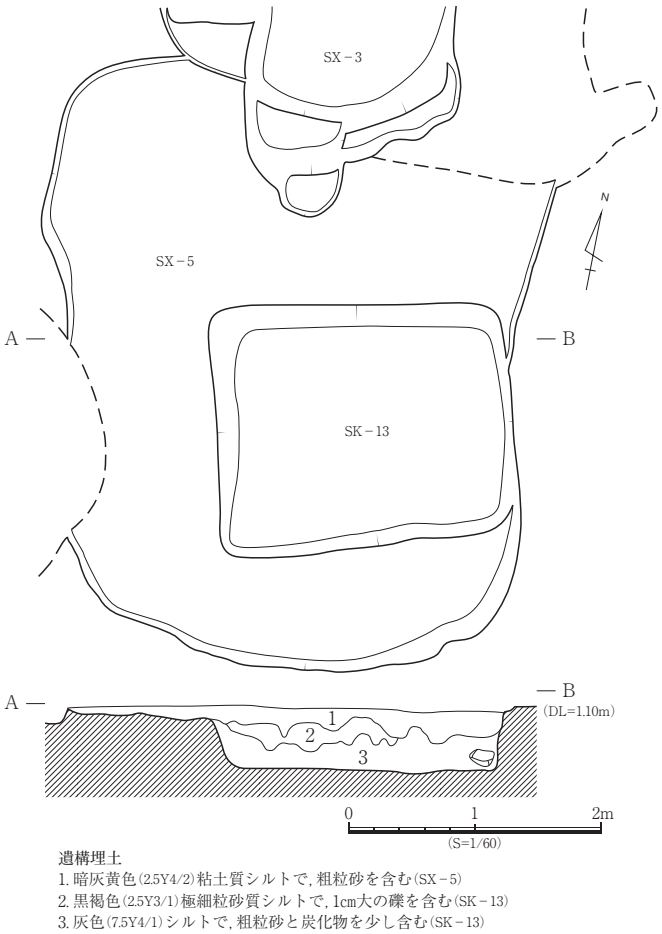
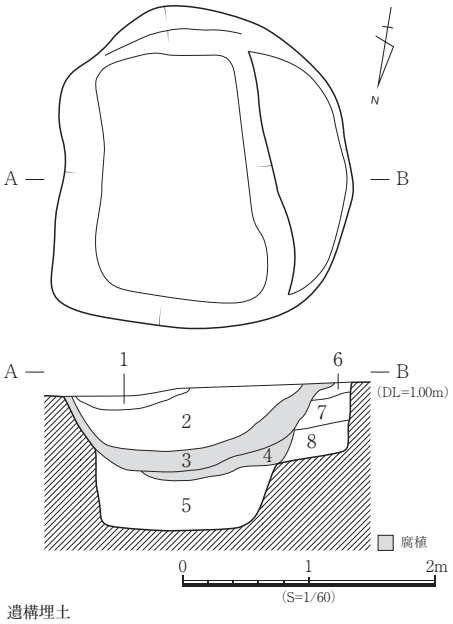


図41　SK－13，SX－5

深さ1.17mを測り，埋土は8層に分かれる。出土遺物には，陶器8点（碗1，皿1，鉢1，擂鉢2，細片3），磁器3点（碗1，皿1，細片1），土師質土器3点（皿1，小皿2），瓦質土器片3点，木製品漆器蓋1点，瓦109点（軒丸瓦4，丸瓦23，平瓦82），獣骨がみられた。図示した遺物は，陶器碗（227）と陶器皿（228），土師質土器皿（229）である。227は唐津系灰釉陶器中碗である。全面に光沢のある灰釉を施し，畳付は釉ハギする。釉には貫入が入る。228は唐津系灰釉陶器中皿で，内面から体部外面に灰釉を施し，高台は削り出しで，無釉である。見込に胎土目痕が残る。229は土師質土器皿である。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。内外面に煤が付着する。



遺構埋土
1. 暗緑灰色（7.5GY3/1）砂礫
2. 灰色（7.5Y4/1）粘土質シルトで，下部に粗粒砂を多く含む
3. 黒褐色（7.5YR3/1）腐植土で，1～3cm大の円礫を含み，下部の一部に漆喰の堆積が見られる
4. オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土質シルトで，粗粒砂と腐植の互層
5. 灰色（5Y4/1）粘土質シルトで，黒色中粒砂のブロックを含む
6. 灰色（7.5Y4/1）粘土質シルトで，中粒砂と灰オリーブ色粘土質シルトのブロックを多く含む
7. 灰色（5Y5/1）粘土質シルト
8. 黄灰色（2.5Y5/1）粘土質シルトで，酸化鉄を含む

図42　SK－14

SK－15（遺物：図43－230・231）

1区中央で検出した瓦の廃棄土坑で，SK－16を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.80m，短辺1.84m，深さ1.15mを測る。埋土は灰色粗粒砂質シルトで，3～5cm大の礫と多量の瓦を含んでいた。出土遺物には，陶器4点（碗1，皿1，擂鉢1，細片1），磁器片5点，土師質土器皿1点，瓦618点（軒丸瓦20，軒平瓦13，丸瓦137，平瓦445，道具瓦3），獣骨，鉄滓がみられた。図示した遺物は，陶器碗（230）と陶器擂鉢（231），瓦8点（三ツ葉柏文軒丸瓦：721・751・755・767，橘文軒平瓦：927，丸瓦：980，丸瓦系道具瓦：1045・1048）である。230は肥前産の陶器丸碗である。高台に三角形の切り込みを入れる。全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。231は陶器擂鉢である。回転ナデ調整の後，外面体部下半には回転ケズリ調整を加え，内面には12条単位の擂目を付ける。全面に鉄釉を施す。

SK－16（遺構：図44）

1区中央で検出した土坑で，SK－15に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し，検出長1.82m，短辺1.44m，深さ27cmを測る。埋土は4層に分かれ，中層には腐植を含んでいた。出土遺物には，漆

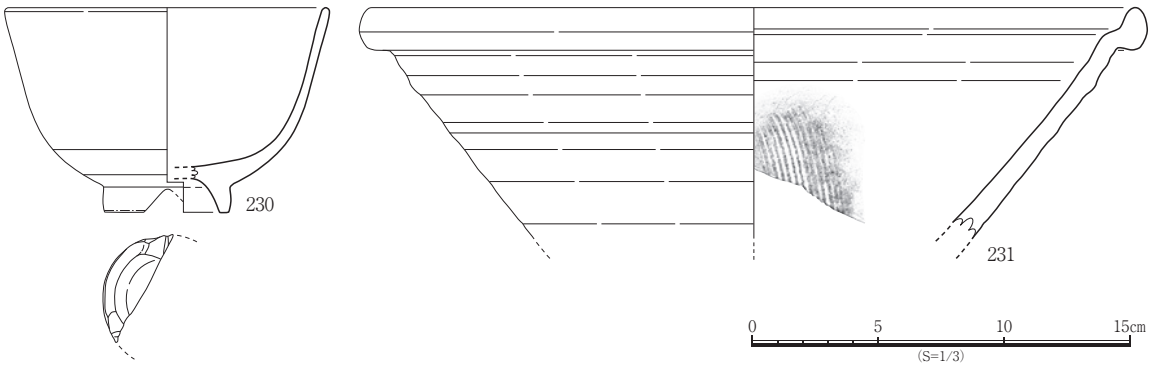


図43　SK－15出土遺物実測図

器椀とみられる木製品1点と平瓦5点がみられた。

SK－17(遺構：図46　遺物：図45－232・233)

1区中央で検出した瓦の廃棄土坑で，南は撹乱に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し，検出長2.25m，短辺2.23m，深さ92cmを測る。埋土は3層に分かれ，中層は瓦を多量に含んでいた。出土遺物には，陶器9点(碗1，皿2，匣鉢1，細片5)，磁器19点(碗6，皿3，水滴1，細片9)，青磁碗1点，土師質土器4点(皿1，細片3)，土師器2点(焼塩壺蓋1，細片1)，瓦質土器焙烙1点，木製品漆器椀2点，瓦6,518点(軒丸瓦75，軒平瓦62，鬼瓦2，鳥衾瓦2，丸瓦1,432，平瓦4,939，道具瓦6)がみられた。図示した遺物は，磁器碗(232)と土師器焼塩壺蓋(233)，瓦21点(三ツ葉柏文軒丸瓦：730・754・764・779・780・792，三巴文軒丸瓦：803・820，三葉文軒平瓦：855・871・885，橘文軒平瓦：896・908，丁字文軒平瓦：937，鬼瓦：962，丸瓦：983，平瓦：996・997・1043，丸瓦系道具瓦：1047，平瓦系道具瓦：1057)である。232は肥前産の磁器染付小碗である。外面には唐草文と圏線の染付がみられる。畳付は釉ハギし，砂が付着する。233は土師器焼塩壺蓋である。ナデ調整で，口縁部は横ナデ調整である。天井部外面には板状圧痕が残る。

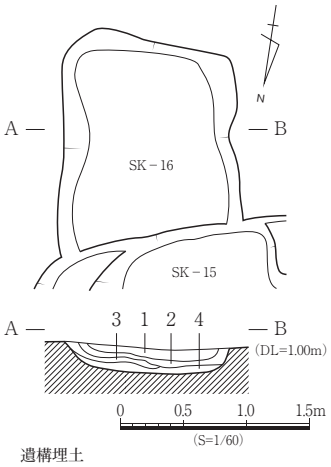


図44　SK－16

SK－18(遺構：図47　遺物：図48－234～239)

1区中央で検出した土坑で，撹乱に切られ，SK－19を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.43m，短辺2.32m，深さ78cmを測る。埋土は6層に分かれ，中層には腐植を多く含んでいた。出土遺物には，陶器3点(皿2，細片1)，磁器4点(碗1，皿1，細片2)，青花碗1点，土師質土器片1点，土師器鉢1点，木製品3点(漆器椀1，杓文字1，漆器栓1)，瓦45点(軒丸瓦2，丸瓦13，平瓦30)がみられた。図示した遺物は，陶器皿(234)と青花碗(235)，土師器鉢(236)，木製品漆器椀(237)，木製品杓文字(238)，木製品漆器栓(239)である。

234は唐津系灰釉陶器溝縁小皿で，全面に灰釉

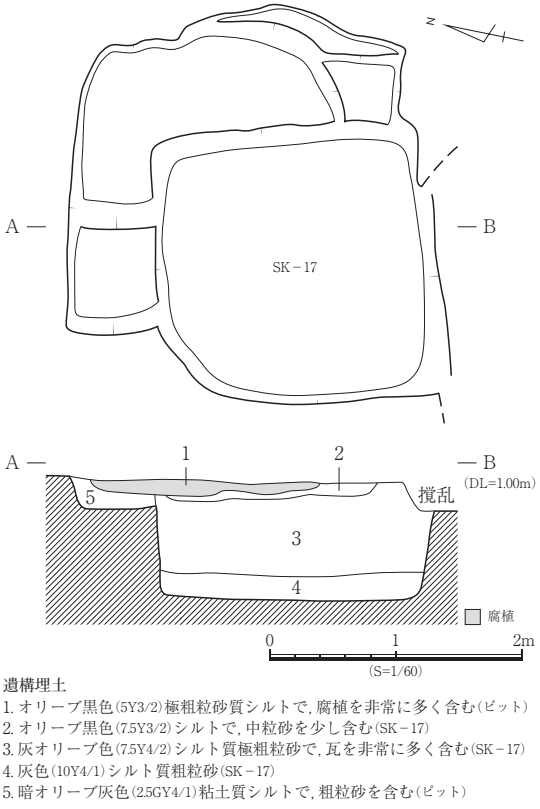


図46　SK－17

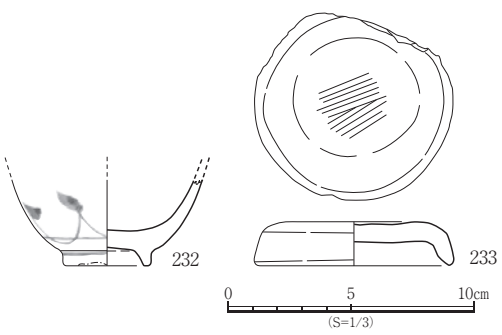


図45　SK－17出土遺物実測図

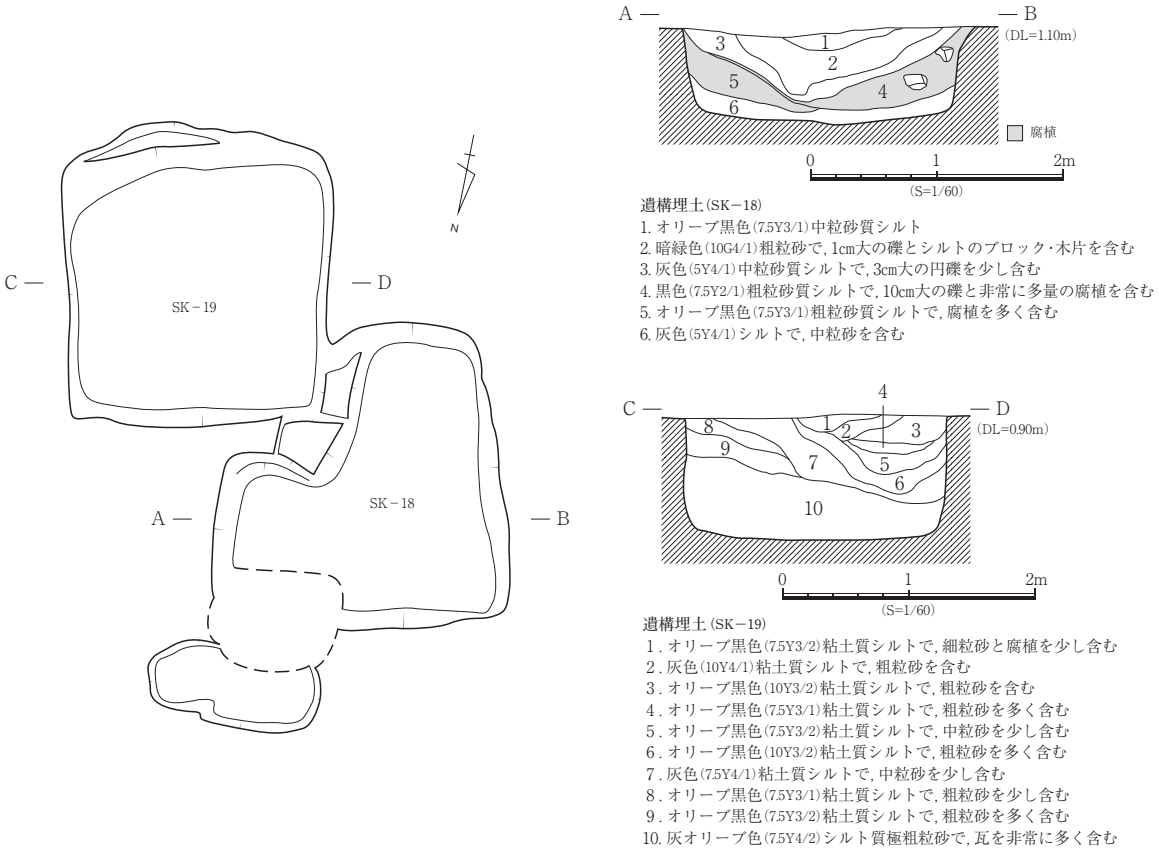


図47　SK－18・19

を施す。見込と畳付に砂目痕が残る。235は青花碗で，全面に透明釉を施す。見込には濃地に唐草文と圏線，外面は濃地に花と唐草文・圏線，高台内には圏線の染付がみられる。畳付を除き透明釉を施す。236は土師器台付鉢で，胎土は粗くスサを多く含む。内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面は一部に横方向のナデ調整がみられるが，摩耗するため調整は不明瞭である。窯道具か。237は木製品漆器椀である。外面は黒塗，内面は赤塗で，無文である。238は木製品杓文字で完存する。端部はすべて面取する。先端は若干摩耗する。239は木製品漆器栓で，断面は頭部が八角形，軸部が円形を呈する。縦方向の加工痕が残る。全面に薄く黒塗を施す。

SK－19(遺構：図47　遺物：図48－240～242)

1区中央で検出した瓦の廃棄土坑で，SK－18に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.43m，短辺2.07m，深さ1.03mを測る。埋土は10層に分かれ，下層は瓦を多量に含んでいた。出土遺物には，陶器8点(皿3，擂鉢1，甕1，細片3)，磁器3点(碗1，細片2)，土師質土器小皿1点，土師器釜1点，木製品漆器椀1点，瓦2,151点(軒丸瓦63，軒平瓦27，鳥衾瓦1，丸瓦629，平瓦1,429，道具瓦2)がみられた。図示した遺物は，陶器甕(240)と磁器碗(241)，土師器釜(242)，瓦6点(三ツ葉柏文軒丸瓦：750・753・776，橘文軒平瓦：918，平瓦：1001，平瓦系道具瓦：1062)である。240は肥前産の焼締陶器甕である。回転ナデ調整を施し，口縁端部を除き錆釉を掛ける。241は肥前産の磁器染付丸碗で，内面から高台外面まで透明釉を施し，高台内は削り出しで無釉である。外面には圏線と染付の一部が残る。242は播磨型の土師器釜である。口縁部外面に断面三角形の鍔を貼付し，口縁部は横ナデ調整，外面はタタキ調整を施す。内面は摩耗するため調整は不明である。

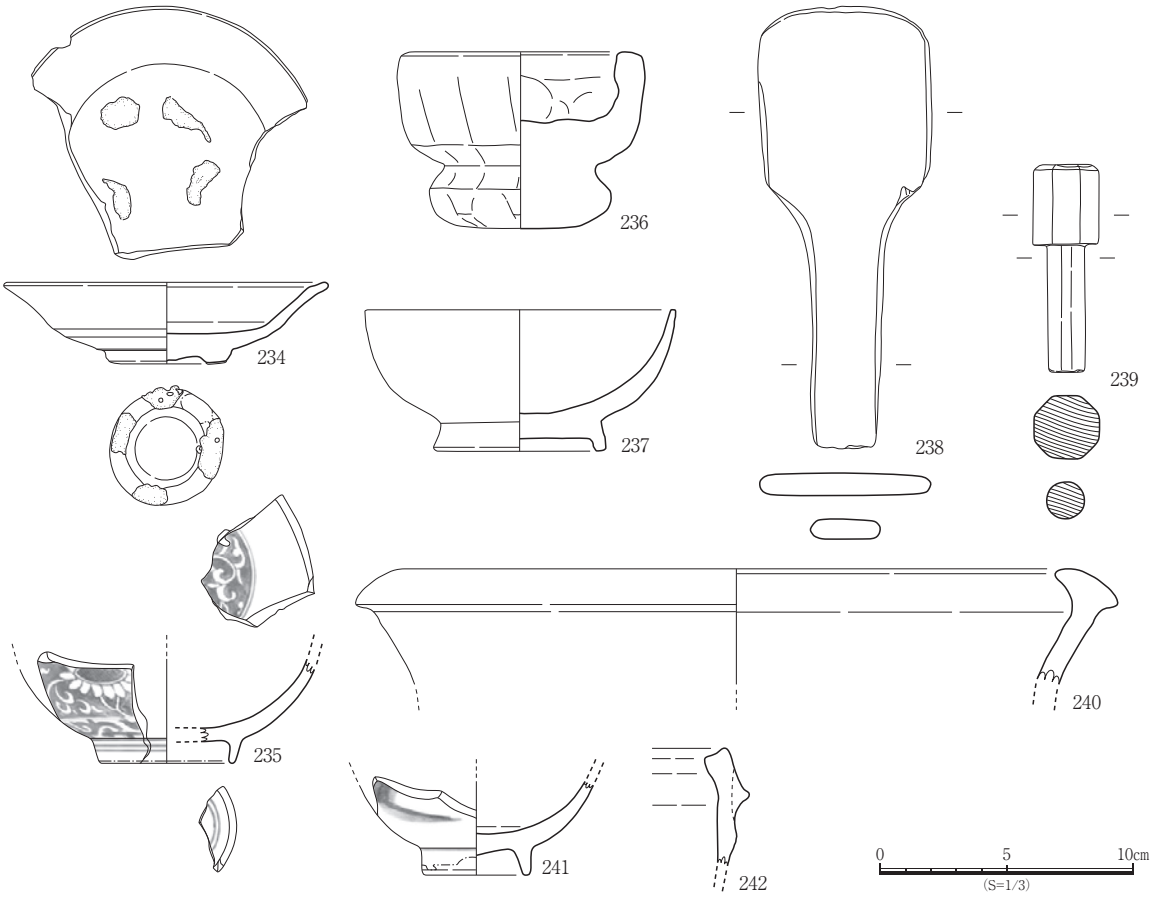


図48　SK－18・19出土遺物実測図

SK－20(遺構：図49)

1区南東部で検出した土坑で，SA－2に切られる。平面形態は楕円形を呈し，長径2.97m，短径1.71m，深さ12cmを測る。断面は皿状を呈し，埋土は2層に分かれ，上層には腐植を非常に多く含んでいた。出土遺物には，磁器片4点，瓦15点(丸瓦1，平瓦14)がみられた。

SK－21(遺構：図50　遺物：図52－243)

1区南部で検出した瓦の廃棄土坑である。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺2.30m，短辺2.22m，深さ65cmを測る。埋土は5層に分かれ，上層には腐植を含んでいた。出土遺物には，陶器9点(皿1，匣鉢1，細片7)，磁器8点(皿2，猪口1，瓶1，細片4)，土師器焜炉1点，木製品桶蓋または底板1点，瓦571点(軒丸瓦17，軒平瓦10，鬼瓦1，丸瓦132，平瓦410，道具瓦1)がみられた。図示した遺物は，陶器匣鉢(243)と瓦6点(三ツ葉柏文軒丸瓦：784，三巴文軒丸瓦：835，橘文軒平瓦：930，花文軒平瓦：943，鬼瓦：967，平瓦系道具瓦：1063)である。243は焼締陶器匣鉢である。回転ナデ調整で，体部内面は回転ケズリ調整を加える。外底は無調整で砂が付着し，

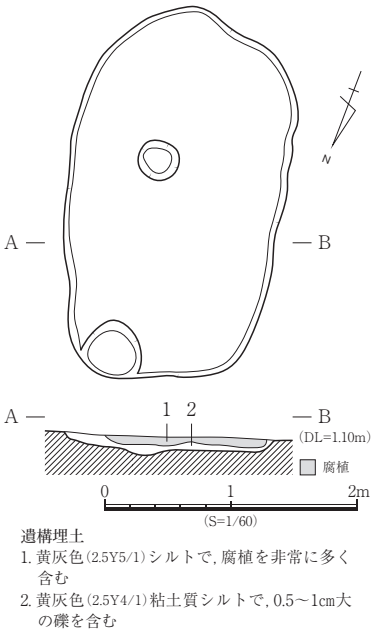
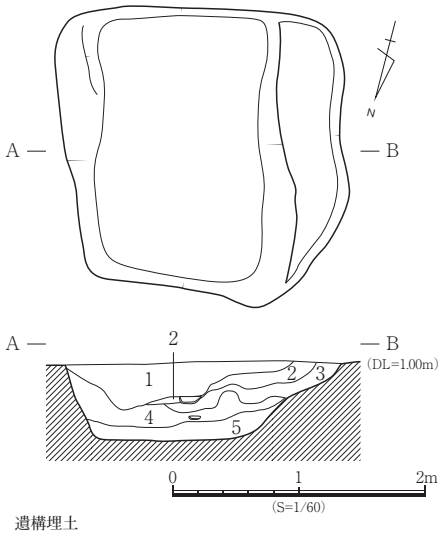


図49　SK－20

板状圧痕が残る。

SK－22

1区南西部で検出した瓦の廃棄土坑である。平面形態は不整方形を呈し，長辺2.38m，短辺2.30m，深さ1.15mを測る。埋土は暗オリーブ灰色シルト質極粗粒砂で，瓦を多量に含んでいた。出土遺物には，磁器片1点，瓦4,648点（軒丸瓦62，軒平瓦50，鬼瓦3，鳥衾瓦1，丸瓦953，平瓦3,575，道具瓦4）がみられた。図示した遺物は，瓦26点（三ツ葉柏文軒丸瓦：724・725・731・735・752・765・768，三巴文軒丸瓦：793・806，三葉文軒平瓦：856・865，橘文軒平瓦：909・910，丁字文軒平瓦：938・939，鬼瓦：957・958・964，丸瓦：971・978，平瓦：991・1000・1011，丸瓦系道具瓦：1046，平瓦系道具瓦：1050・1054）である。

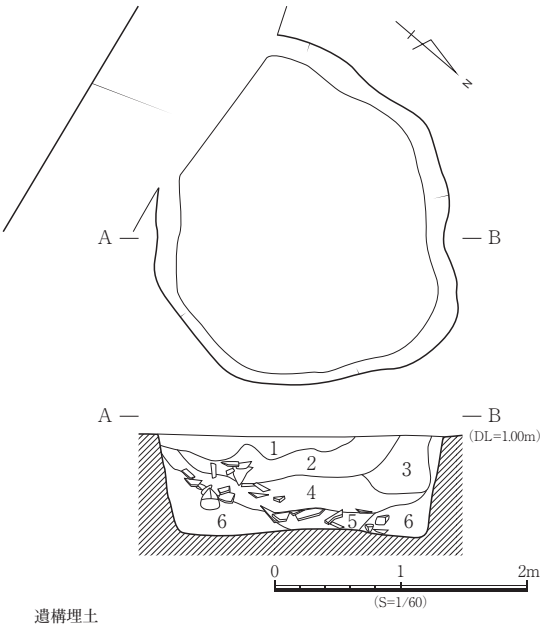


遺構埋土
1. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルトで，中粒砂を多量に含み，瓦と少量の腐植を含む
2. 暗緑灰色(10GY3/1)粘土質シルトで，細粒砂をブロック状に含む
3. 褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト
4. オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルトで，中粒砂を多く含む
5. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトで，黒褐色粘土質シルトのブロックを含む

図50　SK－21

SK－23（遺構：図51　遺物：図52－244～246）

1区南西部で検出した瓦の廃棄土坑で，南は調査区外へ続く。平面形態は不整隅丸方形を呈するものとみられ，検出長2.74m，短辺2.26m，深さ94cmを測る。埋土は6層に分かれ，瓦を多量に含んでいた。出土遺物には，陶器3点（皿2，細片1），磁器3点（碗1，細片2），瓦2,066点（軒丸瓦21，軒平瓦34，丸瓦434，平瓦1,576，道具瓦1）がみられ，上層から出土した陶器皿（244・245）と磁器碗（246），瓦12点（三ツ葉柏文軒丸瓦：746，三巴文軒丸瓦：798・807，三葉文軒平瓦：854・884，橘文軒平瓦：898・911，丸瓦：972・979，平瓦：990・998，平瓦系道具瓦：1056）を図示した。244は唐津系灰釉陶器皿で，内面から体部外面まで灰釉を施す。見込には砂目痕がみられる。245は陶器皿で，折縁形を呈する。内外面に光沢のある灰釉を施し，オリーブ色に発色する。外面には凹線が2条巡る。246は肥前産の青磁中碗である。内面から高台外面まで青磁釉を施し，畳付と高台内は無釉である。



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，1cm大の礫を含む
2. オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂質シルトで，瓦を多く含む
3. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を多く含む
4. オリーブ黒色(10Y3/1)シルトで，少量の細粒砂と多量の瓦を含む
5. オリーブ黒色(7.5Y2/2)シルト質細粒砂で，瓦を多く含む
6. 灰色(7.5Y4/1)シルトで，粗粒砂を少し含む

図51　SK－23

SK－24（遺物：図52－247～249）

1区南西部で検出した瓦の廃棄土坑で，西は撹乱に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ，検出長1.96m，検出幅0.92m，深さ88cmを測る。埋土は2層に分かれ，上層がオリーブ黒色極粗粒砂質シルトで，5cm大の礫を含み，下部には木片を多く含んでいた。下層は灰色粘土質シルトであった。出土遺物には，陶器4点（碗1，皿1，擂鉢1，細片1），磁器2点（小杯1，細片1），瓦160

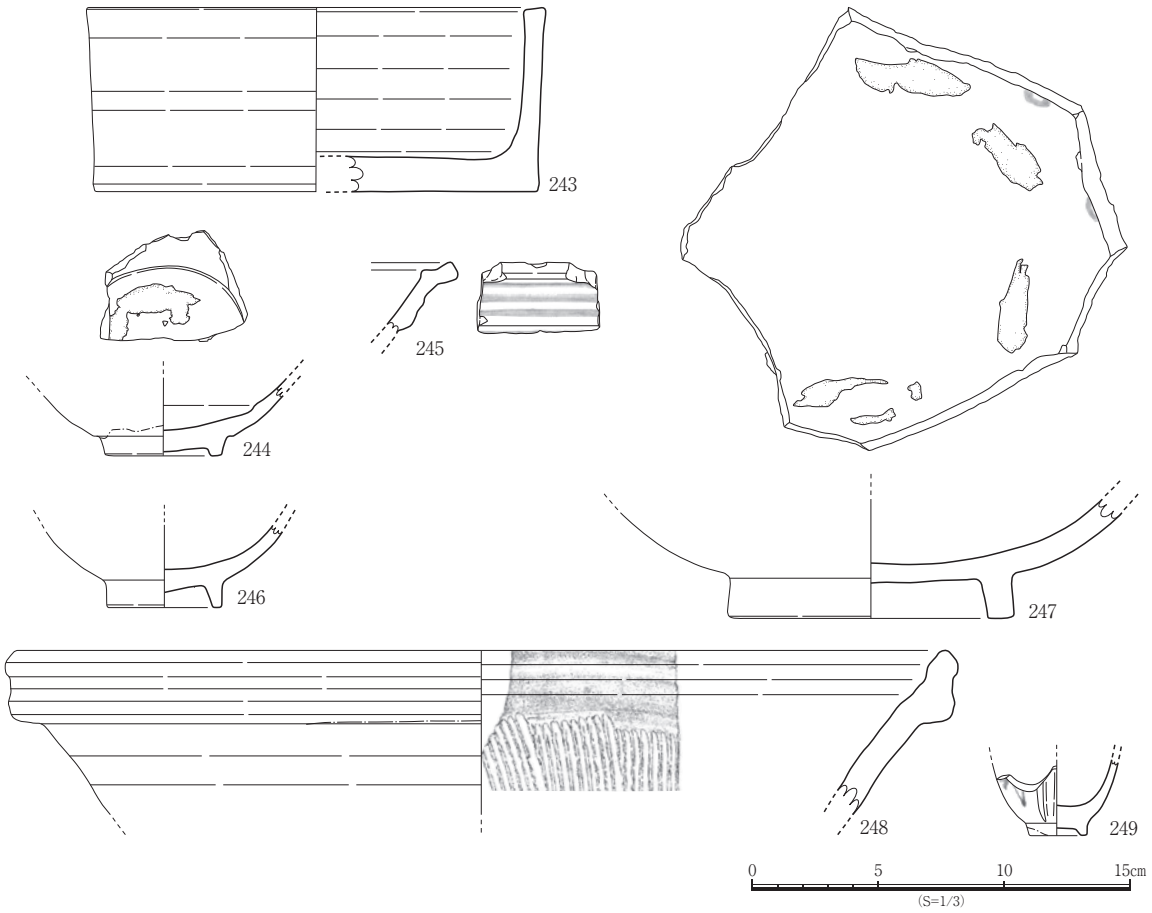


図52　SK－21・23・24出土遺物実測図

点(軒丸瓦7，軒平瓦2，丸瓦41，平瓦110)がみられ，陶器皿(247)と陶器擂鉢(248)，磁器小杯(249)を図示した。247は肥前産の絵唐津中皿である。全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギし，高台内側には砂が付着する。見込には鉄錆による文様と砂目痕がみられる。248は備前焼擂鉢である。回転ナデ調整で，内面には10条単位の擂目がみられ，口縁部外面には鉄釉を施す。249は肥前産の磁器染付小杯である。内面から高台付近まで透明釉を施し，高台は削り出しで無釉である。外面には丸彫による縞文と，染付の一部が残る。

SK－25

1区南部で検出した土坑で，南は調査区外へ続き，SK－26を切る。平面形態は楕円形を呈するものとみられ，検出長1.29m，検出幅1.06m，深さ35cmを測る。埋土は灰色細粒砂質シルトで，グライ化していた。出土遺物は瓦10点(丸瓦2，平瓦8)がみられた。

SK－26

1区南部で検出した土坑で，南は調査区外へ続き，SK－25に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ，検出長2.01m，検出幅0.98m，深さ32cmを測る。埋土は灰色細粒砂質シルトで，グライ化していた。出土遺物は皆無であった。

SK－27

2区北西部で検出した土坑で，北と東は調査区外へ続き，SK－28に切られ，P－6を切る。平面形態は隅丸長方形を呈するものとみられ，検出長1.78m，検出幅1.67m，深さ10cmを測る。埋土は褐

色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器2点(杯1，細片1)，瓦4点(丸瓦1，平瓦1，道具瓦1，不明1)がみられ，平瓦系道具瓦(1069)を図示した。

SK－28(遺物：図54－250)

2区北西部で検出した土坑で，SK－27とP－6を切る。平面形態は楕円形を呈し，長径1.14m，短径0.78m，深さ62cm，柱痕径33cmを測る。埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器2点(碗1，瓶1)，磁器2点(小杯1，皿1)，瓦12点(丸瓦3，平瓦9)がみられ，陶器瓶(250)と平瓦(1022・1036)を図示した。**250**は陶器瓶で，円筒形である。回転ナデ調整のち，外面に錆釉を施し，内面には錆釉が流れ，外底は削り出しで無釉である。

SK－29(遺構：図53　遺物：図54－251)

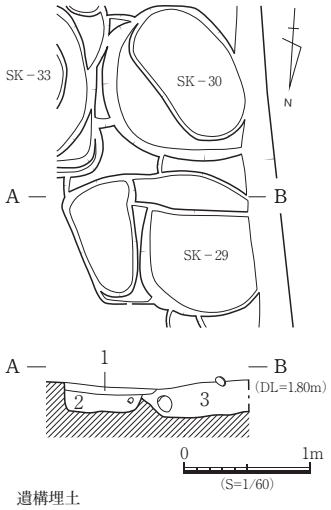
2区北西部で検出した土坑で，西は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられ，検出長94cm，検出幅84cm，深さ48cmを測る。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を少し含んでいた。出土遺物には陶器碗2点，磁器小杯1点，瓦12点(丸瓦1，平瓦10，不明1)がみられ，陶器碗(251)と平瓦(1018)を図示した。**251**は肥前産の陶胎染付丸碗で，全面に透明釉を施す。外面には松文とみられる文様を描く。

SK－30(遺構：図53)

2区北西部で検出した土坑で，西は調査区外へ続く。平面形態は楕円形を呈し，長径1.23m，検出幅0.72m，深さ47cmを測る。埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器5点(甕4，細片1)，磁器碗1点，瓦11点(丸瓦3，平瓦8)がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SK－31(遺構：図55　遺物：図54－252)

2区西部で検出した土坑で，SK－32を切る。平面形態は不整隅丸方形を呈し，長辺1.23m，短辺0.81m，深さ38cmを測る。埋土は4層に分かれ，埋土3の上で径67cmを測る桶底が出土した。出土遺物には陶器2点



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルトで，20cm大の礫を含む(土坑)
2. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで，粗粒砂と炭化物を含む(ピット)
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を少し含む(SK－29)

図53　SK－29・30

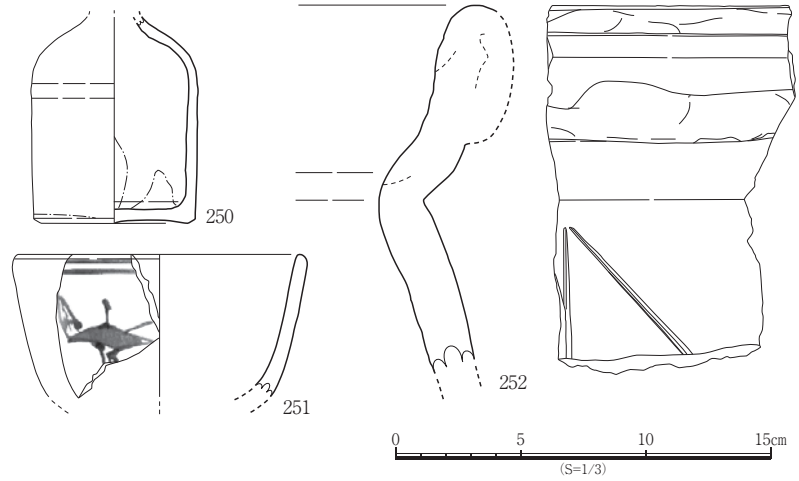
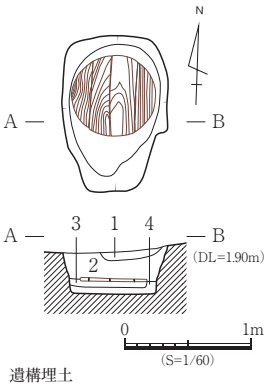


図54　SK－28・29・31出土遺物実測図



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む
2. にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂質シルトで，5cm大の礫と橙色シルトのブロックを少し含む
3. 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫と炭化物を含む
4. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで，極粗粒砂と1cm大の礫・炭化物を含む

図55　SK－31

(甕1，鍋1)，瓦13点(丸瓦4，平瓦4，道具瓦5)がみられ，陶器甕(252)と丸瓦(984)，平瓦(994)を図示した。252は備前焼甕で，口縁部は接合箇所で剥離し，玉縁状を呈するものとみられる。全面に回転ナデ調整を施し，肩部には線刻がみられる。

SK－32

2区北西部で検出した土坑で，SK－31に切られ，SK－33を切る。平面形態は不整方形を呈し，検出長96cm，短辺85cm，深さ65cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器椀1点，瓦7点(丸瓦1，平瓦4，桟瓦2)がみられ，平瓦(1038)と桟瓦(1039)を図示した。

SK－33(遺構：図56　遺物：図57－253～258)

2区北西部で検出した土坑で，SK－32に切られる。平面形態は楕円形を呈し，長径1.25m，短径1.08m，深さ63cmを測る。埋土は2層に分かれ，上層には径88cmの桶側が残存していた。出土遺物には陶器2点(擂鉢1，甕1)，磁器2点(碗1，小杯1)，土師質土器片1点，土師器片1点，木製品3点(木簡1，桶1，加工木1)，瓦29点(丸瓦6，平瓦23)がみられ，陶器擂鉢(253)と陶器甕(254)，磁器碗(255)，磁器小杯(256)，木製品木簡(257)，木製品加工木(258)を図示した。

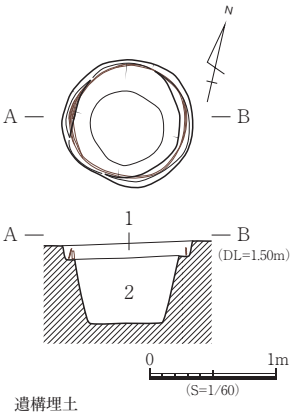


図56　SK－33

253は上層より出土した肥前産の陶器擂鉢で，口縁部はＴ字形を呈する。回転ナデ調整で，口縁部には鉄釉を施す。254は下層より出土した肥前産の焼締陶器甕である。内面は回転ナデ調整後の格子目の当具痕が残り，ナデ調整を加える。体部外面はタタキ後ナデ調整，外底は無調整である。255は下層より出土した肥前有田産の白磁碗で，器壁が薄く高台が細いものである。全面に白磁釉を施し，畳付は釉ハギする。256は肥前産の磁器染付小杯で，端反形である。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。外面には圏線の染付がみられる。焼成不良である。257は下層より出土した木製品木簡で，上部は方形を呈する。表面には「岸(ヵ)」とみられる墨書が残り，裏面は解読不可であった。258は下層より出土した板状の木製品で，用途は不明である。隅を切り，中央には円孔がみられる。円孔の周囲には輪状に擦痕が残り，5箇所に釘孔がみられる。

SK－34

2区北西部で検出した土坑で，P－8に切られる。平面形態は楕円形を呈し，検出長1.24m，短径0.80m，深さ30cmを測る。埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には磁器片1点，土師質土器片1点，平瓦2点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SK－35(遺構：図58　遺物：図59－259)

2区北部で検出した土坑で，南は撹乱を受ける。平面形態は方形を呈し，検出長1.60m，検出幅1.78m，深さ59cmを測る。埋土は3層に分かれ，埋土2は腐植の堆積であった。出土遺物には陶器7点(碗3，皿1，細片3)，磁器3点(皿1，細片2)，土師質土器4点(椀1，細片3)，土師器片1点，瓦質土器片1点，木製品12点(木簡1，漆器片5，箸3，桶1，下駄1，箒1)，瓦169点(軒丸瓦2，軒桟瓦1，丸瓦17，平瓦149)がみられ，木製品木簡(259)を図示した。259は木製品木簡で，上部は方形，下部は細く尖らせる。片面に「北(ヵ)」の墨書が残る。

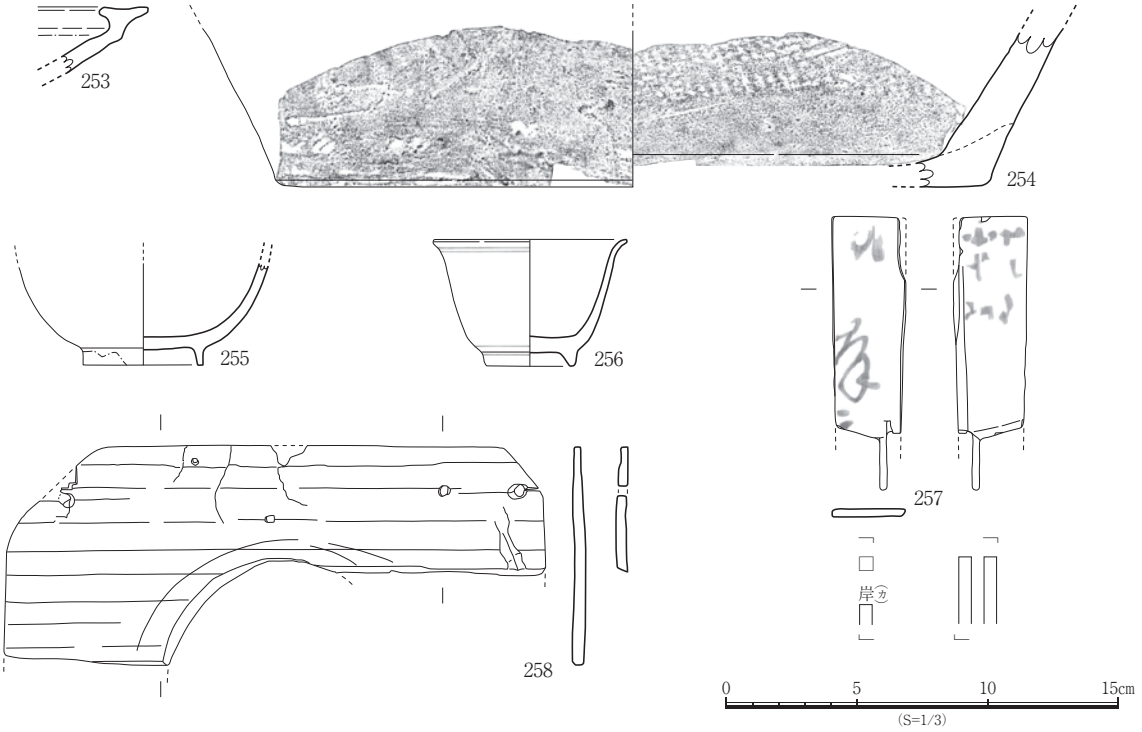
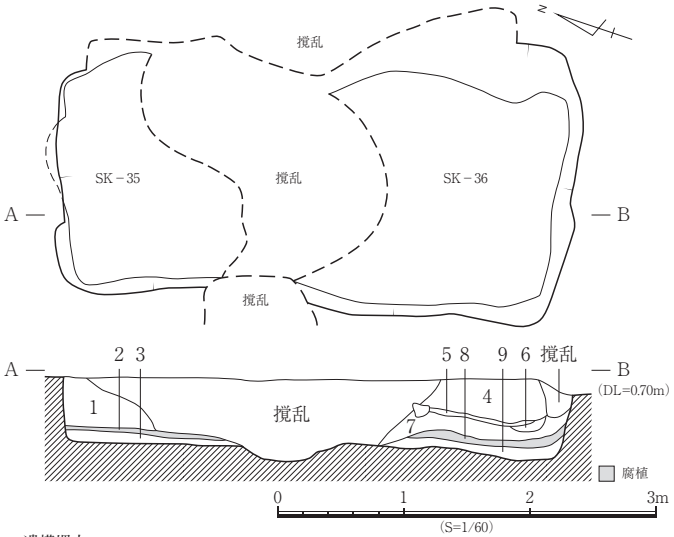


図57　SK－33出土遺物実測図

SK－36(遺構：図58　遺物：図59－260～262)

2区北部で検出した土坑で，北と東は撹乱を受ける。平面形態は方形を呈し，検出長2.04m，検出幅2.21m，深さ61cmを測る。埋土は6層に分かれ，下層には腐植の堆積がみられた。出土遺物には陶器4点(皿1，蓋1，擂鉢1，細片1)，磁器4点(壺1，細片3)，青花皿1点，土師質土器片4点，石製品砥石1点，木製品2点(箸1，桶1)，瓦124点(丸瓦14，平瓦110)，貝2点がみられ，磁器壺(260)と青花大皿(261)，石製品砥石(262)を図示した。**260**は肥前産の磁器染付壺で，蓋物である。全面に透明釉を施し，口縁部内面は釉ハギする。外面には松文と網目文・圏線の染付，黒色の付着物がみられる。**261**は青花大皿で，内面から高台内に透明釉を施し，高台中央部は無釉である。釉は光沢があり白く濁り，畳付には粗砂が付着する。見込には草文と圏線の染付がみられる。**262**は石製品砥



遺構埋土
1. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質極粗粒砂で，5cm大の礫を含む(SK－35)
2. 黒褐色(10YR2/2)細粒砂質シルトで，腐植の堆積(SK－35)
3. 灰色(7.5Y4/1)シルトで，地山ブロックを多く含む(SK－35)
4. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)極粗粒砂質シルトで，多量の10cm大の礫と木片を含む(SK－36)
5. 黒色(N1.5/1)細粒砂質シルトで，炭化物の堆積(SK－36)
6. 暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト質極粗粒砂で，1cm大の礫を含む(SK－36)
7. 灰色(10Y4/1)粗粒砂質シルトで，木片と漆喰を含む(SK－36)
8. 黒褐色(10YR2/2)細粒砂質シルトで，腐植の堆積(SK－36)
9. 灰色(10Y4/1)シルトで，地山ブロックを多く含む(SK－36)

図58　SK－35・36

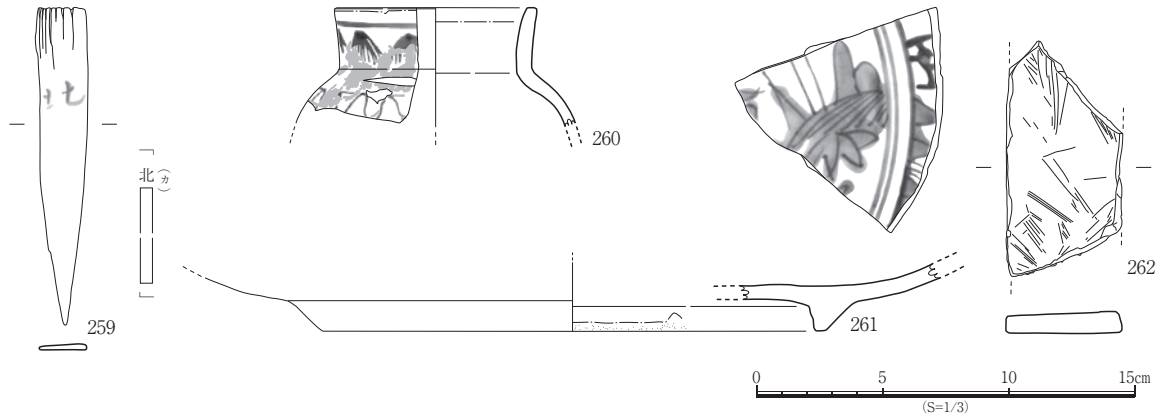


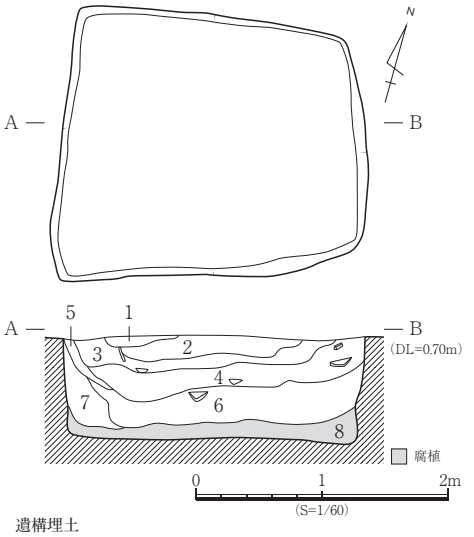
図59　SK－35・36出土遺物実測図

石で，一部が残存する。板状を呈し，表と裏の2面に使用痕が残る。石材は粘板岩とみられる。

SK－37（遺構：図60　遺物：図61・62－263～276）

2区北部で検出した瓦の廃棄土坑で，撹乱の下で確認した。平面形態は方形を呈し，長辺2.41m，短辺2.08m，深さ56cmを測る。埋土は8層に分かれ，最下層は腐植の堆積であった。出土遺物には陶器14点（碗3，皿3，擂鉢3，甕1，細片4），磁器15点（碗1，皿8，蓋1，瓶1，細片4），青花皿1点，土師質土器7点（皿2，細片5），木製品13点（漆器椀2，漆器蓋1，箸3，箱物か1，桶1，下駄3，傘1，建築部材1），瓦617点（軒丸瓦5，軒平瓦10，丸瓦122，平瓦476，その他4），貝1点がみられ，263～276の14点と瓦6点（三巴文軒丸瓦：838，三葉文軒平瓦：872・879，丸瓦：974，平瓦：1006・1017）を図示した。

263は肥前産の京焼風陶器中碗で，内面から高台付近まで灰釉を施し，高台は削り出しで無釉である。外面には染付，高台内には「清水」の銘印がみられる。264は陶器丸碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギを行う。釉には粗い貫入が著しく入る。265は折縁形の陶器中皿で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。見込には砂目痕が残り，高台内には砂が付着する。266は陶器擂鉢で，内面に10条単位の擂目，見込に米字状の擂目，口縁部外面に3条の凹線がみられる。調整は回転ナデで，外面体部下端には回転ケズリを加え，2箇所に指頭圧痕が残る。267は肥前波佐見産の青磁輪花皿で，型打成形である。外面には脚の剥離痕が残る。全面に青磁釉を施し，口錆である。268は肥前波佐見産の青磁折縁皿で，口縁部は外面からの指頭圧により輪花状を呈する。内面には片彫による文様がみられる。269は肥前産の青磁蓋で，全面に青磁釉を施し，かえり部は釉ハギし，砂が付着する。270は青花大皿で，全面に透明釉を施し，高台には粗砂が付着する。見込には染付がみられる。釉は溶けておらず白濁し，胎土はにぶい黄橙色を呈する。271は木製品漆



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂で，1cm大の礫を含む
2. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粗粒砂で，3cm大の礫と粘土質シルトのブロックを含む
3. 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトで，木片と瓦・漆喰を含む
4. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，3cm大の礫と漆喰を含む
5. オリーブ灰色(7.5GY3/1)極粗粒砂質シルト
6. 黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，地山ブロックを含み，炭化物を非常に多く含む
7. オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルトで，極粗粒砂と5cm大の礫・木片を含む
8. 黒褐色(10YR2/2)シルト質粗粒砂で，腐植の堆積

図60　SK－37

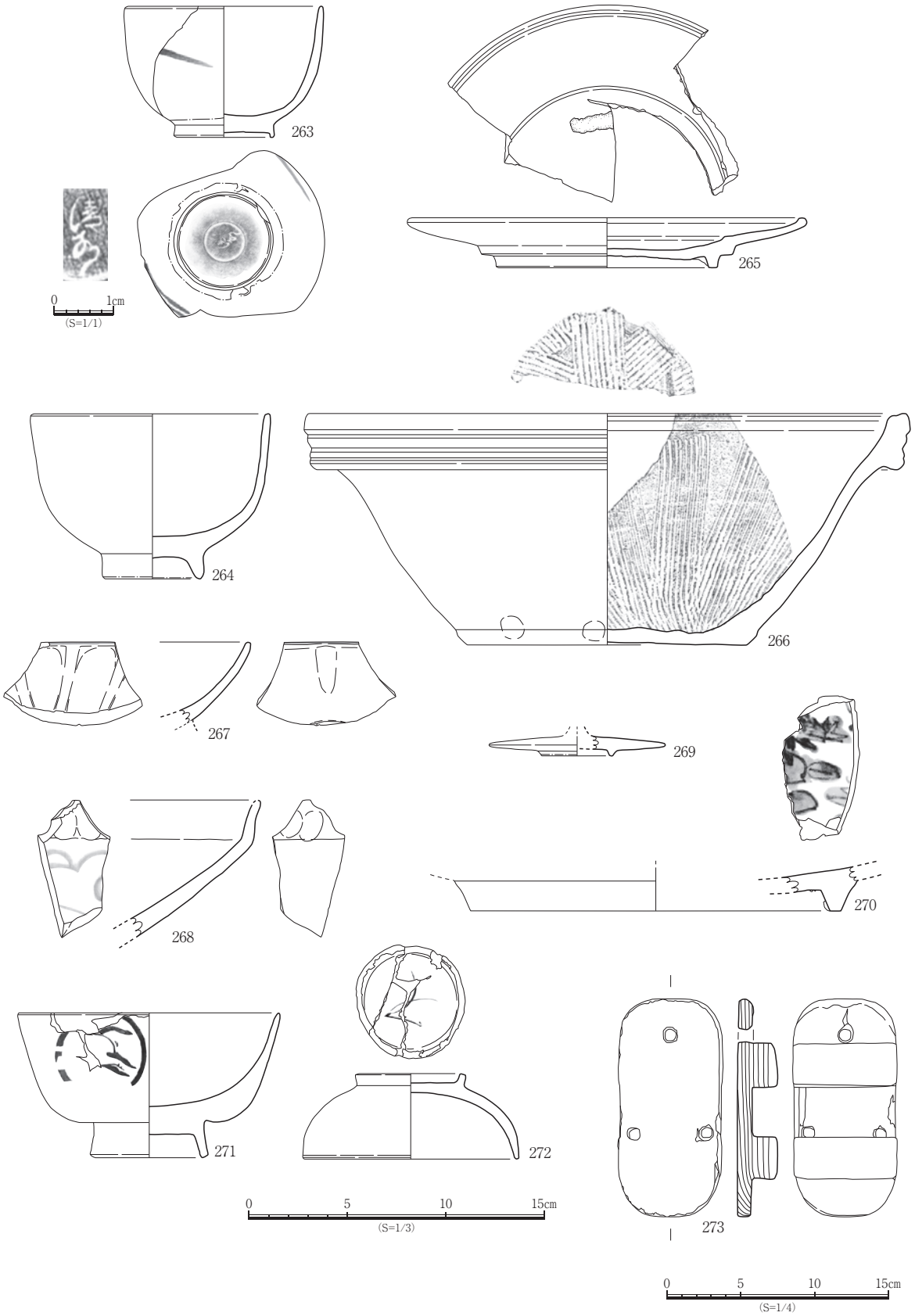


図61　SK－37出土遺物実測図

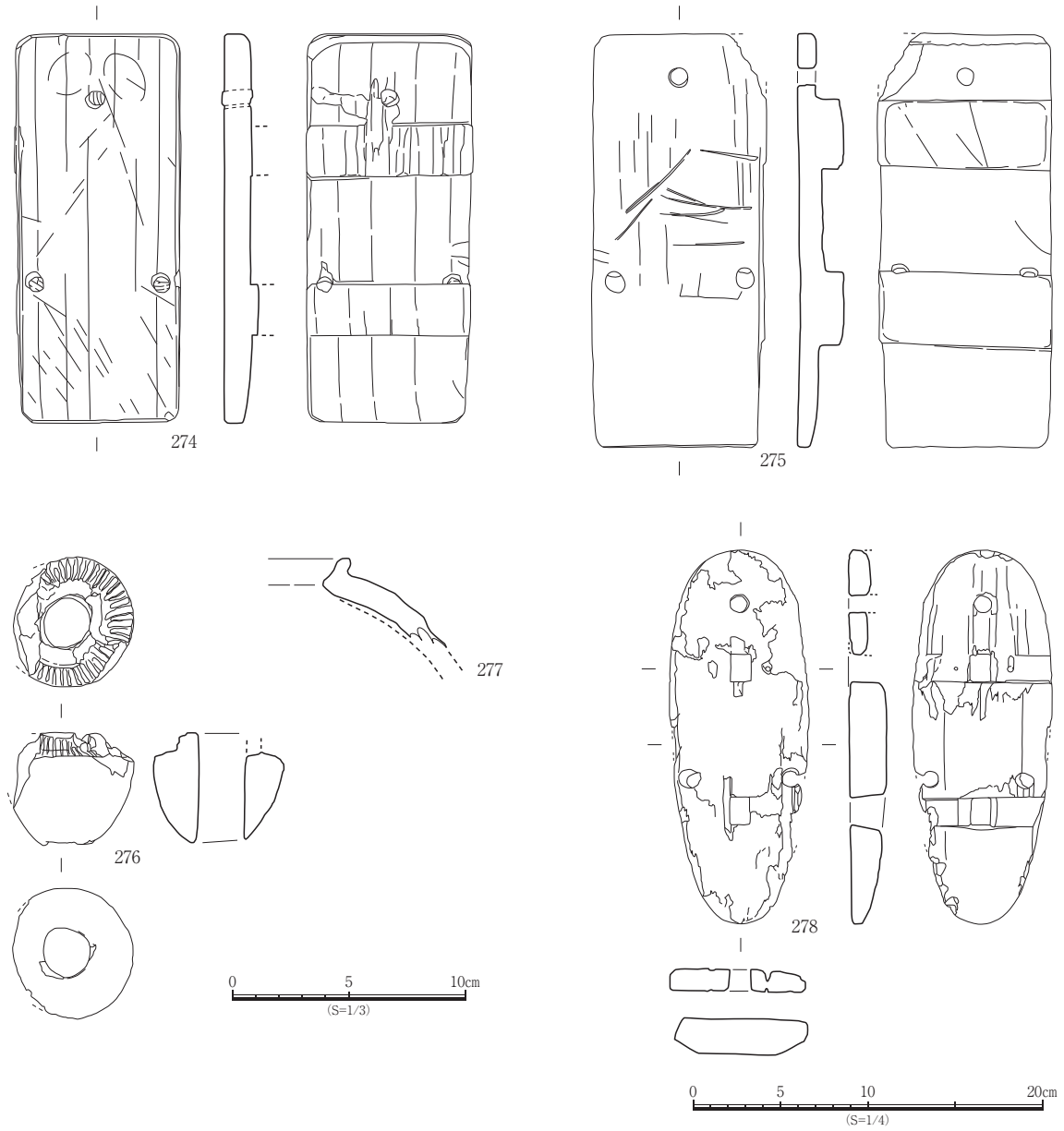


図62　SK－37・38出土遺物実測図

器椀で，外面は黒塗，内面は赤塗である。外面には金色の丸文，内面には黒色の付着物がみられる。272は木製品漆器蓋である。内外面とも赤塗で，摘内には黒色の草文がみられる。273～275は木製品下駄で，連歯下駄である。273は隅丸方形を呈する。子供用とみられ，歯は低く，緒孔径は0.7cmを測る。274は隅丸方形を呈し，歯は欠損し，上面の指の部分と前面は摩耗する。3箇所の緒孔には木材を補填して埋めている。左側面の踵付近には縦方向の刻線が3本みられる。275は隅丸方形を呈し，横緒孔は斜前方向に穿つ。276は木製品傘で，手元ロクロとみられる。中央には径2.0cmを測る孔が貫通し，上面には放射状に浅い溝が多数みられる。下方は細く仕上げる。

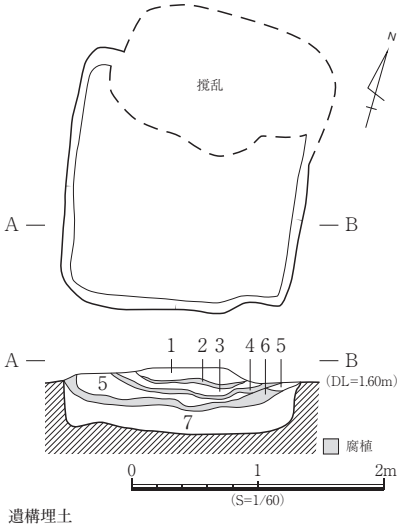
SK－38（遺構：図63　遺物：図62－277・278）

2区北部で検出した土坑で，北は撹乱を受ける。平面形態は長方形を呈し，検出長2.05m，短辺1.91m，深さ82cmを測る。埋土は7層に分かれ，埋土2・4・6は腐植の堆積であった。出土遺物には

陶器5点(擂鉢1，壺1，細片3)，土師質土器片2点，土師器焼塩壺1点，瓦器椀1点，木製品下駄1点，瓦4点(軒丸瓦1，丸瓦1，平瓦2)がみられ，陶器壺(277)と木製品下駄(278)を図示した。277は焼締陶器壺で，口縁部は短く外上方に伸びる。調整は回転ナデである。278は木製品下駄で，露卯下駄である。平面は楕円形，断面は六角形を呈する。上面と側面は黒色の漆塗である。差歯は欠損し，差歯孔は方形で，縦1.6cm，横1.2cmを測る。前歯は鉄釘で留めた痕跡が残る。

SK－39(遺構：図64　遺物：図67－279～287)

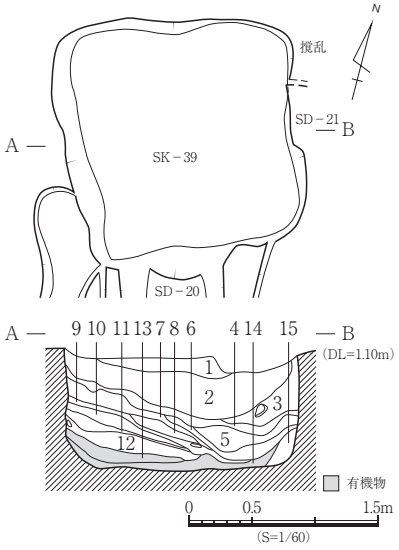
2区北部で検出した土坑で，SD－20・21に切られ，P－10を切る。平面形態は長方形を呈し，長辺2.08m，短辺1.91m，深さ1.04mを測る。埋土は15層に分かれ，埋土11と14は炭化物，埋土13は腐植を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器14点(碗3，皿2，鉢1，人形1，細片7)，磁器15点(碗2(1点色絵)，皿3，小杯1，瓶1，細片8)，土師質土器片1点，土師器火鉢1点，木製品18点(漆器椀1，箸10，桶2，桶蓋1，曲物1，下駄2，加工木1)，瓦113点(軒丸瓦4，軒平瓦1，鬼瓦1，丸瓦31，平瓦76)，貝2点がみられ，279～287の9点と橘文軒平瓦(932)を図示した。



遺構埋土
1. 暗緑灰色(10GY4/1)細粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を多く含む
2. 黒色(2.5Y2/1)細粒砂質シルトで，腐植の堆積
3. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)細粒砂質シルトで，1cm大と3～5cm大の礫を含む
4. 黒色(2.5Y2/1)細粒砂質シルトで，腐植の堆積
5. 暗オリーブ灰色(5GY3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を多く含む
6. 黒色(2.5Y2/1)細粒砂質シルトで，腐植の堆積
7. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を多く含み，5cm大の礫を含む

図63　SK－38

279は肥前内野山窯の陶器小皿である。内面から口縁部外面まで銅緑釉，体部外面には灰釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。底部外面は回転ケズリ調整で，無釉である。見込の蛇ノ目釉ハギ部分には砂が付着する。280は埋土14より出土した肥前産の白磁小碗で，全面に白磁釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。281・282は肥前産の磁器染付皿で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。281は内面に花文と圏線の染付がみられる。282は埋土14より出土した。見込には圏線内に網目文の染付がみられる。283は木製品漆器椀で，内外面とも赤塗である。284・285は木製品箸である。284は断面が円形を呈し，先端は細く尖らせる。285は断面が多角形を呈し，両端を細く加工する。286・287は埋土12から出土した木製品下駄である。連歯下駄で，平面は隅切方形を呈する。歯が非常に太いも



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/6)シルト質中粒砂で，1cm大の礫と酸化鉄を含む
2. オリーブ灰色(10Y4/2)シルト質中粒砂で，1～5cm大の礫を多く含む
3. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土質シルトで，中粒砂を含む
4. 黒色(N1.5/0)細粒砂質シルトで，1cm大の礫と木片を含む炭化物の堆積
5. 灰色(5Y4/1)粘土質シルトで，中粒砂を含む
6. 黒色(N1.5/0)細粒砂質シルトで，1cm大の礫と木片を含む炭化物の堆積
7. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，5cm大の礫と木片を含む
8. 黒色(5Y2/1)粗粒砂質シルトで，炭化物を少し含む
9. 黒色(N1.5/0)細粒砂質シルトで，粗粒砂と5cm大の礫・瓦を含む
10. オリーブ黒色(7.5Y2/2)中粒砂質シルトで，5cm大の礫と木片を含む
11. 黒色(5Y2/1)中粒砂質シルトで，炭化物を非常に多く含む
12. 黒色(7.5Y2/1)粗粒砂質シルトで，木片を少し含む
13. 黒色(5Y2/1)中粒砂質シルトで，炭化物と腐植を非常に多く含む
14. 黒色(7.5Y2/1)中粒砂質シルトで，炭化物と木片を非常に多く含む
15. オリーブ黒色(10Y3/1)細粒砂質シルトで，地山ブロックを含む

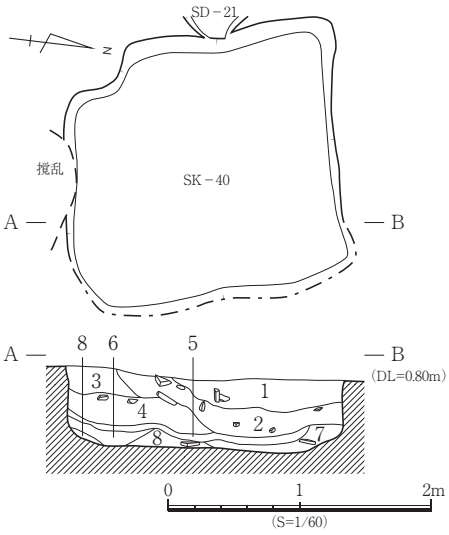
図64　SK－39

ので，前緒孔は斜に穿ち，上面の後歯上に方形の貫通しない孔がみられる。286と287は組になるものとみられる。

SK－40

（遺構：図65　遺物：図67－288）

2区北部で検出した瓦の廃棄土坑で，東は撹乱の底で検出した。平面形態は方形を呈し，検出長2.06m，検出幅2.04m，深さ92cmを測る。埋土は8層に分かれ，瓦を多く含んでいた。出土遺物には陶器5点（碗1，皿1，細片3），土師質土器3点（杯1，細片2），土師器4点（皿3，細片1），須恵器2点（甕1，細片1），瓦1,122点（軒丸瓦22，軒平瓦17，鬼瓦1，鳥衾瓦2，丸瓦259，平瓦817，桟瓦1，不明3），骨1点がみられ，陶器皿（288）と瓦9点（三ツ葉柏文軒丸瓦：756・757・770，三葉文軒平瓦：870，橘文軒平瓦：895・915・916，鬼瓦：963，丸瓦：988）を図示した。288は唐津系灰釉陶器小皿で，内面から高台付近まで灰釉を施す。高台は削り出しで無釉である。



遺構埋土
1. オリーブ黒色（7.5Y3/2）細粒砂質シルトで，10cm大の礫と瓦を含む
2. オリーブ黒色（10Y3/2）中粒砂質シルトで，5～10cm大の礫を多く含み，瓦と漆喰を含む
3. 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）細粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を含む
4. オリーブ黒色（7.5Y2/2）中粒砂質シルトで，粗粒砂と5cm大の礫・瓦を含む
5. オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト質細粒砂で，中粒砂を少し含む
6. 灰色（10Y4/1）粘土質シルトで，粗粒砂と5cm大の礫を少し含む
7. オリーブ黒色（5Y3/1）粘土質シルトで，粗粒砂を少量含み，10cm大の礫を含む
8. 灰色（10Y4/1）中粒砂質シルトで，地山ブロックと瓦を含む

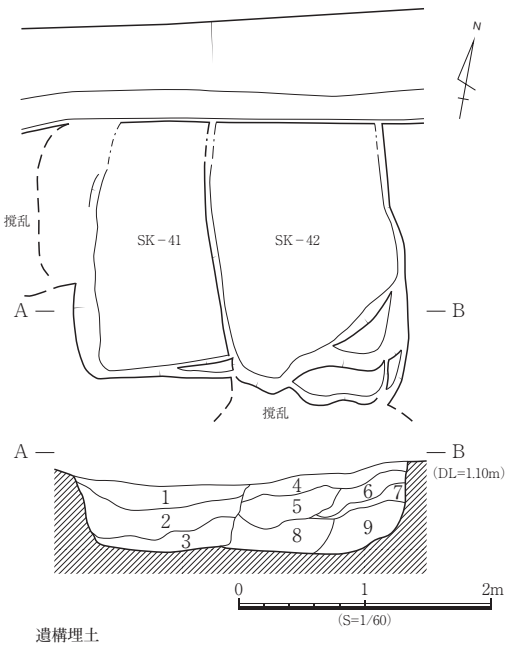
図65　SK－40

SK－41（遺構：図66　遺物：図67－289）

2区北東部で検出した土坑で，SK－42を切り，北は調査区外へ続く。平面形態は長方形を呈し，検出長1.73m，短辺1.38m，深さ70cmを測る。埋土は3層に分かれる。出土遺物には陶器4点（擂鉢1，細片3），磁器2点（小杯1，細片1），土師質土器片1点，土師器4点（皿3，細片1），木製品2点（栓1，下駄1），瓦36点（軒平瓦1，丸瓦8，平瓦27），骨1点がみられ，木製品下駄（289）を図示した。289は木製品下駄で，連歯下駄である。平面は隅丸方形を呈し，前歯は著しく擦り減る。

SK－42（遺構：図66　遺物：図67－290）

2区北東部で検出した土坑で，SK－41に切られ，北は調査区外へ続く。平面形態は長方形を呈し，検出長2.00m，検出幅1.50m，深さ79cmを測る。埋土は6層に分かれる。出土遺物には陶器8点（碗2，皿1，瓶1，細片4），磁器6点（碗1，小杯1，細片4），土師質土器3点（皿2，細片1），木製品2点（漆器片1，箸1），瓦18点



遺構埋土
1. オリーブ黒色（7.5Y3/1）細粒砂～粗粒砂質シルトで，小礫～大礫を含む（SK－41）
2. 灰色（5Y4/1）細粒砂～粗粒砂質シルトで，小礫～大礫を含む（SK－41）
3. 灰色（7.5Y5/1）細粒砂質シルトで，灰色（10Y5/1）シルト質細粒砂～中粒砂のブロックを含む（SK－41）
4. 灰色（7.5Y4/1）シルト質細粒砂～粗粒砂で，小礫を含む（SK－42）
5. オリーブ黒色（10Y3/1）中粒砂～粗粒砂質シルトで，小礫を含む（SK－42）
6. 灰色（10Y4/1）細粒砂質シルトで，小礫を少し含む（SK－42）
7. オリーブ黒色（5Y3/1）シルト質細粒砂～粗粒砂で，小礫を含む（SK－42）
8. 灰色（5Y5/1）シルトで，灰色（5Y4/1）シルト質細粒砂～粗粒砂のブロックを含む（SK－42）
9. オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルトで，3cm大の礫と粗粒砂のブロックを含む（SK－42）

図66　SK－41・42

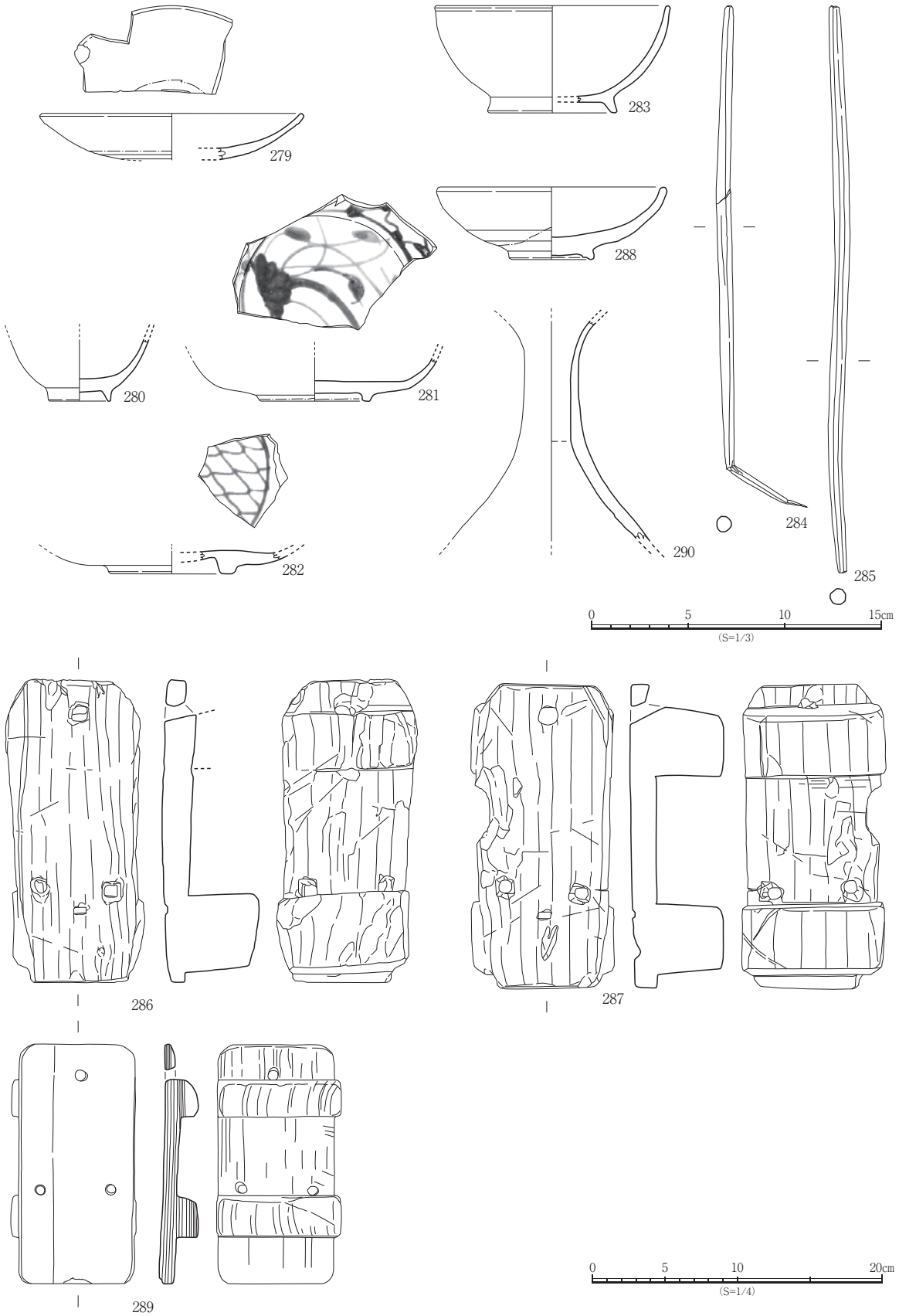
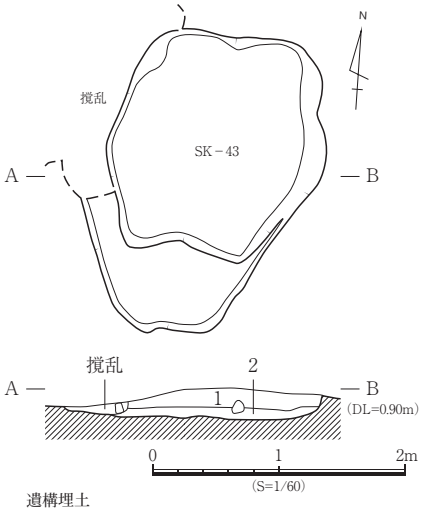


図67　SK－39～42出土遺物実測図

(丸瓦4，平瓦14)，鉄滓1点がみられ，絵唐津の皿も出土している。図示した遺物は290の焼締陶器瓶である。回転ナデ調整を施し，頸部内面には絞目が残る。

SK－43(遺構：図68　遺物：図72－291)

2区北東部で検出した土坑で，一部は撹乱を受ける。平面形態は不整楕円形を呈し，長径2.38m，検出幅1.85m，深さ37cmを測る。埋土は2層に分かれ，下層には腐植の堆積がみられた。出土遺物には陶器4点(皿1，細片3)，磁器2点(皿1，細片1)，土師質土器片2点，土師器片1点，瓦36点(軒平瓦1，丸瓦2，平瓦33)，骨1点がみられ，陶器皿(291)と五葉文軒平瓦(890)を図示した。291は唐津系灰釉陶器小皿で，内面から体部外面まで灰釉を施し，見込には胎土目痕が残る。外面体部下半は回転ナデ調整，高台は削り出しで無釉である。

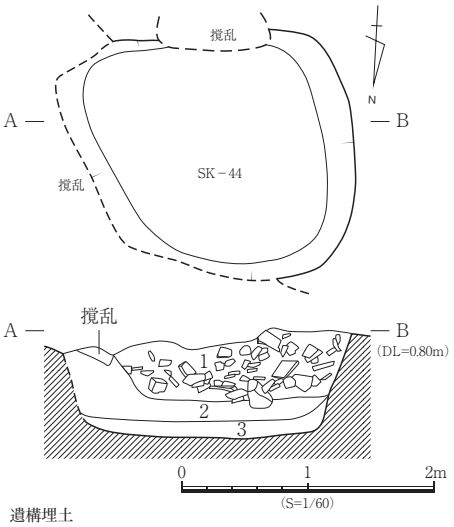


遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトで，1～10cm大の礫と炭化物を含む
2. オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，5cm大の礫を少し含み，中位に腐植の堆積が見られる

図68　SK－43

SK－44(遺構：図69　遺物：図72－292)

2区東部で検出した瓦の廃棄土坑で，東と南は撹乱を受ける。平面形態は不整方形を呈するものとみられ，検出長1.98m，検出幅1.96m，深さ80cmを測る。埋土は3層に分かれ，上層には瓦を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器片4点，磁器3点(皿1，細片2)，白磁皿1点，土師質土器片4点，瓦3,496点(軒丸瓦33，軒平瓦33，鬼瓦1，丸瓦510，平瓦2,911，その他8)がみられ，白磁皿(292)と瓦16点(三ツ葉柏軒丸瓦：722・723・744，三巴文軒丸瓦：801・802・808・809・823，三葉文軒平瓦：883・888，橘文軒平瓦：894・904・905，鬼瓦：968，丸瓦：973，平瓦：1009)を図示した。292は中国産の白磁皿で，内面から体部外面に白磁釉を施し，外底は削り出しで無釉である。内面にはヘラ彫による陰刻文がみられる。



遺構埋土
1. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質細粒砂～中粒砂で，大礫を含み，瓦を非常に多く含む
2. 灰色(10YR4/1)シルトで，0.5cm大の礫を含む
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粗粒砂で，1cm大の礫を含む

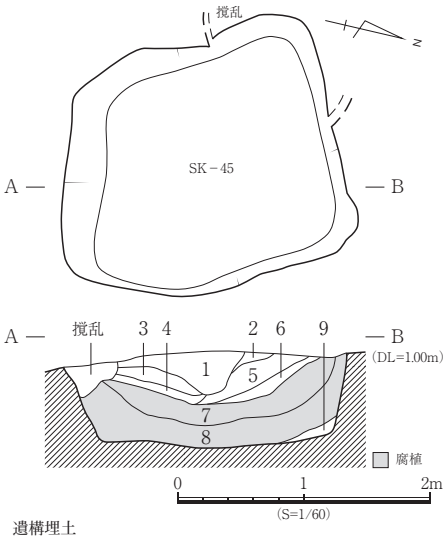
図69　SK－44

SK－45(遺構：図70　遺物：図72－293～303)

2区東部で検出した土坑で，一部は撹乱を受ける。平面形態は長方形を呈し，長辺2.27m，短辺2.00m，深さ88cmを測る。埋土は9層に分かれ，下層は腐植の堆積であった。出土遺物には陶器9点(碗6，皿1，匣鉢2)，磁器4点(皿1，蓋1，細片2)，瓦質土器火鉢2点，木製品18点(漆器片10，箸1，桶1，蓋1，下駄2，建築部材か2，加工木1)，瓦67点(軒丸瓦3，丸瓦19，平瓦45)がみられ，293～303の11点を図示した。

293～295は陶器碗である。293・294は全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。釉には貫入が入る。295は鉄釉を施し，高台内は刷毛塗する。畳付は釉ハギし，4箇所に砂目痕が残る。296は瀬戸・美濃系の陶器稜花皿で，内面から体部外面まで光沢のある緑釉を施し，見込に胎土目痕が残る。外底は削り出しで，無釉である。297は焼締陶器匣鉢で，回転ナデ調整を施し，外面体部

下端には指頭圧痕が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りである。内面には煤が付着する。298は肥前波佐見産の青磁皿で，全面に青磁釉を施す。内面には丸彫による縞文がみられる。299は肥前産の青磁染付蓋物蓋である。天井部外面には菊花文と圏線を染付で描き，青磁釉を施す。かえり部と内面は無釉である。300・301は瓦質土器火鉢である。300は箱形で，タタラ成形である。上方は円形の孔が開くものとみられ，底部には円柱形の脚を貼付する。口縁部内面には粘土を貼付し肥厚させ，コーナー部が縦方向のナデ調整，見込がナデ調整，口縁部が横ナデ調整で，その他は切り離しのまま無調整である。脚内側には径0.5cmの円孔がみられる。301は最下層から出土したもので，円筒形を呈するものとみられる。内面は横方向のナデ調整，外面はナデ調整の後，横方向のミガキ調整を施す。底部には円柱形を呈する脚を貼付し，脚内側には径0.7cmの円孔を穿つ。302は木製品蓋である。天井部は丸く傘状を呈し，下部は笠部よりも幅が小さく，中央部が凹む。内外面に不定方向の加工痕が残る。303は木製品下駄で，露卯下駄である。子供用で，平面は楕円形，断面は六角形を呈し，裏面の周縁部を斜に加工する。上面と側面は黒色の漆塗である。差歯は欠損し，差歯孔は方形で，縦1.0cm，横0.7cm，緒孔は円形で径0.7cmを測る。

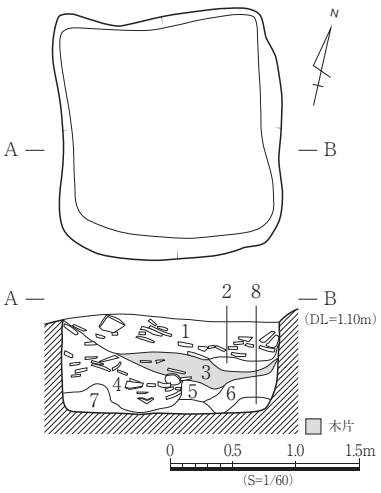


遺構埋土
1. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂で，5cm大の礫と瓦を含む
2. 灰色(5Y4/1)シルトで，細粒砂を含む
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質中粒砂で，瓦と木片を含む
4. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と木片を少し含む
5. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粗粒砂で，5cm大の礫を多く含み，瓦を含む
6. オリーブ黒色(7.5Y3/2)細粒砂質シルトで，1cm大の礫を少し含む
7. オリーブ黒色(5Y2/2)粗粒砂質シルトで，腐植を非常に多く含む
8. 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで，腐植の堆積
9. 灰色(7.5Y4/1)シルトで，中粒砂を少し含む

図70　SK－45

SK－46(遺構：図71　遺物：図72－304)

2区東部で検出した瓦の廃棄土坑で，一部は撹乱を受ける。平面形態は長方形を呈し，長辺1.93m，短辺1.75m，深さ1.04mを測る。埋土は8層に分かれ，上層及び中層には瓦を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器4点(碗1，甕1，急須1，細片1)，磁器2点(皿1，細片1)，土師質土器片2点，木製品箸1点，瓦3,823点(軒丸瓦51，軒平瓦15，丸瓦907，平瓦2,848，道具瓦1，その他1)がみられ，磁器皿(304)と瓦20点(三ツ葉柏軒丸瓦：732～734・741・761・762，三巴文軒丸瓦：810・814・816～818，三葉文軒平瓦：858・862・863・867，橘文軒平瓦：920，その他軒平瓦：940・950，丸瓦：987，平瓦：993)を図示した。304は肥前産の磁器染付小皿で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。内面には草花文の染付



遺構埋土
1. 灰黄褐色(10YR5/2)シルトで，酸化鉄を含み，瓦を非常に多く含む
2. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルトで，細粒砂のブロックを含む
3. 暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂質シルトで，瓦と木片を多く含み，漆喰を非常に多く含む
4. 褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで，瓦を非常に多く含む
5. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗粒砂質シルトで，木片と漆喰を含む
6. オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を少し含む
7. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルトで，漆喰を少し含む
8. オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルトで，漆喰を含む

図71　SK－46

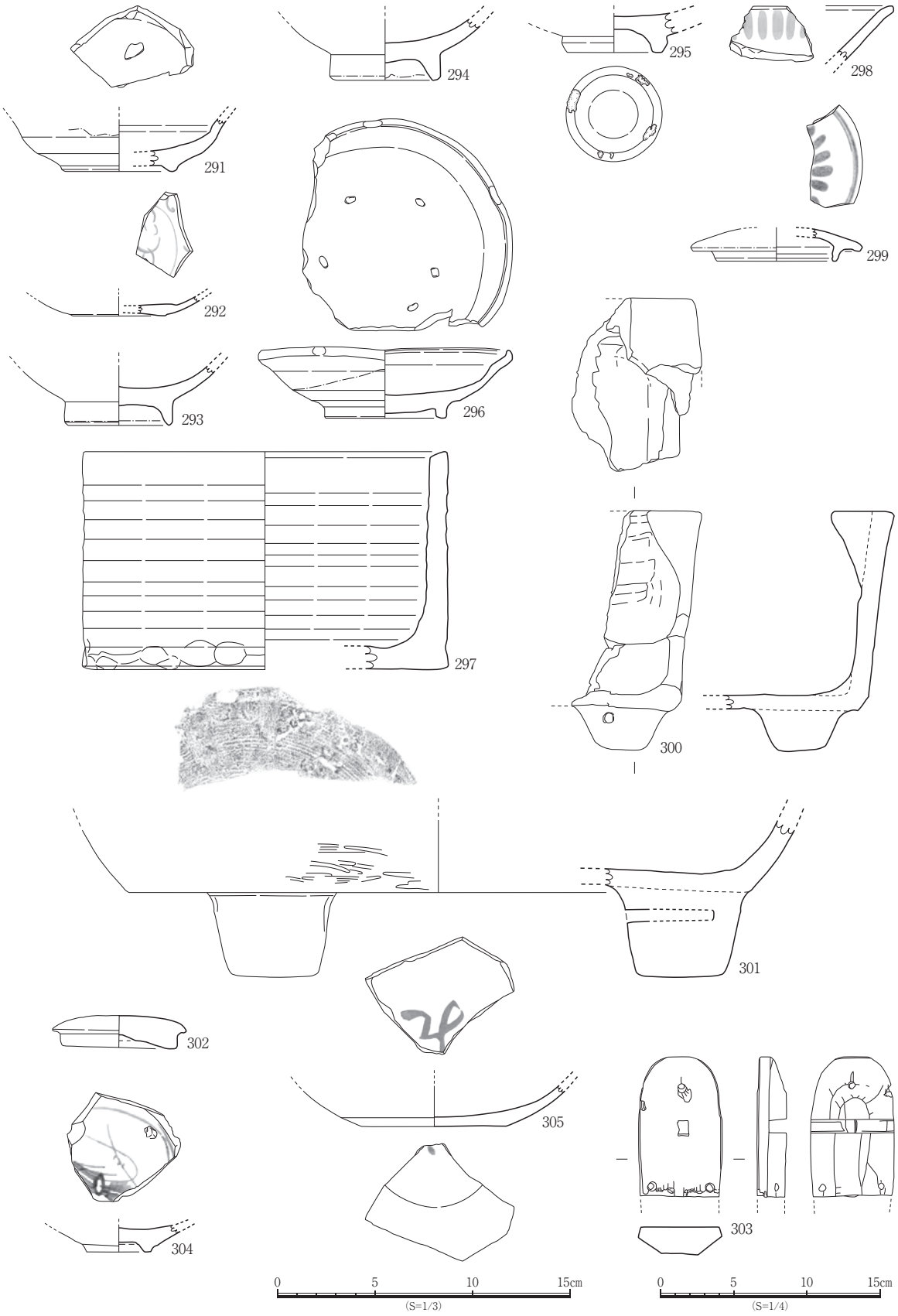
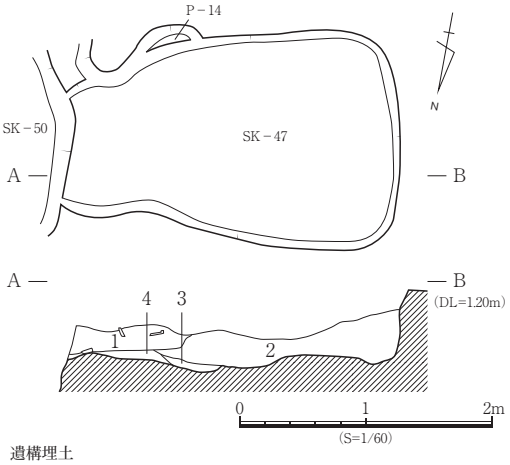


図72　SK－43～45出土遺物実測図

がみられる。

SK－47（遺構：図73　遺物：図72－305）

2区東部で検出した土坑で，撹乱の底で確認し，SK－50とP－14に切られ，SK－48を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，検出長2.70m，短辺1.25m，深さ44cmを測る。埋土は3層に分かれ，上層は漆喰の堆積であった。出土遺物には磁器片1点，土師質土器皿1点，瓦102点（軒平瓦2，丸瓦20，平瓦80）がみられ，土師質土器皿(305)を図示した。305は土師質土器皿で，白土器である。調整は回転ナデで，内面にはナデ調整，体部外面から外底には回転ケズリを加える。見込には「九」の墨書，外底にも僅かに墨書が残る。

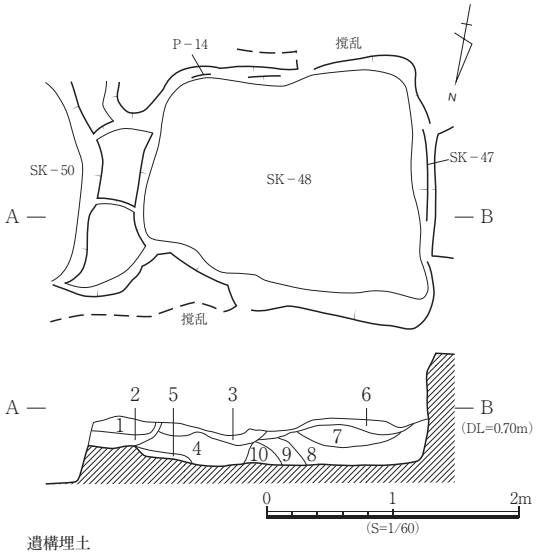


遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粗粒砂で，5～10cm大の礫と瓦・漆喰を含む(P－14)
2. 灰白色(7.5Y7/1)シルト質粗粒砂で，漆喰の堆積(SK－47)
3. 灰色(5Y4/1)シルトで，中粒砂を少し含む(SK－47)
4. オリーブ黒色(10Y3/1)中粒砂質シルトで，5cm大の礫を少しと漆喰を含む(SK－47)

図73　SK－47，P－14

SK－48（遺構：図74）

2区東部で検出した土坑で，SK－47とP－14に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し，検出長2.18m，全幅1.95m，深さ35cmを測る。埋土は5層に分かれる。出土遺物には，土師質土器片1点，平瓦2点がみられたが，図示できる遺物はなかった。



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y2/2)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫と炭化物を含む(ピット)
2. 灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルトで，粗粒砂を少し含み，瓦を含む(ピット)
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を含む(土坑)
4. オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂質シルトで，炭化物と木片を含む(土坑)
5. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルト(土坑)
6. 灰色(5Y4/1)シルトで，粗粒砂を僅かに含む(SK－48)
7. 灰色(7.5Y4/1)シルトで，粗粒砂を少し含む(SK－48)
8. オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト(SK－48)
9. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト(SK－48)
10. オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルト(SK－48)

図74　SK－48

SK－49（遺構：図75　遺物：図76－306～312）

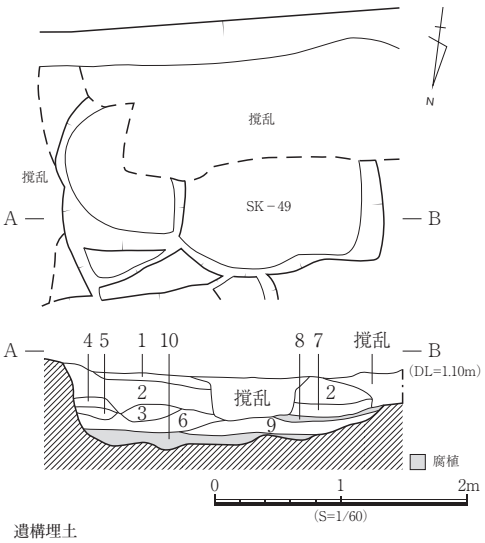
2区東部で検出した土坑で，南は撹乱を受け，SK－50に切られる。平面形態は長方形を呈するものとみられ，全長2.54m，検出幅1.68m，深さ88cmを測る。埋土は10層に分かれ，埋土8と10は腐植を多く含んでいた。出土遺物には陶器11点（碗2，皿3，鉢1，片口鉢1，細片4），磁器8点（皿2，小杯1，蓋物2，細片3），青花皿1点，土師質土器3点（杯1，皿2），木製品8点（漆器片1，箸2，桶2，桶蓋1，箱物か1，下駄1），瓦87点（軒丸瓦3，軒平瓦2，丸瓦22，平瓦60）がみられ，306～312の7点を図示した。

306は埋土2より出土した陶器碗で，内面から高台付近まで灰釉を施し，外底は削り出しで無釉である。307は下層より出土した唐津系灰釉陶器中皿で，内面から体部外面まで灰釉を施し，外面体部下半は回転ナデ調整で無釉である。308は陶器片口鉢で，側面に断面半円形の片口を貼付する。全面に鉄釉を施す。309は埋土1より出土した肥前産の磁器染付蓋物で，全面に透明釉を施し，口縁部は釉ハギする。外面には草花文と圏線の染付がみられる。310は埋土1より出土した青花皿である。白化粧土を施した後，畳付を除き透明釉

を施す。内外面に染付がみられる。被熱し，釉には貫入が入る。311は下層より出土した土師質土器小皿で，調整は回転ナデで，底部の切り離しは回転糸切りである。口縁部には煤が付着する。312は埋土6より出土した木製品下駄で，連歯下駄である。平面は隅丸方形を呈し，歯は擦り減り，指の部分は摩耗して凹む。上面には「△」の刻書がみられる。

SK－50（遺構：図78　遺物：図76－313）

2区東部で検出した瓦の廃棄土坑で，一部は撹乱を受け，SK－47･49を切る。平面形態は長方形を呈し，長辺2.02m，短辺1.96m，深さ1.01mを測る。埋土は6層に分かれ，上層には瓦を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器2点（皿1，細片1），磁器35点（皿3，小杯2，猪口1，細片29），土師質土器14点（椀2，杯2，細片10），土師器片1点，瓦5,472点（軒丸瓦57，軒平瓦51，鬼瓦2，丸瓦1,129，平瓦4,230，道具瓦2，その他1），貝4点，骨1点がみられ，磁器猪口（313）と瓦26点（三ツ葉柏文軒丸瓦：736･739･749･759･766･771･772･774･775，三巴文軒丸瓦：819･829･832･841･842，三葉文軒平瓦：874･



遺構埋土
1．暗褐色（10YR3/3）中粒砂質シルトで，漆喰を少し含む
2．黒褐色（10YR3/1）中粒砂質シルトで，1cm大の礫と瓦を含む
3．黒色（7.5YR1.7/1）中粒砂質シルトで，炭化物の堆積
4．黒褐色（2.5Y3/1）細粒砂質シルトで，1cm大の礫を少し含む
5．黒褐色（10YR3/1）細粒砂質シルトで，3cm大の礫と瓦を少し含む
6．黒色（7.5YR2/1）粗粒砂質シルトで，1cm大の礫と炭化物･漆喰･木片を含む
7．黒褐色（10YR3/1）細粒砂質シルトで，1cm大の礫と漆喰を含む
8．黒色（10YR1.7/1）細粒砂質シルトで，木片と腐植を多く含む
9．黒色（10YR2/1）粗粒砂質シルトで，1cm大の礫と漆喰を含む
10．黒色（10YR1.7/1）粗粒砂質シルトで，腐植を多く含む

図75　SK－49

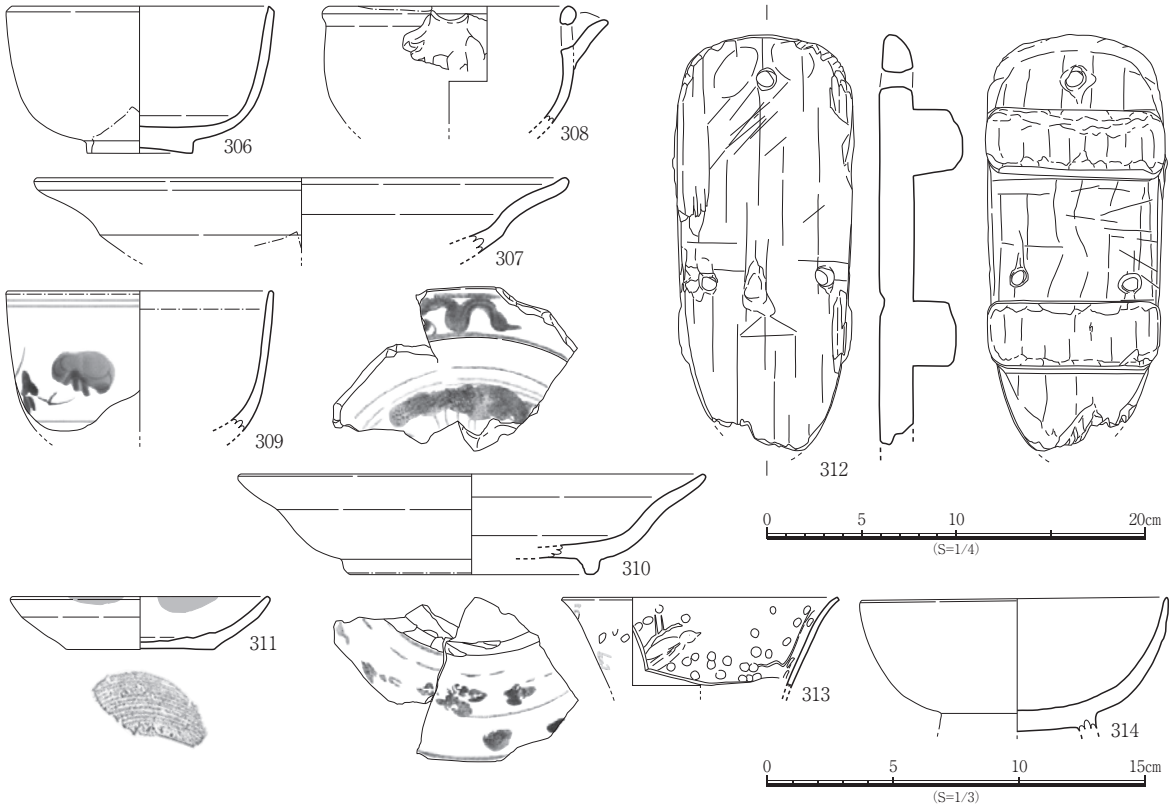


図76　SK－49～51出土遺物実測図

877・880・881，橘文軒平瓦：901・933，その他軒平瓦：949，鬼瓦：960・961，平瓦：1007・1008，平瓦系道具瓦：1065)を図示した。**313**は下層より出土した肥前有田産の磁器色絵猪口で，型打成形である。内面には型による陽刻の梅と鶯文，外面には黒色の上絵付の一部が残る。

SK－51(遺構：図79　遺物：図76－314)

2区南部で検出した土坑で，一部は撹乱を受け，SK－52・53に切られる。平面形態は不整方形を呈するものとみられ，検出長1.50m，検出幅0.61m，深さ11cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトで，粗粒砂を含んでいた。出土遺物には陶器碗1点，磁器碗1点，土師質土器片8点，木製品漆器椀1点がみられ，漆器椀(314)を図示した。**314**は木製品漆器椀で，外面は黒塗，内面は赤塗である。

SK－52(遺構：図79　遺物：図77－315)

2区南部で検出した土坑で，一部は撹乱を受け，SK－51を切り，SK－53に切られる。平面形態は方形を呈し，検出長2.02m，検出幅1.90m，深さ95cmを測る。埋土は7層に分かれ，埋土2と4は有機物を多く含んでいた。出土遺物には陶器2点(皿1，細片1)，磁器片1点，土師質土器12点(椀1，細片11)，瓦4点(丸瓦1，平瓦3)がみられ，陶器皿(315)を図示した。**315**は唐津系灰釉陶器皿で，内面から体部外面まで灰釉を施し，見込には砂目痕が残る。体部下半は回転ナデ調整，高台は削り出しで無釉である。

SK－53(遺構：図80　遺物：図81－316～321)

2区南部で検出した土坑で，一部は撹乱を受け，

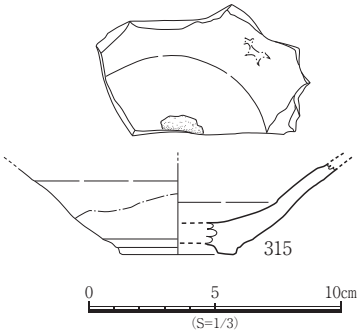
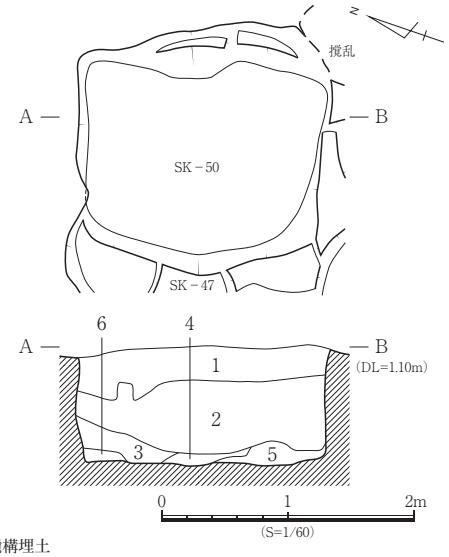
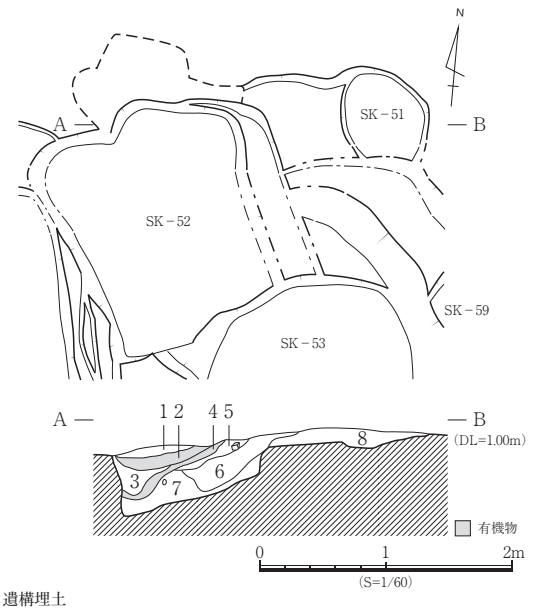


図77　SK－52出土遺物実測図



遺構埋土
1. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトで，小礫を含み，瓦を非常に多く含む
2. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質細粒砂～粗粒砂で，小礫と瓦・漆喰を含む
3. 灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルトで，オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質細粒砂～粗粒砂のブロックを含む
4. 灰色(10Y5/1)細粒砂～粗粒砂質シルト
5. 灰色(10Y4/1)細粒砂質シルトで，オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質細粒砂～粗粒砂のブロックを含む
6. 灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト

図78　SK－50

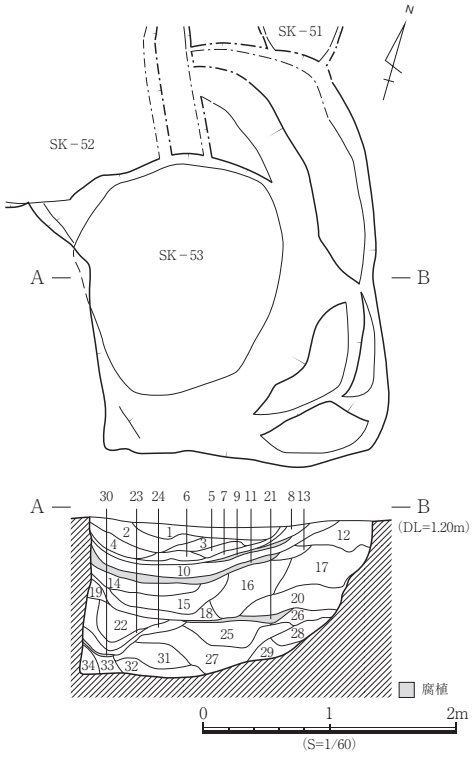


遺構埋土
1. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)中粒砂質シルトで，1cm大の礫を含む(SK－52)
2. 黒色(N2/0)細粒砂質シルトで，腐植の堆積(SK－52)
3. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む(SK－52)
4. 暗オリーブ灰色(7.5Y2/2)中粒砂質シルトで，植物を非常に多く含む(SK－52)
5. 黒色(5Y2/1)シルト質細粒砂で，5cm大の礫を含む(SK－52)
6. オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粗粒砂で，0.5cm大の礫を含む(SK－52)
7. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)中粒砂質シルトで，3cm大の礫を含む(SK－52)
8. オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルトで，粗粒砂を含む(SK－51)

図79　SK－51・52

SK－51・52・55，SD－24を切る。平面形態は隅丸方形を呈するものとみられ，検出長3.98m，全幅2.93m，深さ1.34mを測る。埋土は34層に分かれ，埋土9・11・21・30は腐植の堆積，埋土7・10は炭化物の堆積であった。出土遺物には陶器13点(碗2，皿5，擂鉢4，細片2)，磁器12点(碗1，皿1，小杯2，合子1，細片7)，土師質土器53点(椀2，小皿2，細片49)，土師器甕1点，須恵器3点(壺1，細片2)，土製品土錘1点，石製品砥石1点，木製品5点(箸2，桶1，下駄1，桝1)，金属製品3点(小柄1，引手1，その他1)，瓦70点(軒丸瓦2，軒平瓦1，鬼瓦1，丸瓦19，平瓦47)がみられ，陶器碗(316)と陶器皿(317)，陶器擂鉢(318)，磁器皿(319)，土製品土錘(320)，金属製品小柄(321)，橘文軒平瓦(917)を図示した。

316は上層より出土した陶器碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。317は上層より出土した肥前産の絵唐津中皿である。見込には鉄錆による文様がみられ，内面に透明釉，外面に灰釉を



遺構埋土
1. オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルトで，3～10cm大の礫を含む
2. オリーブ黒色(7.5Y2/2)中粒砂質シルトで，3cm大の礫を多く含む
3. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粗粒砂で，1cm大の礫と木片を含む
4. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を多く含む
5. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルトで，3cm大の礫を多く含む
6. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，1cm大の礫を多く含む
7. 黒色(N2/0)細粒砂質シルトで，炭化物の堆積
8. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，木片を含む
9. 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルトで，腐植の堆積
10. 黒色(N2/0)中粒砂質シルトで，植物を含む炭化物の堆積
11. 黒色(5Y2/1)細粒砂質シルトで，腐植の堆積
12. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂で，木片を含む
13. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む
14. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫と炭化物を含む
15. オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質極粗粒砂で，1cm大の礫と木片を含む
16. 暗緑灰色(7Y4/1)粗粒砂質シルトで，極中粒砂と3～5cm大の礫を含む
17. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を含む
18. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで，1cm大の礫と木片を含む
19. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，植物を含む
20. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を少し含む
21. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含み，下部に腐植の堆積が見られる
22. オリーブ黒色(10Y3/1)極粗粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を多く含み，炭化物を含む
23. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルトで，木片を少し含む
24. 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで，炭化物を少し含む
25. 灰色(10Y4/1)中粒砂質シルトで，1cm大の礫を少し含む
26. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む
27. 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトで，0.5～3cm大の礫を多く含む
28. 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を少し含む
29. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質中粒砂で，植物を少し含む
30. 黒色(5Y2/1)中粒砂質シルトで，腐植の堆積
31. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粗粒砂で，1～5cm大の礫を多く含む
32. オリーブ黒色(10Y3/2)中粒砂質シルトで，極粗粒砂を少し含む
33. オリーブ黒色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を少し含む
34. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を多く含む

図80　SK－53

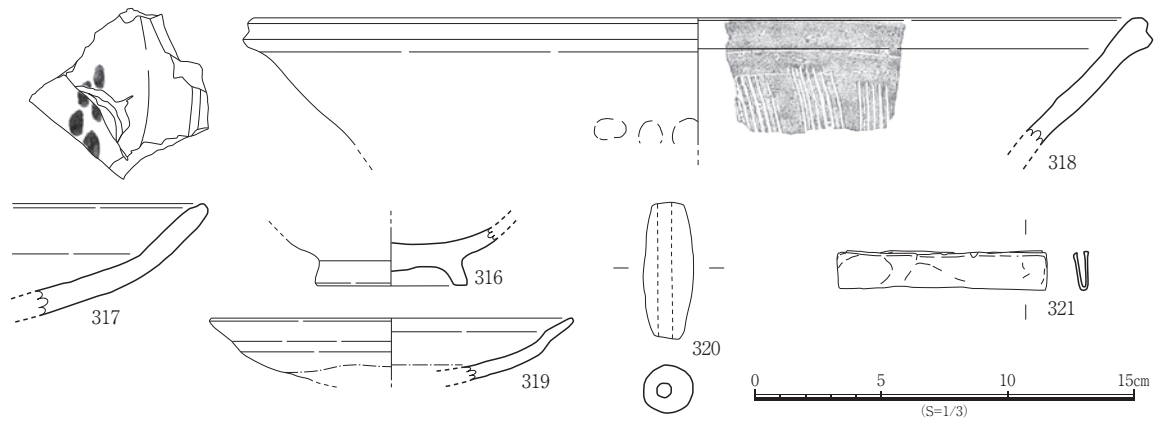


図81　SK－53出土遺物実測図

施す。318は上層より出土した丹波焼の焼締陶器擂鉢である。口縁端部は肥厚し，凹線が巡る。調整は回転ナデで，体部外面に指頭圧痕が残る。内面には6条単位の櫛描の擂目がみられる。319は肥前産の青磁皿で，折縁形である。内面から体部外面に青磁釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。焼成不良で釉は溶けていない。外面体部下半は回転ケズリ調整で無釉である。320は土製品土錘で，紡錘形を呈する。全面ナデ調整で，指頭圧痕と黒斑が残る。孔径0.6cmを測る。321は銅製品小柄で，内部に鉄製の中茎が残る。錆化により文様は不明である。

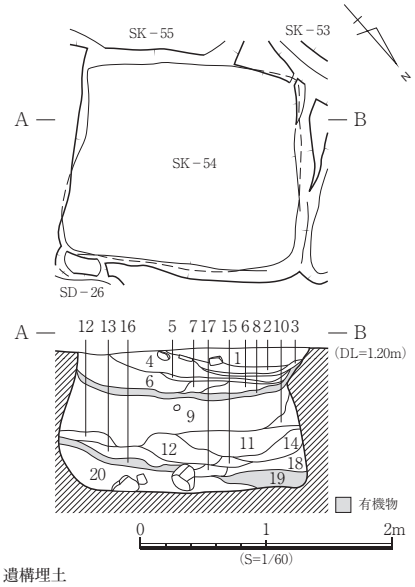
SK－54（遺構：図82　遺物：図85－322～330）

2区南部で検出した土坑で，SD－26を切り，SK－55に切られる。平面形態は長方形を呈し，長辺1.91m，短辺1.75m，深さ1.15mを測る。埋土は20層に分かれ，埋土8・16・19は有機物の堆積または木片を多く含んでいた。出土遺物には陶器39点（碗4，皿6，蓋1，鉢1，擂鉢1，甕1，細片25），磁器21点（碗3，皿4，小杯5，細片9），土師質土器13点（小皿3，細片10），木製品17点（漆器椀2，漆器盤1，箸4，漆器桶1，漆工品1，漆器片2，曲物1，下駄3，加工木2），金属製品煙管1点，瓦124点（軒丸瓦3，軒平瓦5，鬼瓦1，丸瓦28，平瓦87）がみられ，陶器皿（322）と磁器皿（323），磁器小杯（324～326），木製品3点（327～329），金属製品煙管（330）を図示した。

322は埋土9より出土した肥前内野山窯の陶器皿である。内面には銅緑釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。外面は灰釉を施すが，被熱する。高台は削り出しで無釉である。323は埋土7より出土した肥前有田産の磁器染付皿で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。見込には草花文と垣文，外面には唐草文と圏線，高台内には圏線の染付がみられる。324～326は肥前産の磁器小杯である。324・325は白磁で，端反形である。全面に光沢のある白磁釉を施す。325は上層より出土した。畳付を釉ハギする。326は染付小杯で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。外面には圏線と染付の一部がみられる。畳付には粗砂が付着する。327は木製品漆器盤で，高台が付く。刳物で，内外面とも黒塗である。328・329は木製品加工木で用途は不明である。328・329は同一個体になる可能性が高く，板状で，平面形態はハート形を呈するものとみられる。側面には縦方向の加工痕が残る。329は未成品で，周縁の約0.5cm内側に墨のラインが残り，上部の抉りを途中まで切断している。330は金属製品煙管吸口で，全面が錆化する。

SK－55（遺構：図83　遺物：図85－331～337）

2区南部で検出した土坑で，SK－53に切られ，SK－54を切る。平面形態は長方形を呈し，長辺2.06m，短辺1.87m，深さ1.03mを測る。埋土は12層に分かれ，下層は有機物及び腐植の堆積であった。出土遺物には陶器19点（碗8，皿1，擂鉢3，甕1，人形1，細片5），磁器25点（碗6，皿5，蓋物蓋1，



遺構埋土
1. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂で，小礫～大礫を含む
2. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂～中粒砂で，細礫と木片を含む
3. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒砂で，小礫と木片を含む
4. 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂で，小礫～大礫と木片を含む
5. 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質中粒砂で，小礫と木片を含む
6. オリーブ黒色(2.5Y3/1)シルト質粗粒砂で，小礫と木片を含む
7. 灰色(5Y4/1)シルト質細粒砂
8. 黒色(2.5Y2/1)シルト質細粒砂で，有機物を多く含む
9. 灰色(5Y4/1)粗粒砂で，小礫～中礫を含む
10. 灰色(7.5Y4/1)シルト質粗粒砂で，小礫を含む
11. 灰色(5Y4/1)シルト質粗粒砂で，小礫～中礫を含む
12. 褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒砂
13. 灰色(7.5Y4/1)シルト質粗粒砂で，小礫を含む
14. 灰色(10Y4/1)シルト質粗粒砂で，小礫を含む
15. 灰色(7.5Y4/1)シルト質中粒砂で，小礫を含む
16. 黒色(2.5Y2/1)シルト質細粒砂で，有機物を多く含む
17. 褐灰色(10YR4/1)シルト質細粒砂
18. 灰色(7.5Y4/1)シルト質細粒砂で，炭化物を多く含む
19. 灰色(5Y4/1)シルト質中粒砂で，木片を多く含む
20. 灰色(7.5Y4/1)シルト質粗粒砂で，小礫～大礫を多く含む

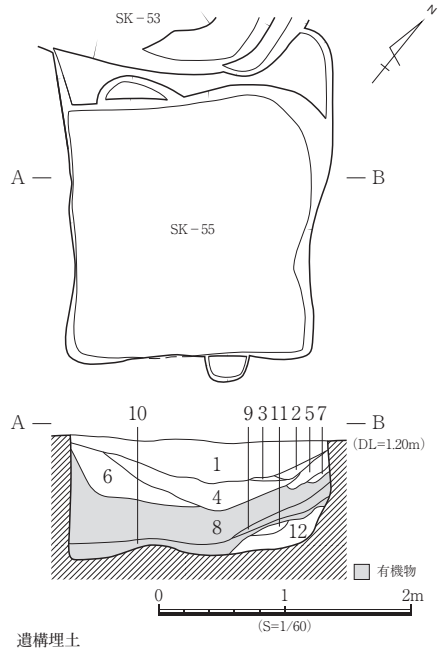
図82　SK－54

瓶1，細片12)，青磁皿1点，土師質土器8点(皿2，小皿2，細片4)，須恵器甕2点，瓦質土器火鉢1点，木製品16点(漆器椀1，箸3，下駄2，建築材1，加工木9)，瓦102点(軒丸瓦1，鳥衾瓦1，丸瓦16，平瓦84)がみられ，陶器皿はSK－58より出土した陶器皿(343)と接合した。図示した遺物は，陶器碗3点(331～333)と陶器甕(334)，青磁皿(335)，土師質土器皿(336)，木製品漆器椀(337)，三ツ葉柏文軒丸瓦(788)である。

331～333は陶器碗である。331は瀬戸・美濃産の天目碗で，全面に鉄釉を施す。332は全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。釉には貫入が入る。333は尾戸焼とみられる碗で，全面に灰釉を施し，釉には御本が入る。畳付には砂が付着する。334は上層より出土した肥前産の陶器甕で，内面は格子状タタキ調整の後ナデ調整で，一部に鉄釉が掛かる。外面には多条沈線とヘラ描による波状文がみられ，鉄釉を施す。335は中国産の青磁皿の脚部で，全面に青磁釉を施す。見込には陽刻の菊弁文とみられる文様，脚外面には陽刻の花文がみられる。336は土師質土器皿で，内面から口縁部外面に金彩を施す。体部外面はナデ調整である。337は木製品漆器椀で，内外面とも赤塗である。

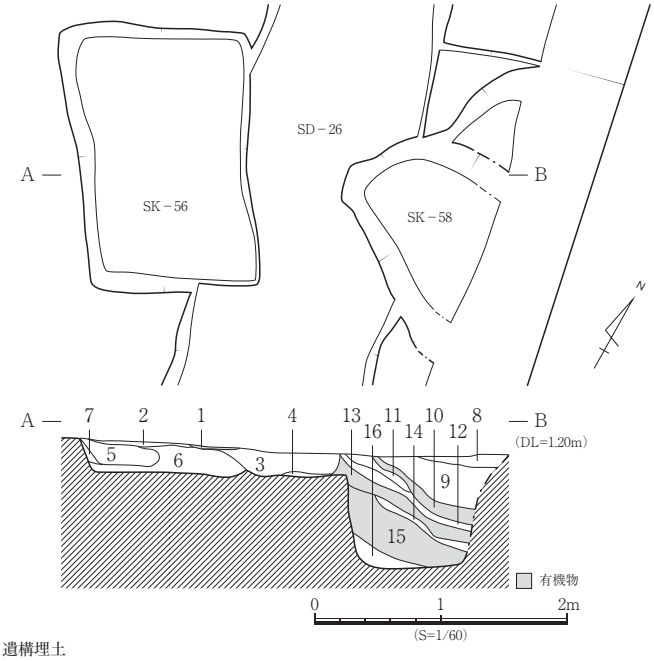
SK－56(遺構：図84　遺物：図85－338)

2区南部で検出した土坑で，SD－26に切られる。平面形態は長方形を呈し，長辺2.70m，短辺



遺構埋土
1. 灰色(10Y4/1)シルト質中粒砂で，小礫～中礫とオリーブ黒色シルト質粗粒砂のブロックを含む
2. 灰色(7.5Y4/1)シルト質細粒砂～粗粒砂
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質中粒砂
4. オリーブ黒色(7.5Y2/2)シルト質細粒砂～粗粒砂で，小礫～大礫を含む
5. オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粗粒砂で，小礫を含む
6. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質細粒砂～粗粒砂で，小礫～大礫を含む
7. 灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト
8. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質中粒砂～粗粒砂質シルトで，小礫～大礫を含み，木片と有機物を多く含む
9. 黒色(7.5Y2/1)細粒砂質シルトで，有機物の堆積
10. 黒色(7.5Y2/1)細粒砂～中粒砂質シルトで，腐植と有機物の堆積
11. 灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルト
12. オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粗粒砂

図83　SK－55



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)中粒砂質シルトで，腐植の堆積
2. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルトで，1cm大と10cm大の礫を含む
3. 褐色(10YR4/6)中粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を含む(SD－26埋土1)
4. 黄褐色(2.5Y5/4)シルトで，一部は暗オリーブ灰色に変色する(SD－26埋土2)
5. オリーブ黒色(10Y3/2)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を少し含む(ピット)
6. オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を含む(SK－56埋土1)
7. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト(SK－56埋土2)
8. 褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルトで，下部は暗オリーブ灰色に変色する(SK－58埋土1)
9. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，極粗粒砂と1～5cm大の礫・腐植を含む(SK－58埋土2)
10. 黒色(5Y2/1)極粗粒砂質シルトで，腐植の堆積(SK－58埋土3)
11. オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルトで，腐植を少し含む(SK－58埋土4)
12. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫と木片を含む(SK－58埋土5)
13. オリーブ黒色(7.5Y2/1)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を含み，木製品と腐植を多く含む(SK－58埋土6)
14. オリーブ黒色(5Y3/2)極粗粒砂質シルトで，木片を含む(SK－58埋土7)
15. オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂質シルトで，植物と木片を非常に多く含む(SK－58埋土8)
16. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粗粒砂(SK－58埋土9)

図84　SK－56・58，SD－26

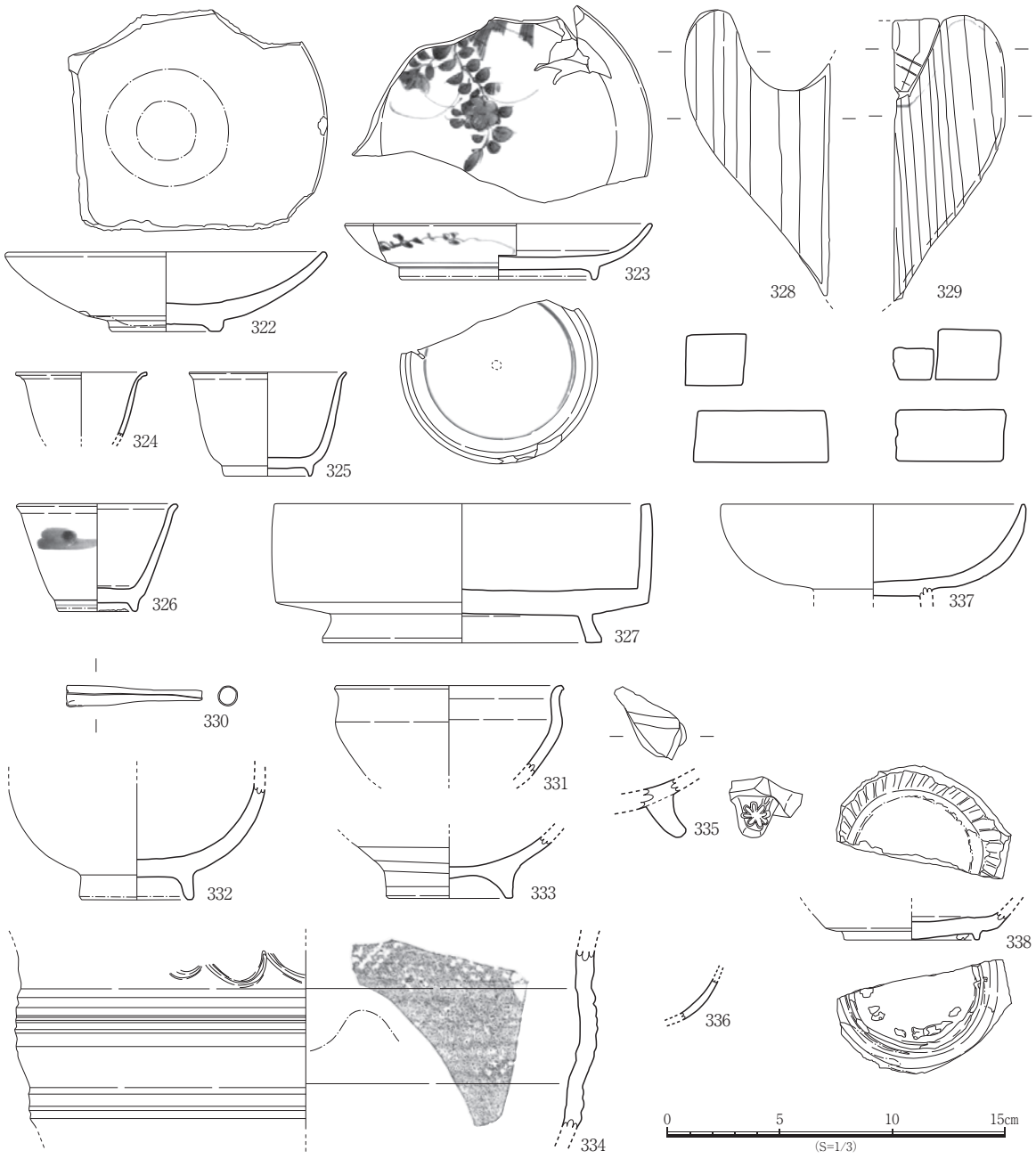


図85　SK－54～56出土遺物実測図

1.90m，深さ39㎝を測る。埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器2点（碗1，皿1），土師質土器8点（杯1，小皿1，細片6），土師器2点（椀1，細片1），瓦6点（軒丸瓦1，丸瓦3，平瓦2）がみられ，陶器皿（338）を図示した。338は瀬戸･美濃産の陶器小皿である。内面から高台外面まで緑釉を施し，見込は釉ハギを行う。口縁部内面には丸彫による菊弁文がみられる。高台内は無釉で，重ね焼痕が残る。

SK－57（遺構：図86　遺物：図87－339～342）

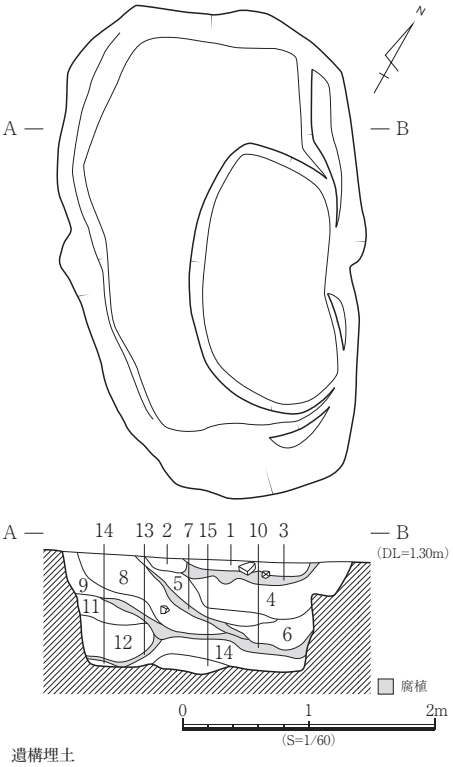
2区南部で検出した土坑で，SD－24を切る。平面形態は不整長方形を呈し，長辺3.91m，短辺2.38m，深さ1.09mを測る。埋土は15層に分かれ，埋土3・7・10・13は腐植の堆積であった。出土

遺物には陶器13点(皿3，蓋1，鉢1，擂鉢5，匣鉢1，細片2)，磁器碗1点，白磁碗1点，土師質土器29点(椀1，杯1，細片27)，須恵器甕2点，瓦質土器釜1点，木製品3点(漆器蓋1，栓1，木刀1)，石製品砥石1点，瓦13点(軒丸瓦1，軒平瓦1，丸瓦3，平瓦8)，骨1点がみられ，陶器皿(339)，陶器擂鉢(340)，木製品漆器蓋(341)，木製品木刀(342)を図示した。

339は瀬戸・美濃産の陶器小皿である。全面に灰釉を施し，見込にはピン痕，高台内には重ね焼痕が残る。340は埋土9より出土した丹波焼の焼締陶器擂鉢である。回転ナデ調整の後，外面の一部にケズリ調整を加える。内面には4条単位の櫛描の擂目と錆釉を施す。341は木製品漆器蓋で，内面が赤塗，外面が黒塗である。外面に金色で丸に紅葉文，摘内には金色で薄とみられる文様が残る。342は木製品玩具で，木刀である。刃部と鍔は別造で，表面には黒色の漆塗がみられる。刃部は先端が細く，中央には稜がみられ，刃は薄く加工する。基部は断面が楕円形を呈し，幅2.1cmを測る。鍔は隅切方形で，中央には長径2.3cm，短径1.5cmを測る楕円形の孔がみられる。

SK－58(遺構：図84　遺物：図87－343～349)

2区南部で検出した土坑で，SD－26に切られ，東は調査区外へ続く。平面形態は方形を呈するものとみられ，検出長2.47m，検出幅1.81m，深さ1.06mを測る。埋土は9層に分かれ，埋土3は腐植の堆積，埋土6・8は腐植や植物を非常に多く含んでいた。出土遺物には陶器5点(皿3，甕1，細片1)，磁器5点(碗1，小杯1，細片3)，土師質土器21点(杯1，小皿1，細片19)，木製品15点(漆器片3，箸3，桶1，下駄1，建築材か1，加工木6)，金属製品2点(小柄1，鉄釘1)，瓦99点(軒丸瓦3，軒平瓦1，丸瓦35，平瓦59，道具瓦1)，種1点がみられ，陶器皿(343～345)，磁器小杯(346)，木製品下駄(347)，金属製品2点(348・349)，瓦4点(三ツ葉柏文軒丸瓦：737，三巴文軒丸瓦：828，丸瓦：975，平瓦：995)を図示した。



遺構埋土
1. 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで，3～10cm大の礫を少し含む
2. 暗褐色(7.5Y3/4)粗粒砂質シルトで，瓦を含む
3. 褐灰色(7.5Y4/1)細粒砂質シルトで，腐植の堆積
4. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を多く含む
5. オリーブ黒色(10Y3/2)粗粒砂質シルトで，極粗粒砂と1cm大の礫を含む
6. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を多く含む
7. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルトで，腐植の堆積
8. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を含む
9. オリーブ黒色(10Y3/1)中粒砂質シルトで，3～5cm大の礫を含む
10. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，腐植の堆積
11. オリーブ黒色(10Y3/2)粗粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を多く含み，暗緑灰色礫を含む
12. オリーブ黒色(10Y3/2)粗粒砂質シルトで，極粗粒砂と炭化物を含む
13. オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を少し含む腐植の堆積
14. 灰色(5Y4/1)粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を少し含む
15. 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルトで，炭化物を含む

図86　SK－57

343～345は陶器皿である。343は唐津系灰釉陶器皿で，見込には灰釉を施し，蛇ノ目釉ハギを行う。外面は回転ナデ調整で一部に灰釉が流れる。高台は削り出しで無釉である。344は肥前産の溝縁皿で，内面には白化粧土で刷毛目文を描いた後，透明釉を施し，外面には灰釉を施す。345は肥前産の中皿で，埋土2より出土した。内面は被熱するため不明瞭であるが，白化粧土で刷毛目文を描き灰釉を施し，一部に緑彩がみられる。外面は回転ナデ調整及び回転ケズリ調整で無釉である。見込には砂目痕が3箇所に残る。346は肥前産の白磁小杯で，内面から高台まで白磁釉を施す。外面には丸彫による縞文がみられる。高台は削り出しで無釉である。347は木製品下駄で，連歯下

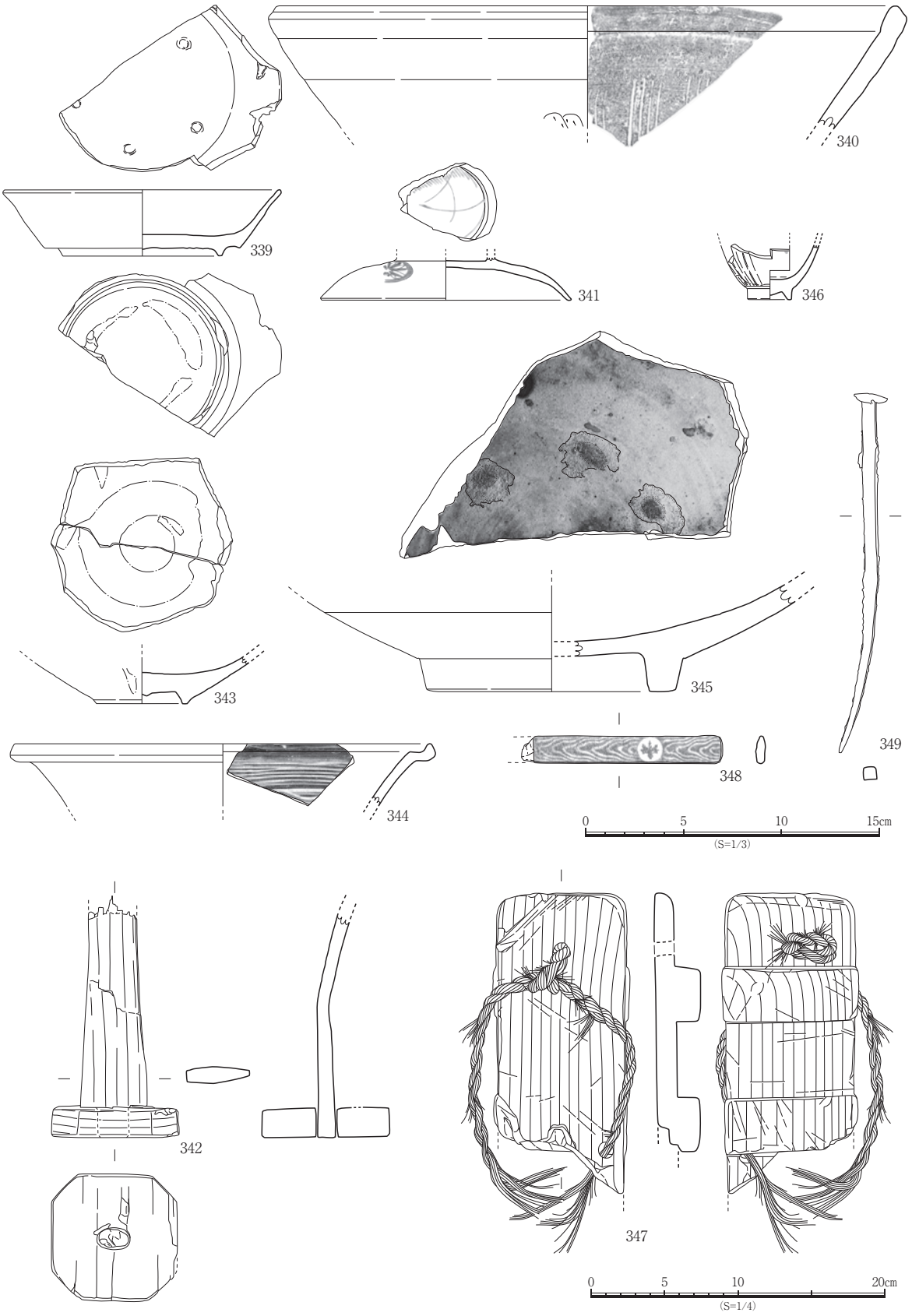
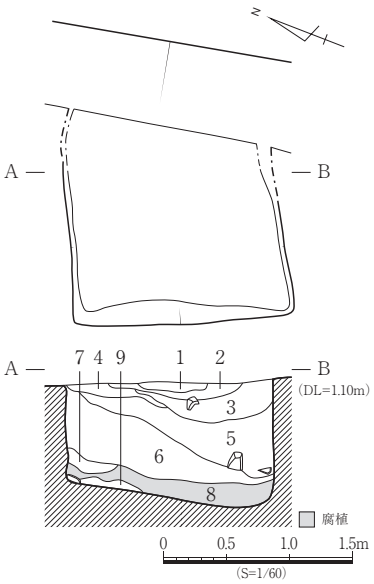


図87　SK－57・58出土遺物実測図

駄である。平面は隅丸方形を呈し，鼻緒が残存する。348は銅製品小柄で，内部には鉄製の中茎が残る。柄は完存し，木目状の彫文様に丸文がみられ，丸文は魚子地に打ち出しによる桐文とみられる文様が残る。349は鉄製品釘で，平面形態は丁字形，断面は方形を呈し，先端は細く尖る。湾曲し，錆化する。

SK－59(遺構：図88　遺物：図90－350)

2区南部で検出した土坑で，SD－26を切り，東は調査区外へ続く。平面形態は方形を呈するとみられ，長辺1.73m，検出幅1.56m，深さ1.06mを測る。埋土は9層に分かれ，埋土8は腐植の堆積であった。出土遺物には陶器6点(碗1，皿2，匣鉢1，細片2)，磁器3点(碗1，細片2)，土師質土器5点(皿1，白土器皿1，細片3)，木製品4点(箸1，桶蓋1，建築材1，板材1)，瓦62点(軒丸瓦2，軒平瓦2，丸瓦8，平瓦50)がみられ，陶器皿(350)を図示した。350は唐津系灰釉陶器皿で，内面には灰釉を施し，見込には胎土目痕が残る。外底は削り出しで無釉である。

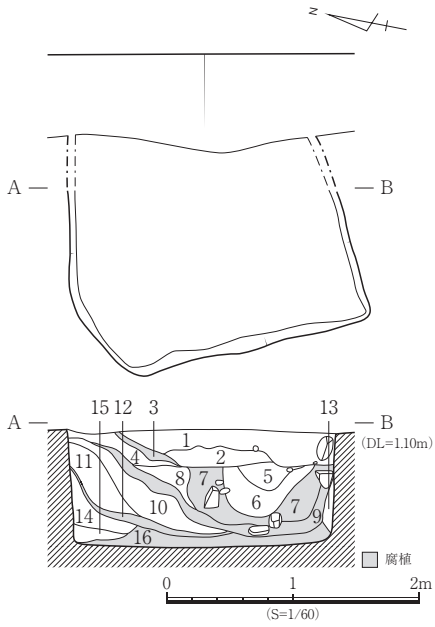


遺構埋土
1. 暗褐色(10YR3/4)中粒砂シルトで，漆喰を少し含む
2. オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトで，中粒砂を含む
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，炭化物と漆喰を含む
4. オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルトで，5cm大の礫を少し含む
5. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粗粒砂で，3～5cm大の礫を多く含み，下部に僅かな腐植の堆積が見られる
6. オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粗粒砂で，3～5cm大の礫を多く含み，灰色シルトのブロックを含む
7. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルトで，細粒砂と1cm大の礫を含む
8. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト質粗粒砂で，腐植の堆積
9. 灰色(5Y4/1)細粒砂質シルト

図88　SK－59

SK－60(遺構：図89　遺物：図90－351～353)

2区南部で検出した土坑で，SD－25・26を切り，東は調査区外へ続く。平面形態は方形を呈するとみられ，検出長1.98m，全幅2.24m，深さ1.02mを測る。埋土は16層に分かれ，埋土3・9・12・16は腐植の堆積であった。出土遺物には陶器8点(皿4，擂鉢1，筆筒か1，細片2)，磁器7点(皿3，小杯2，細片2)，土師質土器片1点，木製品7点(漆器片4，箸2，下駄1)，瓦36点(軒丸瓦1，軒平瓦1，丸瓦9，平瓦25)がみられ，陶器皿(351・352)と木製品箸(353)を図示した。351は瀬戸・美濃産の陶器小皿で，内面から高台付近まで灰釉を施す。高台は削り出しで無釉である。352は肥前内野山窯の陶器



遺構埋土
1. 褐色(10YR4/4)極粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を多く含み，20cm大の礫を含む
2. オリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで，3cm大の礫を少し含む
3. 黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルトで，腐植の堆積
4. 灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトで，1～2cm大の礫を含む
5. オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂質シルトで，1cm大の暗青灰色礫と腐植を少し含む
6. 黄灰色(2.5Y4/1)シルトで，3cm大の礫を少し含み，腐植を含む
7. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粗粒砂質シルトで，10～20cm大の礫を含み，腐植を多く含む
8. 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を含む
9. 灰色(7.5Y4/1)極粗粒砂質シルトで，腐植の堆積
10. オリーブ黒色(7.5Y3/2)極粗粒砂質シルト
11. 灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト
12. 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトで，腐植の堆積
13. オリーブ黒色(7.5Y3/2)中粒砂質シルト
14. 灰色(10Y4/1)細粒砂質シルトで，5cm大の礫を少し含む
15. 灰色(7.5Y4/1)中粒砂質シルトで，一部はオリーブ灰色に変色する
16. 灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトで，腐植の堆積

図89　SK－60

小皿である。内面から高台付近まで銅緑釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。釉は被熱するため光沢はみられない。高台は削り出しで無釉である。353は下層から出土した木製品箸である。断面は楕円形を呈し，先端は細く加工する。

④ 溝跡

SD－10（遺構：図91　遺物：図92－354～361）

1区北東部で検出したL字状を呈する溝跡で，両端は調査区外へ続き，SD－11を切り，撹乱とSD－13，SX－2に切られる。検出長10.77m，検出幅2.93m，深さ1.57mを測る。断面は逆台形を呈し，基底面の高さは東（－0.315m）からコーナー部（－0.406m），北（－0.611m）へと傾斜する。埋土は7層に分かれ，上層は砂質シルト，中層から下層はシルトであった。出土遺物には，陶器11点（碗1，中皿2，皿4，擂鉢1，細片3），磁器3点（大皿1，瓶1，細片1），青花皿1点，土師質土器7点（皿3，小皿1，細片3），土製品鞴羽口3点，木製品5点（漆器椀2，漆器箱物1，漆器片1，下駄1），獣骨がみられた。図示した遺物は，陶器碗（354）と陶器皿（355），青花皿（356），土製品鞴羽口3点（357～359），木製品漆器椀（360・361）で，356は最下層から，その他は上層からの出土である。

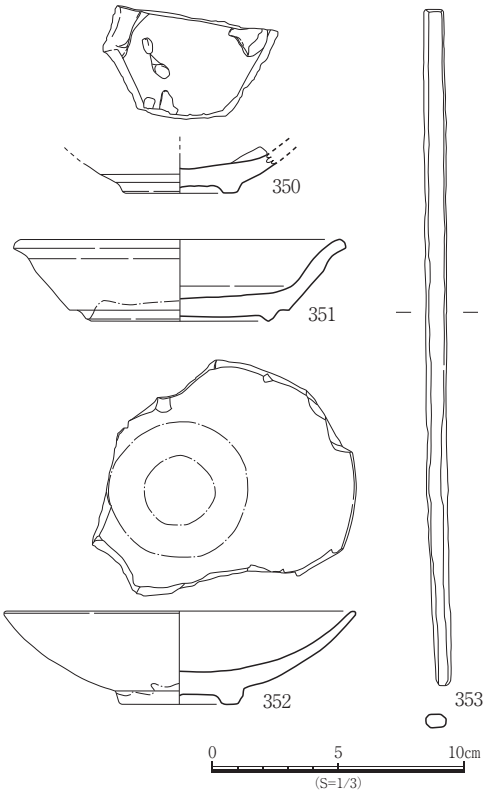
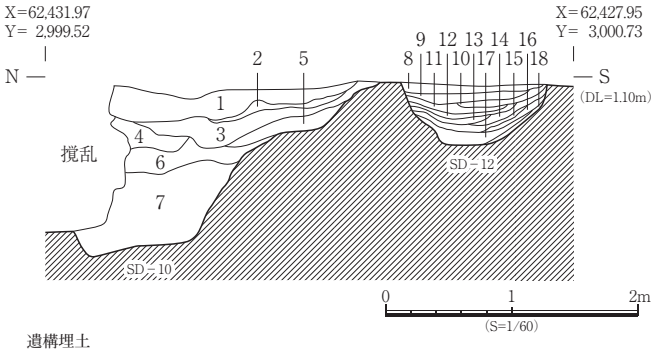


図90　SK－59・60出土遺物実測図

354は肥前産とみられる陶器丸碗である。全面に施釉するが，被熱するため釉に光沢がみられない。355は肥前産の絵唐津小皿で，内面から体部外面まで灰釉を施す。見込には鉄錆による花文がみられる。356は中国景徳鎮窯系の青花皿で，内面から高台付近まで透明釉を施し，高台内は無釉である。見込と外面には圏線と染付の一部がみられる。357～359は土製品鞴羽口である。円筒形を呈し，外面の調整はナデで，内面には棒状の圧痕が残る。357・358の先端には鉄滓が付着する。359は基部が残存し，基部はナデ調整を施す。360・361は木製品漆器腰丸椀で，外面は黒塗，内面は赤塗である。外面には朱色の文様がみられる。



遺構埋土
1．暗灰黄色（2.5Y4/2）極細粒砂質シルト（SD－10）
2．灰オリーブ色（5Y4/2）細粒砂質シルト（SD－10）
3．オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土質シルト（SD－10）
4．灰オリーブ色（5Y5/3）極細粒砂質シルト（SD－10）
5．灰オリーブ色（5Y4/2）極細粒砂質シルト（SD－10）
6．オリーブ黒色（10Y3/1）シルト（SD－10）
7．黒色（10Y2/1）シルト（SD－10）
8．浅黄色（2.5Y7/4）中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を多く含む（SD－12）
9．黄灰色（2.5Y5/1）粘土質シルトで，粗粒砂を含む（SD－12）
10．灰色（5Y6/1）細粒砂質シルトで，粗粒砂を含む（SD－12）
11．灰オリーブ色（5Y5/3）細粒砂質シルト（SD－12）
12．灰色（7.5Y4/1）粘土質シルト（SD－12）
13．オリーブ灰色（10Y5/2）細粒砂質シルト（SD－12）
14．灰色（7.5Y4/1）中粒砂質シルト（SD－12）
15．オリーブ灰色（10Y5/2）シルト質粘土（SD－12）
16．黄灰色（2.5Y4/1）粘土質シルトで，中粒砂を含む（SD－12）
17．オリーブ灰色（10Y4/2）シルト質粘土（SD－12）
18．灰色（5Y5/1）中粒砂質シルト（SD－12）

図91　SD－10・12

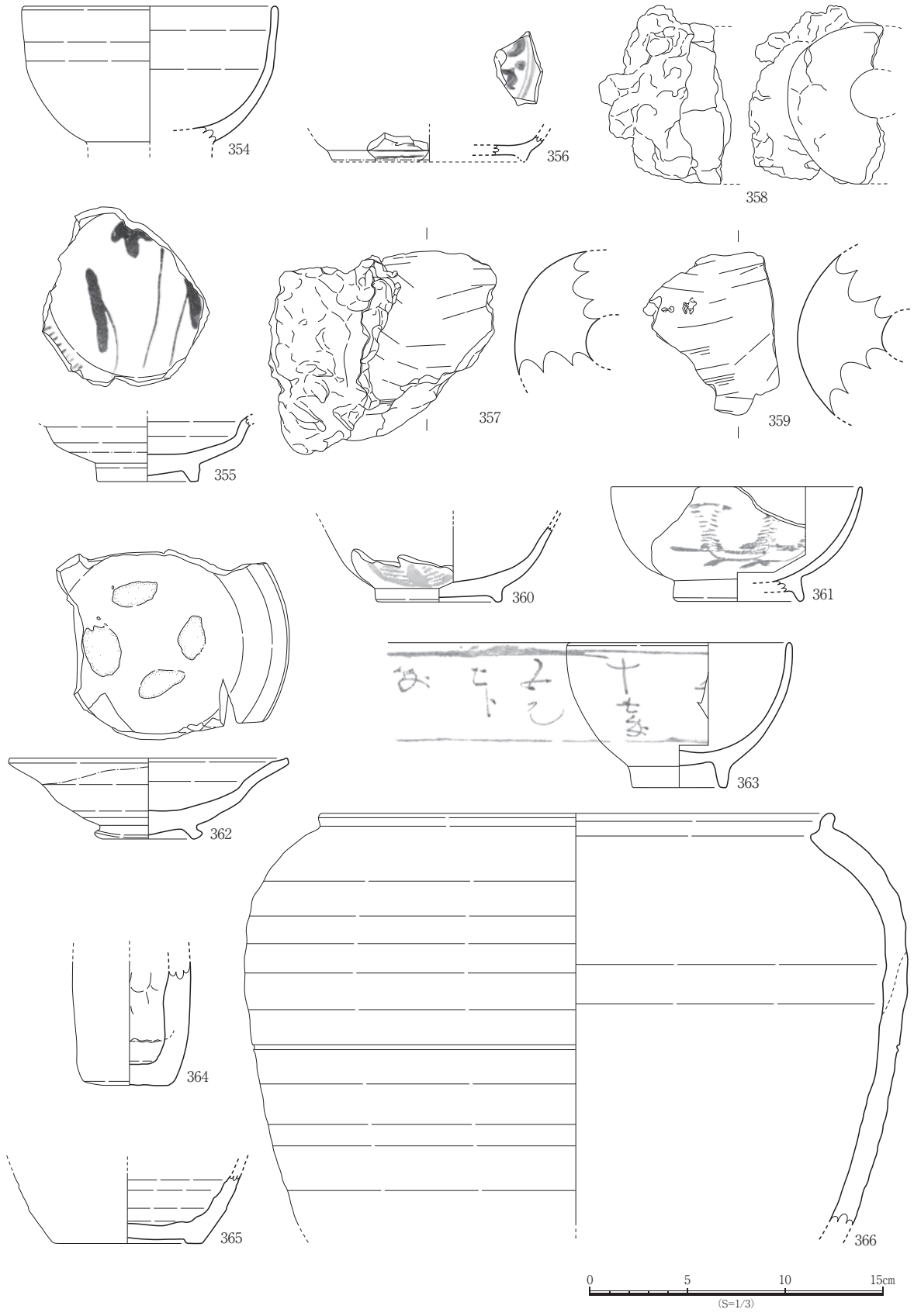
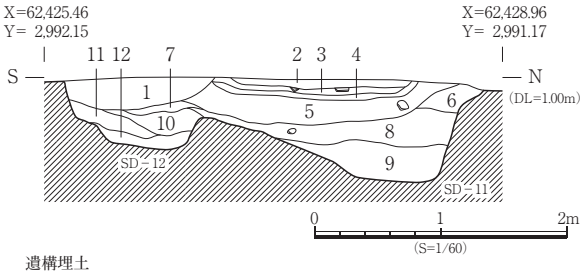


図92　SD－10～12出土遺物実測図

SD－11（遺構：図93　遺物：図92－362～364）

1区北東部で検出した東西溝跡で，SD－12を切り，SK－5・10とSD－10・13，SX－1・2・7・8・11に切られる。検出長21.48m，検出幅1.77m，深さ98㎝を測る。断面は逆台形を呈し，基底面は西（0.324m）から東（－0.012m）へ傾斜する。埋土は9層に分かれ，砂質シルトまたはシルトであった。出土遺物には，陶器4点（碗1，皿2，細片1），磁器碗1点，土師質土器2点（皿1，小皿1），土師器焼塩壺1点，木製品漆器片1点，瓦66点（軒丸瓦14，軒平瓦8，丸瓦10，平瓦31，道具瓦2，その他1），獣骨がみられ，下層から出土した陶器皿（362），磁器碗（363），土師器焼塩壺（364），瓦11点（三巴文軒丸瓦：799・804・811・813・830・840，三葉文軒平瓦：864，橘文軒平瓦：913・928・931，平瓦系道具瓦：1066）を図示した。



遺構埋土
1. 褐灰色（10YR5/1）シルト質細粒砂（SD－11）
2. 灰色（10YR4/1）細粒砂質シルト（SD－11）
3. 灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト（SD－11）
4. オリーブ黒色（5Y3/2）細粒砂質シルト（SD－11）
5. 暗灰黄色（2.5Y4/2）シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を含む（SD－11）
6. オリーブ黒色（5Y3/2）細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を多く含む（SD－11）
7. オリーブ黒色（5Y3/2）シルト質粗粒砂で，0.5cm大の礫を多く含む（SD－11）
8. オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルトで，粗粒砂を少し含む（SD－11）
9. オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルトで，1cm大の礫と炭化物を少し含む（SD－11）
10. オリーブ黒色（5Y3/2）シルトで，木片を含む（SD－12）
11. オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト（SD－12）
12. 灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト（SD－12）

図93　SD－11・12

362は唐津系灰釉陶器溝縁小皿で，内面から口縁部外面まで灰釉を施し，高台は無釉である。見込には砂目痕が残る。363は肥前産の磁器染付丸碗である。内面から高台外面まで透明釉を施し，高台内は無釉である。焼成不良で釉は白濁する。外面には圏線と「十七両五匁七分銭」字の染付がみられる。364は土師器焼塩壺で，輪積成形である。内面には指頭圧痕が残るが，摩耗するため調整は不明である。

SD－12（遺構：図91・93　遺物：図92－365・366）

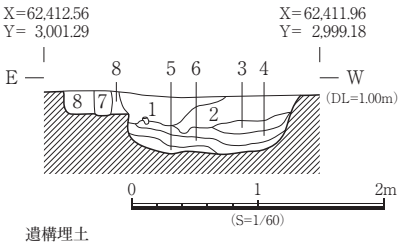
1区北東部で検出した東西溝跡で，SX－4を切り，SK－5とSD－11・13，SX－1・8に切られる。検出長14.52m，幅1.26m，深さ62㎝を測る。断面は舟底形を呈し，基底面は東（0.575m）から西（0.412m）へ傾斜する。埋土は11層に分かれ，下層は灰色砂質シルトとオリーブ灰色シルト質粘土の互層となる。出土遺物には，陶器4点（碗1，中皿1，鉢1，壺1），磁器片1点，土師質土器片2点，瓦26点（軒平瓦1，丸瓦4，平瓦21），獣骨がみられた。図示した遺物は，陶器鉢（365）と陶器壺（366），橘文軒平瓦（902）である。365は焼締陶器鉢である。回転ナデ調整で，外面にはナデ調整を加える。外底は削り出しである。366は備前焼壺で，口縁部は受口状を呈する。回転ナデ調整で，内面体部下半にはナデ調整を加える。外面には沈線が1条巡る。

SD－13（遺構：図94・95・135　遺物：図96－367～391）

1区東部と2区東部で検出した南北溝跡で，SX－1・6に切られ，SD－10～12とSX－2・4・12を切る。両端は調査区外へ続き，検出長43.87m，幅2.68m，深さ1.03mを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は北（0.612m）から中央（0.197m），南（0.421m）へ傾斜する。埋土は6～8層に分かれ，北部は砂質シルトまたはシルト，粘土質シルト，南部はシルトまたは砂質シルトであった。出土遺物には，陶器61点（碗6，中皿2，皿19，鉢1，擂鉢10，匣鉢1，甕2，細片20），磁器35点（碗9，皿5，小杯3，香炉1，瓶1，細片16），土師質土器21点（杯2，皿1，小皿5，細片13），土師器2点（焙烙1，焼塩壺蓋1），土製品不明1点，石製品砥石1点，木製品12点（漆器椀3，木簡1，蓋物1，下駄2，建築材1，板材2，加工木2），金属製品

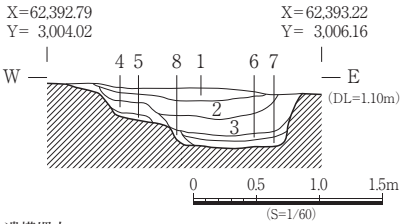
3点(銭貨1，釘2)，瓦1,874点(軒丸瓦44，軒平瓦17，丸瓦450，平瓦1,361，桟瓦2)，獣骨3点，貝11点，鉄滓1点がみられた。図示した遺物は367～391の25点と瓦10点(三ツ葉柏文軒丸瓦：743・786・787，三巴文軒丸瓦：836，三葉文軒平瓦：873，三ツ葉柏文軒平瓦：945，丸瓦：977・981，平瓦：1002・1014)である。

367は肥前産の陶器碗で，内面に鉄釉を施す。高台内は無釉である。368は肥前内野山窯の陶器丸碗で，内面には鉄釉，外面には緑釉を施し，貫入が入る。369・370は肥前産の絵唐津小皿で，内面から体部外面に灰釉を施し，内面には錆絵がみられる。369は外面体部下半が回転ケズリ調整で，口縁端部の一部と高台は無釉である。370は丸皿で，見込には砂目痕が残る。371～373は唐津系灰釉陶器小皿である。371は内面から体部外面まで灰釉を施し，高台は無釉である。外面体部下半は回転ナデ調整で，高台内は兜巾を削り取った痕跡，見込には胎土目痕が残る。372は内面から外面体部下半まで灰釉を施し，高台内は無釉である。見込には砂目痕が残る。373は内面から高台外面まで灰釉を施し，高台内は無釉である。374は肥前産の陶器中皿である。端反形で口縁部は指頭圧により輪花形を呈する。全面に灰釉を施す。375は陶器匣鉢である。回転ナデ調整で，外底は無調整である。体部には径1.4cmの円孔がみられる。376は肥前産の陶器甕で，口縁部はT字形を呈する。口縁部内面を除き鉄釉を施す。口縁部内面はナデ調整で指頭圧痕が残る。377は肥前産の磁器染付天目碗で，初期伊万里である。外面に丸彫による縞文，蓮弁文と「福寿」「寿福」字・圏線の染付がみられる。378は肥前産の磁器染付碗で，内面から高台外面まで透明釉を施し，畳付と高台内は無釉である。外面には圏線と染付の一部がみられる。379は肥前産の磁器染付皿である。全面に透明釉を施した後，畳付は釉ハギし，高台内には砂が付着する。見込には圏線と人物文の染付を描く。380は肥前産の白磁小杯である。内面から高台付近まで白磁釉を施し，高台は無釉である。外面には丸彫による縞文がみられる。381は肥前産の磁器染付小杯で，内面から体部外面まで透明釉を施し，高台は削り出しで無釉である。外面には丸彫による縞文と染付の一部がみられる。382は肥前産の磁器染付猪口で，外面に格子文と圏線の染付，高台内に「宣徳年製」の銘がみられる。383は肥前産の青磁香炉で，2箇所に獣足形の脚が残る。体部内面から外面に青磁釉を施し，畳付は釉ハギし，錆釉を塗る。見込は回転ナデ調整及び回転ケズリ調整で無釉である。384は土師質土器杯である。底部の器壁が厚く，口縁部は外上方に真っすぐ伸びる。水挽成形で，調整は回転ナデ，底部の切り離しは回転糸切りである。385・386は土師質土器小皿である。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。385は口縁端部に，386は内外面に煤が付着する。387は木製品木簡で，短冊形を呈する。片面に「うしろ同々おあらため」の墨書がみられる。388は木製品漆



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルトで，粗粒砂と3cm大の礫を含む(SD－13)
2. オリーブ黒色(10Y3/1)粗粒砂質シルトで，1～5cm大の礫を多く含む(SD－13)
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を含む(SD－13)
4. オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト(SD－13)
5. オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルトで，粗粒砂を少し含む(SD－13)
6. 黒色(5Y2/1)粘土質シルト(SD－13)
7. 灰色(5Y4/1)シルト(ピット)
8. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，3cm大の礫を少し含む(ピット)

図94　SD－13中央部



遺構埋土
1. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで，0.5～3cm大の礫を含む
2. オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトで，5cm大の礫と木片を含む
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，3～5cm大の礫と少量の炭化物を含む
4. 灰色(10Y4/1)細粒砂質シルトで，5～10cm大の礫を少し含む
5. 灰色(7.5Y4/1)シルトで，5cm大の礫を少し含む
6. 灰色(7.5Y4/1)シルトで，白色風化礫の堆積が見られる
7. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルトで，中粒砂を僅かに含む
8. 灰色(10Y4/1)シルトで，炭化物を僅かに含む

図95　SD－13南部

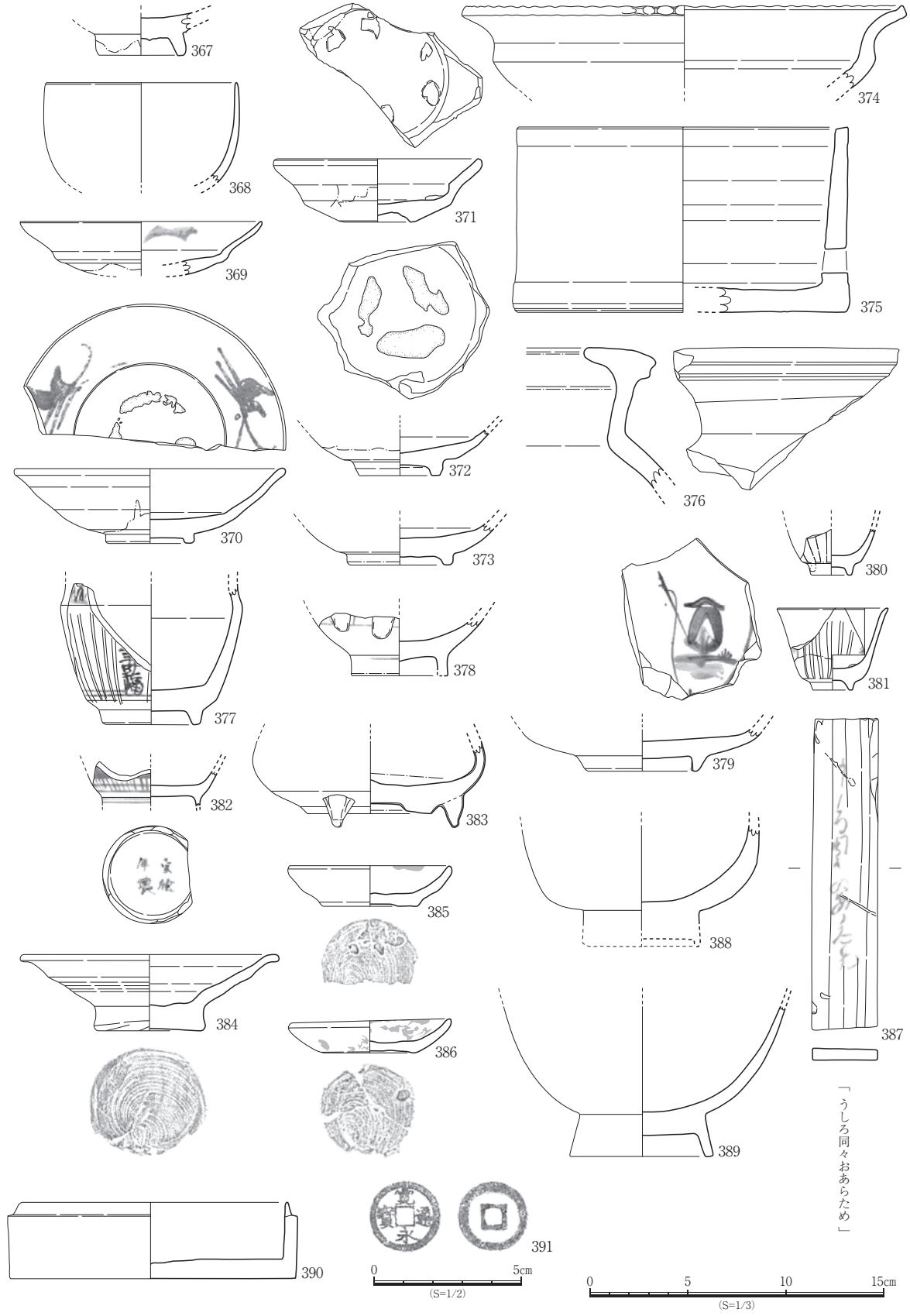


図96　SD－13出土遺物実測図

器腰丸椀で，底部が欠損する。内面は黒色の下地に赤塗，外面は黒塗である。389は木製品漆器腰丸椀で内外面とも赤塗である。高台が高く，高台内は半ばまで抉る。390は木製品蓋物で，刳物である。円筒形を呈し，器高は3.9cmを測る。口縁端部の外側を削り，受部としている。391は銭貨で寛永通寶である。古寛永で，鋳銭年代は1636～1659年である。

SD－14（遺物：図101－392～394）

1区北西部で検出した南北溝跡で，SK－9・10に切られ，北は調査区外へ続く。検出長2.95m，幅0.89m，深さ54～83cmを測る。断面は半円形を呈し，基底面は北（0.362m）から南（0.163m）へ傾斜する。埋土は2層に分かれ，上層は暗灰色シルト質細粒砂，下層はオリーブ黒色細粒砂質シルトで，10cm大の礫と灰色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には，陶器皿1点，木製品漆器椀2点がみられ，陶器皿（392）と木製品漆器椀（393・394）を図示した。392は瀬戸・美濃産の陶胎染付小皿である。太白手で，白化粧土を施した後，内面に鉄錆で花唐草文と圏線を描き，内面から高台外面まで透明釉を施し，高台は削り出しで無釉である。高台内には砂目痕が残る。393・394は木製品漆器腰丸椀で，外面は黒塗，内面は赤塗である。393の外面には朱色で笹文とみられる文様を描く。394は大きく歪み，外面には朱色の丸に紅葉文がみられる。

SD－15（遺構：図97）

1区西部で検出した南北溝跡で，両端は調査区外へ続く。検出長9.48m，幅0.63m，深さ39cmを測る。断面はU字形を呈し，基底面はほぼ平ら（0.663m）であった。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトで，0.5～1cm大の礫と粗粒砂を含み，グライ化していた。出土遺物には，陶器片1点，土師質土器2点（椀1，皿1），獣骨がみられたが，図示できる遺物はなかった。

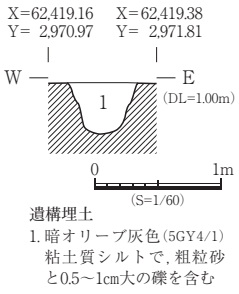


図97　SD－15

SD－16（遺構：図98　遺物：図101－395）

1区西部で検出した南北溝跡で，両端は調査区外へ続き，SB－1とSA－1に切られる。検出長9.73m，幅1.54m，深さ39cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は北（0.720m）から南（0.691m）へ傾斜する。埋土は4層に分かれ，上層は粘土質シルト，下層は砂質礫であった。出土遺物には，磁器片1点，土師質土器13点（杯1，皿2，小皿1，細片9），木製品2点（漆器椀1，箸1），軒平瓦1点がみられ，下層から出土した土師質土器杯（395）と三葉文軒平瓦（859）を図示した。395は土師質土器杯である。回転ナデ調整で見込にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。口縁部内面に煤が付着する。

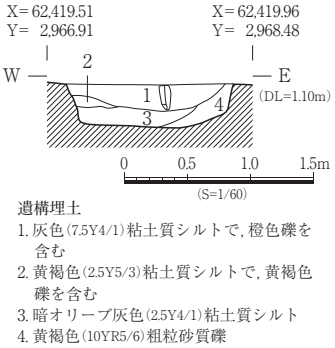


図98　SD－16

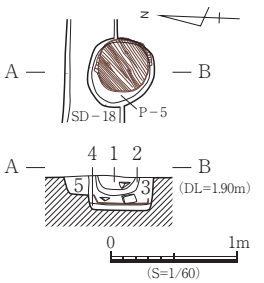
SD－17

1区西部で検出した南北溝跡で，撹乱とSB－1に切られ，南は調査区外へ続く。検出長5.76m，幅0.91m，深さ8cmを測る。基底面は北（1.073m）から南（1.031m）へ緩やかに傾斜する。埋土は褐灰色粘土質シルトで，少量の橙色礫と酸化鉄を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD－18（遺構：図99）

2区北西部で検出した東西溝跡で，P－5に切られる。検出長3.93m，幅0.53m，深さ19cmを測る。断面は舟底形を呈し，基底面は西（1.659m）から東（1.592m）へ傾斜する。埋土は暗褐色中粒砂質シル

トで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器2点（瓶1，細片1），土師質土器3点（皿2，細片1），瓦9点（丸瓦5，平瓦4）がみられたが，図示できる遺物はなかった。



遺構埋土
1. 褐色（10YR4/4）細粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を含む（P－5）
2. 黄褐色（10YR5/8）細粒砂質シルト（P－5）
3. にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂質粘土で，0.5～1cm大の礫を含む（P－5）
4. 灰黄褐色（10YR4/2）粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と炭化物を含む（P－5）
5. 暗褐色（10YR3/3）中粒砂質シルトで，1～3cm大の礫と炭化物を含む（SD－18）

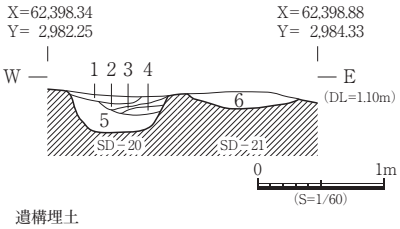
図99　SD－18，P－5

SD－19

2区北部で検出した南北溝跡で，北は調査区外へ続き，南は撹乱を受ける。蛇行しており，検出長3.04m，幅0.70m，深さ14cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は南（0.906m）から北（0.875m）へ緩やかに傾斜する。埋土は褐色細粒砂質シルトで，0.5cm大の橙色礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点，土師器片1点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SD－20（遺構：図100）

2区北部で検出した南北溝跡で，SK－39を切り，南は撹乱を受ける。検出長1.62m，幅0.81m，深さ44cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は南（0.704m）から北（0.592m）へ傾斜する。埋土は5層に分かれる。出土遺物には土師質土器片2点，土師器片3点，須恵器椀1点，平瓦3点がみられたが，図示できる遺物はなかった。



遺構埋土
1. オリーブ黒色（7.5Y3/1）細粒砂質シルトで，中粒砂と1cm大の礫を含む（SD－20）
2. オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト質細粒砂で，粗粒砂を少し含む（SD－20）
3. 灰オリーブ色（5Y4/2）粗粒砂で，1cm大の礫を少し含む（SD－20）
4. 灰色（10Y4/1）シルトで，細粒砂を少し含む（SD－20）
5. オリーブ黒色（7.5Y3/1）細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含む（SD－20）
6. 灰黄褐色（10YR4/2）細粒砂質シルトで，酸化鉄を非常に多く含む（SD－21）

図100　SD－20・21

SD－21（遺構：図100）

2区北部で検出した南北溝跡で，SK－39を切り，両端は撹乱を受ける。検出長2.90m，検出幅1.19m，深さ17cmを測る。断面は皿状を呈し，基底面は北（1.023m）から南（0.893m）へ傾斜する。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトで，酸化鉄を非常に多く含んでいた。出土遺物には土師質土器11点（杯1，細片10），須恵器甕2点，丸瓦2点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SD－22

（遺構：図102　遺物：図101－396）

2区南部で検出した南北溝跡で，SE－2に切られ，北は撹乱を受ける。検出長3.63m，検出幅0.75m，深さ24cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は北（1.002m）から南（0.966m）へ

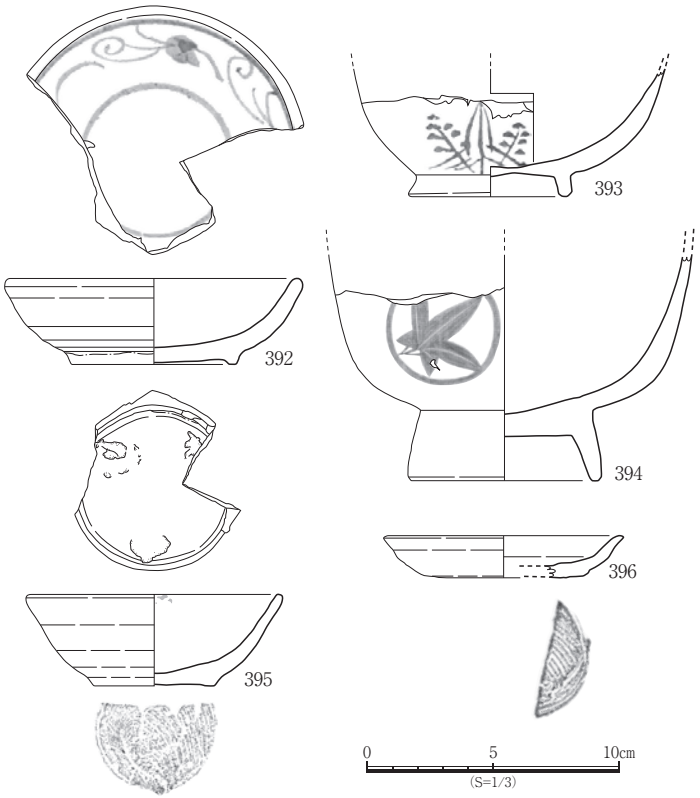


図101　SD－14・16・22出土遺物実測図

傾斜する。埋土はオリーブ黒色細粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を含む。出土遺物には土師質土器23点(椀1，杯1，小皿1，細片20)，土師器片3点，須恵器2点(甕1，細片1)がみられ，土師質土器小皿(396)を図示した。396は土師質土器小皿である。回転ナデ調整とみられるが，摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りである。

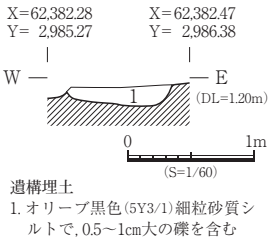
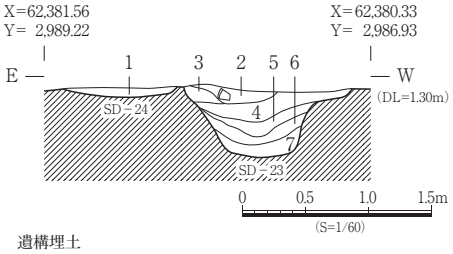


図102　SD－22

SD－23(遺構：図103～105　遺物：図106－397～405)

2区南部で検出した「く」の字状に伸びる溝跡で，SD－24・25を切る。北は撹乱を受ける。検出長16.14m，幅2.08m，深さ62cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は東(1.010m)から北(0.597m)へ傾斜する。埋土は4～6層に分かれ，上層には約10cm大の角礫が多量にみられた。石材はチャートが大半で，少量の砂岩や石灰岩・安山岩などが含まれていた。出土遺物には陶器20点(碗1，皿7，甕1，細片11)，磁器4点(碗3，細片1)，土師質土器172点(椀4，杯6，小皿5，細片157)，土師器片8点(1点布目痕あり)，須恵器6点(甕4，細片2)，瓦器片4点，瓦質土器2点(釜1，甕1)，土製品土錘1点，石製品砥石1点，木製品8点(漆器蓋か1，箸3，栓1，下駄3)，瓦84点(軒丸瓦1，軒平瓦1，丸瓦19，平瓦63)がみられ，397～405の9点を図示した。

397は下層から出土した美濃産の陶器天目碗で，白天目である。内面から高台付近まで長石釉を施す。釉には貫入が入る。398・399は上層から出土した唐津系灰釉陶器小皿である。398は内面から高台まで灰釉を施す。高台は削り出しで，一部に釉が掛かる。釉は溶けておらず，貫入が入る。399は溝縁小皿で，全面に灰釉を施す。400・401は下層から出土した唐津系灰釉陶器皿である。400は内面から一部高台内まで灰釉を施し，見込と畳付には砂目痕が残る。高台は削り出しである。401は内面から体部外面まで灰釉を施し，高台は削り出しで無釉である。見込には輪状の砂目痕が残り，高台には砂が付着する。内外面に煤が付着する。402は下層から出土した土師質土器椀で，平高台を有する。回転ナデ調整の後，見込にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。見込には煤が付着する。403は上層から出土した石製品砥石で，長方形を呈するものとみられ，裏面は剥離する。残存部では1面に使用痕が残



遺構埋土
1. 褐色(7.5Y4/4)中粒砂質シルト(SD－24)
2. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，1cm大の礫を少し含む(SD－23)
3. オリーブ黒色(10Y3/2)粗粒砂質シルト(SD－23)
4. オリーブ黒色(10Y3/1)中粒砂質シルトで，1～3cm大の礫を少し含む(SD－23)
5. オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粗粒砂で，1～3cm大の礫を多く含む(SD－23)
6. オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂質シルトで，木片を少し含む(SD－23)
7. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒砂質シルトで，炭化物を少し含む(SD－23)

図103　SD－23・24

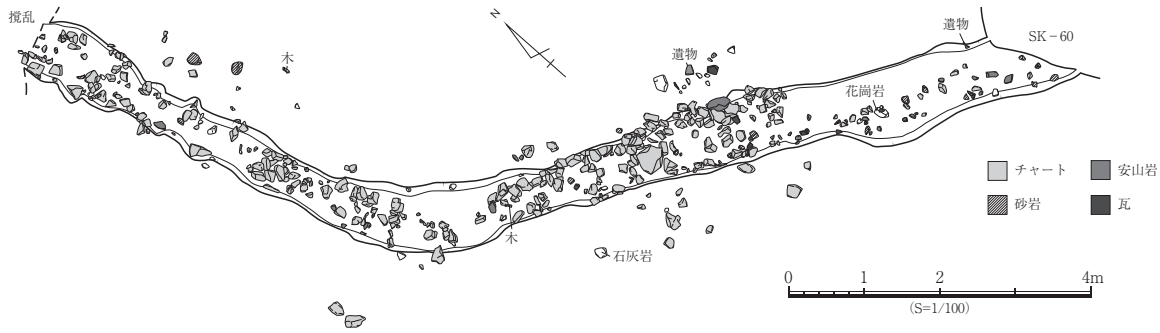
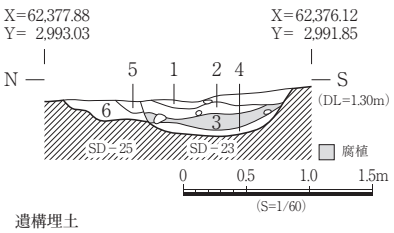


図104　SD－23石列検出状態

り，先端は著しく使用痕が残る。404は上層で出土した木製品栓で，断面は上部が方形，下部は円形で先端は細く加工する。405は中層より出土した木製品下駄で，露卯下駄である。全面に黒色の漆塗である。平面は楕円形，断面は六角形を呈し，裏面の周縁部を斜に加工する。差歯は欠損し，差歯孔は方形で，縦1.8cm，横1.1cmを測る。

SD－24（遺構：図103）

2区南部で検出した南北方向の溝跡で，SK－53・57とSD－23に切られる。検出長8.56m，幅1.03m，深さ21cmを測る。断面は皿状を呈し，基底面は南（1.106m）から北（1.031m）へ傾斜し，埋土は褐色中粒砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器11点（椀2，細片9），土師器片3点，須恵器片1点，瓦器椀1点



遺構埋土
1. 褐色（7.5Y4/4）粗粒砂質シルトで，1～5cm大の礫を少し含む（SD－23）
2. オリーブ黒色（7.5Y3/2）中粒砂質シルトで，5cm大の礫を少し含む（SD－23）
3. 黒色（10YR2/1）粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を多く含み，腐植を非常に多く含む（SD－23）
4. オリーブ黒色（7.5Y3/2）中粒砂質シルトで，腐植を少し含む（SD－23）
5. 黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂質シルトで，1～5cm大の礫を含む（SD－25）
6. オリーブ黒色（7.5Y3/1）中粒砂質シルトで，0.5～1cm大の礫を少し含む（SD－25）

図105　SD－23・25

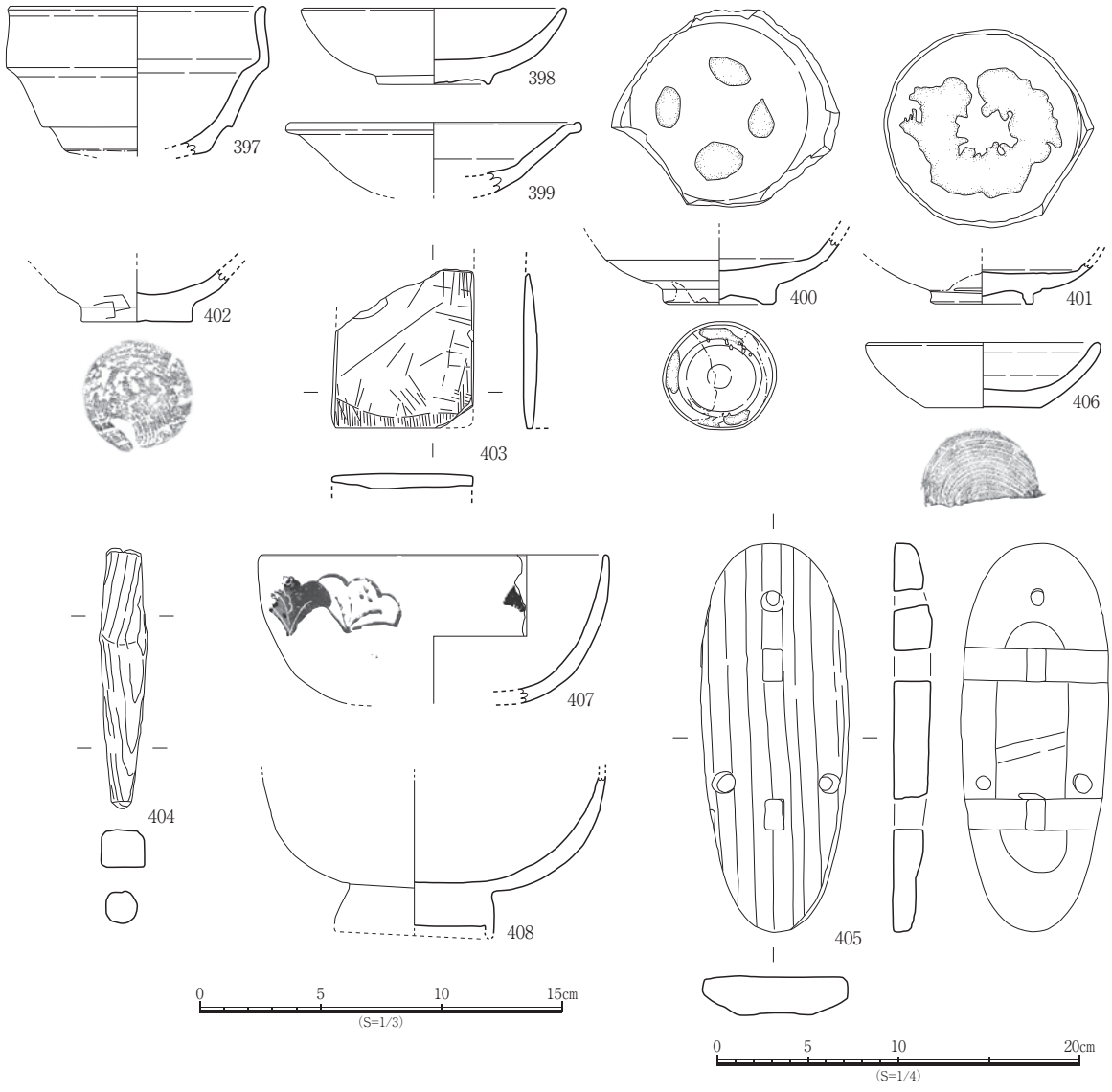


図106　SD－23・27出土遺物実測図

がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SD－25（遺構：図105）

2区南部で検出した東西方向の溝跡で，SK－60とSD－23に切られる。検出長7.18m，検出幅0.73m，深さ24cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は西（1.063m）から東（1.010m）へ傾斜し，埋土は2層に分かれる。出土遺物には土師質土器7点（椀1，杯1，細片5）がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SD－26（遺構：図84）

2区南東部で検出した南北方向の溝跡で，SK－56・58を切り，SK－59・60に切られる。検出長9.21m，幅1.64m，深さ52cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は北（0.891m）から南（0.530m）へ傾斜し，埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器3点（碗1，擂鉢2），土師質土器片6点，瓦4点（丸瓦2，平瓦2）がみられたが，図示できる遺物はなかった。

SD－27（遺構：図107　遺物：図106－406～408）

2区南西部で検出した東西方向の溝跡で，SD－28を切り，西は調査区外へ続く。検出長21.11m，幅1.20m，深さ35cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は東（0.973m）から西（0.820m）へ傾斜する。埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器片3点，磁器片2点，土師質土器30点（杯1，皿1，小皿1，細片27），土師器片3点，須恵器甕1点，瓦器椀1点，木製品5点（漆器椀3，加工木1，板材1），瓦4点（丸瓦1，平瓦3），骨3点がみられ，土師質土器杯（406）と木製品漆器椀（407・408）を図示した。406は土師質土器杯である。回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。全面に煤が付着する。407・408は木製品漆器椀である。407は内面が赤塗，外面が黒塗である。外面には朱色の花文とみられる文様が残る。408は腰丸椀で，内外面とも黒塗である。

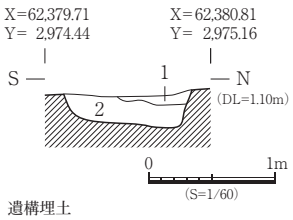


図107　SD－27

SD－28（遺構：図108）

2区南西部で検出した東西方向の溝跡で，SD－27に切られ，東は調査区外へ続く。検出長14.54m，幅0.75m，深さ16cmを測る。断面は逆台形を呈し，基底面は東（1.060m）から西（0.928m）へ傾斜し，埋土はオリーブ黒色中粒砂質シルトで，極粗粒砂と1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には陶器2点（擂鉢1，甕1），土師質土器10点（椀1，細片9），須恵器椀1点，種31点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

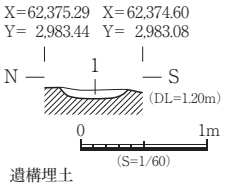


図108　SD－28

⑤ 大型土坑

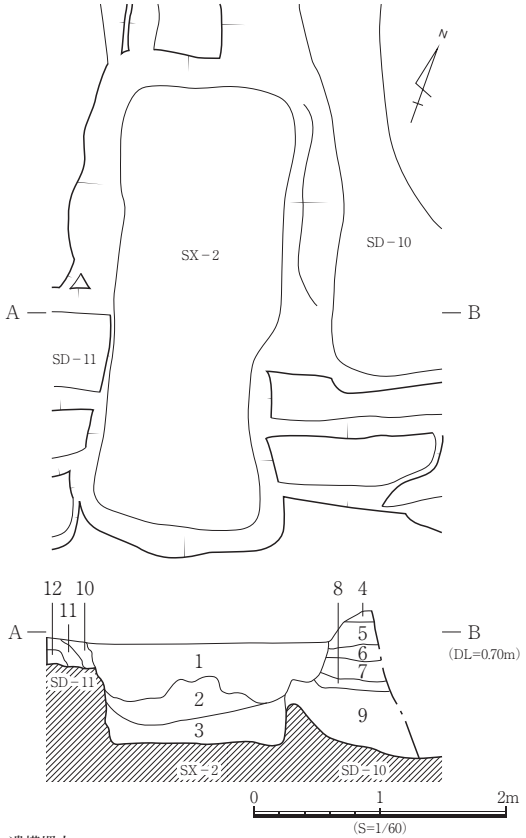
SX－1（遺構：図36　遺物：図111－409～411）

1区北東部で検出した土坑で，SD－11～13を切り，SK－3･4に切られる。平面形態は長方形を呈し，長辺4.74m，短辺2.92m，深さ36cmを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は6層に分かれる。出土遺物には，陶器6点（碗1，向付1，匣鉢1，細片3），磁器3点（碗2，細片1），土師質土器6点（皿1，細片5），木製品木簡1点，金属製品鉄鎌1点，瓦18点（軒丸瓦4，軒平瓦8，軒桟瓦3，鳥衾瓦1，丸瓦2）がみられ，陶器向付（409）と磁器碗（410），木製品木簡（411），瓦6点（丁字文軒平瓦：935，花文軒平瓦：941，蔦文軒平瓦：944，三巴文軒桟瓦：953・954，その他軒桟瓦：956）を図示した。409は織部焼向付である。高

台内を除き灰釉を施し，内外面に鉄錆による文様がみられる。410は肥前産の青磁染付丸碗で，外面に青磁釉，内面と高台内に透明釉を施す。見込には五弁花文と二重圏線，内面には四方襷文の染付，高台内には方形枠に渦「福」銘がみられる。畳付には砂が付着する。411は木製品木簡で一部が残存する。表面に「御(ヵ)あら(ヵ)ため」，裏面に「□歳(ヵ)屋　丙(ヵ)戌(ヵ)内(ヵ)…　山拾□」の墨書がみられる。

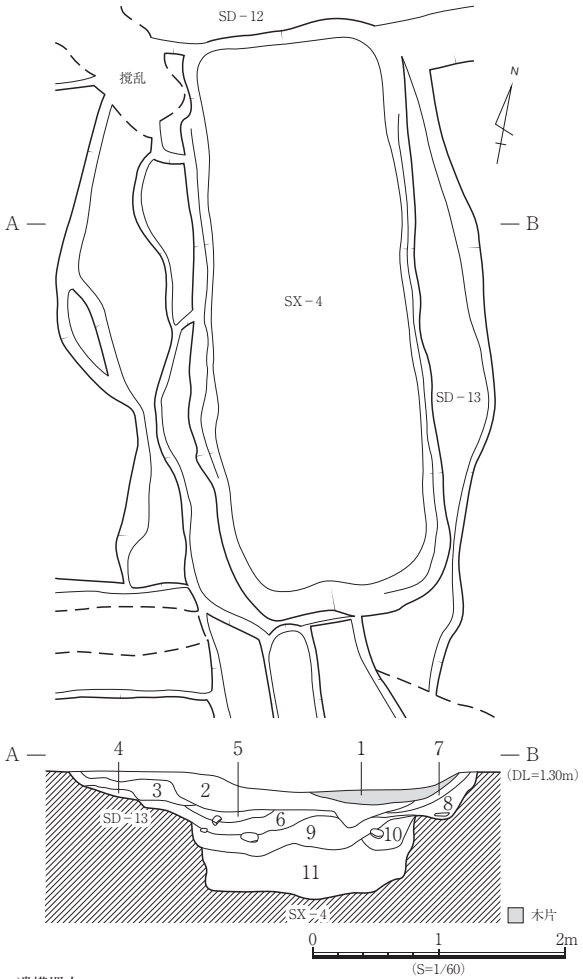
SX－2(遺構：図109　遺物：図111－412～414)

1区北東部で検出した土坑で，SD－13に切られ，SD－10・11を切る。平面形態は不整隅丸方形を呈し，長辺3.96m，短辺2.00m，深さ1.06mを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は3層に分かれる。出土遺物には，陶器7点(碗1，皿3，擂鉢1，細片2)，磁器4点(碗2，皿1，細片1)，土師質土器9点(杯1，皿1，細片7)，土師器片2点，須恵器片1点，木製品漆器片2点，瓦229点(軒丸瓦3，軒平瓦3，丸瓦40，平瓦183)がみられ，陶器碗(412)と陶



遺構埋土
1．オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，粗粒砂と5cm大の礫を含む(SX－2)
2．灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト(SX－2)
3．オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト(SX－2)
4．灰オリーブ色(5Y4/2)シルトで，中粒砂を含む(SD－10)
5．オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト(SD－10)
6．灰オリーブ色(5Y5/2)シルトで，極細粒砂を含む(SD－10)
7．オリーブ色(5Y5/4)シルト(SD－10)
8．オリーブ黄色(5Y6/3)粘土質シルト(SD－10)
9．オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト(SD－10)
10．灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂で，1cm大の礫を含む(SD－11)
11．灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト(SD－11)
12．オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質細粒砂で，炭化物を含む(SD－11)

図109　SX－2，SD－10・11



遺構埋土
1．暗オリーブ色(5Y4/4)細粒砂質シルトで，0.5cm大の礫と多くの木片を含む(SD－13)
2．灰色(7.5Y4/1)粗粒砂質シルトで，3～5cm大の礫を多く含む(SD－13)
3．黒褐色(10YR3/1)粗粒砂質シルトで，橙色礫を含む(SD－13)
4．黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂質シルトで，0.3cm大の礫を含む(SD－13)
5．オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂(SD－13)
6．灰オリーブ色(5Y4/2)シルトで，粗粒砂を含む(SD－13)
7．黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粗粒砂(SD－13)
8．暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂(SD－13)
9．オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルトで，少量の粗粒砂を含み，10cm大の礫を含む(SX－4)
10．灰色(10Y4/1)シルト質粗粒砂で，炭化物を含む(SX－4)
11．灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで，粗粒砂を含む(SX－4)

図110　SX－4，SD－13

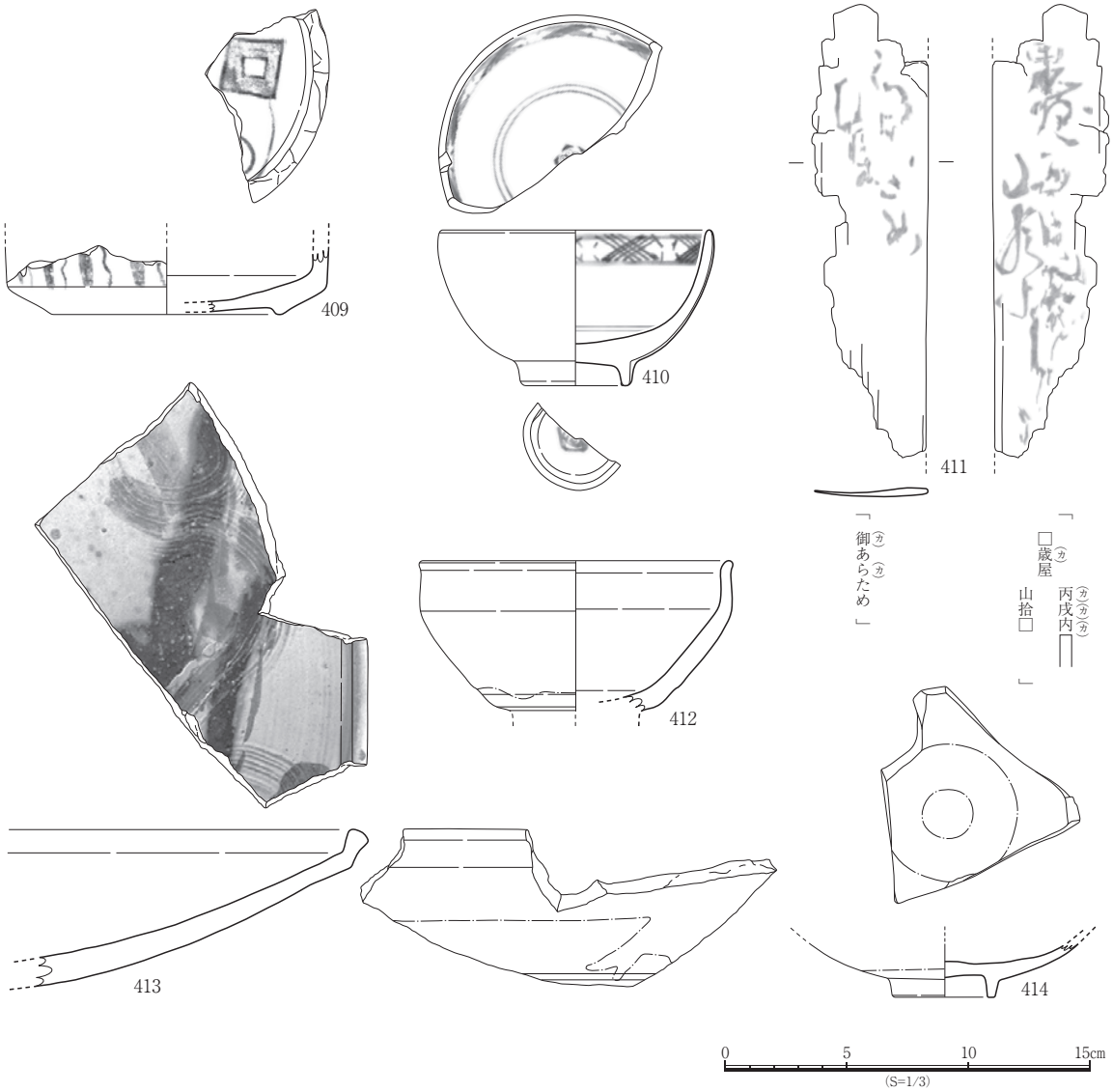


図111　SX－1・2出土遺物実測図

器皿(413)，磁器皿(414)，瓦4点(三ツ葉柏文軒丸瓦:740，橘文軒平瓦:900，平瓦:989・992)を図示した。412は瀬戸・美濃産の陶器天目碗である。内面から外面体部下半まで鉄釉を施す。413は肥前産の刷毛目二彩唐津大皿である。内面は白化粧土を施した後，櫛による波状文と鉄錆による文様を描き，緑釉を流し掛けし，口縁部内外面に透明釉を施す。414は肥前産の白磁小皿である。内面から体部外面まで白磁釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。

SX－3(遺構:図39　遺物:図112－415～427)

1区東部で検出した土坑で，SK－11とSX－5を切る。平面形態は不整隅丸方形を呈し，長辺4.02m，短辺1.74m，深さ99cmを測る。断面は方形を呈し，埋土は10層に分かれ，木片と腐植を多く含んでいた。出土遺物には，陶器26点(碗6，皿5，擂鉢7，匣鉢1，甕1，細片6)，磁器27点(碗9，皿8，小杯4，猪口1，仏飯器1，細片4)，青磁碗1点，土師質土器5点(皿2，細片3)，石製品砥石2点，木製品14点(漆器椀2，漆器蓋1，漆器片1，杓文字か1，下駄4，曲物1，桶蓋4)，瓦97点(軒丸瓦3，軒平瓦2，丸瓦19，平瓦73)がみられ，415～427の13点と三巴文軒丸瓦(796)を図示した。

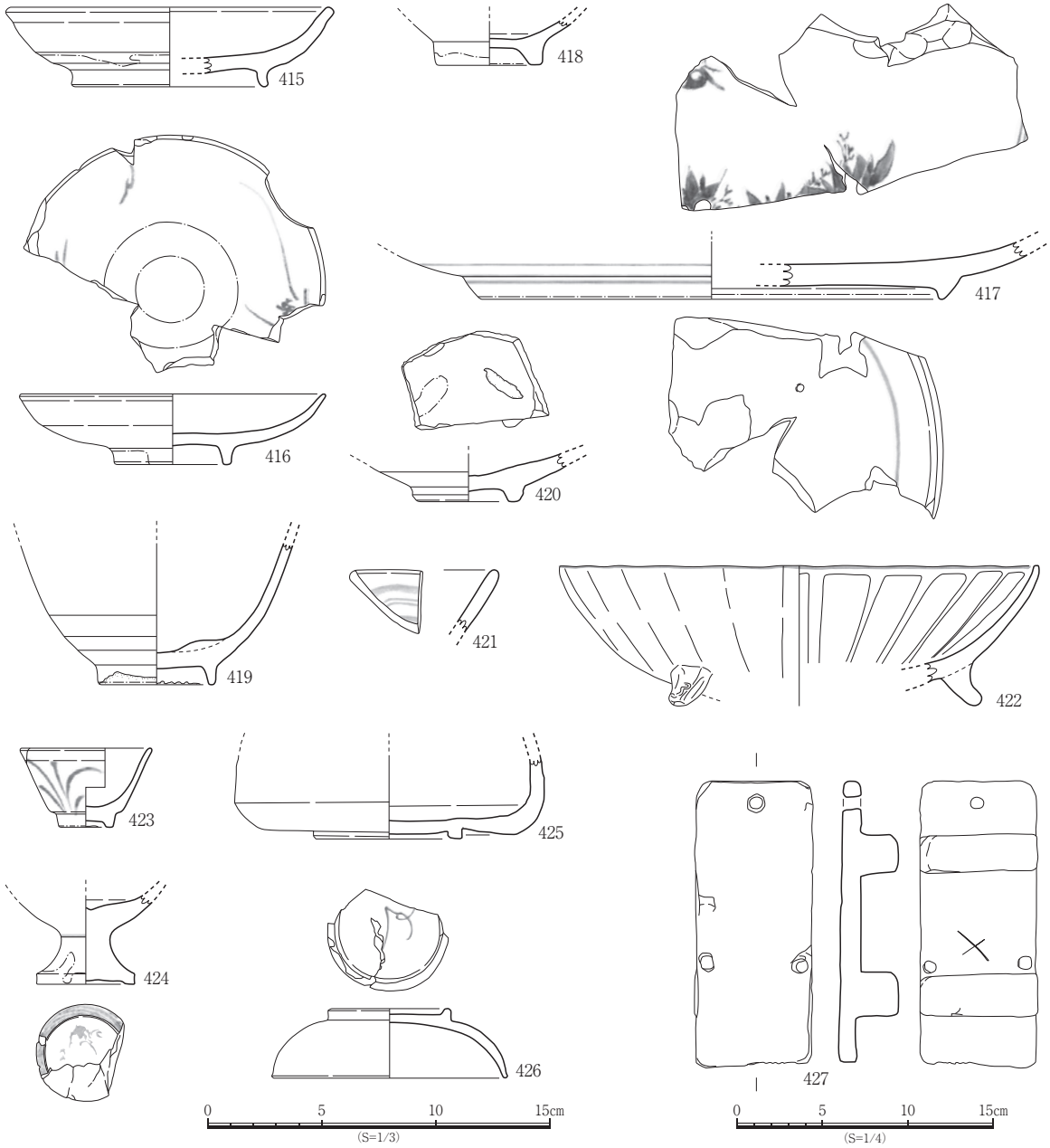


図112　SX－3出土遺物実測図

415～417は上層から出土した遺物である。415は瀬戸・美濃産の陶器丸皿で，内面から体部外面まで灰釉を施し，高台は無釉である。見込には重ね焼痕が残る。416は肥前波佐見産の磁器染付小皿である。内面から高台まで透明釉を施し，高台内は無釉である。見込は蛇ノ目釉ハギし，内面には松葉文の染付がみられる。417は肥前産の磁器染付大皿である。見込に鳥と笹文・圏線，外面と高台内には圏線の染付がみられる。高台内にはピン痕が残る。

418～427は下層から出土した遺物である。418は唐津系灰釉陶器碗で，畳付付近を除き灰釉を施す。419は陶器碗で，外面体部下半は回転ケズリ調整で，高台内には渦状の鉋痕が残る。全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。高台には砂が付着する。見込は胎土内の空気が膨らみ著しい凹凸がみられる。420は唐津系灰釉陶器小皿である。内面には灰釉を施し，見込には砂目痕が残る。外

面は回転ナデ調整，外面下半から高台内は回転ケズリ調整で，高台は無釉である。421は肥前産の青磁碗で，全面に青磁釉を施す。内面には陰刻による文様がみられる。422は底面より出土した肥前波佐見産の青磁三足中皿である。型打成形で，口縁部は輪花形を呈し，陰刻文様がある脚を貼付する。内外面に型打による菊弁文がみられ，口錆で，全面に青磁釉を施す。423は肥前産の磁器染付小杯である。杉形で，内面から高台まで透明釉を施し，高台内は無釉で僅かに砂が付着する。外面には草文の染付がみられる。424は肥前産の磁器染付仏飯器である。内面から高台付近まで透明釉を施し，高台内は無釉で僅かに墨書が残る。頸部には圏線の染付がみられる。425は木製品漆器平椀とみられ，著しく歪む。内外面とも赤塗である。426は木製品漆器蓋で，内外面とも赤塗である。摘内には黒色で文様が描かれる。427は木製品下駄で，連歯下駄である。隅丸方形を呈し，下面には「×」の刻書がみられる。子供用とみられる。

SX－4（遺構：図110　遺物：図113－428～430）

1区東部で検出した土坑で，SD－12・13に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺4.69m，短辺1.80m，深さ93cmを測る。断面は方形を呈し，埋土は3層に分かれる。出土遺物には，陶器10点（碗3，皿2，鉢1，擂鉢2，トチン1，細片1），磁器2点（小杯1，瓶1），瓦151点（軒丸瓦1，軒平瓦5，丸瓦33，平瓦111，道具瓦1）がみられ，陶器碗（428），陶器トチン（429），磁器小杯（430），瓦4点（三葉文軒平瓦：852・857・861，平瓦系道具瓦：1049）を図示した。428は織部焼とみられる陶器碗である。全面に透明釉を施し，口縁部外面には鉄錆による文様がみられる。429は陶器トチンである。上面と下面は無調整で砂が付着し，側面には錆釉を施す。430は肥前産の磁器染付小杯である。端反形で，

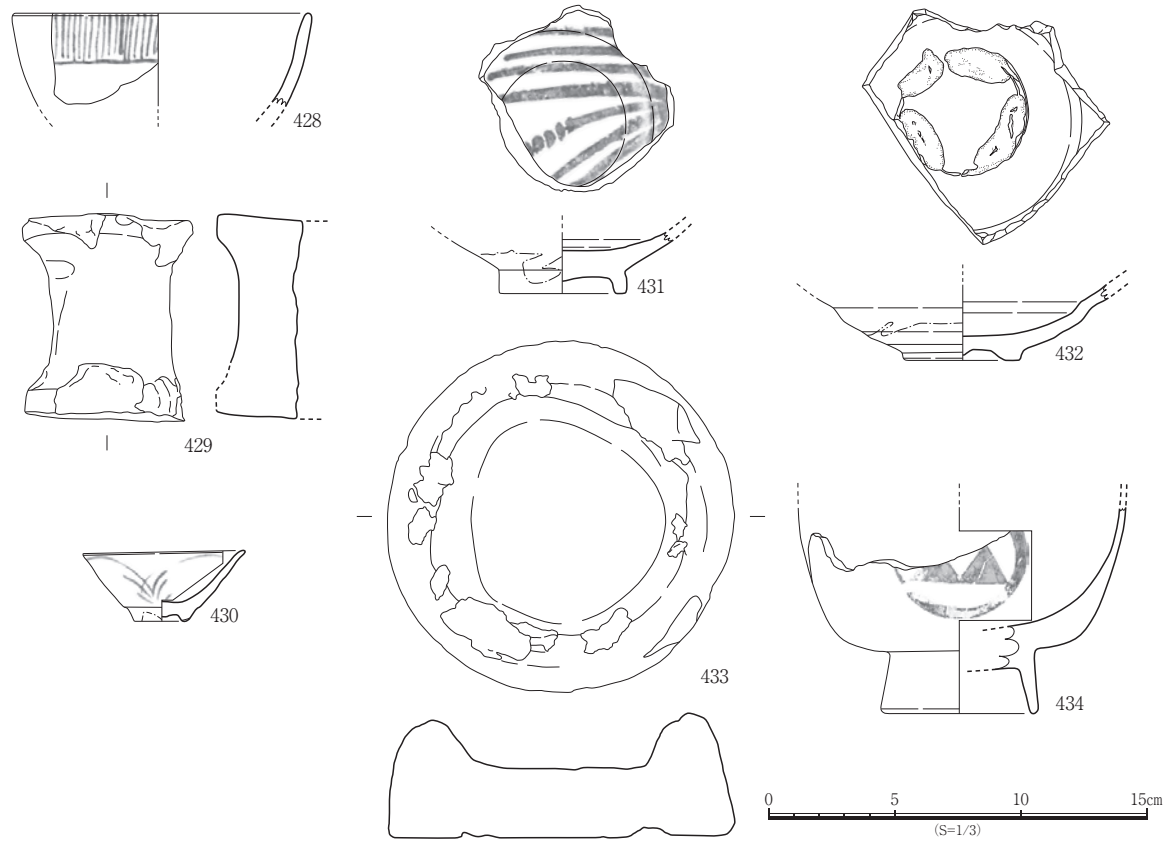


図113　SX－4・6出土遺物実測図

内面から高台付近まで透明釉を施し，高台は無釉である。外面には草文の染付がみられる。畳付には砂が付着する。

SX－5(遺構：図41)

1区東部で検出した土坑で，SK－11，SX－3と撹乱に切られ，SK－13を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，検出長4.82m，短辺3.54m，深さ18㎝を測る。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には，陶器皿1点，磁器片1点，瓦48点(丸瓦9，平瓦37，道具瓦1，不明1)がみられ，平瓦系道具瓦(1068)を図示した。

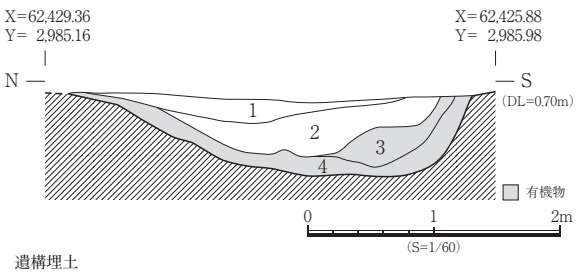
SX－6(遺物：図113－431～434)

1区南東部で検出した土坑で，SD－13を切る。平面形態は楕円形を呈し，長径3.44m，短径1.92m，深さ97㎝を測る。埋土は2層に分かれ，上層がオリーブ黒色シルトで，1㎝大の礫を少し含み，下層は灰色極粗粒砂質シルトで，5～10㎝大の礫を含んでいた。出土遺物には，陶器6点(碗2，皿2，擂鉢1，細片1)，磁器2点(蓋物1，瓶1)，土師質土器片1点，土製品窯道具か1点，木製品漆器椀1点，瓦146点(軒丸瓦2，軒平瓦1，丸瓦28，平瓦113，道具瓦1，不明1)がみられ，陶器皿(431・432)と土製品窯道具か(433)，木製品漆器椀(434)を図示した。**431**は肥前産の絵唐津小皿で，内面から外面体部下半まで灰釉を施す。見込には鉄錆による植物文がみられる。**432**は唐津系灰釉陶器小皿で，内面から外面体部下半まで灰釉を施す。見込には砂目痕がみられる。**433**は土製品で窯道具とみられる。平面形態は円形を呈し，上面中央が円形に凹む。側面は摩耗するため調整は不明で，下面は無調整である。上面の凹み部分は側面が横方向のナデ調整，底がナデ調整である。胎土にはスサを多く含み，ほぼ全面に煤が付着する。**434**は木製品漆器腰丸椀で，外面が黒塗，内面が赤塗である。外面には朱色の丸に三鱗文とみられる文様の一部が残る。

SX－7(遺構：図114　遺物：図115・116－435～451)

1区北部で検出した土坑で，北は調査区外へ続き，SX－9に切られ，SD－11を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺5.94m，検出幅4.38m，深さ1.08mを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は4層に分かれ，上層は瓦や漆喰・礫・炭化物，下層は腐植を多く含んでいた。出土遺物には，陶器14点(碗7，皿1，鉢1，擂鉢2，匣鉢1，甕1，細片1)，磁器15点(碗8，大皿1，皿2，蓋1，小杯1，猪口1，細片1)，青花皿2点，土師質土器6点(皿5，細片1)，土師器8点(焼塩壺蓋1，焼塩壺7)，木製品4点(木簡1，杓文字1，切匙1，下駄1)，瓦743点(軒丸瓦36，軒平瓦12，鳥衾瓦2，丸瓦166，平瓦527)がみられた。図示した遺物は，435～451の17点と瓦8点(三ツ葉柏文軒丸瓦：758・789，三巴文軒丸瓦：812・837，三ツ葉柏文鳥衾瓦：848，三巴文鳥衾瓦：850，三葉文軒平瓦：868，丸瓦：986)である。

435は肥前産の京焼風陶器中碗で，内面から高台付近まで灰釉を施し，高台は無釉である。高台内には「清水」の銘印をもつ。**436**～**438**は陶器碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。436は外面が被熱する。**437**・**438**は中碗で，釉には貫入が入る。**439**は焼締陶器匣鉢である。回転ナデ調整で，底部の切り離し



遺構埋土
1. 黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルトで，中粒砂と1㎝大の礫・炭化物・木製品を多く含む
2. オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルトで，瓦と漆喰を多量に含む
3. 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土質シルトで，中粒砂を多く含み，1～3㎝大の礫を含む，炭化物と腐植の互層
4. 黒色(10YR2/1)シルトで，腐植を多く含む

図114　SX－7

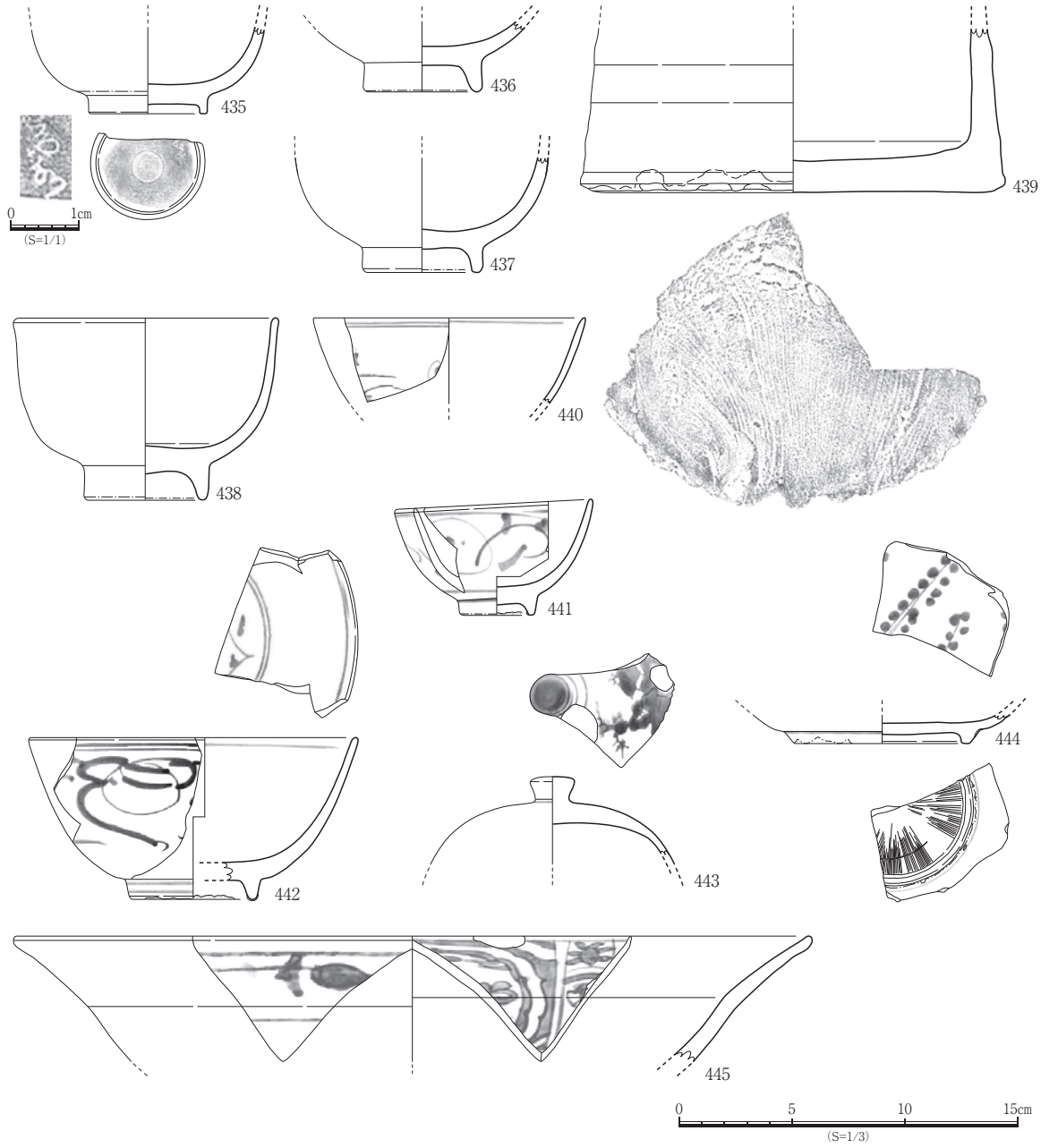


図115　SX－7出土遺物実測図1

は回転糸切りである。440は肥前有田産の磁器色絵染付丸碗である。内外面に圏線の染付，外面には黒色と朱色の上絵付がみられる。441は肥前産の磁器染付丸碗で，外面に唐草文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。高台には砂が付着する。442は肥前産の磁器染付丸碗である。見込に波文と圏線，内面に圏線，外面には荒磯文と圏線の染付がみられる。畳付に砂が付着する。443は肥前産の磁器染付壺蓋で，円形の摘が付く。外面には東屋と松文・圏線の染付を描き，摘上面は呉須を塗る。444は中国景徳鎮窯系の青花皿である。内面から高台まで透明釉を施し，高台には粗砂が付着する。高台内は無釉で放射状の鉋痕が残る。見込には梅樹文，外面に圏線の染付がみられる。445は青花大皿である。内面は区画割に窓絵，外面は草花文と圏線の染付がみられる。446～448は土師器焼塩壺である。446は輪積成形で，内面はナデ調整で布目

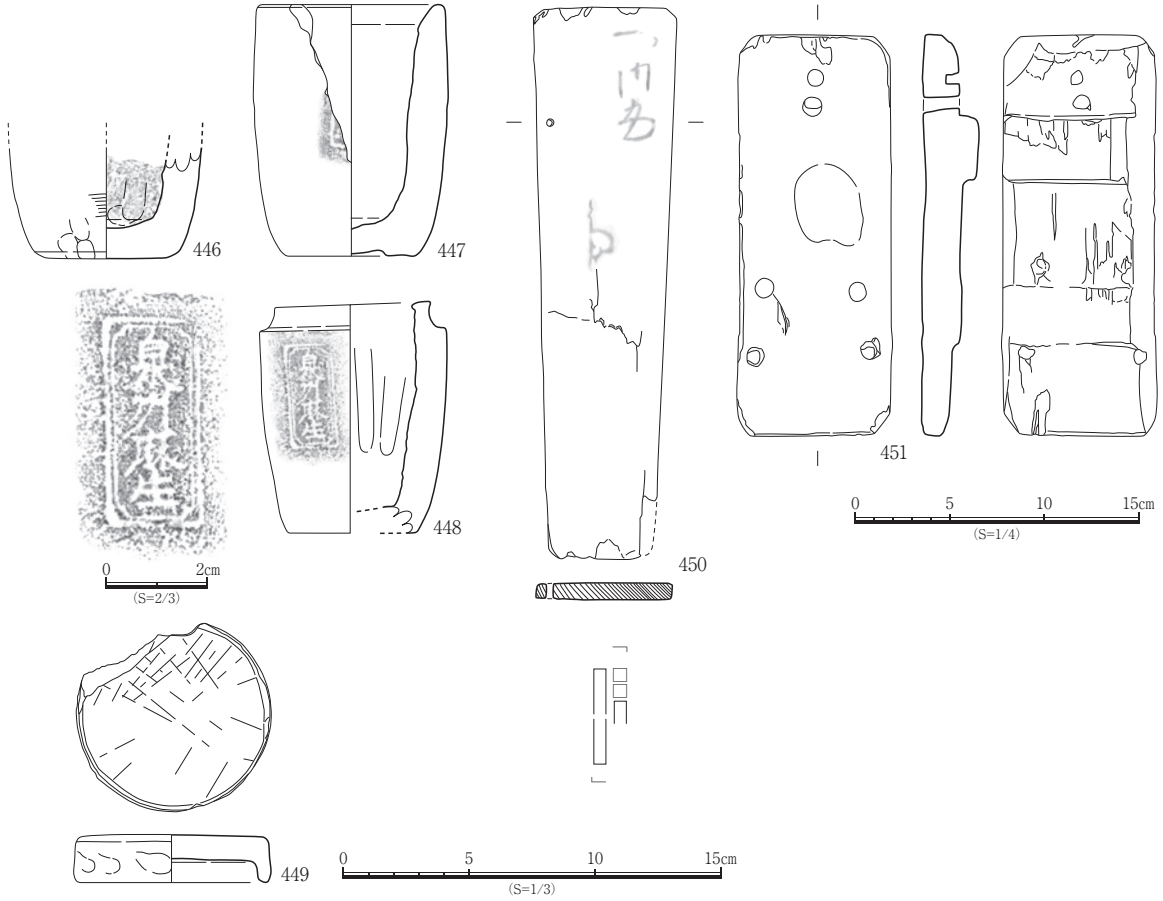


図116　SX－7出土遺物実測図2

痕が残る。外面はナデ調整で，底部は無調整である。447は輪積成形で，内面は布目痕が残り，口縁部は横ナデ調整，外面はナデ調整である。外面には方形枠の刻印の一部が残る。外底は砂が付着するため調整は不明である。448は板作成形である。内面はナデ調整で，外面は横方向のナデ調整の後一部にナデ調整を加える。外底は剥離する。外面には二重方形枠内に「泉州麻生」の刻印をもつ。449は土師器焼塩壺蓋で，天井部がナデ調整，口縁部は横ナデ調整で指頭圧痕が残る。450は木製品木簡で，長方形の板材の下部をやや細く加工し，四隅を切る。上部には径2.5㎜の円孔を穿つ。片面に墨書がみられるが，解読は不可であった。451は木製品下駄で，連歯下駄である。長方形を呈し，四隅を切る。緒孔をすべて後方へ作り直し，元の緒孔は木材で埋める。歯と上面は著しく擦り減る。

SX－8（遺物：図117～120－452～504）

1区中央部で検出した土坑で，SD－11・12を切る。平面形態は不整方形を呈し，長辺5.38m，短辺4.68m，深さ1.34mを測る。埋土は4層に分かれ，いずれもオリーブ黒色粗粒砂質シルトで，上層には木片を非常に多く含み，中層下部には腐植の堆積，下層には石灰岩を多く含んでいた。上層の埋土はSX－9の上部まで広がり，SX－9を切っていた。

出土遺物には，陶器91点（碗34，大皿1，中皿5，皿11，蓋1，火入2，瓶3，擂鉢10，匣鉢1，壺1，甕6，鬢水入か1，細片15），磁器58点（碗20，皿9，小杯5，猪口1，火入2，鉢2，壺1，水滴か1，細片17），青花皿1点，土師質土器27点（皿4，小皿6，細片17），土師器12点（焙烙1，焼塩壺蓋5，焼塩壺5，細片

1)，施釉土器餌鉢1点，瓦質土器片1点，石製品砥石4点，木製品約112点(木簡3，漆器椀3，漆工品1，漆器片1，箸約100，曲物1，桶1，加工木3)，瓦4,029点(軒丸瓦77，軒平瓦39，鳥衾瓦1，鬼瓦2，丸瓦694，平瓦3,213，道具瓦2，不明1)がみられた。図示した遺物は452～504の53点と瓦31点(三ツ葉柏文軒丸瓦：720・777・778・785・790，三巴文軒丸瓦：805・822・825・826・831・833・834・843・845，三巴文鳥衾瓦：849，三葉文軒平瓦：860・869・875，橘文軒平瓦：907・912・924，その他軒平瓦：947・948，鬼瓦：966，丸瓦：976・982，平瓦：999・1004・1012，平瓦系道具瓦：1058・1067)である。

452～498は上層より出土した遺物で，452～456は陶器碗である。452は京都・信楽系の色絵丸碗である。全面に灰釉を施し，外面には朱色と金色とみられる桐文の上絵付の痕跡が残る。453は京都・信楽系の小碗で，内面から外面体部下半まで光沢のある灰釉を施す。釉には貫入が入る。高台は無釉で，高台内には「清水」の銘印をもつ。外面には山水文とみられる錆絵の一部が残る。454は肥前産の刷毛目文中碗で，内外面に白化粧土で刷毛目文を描いた後，透明釉または灰釉を施す。455は肥前産の丸碗で，全面に灰釉を施した後，畳付を釉ハギする。456は肥前産の刷毛目文中碗である。白化粧土で内面に渦巻文，外面及び高台内に刷毛目文を描いた後，灰釉を施す。457～462は陶器皿である。457・458は唐津系灰釉陶器小皿である。457は内面から外面体部下半まで灰釉を施す。高台は無釉で，見込と高台には砂目痕が残る。458は内面から体部外面まで灰釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。459は陶胎染付皿で，口縁部は輪花形をなす。全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。見込には呉須による文様がみられる。460は肥前内野山窯の折縁形中皿である。内面は銅緑釉，外面は高台付近まで灰釉を施し，見込を蛇ノ目釉ハギする。461・462は肥前産の刷毛目二彩手皿である。461は折縁形の中皿で，内面から口縁部外面まで灰釉を施し，内面には白化粧土で刷毛目文を描き，緑釉の流し掛けを行う。見込には砂目痕が残る。体部下半は無釉で，回転ケズリ調整を施す。462は折縁形の大皿で，内面は白化粧土で刷毛目文を描き褐釉を施す。外面は口縁部から体部上半に灰釉を施し，体部下半は無釉で回転ナデ調整を施す。463は備前焼擂鉢である。回転ナデ調整で，口縁部外面には2条の凹線，内面には放射状の13条単位の擂目を入れる。外面には自然釉が掛かる。464は肥前有田産の陶器擂鉢で，口縁部はT字形を呈する。回転ナデ調整で，内面には擂目を入れ，口縁部に鉄釉を施す。465は焼締陶器匣鉢である。内面から体部外面は回転ナデ調整で，外底は無調整である。466は信楽焼壺で，口縁端部を外反させる。回転ナデ調整で，外面には自然釉が掛かる。467は丹波焼甕である。回転ナデ調整で，口縁端部に3条の凹線，肩部には多条の凹線がみられる。468は陶器鬢水入とみられる。底部は型押成形で内外面に布目痕が残る。全面に赤褐色の釉を施した後，内面と外面の側面には透明釉を施す。469～478は磁器染付碗で，全面に施釉し，畳付は釉ハギする。469は肥前有田産の染付丸碗である。外面に型紙刷による雨粒文，雨降文と花卉文・圏線の染付，高台内に圏線の染付がみられる。口縁部内面にも染付の一部がみられる。見込には砂が付着する。470は肥前産の染付丸碗で，外面に唐草文の染付がみられる。呉須は青灰色を呈する。高台内には砂が付着する。471は肥前有田産の白磁小碗で，全面に光沢がある白磁釉を施す。472は肥前産の染付丸碗である。外面には窓に蘭文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。473は肥前有田産の染付丸碗である。外面には岩に植物文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。474は肥前有田産の染付丸碗である。外面には草花文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。475は肥前有田産の染付丸碗である。見込に梅文，外面には墨弾の獅子文とみられる染付を描く。476は肥前産の染付丸碗である。口錆で，外面には

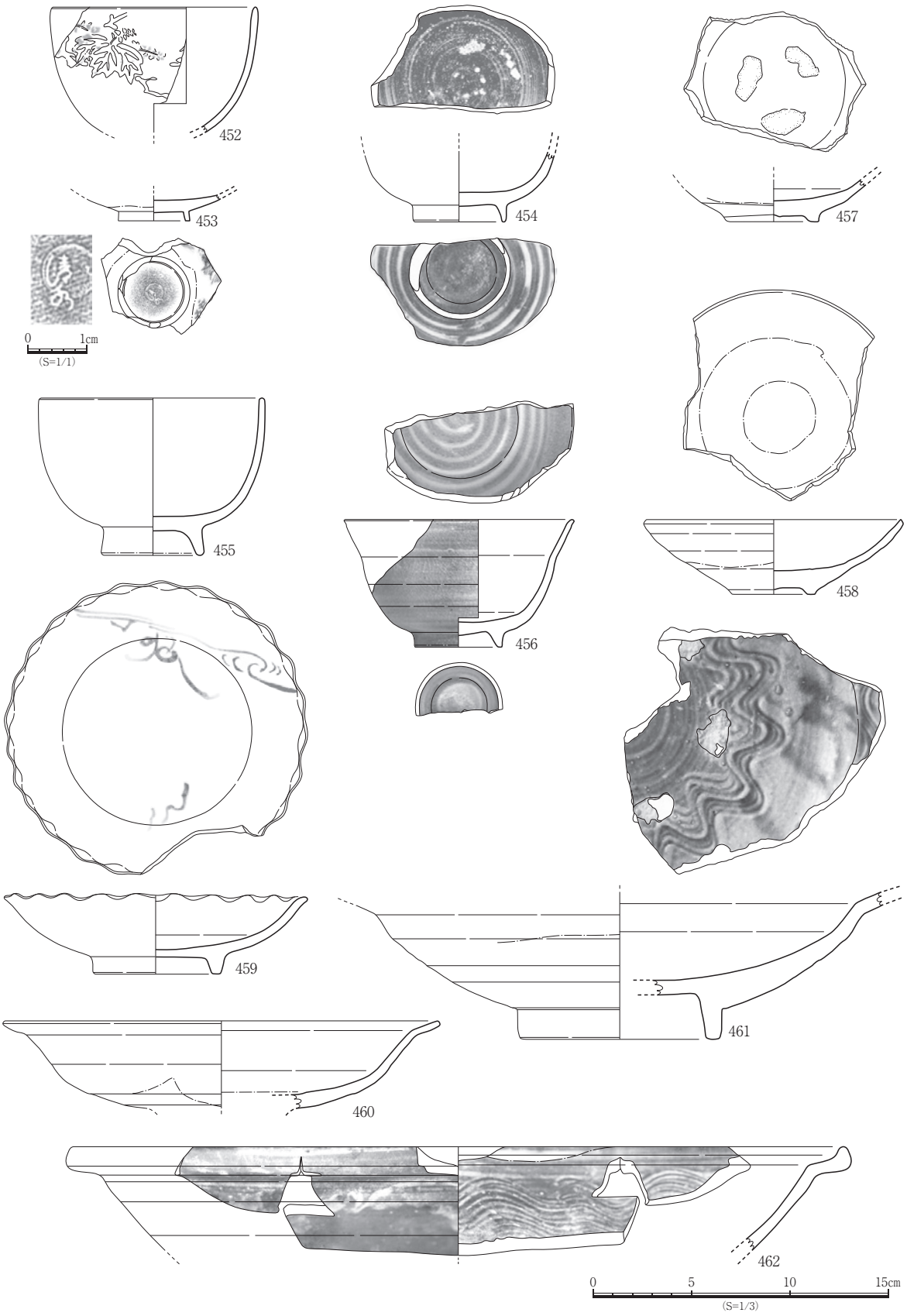


図117　SX－8出土遺物実測図1

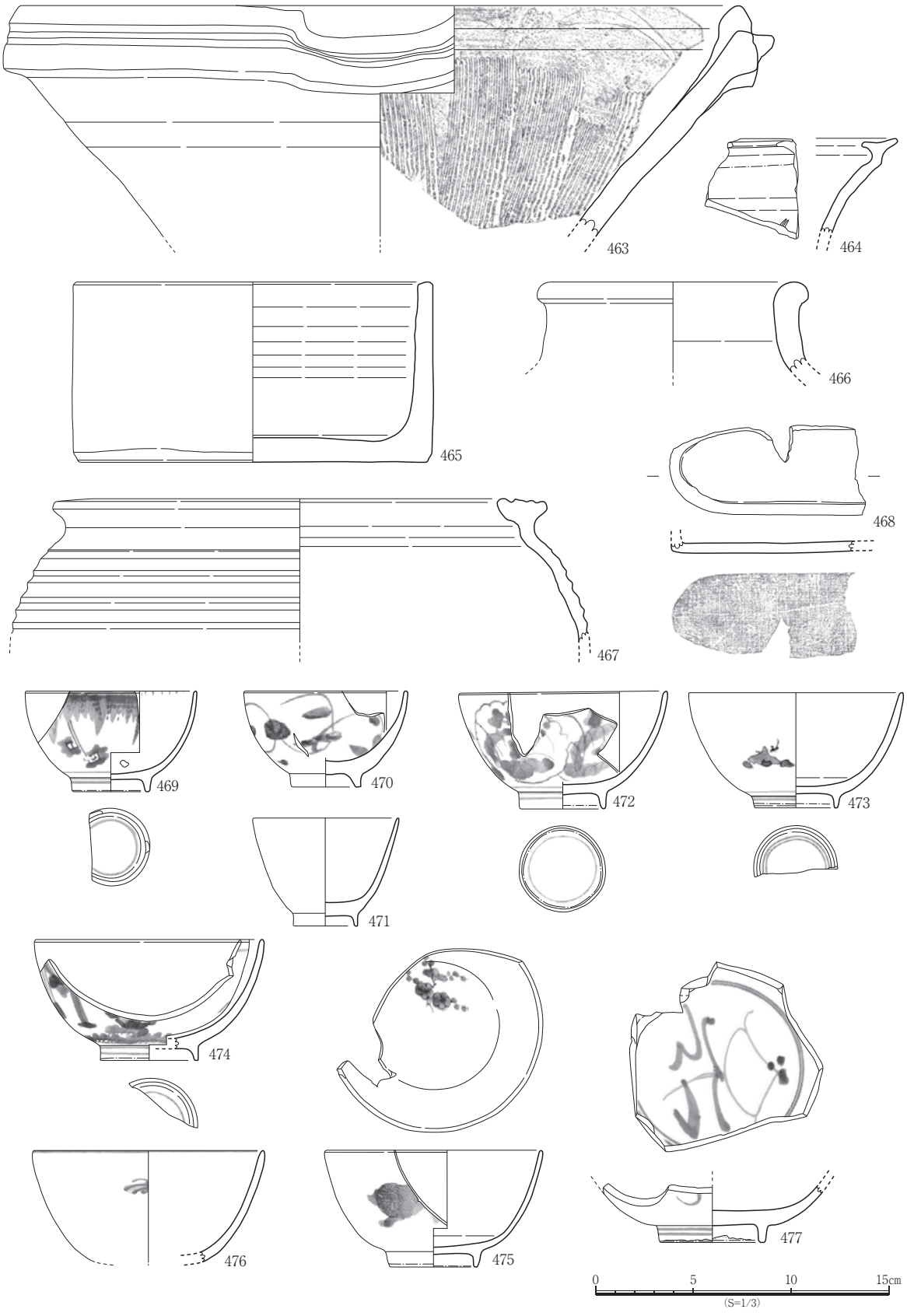


図118　SX－8出土遺物実測図2

図119　SX－8出土遺物実測図3

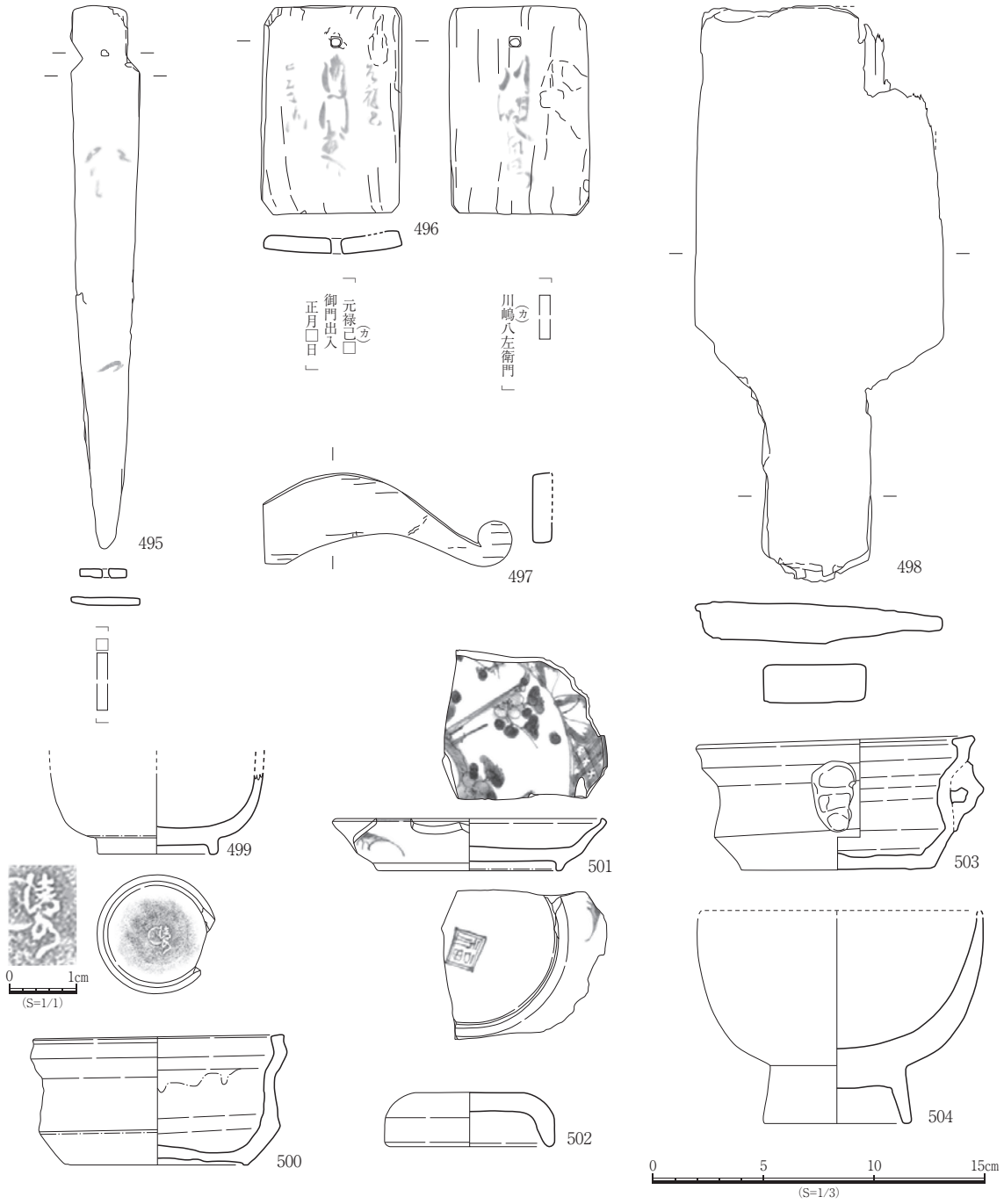


図120　SX－8出土遺物実測図4

草文とみられる染付の一部が残る。477は肥前産の染付中碗である。見込には荒磯文と圏線の染付，外面には圏線と染付の一部がみられる。478は肥前産の染付丸碗で，見込には圏線，外面には草花文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。479は肥前産の磁器色絵染付皿とみられ，全面に透明釉を施す。内外面に染付と朱色と黒色の上絵付による文様がみられる。480・481は肥前産の磁器染付小杯である。480は肥前有田産で，端反形である。全面に透明釉を施し，外面には染付と型紙刷による草花文がみられる。481は丸形で，外面には草花文とみられる染付を描く。畳付には砂が付着する。482は肥前産の磁器染付猪口である。端反形で，外面に風景と東屋，高台内に圏線の染

付がみられる。483は肥前産の青磁火入である。内面は無釉で回転ナデ調整である。外面は高台まで青磁釉を施し，畳付と高台内は無釉である。484は肥前産の染付鉢である。見込には草花文と二重圏線の染付，外面には圏線と染付の一部が残り，高台内に圏線の染付がみられる。畳付と見込には砂が付着する。485は肥前産の染付鉢である。外面には風景文の染付がみられる。486は肥前産の磁器染付壺で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギし，砂が付着する。外面には風景文と圏線の染付がみられる。487は肥前産の磁器染付水滴とみられ，竹形で節を表現している。底部は型押成形で内外面に布目痕が残り無釉である。外面は透明釉を施し，一部を呉須で彩色する。内面は無釉で粗雑なナデ調整を施す。583と同一個体とみられる。488は中国景徳鎮窯系の青花皿で，畳付を除き透明釉を施す。見込に染付の一部，外面には圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。489～491は関西産の土師器焼塩壺で，いずれも輪積成形である。489は内面が粗雑なナデ調整で布目痕が残り，外面はナデ調整，外底には板状圧痕が残る。490は内外面にナデ調整を施し，内面には布目痕が残る。口縁部は横ナデ調整である。491は内面が粗雑なナデ調整，口縁部は横ナデ調整，外面はナデ調整である。外面には方形枠に「御壷塩師　堺湊伊織」とみられる刻印が残る。492～494は関西産の土師器焼塩壺蓋である。ナデ調整で，口縁部は横ナデ調整である。天井部内面には布目痕が残る。492の天井部外面には板状圧痕が残る。493・494は断面が凹字形を呈し，板作成形の焼塩壺に伴う蓋とみられる。495・496は木製品木簡で，いずれも完存する。495は長方形の板材の下部を尖らせ，上部の左右に切り込みを入れる。上部には径0.2㎝の円孔を穿つ。片面に墨書がみられるが解読は不可であった。496は長方形を呈し，四隅を切る。上部には径0.3㎝の円孔を穿つ。表面に「元禄己(ヵ)□　御門出入　正月□日」，裏面に「川嶋(ヵ)八左衛門」の墨書が残る。497は板状の木製品で，波形を呈し，端部を丸く収める。断面は方形を呈する。調度品飾りか。498は木製品で羽子板形を呈する。厚さ1.7㎝を測り，柄の断面は方形を呈する。

499～504は中層及び下層より出土した遺物である。499は肥前産の京焼風陶器中碗で，内面から高台付近まで光沢のある灰釉を施し，高台は無釉である。高台内には「清水」の銘印がみられる。500は陶器火入である。回転ナデ調整で，外面体部下半は回転ケズリ調整を加える。口縁部内面から体部外面まで錆釉を施す。外底はナデ調整で砂が付着する。501は肥前有田産の磁器染付変形皿で，型打成形である。口錆で，見込には梅樹文，内面には四方襷文と窓絵の染付，外面には染付の一部が残り，高台内には二重方形枠に「福」の銘がみられる。502は土師器焼塩壺蓋である。ナデ調整で，口縁部は横ナデ調整である。503は下層より出土した焼締陶器火入である。回転ナデ調整で，外面体部下半にケズリ調整を加え，外底は無調整である。1箇所に手捻による把手を貼付する。内面の一部には煤が付着する。504は下層より出土した木製品漆器腰丸椀で，内外面とも赤塗である。高台が高く，高台内を高台半ばまで抉る。

SX－9(遺物：図121～130－505～616)

1区中央部で検出した大型土坑で，SX－7を切り，SX－8と西は撹乱に切られる。平面形態は不整方形を呈し，長辺5.16m，短辺5.02m，深さ1.74mを測る。埋土は3層に分かれ，いずれもオリーブ黒色で，上層は砂質シルトで下部に焼土の堆積，中層はシルトで下部に腐植の堆積，下層はシルトであった。出土遺物には，陶器155点(碗55，大皿1，中皿9，皿11，蓋1，火入2，鉢3，擂鉢9，壺1，甕5，花生1，灯明皿1，細片54)，磁器200点(碗85，中皿1，皿18，小杯28，猪口17，蓋物1，火入1，灰吹か1，瓶2，鉢2，仏飯器1，水滴1，細片42)，青花2点(碗1，鉢1)，土師質土器80点(皿24，小皿10，

細片46)，土師器18点(焼塩壺蓋8，焼塩壺9，火消し壺1)，施釉土器餌鉢1点，土製品土錘1点，石製品3点(砥石2，硯1)，骨角製品篦1点，木製品33点(漆器椀2，漆器皿1，漆器箱物2，漆器曲物3，漆工品2，漆器片1，箸1，木簡3，下駄5，曲物1，切匙3，桶蓋2，桶1，調度品1，砥石台か1，刷毛1，その他3)，金属製品2点(煙管1，不明1)，瓦類2,325点(軒丸瓦45，軒平瓦52，鬼瓦1，丸瓦498，平瓦1,720，道具瓦5，鯱1，不明3)，獣骨がみられた。図示した遺物は，505～616の112点と瓦類20点(三ツ葉柏文軒平瓦：729・745・782，三巴文軒丸瓦：795・797，三ツ葉柏文鳥衾瓦：847，三葉文軒平瓦：851・853・866・878，五葉文軒平瓦：892，橘文軒平瓦：925・926，宝珠文軒平瓦：946，その他軒平瓦：951，鬼瓦：969，平瓦：1003，平瓦系道具瓦：1064・1073，鯱：1075)である。

505～533は上層から出土した遺物である。505は肥前産の京焼風陶器中碗で，内面から体部外面まで灰釉を施す。高台は無釉で，高台内には「小松吉」とみられる銘印をもつ。506は肥前産の陶器丸碗である。全面に透明感のある灰釉を施し，畳付は釉ハギする。釉には貫入が入る。507～509は肥前産の刷毛目文陶器皿である。507は中皿で，内面に白化粧土で刷毛目文を描いた後，透明釉を施し，見込には砂目痕が残る。外面は無釉である。508も中皿で，内面は施釉後に白化粧土で刷毛目文を描く。被熱するため釉は光沢がない。外面は回転ナデ調整および回転ケズリ調整で無釉である。見込には砂目痕が残る。509は肥前産の刷毛目二彩手の溝縁大皿で，内面には白化粧土で刷毛目文を描き，外面に灰釉を施し，内外面に褐釉と緑釉を流し掛けする。510は肥前産とみられる陶器鉢である。内面は錆釉のち灰釉を刷毛塗し，見込には砂目痕が残る。外面は錆釉を刷毛塗し，一部に灰釉が流れる。511は肥前産の刷毛目二彩手の陶器鉢で，内面には白化粧土で刷毛目文を描く。内面から体部外面まで灰釉を施し，内面には褐釉を流し掛けする。見込には砂目痕が残る。512～515は肥前産の磁器染付碗で，全面に透明釉を施した後，畳付は釉ハギする。512は丸碗で，外面に花唐草文と圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。513は肥前有田産の丸碗で，外面にコンニャク印判による紅葉文と梅文の染付がみられる。514は小碗で，外面には植物文と圏線の染付がみられる。高台には砂が付着する。515は丸碗で，外面に草花文の染付がみられる。516は肥前系の磁器染付丸碗である。全面に光沢のある透明釉を施した後，畳付は釉ハギし，砂が付着する。外面には草花文の染付がみられる。517は肥前有田産の磁器染付丸碗で，外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。518は肥前産の青磁三足小皿とみられ，台形の脚を貼付する。全面に青磁釉を施す。519は肥前産の青磁中皿で，折縁形を呈する。全面に青磁釉を施し，口縁部内面には片彫による文様がみられる。520は肥前有田産の磁器染付蓋物で，内面から体部外面まで透明釉を施し，口縁部を釉ハギする。外底は無釉である。体部外面には草花文と二重圏線の染付，外底には「ふうあり(ヵ)　砂(ヵ)糖入　六拾貫」の墨書がみられる。521は肥前産の青磁灰吹とみられ，口縁部は内側へ水平に伸びる。全面に光沢のある青磁釉を施し，釉には貫入が入る。522は肥前産の磁器染付鉢で，見込に二重圏線と草文，外面に松と草花文・二重圏線，高台内に圏線の染付がみられる。523は肥前産の磁器染付鉢で，外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。524～527は土師器焼塩壺で，いずれも輪積成形である。524は見込に布目痕が残り，体部内面には粗雑なナデ調整を施し，絞目と指頭圧痕が残る。外面は横方向のナデ調整で工具痕がみられ，外底には板状圧痕が残る。525は内面に布目痕と絞目が残り，口縁部は横ナデ調整，外面は横方向のナデ調整，外底はナデ調整とみられるが摩耗するため調整は不明である。526はナデ調整で，口縁部は横ナデ調整を施す。外面には方形枠に「御壷塩師　堺湊伊織」とみられる刻印の一部が残る。

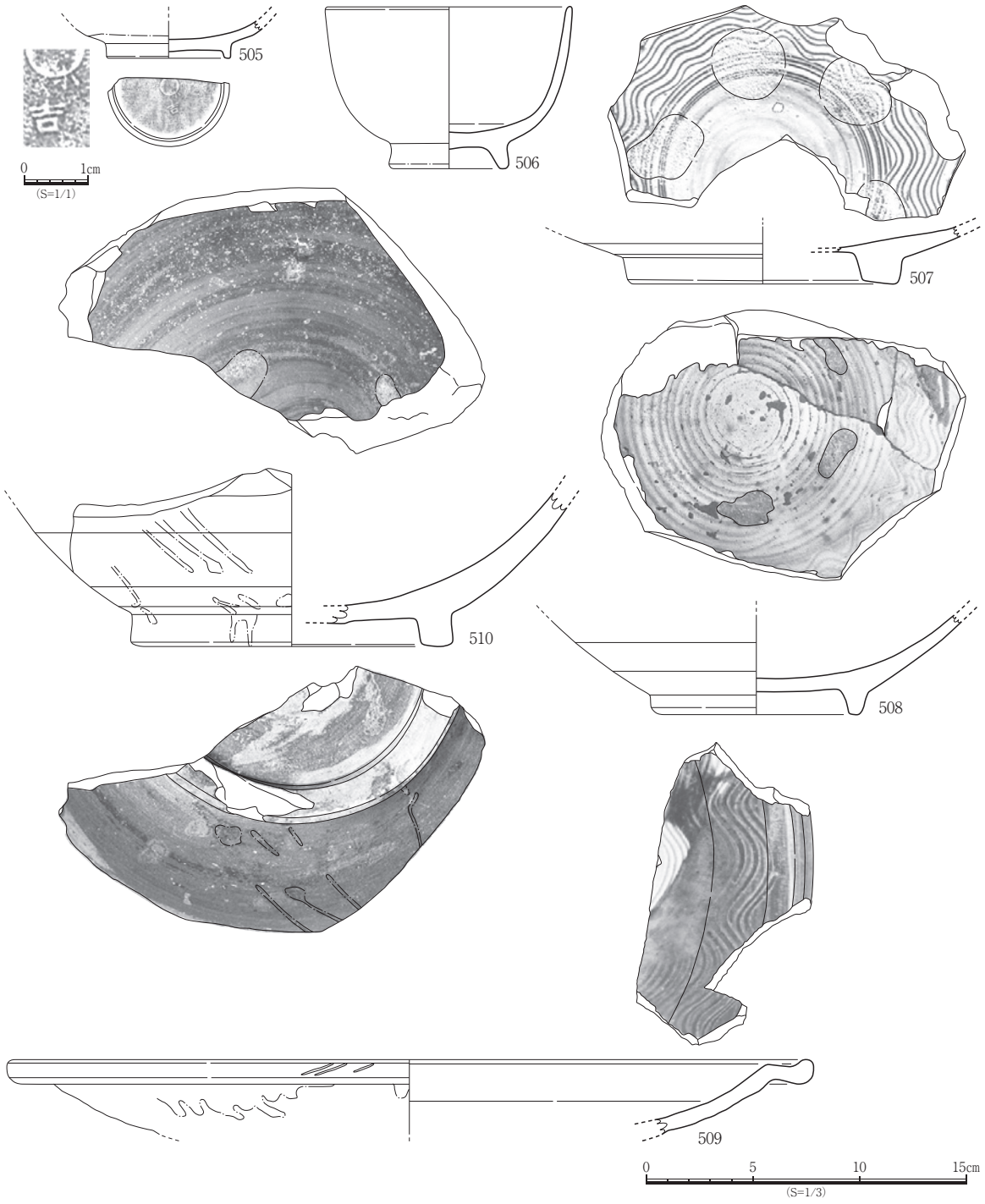


図121　SX－9出土遺物実測図1

527は内面がナデ調整で絞目が残り，口縁部は横ナデ調整，外面は横方向のナデ調整を施す。外面には方形枠に「御壷塩師　堺湊伊織」とみられる刻印の一部が残る。528・529は土師器焼塩壺蓋で，天井部外面はナデ調整，口縁部は横ナデ調整である。528は天井部外面に指頭圧痕，天井部内面には布目痕が残る。529は天井部外面に板状圧痕，口縁部外面に指頭圧痕が残る。530は木製品木簡で，長方形の板材の上部を圭頭にする。中央部に径0.2cmの円孔がみられる。片面に墨書がみられるが解読は不可であった。531は木製品切匙で完存する。大型で，刃部は薄く加工し，端部は面取す

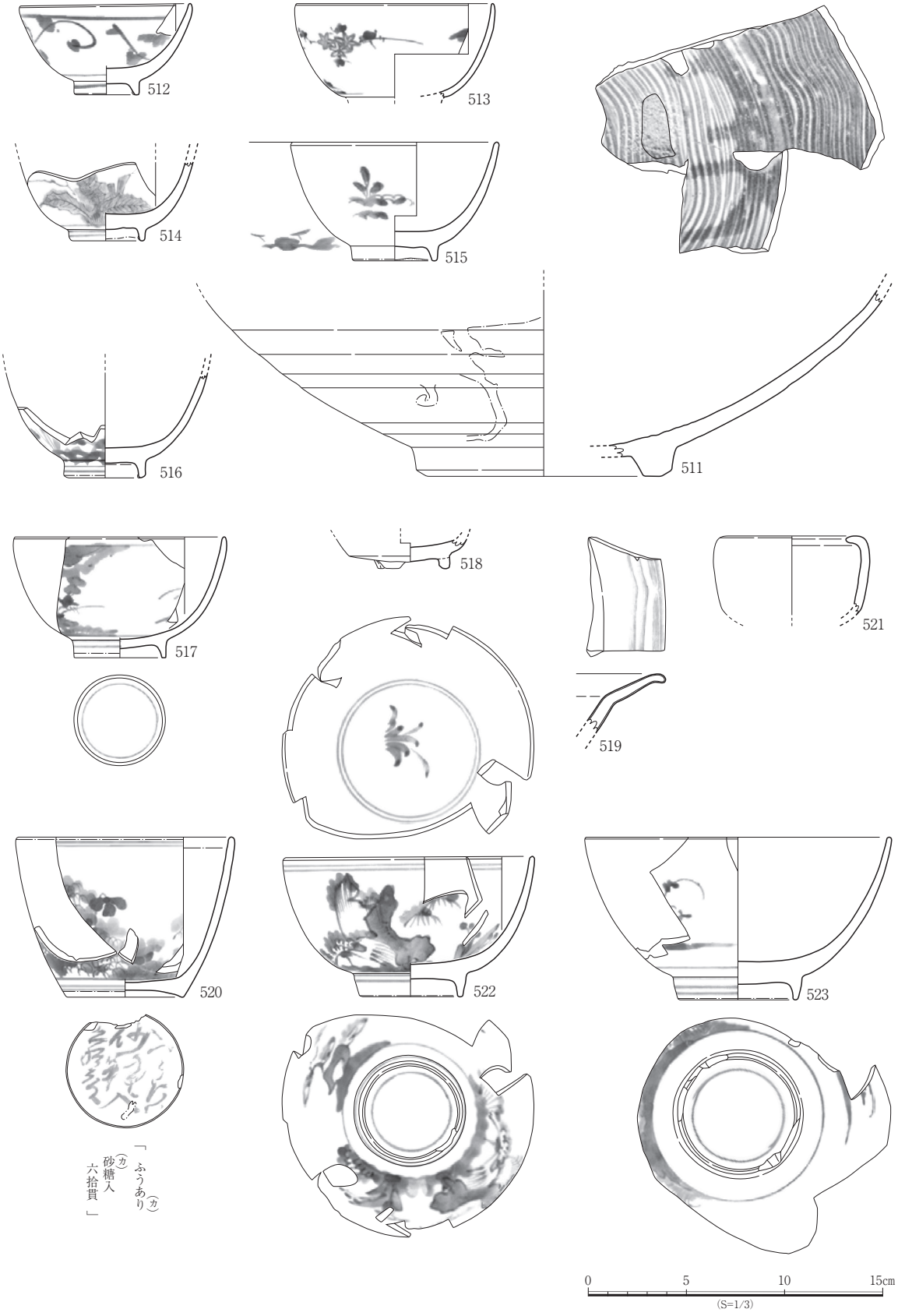


図122　SX－9出土遺物実測図2

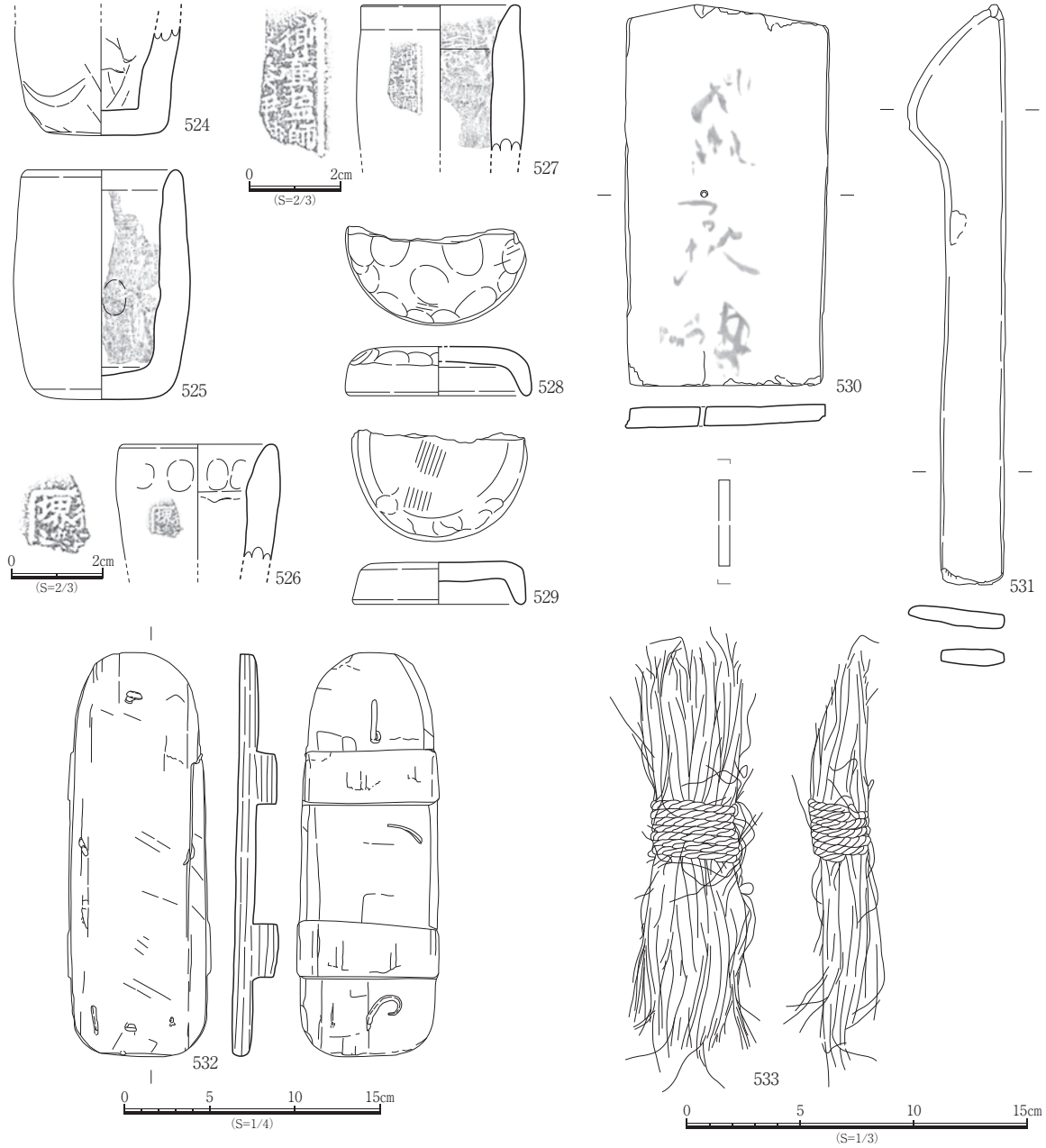


図123　SX－9出土遺物実測図3

る。532は木製品下駄で，連歯下駄である。隅丸方形を呈し，無眼である。6箇所に鉄釘が貫通する。533は木製品刷毛で，棕櫚を束ね，中央部を径0.4cmの縄で巻く。

534～592は中層から出土した遺物である。534・535は肥前産の京焼風陶器丸碗で，内面から体部外面まで灰釉を施す。外面には呉須による山水文がみられる。高台は無釉で，高台内には銘印の一部が残る。534の銘印は「清水」の一部とみられる。536は腰張形の陶器中碗で，内面から外面体部下半まで灰釉を施す。高台は無釉で，高台内には「雲」とみられる銘印をもつ。537は肥前産の陶器丸碗で，内面から外面体部下半まで灰釉を施し，御本が入る。器形は著しく歪む。538は陶器筒形碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。539は陶器丸碗で，全面に灰釉を施した後，畳付を釉ハギする。釉には貫入が入る。540は肥前内野山窯の陶器丸皿である。内面は銅緑釉，外面

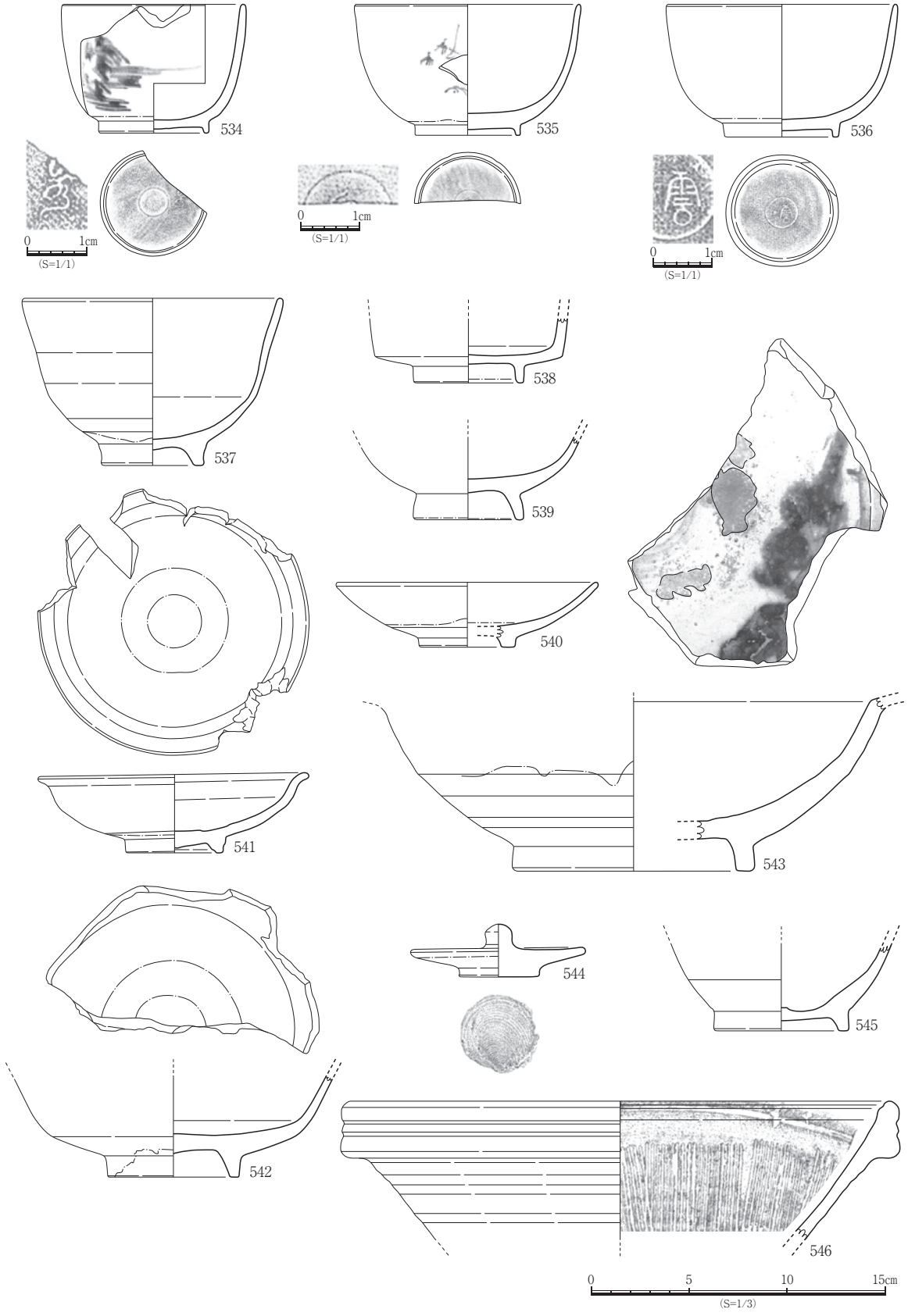


図124　SX－9出土遺物実測図4

は高台付近まで灰釉を施し，見込を蛇ノ目釉ハギする。高台は無釉である。541は肥前産の陶器端反小皿である。内面から外面体部下半まで錆釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。釉ハギ部分には僅かに砂が付着する。542は肥前内野山窯の陶器中皿である。内面は銅緑釉，外面は高台付近まで灰釉を施し，見込を蛇ノ目釉ハギする。高台は無釉である。543は肥前産の陶器中皿で，折縁形をなす。内面から口縁部外面に灰釉を施し，内面には鉄錆による文様がみられ，緑釉を流し掛けする。見込には砂目痕が残る。外面体部下半は回転ケズリ調整で，高台は無釉である。544は陶器急須蓋で，丸い摘が付く。口縁部内面から外面に緑釉を施す。内面は無釉で，底部の切り離しは回転糸切りである。545は陶器鉢とみられる。内面は回転ナデ調整で，見込の一部に緑釉が掛かる。外面は回転ケズリ調整で錆釉を施す。畳付には砂が付着する。546は焼締陶器擂鉢である。回転ナデ調整で，口縁部外面に2条の凹線，口縁部内面に1条の凹線，内面には10条単位の擂目を施す。擂目は摩耗する。口縁部外面には自然釉が掛かる。547は肥前産の陶器鉄釉甕である。口縁部はＴ字形を呈し，上面には浅い溝が5条巡る。548は陶器花生で，筒形を呈し，全面に灰釉を施す。外面の1箇所に把手状の耳を貼付する。

549～583は中層から出土した磁器である。549～566は磁器碗で，全面に透明釉または白磁釉を施し，畳付は釉ハギする。549は肥前有田産の磁器色絵丸碗である。外面には鳥と草文の上絵付の痕跡が残る。550は肥前産の白磁丸碗で，全面に白磁釉を施し，高台には砂が付着する。551～566は肥前産の染付丸碗である。551は肥前有田産で，外面にはコンニャク印判と染付による紅葉文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。552は外面に花唐草文と圏線の染付がみられる。553は外面に網目と笹文・圏線の染付がみられる。高台内には砂が付着する。554は外面に網目文と圏線の染付がみられる。高台内には砂が付着する。555は外面に松葉文と圏線の染付がみられる。高台内には砂が付着する。556は内面に多重圏線，外面には圏線の染付がみられる。557は外面に網目文と圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。558は肥前有田産で，外面に草花文と圏線，高台内には圏線の染付がみられる。559は外面に草花文の染付がみられる。560は外面に菊花文と圏線，高台内に圏線の染付と「大明年製」の銘がみられる。畳付には僅かに砂が付着する。561は肥前有田産で，外面には山水文と圏線，高台内には銘と圏線の染付がみられる。562は外面に松と山・舟文・圏線，高台内に圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。563は外面に松文とみられる染付と圏線，高台内には圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。564は外面に土坡と樹文・圏線，高台内に圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。565は外面に圏線と草花文と風景文とみられる染付を描く。畳付には砂が付着する。566は端反碗で，外面に草花文と圏線，高台内には圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。567は肥前有田産の青磁染付丸碗である。口錆で，外面には青磁釉，内面には透明釉を施し，内面には見込に五弁花文と二重圏線の染付を描く。畳付は釉ハギする。568は肥前産の磁器染付小皿で，透明釉を施し，畳付は釉ハギする。型打成形で，見込には圏線内に舟と魚・麒麟文の染付を描く。569は肥前産の磁器染付五寸皿である。見込に菊花文，内面は濃地に雲文か，外面に宝文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。高台には砂が付着する。570は肥前産の白磁中皿で，口縁は波縁状を呈する。全面に白磁釉を施し，畳付は釉ハギする。高台内には砂が付着する。571～577は肥前産の磁器小杯である。571は肥前有田産の磁器色絵小杯である。端反形で，外面には朱色と黒色の鳳凰と雲文の上絵付がみられる。572は肥前有田産で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付と「大明年製」の

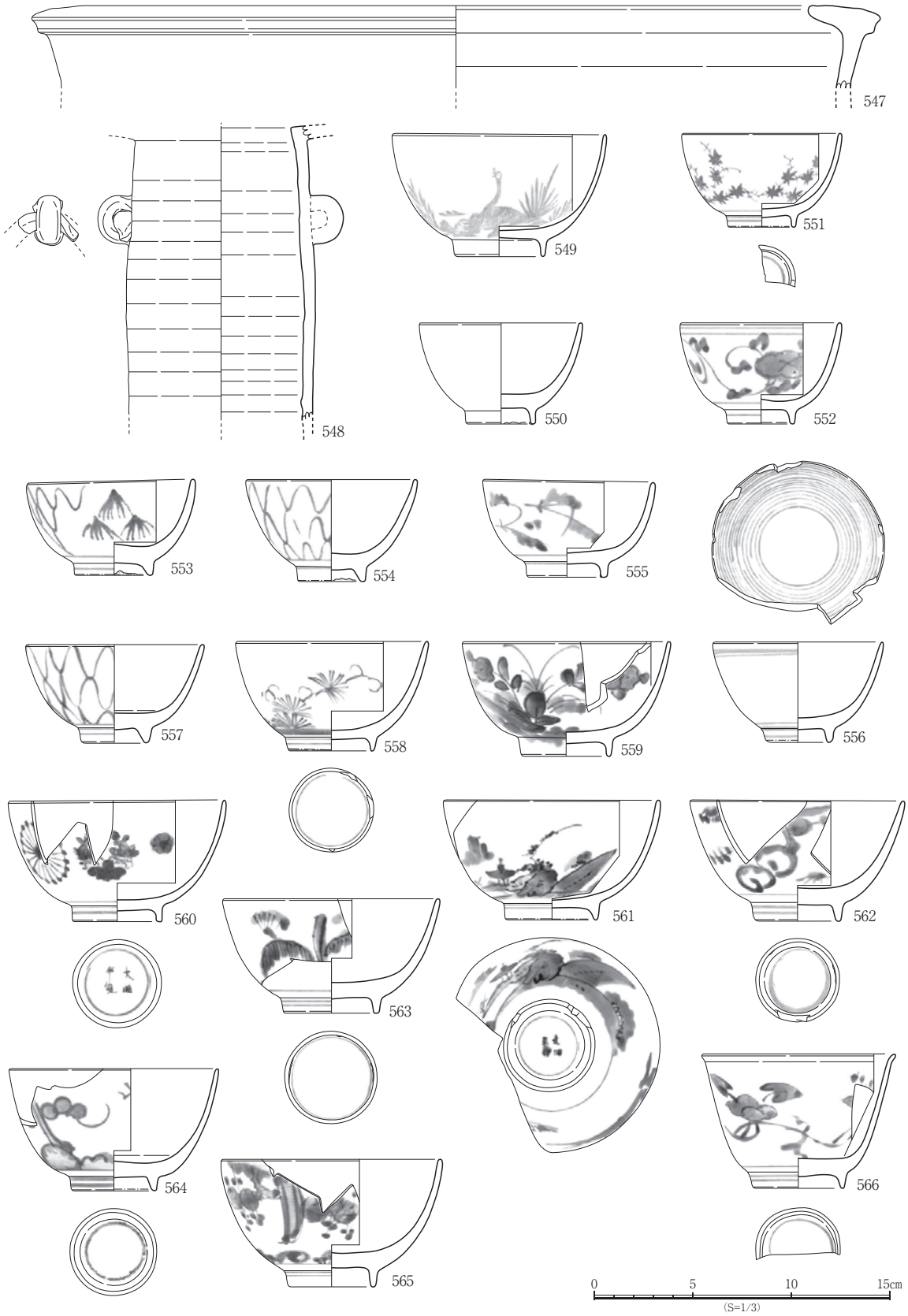


図125　SX－9出土遺物実測図5

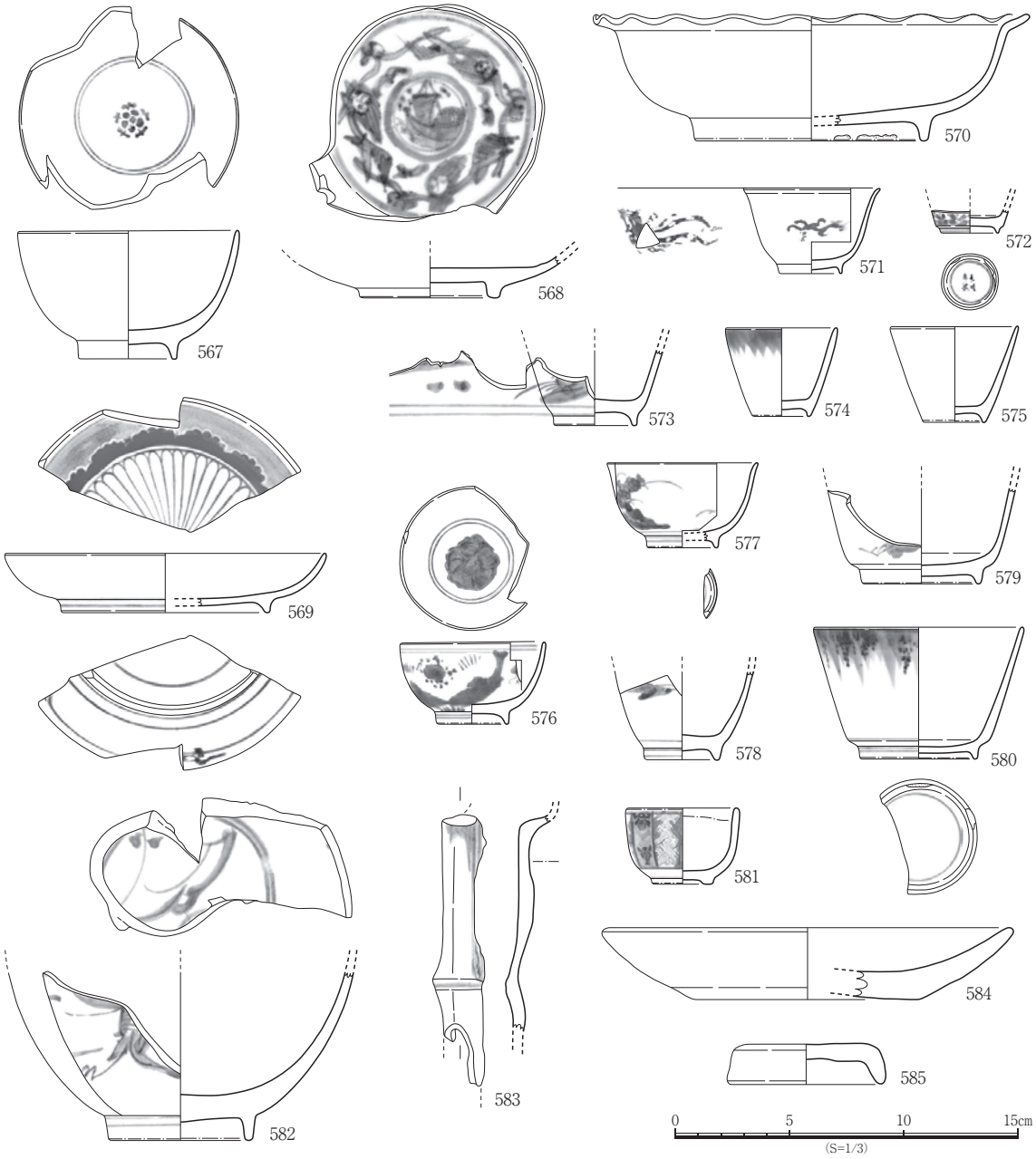


図126　SX－9出土遺物実測図6

銘がみられる。高台には砂が付着する。573は外面に草花文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施したとみられるが，外底には全面に細かい砂が付着するため不明である。574は肥前有田産である。桶形で，外面には雨降文の染付がみられる。575は白磁で，桶形を呈する。全面に白磁釉を施し，畳付は釉ハギする。576は丸形で，見込に花文と二重圏線，内面に圏線，外面に魚文と圏線の染付がみられる。577は肥前有田産で，端反形を呈する。外面には草花文と圏線，高台内に圏線の染付がみられる。578は磁器染付猪口で，外面に圏線と染付の一部が残る。全面に透明釉を施した後，畳付は釉ハギする。高台には砂が付着する。579は肥前有田産の磁器色絵猪口である。全面に光沢のある透明釉を施した後，畳付は釉ハギする。外面に黒色の松文とみられる上絵付の一部が残る。580は肥前有田産の磁器染付猪口で，桶形を呈する。外面には型紙刷による雨粒文，雨降文と圏線

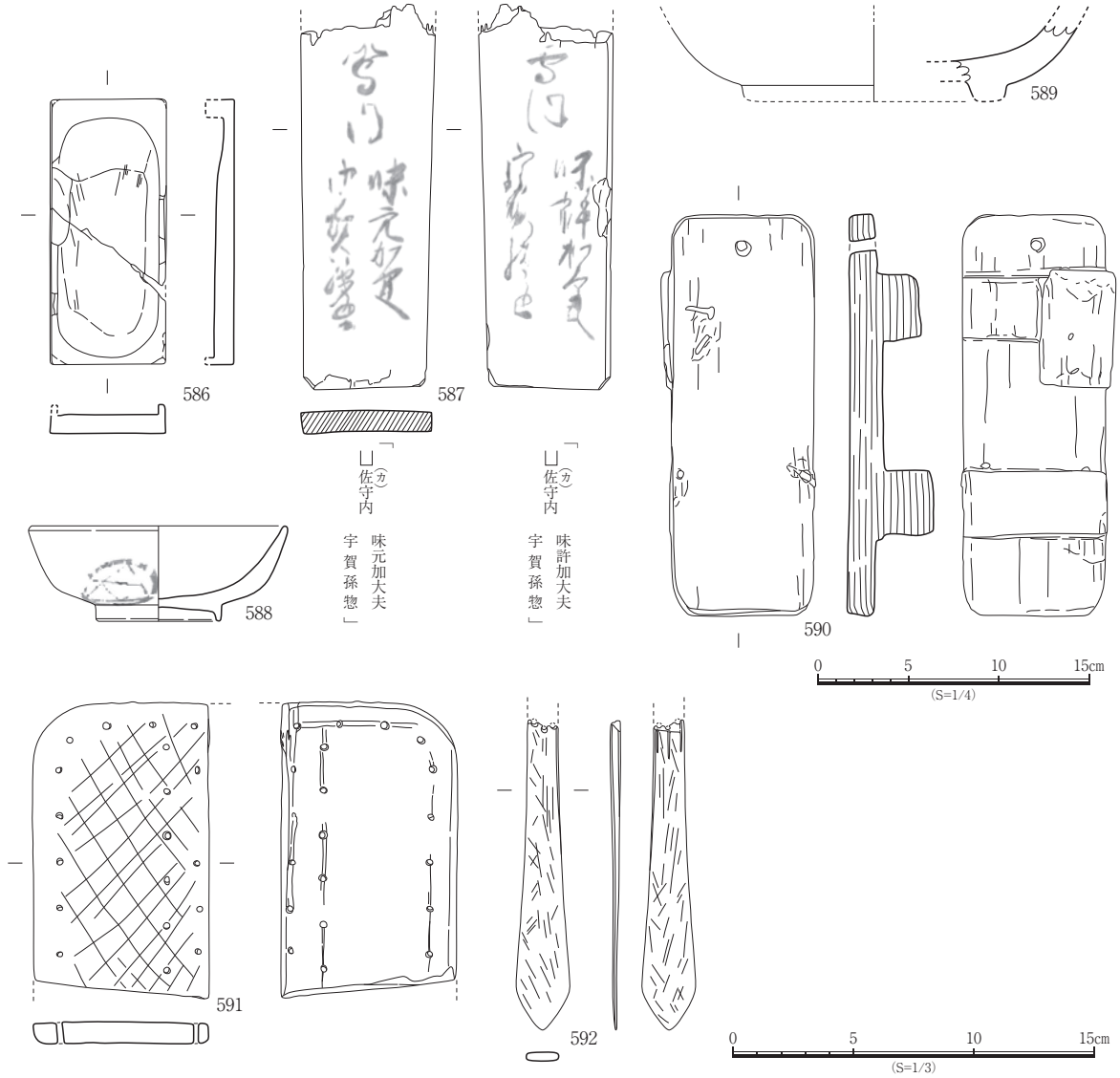


図127　SX－9出土遺物実測図7

の染付，高台内に圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。581は肥前有田産の磁器染付蓋物である。型打成形で，多角形を呈する。内面から高台まで透明釉を施し，口縁部は釉ハギする。高台内は削り出しで無釉である。外面には型押による陽刻の区画に幾何学文と瓔珞文とみられる文様を施し，一部を呉須で彩色する。582は肥前産の磁器染付鉢である。見込には二重圏線内に荒磯文の染付，外面にも圏線と染付の一部が残る。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。583は肥前産の磁器染付で水滴とみられる。竹形で節を表現し，一部を呉須で彩色する。外面と内面上部には透明釉を施す。内面下部は無釉で粗雑なナデ調整を行う。487と同一個体とみられる。584は土師質土器皿である。回転ナデ調整で，外底はナデ調整である。内面には煤が付着する。585は土師器焼塩壺蓋である。ナデ調整で，口縁部は横ナデ調整である。586は小型の石製品硯で，石材は粘板岩である。陸部には使用痕がみられ，海部には墨が付着する。587は木製品木簡で一部が欠損する。下端は方形で隅を切る。表面に「□佐(ヵ)守内　味元加大夫　宇賀孫惣」，裏面に「□佐(ヵ)守内　味許加大夫　宇賀孫惣」の墨書がみられる。588は木製品漆器椀で，内外面とも赤塗である。外面に黒色の

丸に三鱗文がみられる。589は木製品漆器皿で，内外面とも黒塗である。幅が広く低い高台が付く。590は木製品下駄で，連歯下駄である。長方形を呈し，四隅を丸く加工する。欠けた前歯に木片を鉄釘で留めて補修している。591は板状の木製品で，隅を丸く加工する。上面には斜格子状に刻目を施す。下面は面取し，周囲に径0.2～0.3cmの円孔が回り，円孔間には浅い溝が残る。両面に黒色の付着物がみられる。592は骨角製品篦で，丁寧に研磨し光沢をもつ。先端は尖らせ薄く加工する。基部は細く，径0.2cmの円孔が3箇所に残り，片面には3本の直線状の陰刻文がみられる。

593～616は下層から出土した遺物である。593は陶器天目碗で，全面に鉄釉を施す。594は陶器中碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。外面は一部被熱する。釉には貫入が入る。595は肥前産の陶器丸碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。釉には貫入が入り，畳付には砂が付着する。596は肥前産の陶器丸碗で，全面に灰釉を施した後，畳付を釉ハギする。釉には貫入が入る。597は腰張形の陶器中碗で，全面に光沢のある灰釉を施した後，畳付を釉ハギする。釉には貫入が入る。598は陶器端反碗である。薄手で，外面体部下半には丸彫による縞状の文様がみられる。内面から高台付近まで灰釉を施す。釉は光沢があり，貫入が入る。599は陶胎染付火入である。回転ナデ調整で，口縁部内面から外面に透明釉を施す。外面には圏線の染付，口縁端部には敲打痕がみられる。600は備前焼擂鉢である。回転ナデ調整で，内面には放射状と斜方向の擂目を入れる。擂目は著しく摩耗する。601は肥前産の陶器甕である。見込は放射状，体部内面は格子状の当具痕の後，ナデ調整を加える。外面は格子状のタタキ調整の後ナデ調整，外底は無調整である。602は肥前産の磁器染付丸碗で，外面に松文の染付がみられる。全面に透明釉を施す。603は肥前産の白磁小杯である。桶形で，口錆である。全面に白磁釉を施し，畳付は釉ハギする。604は肥前産の磁器染付仏飯器で，外面に笹文と圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施す。605は肥前産の磁器染付水滴で，舟形を呈する。舟は中空で，船首と上面に円孔を穿つ。内面はナデ調整で，外面の側面には陽刻文と唐草文の染付がみられ，船尾には砂が付着する。船底は型押成形で，内面は布目痕が残り，外面はナデ調整で底部には「五分人中」の墨書がみられる。舟上には中実の人物と中空で型押成形の俵を貼付する。俵は型による陽刻の網目文がみられる。舟と人物・俵は呉須で一部を彩色し，外底を除き透明釉を施す。606は中国景徳鎮窯系の青花碗で，畳付を除き透明釉を施す。見込には

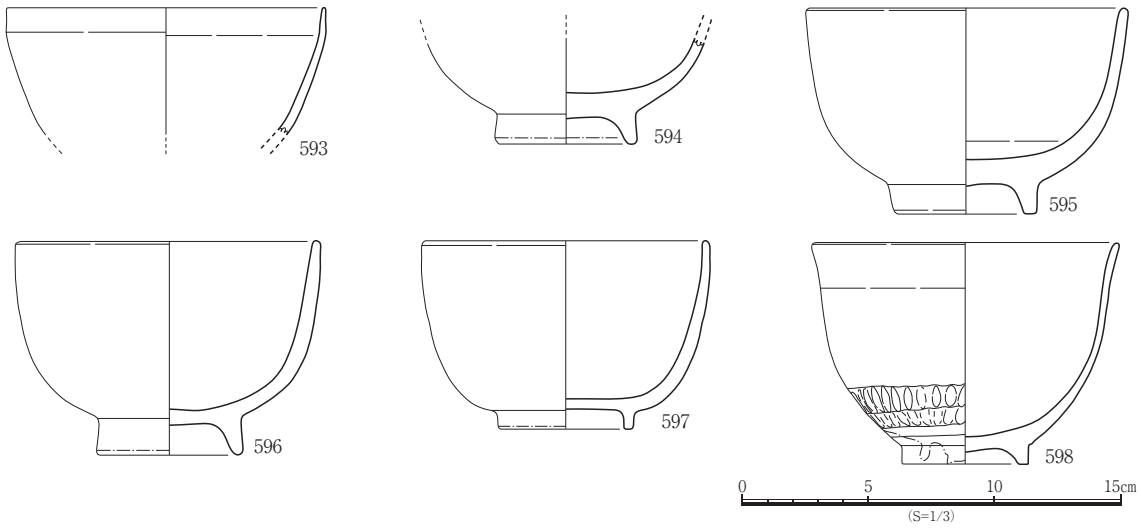


図128　SX－9出土遺物実測図8

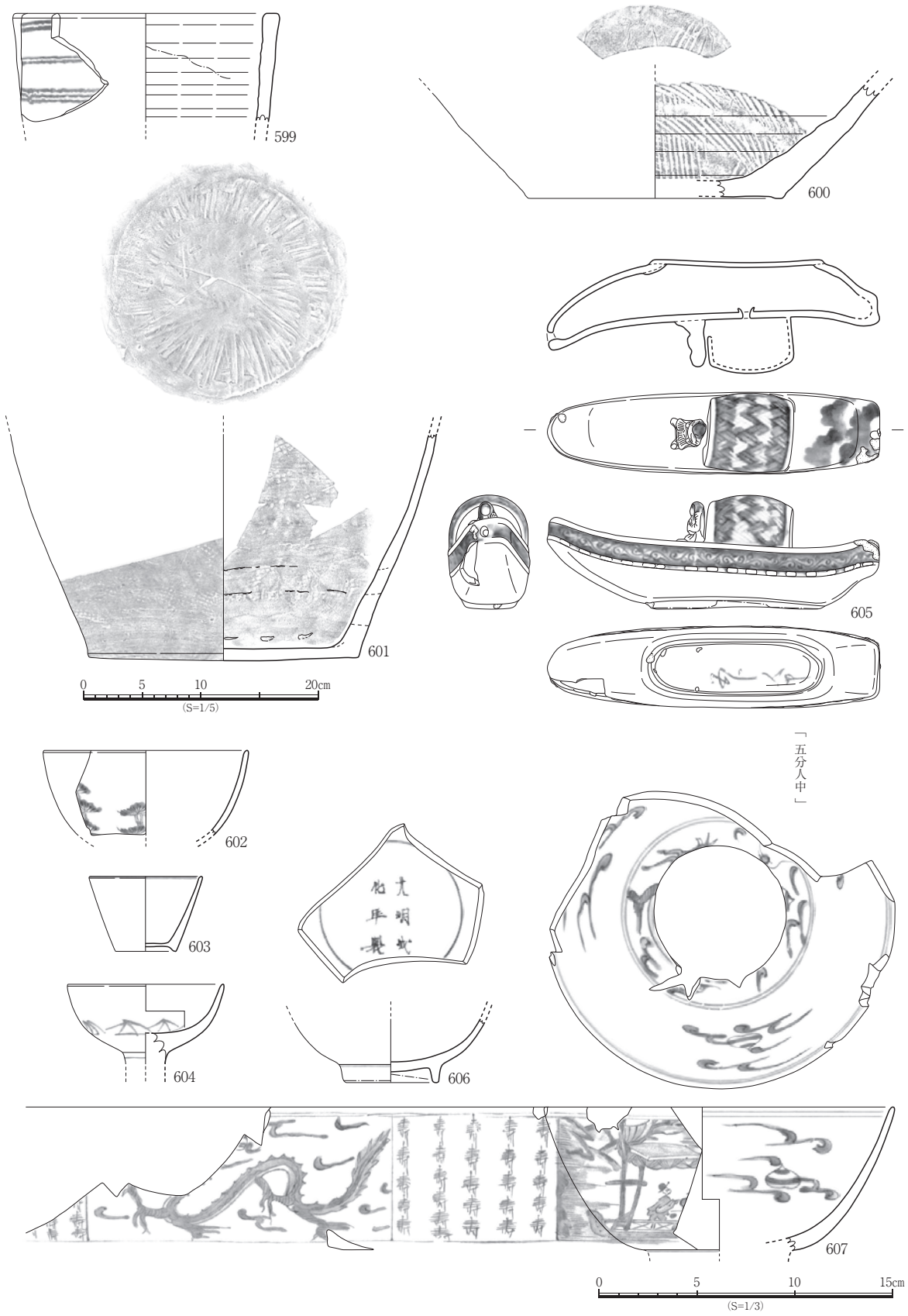


図129　SX－9出土遺物実測図9

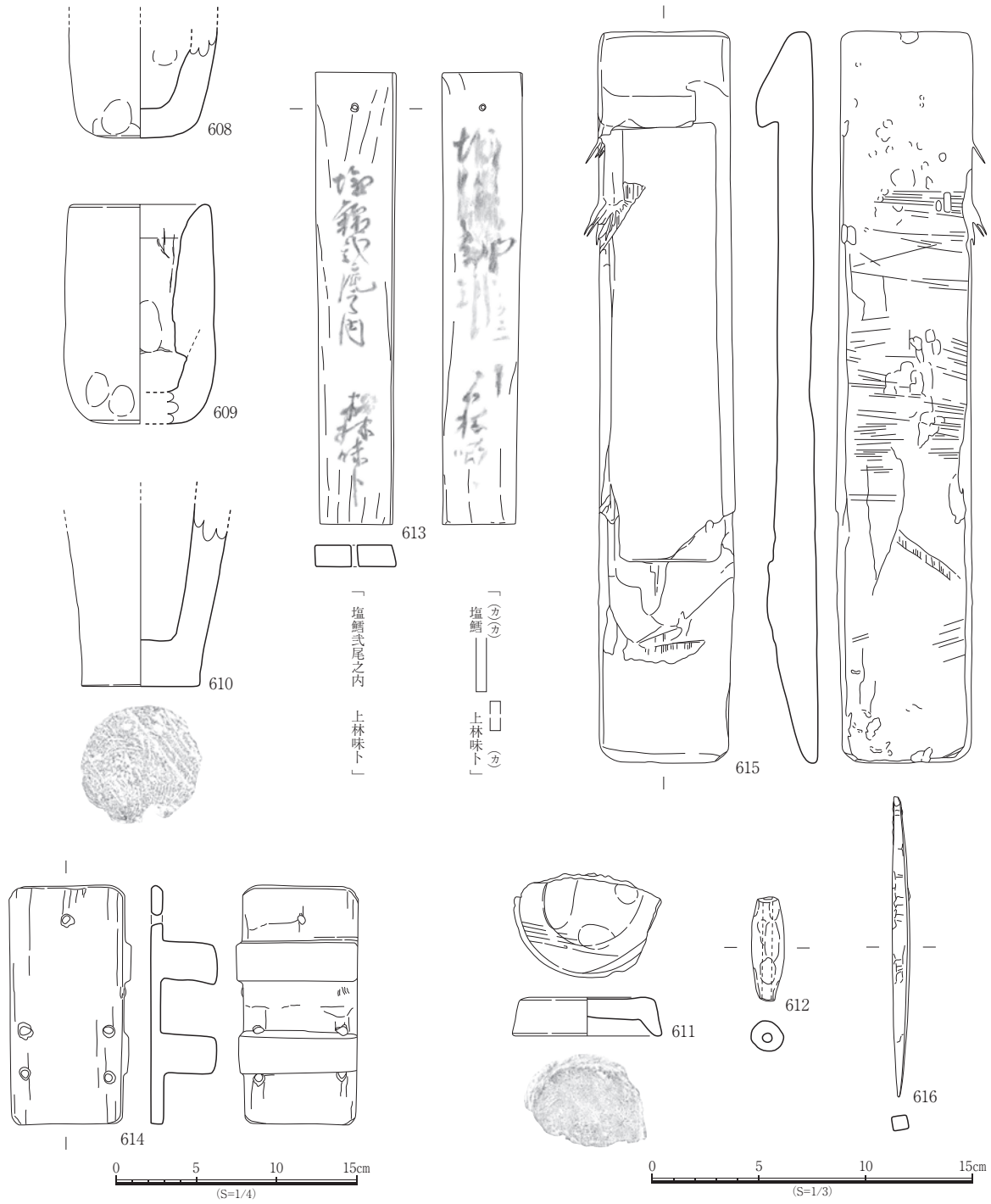


図130　SX－9出土遺物実測図10

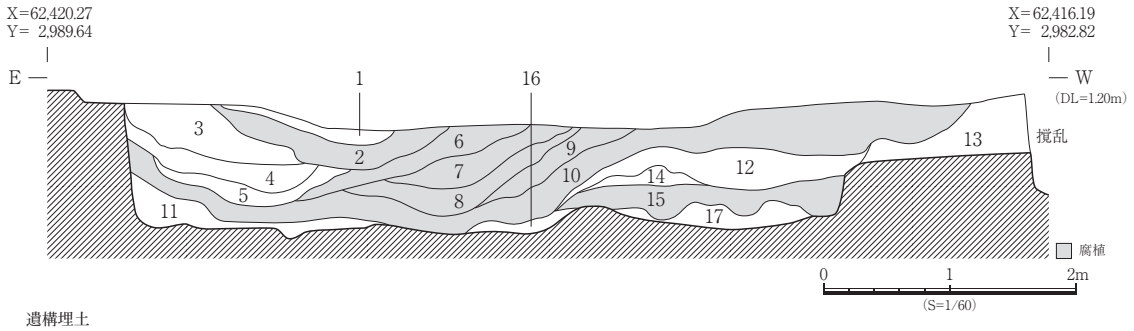
圏線と「大明成化年製」の銘，外面には圏線の染付がみられる。607は中国景徳鎮窯系の青花鉢である。見込は雲龍文と宝珠文・圏線，内面に雲文と宝珠文・圏線，外面は区画割に「寿」字文と雲龍文，舟と人物文の染付がみられる。漆継の痕跡が残る。608～610は土師器焼塩壺である。608・609は輪積成形で，608は内面に粗雑なナデ調整で絞目が残り，外面はナデ調整である。609は内面に絞目と布目痕が残り，口縁部は横ナデ調整，外面は横方向のナデ調整である。610は水挽成形で，回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。611は土師器焼塩壺蓋であ

る。ナデ調整で，口縁部は横ナデ調整である。天井部内面には布目痕がみられ，天井部外面には板状圧痕が残る。612は土製品土錘で，紡錘形を呈する。外面に指頭圧痕が残るが，摩耗するため調整は不明である。613は木製品木簡で，短冊形を呈し，上部に径0.2cmの円孔を穿つ。表面に「塩鱈弐尾之内　上林味卜」の墨書，裏面にも同様の墨書の一部が残る。614は木製品下駄で，連歯下駄である。長方形を呈し，四隅を丸く加工する。子供用で，緒孔は5箇所に残り，成長に合わせ横緒孔を後方へ作り直したものとみられる。615は木製品刳物で，板状を呈し，上面は方形に刳り，両端を薄く加工する。砥石台か。616は棒状の金属製品である。両端を細く尖らせ，断面は方形を呈する。

SX－10（遺構：図131　遺物：図132・133－617～641）

1区中央部で検出した大型土坑で，西と南は撹乱に切られる。平面形態は不整方形を呈し，検出長9.91m，検出幅6.02m，深さ1.14mを測る。埋土は17層に分かれ，腐植を多く含む層もみられた。出土遺物には，陶器45点（碗4，皿10，鉢1，擂鉢3，瓶1，甕3，灯明皿1，細片22），磁器38点（碗16，皿7，小杯3，猪口4，香炉または火入1，瓶1，細片6），土師質土器13点（皿5，小皿3，細片5），石製品砥石1点，木製品9点（木簡1，漆器椀1，漆器蓋1，漆器片2，曲物1，桶蓋か1，栓1，加工木1），金属製品釘1点，瓦1,358点（軒丸瓦25，軒平瓦18，鬼瓦1，鳥衾瓦1，丸瓦328，平瓦980，道具瓦3，不明2），獣骨がみられた。図示した遺物は，617～641の25点と瓦12点（三ツ葉柏文軒丸瓦：742・747・791，三巴文軒丸瓦：839，三ツ葉柏文鳥衾瓦：846，三葉文軒平瓦：886，橘文軒平瓦：899・923，鬼瓦：959，平瓦：1010，平瓦系道具瓦：1055・1060）である。

617～632は上層から出土した遺物である。617・618は陶器丸碗である。全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。釉には貫入が入る。619は肥前内野山窯の陶器中皿で，折縁形である。内面は銅緑釉，外面は高台付近まで灰釉を施し，見込を蛇ノ目釉ハギする。620は肥前産の陶器瓶とみられる。回転ナデ調整で，外面下半は回転ケズリ調整を加える。全面に光沢のない錆釉を施した後，外面体部上半には鉄釉を施し，見込にも僅かに釉が付着する。621は焼締陶器擂鉢である。回転ナデ調整で，口縁部外面には2条の凹線，内面には12条単位の擂目がみられる。622～630は磁器



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂質シルトで，1cm大の礫を多く含む
2. オリーブ黒色(5Y3/2)粗粒砂質シルトで，多量の礫と瓦を含み，非常に多量の腐植を含む
3. 灰色(7.5Y4/1)粘土質シルトで，粗粒砂と3cm大の円礫を多く含む
4. 灰色(10Y4/1)粗粒砂質シルトで，10cm大の角礫と瓦を含む
5. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂質シルトで，1cm大の礫を含む
6. 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質極粗粒砂で，腐植を非常に多く含む
7. オリーブ黒色(7.5Y3/2)極粗粒砂質シルトで，3cm大の礫と腐植を多く含む
8. 灰色(5Y4/1)極粗粒砂質シルトで，5cm大の礫と腐植を多く含む
9. オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂質シルトで，5cm大の礫と腐植を非常に多く含む
10. オリーブ黒色(5Y2/2)シルト質極細粒砂で，1cm大の円礫と腐植を非常に多く含む
11. 灰色(5Y4/1)粘土質シルトで，極粗粒砂を非常に多く含む
12. 灰色(10Y4/1)粘土質シルトで，細粒砂・粗粒砂のブロックと腐植を含む
13. オリーブ黒色(5Y3/2)極粗粒砂質シルトで，腐植を少し含む
14. オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土質シルトで，粗粒砂と腐植を含む
15. オリーブ黒色(7.5Y3/1)極粗粒砂質シルトで，腐植を非常に多く含む
16. 灰色(10Y4/1)細粒砂質シルト
17. 灰色(7.5Y4/1)極粗粒砂質シルトで，10cm大の礫を少し含む

図131　SX－10

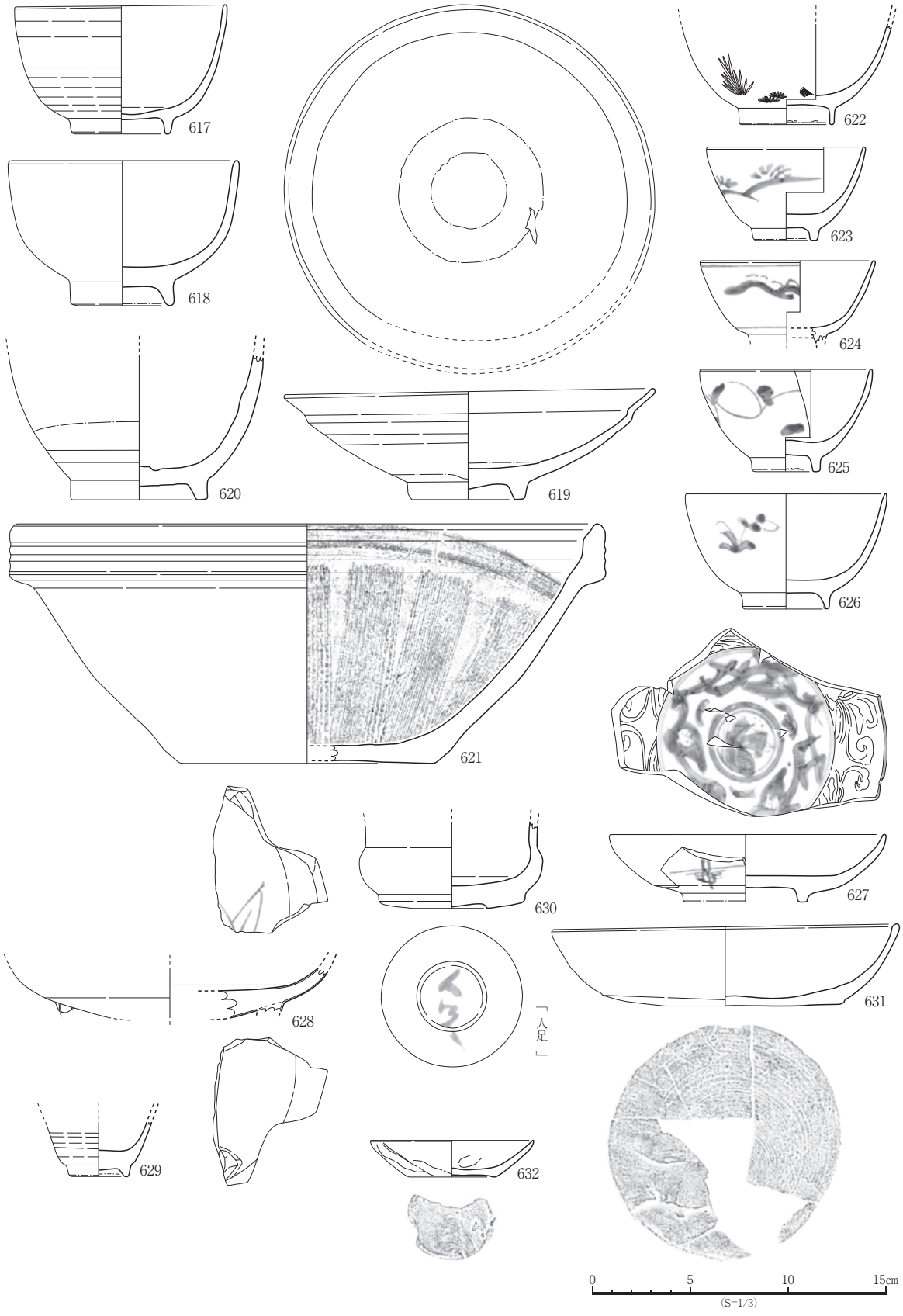


図132　SX－10出土遺物実測図1

ですべて肥前産である。622は肥前有田産の磁器色絵中碗である。全面に透明釉を施した後，畳付を釉ハギし，高台内側には砂が付着する。外面に草文の上絵付の痕跡が残る。623～626は磁器染付丸碗で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。623は外面に松文の染付がみられる。畳付には砂が付着する。624は外面に土坡と草文・圏線の染付を描く。625は外面に唐草文の染付がみられる。高台内には砂が付着する。626は外面に草花文の染付がみられる。高台内には砂が付着する。627は肥前産の磁器染付小皿である。型打成形で，口錆を施し，内面には型による陽刻の唐草文がみられる。見込は圏線内に舟と麒麟文，外面には舟文の染付を描く。628は肥前波佐見産の青磁染付中皿で，底部に脚を貼付する。内面に笹文の染付を描き，染付には透明釉，その他の部分には青磁釉を施す。629は肥前産の白磁小杯である。内面から高台内まで白磁釉を施し，畳付は釉ハギする。630は肥前産の白磁香炉または火入である。内面は回転ナデ調整を施し，無釉で煤が付着する。体部外面は白磁釉，外底には錆釉を刷毛塗する。高台内には「人足」の墨書がみられる。631は土師質土器皿である。回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りで，ケズリ調整を加える。632は土師質土器小皿である。回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りで，一部にナデ調整を加える。内面に煤が付着する。

633～641は下層から出土した遺物である。633は焼締陶器擂鉢である。回転ナデ調整で，口縁部外面には2条の凹線，内面には擂目がみられる。擂目は著しく摩耗する。634は肥前産の陶器甕で，内面に格子目状の当具痕が残り，外面には多条の凹線と線刻による文様がみられる。全面に鉄釉を施す。635は陶器甕で，外面の肩部には多条の凹線がみられ，手捻の不遊環を貼付する。全面に鉄釉を施す。636は肥前産の磁器染付丸碗である。全面に透明釉を施した後，畳付は釉ハギし，砂が付着する。外面には柳と草花文・圏線，高台内には圏線の染付がみられる。637は肥前産の磁器染付丸碗である。内面と見込に圏線，外面に荒磯文と圏線の染付がみられる。638は肥前有田産の磁器染付猪口である。桶形で，全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。内面は無文で，外面にはコンニャク印判による菊花と丸文・圏線の染付，高台内に「大明年製」の銘と圏線の染付がみられる。639は土師質土器皿である。回転ナデ調整を施し，外面体部下端は回転ケズリ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。見込は摩耗するため調整不明である。640は木製品木簡で，長方形を呈し四隅を切る。片面に「□拾貫入扣(ヵ)　六(三ヵ)月廿七日」の墨書がみられる。641は木製品漆器蓋で，内面は赤塗，外面は黒塗である。外面には朱色の丸に花文がみられる。

SX－11(遺物：図134－642～649)

1区西部で検出した土坑で，SD－11を切り，撹乱に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し，検出長3.88m，短辺2.12m，深さ66cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで，0.5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には，陶器8点(碗2，皿2，擂鉢2，トチン1，細片1)，磁器6点(碗1，皿2，小杯3)，土師器片1点，金属製品火箸か1点，瓦92点(軒丸瓦1，丸瓦9，平瓦82)がみられた。図示した遺物は，陶器碗(642・643)，陶器トチン(644)，磁器碗(645)，磁器皿(646・647)，磁器小杯(648)，金属製品火箸か(649)で，すべて下層から出土している。642は陶器丸碗で，全面に光沢のある灰釉を施す。外面には緑彩がみられる。643は陶器碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。高台内には渦状の鉋痕が残る。644は陶器トチンで，鼓形を呈する。側面はナデ調整で指頭圧痕が顕著に残る。上面と下面は無調整で，上面には茶色の付着物がみられ，下面には板状圧痕が残る。645は肥前産の磁器染付筒形碗で，外面には染付の一部が残る。646は肥前産の磁器染付皿である。見込に

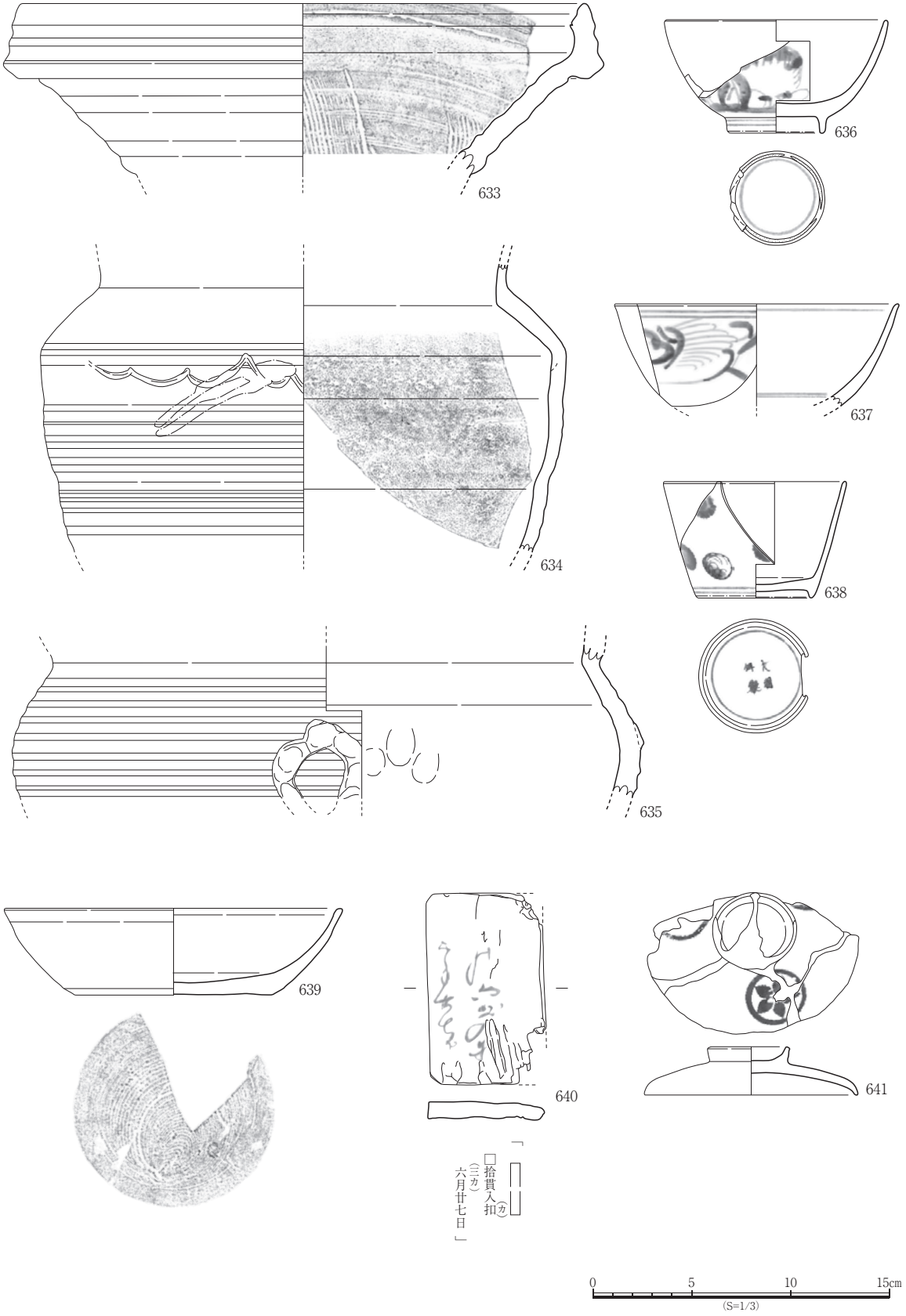


図133　SX－10出土遺物実測図2

は花文とみられる染付と圏線，内面には帯線の染付を描く。畳付には砂が付着する。647は肥前有田産の磁器染付五寸皿である。内面には墨弾による文様，外面と高台内には圏線の染付がみられる。648は肥前産の白磁小杯である。端反形で，全面に白磁釉を施し，畳付は釉ハギし，高台には砂が付着する。649は鉄製の火箸とみられる。先端を細く尖らせ，断面は円形を呈する。

SX－12（遺構：図135　遺物：図134－650・651）

2区北東部で検出した大型土坑で，SD－13の底で確認した。隅丸方形を呈するものとみられ，北は調査区外へ続き，南は土橋状に残る。検出長2.85m，幅1.86m，深さ1.00mを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は2層に分かれる。出土遺物には陶器2点（皿1，匣鉢1），磁器3点（小杯1，瓶1，細片1），土師質土器片1点，土製品1点，瓦125点（軒丸瓦1，丸瓦16，平瓦89，道具瓦2，その他17），骨1点，貝2点，鉄滓2点がみられ，陶器皿（650）と陶器匣鉢（651），平瓦系道具瓦（1052・1053）を図示した。650は尾戸窯の陶器変形皿で，板作りである。平面形態は多角形を呈するものとみられ，1辺は縁が立ち上がる。内面と立ち上がる口縁部には灰釉を施し，外面は斜方向の板ナデもしくは鉄線切り

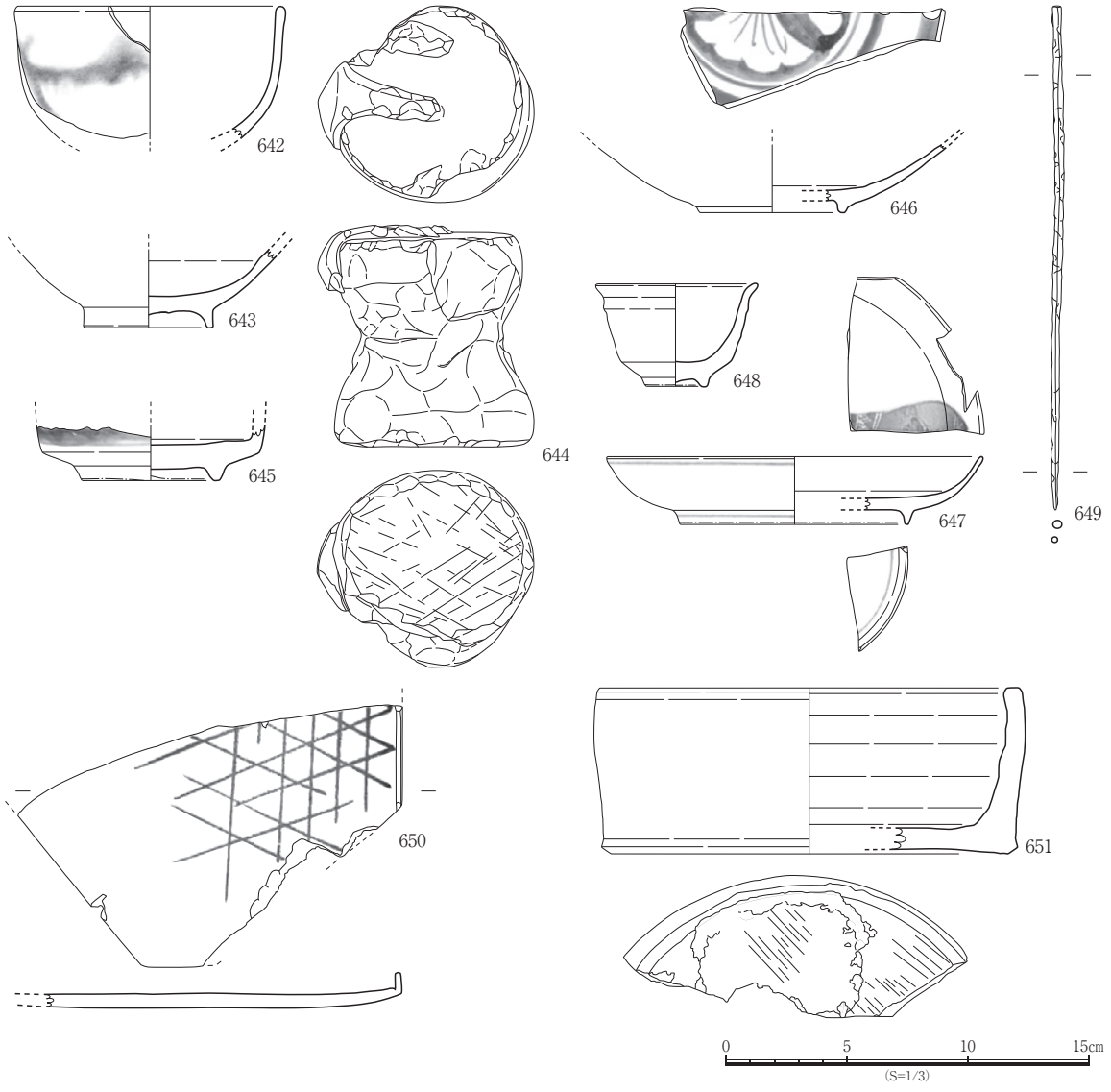


図134　SX－11・12出土遺物実測図

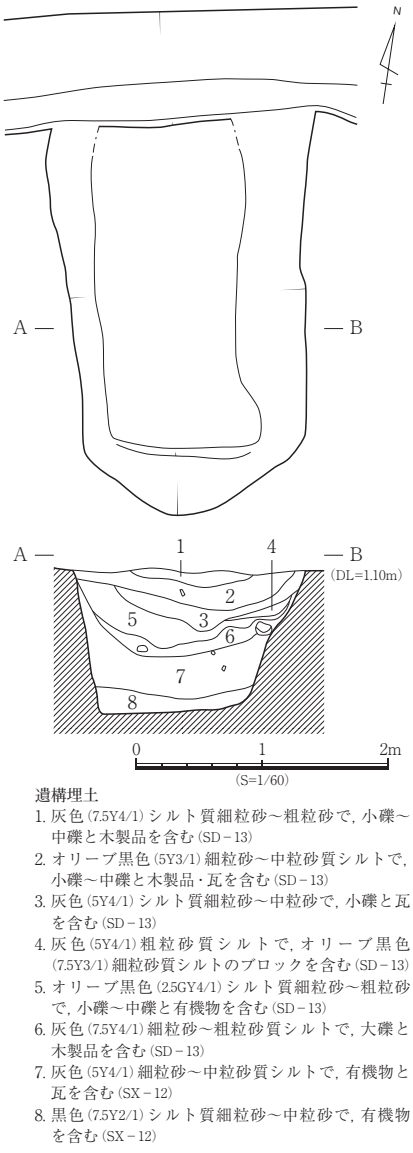
の痕跡が残り，無釉である。内面には染付による斜格子文がみられる。651は陶器匣鉢で，回転ナデ調整を施す。内面は無釉で，外面には錆釉を施し，外底には粘土塊が付着した痕跡と施釉前の板状圧痕が残る。

⑥ 井戸跡

SE－1（遺構：図136　遺物：図137－652～654）

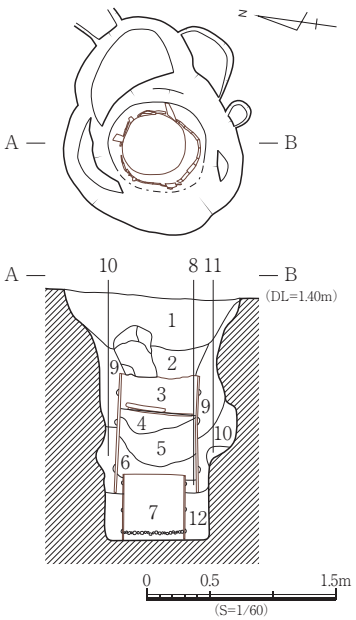
2区北西部で検出した井戸跡である。素掘りで，掘方の平面形態は不整楕円形を呈し，長径1.62m，短径1.33m，深さ2.00mを測り，底には3段に桶側が積まれていた。一番上の桶側は残存状態が悪く，2段目の桶側の内側に17枚の側板が残存していた。側板は残存長56cm，幅14cm，厚さ1.8cmを測る。残りの側板は埋土1及び2内で散乱した状態で出土した。2段目の桶側は変形しており，長径58cm，短径54cm，高さ93cmを測る。タガは3箇所にみられ，側板は34枚で，全長93cm，幅7.5cm，厚さ1.6cmを測る。一番下の桶側は最も小さく，径52cm，高さ49cmを測る。タガは3箇所にみられ，側板は25枚で，全長49cm，幅7cm，厚さ1.5cmを測る。一番下のタガの側面には竹の楔が打たれ，下部には縦2.5cm，横4.0cmの方形の孔が開けられていた。この桶側の下部には径5～8cmの扁平な円礫を敷き詰めていた。掘方の最下層である埋土12は礫層で，著しい湧水がみられた。

出土遺物は埋土1・2より陶器片1点，土師質土器2点（皿1，細片1），埋土3からは土師質土器片3点，木製品箸1点（652），埋土4からは陶器絵唐津皿1点と石製品砥石1点，埋土5からは土師質土器皿1点，埋土6からは石製品砥石1点（653）と木製品柄杓1点，埋土7の円礫の下からは青花碗1点（654）と木製品桶蓋1点が出土した。652は木製品箸で，断面は楕円形を呈し，両端を細く加工する。653は石製品砥石で，表と裏



遺構埋土
1. 灰色（7.5Y4/1）シルト質細粒砂～粗粒砂で，小礫～中礫と木製品を含む（SD－13）
2. オリーブ黒色（5Y3/1）細粒砂～中粒砂質シルトで，小礫～中礫と木製品・瓦を含む（SD－13）
3. 灰色（5Y4/1）シルト質細粒砂～中粒砂で，小礫と瓦を含む（SD－13）
4. 灰色（5Y4/1）粗粒砂質シルトで，オリーブ黒色（7.5Y3/1）細粒砂質シルトのブロックを含む（SD－13）
5. オリーブ黒色（2.5GY4/1）シルト質細粒砂～粗粒砂で，小礫～中礫と有機物を含む（SD－13）
6. 灰色（7.5Y4/1）細粒砂～粗粒砂質シルトで，大礫と木製品を含む（SD－13）
7. 灰色（5Y4/1）細粒砂～中粒砂質シルトで，有機物と瓦を含む（SX－12）
8. 黒色（7.5Y2/1）シルト質細粒砂～中粒砂で，有機物を含む（SX－12）

図135　SD－13，SX－12



遺構埋土
1. 褐色（10YR4/6）粗粒砂質シルトで，3～10cm大の礫を多く含む
2. 灰色（7.5Y4/1）シルトで，粗粒砂と5cm大の礫を少し含む
3. オリーブ黒色（5Y3/1）粗粒砂質シルトで，3～5cm大の礫を含む
4. 灰色（5Y4/1）シルト質極粗粒砂で，2cm大の角礫を含む
5. 灰色（7.5Y4/1）シルト質極粗粒砂で，1cm大の礫を多く含む
6. 灰色（5Y4/1）シルト質粗粒砂で，1cm大の礫を多く含み，羊歯植物を含む
7. オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト質粗粒砂で，1cm大の角礫と木片・羊歯植物を含む
8. 灰色（5Y4/1）シルト質極粗粒砂で，5cm大の円礫を非常に多く含む
9. 緑灰色（7.5Y5/1）シルト質粗粒砂で，1cm大の礫を多く含む（掘方）
10. オリーブ黒色（5Y3/1）粗粒砂質シルトで，1～5cm大の礫を多く含む（掘方）
11. オリーブ黒色（10Y3/1）シルト質粗粒砂で，極粗粒砂と1～3cm大の円礫を非常に多く含む（掘方）
12. 緑灰色（10G6/1）礫で，シルトを含み，1～5cm大の角礫を非常に多く含む（掘方）

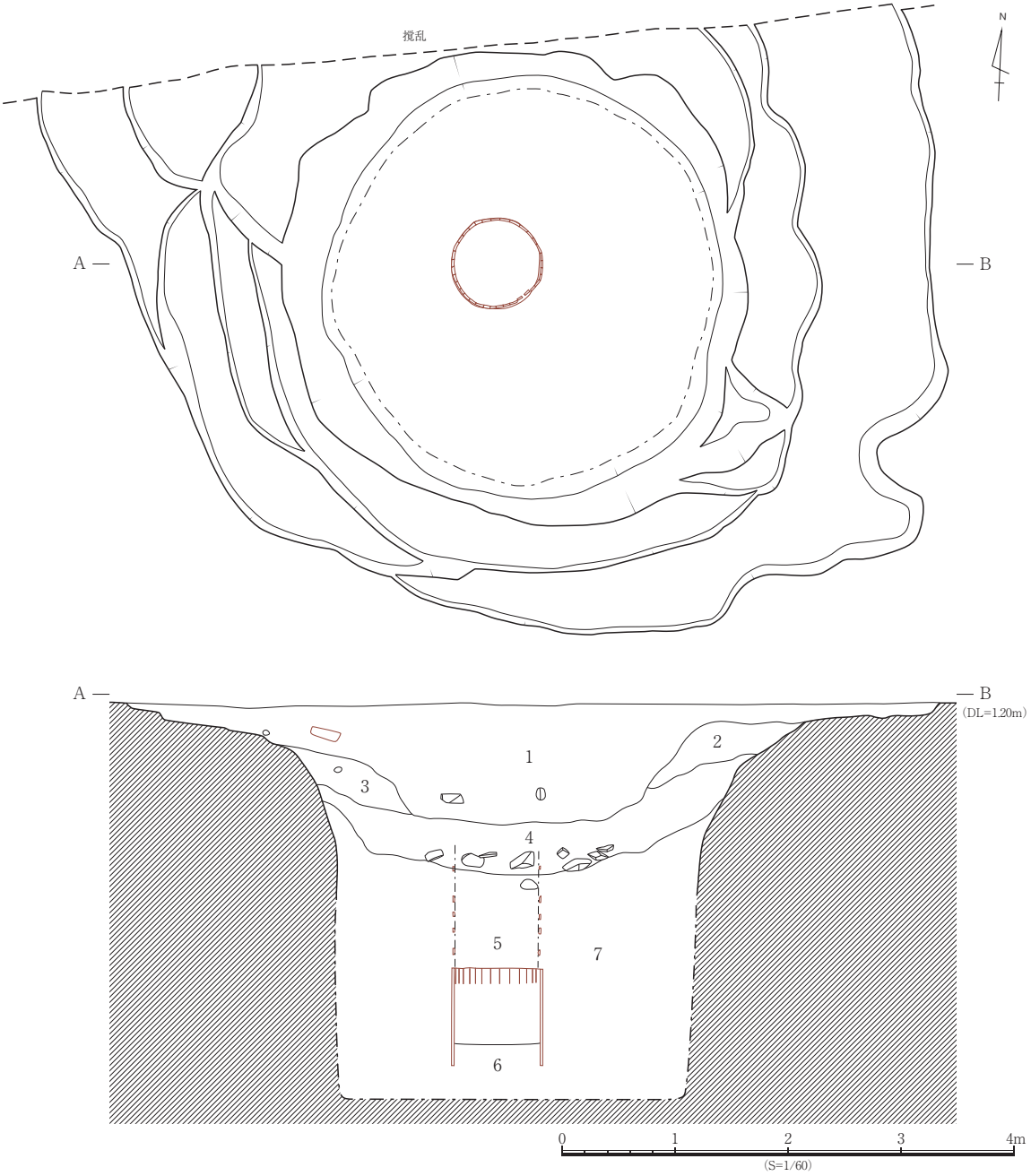
図136　SE－1

図137　SE－1・2出土遺物実測図

の2面に使用痕が残る。粘板岩とみられる。654は青花小碗で，光沢のある透明釉を畳付を除き施し，畳付には砂が付着する。見込には圏線と花文とみられる染付，外面には唐草文と圏線の染付がみられる。

SE－2（遺構：図138　遺物：図137－655～666）

2区南部で検出した井戸跡で，SD－22を切り，北は撹乱を受ける。素掘りで，底には桶側が2段に積まれていた。掘方の平面形態は不整円形を呈し，検出長5.22m，全幅6.98m，深さ3.57mを測る。桶側は中央よりやや北西に位置し，上の桶側は残存状態が悪く，タガが5段残存していたのみであった。下の桶側は径60cm，高さ86cm，側板は全長86cm，幅8cm，厚さ2.5cmを測る。埋土は7層に分かれるが，掘方は崩落の危険があったため重機での掘削を余儀なくされ，下層は細分できた可能性がある。基底面の標高は－2.365mであった。出土遺物には，陶器27点（碗1，皿4，蓋1，猪口1，鉢1，擂鉢1，鍋1，細片17），磁器13点（碗1，皿4，小杯1，段重1，細片6），白磁碗1点，土師質土器396点（椀9，



遺構埋土
1. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質細粒砂～粗粒砂で, 小礫～大礫と木片を多く含み, 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルトとオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂のブロックを含む
2. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂～粗粒砂で, 小礫を多く含み, 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルトとオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質細粒砂～粗粒砂のブロックを含む
3. オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質細粒砂～中粒砂で, 小礫～中礫と木片を多く含み, 暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト質細粒砂～粗粒砂と灰色(7.5Y4/1)シルトのブロックを含む
4. オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質細粒砂～粗粒砂で, 小礫～大礫を多く含み, 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルトとオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂・暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト質細粒砂～粗粒砂のブロックを含む
5. 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粗粒砂質シルトで, 1～5㎝大の礫を多く含む(桶側埋土)
6. 暗灰色(N3/0)礫で, 1～5㎝大の円礫を非常に多く含む(桶側埋土)
7. オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質細粒砂で, 小礫と暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト質細粒砂～粗粒砂のブロックを含む(掘方)

図138　SE－2

杯32，小皿2，細片353)，土師器6点(焼塩壺2，十能1，細片3)，須恵器25点(椀2，杯1，高杯1，甕19，細片2)，瓦器5点(椀3，小皿1，細片1)，石製品砥石2点，木製品26点(漆器椀3，箸14，切匙1，桶4，建築材1，加工木2，加工板材1)，瓦44点(軒丸瓦1，軒平瓦1，鬼瓦1，丸瓦9，平瓦32)，貝1点，種2点がみられ，655～666と鬼瓦(965)の13点を図示した。

655は瀬戸産の陶器小皿で，全面に緑釉を施す。高台内に重ね焼痕が残る。656は瀬戸産の陶器猪口で，内面から体部外面に鉄釉を施す。外面体部下端は回転ケズリ調整で無釉である。657は中国産の白磁碗で，内面には白磁釉を施し，汚れが付着する。外面は削り出しで，無釉である。658は土師質土器椀で，底部には断面方形を呈する低い輪高台を貼付する。著しく摩耗するため調整は不明である。659は土師器十能で，全面にナデ調整を施す。断面円形で，中空の把手が付く。660は土師器焼塩壺で，輪積成形である。調整はナデで，口縁部に横ナデを施す。内面には布目圧痕，口縁部外面には指頭圧痕が残る。661は須恵器椀で，輪高台を貼付する。調整は回転ナデで，高台は横方向のナデ調整，底部の切り離しは静止糸切りである。662は須恵器高杯の脚部で，全面に回転ナデ調整を施す。663は楠葉型の瓦器椀である。ナデ調整と指頭圧痕の後，口縁部に横ナデを1段，内外面にミガキ調整を施す。内面は著しく摩耗するため僅かにミガキ調整が残るのみである。664～666は木製品漆器椀で，内面が赤塗，外面が黒塗である。665・666は腰丸椀である。

⑦ ピット

P－3(遺物：図139－667)

1区東端で検出したピットで，一部は撹乱に切られる。平面形態は楕円形を呈し，検出長57cm，短径50cm，深さ21cmを測る。埋土は灰色粘土質シルトで，小礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には，図示した陶器皿1点(667)がみられた。667は軟質施釉陶器の色絵皿である。内面は緑釉を施した後，朱色で花文の上絵付を行う。外面は回転ケズリ調整の後，緑釉を施す。

P－4

2区北西部で検出したピットで，他のピットを切る。平面形態は楕円形を呈し，長径43cm，短径41cm，深さ55cm，柱痕径20cmを測る。掘方埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。柱痕埋土は褐色粗粒砂質シルトで，炭化物と1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には瓦33点(丸瓦5，平瓦23，桟瓦1，不明4)がみられ，掘方から出土した平瓦(1042)を図示した。

P－5(遺構：図99)

2区北西部で検出したピットで，SD－18を切る。平面形態は隅丸方形を呈し，長辺81cm，短辺61cm，深さ29cmを測る。埋土は4層に分かれ，埋土3の下で径42cmを測る桶が出土した。出土遺物には陶器2点(擂鉢1，細片1)，磁器片1点，土師質土器片1点，瓦17点(軒丸瓦2，丸瓦1，平瓦13，桟瓦1)，鉄滓1点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

P－6

2区北西部で検出したピットで，SK－27・28に切られる。平面形態は円形を呈し，径42cm，深さ27cm，柱痕径18cmを測る。掘方埋土は褐色シルト質粗粒砂で，5cm大の礫を含んでいた。埋土中からは方形の板材が半分に切った丸太材の上に乗った状態で出土した。出土遺物には土師質土器片1点，丸瓦1点(コビキB)がみられたが，図示できる遺物はなかった。

P－7(遺物：図139－668)

2区北西部で検出したピットで，撹乱の下で検出した。平面形態は楕円形を呈し，長径78cm，短

径61cm，深さ70cm，柱痕径17cmを測る。掘方埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。柱痕埋土はにぶい黄褐色シルト質極粗粒砂で，1～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には陶器9点(碗3，細片6)，土師質土器2点(椀1，細片1)，須恵器片1点，瓦29点(丸瓦2(コビキB)，平瓦22，桟瓦1，不明4)がみられ，掘方から出土した陶器碗(668)を図示した。668は尾戸窯の陶器碗で，内面から高台付近まで灰釉を施す。高台は削り出しで無釉である。

P－8(遺物：図139－669)

2区北西部で検出したピットで，SK－34を切り，他の遺構に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ，検出長80cm，検出幅56cm，深さ7cmを測る。埋土は褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には図示した陶器碗1点(669)がみられた。669は唐津系灰釉陶器丸碗で，内面から高台外面まで灰釉を施す。畳付と高台内は無釉である。

P－9

P－8の南で検出したピットで，撹乱の下で検出した。平面形態は楕円形を呈し，検出長74cm，検出幅62cm，深さ74cm，柱痕径17cmを測る。掘方埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，炭化物と1～3cm大の礫を含んでいた。柱痕埋土はにぶい黄褐色シルト質極粗粒砂で，1～3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点，鉄製品釘1点，瓦15点(軒丸瓦2，丸瓦3(コビキB)，平瓦9，不明1)がみられたが，図示できる遺物はなかった。

P－10(遺物：図139－670)

2区北部で検出したピットで，SK－39に切られる。平面形態は楕円形を呈するものとみられ，検出長1.12m，検出幅0.45m，深さ29cmを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂で，炭化物と0.5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には図示した陶器皿1点(670)がみられた。670は肥前武雄系の陶器大皿である。内面は灰釉を施した後，白化粧土と緑釉を流し掛けし，波状の刷毛目文を描く。外面は粗雑な回転ケズリ調整で，一部に白化粧土が流れる。見込には砂目痕が残る。

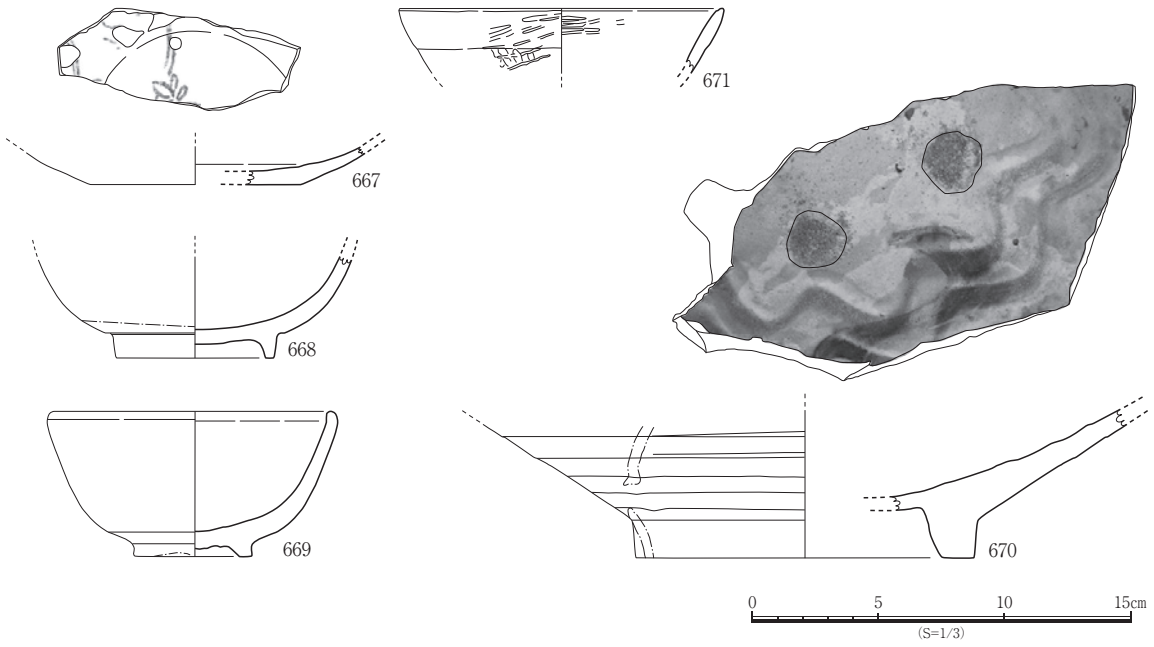


図139　P－3･7･8･10･15出土遺物実測図

P−11

2区北東部で検出したピットで，一部は撹乱を受けていた。平面形態は楕円形を呈し，長径43cm，短径37cm，深さ30cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで，中粒砂と0.5cm大の礫を多く含み，炭化物を含んでいた。基底面には礎板がみられた。出土遺物は皆無であった。

P−12

2区北東部で検出したピットで，P−13を切る。平面形態は楕円形を呈し，長径70cm，短径67cm，深さ34cm，柱痕径33cmを測る。掘方埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含んでいた。柱痕埋土は褐灰色細粒砂質シルトであった。出土遺物には，磁器片1点，平瓦3点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

P−13

2区北東部で検出したピットで，P−12に切られる。平面形態は楕円形を呈し，検出長39cm，短径36cm，深さ23cm，柱痕径24cmを測る。掘方埋土は暗褐色中粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を含んでいた。柱痕埋土は暗灰黄色粘土質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には，磁器片2点がみられたが，図示できる遺物はなかった。

P−14(遺構：図73)

2区東部で検出したピットで，SK−47・48を切る。平面形態は不整楕円形を呈し，検出長1.20m，全幅1.11m，深さ28cmを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質粗粒砂で，5〜10cm大の礫と瓦・漆喰を含んでいた。出土遺物には，磁器碗1点，瓦172点(軒平瓦2，丸瓦30，平瓦140)，貝1点がみられ，五葉文軒平瓦(889)を図示した。

P−15(遺物：図139−671)

2区南部で検出したピットで，土坑の底で確認した。平面形態は楕円形を呈し，長径64cm，短径54cm，深さ22cmを測る。埋土はオリーブ黒色粗粒砂質シルトで，0.5cm大の礫を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点と図示した瓦器椀1点(671)がみられた。671は楠葉型の瓦器椀である。ナデ調整と指頭圧痕の後，口縁部を横ナデ調整し，内外面にミガキ調整を施す。摩耗するため調整は不明瞭である。

⑧ 近代遺構(遺物：図140〜142−672〜719)

近代の遺構より出土した遺物を一括して報告する。江戸時代以降の瓦は第Ⅲ章4でまとめて報告する。

672は陶器色絵丸碗で，内面から高台外面まで灰釉を施し，高台内は削り出しで無釉である。外面には朱色で「飛鶴千　尺雪」の上絵付がみられる。673は美濃産の陶器小碗で，口縁部は緩やかに外反する。全面に光沢のある長石釉を施す。674は唐津系灰釉陶器碗で，全面に灰釉を施し，畳付は釉ハギする。高台は砂が付着し，高台内には兜巾が残る。675・676は肥前産の京焼風陶器碗で，高台内には「清水」の銘印をもつ。675は内面には灰釉を施し，外面は無釉である。676は内面から高台付近まで灰釉を施す。高台は無釉である。677は肥前産の陶器小碗で，内外面に白化粧土による打刷毛目文がみられる。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。678〜683は肥前産の唐津系灰釉陶器小皿である。678は高台まで灰釉を施す。見込には胎土目痕が残る。679は内面には灰釉を施し，外面は一部に灰釉が流れる。見込には胎土目痕が残る。680・681は肥前産の絵唐津である。680は内面から体部外面まで灰釉を施し，体部下半から高台内は削り出しで無釉である。見込には

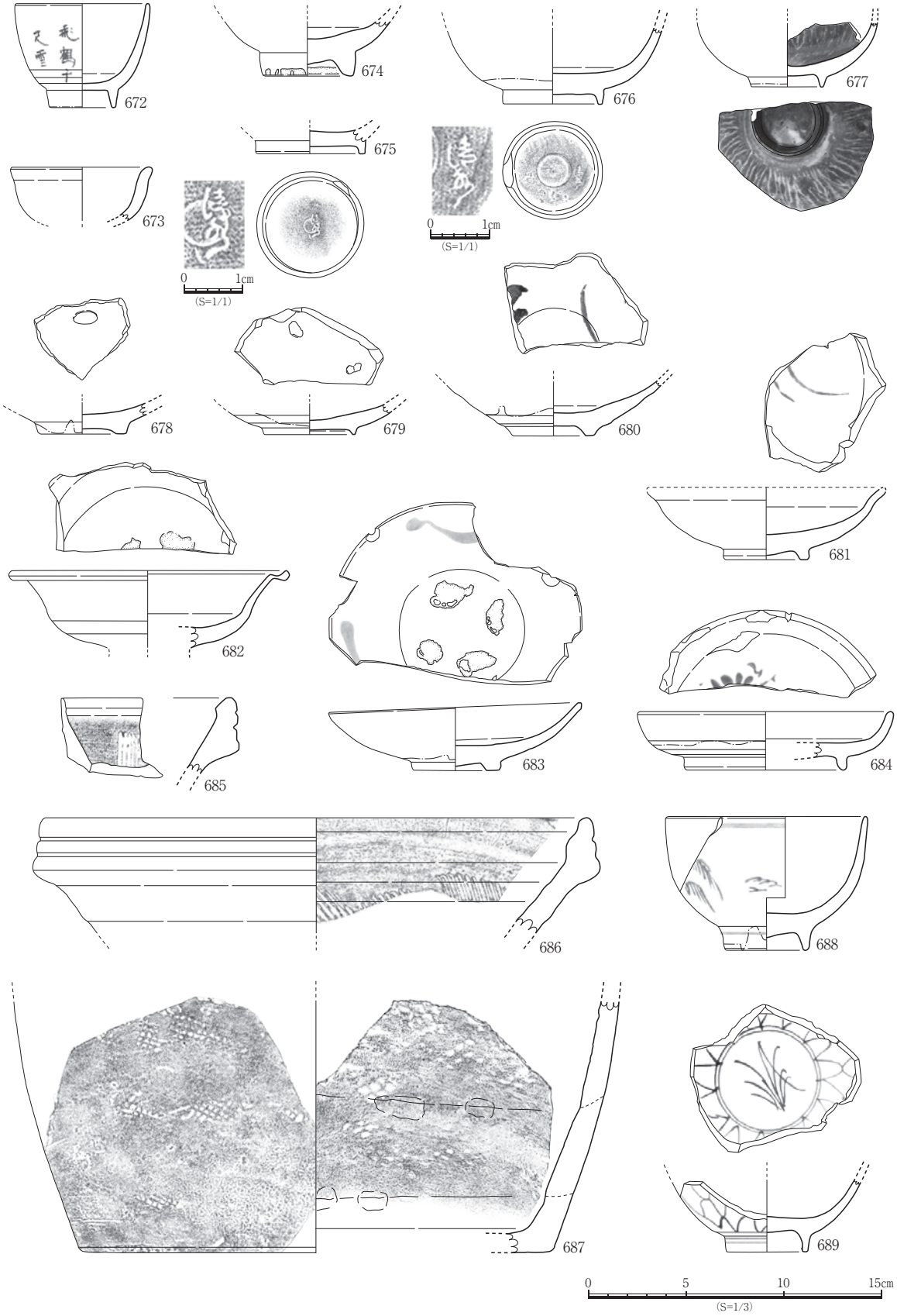


図140　近代遺構出土遺物実測図1

鉄錆による文様がみられる。681は内面から高台外面まで灰釉を施し，畳付と高台内は無釉である。見込には鉄錆による文様がみられる。682は溝縁小皿で，全面に灰釉を施し，見込には砂目痕が残る。体部外面は回転ケズリ調整の後，施釉する。683は二彩唐津丸皿で，高台付近まで灰釉を施す。内面には緑彩を施し，見込には砂目痕が残る。高台は削り出しで無釉である。684は美濃産の灰釉小皿で，内面から体部外面まで灰釉を施し，外面下半は回転ケズリ調整で無釉である。見込には鉄錆による花文の摺絵がみられる。685・686は備前焼擂鉢である。回転ナデ調整で，内面には擂目，口縁部外面には凹線が2条みられる。685は自然釉が掛かる。686は斜方向の9条単位の擂目が入る。687は肥前産の陶器甕である。内面は格子目の当具痕をナデ消し，錆釉を施す。外面は格子目タタキ後，ナデ調整で灰釉を施す。外底は無調整で無釉である。

688は肥前産の磁器染付丸碗である。内面から高台付近まで透明釉を施し，高台は無釉である。外面には風景文と圏線の染付がみられる。漆継の痕跡が残る。689は肥前産の磁器染付丸碗である。見込には二重圏線内に草文，内面に網目文，外面には網目文と圏線の染付がみられる。畳付は釉ハギし，砂が付着する。690は初期伊万里の磁器染付皿である。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギし，畳付と高台内には砂が付着する。見込には二重圏線内に菊花文の染付がみられる。691は肥前波佐見産の磁器染付小皿である。見込にコンニャク印判による五弁花文，内面に濃地に墨弾による植物文，外面に唐草文と圏線，高台内には圏線の染付と方形枠に銘がみられる。692は肥前波佐見産の青磁皿で，内面から体部外面まで青磁釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギする。高台は削り出しで無釉である。693は肥前波佐見産の磁器染付小皿である。全面に透明釉を施し，見込は蛇ノ目釉ハギし，釉ハギ部分には輪状に砂が付着する。見込にはコンニャク印判による五弁花文，内面には菊唐草文と圏線の染付がみられる。畳付には砂が付着する。694は肥前有田産の磁器染付中皿である。見込には帯線と圏線と文様の一部が残り，内面と外面には圏線の染付がみられる。695は肥前産の磁器染付大皿である。見込には丸文と梅文，外面に唐草文とみられる染付と圏線，高台内には圏線の染付がみられる。全面に透明釉を施し，畳付は釉ハギする。696は肥前産の青磁中皿である。全面に青磁釉を施し，高台内は蛇ノ目釉ハギした後，錆釉を塗る。見込には片彫による花文がみられる。697は肥前産の青磁染付望料碗蓋である。外面は青磁釉，内面と摘内は透明釉を施す。内面は丸に草花文と圏線，摘内は二重方形枠に渦「福」銘の染付がみられる。698は肥前産の磁器染付蓋物蓋で，天井に紐状の摘を貼付する。全面に透明釉を施し，かえり部は釉ハギする。外面には帯線と松文とみられる染付を描く。699は中国産の白磁碗で，口縁部は玉縁形を呈し，全面に白磁釉を施す。700は青磁の水注とみられ，外面に把手の剥離痕が残る。型押成形で，外面は型による陽刻文様，内面には布目痕が残る。内面の一部を除き青磁釉を施す。701は中国景徳鎮窯系の青花皿で，畳付を除き透明釉を施す。見込には染付がみられ，高台内には放射状の鉋痕が僅かに残る。

702・703は土師質土器椀で，底部には輪高台を貼付する。702は内面がナデ調整，外面には横方向のナデ調整を施す。703は著しく摩耗するため調整は不明である。704は関西産の土師質土器焙烙である。回転ナデ調整で，外底はナデ調整で板または縄目状の圧痕が残る。705は摂津型の土師器釜で，口縁部外面に断面方形の鍔を貼付する。口縁部は横ナデ調整で，内面は摩耗するため調整は不明である。706は須恵器蓋である。回転ナデ調整を施したとみられるが，摩耗するため調整は不明瞭である。707～710は木製品木簡である。707は一部欠損し，上端は方形を呈するものとみられ，上部に径0.1cmの円孔を穿つ。表面に「杓(ヵ)田村善右衛門」，裏面に「奉(ヵ)□荷(ヵ)八(ヵ)

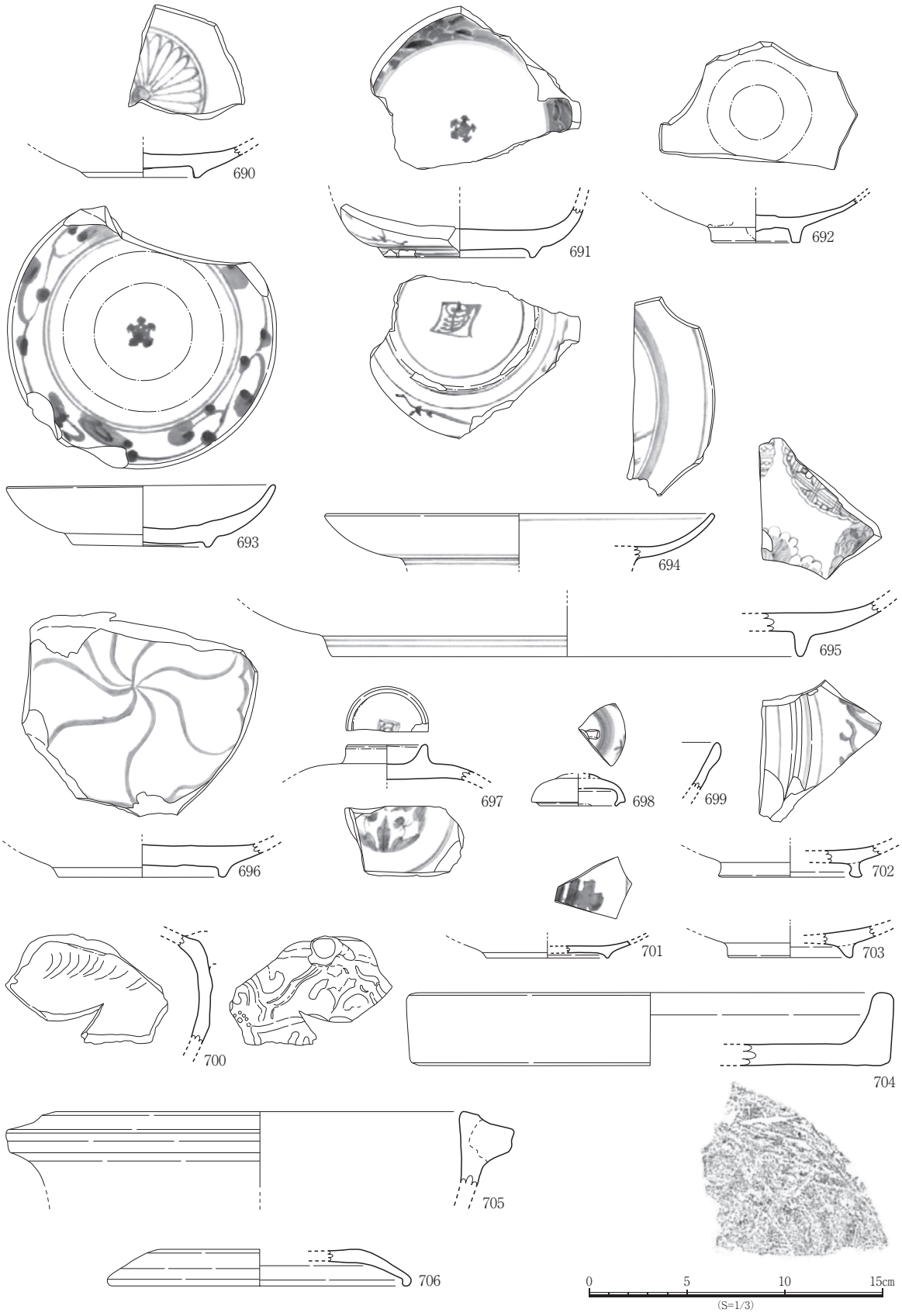


図141　近代遺構出土遺物実測図2

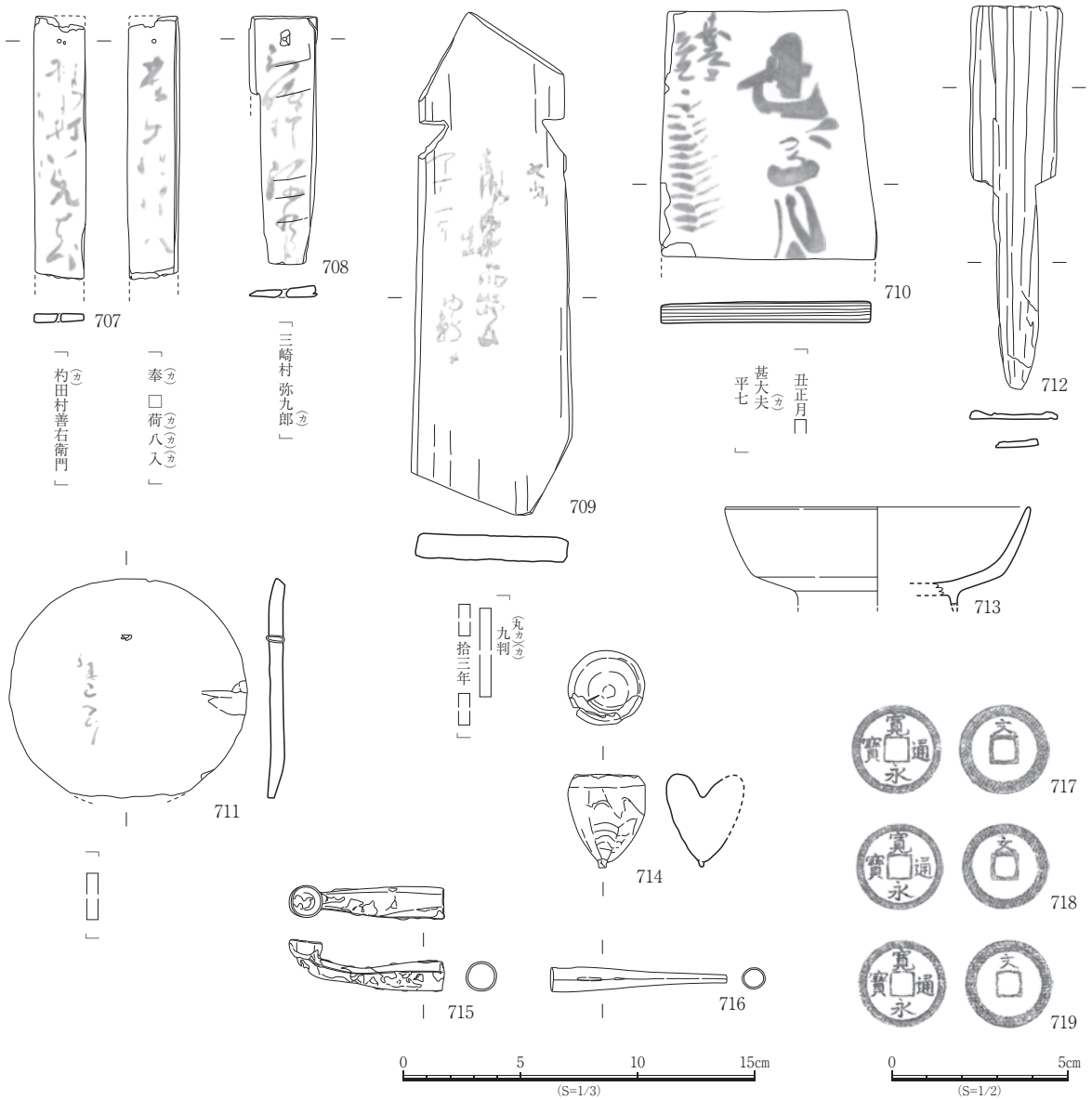


図142　近代遺構出土遺物実測図3

入(カ)」の墨書がみられた。708は一部欠損する。長方形の板材の下部を細く加工し，上部には径0.2cmの円孔を穿つ。表面に「三崎村弥九郎(カ)」の墨書がみられる。709は長方形の板材の両端を尖らせ，上部の左右に切り込みを入れる。片面に「九(丸カ)判(カ)」「拾三年」の墨書がみられる。710は台形を呈し，片面に「丑正月…　甚大夫(カ)　平七」の墨書と線状の墨書がみられた。711は木製品桶蓋木簡で，一部に皮紐が残る。片面に墨書がみられるが解読は不可であった。712は木製品木札とみられ，板状で，上部は方形を呈し，下端は細く尖る。墨書は確認できなかった。713は木製品漆器平椀である。外面は黒塗，内面は赤塗で，無文である。714は木製品独楽で，円錐形を呈する。上面は中央部が凹み，下端には径0.3cmの金属製の棒を差し込む。715は銅製の煙管雁首で，ほぼ完存する。側面に接合痕がみられる。716は金属製品で煙管吸口である。側面に接合痕がみられ，一部には金鍍金が残る。717～719は銭貨で寛永通寶である。いずれも文銭で，鋳銭年代は1668～1683年である。

4. 近世の瓦類

今回の調査で出土した近世の瓦は総点数49,930点，総重量14,125kgに及ぶ。出土した瓦の大半は明治期の公園化に伴うと考えられる瓦の廃棄土坑から出土しており，幕末の高知城跡内の建物に使用されていた瓦が一括で廃棄されたとみられる。明治6(1873)年の高知城公園化が決まった際に作成された『高知城の圖』は城内取り壊し直前の残存施設と，かつて存在した諸施設を復元して記している。それによると北曲輪では塀や石垣・門を残し，その他の建物はすでに取り壊されている。また，『高知公園史』[(1)]によると明治7年には荒地開墾箇所として北曲輪周辺が記されている。

今回の調査で出土した瓦の特徴として，丸瓦と平瓦が出土瓦の96%を占めており，本瓦葺の建物に使用した瓦を廃棄したと考えられる。また，桟瓦は出土瓦の0.1%と少なく，近代遺構や客土からの出土が大半を占めており，桟瓦は近現代のものである可能性がある。また，鯱が出土していることから，城内の主要建物に使用されていた瓦であるとみられ，北曲輪の建物だけでなく，丘陵部に所在する建物に使用された瓦である可能性も考慮する必要があろう。ここでは近世の瓦を器形ごとに記し，高知城内で同類の瓦が出土している地点も併せて記載した。出土地点などは観察表に記した。

(1) 軒丸瓦

今回の調査で出土した軒丸瓦は839点，総重量298kgを量り，出土瓦の約2.1%である。文様は三ツ葉柏文と三巴文の2種が出土している。

① 三ツ葉柏文

三ツ葉柏文軒丸瓦はＡ類とＢ類の2種類に分けられる。

ⅰ Ａ類(図143～145－720～775)

Ａ類は焼成がやや甘く，表面と断面の色調は灰白色を呈し，瓦当には2点を除き粗い離れ砂が付着する。径は16.0～17.0cm前後で，瓦当に型のずれが見受けられるものが多い。文様は三ツ葉の先端が膨らみ，葉脈は中心が凸で，左右に伸びる葉脈が凹となり，周縁と文様が接するものが多くみられる。さらに，型から外した後に文様や周縁内側にナデ調整を加え，端部を丸くしているものが多くみられる。Ａタイプで三ツ葉の中心に珠文様の粒があるものをＡ－1類，珠文様の粒がないものをＡ－2類とした。図示したＡ類で丸瓦部凹面の調整が判明しているものは8点あり，すべてコビキＡである。

Ａ－1類は720～743の24点を図示した。瓦当径は15.2～16.6cm，文様区径は11.5～12.5cmを測る。瓦当にはすべて離れ砂が付着し，720・721・735・738の丸瓦部凹面にはコビキＡがみられる。720は文様が小振りで珠文様の粒の径は0.5cmと小さく，鬼瓦である957の袖部の文様と同笵である。瓦当には型のずれがみられる。721には離れ砂が顕著に付着する。723は丸瓦部凹面にナデ調整を施し，径0.9cmの円孔がみられる。コビキ痕は残存していない。730と733・738は瓦当と丸瓦部の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡が残る。742は周縁と文様が接する。743は珠文様の粒が大きく，径2.0cmを測る。

Ａ－2類は744～754の11点を図示した。瓦当径は15.7～16.5cm，文様区径は11.7～12.2cmを測る。751を除き瓦当にはすべて離れ砂が付着する。また，型を外した後に，文様または周縁にナデ調整を加えている。746･749の丸瓦部凹面はコビキＡである。748は瓦当縦断面に接合痕がみられ，

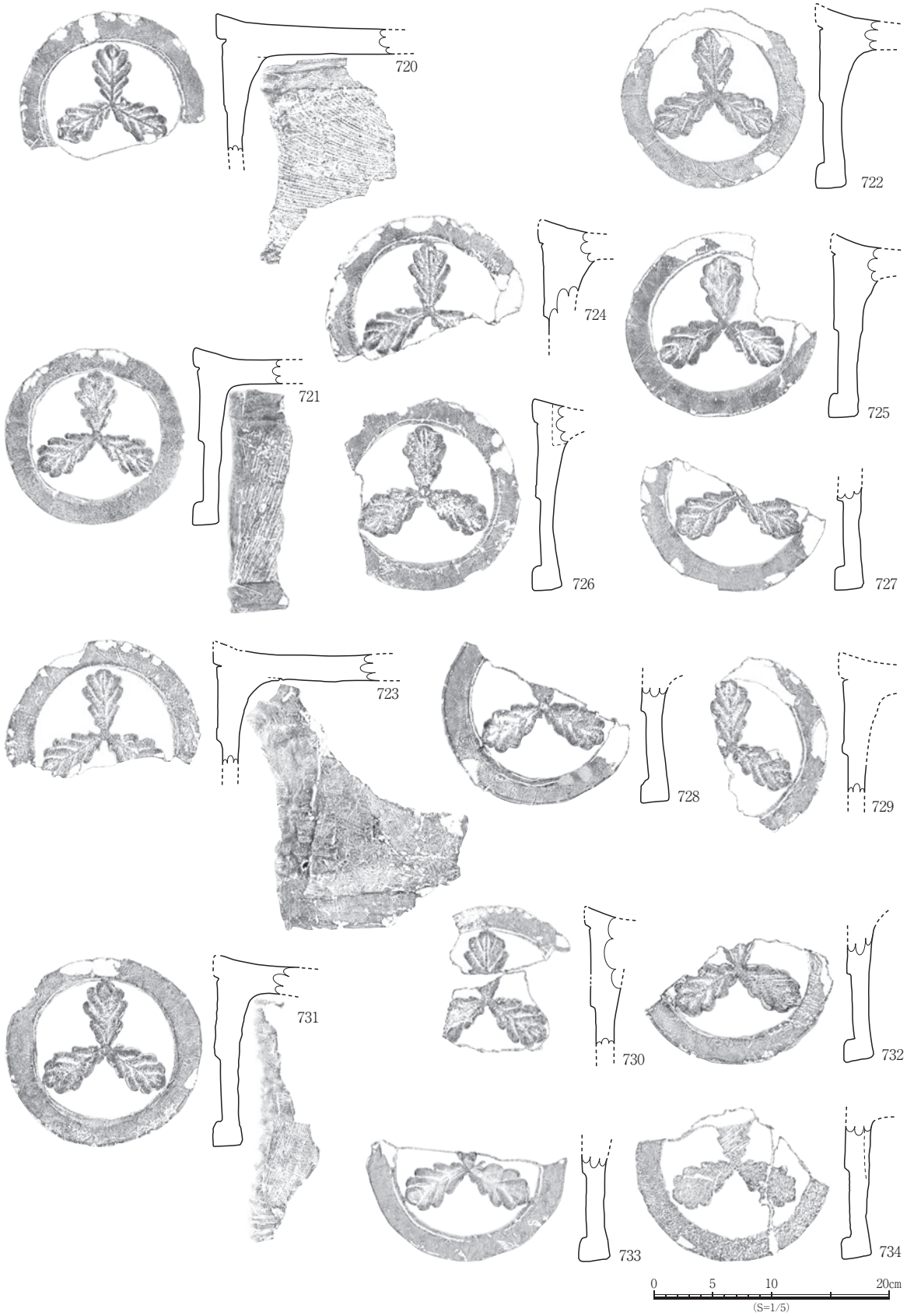


図143　軒丸瓦実測図1(三ツ葉柏文A－1類)

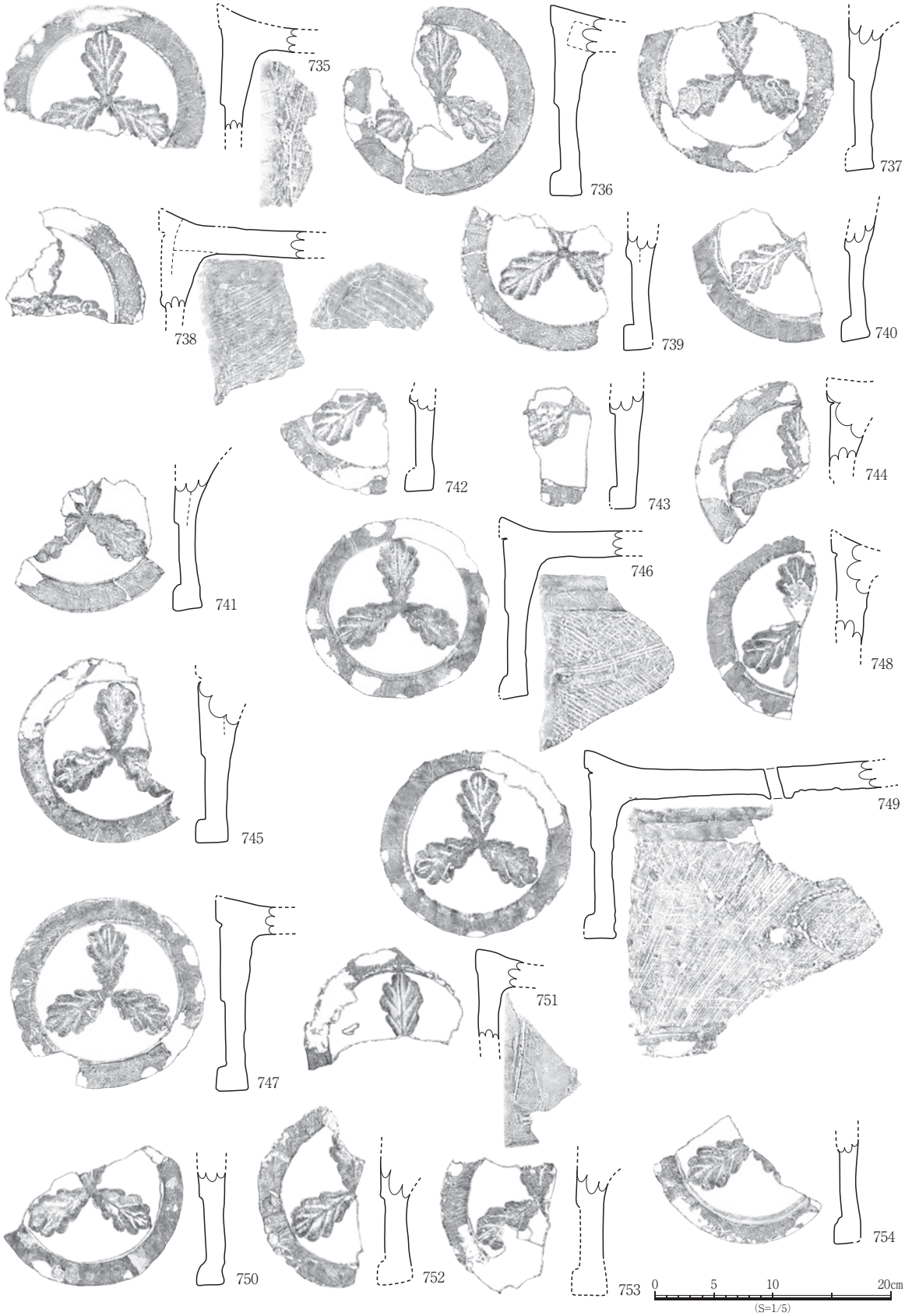


図144　軒丸瓦実測図2(三ツ葉柏文A－1・A－2類)

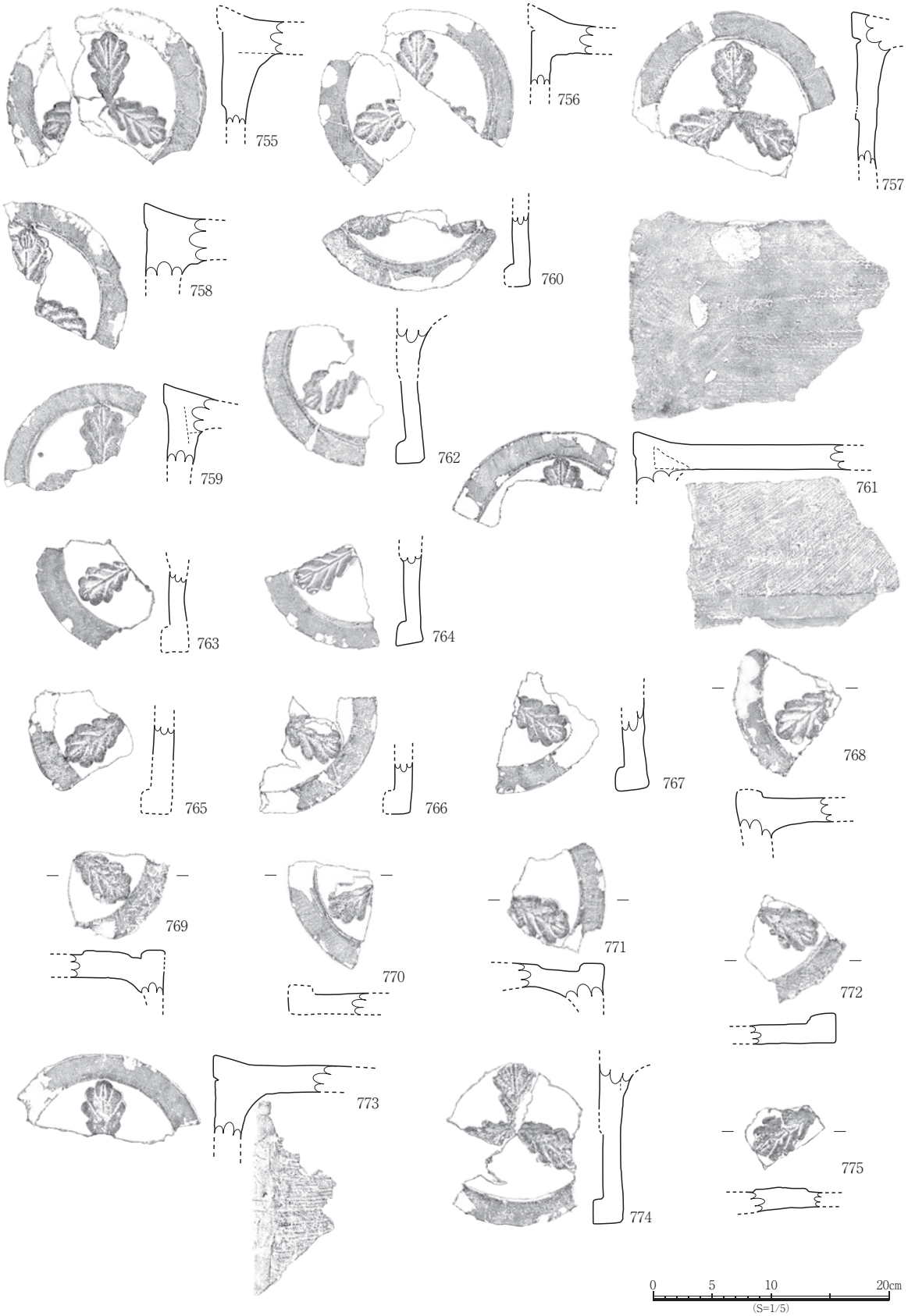


図145　軒丸瓦実測図3(三ツ葉柏文A－2類ほか)

接合箇所にはカキヤブリの痕跡が残る。752・753には瓦当と丸瓦部の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡が残る。

755～775は文様中心の珠文様の粒の有無が不明なものである。756・761の丸瓦部凹面はコビキＡである。758は丸瓦部が非常に厚い。759と761・764は周縁と文様が接する。757・761・762・765・766・770には丸瓦部との接合面に円弧状にカキヤブリの痕跡が残る。773・774は瓦当径が大きいもので，瓦当径は773が17.0cm，774が17.2cmを測る。

Ａ類は本丸[2]や三ノ丸[3]・御台所屋敷跡（以下御台所）[4]・高知城伝下屋敷跡（以下下屋敷）[5]・追手門[6]・北曲輪[7]・丸ノ内緑地[8]で出土しており，西堀地区を除き高知城跡内で発掘調査が行われている箇所ではすべて出土している。

ⅱ Ｂ類（図146－776～792）

Ｂ類は硬質で，表面と断面中心部の色調は暗灰色，その他が灰白色を呈する。文様はＡ類に比べシャープで，三ツ葉の先端が細く尖り，葉脈などの文様が明瞭である。葉脈は中心が凸で，左右に伸びる葉脈は片彫のように他の部分を凹ますことにより凸として表現している。また，Ａ類に比べ文様と周縁が離れるものが多い。文様中心部が残存するものにはすべて三ツ葉の中心に珠文様の粒がみられる。Ｂ類の瓦当径は16.0～18.3cmを測り，瓦当径が約16cmのものをＢ－１類，約17cmのものをＢ－２類，18cm以上のものをＢ－３類とした。いずれのタイプにも離れ砂が付着するものとしないものがみられる。丸瓦部凹面の調整が判明しているものは２点のみであるが，いずれもコビキＢである。

Ｂ－１類は776～781の６点を図示した。瓦当径は16.0～16.7cm，文様区径は12.2～12.8cmを測る。Ｂ－１類で文様中心部が残存するものは776と777のみであるが，いずれにも珠文様の粒が確認できる。777の粒は径1.2cmを測る大きいものである。また，776～778は離れ砂が付着する。777は葉の丸味が強く，778は丸瓦部凹面にはコビキＢがみられる。Ａ類で多く認められた文様にナデ調整を加えるものはみられない。

Ｂ－２類は782～788の７点を図示した。瓦当径は16.9～17.4cm，文様区径は12.4～13.2cmを測る。784・785・788の３点には離れ砂が付着する。782は顎が厚く，葉の丸味が強い。瓦当裏面には「○」の刻印が残る。文様中心部が残存する782と783には珠文様の粒が確認できる。785・786・788はＡ類と同様に文様や周縁内側にナデ調整を施している。

Ｂ－３類は789～792の４点を図示した。瓦当径は18.3cm，文様区径は13.7～14.8cmを測る。789には文様中心に珠文様の粒が確認でき，瓦当には離れ砂が付着する。丸瓦部凹面はコビキＢである。790は文様にナデ調整を加え，断面には漆喰が付着する。791は型のずれがみられ，文様の隙間にナデ調整を加える。

Ｂ類は三ノ丸[9]と追手門[10]・御台所[11]で出土している。凹面の調整よりＡ類からＢ類への移行が考えられ，A類は創建当初の瓦である可能性もある。SK－17・19ではA類とB類が共伴して出土している。

② 連珠三巴文

今回の調査で出土した軒丸瓦の大半は三巴文で，その種類は多岐にわたる。今回の調査で出土した瓦は明治初期に一括廃棄されたものであり，時間的変遷を考えることは難しいため，ここでは文様などの大区分に止めており，同じ分類でも細分できる。

今回の調査で出土した三巴文軒丸瓦は，すべて珠文を有する連珠三巴文である。珠文を持たない

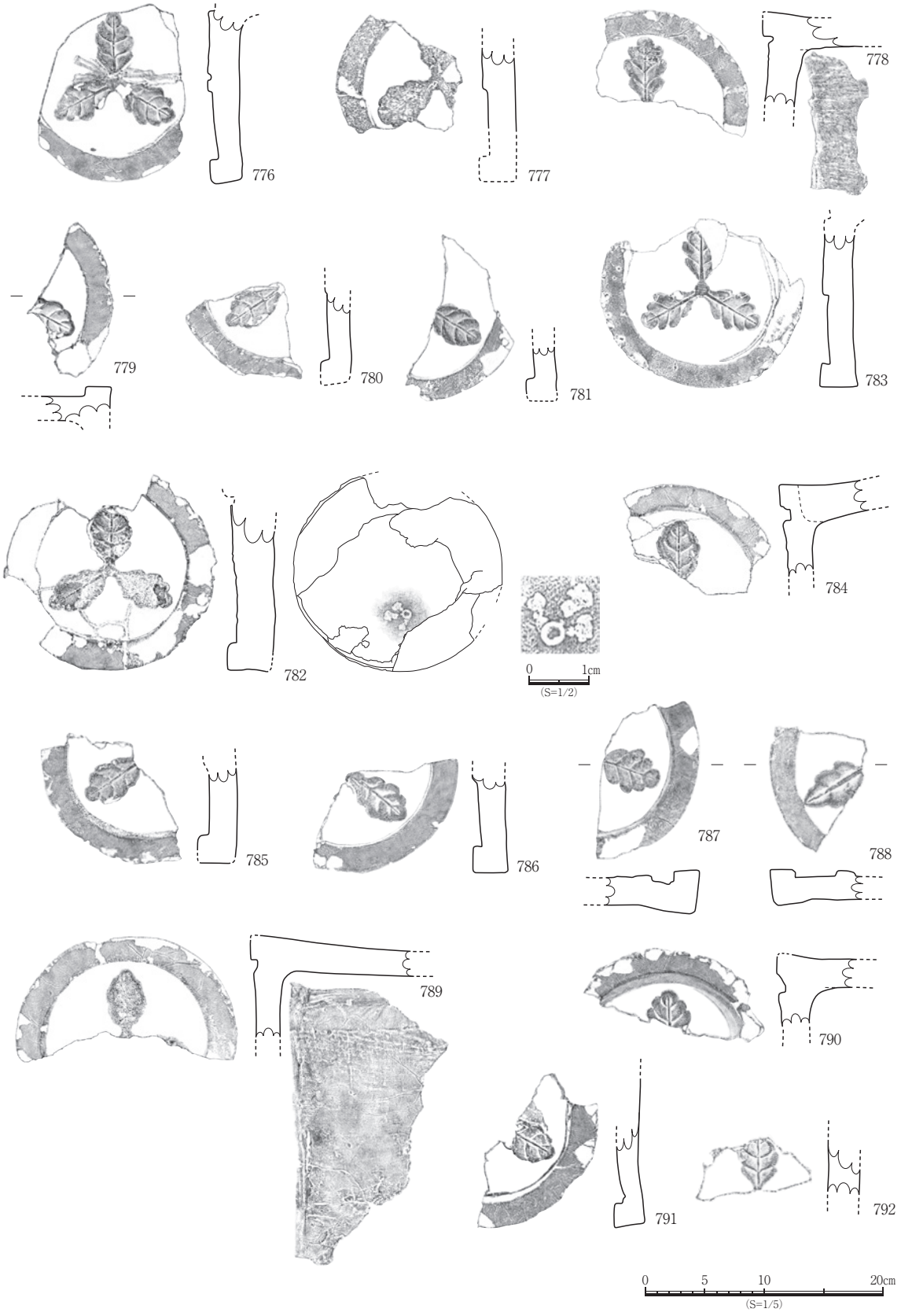


図146　軒丸瓦実測図4(三ツ葉柏文B類)

三巴文軒丸瓦は，丸ノ内緑地[12]で1点の出土が確認されているのみである。

巴の大分類として，巻方向が巴頭から巴尾の方向に左巻をＡ類，右巻をＢ類とした。次に，巴尾同士が繋がり圏線状になるものを1類，巴尾が他の巴尾と離れているものを2類とした。今回の調査で出土した三巴文軒丸瓦はＡ類が大半を占め，Ｂ類は非常に少ない。連珠と巴の間に圏線が巡るものは今回の調査でも，これまでの高知城跡の調査でもみられない。巴の形状については曖昧な区分となるが，巴頭と巴尾の接合部の括れが明瞭であるものと不明瞭なものに分け，巴頭の形状と大

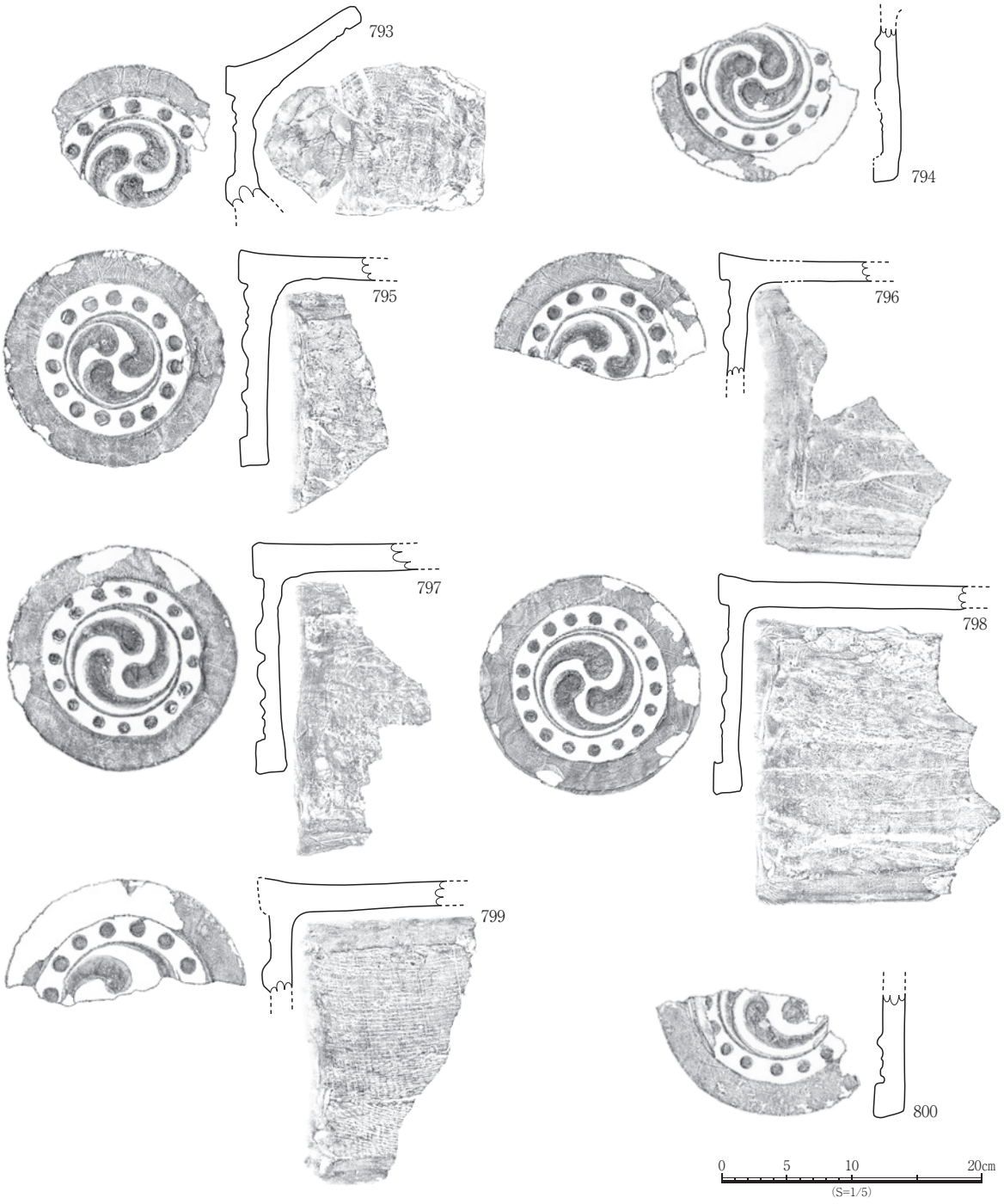


図147　軒丸瓦実測図5(連珠三巴文Ａ－1類)

きさで区分した。

ⅰ Ａ－1類(図147－793～800)

Ａ－1類は左巻で，巴尾同士が繋がり圏線状になるもので，793～800の8点を図示した。瓦当径は15.2～18.2cm，珠文数は15～19個と様々であり，図示した8点の内7点には瓦当に離れ砂が付着する。丸瓦部が残存するものは凹面の調整がすべてコビキＢである。

793は隅巴瓦で，瓦当径15.2cmを測り，Ａ－1類で最も小さい。巴頭が大きく，巴頭幅2.4cmを測る。珠文は15個で，径1.1cmを測る。794は瓦当径16.0cm，巴頭幅2.2cmを測る。瓦当には細かい離れ砂が付着する。795は二つの巴は巴尾が短く，残る一つの巴尾が圏線状に廻るものである。珠文は15個で，径1.3cm，内区径7.7cmを測る小さいもので，巴頭は細く楕円形を呈する。漆喰が付着する。796は珠文が16個，径1.2cmを測る。巴頭幅1.7cmを測り，他のＡ－1類より小さく，巴頭は細く楕円形を呈する。797は瓦当径17.8cm，内区径9.2cmを測り，巴頭が大きく広がり，巴頭と巴尾の括れは不明瞭である。珠文は16個で，径1.0cmを測る。798は瓦当径17.0cmを測る。珠文は17個で，巴頭幅2.3cmを測る大きいものである。799は瓦当径18.2cmを測る大きいもので，珠文は16個，径1.3cmを測る。瓦当の剥離材が粘土粉とみられ，粒子の細かい砂が付着する。800は瓦当径18.0cmを測る大振りなものである。珠文は19個で，径は小さく1.0cmを測る。

ⅱ Ａ－2類(図148～150－801～835)

Ａ－2類は左巻で，巴尾が他の巴尾と離れるもので，801～835の35点を図示した。三巴文軒丸瓦で最も多く出土している。瓦当径は14.6～18.6cm，珠文数は14～18個である。1点を除き瓦当には離れ砂が付着し，丸瓦部凹面の調整はコビキＡとコビキＢがみられる。

801～821は巴頭と巴尾の括れが不明瞭なものである。801・802は丸瓦部凹面にコビキＡがみられる。三巴文軒丸瓦でコビキＡが見られるのはこの2点のみである。801は瓦当径14.8cm，802は瓦当径14.6cmを測り，三巴文軒丸瓦で最も小さい。珠文はいずれも18個で，径0.7cmを測る。巴尾は細く長く伸びる。周縁内側にナデ調整を加えていることや瓦当に粗い離れ砂が付着することなど，三ツ葉柏文軒丸瓦Ａ類と同じ特徴をもつ。803は瓦当径15.6cmを測り，珠文は18個で，径0.7cmを測る。801・802と同様に珠文が小さく，巴尾が細く長く伸びる。804と805は巴頭が小さく，三つの巴頭が離れるものである。瓦当径は804が18.6cm，805が17.7cmを測り，珠文数は804が14個，805が16個である。804は今回の調査で出土した軒丸瓦の中で瓦当径が最も大きく，丸瓦部凹面はコビキＢである。806～811は巴頭が鉤形を呈し，巴尾が細く比較的長いものである。806は瓦当径17.2cmを測り，珠文は16個で，丸瓦部凹面はコビキＢである。807は瓦当径17.5cmを測り，珠文は16個である。808は瓦当径17.4cmを測り，珠文は16個である。809は瓦当径17.7cmを測り，珠文は17個で，瓦当には細かい離れ砂が付着する。810は瓦当径18.1cmを測り，珠文は14個である。丸瓦部凹面はコビキＢで，布目圧痕が残る。811は瓦当径18.0cmを測り，珠文は16個である。812～815は巴頭が鉤形を呈し，巴尾が短いもので，813～815は同笵である。812は瓦当径17.7cm，珠文は17個で，丸瓦部凹面はコビキＢで，布目圧痕が残る。813は瓦当径17.5cm，珠文は17個である。814は瓦当径17.2cm，珠文は17個である。瓦当中央に型合わせの痕跡が残る。815は瓦当径17.4cm，珠文は17個である。瓦当には細かい離れ砂が付着する。816・817は巴頭が鉤形を呈し，巴尾が太いものである。816は瓦当径18.0cm，珠文は14個である。817は瓦当径17.9cm，珠文は16個である。瓦当には型のずれ，丸瓦部との接合部には円弧状のカキヤブリの痕跡が残る。818～821は巴頭が

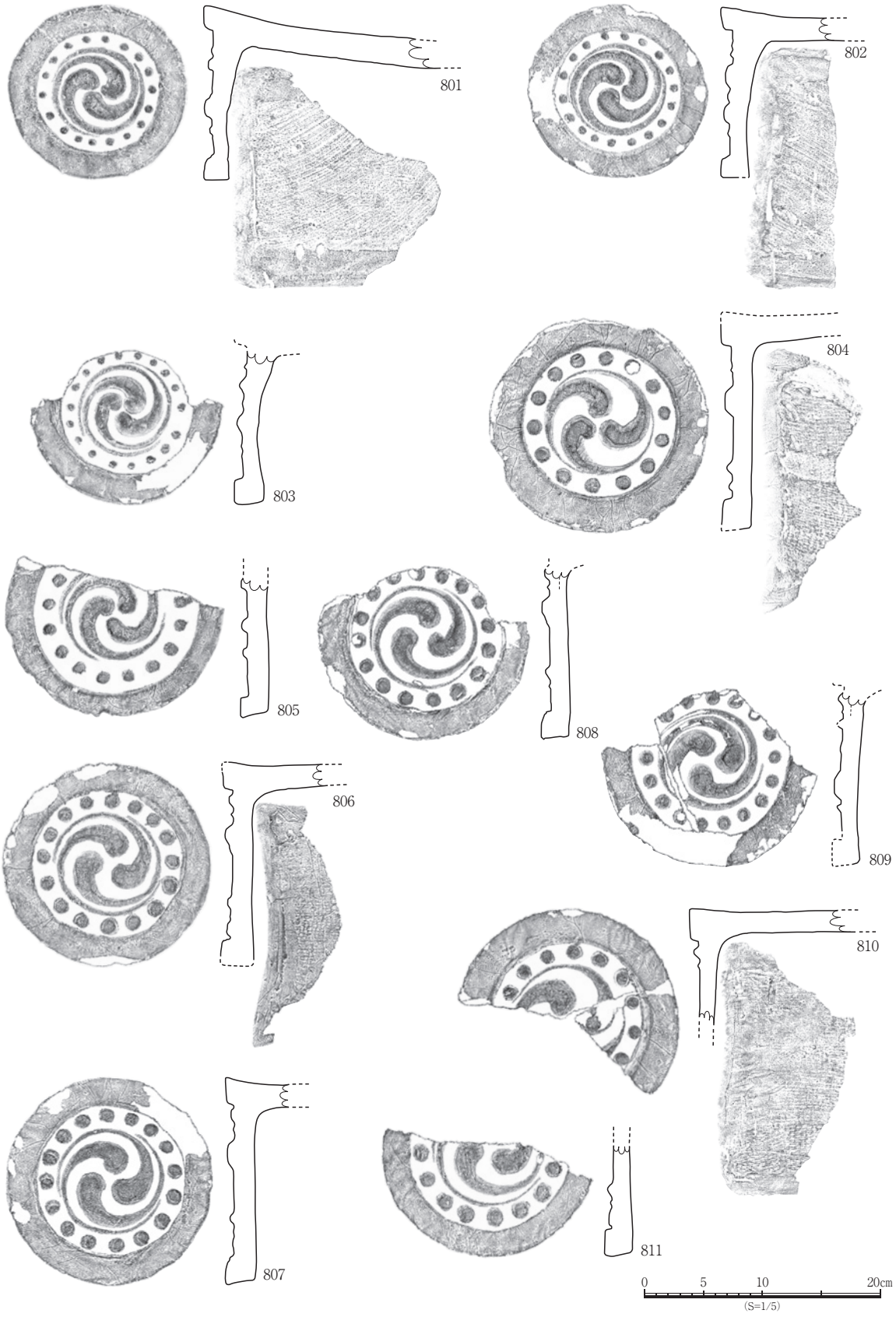


図148　軒丸瓦実測図6(連珠三巴文A－2類)

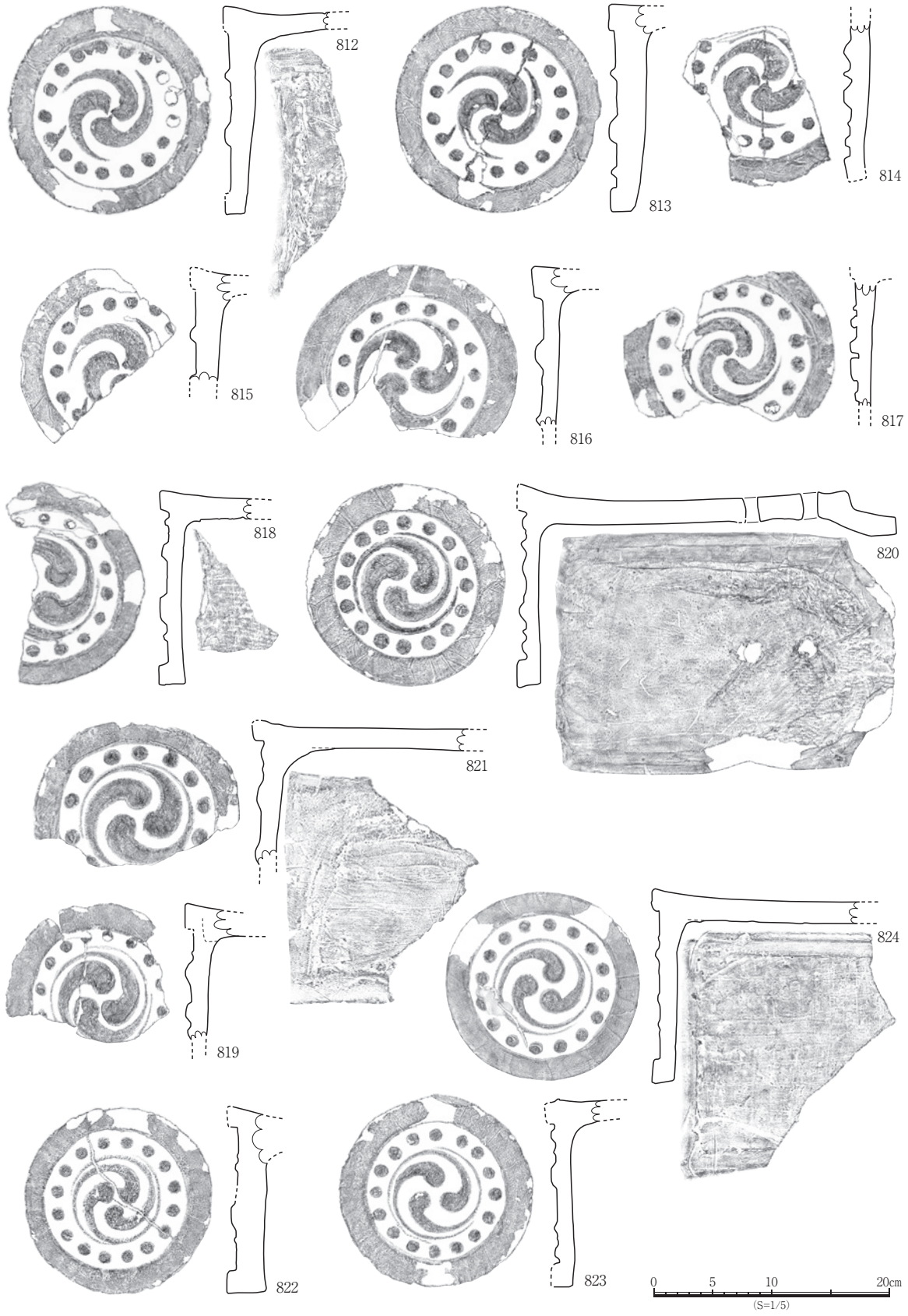


図149　軒丸瓦実測図7(連珠三巴文A－2類)

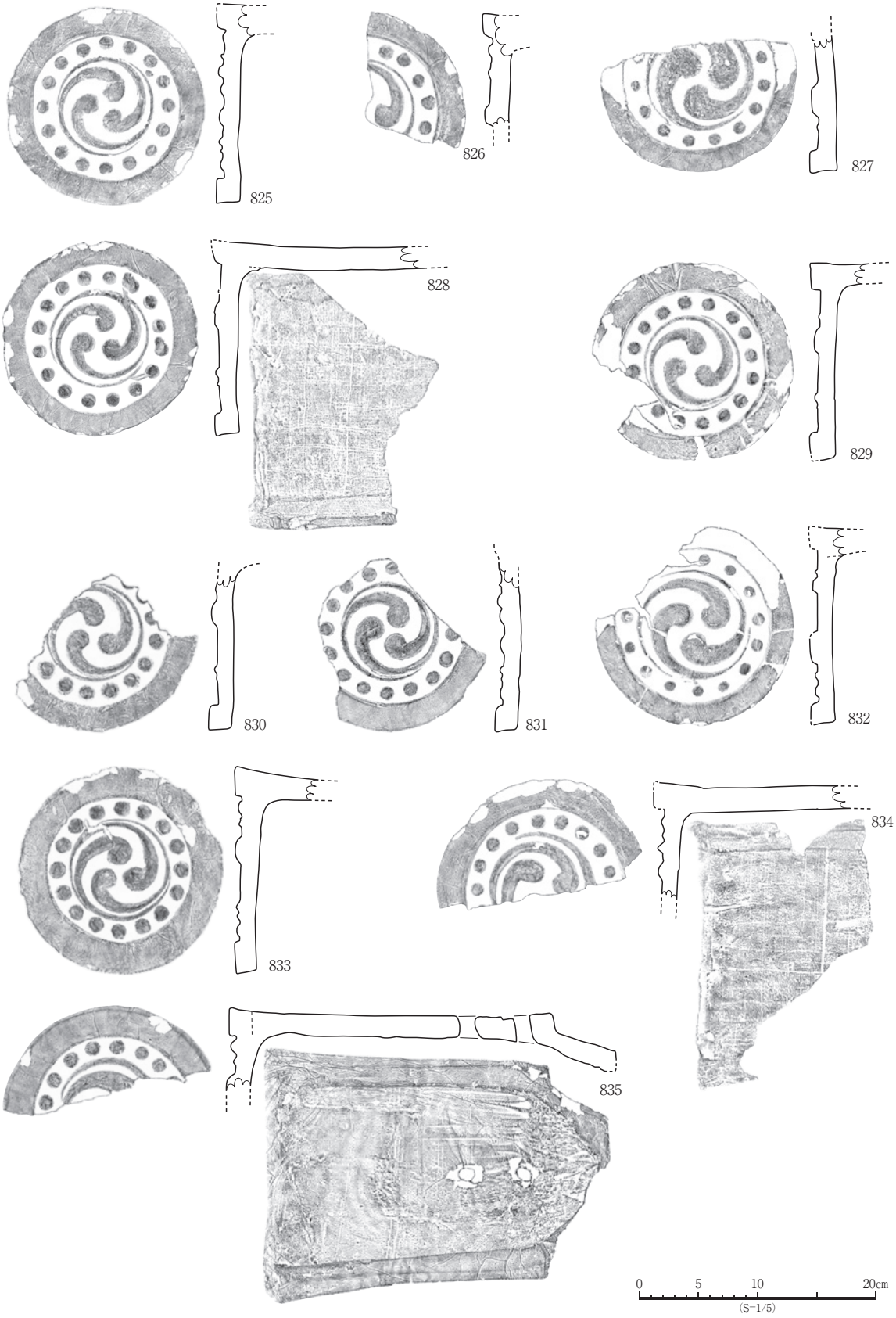


図150　軒丸瓦実測図8(連珠三巴文A－2類)

大きく，巴尾が長いものである。818は瓦当径16.5cm，819は16.0cm，820は17.2cmを測る。いずれも珠文は16個で，瓦当には離れ砂が付着し，丸瓦部凹面はコビキBである。821は瓦当径17.2cmで，珠文は14個である。丸瓦部凹面はコビキBである。

822～826は巴頭と巴尾の括れが明瞭で，巴頭が小さく，巴尾が長く細いものである。822は瓦当径16.0cm，珠文は16個である。内区径7.7cmを測る小さいもので，瓦当が非常に厚い。823は瓦当径16.2cm，珠文は16個である。824は瓦当径16.7cm，珠文は16個である。丸瓦部凹面はコビキBである。825は瓦当径16.9cm，珠文は16個である。826は瓦当径16.5cm，珠文は18個である。

827～831は巴頭と巴尾の括れが明瞭で，巴頭が小さく，巴尾が長く太いものである。827は瓦

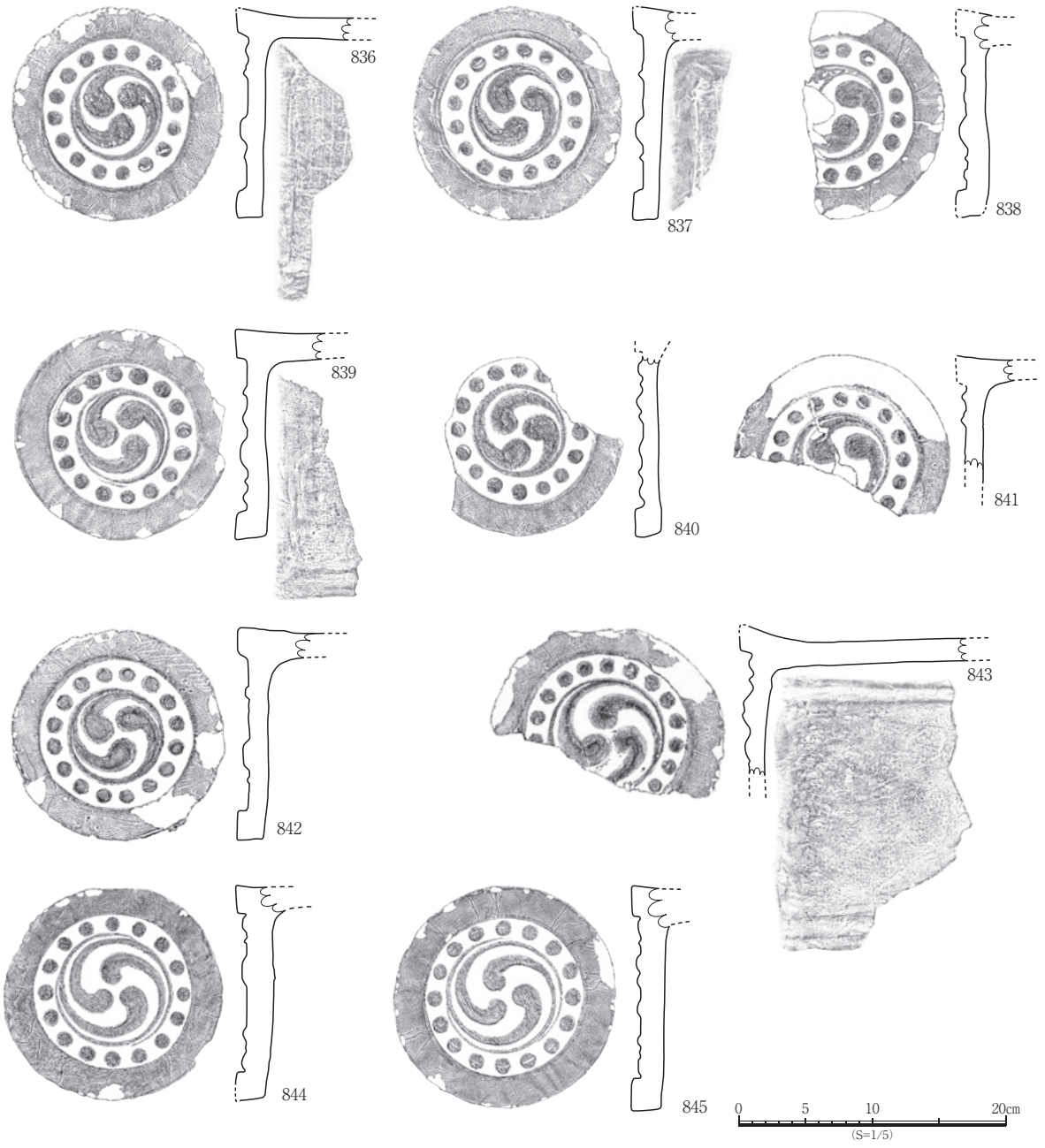


図151　軒丸瓦実測図9(連珠三巴文B類)

当径16.4cm，珠文は15個である。内区が大きく径9.2cmを測る。828は瓦当径16.6cm，珠文は16個である。瓦当には細かい離れ砂が付着し，丸瓦部凹面はコビキＢである。829は瓦当径16.6cm，珠文は16個である。瓦当には型のずれがみられる。830は瓦当径16.8cm，珠文は16個である。巴尾の基部は太いが先端は非常に細い。831は瓦当径17.0cm，珠文は16個である。

832～835は巴頭と巴尾の括れが明瞭で，巴頭が大きく，巴尾が太いものである。832は瓦当径16.9cm，珠文は15個である。珠文が小さく，内区は非常に大きく径9.5cmを測る。833は瓦当径17.5cm，珠文は16個である。周縁幅が広く2.6cmを測る。瓦当には木目圧痕が残る。834は瓦当径17.8cm，珠文は17個である。丸瓦部凹面はコビキＢで，漆喰が付着する。835は瓦当径18.0cm，珠文は17個である。内区が非常に大きく径9.4cmを測る。丸瓦部凹面はコビキＢである。丸瓦部には径1.3cmを測る円孔が2箇所にみられる。

右巻のＢ類は，今回の調査では巴尾が圏線状に廻るＢ－1類と巴尾が離れるＢ－2類を確認した。Ｂ類では巴尾が圏線状に廻るＢ－1類の方が多くみられ，丸瓦部凹面の調整が分かるものはすべてコビキＢである。瓦当径は15.8～17.0cmを測り，Ａ類に比べ小さい。

ⅲ Ｂ－1類（図151－836～843）

Ｂ－1類は右巻で，巴尾同士が繋がり圏線状になるもので，836～843の8点を図示した。836・837は巴頭が小さく，巴尾が細いものである。瓦当径は836が15.8cm，837が16.0cmで，珠文はいずれも16個である。丸瓦部凹面はコビキＢである。838・839は巴頭が大きく，巴尾が細いものである。瓦当径は838が15.6cm，839が15.8cmで，珠文はいずれも16個である。838の瓦当には細かい離れ砂が付着し，839の丸瓦部凹面はコビキＢである。840～843は巴頭が大きく，巴尾が太いものである。瓦当径は840が15.7cm，841が15.8cm，842が16.0cmで，珠文はいずれも16個である。842は瓦当に木目圧痕が残り，細かい離れ砂が付着する。丸瓦部凹面はコビキＢで，丸瓦との接合部には放射状のカキヤブリの痕跡が残る。843は瓦当径17.0cm，内区径8.7cmと大きい。珠文は19個で，径0.9cmと小さく数が多い。丸瓦部凹面はコビキＢである。

ⅳ Ｂ－2類（図151－844・845）

Ｂ－2類は右巻で，巴尾が他の巴尾と離れるもので，844・845の2点を図示した。いずれも巴頭は鉤形で，巴尾は細く僅かに他の巴尾と離れる。844は瓦当径16.4cmを測り，珠文は16個である。845は瓦当径16.9cmを測り，珠文は16個である。周縁幅は2.4cmを測り大きい。

⑵ 鳥衾瓦

今回の調査では11点が出土し，総重量4.5kgを量り，出土瓦の0.03%である。文様が残る5点を図示した。

① 三ツ葉柏文（図152－846～848）

846～848は三ツ葉柏文で，瓦当径は16.0～16.6cmを測る。846は文様が型押ではなく手捻によるもので，上方に伸びる葉が一枚のみ大きい。葉脈は縦方向に伸びるものが2本の凸線で表現され，左右に伸びる葉脈は凹線である。文様中心には珠文様の粒が確認でき，周縁内側はナデ調整を加える。瓦当に離れ砂は付着しない。847は型による文様で，葉の中央が凹み，縦方向の葉脈が凸線，左右に伸びる葉脈は凹線である。848は焼成や文様は三ツ葉柏文軒丸瓦のＢ類と同様で，文様中心に珠文様の粒が確認できる。葉脈は縦方向が凸線，左右に伸びる葉脈は片彫のように他の部分を凹ますことにより凸とし表現している。瓦当には離れ砂が付着する。

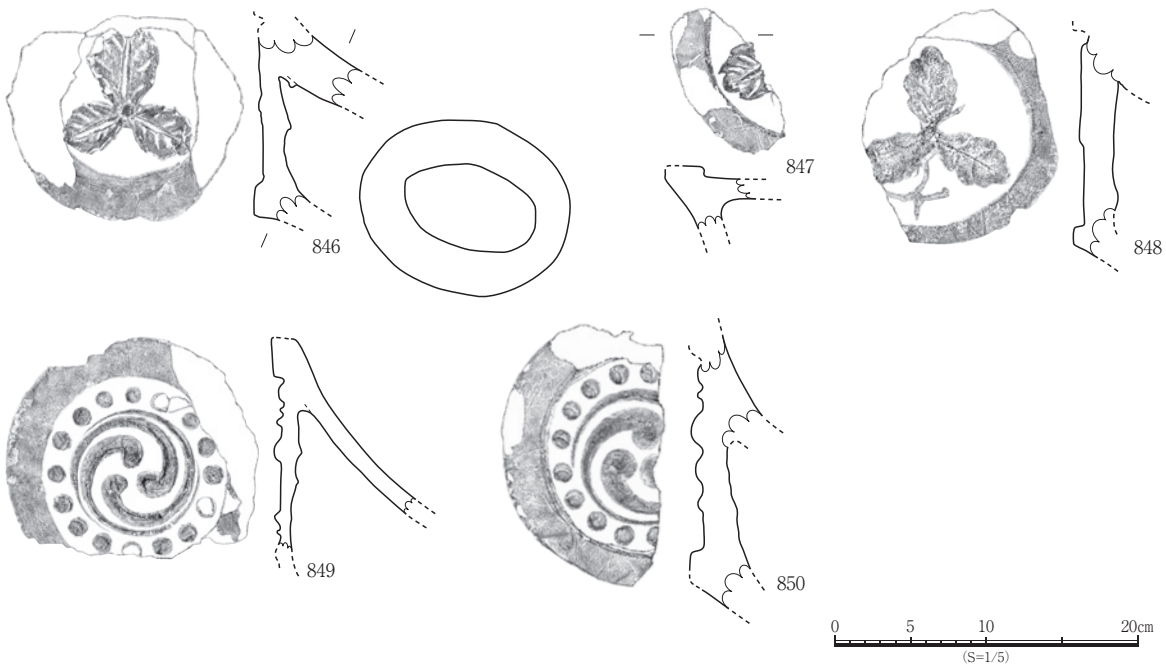


図152　鳥衾瓦実測図(三ツ葉柏文・連珠三巴文)

② **連珠三巴文**(図152－849・850)

849と850の文様はいずれも三巴文軒丸瓦Ａ－2類と同じで，珠文は16個である。849は瓦当が非常に薄く，硬質で，キラ粉が付着する。巴頭は小さい鉤形を呈し，巴頭と巴尾の括れは不明瞭で，巴尾が比較的長いものである。807に似る。850は瓦当径18.3cm，珠文径1.4cmと大きく，巴頭も比較的大きい。

(3) **軒平瓦**

今回の調査で出土した軒平瓦は566点，総重量209kgを量り，出土した瓦の約1.5％である。軒平瓦については下屋敷[13]で詳しい考察がなされており，文様の名称は下屋敷の報告書に準じている部分が多い。

① 三葉文

Ａ類は中心飾の下に珠点をもたないもの，Ｂ類は中心飾の下に珠点を有するものである。Ａ類の瓦の多くは瓦当上縁の面取を行っている。また，Ａ－1類とＢ－2類，Ｃ－1類は高知城跡内で同文が出土している。Ｃ類は橘文への過渡的な文様で，新しい要素がみられるものである。

ｉ Ａ－1類(図153－851～855)

Ａ－1類は中心飾左右に3回反転の唐草文があり，第2唐草の上下と第3唐草の下の葉文に括れを有するもので，851～855の5点を図示した。下屋敷ではⅣ－1－a類と分類されている。ここではＡ－1類とした。同様の文様をもつ瓦は下屋敷と本丸，御台所で出土している。[14]このタイプの瓦は大高坂城に葺かれた瓦で，高知城に再使用されたという指摘がある。[15]

851～855は，瓦当上縁を面取する。851は瓦当上縁中央のみ幅広の面取を行う。852には瓦当に離れ砂が付着する。853は中心飾が一部のみ残存するが，脇の文様構成よりＡ－1類とした。854は第2唐草と第3唐草下の葉文間に短い葉文が付く。瓦当と平瓦部凹面には離れ砂が付着する。

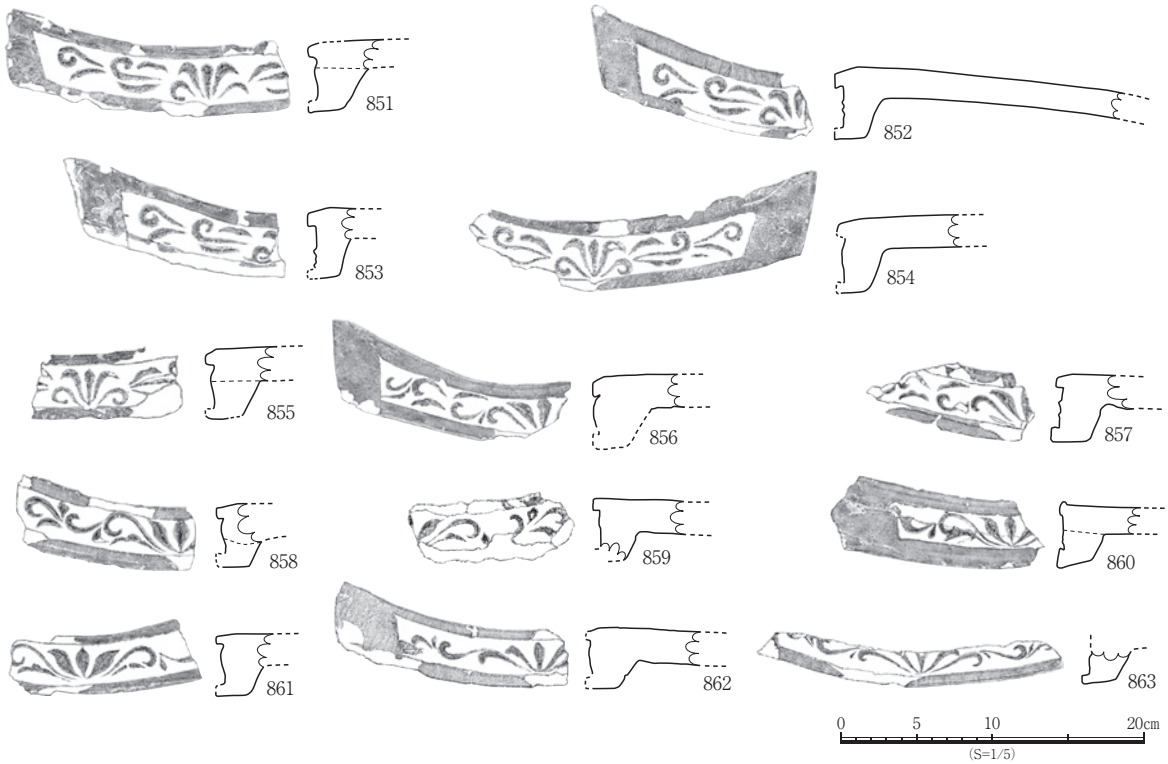


図153　軒平瓦実測図1(三葉文A類)

855は第2唐草の下の葉文が欠損する。

ii　A－2類(図153－856・857)

A－2類は中心飾左右に4回反転の唐草文があり，第2唐草の上と第3唐草の下，第4唐草の下の葉文に括れを有し，第1唐草と第2唐草の間に短い葉文が付くものである。856は中心飾の下の珠点の有無は不明であり，後述するB－2類とも似るがB－2類には4回反転の唐草がみられないため，ここではA類としておく。857は一部のみ残存するが，856と文様構成が同じであるためA－2類とした。いずれも瓦当上面を面取する。

iii　A－3類(図153－858～861)

A－3類は中心飾左右の葉が真っすぐ伸び，第1唐草の下に括れのある葉文，唐草の間に小さな葉文が付くもので，2種ある。858・859は唐草が3回反転するものである。858は瓦当に離れ砂が付着する。860は文様区が小さく，唐草は2回反転する。瓦当上縁を面取する。861は唐草が2回反転する。瓦当上縁を面取する。

iv　A－4類(図153－862・863)

A－4類はいずれも唐草は3回反転とみられる。862は第2唐草と第3唐草の間に葉文が付く。瓦当には離れ砂が付着する。863は唐草の間に葉文がみられる。剥離面にはカキヤブリの痕跡が残る。

B類は中心飾の下に珠点を有し，下屋敷ではⅣ－1－b類と分類されているものであるが，下屋敷と同文の瓦は出土しておらず，ここではB類とした。

v　B－1類(図154－864～867)

B－1類は中心飾の下に珠点を有する他はA－1類と同様の文様構成である。864は左側の第2唐草の上の葉文が欠損する。瓦当と平瓦の接合部に幅2.7㎝を測る櫛状工具を押圧した痕跡が並ぶ。

図154　軒平瓦実測図2(三葉文B類)

865は瓦当上縁中央のみ幅広の面取を行った後，ナデ調整を加える。平瓦部凹面に離れ砂が付着する。866は瓦当上縁を面取した後，ナデ調整を加える。867は第2唐草と第3唐草の間に短い葉文が付き，左側の第3唐草は周縁に接する。瓦当には離れ砂が付着する。

vi B－2類(図154－868～872)

B－2類は中心飾左右の葉が細く，緩やかに外反する。唐草は3回反転し，第2唐草の上と第3唐草の下に括れがある葉文，第1唐草と第2唐草の間に小さな葉文が付く。868～872の5点を図示した。868～870は同文で，869と870は同笵である。御台所でも同様の瓦が出土している。[16]870は平瓦部凸面に離れ砂が付着する。871は隅瓦で，868･869と同様の文様構成だが，第3唐草の向きが異なり，第3唐草の下の葉文の形態がやや異なる。同文の瓦が御台所からも出土している。[17]平瓦部凸面に離れ砂が付着し，接合面にはカキヤブリの痕跡が残る。872は文様区が小さく，中心飾が小さく太い。瓦当上縁を面取し，瓦当には離れ砂が付着する。

vii B－3類(図154－873～877)

B－3類は三葉が短く，中心飾の下に短い萼が付くもので，4種ある。873～877の5点を図示し

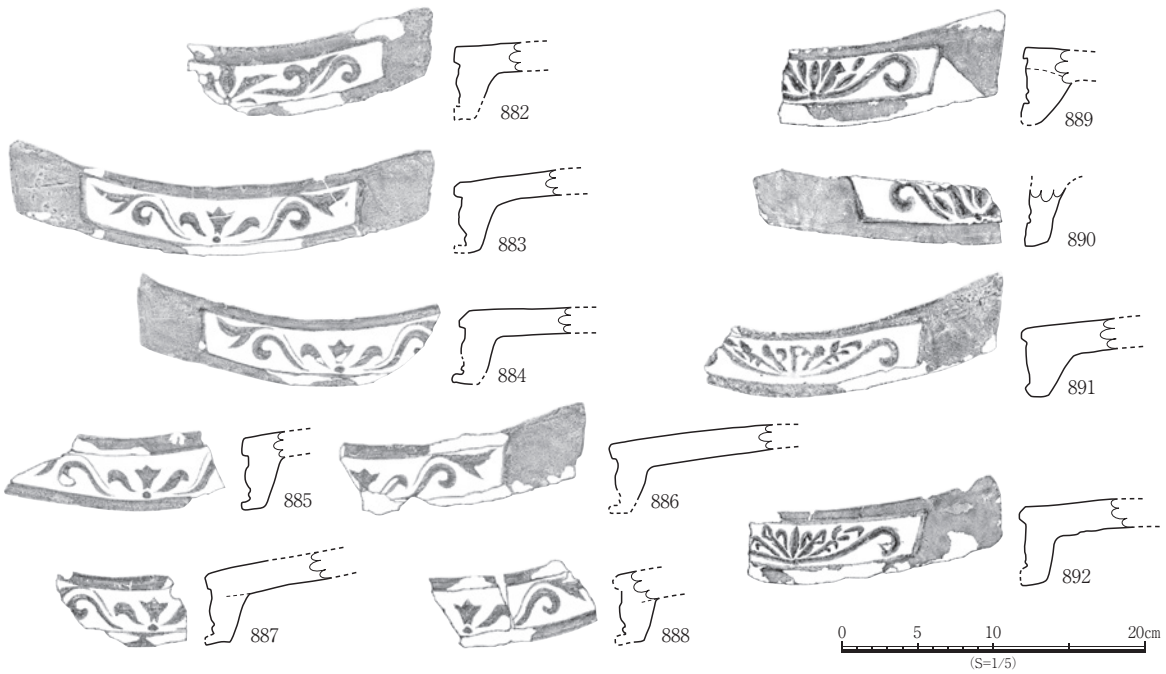


図155　軒平瓦実測図3(三葉文C類・五葉文)

た。873･874は唐草が2回反転し,唐草の間と外側にV字形の葉文が付く。874は瓦当上縁を面取し,瓦当に離れ砂が付着する。875は873の文様に似るが，第1唐草と第2唐草が根元で繋がり，その上にV字形の葉文，唐草の外側に小さな葉文とV字形の葉文が付く。瓦当には離れ砂が付着する。876は文様区高が低く,脇文様は3回反転の唐草のみである。瓦当上縁は中央のみ幅広の面取を行う。877は三葉中央の葉が菱形を呈し，珠点の両側に萼が付く。唐草は太く4回反転する。

viii B－4類(図154－878～881)

B－4類は三葉中央の葉の上部が大きく膨らみ，左右の葉に括れを有する。唐草は2回反転し，第2唐草の外側に括れのある長い葉文が付く。878～881の4点を図示した。878～880は同文で,第1唐草の下に「寿」字がみられる。878は瓦当上縁の面取を行う。881は第2唐草と外側にある括れのある長い葉文が接する。瓦当上縁の面取を行う。欠損するため「寿」字の有無は不明である。

ix C－1類(図155－882)

C－1類は橘文への過渡的な文様で，新しい要素がみられるものである。882は三葉の左右の葉が明確に分かれる。唐草は2回反転し，唐草の間にはV字形の葉文が付く。

x C－2類(図155－883～888)

C－2類は三葉中央の葉が三又に分かれ，唐草は1回転で，外側に大きな葉文が付くもので，883～888の6点を図示した。883は瓦当上縁の面取を行い，瓦当と平瓦部に離れ砂が付着する。884は瓦当上縁を面取する。885は瓦当に離れ砂が付着する。886は瓦当に細かい離れ砂が付着する。887は瓦当に木目圧痕，接合面にカキヤブリの痕跡が残る。瓦当と平瓦部凸面に離れ砂が付着する。888は瓦当上縁の面取を行い，瓦当に離れ砂が付着する。

② 五葉文

五葉文は高知城跡内では同文の瓦が下屋敷や御台所で出土している。高知城跡では2種が確認できるが，いずれも県外では同文はみられず，土佐産と考えられる。

ⅰ A類(図155－889～891)

A類は葉の先端が中実になるもので，889・890は珠点を有する。下屋敷ではⅣ－2－b類と分類されている。[18]891は889と同様の文様構成であるが珠点はみられない。

ⅱ B類(図155－892)

B類は葉の先端が中空になるもので，892は珠点を有し，瓦当上縁を面取する。下屋敷ではⅣ－2－c類と分類されており，下屋敷のほか，御台所でも同文の瓦が出土している。[19]

③ 橘文

橘文は三葉文と判別し難いものがあるが，中心飾中央先端が三又，花弁先端が二又に分離しており，唐草文の左右両端に二又に分かれる子葉が付くものを橘文とした。種類が多いので便宜上，A～D類に分けた。A類は中心飾の外側に細い萼を持たないもの，B類は花弁の外側に細い萼を持つもの，C類は花弁外側に萼を2本持つもの，D類は中心飾と唐草が蔓草状に括れを持つものである。

ⅰ A－1類(図156－893～898)

A－1類は中心飾中央先端が突起状に小さく三又に分かれ，花弁先端が僅かに分かれるもので，893～898の6点を図示した。珠点の両側の萼が唐草状で先端が二又に分かれず，外側に1回反転の唐草と子葉が付く。橘文にみられる中心飾下の萼が唐草状になっており，三葉文に類似する要素をもつ。これらの瓦は元和6(1620)年に葺かれた大坂四天王寺五智光院の当初瓦とされる瓦や，寛永年間(1624～1644)とされる大坂城再構築瓦に文様が類似しており，橘文の初現的なものと考えられる。[20]893は瓦当上縁中央のみ幅広の面取を行い，瓦当には離れ砂，平瓦部凸面に漆喰が付着する。894は瓦当と平瓦部に離れ砂が付着する。895・896は瓦当上縁を面取し，瓦当に離れ砂が付着する。898は花弁先端が明確に分かれている。また，下屋敷で三子葉文として分類されている瓦[21]は花弁先端が分かれておらず，橘文A－1類より若干先行すると考えられる。下屋敷で出土した瓦は，元和9(1623)年に建立された大坂四天王寺元三大師堂の創建瓦と同笵で，大坂より持ち込まれたと考えられている。[22]

ⅱ A－2類(図156－899～903)

A－2類は中心飾が小さく，中央先端が明確に三又に分かれるもので，下屋敷でⅥ－1－b類と分類されるものである。[23]899～903の5点を図示した。A－1類で唐草状であった珠点の両側の萼の先端が巻かず短くなり，唐草の外側の子葉がV字形となる。899･900･902は瓦当上縁を面取する。899･900は瓦当に，901は瓦当と平瓦部凸面に，903は平瓦部凸面に離れ砂が付着する。

ⅲ A－3類(図156－904･905)

A－3類は中心飾が肉厚で大きいもので，904･905は中心飾の下に萼が付き，唐草は2回反転する。いずれも瓦当上縁を面取し，904は瓦当と平瓦部凸面，905は瓦当に離れ砂が付着する。

ⅳ A－4類(図156－906～908)

A－4類は珠点の両側の萼の先端が二又に分かれるもので，下屋敷ではⅥ－2－b類と分類されているほか，御台所でも出土している。[24]906は中心飾中央は大きく膨らみ，珠点両側の萼の先端が僅かに二又に分かれる。907・908は中心飾中央先端は小さく突起状に三又に分かれ，花弁先端は大きく二又に分かれる。唐草は1回転し，外側にV字形の子葉と直線状の葉文が付く。907は瓦当と平瓦部凸面に離れ砂，908は瓦当にキラ粉が付着する。907・908は文様構成が同じであるが，

図156　軒平瓦実測図4(橘文A・B類)

細部が異なる。908は文様が簡素化されており，類似するものが住友銅吹所跡の享保9(1724)年の大火に伴う整地層より出土している。[25]中心飾下部の蕚の先端が二又に分かれるのは寛文期(1661～1673)にはみられない要素であり，元禄から享保期(1688～1736)の瓦の特徴とされている。[26]A－4類はA－1～3類より後出するとみられる。

ⅴ B－1類(図156－909～914)

B－1類は花弁外側に細い蕚を持ち，中心飾中央が小さいものである。A－2類の中心飾の外側に細い蕚を1本付けた文様で，中心飾中央は小さく三又，花弁は二又に分かれ，中心飾の下に太い蕚が付く。脇文様は唐草が1回転し，V字形の子葉が付く。909～914の6点を図示した。瓦当上縁を面取するものはなく，すべて横方向のナデ調整を施している。また，913には瓦当に離れ砂が付着する。914は中心飾中央が明確に三又には分かれていないが，珠点両側の蕚は大きく二又に分かれ，新しい要素を持つ。瓦当には細かい離れ砂が付着する。B－1類は高知城跡内では下屋敷でⅥ－1－a類と分類され，類似例がみられる。[27]

ⅵ B－2類(図156－915～917)

B－2類は中心飾が肉厚で大きいもので，中心飾の外側に細い蕚，下に太い蕚が付き，唐草は1回転し，外側には縦方向の葉文とV字形の子葉が付く。915～917の3点を図示した。917は瓦当上縁を面取し，瓦当には離れ砂が付着する。

ⅶ C－1類（図157－918～924)

C－1類は中心飾中央が細長く先端のみ三又，花弁は先端が小さく二又に分かれ，中心飾の外側に細い蕚が2本と珠点の両側に短い蕚が付く。御台所でも出土している。[28]918～924の7点を図示した。918は花弁先端が明確に二又に分かれていないが，脇の文様から橘文とした。瓦当上縁を面取する。919は中心飾が残存していないが，残存部の文様からこれらの瓦と同類とみられる。瓦当上縁を面取する。921は隅瓦で，瓦当上縁に横方向のナデ調整を施し，瓦当には離れ砂が付着する。922は瓦当と平瓦部凸面に離れ砂が付着する。923は瓦当上縁を面取する。924は隅瓦で，平瓦部凸面に漆喰が付着する。

ⅷ C－2類(図157－925)

C－2類は中心飾中央が短く，花弁は大きく二又に分かれ，珠点両側の蕚の先端が二又に分かれるものである。珠点両側の蕚が二又に分かれるのは前述のように元禄から享保期とされるもので，17世紀後葉～18世紀初頭頃と考えられる。925の瓦当には離れ砂が付着する。

ⅸ D類(図157－926～934)

D類は中心飾と唐草や子葉が括れを有し，蔓草状になるものである。珠点両側に小さな蕚が付き，唐草は2回反転し，V字形の子葉が付く。下屋敷でⅥ－1－c類と分類されるものと脇文様が類似し[29]，御台所では同文が出土している。[30]瓦当上縁を面取するものが多くみられる。926～934の9点を図示した。926は隅軒平瓦で，平瓦部には円孔がみられ，凹凸面に漆喰が付着する。929は瓦当に木目圧痕が残る。930・934は瓦当上縁に中央のみ幅広の面取を行う。930は平瓦部凸面に離れ砂が付着する。933は瓦当に細かい離れ砂が付着する。

④ 丁字文または花文

A類は中心飾が丁字文を三本組み合わせたもの，B類は中心飾が花文，C類は中心飾が小さな花文とみられるものである。

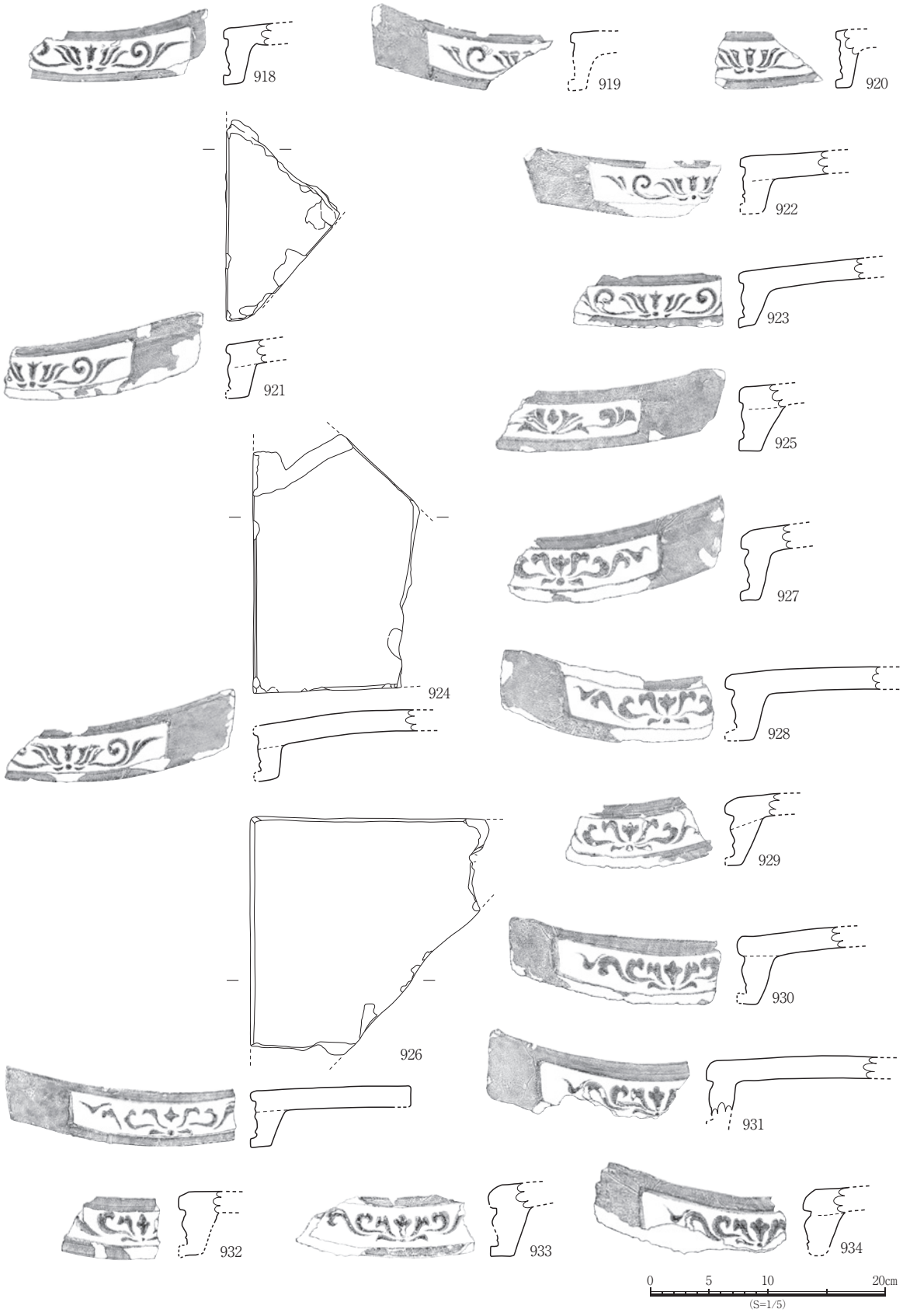


図157　軒平瓦実測図5(橘文C・D類)

ⅰ A－1類(図158－935･936)

A－1類は中心飾が外郭線のみで表現され，花部の中に線分を入れる。下屋敷や北曲輪(高知市教育委員会調査)・三ノ丸で同文の瓦が出土している。[31]北曲輪(高知市教育委員会調査)で出土した同文の瓦はいずれも桟瓦であり，935・936も桟瓦である可能性がある。また，北曲輪(高知市教育委員会調査)で出土した瓦の1点には「中己」の刻印があり，高知県香南市野市町中山田産とされる。935・936は瓦当にキラ粉が付着し，936は瓦当上縁を面取する。

ⅱ A－2類(図158－937～940)

A－2類は中心飾の茎が中実で，唐草が雲文状のものである。937は中心飾が完存し，茎は中実で,花部は線分のみで表現されている。938は雲文状の唐草が2つ連なる。939は第2唐草が小さく，簡素化されている。瓦当上縁に横方向のナデ調整を施す。940は中心飾が残存していないが，雲文状の唐草がみられるのはこのタイプのみであるため丁字文とした。脇文様は雲文状の唐草で，唐草文の上に長い葉文，外側には文字がみられる。高知城跡内では同文の出土は確認できていないが，堺環濠都市遺跡で類似する文様の瓦が出土している。A－2類は花部が馬蹄形3個で表現されるのに対し，堺出土のものは花部が連続し，中心飾の下に珠点がみられる。[32]

ⅲ B－1類(図158－941)

B－1類は雄蕊と花弁が二重になるもので，941を図示した。唐草が二又に分かれ上下に大きく巻く。瓦当右上には「厄」とみられる文字が残る。瓦当上縁を面取し，平瓦部凸面には漆喰が付着する。同文の瓦が下屋敷で2点出土しており,[33]いずれも桟瓦であるため，941も桟瓦である可能性がある。

ⅳ B－2類(図158－942)

B－2類は雄蕊と花弁が二重で，線描となり簡素化されているもので，942は唐草が3回反転する。下屋敷や三ノ丸・御台所で同文が出土している。[34]

ⅴ C類(図158－943)

943は花弁が3枚で，唐草は下向きに2つ並ぶ。瓦当上縁を面取する。

⑤ 蔦文(図158－944)

944は中心飾が蔦文で，唐草は左右に2回反転する。瓦当上縁を僅かに面取する。同文の瓦は北曲輪(高知市教育委員会調査)で出土している。[35]

⑥ 三ツ葉柏文(図158－945)

945は中心飾が三ツ葉柏文である。丸の中に三ツ葉柏文がみられ，葉脈も表現されている。唐草は左右に2回反転し，外側には直線状の葉文，第1唐草と第2唐草の間には小さな葉文がみられる。瓦当上縁に横方向のナデ調整を施す。三ツ葉柏文軒平瓦は初めての出土である。

⑦ 宝珠文(図158－946)

946は中心飾が宝珠文で，第1唐草が下向き，第2唐草が上向きで先端は回転する。顎部は非常に厚く1.9㎝を測り，文様区高は1.8㎝を測り低い。摩耗するため調整は不明である。宝珠文軒平瓦は高知城跡では初めての出土である。

⑧ その他(図158－947～951)

947は中心飾がT字形を呈し，唐草は緩やかに伸び2回反転する。948は中心飾が欠如するものである。唐草は2回反転し，第1唐草の上には小さい葉文が付く。瓦当上縁に横方向のナデ調整を施す。文様区幅が小さく，軒桟瓦の可能性もある。949は中心飾が残存していないもので，唐草は3

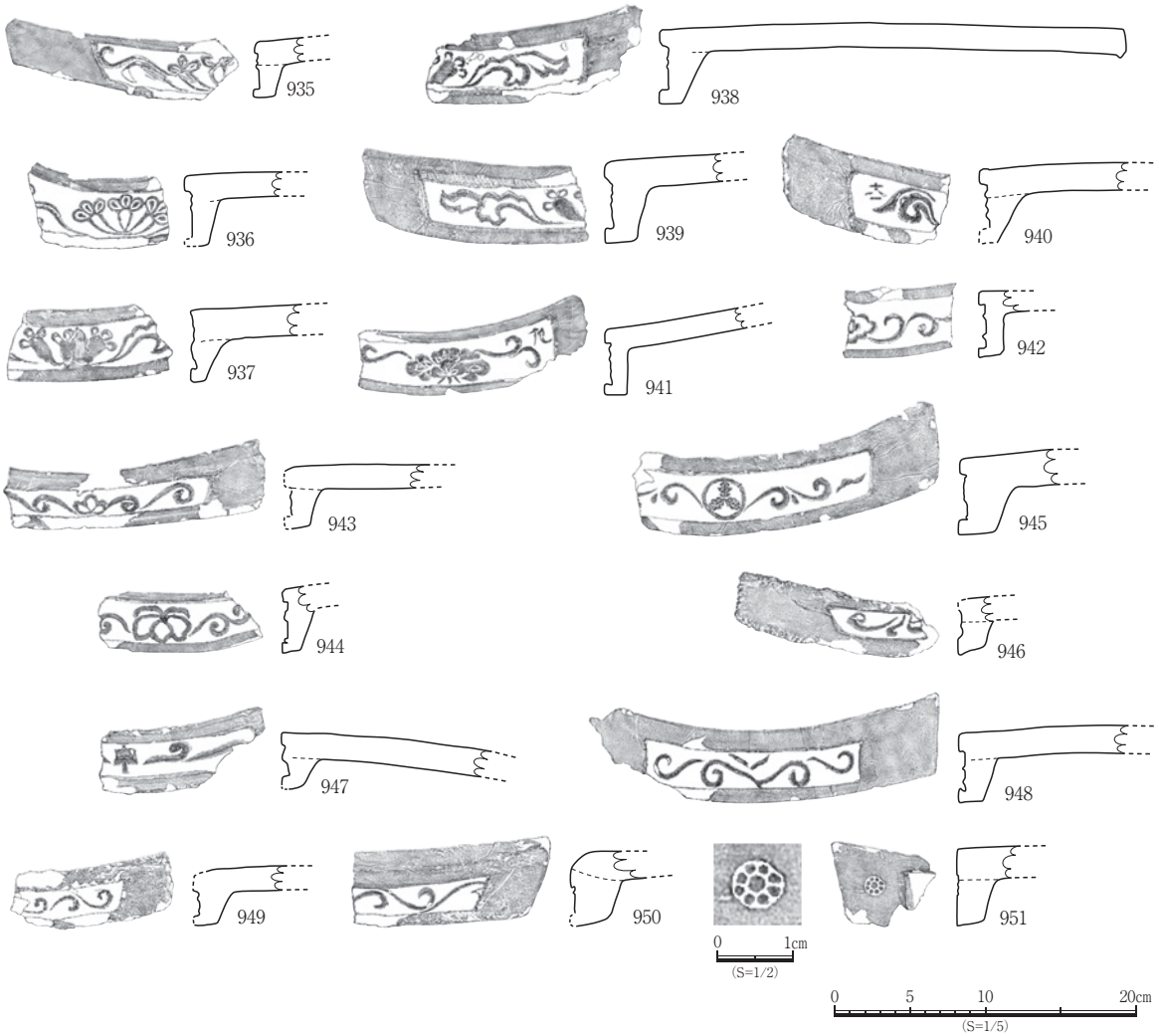


図158　軒平瓦実測図6(丁字文または花文・蔦文・三ツ葉柏文・宝珠文・その他)

回反転する。文様区高が低く，胎土には砂粒を非常に多く含み，焼成はやや不良で摩耗する。950も中心飾が残存していないもので，唐草は2回反転し，外側に直線状の葉文が付く。文様区高が低く1.9cmを測り，瓦当上縁は中央のみ幅広の面取を行う。951は一部が残存するもので，瓦当左側に九曜文の刻印がみられる。九曜文の刻印は，御台所で出土した軒丸瓦にもみられるほか,[36] 平瓦(1014～1017)にもみられる。

(4) 軒桟瓦

軒桟瓦は5点が出土し，総重量0.576kgを量り，出土瓦の0.06%である。SX－1や近代遺構から出土している。また，桟瓦も出土瓦の0.1%と非常に少なく，第Ⅰ層からの出土が大半であることから，近代のものが多いとみられる。

① 巴文

ⅰ　A－1類(図159－952・953)

A－1類は中心飾が左巻の三巴文である。952は唐草文が3回反転し，第3唐草は巻かずに斜上方へ伸びる。瓦当右側に「御瓦師」の刻印がみられ，高知県安芸市産である。全面にキラ粉が付着する。同文の瓦は下屋敷ではⅢ－1－a－アと分類されており，三ノ丸でも出土しているが,[37] 952は線が細

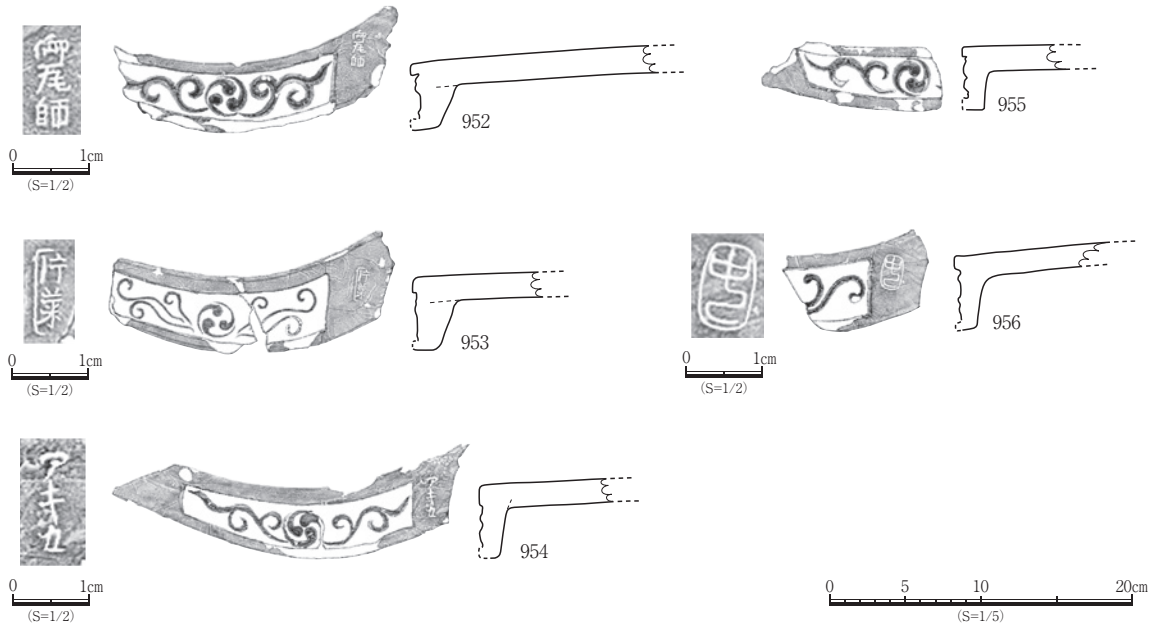


図159　軒桟瓦実測図(巴文・その他)

く同笵のものはみられない。953は唐草が細く，中心飾脇から3本の唐草が伸びる。瓦当右側に方形枠に「片菊」の刻印がみられ，高知県香美市土佐山田町片地産である。瓦当上縁を面取し，全面にキラ粉が付着する。下屋敷で同文の瓦が出土している。[38]

ii A－2類(図159－954)

A－2類は右巻の三巴文である。954は唐草がA－1類の952と同文である。瓦当右側に「アキ丑」の刻印がみられ，高知県安芸市産である。瓦当に木目圧痕が残る。下屋敷ではⅢ－1－b－アと分類されており[39]，内堀跡西側地区でも出土している。[40]

iii B類(図159－955)

B類は中心飾が左巻の二巴文で，唐草はA－1類の952と同文である。下屋敷ではⅢ－2－a－アと分類されている。[41]955は軒平瓦の可能性もあるが，脇文様がA類と同様であることや，下屋敷で出土した同文のものが軒桟瓦であるため，軒桟瓦に分類している。瓦当にはキラ粉が付着する。

② その他(図159－956)

956は中心飾が残存していないが，残存部の唐草の形状が下屋敷で出土している蔦文のものに似ている。[42]瓦当右側には小判形枠内に「中己」の刻印がみられ，高知県香南市野市町中山田産とみられる。下屋敷で出土している蔦文の桟瓦にも同じ刻印がみられる。全面にキラ粉が付着する。

(5) 鬼瓦

鬼瓦は16点が出土し，総重量22.7kgを量り，出土瓦の0.2%を占める。957～970の14点を図示した。

① 三ツ葉柏文(図160－957～959)

三ツ葉柏文の鬼瓦は3点が出土した。957は板状で，瓦当は厚さ4.8cmを測る。上端部は中央を尖らせ，上端面は裏面に向けて斜に加工する。袖部は下方へ伸び，端部は方形を呈する。中央の文様は剥離するため不明で，接着するためのカキヤブリの痕跡が円形に残る。剥離した部分は径17.5cmを測り，三ツ葉柏文軒丸瓦の瓦当の大きさとほぼ一致する。左右の袖部には型押の三ツ葉柏文がみ

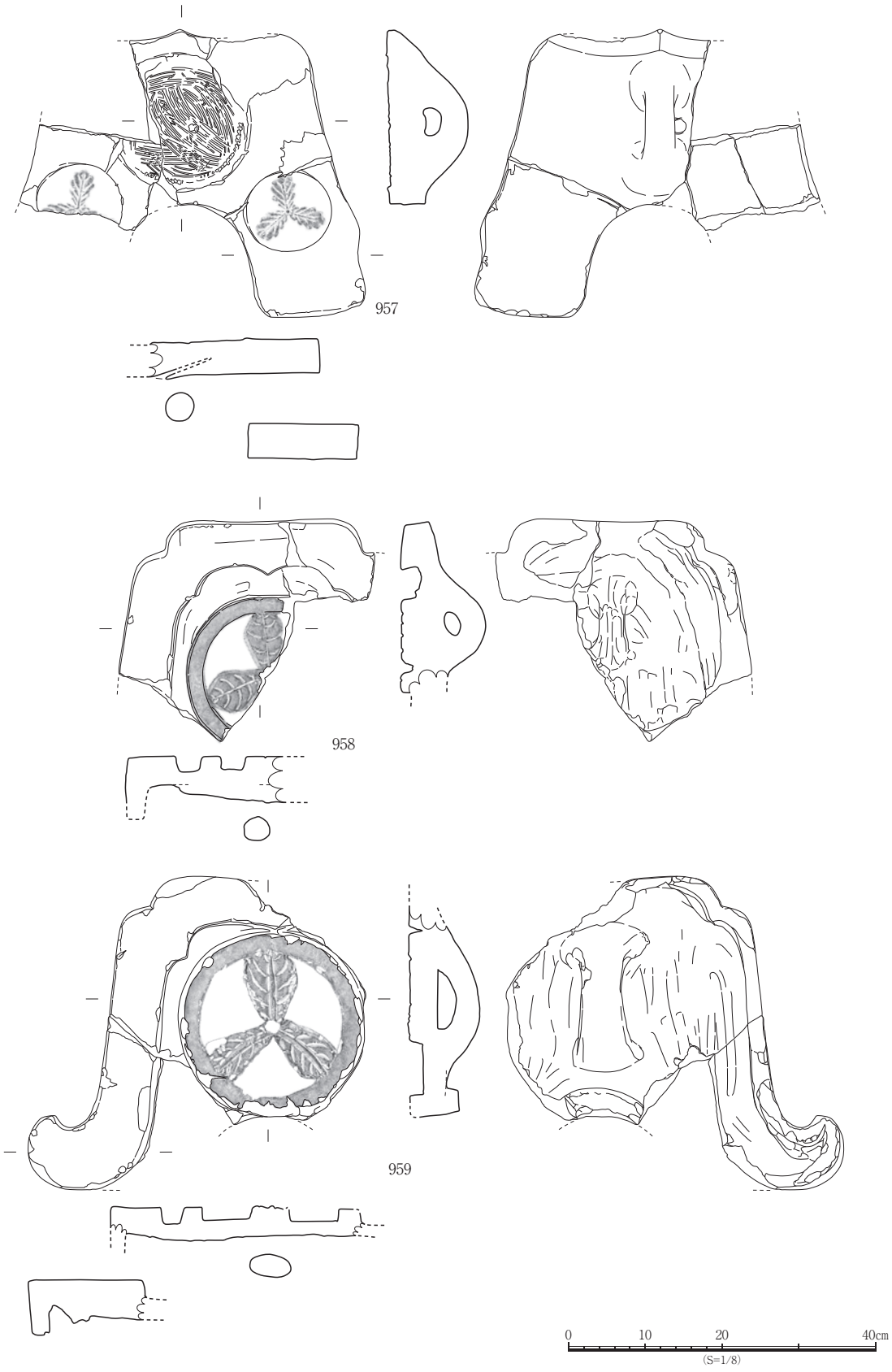


図160　鬼瓦実測図1(三ツ葉柏文)

られ，瓦当面より凹み，文様部分には離れ砂が付着する。文様は径11.5cmを測り，中央には珠文様の粒もみられる。裏面には縦方向に把手を貼付する。把手は全長18.5cm，幅3.7cm，高さ5.5cmを測り，断面は円形を呈し，ナデ調整である。把手の脇には縦1.4cm，横0.5cm，奥行6.5cmの方形の孔が左斜方向に穿たれる。瓦当面はナデ調整，側面は横方向のナデ調整で，裏面中央部には板状圧痕が残り，周縁部は離れ砂が付着する。袖部の文様は720の軒丸瓦と同笵である。720はコビキＡであり，この鬼瓦も同様の時期に生産されたものと考えられる。958と959は同様の形状で，上端部は平らで，肩部に抉りを入れ，959の袖部は上方にやや巻き上がる。瓦当周縁には縁帯を貼付し，縁帯の内側は雲文状に抉りを入れる。瓦当中央には三ツ葉柏文を貼付する。文様はすべて手捻で葉脈は線刻で表現されている。裏面は上端を除き周縁に側板を貼付し，断面はＬ字状を呈する。裏面中央には縦方向に把手を貼付する。958は文様部径20.4cm，文様部高1.9cm，文様中央の粒は径1.5cmを測る。裏面の把手は残存長14.7cm，幅3.3cm，高さ5.2cmを測り，断面は円形を呈する。把手は残存部で全長24.0cm，幅16.5cmの範囲に粘土を貼付し接着している。調整は瓦当と側面，裏面側板はナデ調整，裏面中央部は主に縦方向の粗雑なナデ調整である。959は瓦当が薄く，最も薄い部分では厚さ1.8cmを測る。文様部径23.5cm，文様部高1.7cm，中央の珠文様の粒は径1.5cmを測る。裏面の把手は，全長19.0cm，幅5.4cm，高さ5.5cmを測り，断面は楕円形を呈する。把手は残存部で全長25.0cm，幅15.0cmの範囲に粘土を貼付し接着している。調整は瓦当と側面・側板はナデ調整，裏面中央部は主に縦方向の粗雑なナデ調整である。

三ツ葉柏文鬼瓦は三ノ丸で1点の出土がみられ，文様は手捻である。[43]

② 花文（図161－960・961）

960・961はいずれもSK－50から出土し，同一個体とみられる。960は瓦当中央部とみられ，型による花文がみられる。花文は7弁の間に弁が入り，中央には粒がみられる。周縁はナデ調整で，裏面は粗雑なナデ調整である。裏面には周縁に沿って粘土を貼付し，剥離箇所にはカキヤブリの痕跡が残る。961は上端部が平らで，肩部の2箇所に抉りを入れ，瓦当周縁には縁帯を貼付し，縁帯の内側は雲文状に抉りを入れる。裏面は周縁に側板を貼付し，断面はＬ字状を呈する。側板は上部が高く，裾部は低くなる。

③ その他（図161－962～970）

鬼瓦の一部とみられるものである。962・963は裏面に側板が付かず板状を呈するもので，957と同様の形状とみられ，中央付近を尖らす。962は縦方向のナデ調整を施す。963はナデ調整で，側面は縦方向のナデ調整を施す。瓦当にはヘラ彫による文様がみられ，離れ砂が付着する。裏面には漆喰が付着する。964～966は958・959と同様の形状の肩部分とみられ，縁帯を貼付し，内側に抉りを入れる。瓦当は縦方向のナデ調整，縁帯はナデ調整である。裏面は周縁に垂直に側板を貼付し，粗雑なナデ調整を施す。967は右袖部分で，上方にやや巻き上がる。裏面は周縁に側板を貼付し，断面は「コ」の字状を呈する。瓦当には離れ砂が付着し，側板はナデ調整，裏面は粗雑なナデ調整で指頭圧痕が残る。968も右袖部分とみられ，裏面には側板が付く。瓦当面は型成形とみられ，裏面は横方向のナデ調整である。全面にキラ粉が付着する。969は破片で，左袖と考えられる。板状を呈し，下部は半円形の抉りを入れ，袖部は細く上方にやや巻き上がる。瓦当面及び袖部側面上部はナデ調整及びケズリ調整，その他はナデ調整である。970は一部が残存する。半球形を呈し，底面は平らで，外側は球状に丸味を帯び，内側は階段状に切り込む。外側は縦方向のナデ調整，内

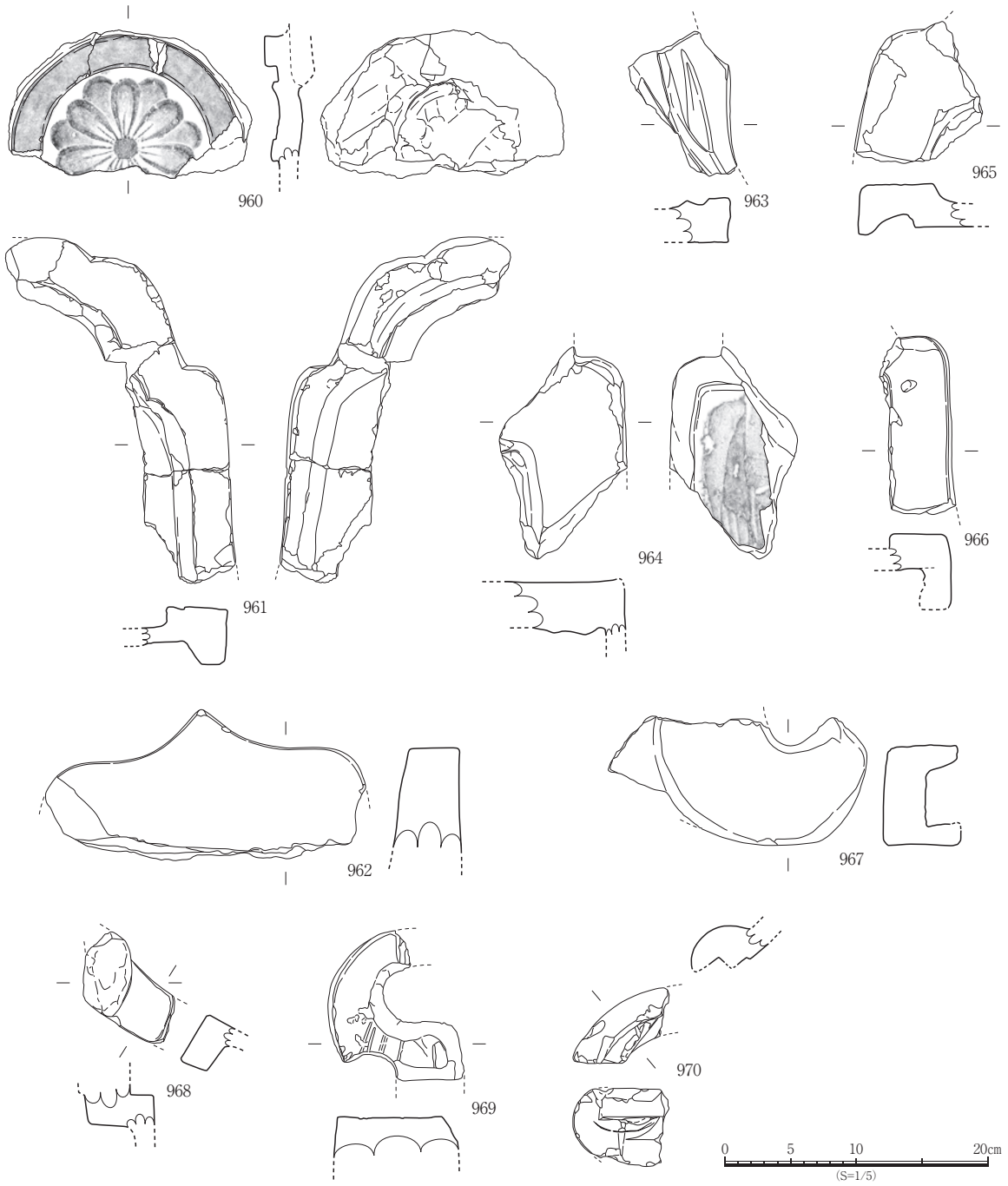


図161　鬼瓦実測図2(花文・その他)

側はヘラによる調整とみられる。

(6) **丸瓦**(図162～165－971～988)

丸瓦は10,293点が出土し，総重量5,932.8kgを量り，出土瓦の42.0%を占める。丸瓦で凹面にコビキＡが残るものが11%，コビキＢが55%，不明が34%である。

971～976は凹面にコビキＡがみられるものである。凸面は縦方向のナデ調整を施し，凹面は広端面と側縁の面取を行う。971は凹面に吊紐痕が残る。972は凸面玉縁部が横方向のナデ調整，凹面は玉縁部に布目圧痕，丸瓦部には布目圧痕と吊紐痕，棒状圧痕が残る。973は凹面がコビキＡで，

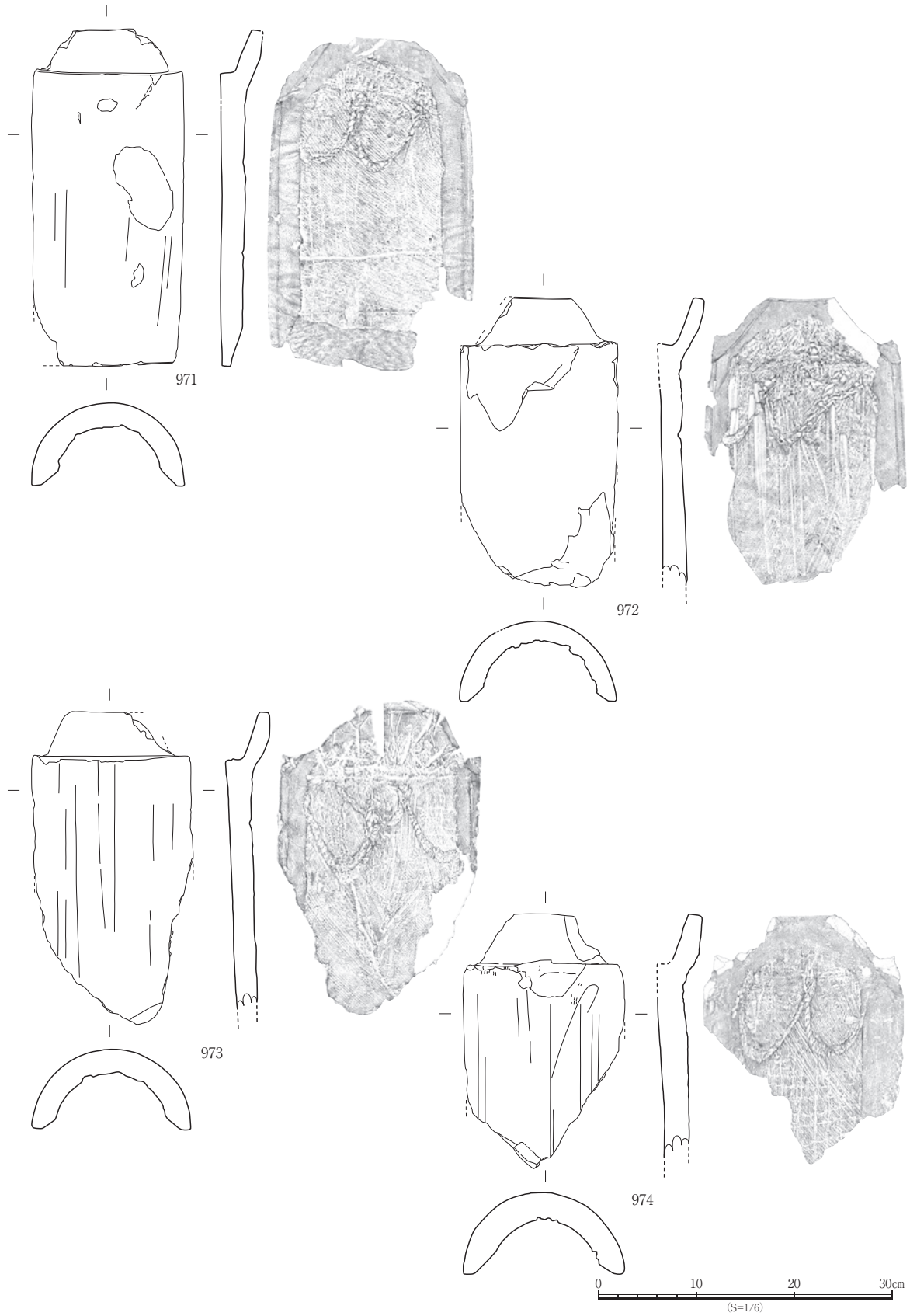


図162　丸瓦実測図1

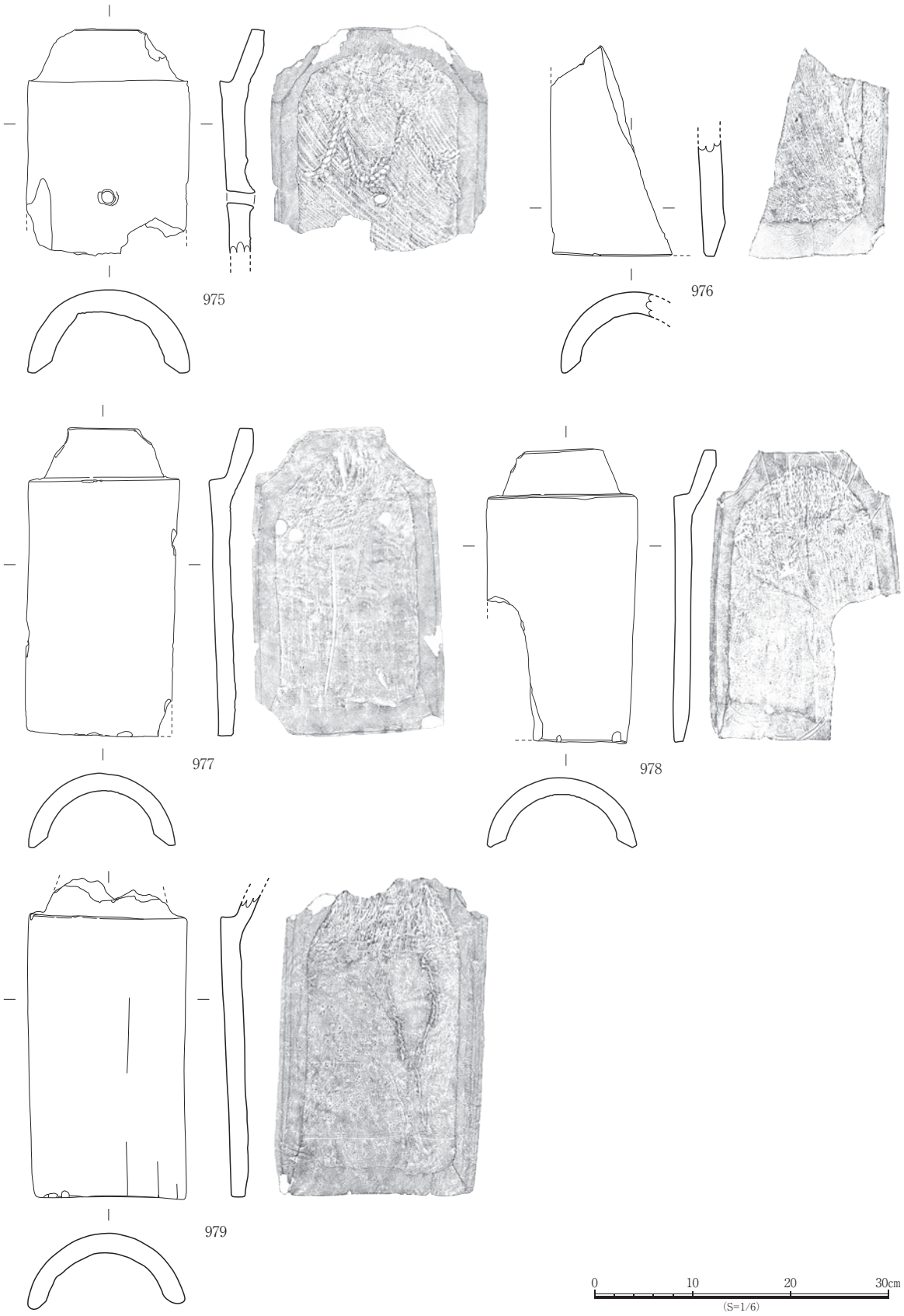


図163　丸瓦実測図2

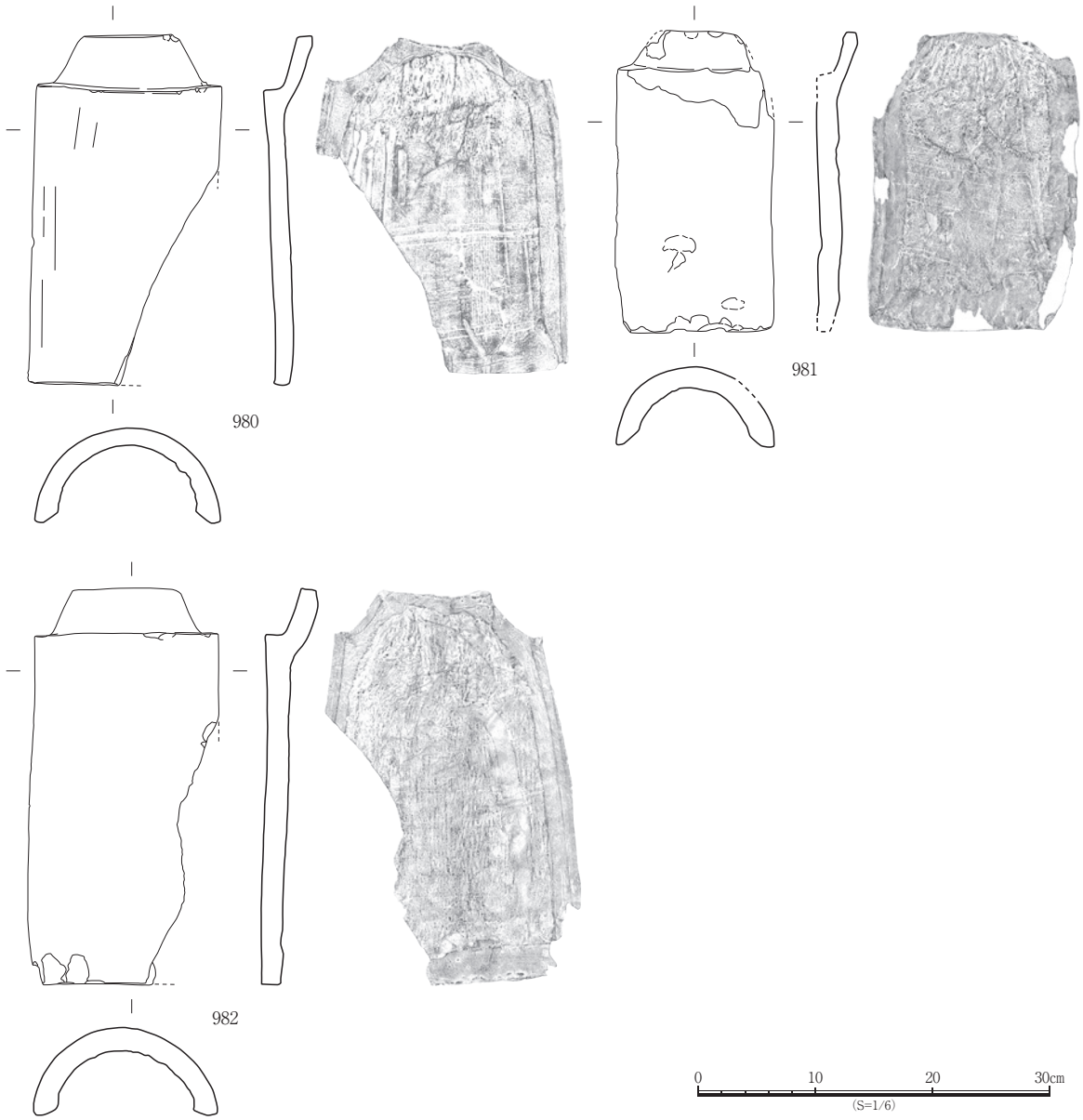


図164　丸瓦実測図3

布目圧痕と吊紐痕が残る。凸面は縦方向のナデ調整である。974は凸面がタタキまたはハケ調整のちナデ調整，凹面はコビキＡで布目圧痕と吊紐痕が残る。975は丸瓦部に径1.5cmを測る円孔がみられる。凸面の一部にタタキ調整とみられる痕跡が残る。凹面は玉縁部に布目圧痕が残り，丸瓦部はコビキＡで一部に金色の付着物が残る。976は凸面が縦方向のナデ調整，凹面は広端面の面取を行い，漆喰が付着する。

977～982は凹面にコビキＢがみられるものである。凸面は縦方向のナデ調整，凸面玉縁部は横方向のナデ調整を施し，凹面は広端面と側縁の面取を行う。977は凹面に布目圧痕が残る。玉縁端部はケズリ調整，凹面は広端面を面取し，横方向のナデ調整を施す。凸面は玉縁が横方向のナデ調整，丸瓦部が縦方向のナデ調整である。980は丸瓦部凹面に棒状圧痕が残り，広端面の面取の後，ナデ調整を加える。982は丸瓦部凹面に漆喰が付着する。

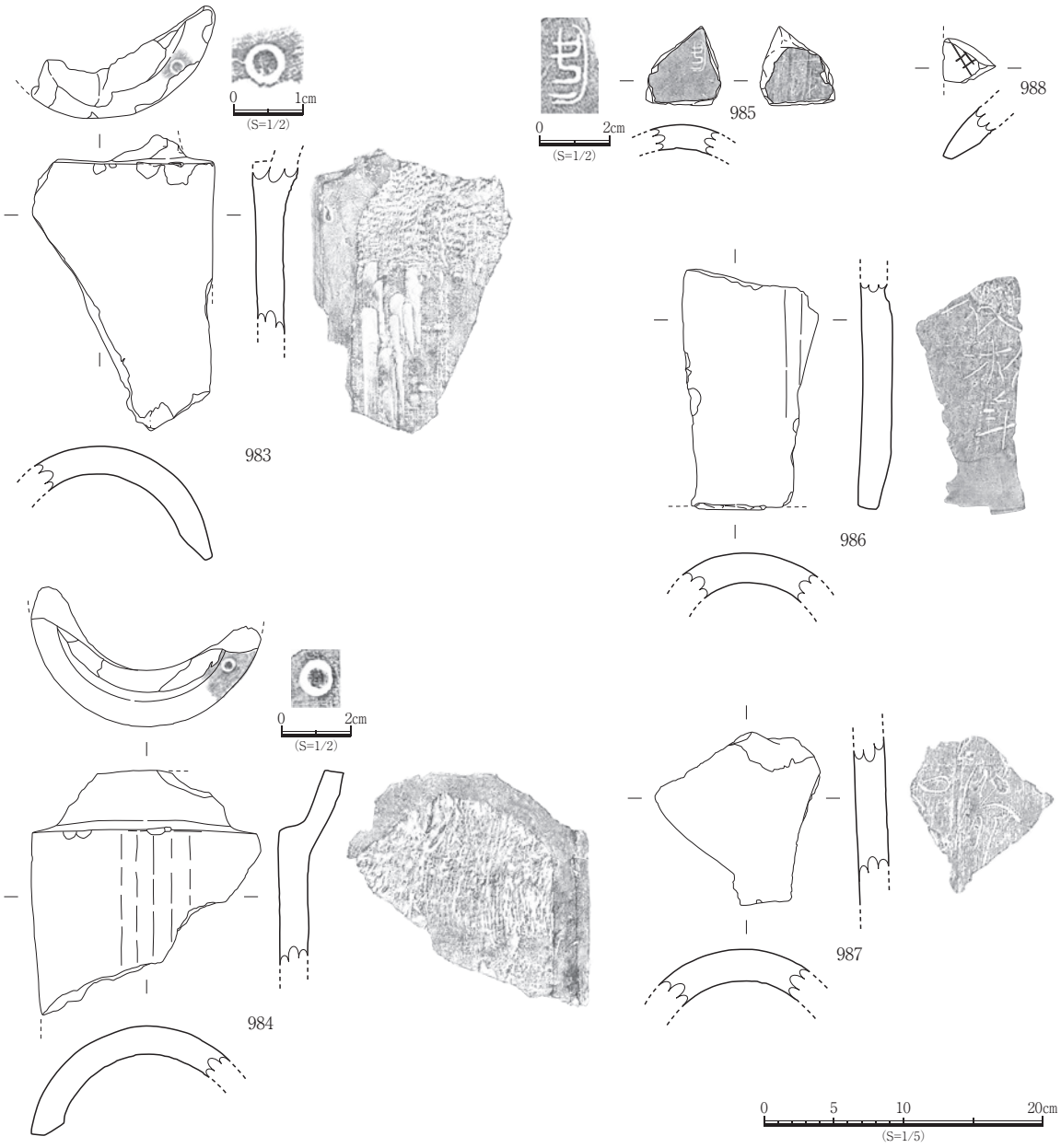


図165　丸瓦実測図4

983・984は凸面丸瓦部肩部に「○」の刻印がみられる。983は凸面が縦または横方向のナデ調整，凹面には布目圧痕と棒状圧痕が残る。984は凸面が縦方向のナデ調整，凹面はコビキＢである。

985は一部が残存するもので，凸面は縦方向のナデ調整で，小判形枠に「中己」の刻印が残る。凹面はコビキＢである。

986・987は凹面に刻書が残るものである。986は凸面が縦方向のナデ調整，凹面には布目圧痕が残り，「長拾(ヵ)年」の刻書がみられる。987は凸面が縦方向のナデ調整，凹面は布目圧痕と刻書がみられる。988は凸面に格子状のヘラ描が残る。凸面は斜方向のナデ調整，凹面は不明瞭であるが，コビキＡとみられる。

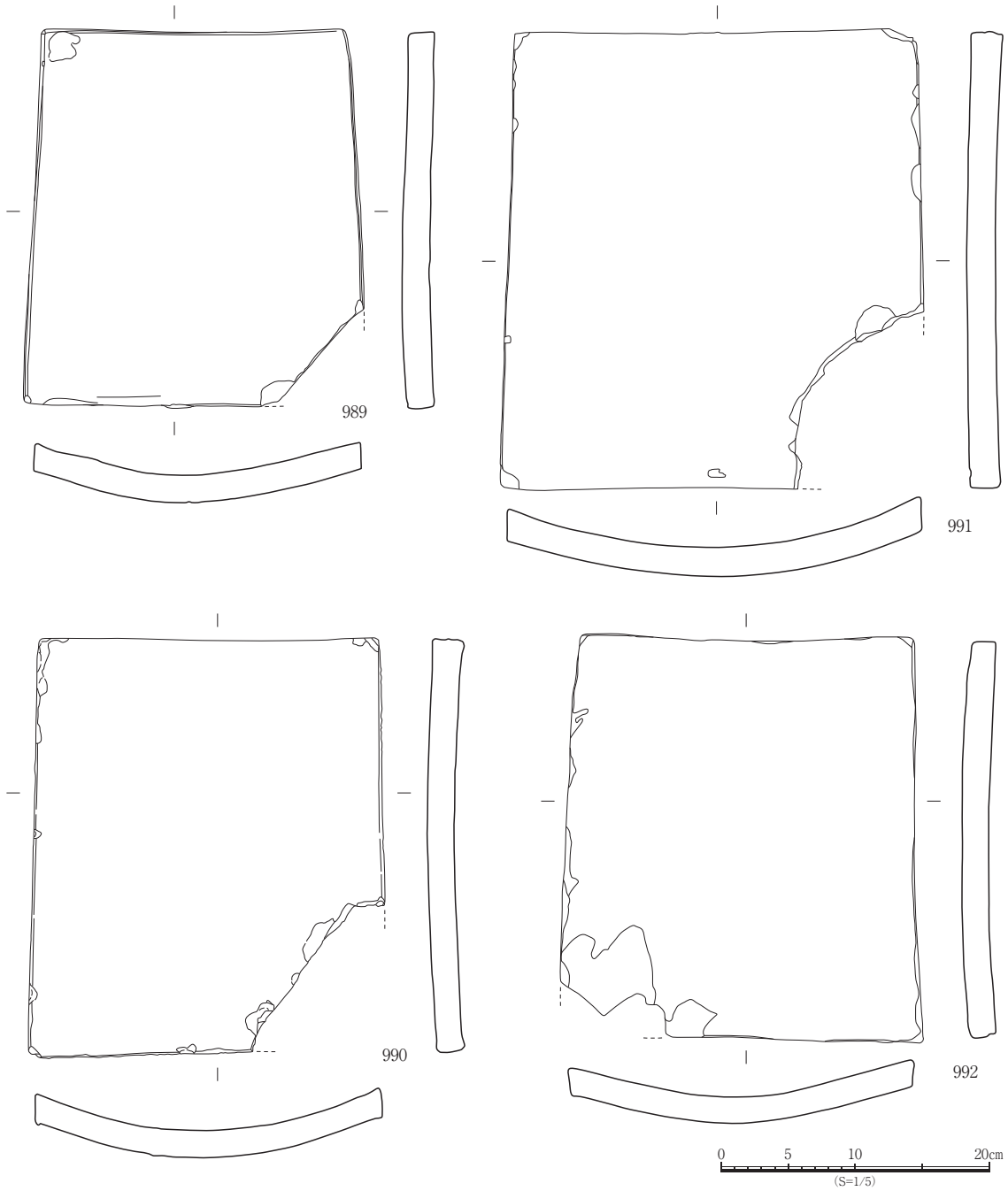


図166　平瓦実測図1

(7) 平瓦・桟瓦(図166～169－989～1044)

平瓦は37,962点が出土し，総重量7,619.2kg，出土瓦の53.9%を占める。桟瓦は106点が出土し，総重量17.3kg，出土瓦の0.1%であり，今回の調査で出土した瓦は本瓦葺の建物に使用されていたものが多いとみられる。残存状態が良好なものと，刻印や刻書が残る989～1044の56点を図示した。破片であるものは桟瓦であるか判断がつかず，平瓦として一括して報告する。文字の刻印がある瓦は，第Ⅰ層や近代遺構からの出土が大半であり，近代の遺物である可能性がある。

989～992はほぼ完存する。989は凹凸面の一部にナデ調整が残り，離れ砂が付着する。990は

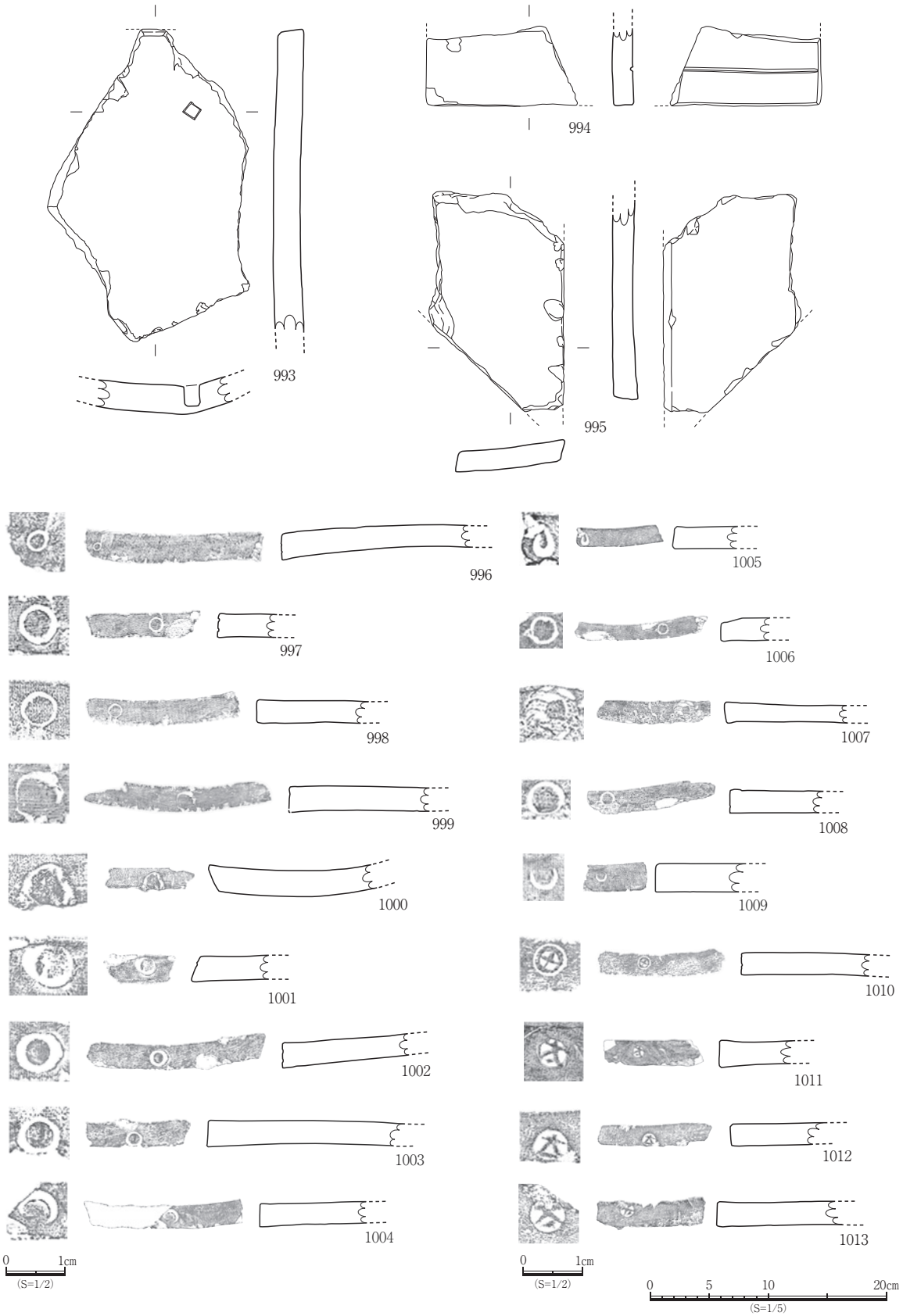

993
994
995
996
997
998
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011
1012
1013
0 1cm
(S=1/2)
0 1cm
(S=1/2)
0 5 10 20cm
(S=1/5)

図167　平瓦実測図2

凹凸面はナデ調整で，離れ砂が付着する。991は凹面が横方向のナデ調整，凸面がナデ調整で，端部は横ナデ調整である。992は凹面端部にケズリ調整を施したのち，ナデ調整を加え薄く加工する。凹凸面には離れ砂が付着する。993は全厚2.3cmを測る厚いもので，凹面は横方向のナデ調整のち，一部に縦方向のナデ調整を加え，離れ砂が付着する。凹面には一辺1.1cmの貫通しない方形の孔がみられる。994は凹面に幅0.4cmを測る直線上の線刻が残るものである。中央は横方向のナデ調整で，端部は周縁に沿ってナデ調整を施す。995は隅を斜に切るものである。凹面は縦方向のナデ調整，凸面は縦または横方向のナデ調整である。全面にキラ粉が付着する。

996～1037は側面に刻印がみられる平瓦で，凹凸面にナデ調整を施す。996～1008は「○」の刻印が残るもので，大阪府堺市産とみられる。この刻印は高知城跡内では多く出土しており，本丸では軒平瓦，御台所と下屋敷では平瓦，丸ノ内緑地や高知市教育委員会調査の北曲輪・内堀跡西側地区では平瓦または桟瓦が出土している。[44] 996の刻印は他の「○」よりも小さく径0.8cmを測る。その他の刻印は径1.1cm前後である。1002には漆喰が付着する。1006は凹面端部に中央幅広の面取を行う。1009は側面に半円形の刻印がみられる。1010～1017は陽刻の刻印で，1010は側面に「○に十字」の刻印，1011は「○に太」，1012は「○に大」，1013は「○に太」とみられる刻印が残る。1014～1017は九曜文の刻印が残る。1016と1017は周囲の点が他の九曜文よりやや大きい。九曜文の刻印がある軒平瓦は今次調査の951のほか，御台所では軒丸瓦が出土している。[45] 1018～1024は高知県安芸市産とみられるものである。1018は凹面端部を面取する。側面には「安」とみられる刻印が残る。1019～1022は側面に「アキ」とみられる刻印が残る。1019は凸面端部を面取する。1021は凹凸面の端部を面取し，キラ粉が付着する。1022は凹面の端部を面取し，凹面には横方向のナデ調整を施し，キラ粉が付着する。「アキ」の刻印は三ノ丸や御台所・下屋敷・追手門・北曲輪（高知市教育委員会調査）・丸ノ内緑地・内堀西側地区など高知城跡内でも多く出土しており，御台所では軒丸瓦や軒平瓦・丸瓦・平瓦の45点にみられた。[46] 1023は凹凸面に横方向のナデ調整を施し，キラ粉が付着する。側面には「□喜」の刻印が残り，「安喜」の可能性が高い。「安喜」の刻印は三ノ丸や御台所ほかでも出土している。[47] 1024は凹面が横方向のナデ調整，凸面はナデ調整を施す。全面にキラ粉が付着する。側面には「御瓦師」の刻印が残る。「御瓦師」の刻印は三ノ丸や御台所・下屋敷・追手門・北曲輪（高知市教育委員会調査）・丸ノ内緑地・内堀跡西側地区など高知城跡内で多く出土している。[48] 1025は近代遺構から出土した瓦で，型成形である。凸面には型による陽刻で，右から左に「商標　アキ貞　佐々木製瓦工場　□佐安藝町　□一〇八□」の文字が残る。凸面にキラ粉が付着する。1026～1029は高知県香南市夜須町産とみられるものである。1026・1027は側面に方形枠に「ヤス弘」の刻印が残るが，異なる印である。1026は凹凸面に横方向のナデ調整を施す。1027は凹面の端部を面取し，凸面は縦方向のナデ調整を施す。全面にキラ粉が付着する。1028は桟瓦で，凹面の端部を面取し，凹面は横方向のナデ調整，凸面は縦方向のナデ調整を施す。凹凸面にキラ粉が付着する。側面には「ヤス伊」の刻印が残る。1029は凹面端部を面取し，横方向のナデ調整，凸面は横または縦方向のナデ調整を施す。全面にキラ粉が付着する。側面には「ヤス安」の刻印が残る。「ヤス安」の刻印は本丸でも出土している。[49] 1030～1033は高知県香美市片地産とみられるものである。1030・1031は側面に方形枠に「片菊」の刻印が残るが，異なる印である。1030は凹面端部を面取し，凹凸面に横方向のナデ調整を施す。1031は凹面に横方向のナデ調整，凸面はナデ調整で，一部にケズリ調整を加える。凹面にはキラ粉が付着する。1032は凹面が横方向のナデ調

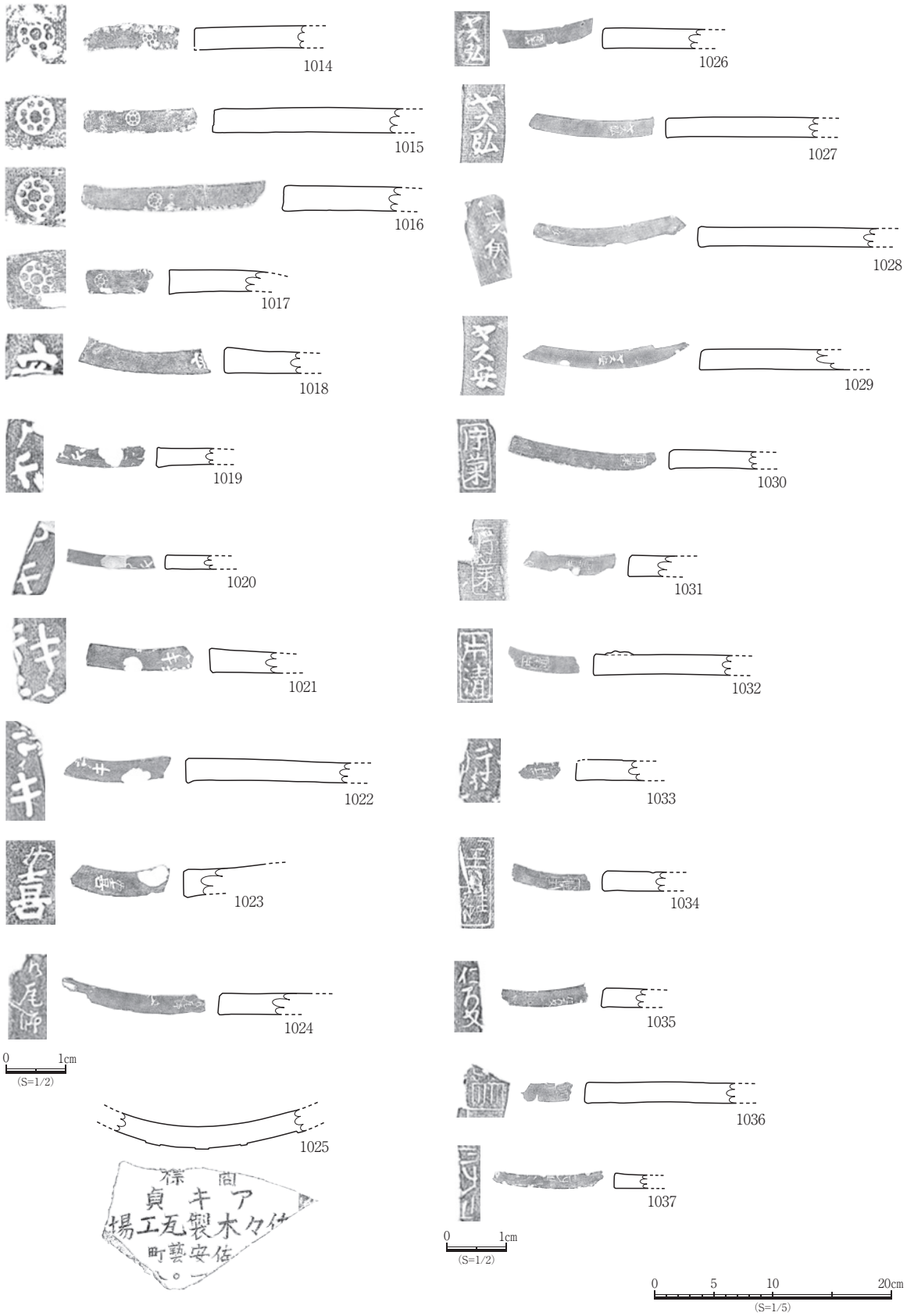

1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
0 1cm
(S=1/2)
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
0 1cm
(S=1/2)
0 5 10 20cm
(S=1/5)

図168　平瓦実測図3

整で，漆喰が付着する。凸面には細かい離れ砂が付着する。側面には方形枠に「片清」の刻印が残る。1033は摩耗するため調整は不明である。凹凸面にキラ粉が付着する。側面には「片□」の刻印が残る。1034は凹面端部を面取し，凹凸面に横方向のナデ調整を施す。側面には方形枠に「王桂」の刻印が残る。1035は凹面端部を面取する。凹面が横方向のナデ調整，凸面は摩耗するため調整不明である。凹凸面にキラ粉が付着する。側面には「仁ろ戈(オヵ)」の刻印が残る。1036は凹面に横方向のナデ調整，凸面は縦方向のナデ調整を施す。側面には方形枠内に刻印がみられるが，解読は不可であった。同様の刻印は三ノ丸や御台所，丸ノ内緑地ほかでも出土している。[50]1037は側面に方形枠内に篆字で「二赤」とみられる刻印が残る。凹凸面に縦方向のナデ調整を施す。

1038は切込桟瓦とみられ，2隅を切り取る。凹面は横方向のナデ調整，凸面は端部を面取し，縦方向のナデ調整を施す。1039は切込桟瓦で，2隅を切り取る。凹面は端部を面取し，横方向のナデ調整，凸面は縦方向のナデ調整を施す。1038・1039の側面には方形枠内に篆字で「二赤」とみられる刻印が残る。1037～1039と同様の刻印は三ノ丸や下屋敷・丸ノ内緑地・内堀跡西側でも出土している。[51]1040は大阪府産とみられるもので，凹凸面にナデ調整を施し，キラ粉が付着する。側面には方形枠に「大坂瓦師六兵衛」の刻印が残る。1041は凹凸面にナデ調整を施す。側面には方形枠

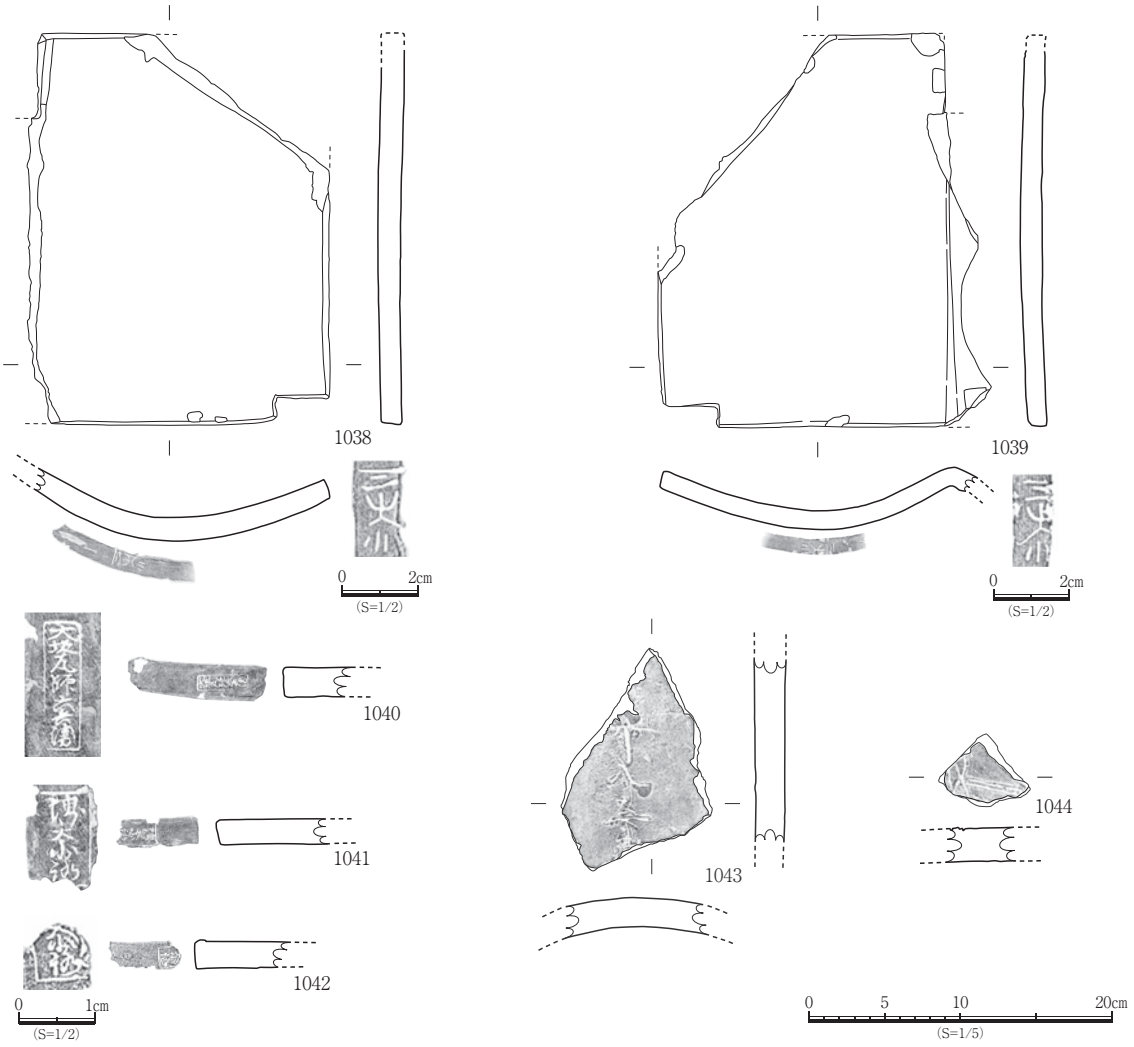


図169　平瓦4・桟瓦実測図

に「堺大小路」の刻印が残り，堺産とみられる。「堺大小路」の刻印は下屋敷と北曲輪（高知市教育委員会調査）・御台所で出土しており，下屋敷では平瓦65点が出土している。[52]1042は凹面が縦方向のナデ調整，凸面にはナデ調整を施す。側面には方形枠内に「□大小路」の刻印が残り，「堺大小路」の刻印とみられる。1043は凸面に刻書が残るものである。凹凸面にナデ調整を施す。1044は凸面に刻書が残るものである。凹面はナデ調整，凸面は縦方向のナデ調整を施す。1043・1044とも刻書の解読は不可であった。

(8) 道具瓦

① 丸瓦系道具瓦（図170－1045～1048）

1045～1048は谷丸瓦で，いずれも谷の左側の瓦である。丸瓦部の一部を斜に切り落とし，切

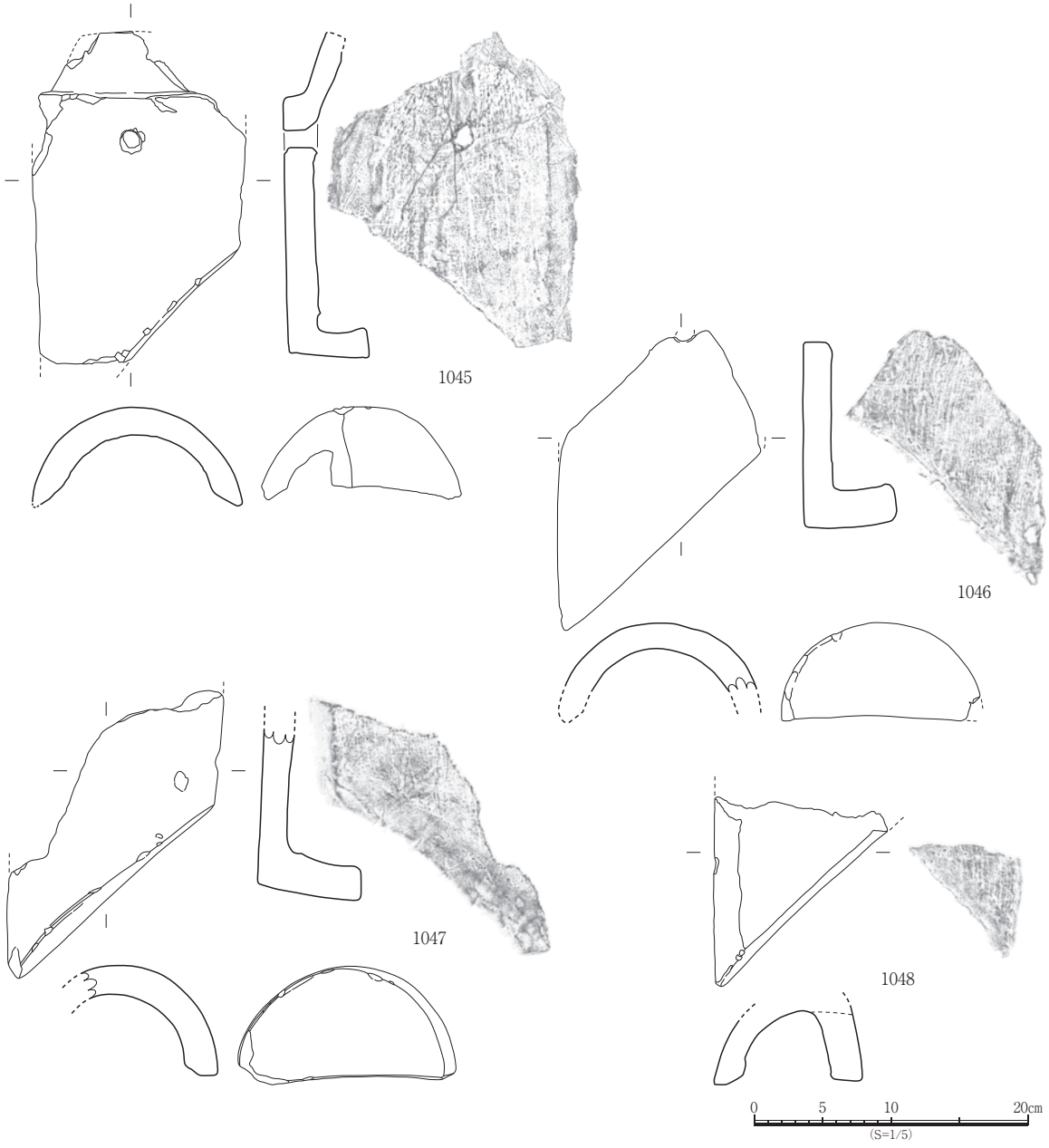


図170　丸瓦系道具瓦実測図

断面に垂直方向に粘土板を貼付する。凸面は縦方向のナデ調整，玉縁と垂れは横方向のナデ調整である。1045～1047の凹面はコビキBで，1048には僅かに布目圧痕が残る。1045には径1.1cmの円孔がみられる。

② 平瓦系道具瓦(図171･172－1049～1073)

平瓦の形状を基本とする様々な形態の瓦を一括して報告する。

1049～1052は平瓦の一部を斜に切り落とし，切り落とした箇所の凸面に三角形を呈する粘土板を垂直方向に貼付したものである。谷平瓦とみられる。調整はナデである。1049は貼付した粘土板が残存部下端では平瓦部と同じ厚さになる。1050は貼付した粘土板が剥離した箇所にカキヤブリの痕跡が残る。1052は貼付した粘土板の内側は強いナデ調整で，粘土板に沿って凹む。1053･1054は平瓦の一部を斜に切り落とし，切り落とした箇所の凹面に三角形を呈する粘土板を垂直方向に貼付したものである。1053は1隅を2方向に切り落とし，端部は面を持つ。一辺には三角形を呈する粘土板を垂直方向に貼付する。貼付した箇所は縦方向のナデ調整を施す。1054は三角形を呈する粘土板が高く，やや外方向に貼付する。谷瓦とみられる。1055は平瓦の一部を斜に切り落とし，切り落とした箇所の凸面に幅1.7cm，高さ1.0cmを測る帯状の粘土を貼付したものである。調整はナデである。

1056は平瓦の一部を斜に切り落とし，斜に切り落としていない箇所の凹面に粘土を貼付して屈曲させるものである。粘土紐を貼付した部分は縦方向のナデ調整，平瓦部は凹凸面にナデ調整，凸面の屈曲部は縦方向のケズリ調整である。1057～1060は側面が凹面に屈曲するもので，水返し付の平瓦とみられる。平瓦の一辺に粘土板を貼付して屈曲させる。全体の形状が明らかではないため，1056の様な一部を斜に切り落とした形状である可能性もある。1057は貼付した部分は縦方向のナデ調整，その他はナデ調整である。径0.6cmの円孔の一部と半円形の抉りまたは孔の一部が残る。1058は粘土板を貼付した部分は縦方向のナデ調整，平瓦部は凹凸面にナデ調整，凸面の屈曲部は縦方向のケズリ調整である。1059は粘土板を貼付して屈曲させ，端部は面を有し内傾する。側面は横方向のナデ調整で，端部は面取を行う。全面にキラ粉が付着する。1060は一辺の一部にのみ粘土板を貼付し屈曲させるものである。粘土板を貼付した部分は縦方向のナデ調整，平瓦部は凹凸面にナデ調整を施す。1061は一部が残存するもので，平瓦に幅5.0cmの粘土板を貼付したものとみられる。縦方向のナデ調整で，裏面は粗雑で指頭圧痕が残る。接合部で剥離し，剥離した面にはカキヤブリの痕跡が残る。キラ粉が付着する。1062～1065は凹面の一辺を緩やかに短く湾曲させるもので，端部は細く仕上げる。湾曲した部分は縦方向のナデ調整，凹面は横方向のナデ調整である。1062は粘土板が剥離した箇所にカキヤブリの痕跡が残る。1062･1063は凸面に離れ砂が付着する。1064は下辺を面取し，凸面の湾曲部は縦方向のケズリ調整である。1065は湾曲部が縦方向のナデ調整，凸面には離れ砂が付着する。1066･1067は平瓦に突帯を貼付し，水返し状を呈するものである。凹凸面ともナデ調整である。1066は凹面に断面三角形の突帯をL字状に貼付する。突帯内側には1箇所に一辺1cmを測る方形の孔の一部が残る。1067は凸面に断面台形を呈する突帯を貼付する。突帯はヘラナデ調整を施し，片面は強いヘラナデ調整で平瓦部よりも凹む。1068～1070は端部が斜上方に伸びた後，水平に伸びるものである。1068はナデ調整で，屈曲部は強い縦方向のナデである。凸面には細かい離れ砂が付着する。1069は全面に縦方向のナデ調整を施し，凸面の立ち上がり部は強いナデ調整を施す。1070は凸面が横方向のナデ調整，立ち上がり部が縦方向の

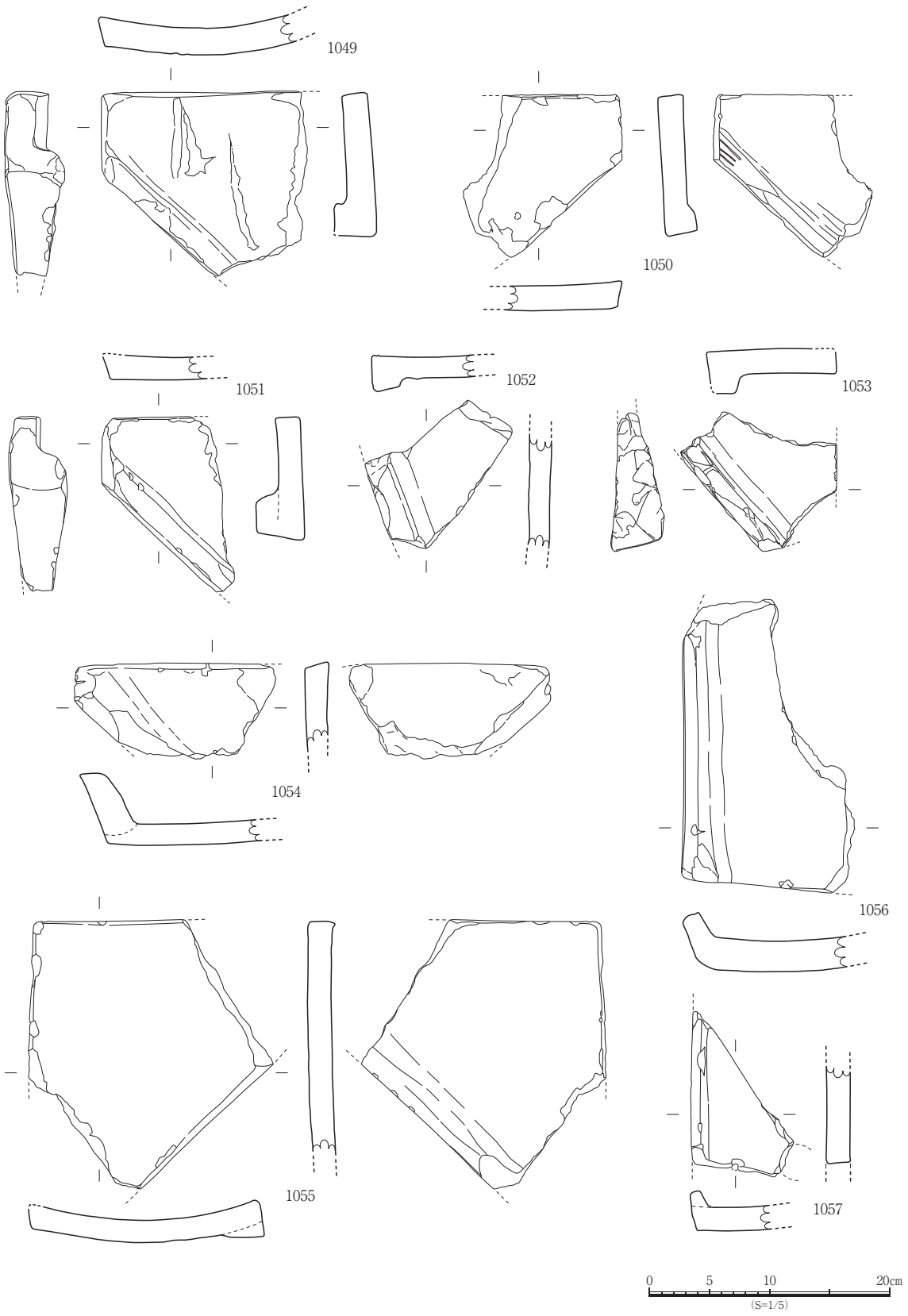


図171　平瓦系道具瓦実測図1

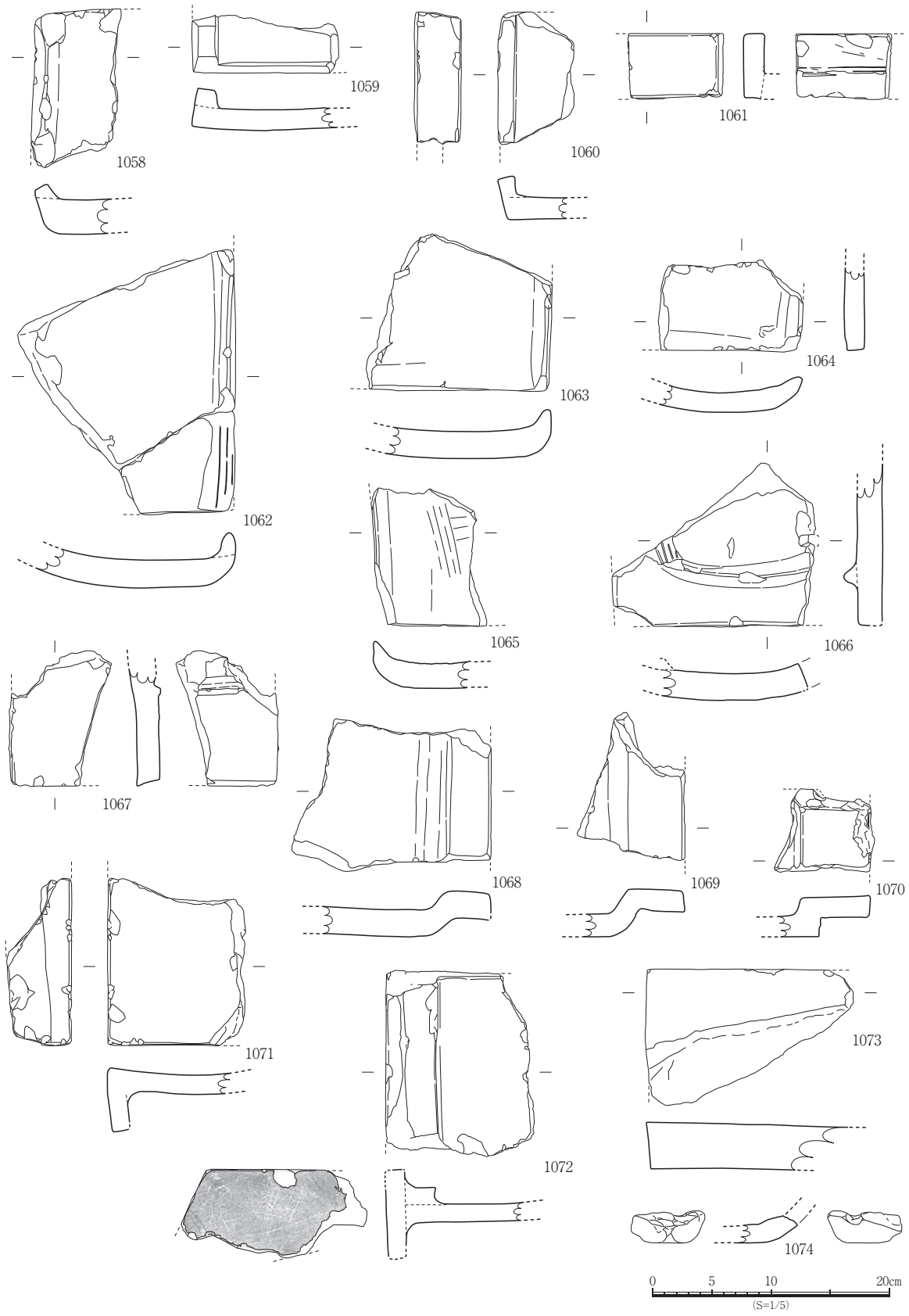


図172　平瓦系道具瓦実測図2

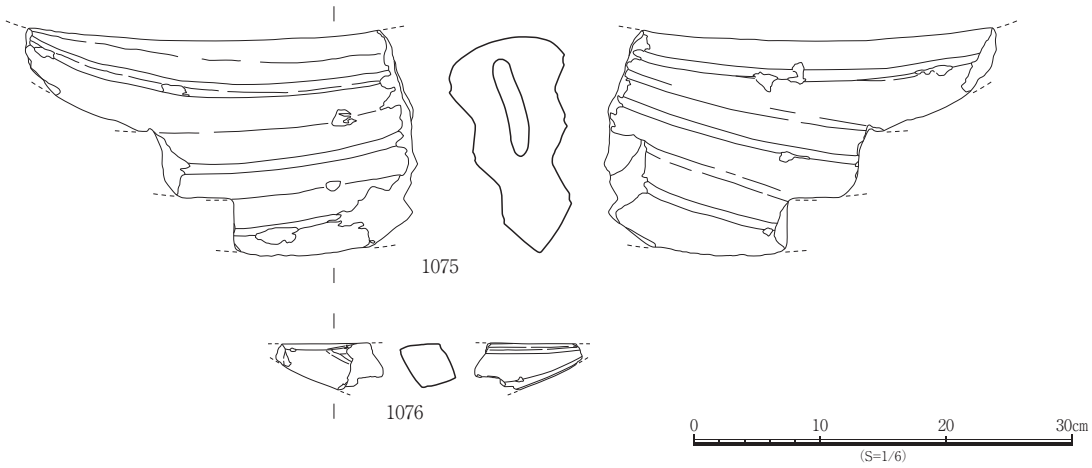


図173　陶器鯱実測図

粗雑なナデ調整，立ち上がって水平に伸びる部分には板状圧痕が残る。漆喰が付着する。**1071**は凸面に垂直方向に粘土板を貼付する。袖瓦とみられる。縦方向のナデ調整で，貼付部分は縦方向のケズリ調整のちナデ調整である。平瓦部にはキラ粉が付着する。**1072**は粘土板と垂直方向に台形を呈する粘土板を貼付する。調整はナデで，接合部は横方向のナデ調整である。台形を呈する粘土板には舟の線刻がみられ，キラ粉が付着する。**1073**は厚さ3.9cmを測る非常に厚いもので，調整はナデである。全体の形状が不明なため，道具瓦としておく。**1074**は湾曲するもので，1箇所に径1.4cmの円孔が残る。凸面は丁寧なナデ調整，凹面は粗雑なナデ調整で指頭圧痕が顕著に残る。全体の形状が不明なため瓦ではない可能性もあるが，ここでは道具瓦としておく。

(9) 鯱(図173－1075・1076)

1075・1076の2点が出土し，いずれも陶器製で尾鰭の一部が残存する。1075は残存長31.0cm，重量3.3kgを量る。両面を横方向のケズリ調整で成形し，表面には3条，裏面には5条の沈線で鰭を表現する。尾の先端は中実，基部は中空で，内側には粗雑なナデ調整を施す。外面には全面に暗褐色を呈する錆釉を施す。1076は尾端部の破片で，残存長3.7cm，重量110gを量り，1075と同様の作りである。断面は菱形を呈し，4面に溝状の浅い凹みを入れる。全面に錆釉を施す。

註

(1) 高知県教育委員会　1982「高知公園史　武市佐市郎編」『史跡高知城跡　保存管理計画策定報告書』
(2) 高知県教育委員会　2004『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書－』
(3) 高知県教育委員会・㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2010『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第114集
(4) 高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡1－御台所屋敷跡発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財調査報告書第37集
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集
(5) ㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2002『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集
(6) 高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2014『史跡高知城跡－追手門東北矢狭間塀石垣改修工事調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第141集
(7) 高知市教育委員会　2011『史跡高知城跡－北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知市文化財調査報

告書第35集
⑻ 高知県教育委員会・㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2006『史跡高知城跡－丸ノ内緑地試掘確認調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集
⑼ ⑶に同じ。（図67－160）
⑽ ⑹に同じ。（図31－10）
⑾ ⑷に同じ。（御台所：図版27－256・258・259，伝御台所：図16－131）
⑿ ⑻に同じ。（Fig.70－143）
⒀ ⑸に同じ。
⒁ ⑵⑸に同じ。（本丸：第5－21図－172，下屋敷：Fig.86－896）
高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡1－御台所屋敷跡発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財調査報告書第37集（図版28－267）
⒂ 山崎信二　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編　2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報第78冊
⒃ 高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡1－御台所屋敷跡発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財調査報告書第37集（図版28－265）
⒄ ⒃に同じ。（図版28－266）
⒅ ⑸に同じ。（Fig.86－900・901）
⒆ ⑸⒃に同じ。（下屋敷：Fig.86－902・903，御台所：図版29－268）
⒇ ⒂に同じ。P238～240
(21) ⑸に同じ。（Fig.86－897・898）
(22) ⒂に同じ。P157
(23) ⑸に同じ。（Fig.87－910）
(24) ⑸⒃に同じ。（下屋敷：Fig.87－925，御台所：図版29－270）
(25) 財団法人大阪市文化財協会　1998『住友銅吹所跡発掘調査報告書－住友銀行鰻谷新システムセンター建設に伴う発掘調査報告書－』（図107－968）
(26) ⒂に同じ。P244
(27) ⑸に同じ。（Fig.87－904～909・913・914）
(28) ⒃に同じ。（図版29－273）
(29) ⑸に同じ。（Fig.87－911・912）
(30) ㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集（図76－518）
(31) ⑶⑸⑺に同じ。（三ノ丸：図42－105，下屋敷：Fig.82－853，北曲輪：Fig.31－141・Fig.47－264）
(32) 堺市教育委員会　2000『堺市文化財調査概要報告第86冊』（第57図－1）
(33) ⑸に同じ。（Fig.82－855・856）
(34) ⑶⑸⒃に同じ。（三ノ丸：図42－103・104，下屋敷：Fig.82－845・846，御台所：図版28－262・263）
(35) ⑺に同じ。（Fig.47－263）
(36) ⒃に同じ。（第10表－27）
(37) ⑶⑸に同じ。（三ノ丸：図42－98・99，下屋敷：Fig.83－858～869）
(38) ⑸に同じ。（Fig.83－871）
(39) ⑸に同じ。（Fig.84－878～882・884）
(40) 高知市教育委員会　2013『史跡高知城跡　高知城跡－内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知市文化財調査報告書第37集（Fig.29－210）
(41) ⑸に同じ。（Fig.85－886～888）
(42) ⑸に同じ。（Fig.88－945）
(43) ⑶に同じ。（図40－93）
(44) ⑵⑸⑹⑺⑻㉚㊵に同じ。（本丸：第5－27図－207，下屋敷：Fig.103－1089・1090，追手門：表4，北曲輪：Fig.35－166・167・Fig.43－217，丸ノ内緑地：Table.5，御台所：第10表－26・29，内堀跡西側地区：Fig.24－160）

⑷5) ⑴6)に同じ。（第10表－27）

⑷6) (3)(5)(6)(7)(8)⑴6)⑷0)に同じ。（三ノ丸：図41－94・図45－129・図47－137・138・図48－140・表4，下屋敷：Fig.95－1013，追手門：表4，北曲輪：Fig.34－155・156・Fig.42－201・Fig.43－206・Fig.44－221，丸ノ内緑地：Table.4，御台所：第10表－1，内堀跡西側地区：Fig.38－337・Fig.72－756）

⑷7) (3)(7)⑴6)⑷0)に同じ。（三ノ丸：図45－130・図48－139・図97－248・表4，北曲輪：Fig.32－147・Fig.44－224，Fig.46－255，御台所：第10表－2，内堀跡西側地区：Fig.84－875）

⑷8) (3)(5)(6)(7)(8)⑴6)⑷0)に同じ。（三ノ丸：表4，下屋敷：Fig.88－950・Fig.97－1031～1033，追手門：図35－35・表4，北曲輪：Fig.30－133～135・Fig.34－151～154・Fig.43－205・Fig.44－223・Fig.47－258・Fig.48－265・266，丸ノ内緑地：Table.4，御台所：表10－20～22，内堀跡西側地区：Fig.29－209・Fig.58－586・Fig.72－751・758・ Fig.117－1075）

高知市教育委員会　2009『高知城跡－内堀地区試掘確認調査報告書－』高知市文化財調査報告書第33集（Fig.42－332）

⑷9) (2)に同じ。（第5－26図－201）

⑸0) (2)(3)(5)(7)(8)⑴6)に同じ。（本丸：第5－26図－205，三ノ丸：図47－136・表5，下屋敷：Fig.99－1056，北曲輪：Fig.31－143・Fig.43－212・Fig.44－228，丸ノ内緑地：Table.6，御台所：表10－10）

⑸1) (3)(5)(8)⑷0)に同じ。（三ノ丸：表5，下屋敷：Fig.102－1082，丸ノ内緑地：Table.6，内堀跡西側地区：Fig.58－592）

⑸2) (5)(7)⑴6)に同じ。（下屋敷：Fig.102－1084・1085，北曲輪：Fig.35－164・Fig.43－215，御台所：第10表－24）

参考文献

山崎信二　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編　2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報第78冊

市川創　2017「大坂における近世瓦の生産と流通」『幕藩体制の下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通』第66回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集

堺市教育委員会　2000『堺市文化財調査概要報告第86冊』

高知県教育委員会　1982「高知公園史　武市佐市郎編」『史跡高知城跡　保存管理計画策定報告書』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　2003『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ　第1分冊－サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊－』

坪井利弘　1976『日本の瓦屋根』

第Ⅳ章　自然科学分析

1. 高知城跡北曲輪の珪藻分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
堀内誠示

はじめに

17～18世紀代に埋没した溝跡について，堆積時（機能時）の溝の堆積および水文環境を明らかにすることを目的として珪藻分析を行う。

(1) 試料

分析試料は，17～18世紀のＬ字状の溝跡（SD−10下層）から採取されたNo.1および同溝跡（SD−10最下層）から採取されたNo.2, 17～18世紀の溝跡（SD−12最下層）から採取されたNo.3の計3試料である。

(2) 分析方法

湿重約5gをビーカーに計り取り，過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に，分散剤を加えた後，蒸留水を満たし放置する。その後，上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し，珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に，自然沈降法による砂質分の除去を行い，検鏡し易い濃度に希釈し，カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し，スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は，油浸600倍または1000倍で行い，メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお，原則として，珪藻殻が半分以上破損したものについては，誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は，示準種などの重要な種類の見落としがないように，全体を精査し，含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については，Horst Lange−Bertalot（2000），Hustedt（1930−1966），Krammer and Lange−Bertalot（1985−1991），Desikachiary（1987）などを参考にする。

群集解析にあたっては，個々の産出化石を，まず塩分濃度に対する適応性により，海水生，海水～汽水生，汽水生，淡水生に生態分類し，さらにその中の淡水生種は，塩分，pH，水の流動性の3適応性についても生態分類する。その結果については，分析結果表に示す。また，化石種（絶滅種）については，生存期間（時代）を示している。

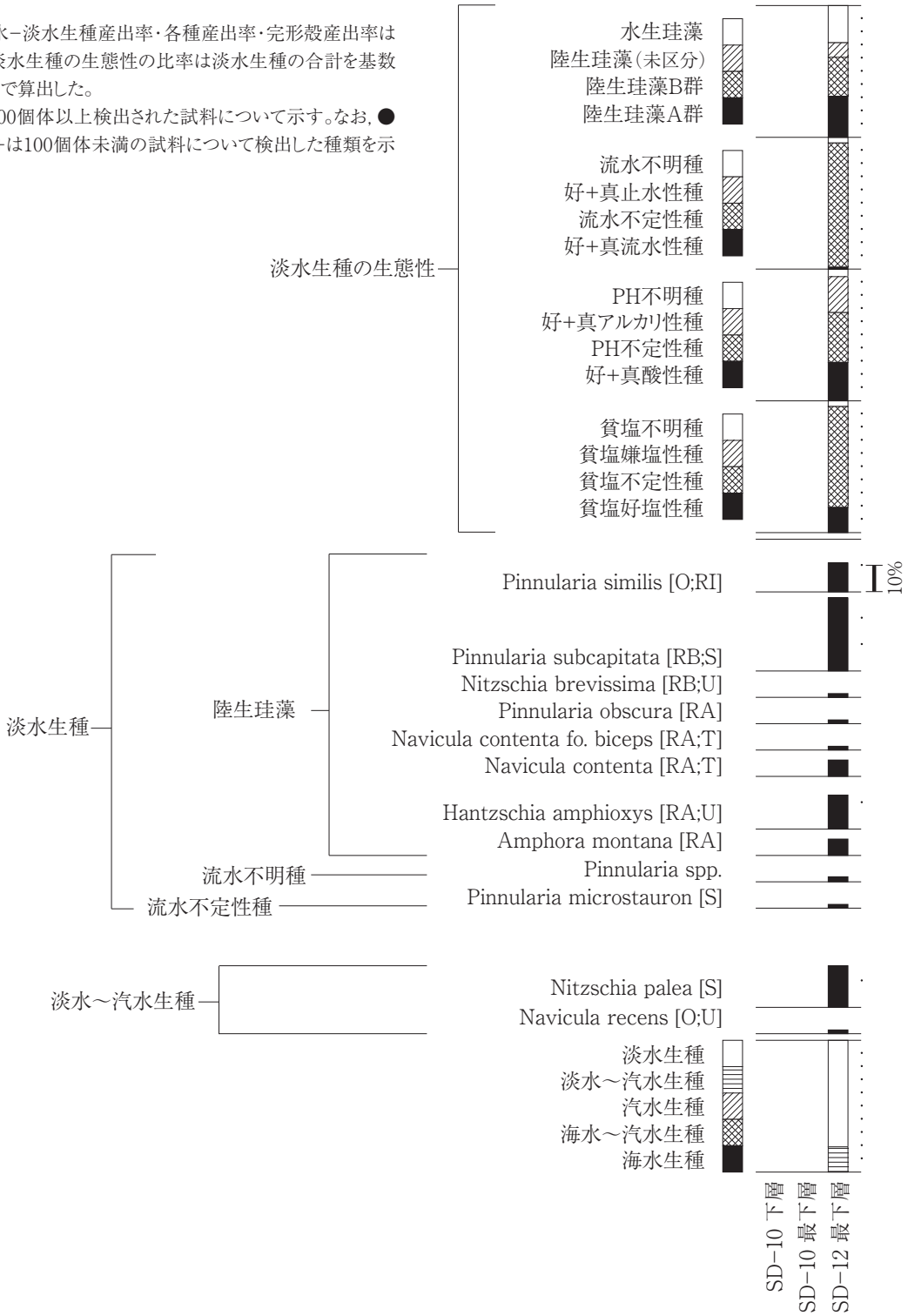
堆積環境の変遷を考察するために，珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し，1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示した（図中の●印は，総数が100個体以上産出した試料のうち1%以下の種を，＋印は総数100個体未満の場合の産出を示す）。図中には，海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

(3) 結果

結果を表1，図174に示す。

海水−汽水−淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数，淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。

いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお，●は1%未満，+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。



環境指標種

A：外洋指標種　B：内湾指標種　C1：海洋藻場指標種　C2：汽水藻場指標種　D1：海水砂質干潟指標種　D2：汽水砂質干潟指標種　E1：海水泥質干潟指標種　E2：汽水泥質干潟指標種　F：淡水底生種群（以上は小杉，1988）　G：淡水浮遊生種群　H：河口浮遊性種群　J：上流性河川指標種　K：中〜下流性河川指標種　L：最下流性河川指標種群　M：湖沼浮遊性種　N：湖沼沼沢湿地指標種　O：沼沢湿地付着生種　P：高層湿原指標種群　Q：陸域指標種群（以上は安藤，1990）　S：好汚濁性種　T：好清水性種　U：広適応性種（以上はAsai & Watanabe，1995）　RI：陸生珪藻（RA：A群，RB：B群　伊藤・堀内，1991）

図174　主要珪藻化石群集

表1　珪藻分析結果表

種　類	生態性			環境	No.1	No.2	No.3
	塩分	pH	流水	指標種	SD−10 下層	SD−10 最下層	SD−12 最下層
Navicula recens Lange−Bertalot	Ogh−Meh	unk	unk	O, U	−	−	3
Navicula veneta Kuetzing	Ogh−Meh	al−il	ind	U	−	−	2
Navicula spp.	Ogh−Meh	al−il	ind		−	−	1
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh−Meh	al−il	ind	S	−	−	1
Nitzschia palea(Kuetz.)W.Smith	Ogh−Meh	ind	ind	S	−	−	33
Amphora montana Krasske	Ogh−ind	ind	ind	RA	−	−	13
Caloneis aerophila Bock	Ogh−ind	al−il	ind	RA	−	−	2
Gomphonema parvulum(Kuetz.)Kuetzing	Ogh−ind	ind	ind	U	−	−	2
Hantzschia amphioxys(Ehr.)Grunow	Ogh−ind	al−il	ind	RA, U	−	−	27
Hantzschia amphioxys var. capitata Muller	Ogh−ind	al−il	ind	RA, U	−	−	1
Luticola mutica(Kuetz.)D.G.Mann	Ogh−ind	al−il	ind	RA, S	−	−	1
Navicula confervacea(Kuetz.)Grunow	Ogh−ind	al−bi	ind	RB, S	−	−	1
Navicula contenta Grunow	Ogh−ind	al−il	ind	RA, T	−	−	13
Navicula contenta fo. biceps(Arn.)Hustedt	Ogh−ind	al−il	ind	RA, T	−	−	3
Navicula elginensis var. neglecta(Krass.)Patrick	Ogh−ind	al−il	r−ph	U	−	−	1
Navicula tenelloides Hustedt	Ogh−unk	unk	r−ph	J, U	−	−	2
Neidium alpinum Hustedt	Ogh−unk	unk	ind	RA	−	−	1
Neidium productum(W.Smith)Cleve	Ogh−ind	ind	ind	O, U	−	−	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh−ind	al−il	ind	RB, U	−	−	3
Nitzschia sigmoidea(Ehr.)W.Smith	Ogh−ind	al−bi	ind	O, U	−	−	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh−ind	ind	ind	RA	−	−	1
Pinnularia microstauron(Ehr.)Cleve	Ogh−ind	ac−il	ind	S	−	−	3
Pinnularia obscura Krasske	Ogh−ind	ind	ind	RA	−	−	3
Pinnularia similis Hustedt	Ogh−ind	ind	ind	O, RI	−	−	23
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh−ind	ac−il	ind	RB, S	−	−	58
Pinnularia viridis(Nitz.)Ehrenberg	Ogh−ind	ind	ind	O	−	−	1
Pinnularia spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	−	4
Sellaphora pupula(Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh−ind	ind	ind	S, U	−	−	2
Stauroneis spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	−	1
Surirella spp.	Ogh−unk	unk	unk		−	−	1
海水生種							
海水〜汽水生種							
汽水生種							
淡水〜汽水生種							
淡水生種							
珪藻化石総数					0	0	209

凡例
塩分・pH・流水に対する適応性
H.R. :塩分濃度に対する適応性
Euh　　: 海水生種
Euh − Meh : 海水生種−汽水生種
Meh　　: 汽水生種
Ogh − hil　: 貧塩好塩性種
Ogh − ind　: 貧塩不定性種
Ogh − hob　: 貧塩嫌塩性種
Ogh − unk　: 貧塩不明種

pH: 水素ｲｵﾝ濃度に対する適応性
al − bi　: 真ｱﾙｶﾘ性種
al − il　: 好ｱﾙｶﾘ性種
ind　: pH不定性種
ac − il　: 好酸性種
ac − bi　: 真酸性種
unk　: pH不明種

C.R. :流水に対する適応性
l − bi　: 真止水性種
l − ph　: 好止水性種
ind　: 流水不定性種
r − ph　: 好流水性種
r − bi　: 真流水性種
unk　: 流水不明種

産状
産出率
A : 多い, C : 普通, F : 少ない, R : 稀, VR: 極稀, VVR : 極々稀
保存状態
G : 良好, M : 普通, P : 不良, VP : 著しく不良, VVP : 極めて不良

環境指標種
A : 外洋指標種　B : 内湾指標種　C1 : 海水藻場指標種　C2 : 汽水藻場指標種　D1 : 海水砂質干潟指標種　D2 : 汽水砂質干潟指標種　E1 : 海水泥質干潟指標種
E2 : 汽水泥質干潟指標種　F : 淡水底生種群(以上は小杉, 1988)　G : 淡水浮遊生種群　H : 河口浮遊性種群　J : 上流性河川指標種　K : 中〜下流性河川指標種
L : 最下流性河川指標種群　M : 湖沼浮遊性種　N : 湖沼沼沢湿地指標種　O : 沼沢湿地付着生種　P : 高層湿原指標種群　Q : 陸域指標種群　(以上は安藤, 1990)
S : 好汚濁性種　U : 広適応性種　T : 好清水性種(以上は Asai, K. & Watanabe, T.1995)　RI : 陸生珪藻(RA : A群, RB : B群, 伊藤・堀内, 1991)

分析が行われた3試料のうちNo.1およびNo.2からは珪藻化石が検出されないが，No.3試料にはある程度の量の珪藻化石が含まれており，200個体以上が検出された。

No.3から検出された珪藻殻の保存状態は，殻表面には溶解の痕跡が認められるため，状態としては不良から極不良である。

検出された分類群は淡水生種を主として，低率に淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。

淡水珪藻の3適応性(塩分・pH・流水に対する適応性)についてみると，貧塩不定性，酸性およびアルカリ性，流水不定性が優占する。なお，水中に生育する水生珪藻と好気的環境に生育する陸生珪藻の比率は，2対8であり，陸生珪藻が優勢である。

試料No.3に特徴的に認められた種は，淡水～汽水生種のNitzschia palea，淡水生種で陸生珪藻のAmphora montana，Hantzschia amphioxys，Navicula contenta，Pinnularia subcapitata，Pinnularia similis等である。

(4) 考察

No.1，No.2

試料からは，珪藻化石が検出されなかった。そのため，珪藻化石の生態性や群集の生育特性による，直接的な堆積環境の推定は困難である。

珪藻殻を構成する生物源シリカ鉱物は，温度増加および時間経過にしたがって，オパールA→オパールCT→石英に変化することが知られている(Mizutani, 1977;Mitsui and Taguchi, 1977;Kano, 1979;Iijima and Tada, 1981)。経験的には，堆積後に好気的環境下で大気に曝されると，短期間に分解消失することがわかっている。また，珪藻化石を構成するシリカ鉱物は，温度が高いほど，流速が早いほど，水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されているほか(千木良, 1995)，亜熱帯湿潤気候下では，堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶脱作用が起こることも知られている(松井, 1988)。

以上のことから，取り込まれた珪藻化石は，堆積後に分解が進んで消失した可能性が高い。経験的および分析試料採取地点の状況をふまえると，溝内は十分に滞水していなかったことや，地下水位が低く埋土が水で飽和されていないことによって，底部が好気的環境下にあったことが想定される。また，分析試料の採取地点が溝肩部に近い底部であることから，周囲からの流れ込みによって不安定な堆積環境下にあったことが想定される。このような堆積物は，一過性で堆積速度が大きく，化石が取り込まれにくい場合がある。本試料では，これらの要因で珪藻化石の産状が不良になったことも考えられる。

No.3

No.3に特徴的に認められる淡水～汽水生種のNitzschia paleaは，好汚濁性種(Asai & Watanabe, 1995)とされ，水中の塩類濃度が高まった後背湿地や特に人為的な影響で汚濁した水域に特徴的に認められる種である。他方，陸生珪藻のAmphora montana，Hantzschia amphioxys，Navicula contenta，Pinnularia subcapitata，Pinnularia similis等は，水中や水底以外の大気に接触した環境(例えばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面，土壌の表層部など)に生活する一群(小杉, 1986)であり，特に離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる(伊藤・堀内, 1989・1991)。

以上のような特徴種の生態性を踏まえ，他の群集を構成する種群の産状をあわせて解析した結果，本試料の堆積時は，地下水位が低く，好気的環境下にあった可能性が高い。また，溝内は，人の影

響による汚濁が進んだ状況にあったものと推定される。

なお，本試料は，溝底部の中心部に採取されている。分析結果と採取位置をふまえると，SD−10とSD−12では，ともに水深のある状況にはなかったことが推測される。両者の産状の違いは，溝内の堆積・水文環境に由来するものではなく，採取地点の位置に起因する可能性もある。この点については，埋土のより詳細な観察結果と併せて検討していく必要がある。

引用文献

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom, 10, 35−47.

千木良雅弘，1995，風化と崩壊.近未来社，204p.

Desikachiary, T.V., 1987, Atlas of Diatoms.Marine Diatoms of the Indian Ocean.Madras science foundation, Madras, Printed at TT.Maps & Publications Private Limited, 328, G.S.T.Road, Chromepet, Madras −600044.1−13, Plates:401−621.

Horst Lange − Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA:Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange − Bertalot, Dittmer Metzeltin:Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1.219, p.925.

Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz.under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937−1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen − Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ〜Ⅲ.Arch. Hydrobiol.Suppl., 15, 131−809, 1−155, 274−349.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz.under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961 − 1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz.under Beruck sichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres − gebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

Iijima, A. and Tada, R., 1981, Silica diagenesis of Neogne diatomaceous and volcaniclastic sediments In northern Japan. Sedimentology, 28, 185−200.

伊藤良永・堀内誠示，1989，古環境解析からみた陸生珪藻の検討−陸生珪藻の細分−.日本珪藻学会第10回大会講演要旨集，17.

伊藤良永・堀内誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌，6，23−44.

Kano, K., 1979, Depisition and diagenesis of siliceous sediments of the Onnagawa Formation. Sci. Rep., Tohoku Univ., 14, 135−189.

小杉正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究，27，(1)，1−20

Kramm er, K.and H.Lange − Bertalot, 1985, Naviculaceae.Bibliothyca Diatomologica, vol.9, p.250.

Kramm er, K.and H.Lange − Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1):876p.

Kramm er, K.and H.Lange − Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(2):596p.

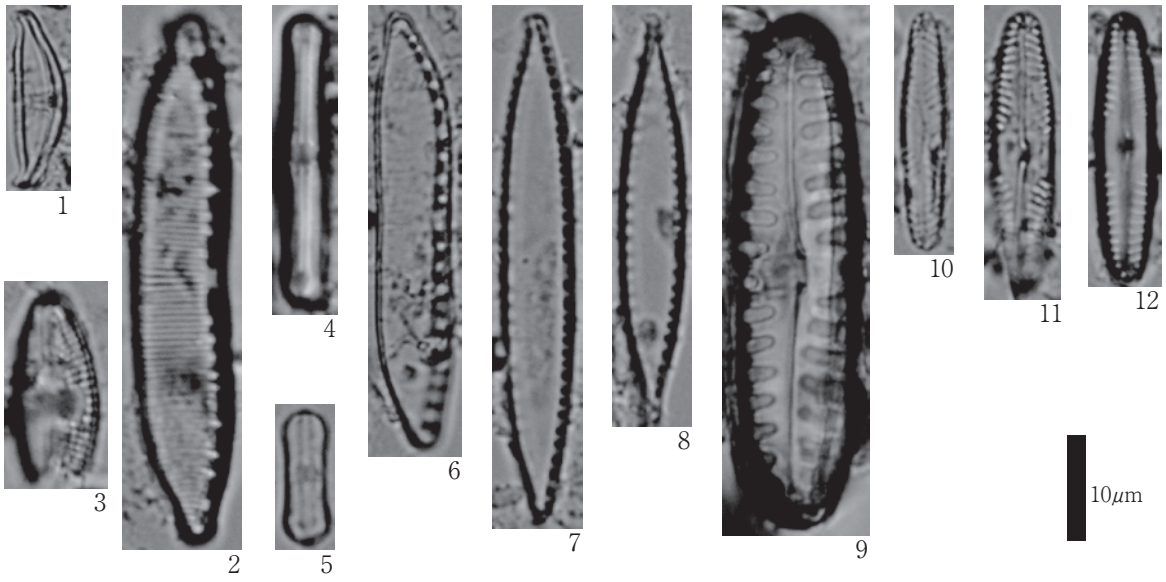
Kramm er, K.and H.Lange − Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(3):576p.

Kramm er, K.and H.Lange − Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(4):437p.

松井　健，1988，土壌地理学序説，築地書館株式会社，316p.

Mizutani, S., 1977, Progressiv ordering of cristobalitic silica in early stage of diagenesis. Contri. Miner. Petrol., 61, 129−140.

Mitsui, K and Taguchi, K., 1977, Silica minerals diagenesis in Neogene Tertiary shales in the Tempoku district, Hokkaido, Japan. Jour. Sedim. Petrol., 47, 158−167.



1 . *Amphora montana* Krasske（No.3　I区SD−12 最下層）
2 . *Hantzschia amphioxys*（Ehr.）Grunow（No.3　I区SD−12 最下層）
3 . *Luticola mutica*（Kuetz.）D.G.Mann（No.3　I区SD−12 最下層）
4 . *Navicula contenta* Grunow（No.3　I区SD−12 最下層）
5 . *Navicula contenta* Grunow（No.3　I区SD−12 最下層）
6 . *Nitzschia brevissima* Grunow（No.3　I区SD−12 最下層）
7 . *Nitzschia palea*（Kuetz.）W.Smith（No.3　I区SD−12 最下層）
8 . *Nitzschia palea*（Kuetz.）W.Smith（No.3　I区SD−12 最下層）
9 . *Pinnularia borealis* Ehrenberg（No.3　I区SD−12 最下層）
10. *Pinnularia similis* Hustedt（No.3　I区SD−12 最下層）
11. *Pinnularia subcapitata* Gregory（No.3　I区SD−12 最下層）
12. *Pinnularia subcapitata* Gregory（No.3　I区SD−12 最下層）

図版1　珪藻化石

2. 大型植物遺体同定

パリノ・サーヴェイ株式会社
松元美由紀・田中義文

はじめに

高知城は高知県高知市に所在する城跡である。本分析調査では，平成29年度の発掘調査で検出された江戸時代の廃棄土坑や井戸跡より出土した植物遺体，古代～中世の包含層より出土した種実，中世の溝跡より出土した人骨の同定を実施し，当時の植生や植物利用，人骨の詳細，遺構の性格等に関する資料を作成する。

(1) 試料

試料は，江戸時代の廃棄土坑SK－55(No.1)，SK－45(No.2)，SK－59(No.3)，井戸跡SE－2(No.4)，古代～中世(9～12世紀)の第Ⅲ層(No.6)より出土した種実や葉などの大型植物遺体計5点である。

No.1は，SK－55埋土より出土した種実遺体60個で，表面に泥が付いた未水洗の状態である。No.2～4は，SK－45，SK－59，SE－2埋土より出土した葉遺体や木材で，No.2とNo.3は層状堆積物の状態である。発掘調査所見によれば，SK－45，SK－59埋土は土と葉の互層になっており，粗朶の可能性が考えられている。No.6は，高知城跡のある丘陵裾部に位置する調査区の包含層(第Ⅲ層)より出土した種実遺体172個で，水洗済，乾燥した状態である。

分析は，No.1とNo.6を対象に種実同定，No.2～4・6を対象に葉同定を実施する。ただし，No.2は木材片主体，No.4は少量の種実とシダ植物主体で同定が可能な葉遺体が確認されないため，高知県埋蔵文化財センターとの協議の上，No.2より木材3個，No.3より木材1個の樹種同定と，No.4よりシダ植物と考えられる茎2個の横断面切片作製観察を合わせて実施し，植物遺体の情報収集に努めることとした。

(2) 分析方法

① 水洗抽出

No.2～4試料を写真記録後水に浸し，ピンセットや面相筆を用いて，同定が可能な葉遺体(主に完形や基部・頂部が残存するもの)を層理に沿って分離・抽出し，エスカルフィルム(三菱ガス化学株式会社製)に挟む。葉遺体を双眼実体顕微鏡下で確認し，表面に付着した泥を面相筆と水で可能な限り除去する。

葉遺体抽出後のNo.2～4残試料とNo.1試料を粒径0.5㎜の篩を通して水洗選別する。水洗後の残渣を粒径別にシャーレに集め，粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し，同定が可能な種実遺体をピンセットで抽出する。

② 同定

種実遺体の同定は，現生標本や石川(1994)，角野(1994)，谷城(2007)，中山ほか(2010)，鈴木ほか(2012)，勝山(2015)等を参考に実施する。また，No.6の欠損がない状態良好なモモ核100個を対象として，大きさをデジタルノギスで計測する。

葉遺体の同定は，現生標本や吉山・石川(1992)，馬場(1999)，濱野(2005)，濱野・石井(2007)，田中(2008)，林(2017)等を参考に実施する。また，保存状態が良好な20個程度を対象として，葉身の長さと幅，葉柄の長さをデジタルノギスで計測する。

表2－1　大型植物遺体同定結果

No.	出土地点	時期	番号	分類群	部位	状態／木取り	個数／容量		図版番号	備考
1	SK－55	江戸時代	－	ミクリ属(ミクリ近似種)	果実	完形	44	(個)	5－10・11	長さ7.8㎜，径8.3㎜
1	SK－55	江戸時代	－	ミクリ属(ミクリ近似種)	果実	破片	16	(個)	－	
1	SK－55	江戸時代	－	植物片主体		4－2㎜	0.5	(cc)	－	
1	SK－55	江戸時代	－	植物片主体		2－0.5㎜	0.1	(cc)	－	
1	SK－55	江戸時代	－	砂礫主体		1－0.5㎜	<0.1	(cc)	－	
2	SK－45	江戸時代	－	ミドリハコベ近似種	種子	完形	1	(個)	2－5	
2	SK－45	江戸時代	1	アスナロ	木材	板状，板目，節部分	1	(個)	2－2	樹種同定実施
2	SK－45	江戸時代	2	コウヤマキ	木材	板状，板目	1	(個)	2－2・3	樹種同定実施
2	SK－45	江戸時代	3	アスナロ	木材	板状，板目	1	(個)	2－2・4	樹種同定実施
2	SK－45	江戸時代	－	木材片主体		>8㎜	450	(cc)	－	
2	SK－45	江戸時代	－	木材片主体		8－4㎜	200	(cc)	－	
2	SK－45	江戸時代	－	植物片主体		4－2㎜	200	(cc)	－	
2	SK－45	江戸時代	－	植物片主体		2－1㎜	200	(cc)	－	
2	SK－45	江戸時代	－	植物片主体		1－0.5㎜	90	(cc)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	アラカシ	葉	破片	1	(個)	3－2・3－39	分析時破損
3	SK－59	江戸時代	－	ノイバラ節	偽果・果柄	完形	2	(個)	3－3	
3	SK－59	江戸時代	－	ノイバラ節	偽果	完形	5	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	ノイバラ節	果実	完形	3	(個)	3－4	
3	SK－59	江戸時代	－	ツツジ科(ホツツジ近似種)	果実	完形	7	(個)	3－5	朔果，3室
3	SK－59	江戸時代	－	ツツジ科(ホツツジ近似種)	果実	破片	32	(個)	3－6	内部に種子入る
3	SK－59	江戸時代	－	ツツジ科(ホツツジ近似種)	種子	完形	1	(個)	3－7	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属(シャシャンボ近似種)	葉	完形	28	(個)	3－8～17	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属(シャシャンボ近似種)	葉	葉柄欠損	9	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属(シャシャンボ近似種)	葉	頂部残存	32	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属(シャシャンボ近似種)	葉	基部残存	74	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属(シャシャンボ近似種)	葉	両端欠損	7	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属(シャシャンボ近似種)	葉・枝	完形	4	(個)	3－18	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属(シャシャンボ近似種)	葉・枝	基部残存	12	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	スノキ属	木材	丸木状	1	(個)	3－1・19	樹種同定実施
3	SK－59	江戸時代	－	ツユクサ	種子	完形	2	(個)	4－20	
3	SK－59	江戸時代	－	イネ	穎	破片	2	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	エノコログサ属	果実	完形	9	(個)	4－21	
3	SK－59	江戸時代	－	メヒシバ類	果実	完形	47	(個)	4－24・25	一部果序
3	SK－59	江戸時代	－	イネ科A	果実	完形	7	(個)	4－22	一部果序?
3	SK－59	江戸時代	－	イネ科B	果実	完形	6	(個)	4－23	
3	SK－59	江戸時代	－	スゲ属	果胞・果実	完形	17	(個)	4－26	2面体，ナキリスゲ類近似
3	SK－59	江戸時代	－	カナムグラ	果実	完形	1	(個)	4－27	
3	SK－59	江戸時代	－	カナムグラ	核	完形	1	(個)	4－28	
3	SK－59	江戸時代	－	ナデシコ科(ウシハコベ近似種)	種子	完形	4	(個)	4－29	
3	SK－59	江戸時代	－	イノコズチ属	果実	完形	2	(個)	4－30	
3	SK－59	江戸時代	－	ヌスビトハギ属	果実	完形	4	(個)	4－31	
3	SK－59	江戸時代	－	ツルマメ	果実	完形	5	(個)	4－32	表面毛密生
3	SK－59	江戸時代	－	ツルマメ	果実	破片	4	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	カタバミ属	種子	完形	1	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	エノキグサ	種子	完形	3	(個)	4－33	
3	SK－59	江戸時代	－	トウバナ属	果実	完形	54	(個)	4－34	
3	SK－59	江戸時代	－	センダングサ	果実	完形	1	(個)	4－35	
3	SK－59	江戸時代	－	メナモミ属	果実	完形	3	(個)	4－36	
3	SK－59	江戸時代	－	メナモミ属	果実	破片	2	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	キク科(ヒヨドリバナ属?)	果実	完形	>50	(個)	4－37～39	アラカシ葉に多量密着，果序
3	SK－59	江戸時代	－	キク科(ヒヨドリバナ属?)	果実	破片	34	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	キク科(ヒヨドリバナ属?)	冠毛	完形	69	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	木材		丸木状主体	>50	(個)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	枝			>30	(個)	－	ノイバラ節等含む
3	SK－59	江戸時代	－	木材片主体		>8㎜	20	(cc)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	木材片主体		8－4㎜	50	(cc)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	植物片主体		4－2㎜	70	(cc)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	植物片主体		2－1㎜	200	(cc)	－	
3	SK－59	江戸時代	－	植物片主体		1－0.5㎜	100	(cc)	－	
4	SE－2	江戸時代	－	イネ	穎(基部)	破片	1	(個)	5－2	
4	SE－2	江戸時代	－	イネ	穎	破片	12	(個)	5－3	
4	SE－2	江戸時代	－	ナデシコ科(ウシハコベ近似種)	種子	完形	1	(個)	－	
4	SE－2	江戸時代	－	カタバミ属	種子	完形	1	(個)	5－4	
4	SE－2	江戸時代	－	カタバミ属	種子	破片	1	(個)	－	

表2－2　大型植物遺体同定結果

No.	出土地点	時期	番号	分類群	部位	状態／木取り	個数／容量		図版番号	備考
4	SE－2	江戸時代	－	トウバナ属	果実	完形	2	(個)	－	
4	SE－2	江戸時代	－	キク科	果実	完形	1	(個)	5－5	
4	SE－2	江戸時代	－	シダ植物	葉・柄	破片	5	(個)	5－6・7	
4	SE－2	江戸時代	1	シダ植物	柄	丸木状，芯持丸木	1	(個)	5－8	樹種同定実施
4	SE－2	江戸時代	2	シダ植物	柄	丸木状，芯持丸木	1	(個)	5－8・9	樹種同定実施
4	SE－2	江戸時代	－	シダ植物主体		丸木状	24	(個)	－	
4	SE－2	江戸時代	－	植物片主体		4－2㎜	1.5	(cc)	－	
4	SE－2	江戸時代	－	植物片主体		2－1㎜	0.1	(cc)	－	
4	SE－2	江戸時代	－	砂礫主体		2－0.5㎜	1.3	(cc)	－	
6	第Ⅲ層	9～12世紀	－	モモ	核	完形	121	(個)	5－13・14	100個計測
6	第Ⅲ層	9～12世紀	－	モモ	核	完形未満(頂部欠損)	23	(個)	5－12	
6	第Ⅲ層	9～12世紀	－	モモ	核	完形未満(他欠損)	21	(個)	－	
6	第Ⅲ層	9～12世紀	－	モモ	核	完形未満(食痕)	4	(個)	5－15	
6	第Ⅲ層	9～12世紀	－	モモ	核	半分	2	(個)	5－16	
6	第Ⅲ層	9～12世紀	－	モモ	核	破片	1	(個)	－	

木材の樹種同定は，木取りを観察した上で，剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液)で封入し，プレパラートとする。プレパラートを生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して分類群を同定する。なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東(1982)，Wheeler他(1998)，Richter他(2006)を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林(1991)や伊東(1995・1996・1997・1998・1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

同定結果は，部位・状態別の個数を一覧表で示し，各分類群の写真を添付して同定根拠とする。分析後は，各分類群を容器に入れて返却する。水浸試料には約70%エタノール溶液で液浸する。分析残渣は植物片主体，砂礫主体等大まかに分類し，容量を記録後，容器に入れて返却する。

(3) 結果

① 大型植物遺体出土状況

同定結果を表2に示す。分析に供された5試料を通じて，裸子植物2分類群(針葉樹のコウヤマキ・アスナロ)3個，被子植物27分類群(広葉樹のアラカシ，モモ，ノイバラ節，ツツジ科(ホツツジ近似種)，スノキ属(シャシャンボ近似種)，スノキ属，ツユクサ，イネ，エノコログサ属，メヒシバ類，イネ科A，イネ科B，ミクリ属(ミクリ近似種)，スゲ属，カナムグラ，ミドリハコベ近似種，ナデシコ科(ウシハコベ近似種)，イノコズチ属，ヌスビトハギ属，ツルマメ，カタバミ属，エノキグサ，トウバナ属，センダングサ，メナモミ属，キク科(ヒヨドリバナ属?)，キク科)748個，計751個の種実や葉，木材が同定された。その他，シダ植物が7個確認された。

栽培種は，モモの核が第Ⅲ層より172個，イネの穎がSK－59より2個，SE－2より13個確認された。以下，試料別出土状況を述べる。

SK－55(No.1)　図版5－10・11

種実遺体は，60個全てが抽水性多年草のミクリ属(ミクリ近似種)の果実に同定された。

SK－45(No.2)　図版2

試料(約13㎝×9㎝，湿重479g)は，木材片(約650cc)や植物片(約490cc)を主体とする。木材片3個(長さ6～7㎝，径1～1.5㎝)は，常緑針葉樹のコウヤマキとアスナロに同定された。板目状を呈し，うち

表3　第Ⅲ層出土モモ核の計測値

番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	長さ×幅	長さ/幅	長さ/厚さ	頂部の状態	図版番号	番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	長さ×幅	長さ/幅	長さ/厚さ	頂部の状態
1	26.90	21.05	17.32	566.25	1.28	1.55	鋭く尖る	−	53	22.11	17.56	15.04	388.25	1.26	1.47	鋭く尖る
2	22.57	16.60	13.62	374.66	1.36	1.66	鋭く尖る	−	54	22.45	17.61	14.83	395.34	1.27	1.51	鋭く尖る
3	25.79	18.78	15.14	484.34	1.37	1.70	鋭く尖る	−	55	24.11	17.29	14.97	416.86	1.39	1.61	尖る
4	25.86	19.17	15.12	495.74	1.35	1.71	鋭く尖る	−	56	23.72	19.14	14.70	454.00	1.24	1.61	鋭く尖る
5	28.40	19.93	13.73	566.01	1.42	2.07	尖る	−	57	24.18	17.36	14.15	419.76	1.39	1.71	鋭く尖る
6	25.97	18.68	14.40	485.12	1.39	1.80	鋭く尖る	−	58	23.12	17.21	13.32	397.90	1.34	1.74	鋭く尖る
7	25.82	18.16	14.03	468.89	1.42	1.84	鋭く尖る	−	59	25.26	18.66	14.41	471.35	1.35	1.75	鋭く尖る
8	25.78	18.57	15.87	478.73	1.39	1.62	鋭く尖る	−	60	25.07	18.42	14.98	461.79	1.36	1.67	鋭く尖る
9	25.34	18.57	15.49	470.56	1.36	1.64	鋭く尖る	−	61	23.29	17.27	13.66	402.22	1.35	1.70	鋭く尖る
10	25.17	19.93	15.58	501.64	1.26	1.62	鋭く尖る	−	62	24.14	18.14	14.83	437.90	1.33	1.63	鋭く尖る
11	23.97	16.59	14.28	397.66	1.44	1.68	鋭く尖る	−	63	24.15	16.88	13.70	407.65	1.43	1.76	鋭く尖る
12	25.75	18.66	15.64	480.50	1.38	1.65	鋭く尖る	−	64	24.07	17.26	13.56	415.45	1.39	1.78	鋭く尖る
13	23.52	16.28	13.14	382.91	1.44	1.79	鋭く尖る	−	65	25.94	18.53	14.88	480.67	1.40	1.74	鋭く尖る
14	26.16	18.59	15.88	486.31	1.41	1.65	鋭く尖る	−	66	24.03	16.35	12.70	392.89	1.47	1.89	鋭く尖る
15	24.23	16.98	13.56	411.43	1.43	1.79	鋭く尖る	−	67	24.51	19.32	14.90	473.53	1.27	1.64	鋭く尖る
16	25.91	19.17	15.42	496.69	1.35	1.68	鋭く尖る	−	68	23.68	17.33	13.70	410.37	1.37	1.73	鋭く尖る
17	26.22	18.94	15.13	496.61	1.38	1.73	鋭く尖る	−	69	23.39	17.36	13.87	406.05	1.35	1.69	鋭く尖る
18	23.25	17.40	13.05	404.55	1.34	1.78	鋭く尖る	−	70	24.12	16.77	13.77	404.49	1.44	1.75	鋭く尖る
19	25.90	18.63	15.28	482.52	1.39	1.70	鋭く尖る	−	71	23.71	16.86	14.07	399.75	1.41	1.69	鋭く尖る
20	25.12	19.04	15.06	478.28	1.32	1.67	鋭く尖る	−	72	21.62	15.48	13.07	334.68	1.40	1.65	鋭く尖る
21	26.21	18.78	13.34	492.22	1.40	1.96	尖る	5−14	73	24.75	17.97	14.39	444.76	1.38	1.72	鋭く尖る
22	25.02	19.29	15.51	482.64	1.30	1.61	鋭く尖る	−	74	23.30	16.78	13.29	390.97	1.39	1.75	鋭く尖る
23	24.65	18.40	15.77	453.56	1.34	1.56	尖る	−	75	24.11	18.39	14.31	443.38	1.31	1.68	鋭く尖る
24	24.23	17.66	13.79	427.90	1.37	1.76	鋭く尖る	−	76	23.55	17.30	13.50	407.42	1.36	1.74	鋭く尖る
25	24.67	18.44	13.68	454.91	1.34	1.80	鋭く尖る	−	77	25.11	19.31	14.84	484.87	1.30	1.69	鋭く尖る
26	24.96	17.61	14.17	439.55	1.42	1.76	鋭く尖る	−	78	22.44	16.87	13.08	378.56	1.33	1.72	鋭く尖る
27	26.61	19.60	16.34	521.56	1.36	1.63	鋭く尖る	−	79	26.16	18.79	15.34	491.55	1.39	1.71	鋭く尖る
28	23.02	16.02	12.97	368.78	1.44	1.77	鋭く尖る	−	80	23.51	17.41	13.81	409.31	1.35	1.70	鋭く尖る
29	25.92	19.07	12.98	494.29	1.36	2.00	尖る	−	81	21.19	15.68	12.82	332.26	1.35	1.65	鋭く尖る
30	23.45	16.21	12.58	380.12	1.45	1.86	鋭く尖る	−	82	24.12	17.42	13.80	420.17	1.38	1.75	鋭く尖る
31	23.07	16.79	14.27	387.35	1.37	1.62	鋭く尖る	−	83	24.28	18.55	15.09	450.39	1.31	1.61	鋭く尖る
32	23.74	18.72	14.45	444.41	1.27	1.64	鋭く尖る	−	84	24.67	18.18	14.58	448.50	1.36	1.69	鋭く尖る
33	21.18	17.06	14.29	361.33	1.24	1.48	鋭く尖る	−	85	25.35	18.07	14.48	458.07	1.40	1.75	鋭く尖る
34	22.50	16.34	14.01	367.65	1.38	1.61	鋭く尖る	−	86	25.16	18.96	14.68	477.03	1.33	1.71	鋭く尖る
35	23.71	16.35	13.08	387.66	1.45	1.81	鋭く尖る	−	87	26.48	18.07	14.17	478.49	1.47	1.87	鋭く尖る
36	22.88	15.16	12.06	346.86	1.51	1.90	鋭く尖る	5−13	88	24.11	16.73	13.34	403.36	1.44	1.81	鋭く尖る
37	23.05	17.43	13.86	401.76	1.32	1.66	鋭く尖る	−	89	23.78	17.09	13.56	406.40	1.39	1.75	鋭く尖る
38	23.45	17.07	13.92	400.29	1.37	1.68	鋭く尖る	−	90	24.86	18.74	14.68	465.88	1.33	1.69	鋭く尖る
39	23.23	16.96	13.54	393.98	1.37	1.72	鋭く尖る	−	91	24.99	17.11	14.17	427.58	1.46	1.76	鋭く尖る
40	24.79	19.25	14.30	477.21	1.29	1.73	鋭く尖る	−	92	25.67	18.27	13.62	468.99	1.41	1.88	鋭く尖る
41	23.53	19.17	15.33	451.07	1.23	1.53	鋭く尖る	−	93	25.36	18.30	15.11	464.09	1.39	1.68	鋭く尖る
42	24.88	18.18	14.20	452.32	1.37	1.75	鋭く尖る	−	94	23.84	17.99	14.90	428.88	1.33	1.60	鋭く尖る
43	24.94	18.10	15.17	451.41	1.38	1.64	鋭く尖る	−	95	22.64	16.57	13.64	375.14	1.37	1.66	鋭く尖る
44	23.31	15.52	12.37	361.77	1.50	1.88	鋭く尖る	−	96	22.06	15.64	13.07	345.02	1.41	1.69	鋭く尖る
45	22.46	15.42	12.14	346.33	1.46	1.85	尖る	−	97	23.61	17.79	14.39	420.02	1.33	1.64	鋭く尖る
46	23.05	19.16	13.70	441.64	1.20	1.68	尖る	−	98	21.04	16.46	13.37	346.32	1.28	1.57	鋭く尖る
47	24.85	17.16	15.33	426.43	1.45	1.62	鋭く尖る	−	99	24.51	18.58	14.42	455.40	1.32	1.70	鋭く尖る
48	23.36	18.07	14.48	422.12	1.29	1.61	鋭く尖る	−	100	27.18	19.68	16.55	534.90	1.38	1.64	鋭く尖る
49	23.27	17.85	14.78	415.37	1.30	1.57	鋭く尖る	−	最小	19.85	15.16	12.06	325.34	1.20	1.46	
50	22.70	15.59	13.03	353.89	1.46	1.74	鋭く尖る	−	最大	28.40	21.05	17.32	566.25	1.51	2.07	
51	19.85	16.39	13.60	325.34	1.21	1.46	尖る	−	平均	24.22	17.77	14.23	431.66	1.37	1.71	
52	23.48	16.87	13.20	396.11	1.39	1.78	鋭く尖る	−	標準偏差	1.45	1.18	0.98	50.87	0.06	0.10	

注)計測はデジタルノギスを使用し，欠損は残存値に「+」で示す。

1個(番号1)は節部分である。その他，草本のミドリハコベ近似種の種子が1個同定された。

SK−59(No.3)　図版3・4

試料(約22cm×12cm，湿重302g)は，多量の葉(約170個)や種実(328個)，木材(50個超)，枝(30個超)，植物片(約370cc)から成り，スノキ属(シャシャンボ近似種)の葉の多産やスノキ属の木材に特徴づけられる。

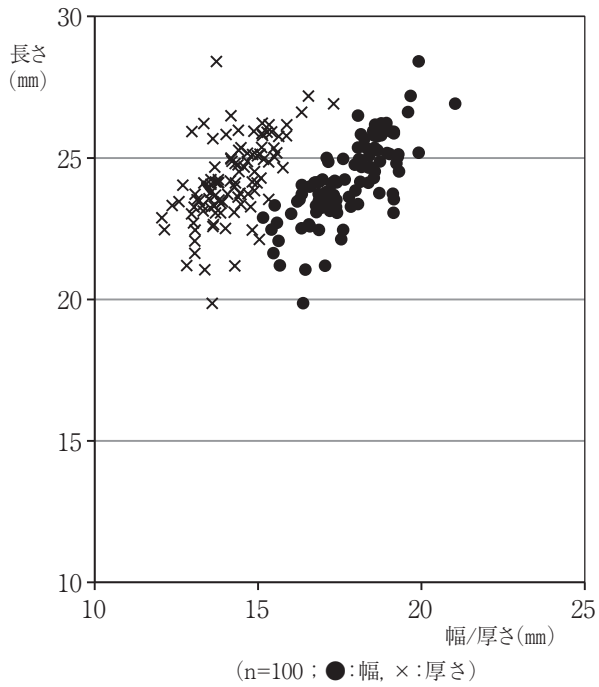


図175　第Ⅲ層モモ核の大きさ

大型植物遺体は，広葉樹で常緑高木のアラカシの葉1個，落葉低木のノイバラ節の偽果・果柄2個，偽果5個，果実3個，ツツジ科(ホツツジ近似種)の果実39個，種子1個，常緑または落葉低木のスノキ属(シャシャンボ近似種)の葉150個，葉・枝16個，スノキ属の木材1個と，栽培種のイネの穎2個，草本のツユクサの種子2個，エノコログサ属の果実9個，メヒシバ類の果実47個，イネ科Aの果実7個，イネ科Bの果実6個，スゲ属の果胞・果実17個，カナムグラの果実1個，核1個，ナデシコ科(ウシハコベ近似種)の種子4個，イノコズチ属の果実2個，ヌスビトハギ属の果実4個，ツルマメの果実9個，カタバミ属の種子1個，エノキグサの種子3個，トウバナ属の果実54個，センダングサの果実1個，メナモミ属の果実5個，キク科(ヒヨドリバナ属?)の果実34個，冠毛69個の，計496個が同定された。スノキ属(シャシャンボ近似種)の葉が最も多く，枝が付いた状態も確認された。さらに，最大の丸木状木材1個もスノキ属に同定された。

大型植物遺体の保存状態は良好で，果皮や果胞，冠毛の残存や，複数個が配列する果序の状態が確認された。アラカシの葉裏には，キク科(ヒヨドリバナ属?)の果実(果序)が多量密着する状態も確認された。

SE－2(No.4)　図版5－1～9

試料(重量29g)は，シダ植物を主体とする。葉(羽片)・柄が5個，直径3～5㎜の丸木状の柄が26個確認された。羽状複葉と考えられるが，保存状態が不良のため，詳細は不明である。

柄2個の横断面切片作製観察では，いずれも芯持丸木でよく似た組織の状況が確認され，繊維細胞を主体とし，中央部に空洞と維管束が認められる。木質化する同分類群のシダ植物と考えられるが，分類群と維管束の形状について網羅的にまとめられた報告がないため，同定に至らなかった。

その他，栽培種のイネの穎が13個，草本のナデシコ科(ウシハコベ近似種)の種子が1個，カタバミ属の種子が1個，トウバナ属の果実が2個，キク科の果実が1個同定された。

第Ⅲ層(No.6)　図版5－12～16

種実遺体は，172個全てが栽培種のモモの核に同定された。

② 主な分類群の記載

大型植物遺体各分類群の写真を図版2～5に，Ⅲ層出土モモ核の計測値を表3，図175，SK－59出土葉の計測値を表4に示して同定根拠とする。以下，主な分類群の形態的特徴(木材は解剖学的特徴)等を記す。なお，学名は佐竹ほか編(1989a，b，1981，1982a，b)に依拠した。

・コウヤマキ(Sciadopitys verticillata (Thunb.) Sieb. et Zucc.)　コウヤマキ科コウヤマキ属　図版2－3

木材の軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで，

表4　SK－59出土葉の計測値

No.	出土地点	分類群	状態	番号	葉身長(㎜)	葉身幅(㎜)	葉柄長(㎜)	側脈数	図版番号	備考
3	SK－59	スノキ属	完形	1	50.7	14.0	6.7	8	3－8	
		(シャシャンボ近似種)		2	54.1	14.3	6.8	10	3－9	
				3	34.5	9.1	5.3	10	3－10	
				4	37.9	10.1	6.1	8	3－11	
				5	29.0	8.4	3.9	7	3－12	
				6	31.4	10.4	4.0	8	3－13	
				7	44.3	12.4	6.5	8	3－14	
				8	41.2	13.3	4.2	8	3－15	
				9	37.5	10.4	2.2	10	3－16	
				10	22.7	7.3	2.3	8	3－17	
				11	46.2	18.9	4.4	15	－	
				12	38.5	16.1	4.1	10	－	
				13	30.9＋	9.4	4.8	9	－	曲がっている
				14	26.9	15.0	2.2	5	－	頂部丸い
				15	22.1	15.6	3.0	5	－	
				16	28.8	13.7	7.2	7	－	頂部丸く窪む
				17	24.4	14.6	3.2	5	－	頂部丸く窪む
				18	22.1	14.1	3.3	4	－	頂部丸い
				19	15.1	8.1	2.5	4	－	頂部丸い
				20	7.3	5.1	0.9	4	－	頂部丸い
			両端欠損	1	57.6＋	22.4	－	13＋	－	
				2	38.4＋	23.4	－	8＋	－	
				3	37.5＋	22.5	－	－－7＋	－	

注)計測はデジタルノギスを使用した。

晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となり，通常1分野に1個。放射組織は単列，1～5細胞高。

・アスナロ(Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.)　ヒノキ科アスナロ属　図版2−4

木材の軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で，1分野に1～4個。放射組織は単列，1～10細胞高。

・アラカシ(Quercus glauca Thunberg)　ブナ科コナラ属アカガシ亜属　図版3−2，4−39

葉はやや薄い革質，灰褐色，完形ならば倒卵状長楕円形または長楕円形で先端は鋭尖形，基部は広い楔形で葉柄がある。葉幅は半分付近で最大。葉縁は，上部1/3～1/2の側脈が葉縁に到達する部分にやや粗く鋭く低い鋸歯があり，下部は全縁。側脈は直線的で主脈に対して鋭角に平行配列し，葉縁に到達する。3次脈も直線的で，側脈からほぼ垂直方向に平行に配列し，上下の側脈に到達し，連結する。4次脈は3次脈から，5次脈は4次脈からほぼ垂直方向に配列し，四角形の微細な網目模様を形成する。

出土葉は破片で残存長4cm，残存幅2.5cm，側脈残存数5個で両端を欠損する。鋸歯縁と側脈の形状を同定根拠とした。葉表面にはキク科(ヒヨドリバナ属?)の果実が多量密着する(図版4−39)。

・モモ(Prunus persica Batsch)　バラ科サクラ属　図版5−12～16

核(内果皮)は灰褐色，やや偏平な広楕円体。頂部は鋭く尖り，背面側に湾曲する個体が多い。内果皮表面には縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり，粗いしわ状にみえる。欠損がない完形核100個の計測値は，長さが19.85～28.40(平均24.22±標準偏差1.45)㎜，幅が15.16～21.05(平均17.77±1.18)㎜，厚さが12.06～17.32(平均14.23±0.98)㎜である(表3，図175)。うち92個の頂部は鋭く尖り，背面側に湾曲する(図版5−13)。縫合線に沿って半分に割れた内面には，種子1個が入る広卵状の窪みがある(図版5−16)。その他，4個に円形の孔があり，ネズミ類による食痕と考えられる(図版5−15)。

・ノイバラ節(Rosa Sect. Synstylae)　バラ科バラ属　図版3−3・4

偽果(バラ状果)は灰褐色，径5㎜程度の球体。液果で5室内に果実(痩果)が入る。果柄表面には小刺(腺毛)がある。果実(痩果)は灰褐色，長さ3～3.5㎜，径1.5～2.0㎜の三稜状倒卵体，側面観は半広卵形。腹面は鈍稜があり，稜上に浅い1個の縦溝がある。果皮は骨質で粗面。

・ツツジ科(Ericaceae)　図版3−5～7

果実は灰褐色，径2～3㎜程度の球体。蒴果で3室内に多量の種子が入る(図版3−6b)。種子は灰褐色，長さ0.8㎜，幅0.4㎜程度の偏平で一部な楕円形，縁には膜状の翼がある。表面には縦長の網目模様が配列する。ホツツジ属ホツツジ(Elliottia paniculata (Sieb. et Zucc.) Benth. et Hook.)の果実に似る。なお，スノキ属の果実は液果，5室の点で区別される。

・スノキ属(Vaccinium)　ツツジ科　図版3−8～19

木材は散孔材で，道管は単独もしくは2個複合型。道管は階段穿孔を有し，らせん肥厚がみられる。放射組織は異性，単列もしくは4～5列で8細胞高前後のものと5−7細胞幅，30−60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。シャシャンボ(V. bracteatum Thunb.)に似る。

多量確認された葉は，単葉で互生する。葉身は革質部分の大半が欠損しており，薄く透き通った脆弱な状態である。表面・裏面ともに灰褐色，長さ0.8～5.8㎝，幅は半分付近で最大，0.5～2.3㎝の狭卵形または楕円形。頂部は先端が尖り，一部は丸い。基部は楔形で葉柄0.9～6.8㎜程度。葉縁は浅く不規則な微細鋸歯があり，腺状突起となる。側脈は不明瞭で4～15本，主脈に対して鋭角に平行配列し，葉縁に到達せず，上下の側脈とループ状に連結する(表4)。

スノキ属の葉は，同定が難しく，花や果実の確認が重要である。出土葉は，常緑低木のシャシャンボに似るが，裏面主脈上に数個ある小突起が確認されなかったため，スノキ属(シャシャンボ近似種)としている。

・イネ(Oryza sativa L.)　イネ科イネ属　図版5−2・3

穎は淡～灰褐色，完形ならば長さ6.0～7.5㎜，幅3.0～4.0㎜，厚さ2.0㎜程度のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し，その上に外穎と内穎がある。外穎は5脈，内穎は3脈をもち，ともに舟形を呈し，縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。穎は柔らかく，表面には顆粒状突起が縦列する。出土穎は残存長2㎜程度。

・ミクリ属(Sparganium)　ミクリ科　図版5−10・11

果実は灰褐色，長さ7～8㎜，径8～9㎜の倒三角状卵体で頂部はドーム状。果皮は硬く粗面で側面に数本の隆条が縦列する。果実が大型であることから，ミクリ(S. erectum L.)に最も似る。

・ツルマメ(Glycine max subsp. soja (Sieb. et Zucc.)　マメ科ダイズ属　図版4−32

果実(豆果)は灰褐色，長さ3㎝，幅0.8㎝程度の偏平な非対称楕円形で両端が尖る。果皮表面には淡褐色の毛が密生する。

・キク科(Compositae)　図版4−37～39

果実は淡灰褐色～灰黒褐色，長さ2.8～3.2㎜，幅0.8㎜，厚さ0.6㎜程度の狭倒皮針状5稜柱体で腹面方向へわずかに湾曲する。頂部は切形で淡褐色，長さ3㎜程度の冠毛がのび，冠毛には短い刺が散生する。果皮表面は粗面で縦隆条と微細な突起模様がある。ヒヨドリバナ属(Eupatorium)に最も似る。

(4) 考察

① 江戸時代の植物利用・周辺植生

江戸時代の廃棄土坑とされるSK－45，SK－55，SK－59，井戸跡とされるSE－2からは，それぞれ特徴が異なる大型植物遺体群が確認された。以下，遺構別に述べる。

SK－55

SK－55埋土より出土した種実遺体は，全てミクリ属の果実に同定された。果実が大型であることから，ミクリと考えられる。ミクリ属は，浅い水中に生育する抽水性多年草である。当時の遺構周辺の浅い水湿地に生育していたと考えられる。なお，ミクリ属は，果実は食用に適さないが，根茎が漢方で三稜と称され，鎮痙薬として利用可能である(堀田編，1989)。

SK－45

SK－45埋土より出土した植物遺体は，木材片を主体とし，種実遺体はミドリハコベ近似種が1個確認されるのみであった。草本のミドリハコベ近似種は，周辺の草地に生育していたと考えられる。木材片は，板目状を呈したものが多く，何らかの加工材の一部と考えられる。節部分も含まれるが，木製品にはあまり利用されないため，加工の際に節部分を外した木っ端(残材)の可能性もある。

これらの木材片には，針葉樹のコウヤマキとアスナロの2種が認められた。いずれも木理が通直で割裂性と耐水性が高い材質を有する有用材であり，本遺跡でも利用されたことが推定される。

高知県内の近世の遺跡において，コウヤマキやアスナロが確認された例をみると，八田神母谷遺跡の戦国以降とされる鍬にコウヤマキ，高知城伝下屋敷跡の江戸時代後半～近代初頭とされる曲物，漆塗下駄，漆器膳や居徳遺跡群の戦国～江戸時代後半とされる板状木製品にアスナロ属が確認されている(伊東・山田，2012)。

SK－59

SK－59埋土より出土した植物遺体は，スノキ属(シャシャンボ近似種)の多量の葉遺体や木材に特徴づけられる他，常緑高木のアラカシの葉や落葉低木のノイバラ節，ツツジ科(ホツツジ近似種)，栽培種のイネ，草本で中生植物のツユクサ，エノコログサ属，メヒシバ類，イネ科，スゲ属，カナムグラ，ナデシコ科(ウシハコベ近似種)，イノコズチ属，ヌスビトハギ属，ツルマメ，カタバミ属，エノキグサ，メナモミ属，キク科(ヒヨドリバナ属?)，湿生植物のトウバナ属，センダングサの種実が確認された。

これらの植物遺体が積層する状況をふまえると，廃棄土坑の埋没過程において，かなり限られた期間に供給されたものが挟在している可能性が高い。発掘調査所見では粗朶の可能性が指摘されていたが，粗朶は葉を落として利用する場合が多い。今回の葉や種実を多く含む出土状況をふまえると，投棄等別の用途の可能性が挙げられる。

最も多く確認されたスノキ属は，沿海地のやせた尾根や乾いた林内や林縁，湿った谷筋などに生育する常緑低木のシャシャンボに最も似る。スノキ属(シャシャンボ近似種)は，近辺に生育していたと考えられ，木材や枝葉ごと遺構内に投棄された可能性がある。

その他，穀類のイネの利用が示唆される。アラカシは，本地域に分布する暖温帯性常緑広葉樹林(照葉樹林)の主要構成種で，周辺に生育していたと考えられる。ノイバラ節，ツツジ科(ホツツジ近似種)は，林縁などに生育していたと考えられる。草本類は，人里植物に属し，やや乾いた場所に生育する分類群を主体とする。周辺の明るく開けた，やや乾いた草地に生育していたと考えられ，トウバ

ナ属，センダングサなどが生育可能な湿った場所の存在も推測される。

これらの種実遺体各分類群の結実期は，概ね秋である。いずれも保存状態が良好で，果実や果胞，冠毛の残存や果序の状態も確認されたことから，結実期である秋に短期間に埋積し，埋積後の嫌気的環境の継続などの要因が想定される。

SE－2

SE－2埋土より出土した植物遺体は，シダ植物を主体とする。自然埋積の可能性と人為的に投棄された可能性がある。シダ植物は羽状複葉で，丸木状の特徴をもつ類似した柄が多いことから，木質化する同分類群と考えられるが，同定に至らなかった。今後，周辺のシダ植生と，各分類群の組織の比較・検討により，明らかにできる可能性がある。

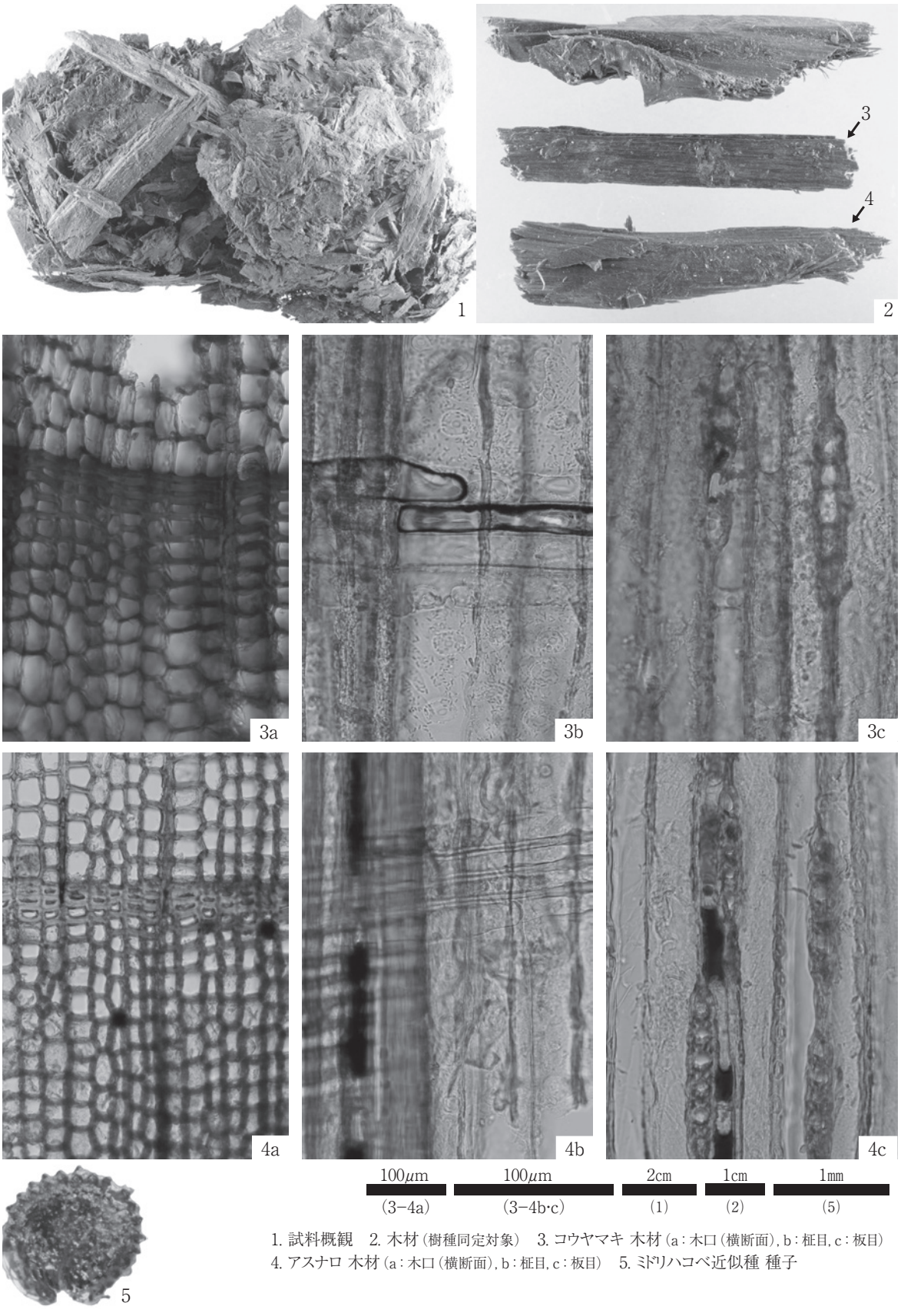
その他，栽培種のイネの穎が確認され，利用が示唆される。草本のナデシコ科(ウシハコベ近似種)，カタバミ属，トウバナ属，キク科の種実も確認され，周辺の草地に生育していたと考えられる。トウバナ属を含むことから，やや湿った場所の存在も推測される。

② 古代～中世(9～12世紀)の植物利用

第Ⅲ層

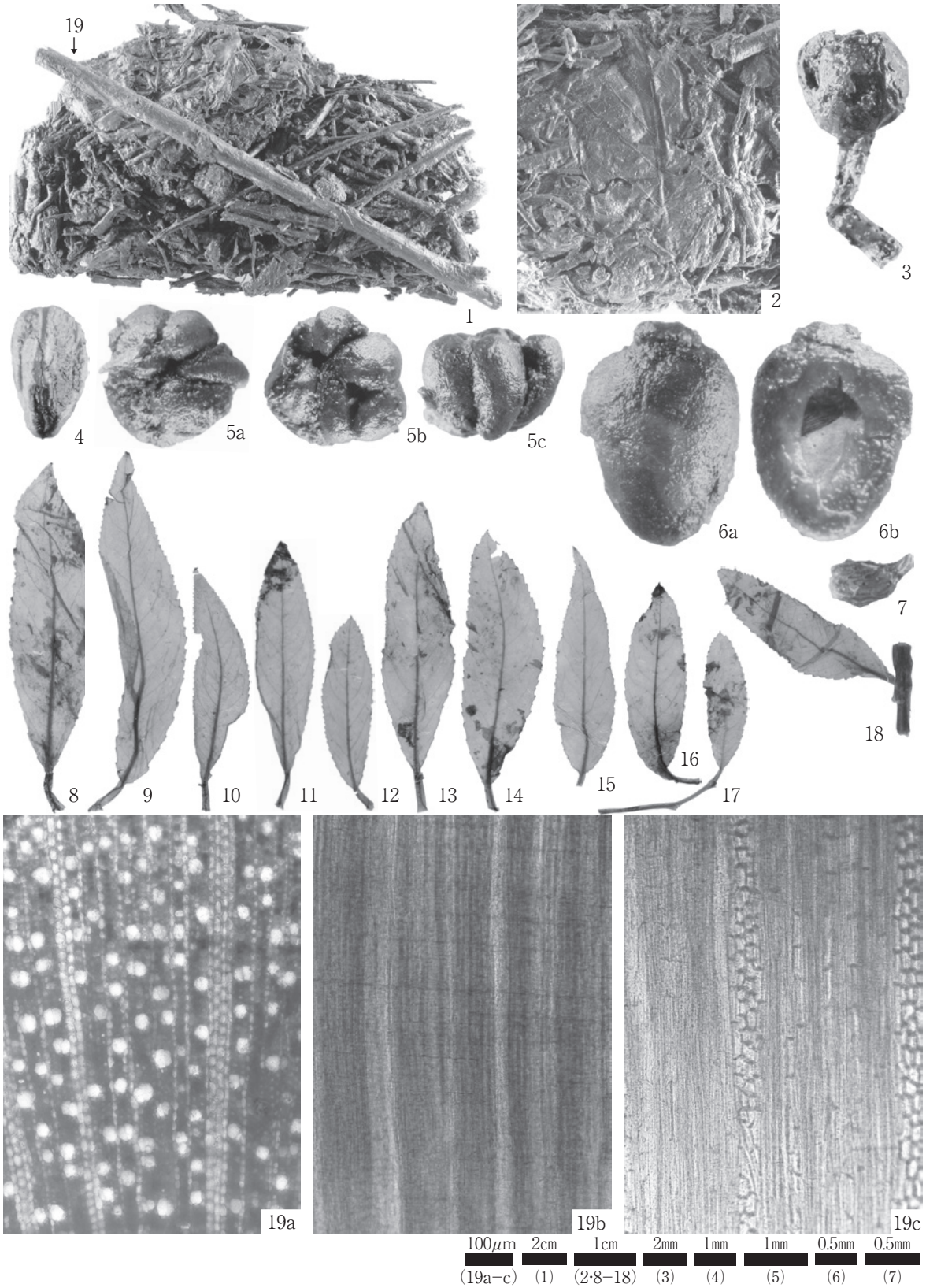
包含層(第Ⅲ層)より多量出土した種実遺体は，全てモモの核に同定された。モモは，栽培のために持ち込まれた渡来種とされ，観賞用の他，果実や種子が食用，薬用，祭祀等に広く利用される。多量の出土核は，近辺で栽培されたか，持ち込まれたかは不明であるが，当時利用された植物質食料と示唆され，食料残滓に由来する可能性がある。

今回のモモ核群は，大きさのばらつきが小さく，まとまりがあり，形状が類似する特徴が確認されたことから，同系統に由来するものを含む可能性がある。このことは，複数の品種が存在したとしても，形態的に大きな隔たりをもつ特異な集団を含まないことを示唆している。



1. 試料概観　2. 木材（樹種同定対象）　3. コウヤマキ 木材（a：木口（横断面），b：柾目，c：板目）
4. アスナロ 木材（a：木口（横断面），b：柾目，c：板目）　5. ﾐﾄﾞﾘﾊｺﾍﾞ近似種 種子

図版2　SK－45出土大型植物遺体

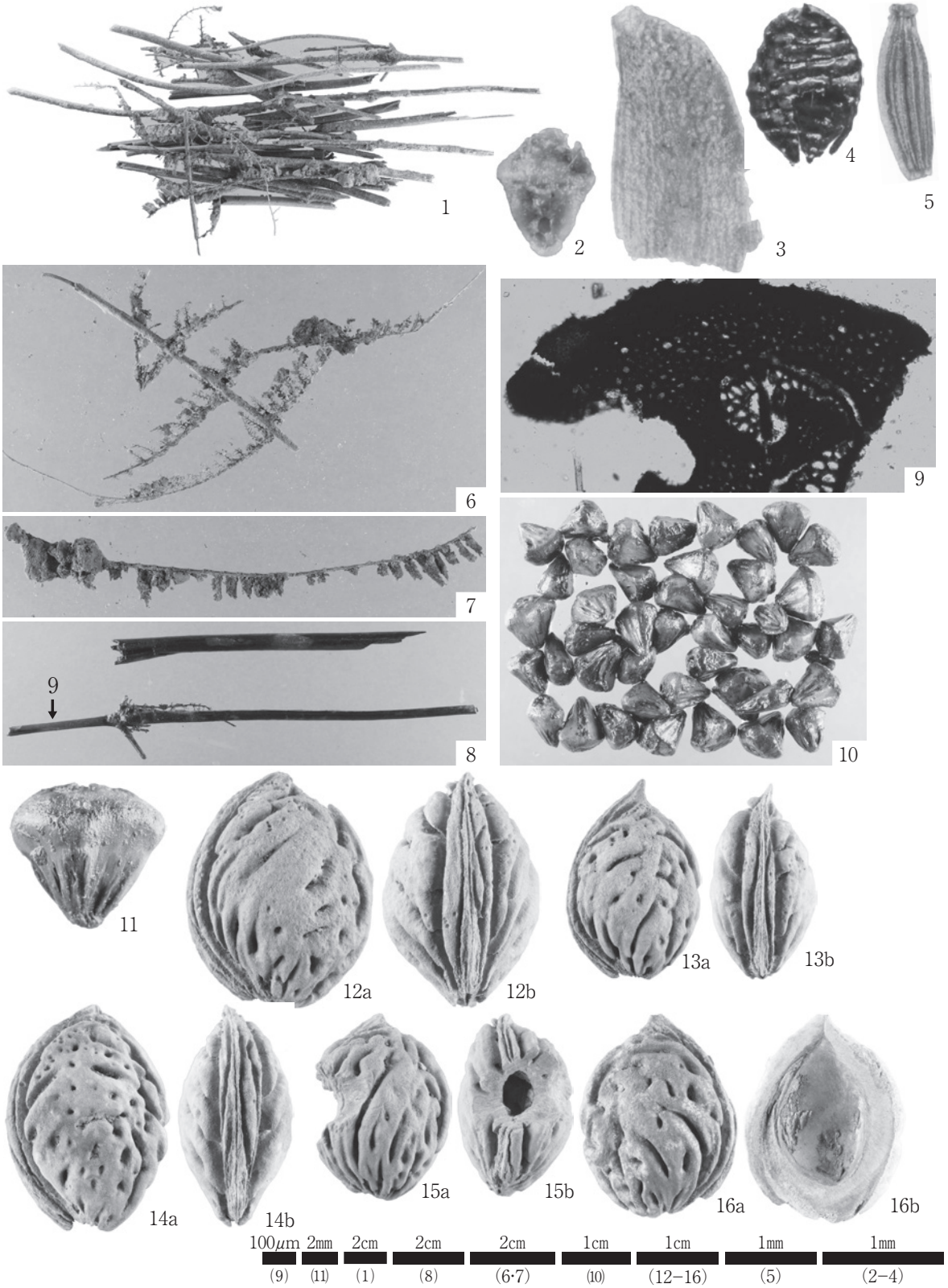


1. 試料概観　2. アラカシ 葉　3. ノイバラ節 偽果・果柄　4. ノイバラ節 果実　5. ツツジ科（ホツツジ近似種）種子　6. ツツジ科（ホツツジ近似種）種子　7. ツツジ科（ホツツジ近似種）種子　8–17. スノキ属（シャシャンボ近似種）葉　18. スノキ属（シャシャンボ近似種）葉・枝　19. スノキ属 木材（a：木口（横断面），b：柾目，c：板目）

図版3　SK－59出土大型植物遺体(1)

20. ツユクサ 種子
21. エノコログサ属 果実
22. イネ科A 果実(果序?)
23. イネ科B 果実
24. メヒシバ類 果序
25. メヒシバ類 果実
26. スゲ属 果胞・果実
27. カナムグラ 果実
28. カナムグラ 核
29. ナデシコ科(ウシハコベ近似種)種子
30. イノコズチ属 果実
31. ヌスビトハギ属 果実
32. ツルマメ 果実
33. エノキグサ 種子
34. トウバナ属 果実
35. センダングサ近似種 果実
36. メナモミ属 果実
37. キク科(ヒヨドリバナ属?)果実
38. キク科(ヒヨドリバナ属?)果実
39. キク科(ヒヨドリバナ属?)果実
(アラカシ葉裏に密集)

図版4　SK－59出土大型植物遺体(2)



1. 試料概観(SE−2)　2. イネ 穎(基部)(SE−2)　3. イネ 穎(SE−2)　4. カタバミ属 種子(SE−2)　5. キク科 果実(SE−2)　6. シダ植物 葉・柄(SE−2)　7. シダ植物 葉(羽片)(SE−2)　8. シダ植物 柄(樹種同定対象)(SE−2)　9. シダ植物 柄(SE−2)　10. ミクリ属(ミクリ近似種) 果実(SK−55)　11. ミクリ属(ミクリ近似種) 果実(SK−55)　12. モモ 核(第Ⅲ層)　13. モモ 核(第Ⅲ層)　14. モモ 核(第Ⅲ層)　15. モモ 核(食痕)(第Ⅲ層)　16. モモ 核(第Ⅲ層)

図版5　SE－2，SK－55，第Ⅲ層出土大型植物遺体

3. 骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社
金井慎司

(1) 試料

試料は，12～14世紀の溝跡(SD－8)内より，天地逆の状態で出土した人骨(203)である。既に乾燥した状態である。

(2) 分析方法

接合可能な骨は一般工作用接着剤で接合して自然乾燥させる。骨を肉眼で観察し，形態的特徴から種および部位を同定する。なお，年齢に関しては，幼児が1～5歳程度，小児が6～15歳程度，成人が16歳程度以上，成年が16～20歳程度，壮年が20～39歳程度，熟年が40～59歳程度，老年が60歳以上を表す。また，人体骨格各部位の名称を図176に示す。

(3) 結果および考察

結果を表5に示す。出土骨は，乾燥する際に収縮したとみられ，ひび割れが生じる，あるいは変形しており，また骨自身も脆く，保存状態がやや不良である。

表5　骨同定結果

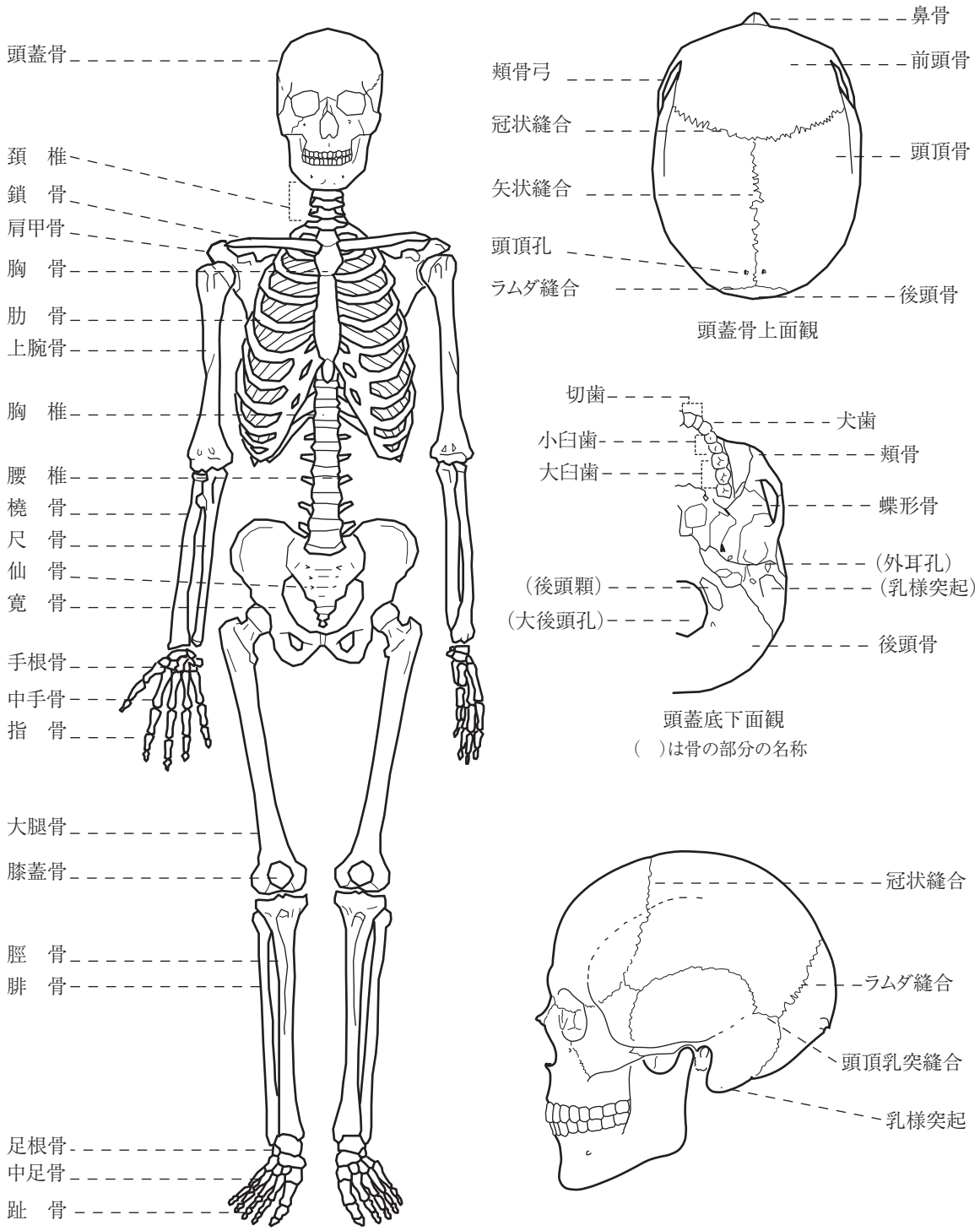
遺構	種類	部位		数	備考
SD－8	ヒト	頭蓋	前頭骨－左右頭頂骨	1	
			右側頭骨	1	
			後頭骨	1	
			頭蓋破片	多数	11.28g

検出された骨は，ヒトの前頭骨－左右頭頂骨，右側頭骨，後頭骨，および頭蓋破片(11.28g)である。眉上隆起があまり発達しておらず，また前頭骨の形状も女性的であることから，本人骨は女性の可能性がある。年齢は，冠状縫合および矢状縫合とも，外側が閉じていないが，内側が閉じかけていることから，壮年後半～熟年程度であったと考えられる。

溝内から出土した人骨は，出土部位が頭蓋の一部のみにとどまることから，他の場所から流れ込んできた可能性もあるが，詳細は不明である。

引用文献

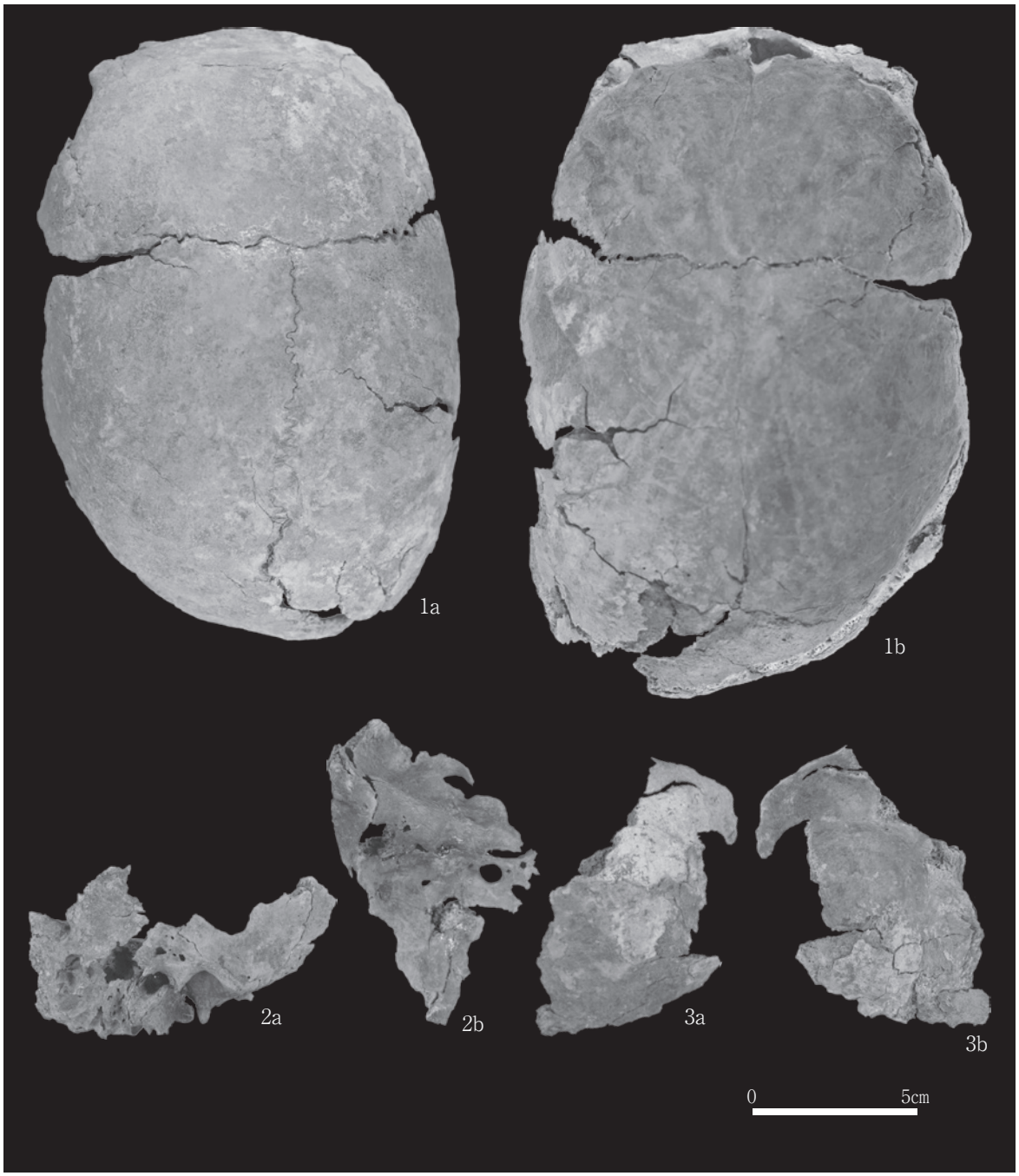
馬場多久男　1999『葉でわかる樹木』信濃毎日新聞社　396p.
濱野周泰　2005『原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木』柏書房　334p.
濱野周泰・石井英美　2007『原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木2』柏書房　290p.
林将之　2017『くらべてわかる木の葉っぱ』山と渓谷社　159p.
林昭三　1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
堀田満(代表)編　1989『世界有用植物事典』平凡社　1499p.
石川茂雄　1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会　328p.
伊東隆夫　1995『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ　木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所　81－181.
伊東隆夫　1996『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ　木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所　66－176.
伊東隆夫　1997『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ　木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所　83－201.
伊東隆夫　1998『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ　木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所　30－166.
伊東隆夫　1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ　木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所　47－216.
伊東隆夫・山田昌久(編)　2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社　449p.
角野康郎　1994『日本水草図鑑』文一総合出版　178p.
勝山輝男　2015『日本のスゲ 増補改訂(ネイチャーガイド)』文一総合出版　392p.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2010『日本植物種子図鑑(2010年改訂版)』東北大学出版会　678p.
Richter H.G.・Grosser D.・Heinz I. and Gasson P.E.(編)　2006『針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修)　海青社，70p.[Richter



手根骨：舟状骨, 月状骨, 有頭骨,有鈎骨, 三角骨, 大菱形骨, 小菱形骨, 豆状骨
足根骨：距骨, 踵骨, 舟状骨, 立方骨, 内側楔状骨, 中間楔状骨, 外側楔状骨

図176　人体骨格各部の名称

H.G.・Grosser D.・Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
佐竹義輔・原寛・亘理俊次・冨成忠夫編　1989a『日本の野生植物　木本Ⅰ』平凡社　321p.
佐竹義輔・原寛・亘野俊次・冨成忠夫編　1989b『日本の野生植物　木本Ⅱ』平凡社　305p.
佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫　1981『日本の野生植物 草本Ⅲ 合弁花類』平凡社　259p.
佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫　1982a『日本の野生植物　草本Ⅰ 単子葉類』平凡社　305p.
佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫　1982b『日本の野生植物 草本Ⅱ　離弁花類』平凡社　318p.
島地謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』地球社　176p.
鈴木庸夫・高橋冬・安延尚文　2012『ネイチャーウォッチングガイドブック　草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－』誠文堂新光社　272p.
田中啓幾　2008『落葉樹の葉　山渓ハンディ図鑑12』山と渓谷社　447p.
Wheeler E.A.・Bass P. and Gasson P.E.(編)　1998『広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修)　海青社　122p.[Wheeler E.A.・Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
谷城勝弘　2007『カヤツリグサ科入門図鑑』全国農村教育協会　247p.
吉山寛・石川美枝子　1992『原寸イラストによる落葉図鑑』文一総合出版　372p.



1. ヒト頭蓋　前頭骨−左右頭頂骨　2. ヒト頭蓋　右側頭骨　3. ヒト頭蓋　後頭骨

図版6　SD－8出土骨

4. 高知城跡北曲輪地区出土木製品における樹種同定

一般社団法人 文化財科学研究センター
金原美奈子　金原裕美子

はじめに

本報告では，遺跡より出土した木製品に対して，木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は，花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが，木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

⑴ 試料と方法

試料は，高知城跡北曲輪地区より出土した椀，皿，盤，蓋などの漆器製品20点である。試料は結果表に記す。

方法は，試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義），放射断面（柾目と同義），接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し，生物顕微鏡（OPTIPHOTO－2：Nikon）によって40～1000倍で観察した。同定は，木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

⑵ 結果

表に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

① クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　　図版番号128・360

年輪のはじめに大型の道管が，数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて，道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20m，径40cmぐらいであるが，大きいものは高さ30m，径2mに達する。耐朽性が高く，水湿によく耐え，保存性の極めて高い材で，現在では建築，器具，土木，船舶，彫刻，薪炭，ほだ木など広く用いられる。

② ブナ属　Fagus　ブナ科　　図版番号272・361・426・504

小型でやや角張った道管が，単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて，道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが，ときに上下端のみ方形細胞が見られ，単列のもの，2～数列のもの，大型の広放射組織のものがある。

以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属には，ブナ，イヌブナがあり，北海道南部，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20～25m，径60～70cmぐらいであるが，大きいものは高さ35m，径1.5m以上に達する。材は堅硬，緻密で，靱性があり，保存性は低い。容器などに用いられる。

③ ケヤキ　Zelkova serrata Makino　ニレ科　　図版番号327・425

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が

存在する。放射組織は異性放射組織型で上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ20～25m，径60～70㎝ぐらいであるが，大きいものは高さ50m，径3mに達する。材は強靭で従曲性に富み，建築，家具，器具，船，土木などに用いられる。

④ カツラ　Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.　カツラ科　　図版番号225・641・666

小型で薄壁の角張った道管が，単独ないし2～3個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性放射組織型で，2細胞幅である。道管内にチロースが多数存在する。

以上の特徴からカツラに同定される。カツラは北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉高木で，通常高さ15～20m，径50～60㎝であるが，大きいものは高さ35m，径2mに達する。材は軽軟で靱性があり加工しやすく，建築材などに用いられる。

⑤ クスノキ科　Lauraceae　　図版番号205・314

中型から小型の道管が，単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で，1～3細胞幅である。

以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には，クスノキ，ヤブニッケイ，タブノキ，カゴノキ，シロダモ属などがあり，道管径の大きさ，多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが，本試料は道管径以外の点が不明瞭なため，クスノキ科の同定にとどめる。なお，本試料は道管径の大きさから，クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

⑥ トチノキ　Aesculus turbinata Blume　トチノキ科　　図版番号223・341・394・434

小型でやや角張った道管が，単独ないし放射方向に2～数個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で，道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなる単列の同性放射組織型で，層階状に規則正しく配列する。放射断面では道管放射組織間壁孔は，小型で密に分布する。

以上の特徴からトチノキに同定される。トチノキは北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，通常高さ15～20m，径50～60㎝に達する。材は耐朽性，保存性が低いが，軟らかく緻密であり，容器などに用いられる。

⑦ サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　　図版番号588

小型の道管が，単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は多く60を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞，方形細胞，直立細胞からなる異性放射組織型で単列を示す。

以上の特徴よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州，四国，九州，沖縄に分布する。常緑高木で，通常高さ8～10m，径20～30㎝である。材は強靭，堅硬で，建築，器具などに用いられる。

⑧ コシアブラ　Acanthopanax sciadophylloides　ウコギ科　　図版番号589

年輪のはじめに中型で丸い道管がほぼ単独でやや間隔をあけて1列にならぶ環孔材である。晩材部では小型でやや角張った道管が単独あるいは放射方向に2～数個複合する。早材から晩材にかけ

て道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は，ほとんどが平伏細胞で上下端のみ直立細胞からなる異性放射組織型で，1～4細胞幅である。

以上の特徴からコシアブラに同定される。コシアブラは北海道，本州，四国，九州に分布する。落葉高木で，高さ7～18m，径60cmに達する。材は器具，彫刻，旋作などに広く用いられる。

⑨ トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科　　図版番号665

年輪のはじめに，大型で厚壁の丸い道管が，ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では，小型でまるい厚壁の道管が，単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状，晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。放射組織は同性放射組織型で，1～3細胞幅である。

以上の特徴からトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ，トネリコ，アオダモなどがあり，北海道，本州，四国，九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築，家具，運動道具，器具，旋作，薪炭など広く用いられる。

⑶ 所見

同定の結果，高知城跡北曲輪地区の漆器製品はクリ2点，ブナ属4点，ケヤキ2点，カツラ3点，クスノキ科2点，トチノキ4点，サカキ1点，コシアブラ1点，トネリコ属1点であった。

クリ，ブナ属，ケヤキ，カツラ，クスノキ科，トチノキ，サカキ，トネリコ属が漆器椀に利用されている。ブナ属，ケヤキ，カツラ，クスノキ科，トチノキ，トネリコ属は椀によく利用される樹種である。また，一般的に椀などの刳物・挽物の用材には，形を整えやすく加工が容易であり狂いや割れが少ないことから，広葉樹材の中でもブナ属，ケヤキ，トネリコ属などの比較的硬いが形を整えやすく，木目が美しく現れる材が好まれて用いられる。なお，ろくろ細工である挽物に対して，

表6　高知城跡北曲輪地区木製品における樹種同定結果

図版番号	器形	結果(学名／和名)	
128	漆器椀	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
205	漆器椀	Lauraceae	クスノキ科
223	漆器椀	Aesculus turbinata Blume	トチノキ
225	漆器椀	Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.	カツラ
272	漆器蓋	Fagus	ブナ属
314	漆器椀	Lauraceae	クスノキ科
327	漆器盤	Zelkova serrata Makino	ケヤキ
341	漆器蓋	Aesculus turbinata Blume	トチノキ
360	漆器椀	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
361	漆器椀	Fagus	ブナ属
394	漆器椀	Aesculus turbinata Blume	トチノキ
425	漆器椀	Zelkova serrata Makino	ケヤキ
426	漆器蓋	Fagus	ブナ属
434	漆器椀	Aesculus turbinata Blume	トチノキ
504	漆器椀	Fagus	ブナ属
588	漆器椀	Cleyera japonica Thunb.	サカキ
589	漆器皿	Acanthopanax sciadophylloides Fr. et Sav.	コシアブラ
641	漆器蓋	Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.	カツラ
665	漆器椀	Fraxinus	トネリコ属
666	漆器椀	Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.	カツラ

刳物ではトチノキ，カツラなどの軟らかい材も用いる傾向があり，トチノキは木目が特徴的で，カツラは肌目が細かく美しく好んで用いられたようである。また，ケヤキは縄文時代以降現在まで伝統的に木地に用いられる材であり，クスノキ科の椀の例は少ないがクスノキ科の中でもクスノキやタブノキは椀の木地に利用される例が現在でも見られる。重硬であるためクリは椀に利用される例は少ないが，徳島県の新蔵町3丁目遺跡（戦国時代から江戸時代後半）ではクリを用いた漆塗りの椀が出土している。なお，サカキが容器として利用される例はめずらしい。また，漆器盤にはケヤキが利用されており，中近世の木皿は挽物の工法で製作されるため，挽物に適材であるケヤキが用材として選定されたと考えられる。漆器蓋にはブナ属が利用されている。ブナ属もまたケヤキと同様に縄文時代以降から現在まで木材の性状からも伝統的に木地に用いられる材で漆製品によく利用される。なお，高知城伝下屋敷跡（江戸時代後半から近代初頭）に漆器椀蓋にブナ属が利用された例があるが，トチノキを用材とする例が多いようである。漆器皿にはコシアブラが利用されている。コシアブラは木理通直で緻密で加工がしやすく，白色で光沢がある材で，箸，扇子の骨，版木，旋作などに用いられる。なお，コシアブラの利用はめずらしい。

いずれの樹木も温帯から暖温帯に分布する樹木ばかりであり，その中でもブナ属，ケヤキ，カツラ，トチノキ，トネリコ属は谷沿いや川辺などの湿地に生育する樹木である。なお，クリは乾燥した丘陵地などを好む二次林要素でもあり，クスノキ科は照葉樹林の主要構成要素を含む樹木である。なお，コシアブラは山地に生育する落葉高木で，山菜として現在でも食されている。また，用材としてみると一般的に椀などの刳物・挽物の用材に利用される樹木が多く利用されており，一方であまり容器に見られないクリは二次林種であるため成長が早いことや個体数が多いことなどから利用された可能性がある。また本遺跡では容器の用材としてはめずらしくサカキとコシアブラを利用している。これは儀礼的な用途や豪華な献上品などのために特殊な木材を恣意的に選んだ可能性が考えられる。

本遺跡で同定された木製品は，当時遺跡周辺にも普通に生育する樹木が利用されており遺跡周辺からか，または製品が流通によって近隣地域よりもたらされたと推定される。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久　2012『木の考古学』雄山閣　p.449.

井上美知子　2000「漆椀の樹種と塗膜の構造」『新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点　徳島保健所改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第31集　徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター　p.399－402・p.411－420.

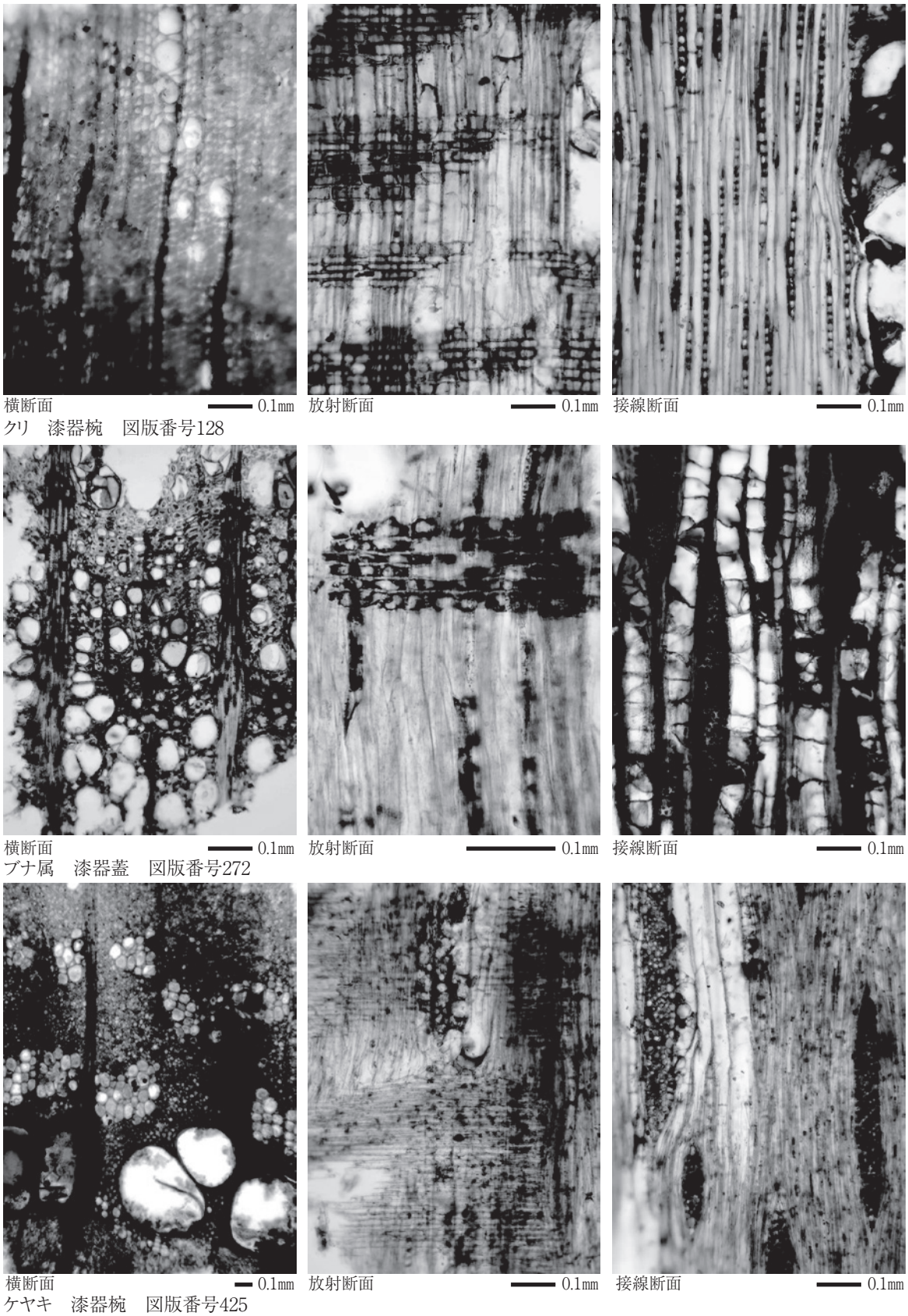
佐伯浩・原田浩　1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版　p.20－48.

佐伯浩・原田浩　1985「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版　p.49－100.

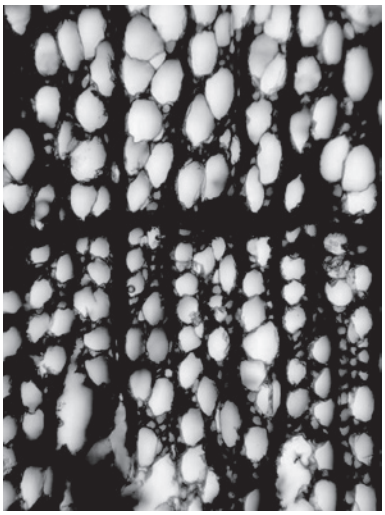
汐見真　2002「高知城伝下屋敷跡出土木製品の樹種同定調査結果」『高知城伝下屋敷跡 高知地簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集　財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター　p.215－219.

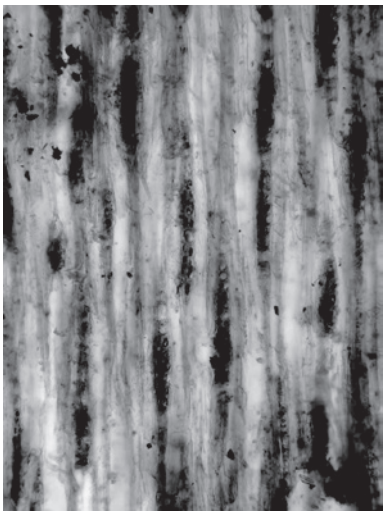
島地謙・伊東隆夫　1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣　p.296.

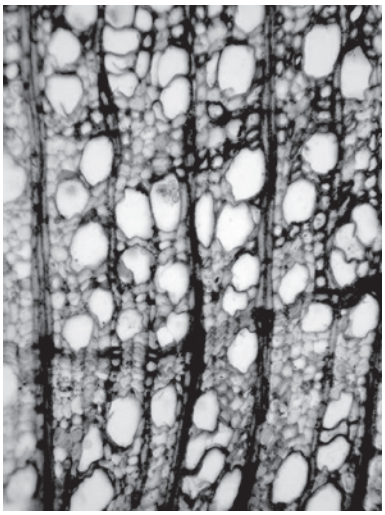
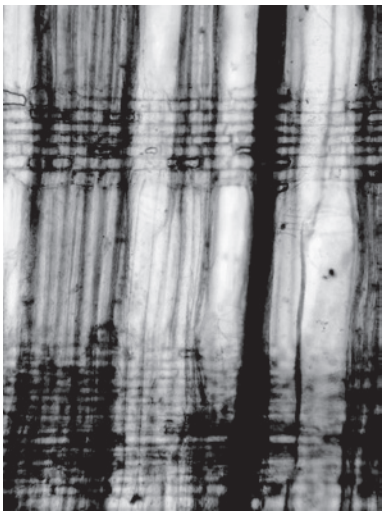
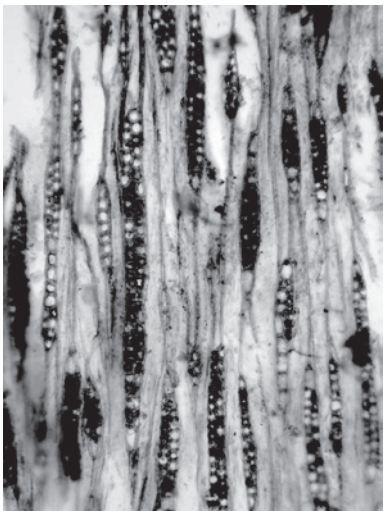
山田昌久　1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第1号』植生史研究会　p.242.

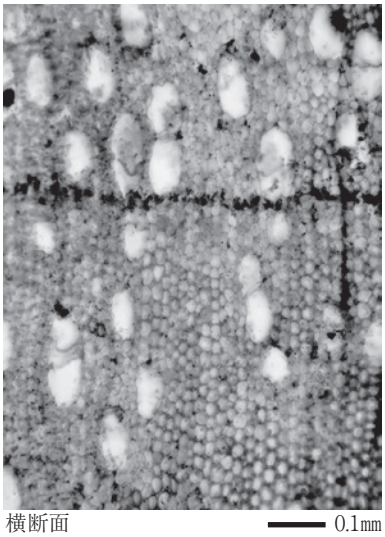


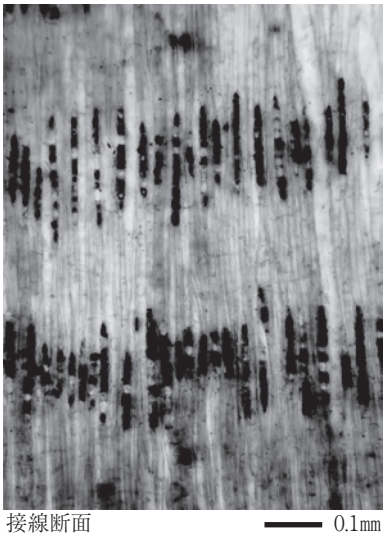
図版7　高知城跡北曲輪地区木製品Ⅰ


横断面　0.1㎜

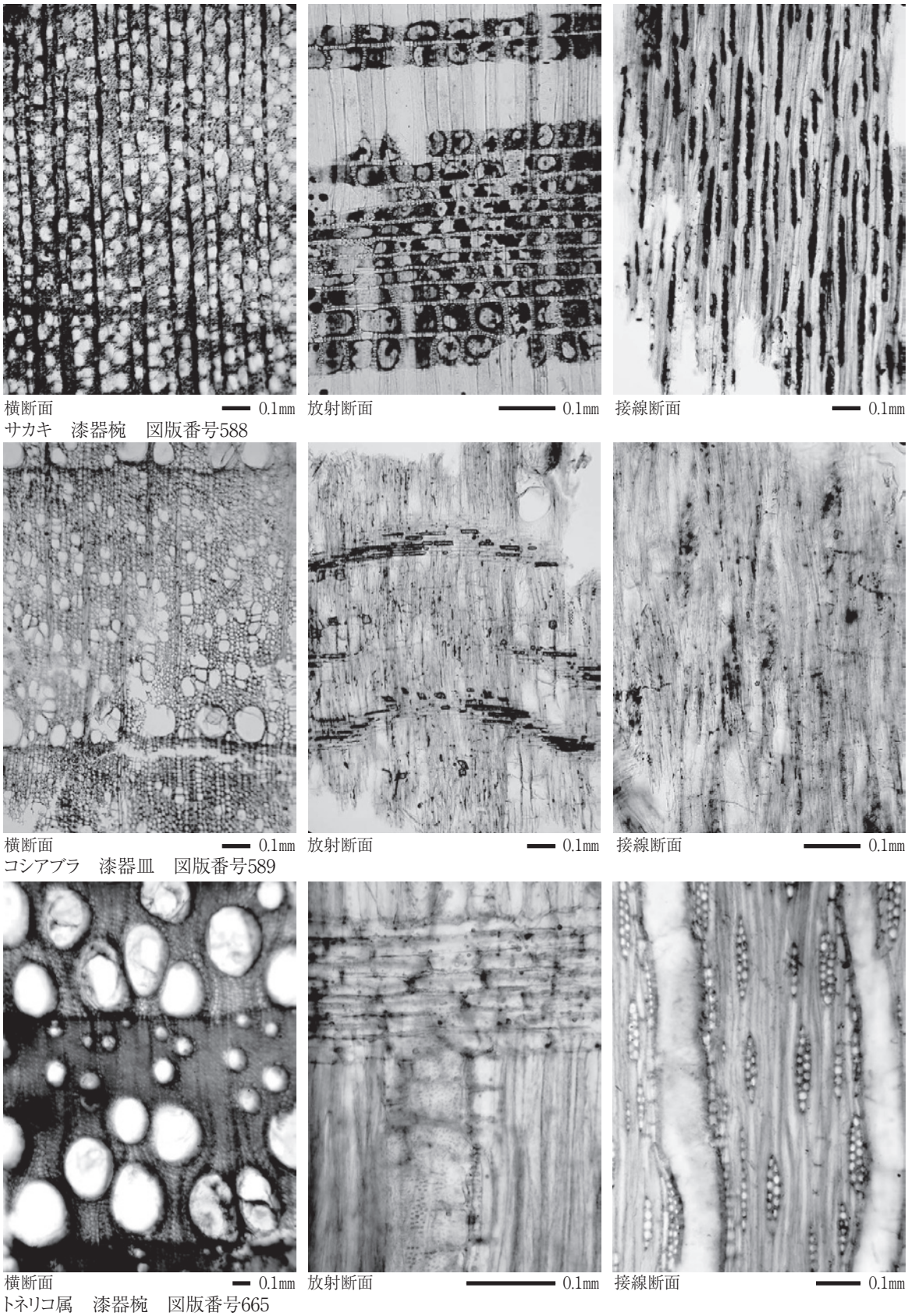
放射断面　0.1㎜

接線断面　0.1㎜
カツラ　漆器椀　図版番号666


横断面　0.1㎜

放射断面　0.1㎜

接線断面　0.1㎜
クスノキ科　漆器椀　図版番号314


横断面　0.1㎜

放射断面　0.1㎜

接線断面　0.1㎜
トチノキ　漆器椀　図版番号394

図版8　高知城跡北曲輪地区木製品Ⅱ



サカキ　漆器椀　図版番号588

コシアブラ　漆器Ⅲ　図版番号589

トネリコ属　漆器椀　図版番号665

図版9　高知城跡北曲輪地区木製品Ⅲ

第Ⅴ章　まとめ

1. 古代・中世の遺構について

丘陵に近い調査区南部で古代から中世にかけての遺構が確認された。検出されたのは主に溝跡で，SD－3・4・7は幅約2mを測る大規模なものであり，これらの溝跡は丘陵に沿って並走していた。これらの溝跡の中央に位置するSD－4がSD－3・7を切っていた。いずれの溝跡も埋土中位に，木片や植物を多く含む層がみられ，SD－3は東部の底付近に径約2㎝の木片や棕櫚状の植物を格子状に編んだものが敷かれており，調査中は湧水が著しかったことなどから，軟弱地盤対策のような目的があったものとみられる。太宰府などでは水城の土塁の下に崩壊を防ぐために敷粗朶・敷葉工法として粗朶が敷かれ，地盤が緩い所では葉がついた枝も使われており，今回の調査の状況と似ている。また，SD－4は2箇所で土橋状に基底面が高く残っていた。出土遺物は，SD－3では土師器や須恵器・土師質土器・瓦器・白磁など11～12世紀を主体とする遺物であった。SD－4・7はSD－3と同様な遺物に加え，青磁や瓦質土器・陶器・布目瓦などの出土遺物がみられ，8～15世紀の遺物であった。これらの溝跡は切り合いがあることから時期差があるとみられるが，SD－3とSD－4は同様の規模で並走しており，同時期あるいはあまり時を経ず機能していた可能性もある。これらの溝跡は規模が大きく，出土遺物には緑釉陶器片や楠葉型瓦器椀，布目瓦がみられることも注目される。

今回の調査区周辺では，高知市教育委員会が行った北曲輪の調査や，弘人屋敷跡で古代の遺構が確認されている。高知市教育委員会が行った北曲輪の調査地点は，この溝跡から西へ100mに位置する。調査では土坑やピット等，8～9世紀と10～11世紀の遺構や遺物が確認されている。出土遺物には土師器や須恵器のほか，緑釉陶器や灰釉陶器・布目瓦など今回の調査と同時期の遺物が出土している。高知市教育委員会の調査で検出された古代の遺構は標高2.0～2.3mの地点にあるのに対し，今回の調査で検出された古代の遺構は標高0.7～0.9mと1.1～1.6m低い地点にあり，丘陵裾部に沿って何条かの溝を配していた可能性がある。高知城跡南東部に位置する弘人屋敷跡では，10～11世紀の流路や11～12世紀の区画溝や土坑が確認され，土師器や須恵器・緑釉陶器・黒色土器・布目瓦が出土している。高知城下町では古代の遺構がこれまで部分的に確認されていたが，この時期の遺構が大高坂山北側においては比較的広い範囲に広がっていたものと推察される。また，いずれの遺跡においても布目瓦が出土していることや，北曲輪では出土遺跡が限定される楠葉型瓦器椀が出土していることなどから，今回の調査で確認された大規模な溝跡や弘人屋敷跡で確認された区画溝などの遺構は，集落とは異なる性格の官衙や寺院などの建物が周辺に存在する可能性も視野に入れる必要があろう。

中世の遺物はSD－4・7のほかSD－6でみられるが出土量は少ない。13～14世紀の遺構は調査区周辺では，高知市教育委員会が行った北曲輪の調査で土坑が1基確認されているほか，大高坂山南側では，弘人屋敷跡で井戸や桶棺など，帯屋町遺跡で土坑などが確認されているが，この時期の遺構は大高坂山周辺では散見される程度である。15世紀には大高坂山東側の追手筋遺跡，大高坂山南側の弘人屋敷跡や高知城跡伝下屋敷・帯屋町遺跡，大高坂山西側の西弘小路遺跡など大高坂山の周囲で広く遺構が確認されるようになり，活動域が大きく広がっている。また，高知市教育委員会

が行った北曲輪の調査では，長宗我部期以前とみられる幅1.9mを測る溝跡が丘陵の裾部に沿って確認されており，大高坂城との関連が指摘されている。今回の調査で確認したSD－4・7もほぼ同様の時期と考えられ，規模も大きく山裾に沿って伸びていることから丘陵部の遺構と関連がある可能性もある。また，長宗我部地検帳では調査地付近とみられる「北大門」「大テンスノ下東ウラ」「タニヤシキ」には下屋敷が非常に多く，丘陵北側は屋敷地であったとみられ，それらの屋敷に伴う遺構である可能性も考えられる。

2. 近世の遺構について

高知城跡の北曲輪として機能した時期であり，絵図から藩の諸施設が存在したことが伺われる。調査では中央部が著しく撹乱を受けており，遺構が確認できなかった箇所もあるが，概ね江戸時代前期から後期にかけての遺構が確認された。北曲輪の状況がわかる寛文9(1669)年の『寛文己酉高知絵図』（以下寛文絵図）と明治6(1873)年の『高知城の圖』（以下明治絵図）をもとに確認された遺構について検証する。

(1) 建物跡・塀跡

今回の調査では撹乱を受けていた部分が多く，確認された建物跡はSB－1とSB－2の2棟のみであった。いずれも調査区北側の1区で確認され，出土遺物が少なく時期の特定は難しい。SB－1は梁間が1.20mと規模が小さく，遺物は皆無であった。SB－1は位置からみると，寛文絵図の「御作事場」南東部の塀または建物，あるいは明治絵図で消失建物として記載されている「作事方」建物の北端部分に当たる可能性がある。また，「作事方」の北側には南北塀が描かれているが，SA－1が該当するのではないだろうか。SB－2は礎板がみられる柱穴があることや，位置からみて寛文絵図や明治絵図に描かれている「米蔵」の一部と考えられる。さらに2区北東部のP－11でも礎板が確認されており，SB－2の南側にも建物跡があった可能性がある。

(2) 溝跡

溝跡は多く検出されており，1区では南北方向とそれに直行する東西方向の溝跡がみられる。SD－13は1区から2区へ続く南北方向の溝跡で，検出長43.87m，幅1.10～2.36m，深さ0.29～1.03mを測る規模の大きいものである。SD－13の底では溝跡とほぼ同じ長軸方向の幅約2m，長さ4m程度の長方形を呈する大型土坑が確認されている。SX－2･4･6･12は長方形の大型土坑で，SX－2･4･12はSD－13に切られており，SX－6はSD－13を切っている。これらの大型土坑は出土遺物がさほど多くはなく廃棄土坑とは考えられず，性格については判然としないが，整然と並んでいることやSD－13に重なることは藩の施設として計画的に作られたものとみられる。また，SD－13の南部ではSX－12の南側で溝跡の一部が途切れている。著しく撹乱を受けていた箇所であり，途切れた箇所の長さは不明であるが，土橋であった可能性がある。このSD－13から出土した遺物は17世紀を中心としており，18世紀初頭に埋没したとみられる。寛文絵図では北御門内の土手から水路とみられる水色で塗られた溝が伸びており，御米蔵の西側を南北方向に続いている。この溝には2箇所に橋とみられるものが描かれ，南部の方では絵図の一部が消えている可能性もあるが，小屋のような小さな建物の前で溝の一部が途切れているように見える。SD－13は17世紀に機能していたと考えられることや位置や規模などから絵図に描かれている溝跡であると思われる。さらに，その後の絵図である天保5(1835)年『天保元年高知之図』や明治絵図にはこの場所に水路は描かれておら

図177　寛文9(1669)年『寛文己酉高知絵図』と調査地

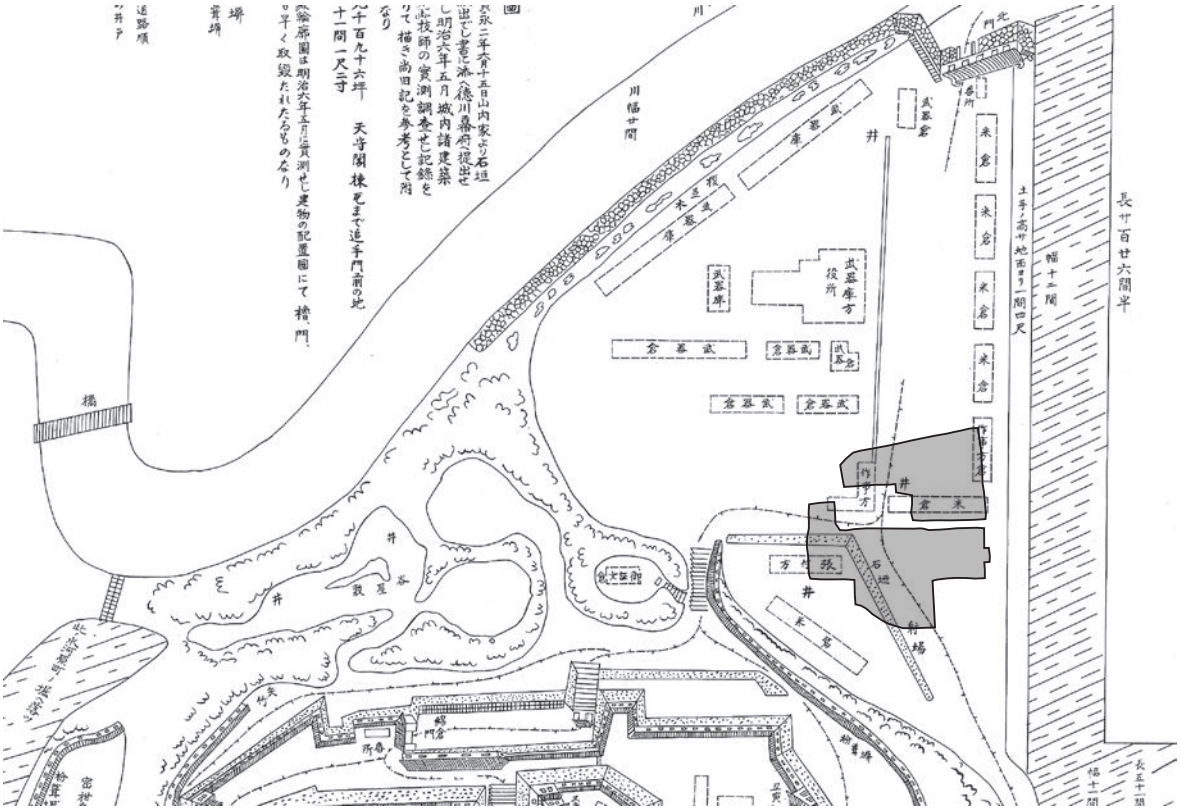


図178　明治6(1873)年『高知城の圖』と調査地

ず，18世紀初頭に埋没したとみられる遺物との整合性もあり，その可能性は高いとみられる。

SD－10は1区北東部で確認したL字状の溝跡で，SD－13に切られる。検出長10.77m，検出幅2.93m，深さ1.57mを測る大規模な溝跡で，出土遺物には17世紀前葉のものがみられるが，17世紀中葉のSD－11を切っていることから，17世紀中葉以降と考えられる。L字状の溝跡は寛文絵図には描かれておらず，寛文期以前に埋没したものとみられる。大規模でL字状を呈することから区画溝の様な性格が考えられ，さらに埋土の分析では珪藻化石は確認されず，溝内が十分に滞水していなかったことが推察されており，空堀状であったとみられる。SD－11・12は1区北部で確認された東西方向の溝跡で，並走しいずれもSD－13に切られ，SD－11はSD－10に切られ，SD－12を切る。SD－11の出土遺物には17世紀中葉のものがみられ，また寛文絵図には東西溝は描かれていないことから，SD－10～12は17世紀中葉で，絵図が描かれた寛文9(1669)年以前の溝跡とみられ，絵図が描かれる以前に北曲輪の建物配置の改編が行われた可能性もある。

SD－23～25は2区南部で確認された溝跡で，いずれも「く」の字状に曲がり並走し，SD－23がSD－24・25を切っていた。SD－23は出土遺物より17世紀中葉とみられ，埋土中には礫を非常に多く含んでおり塀の基礎と考えられる。寛文絵図に描かれている「人夫屋敷」の塀に相当する可能性が高い。

SD－27・28はSD－23～25の南で確認された溝跡で丘陵に沿って伸びる。出土遺物が少なく，詳細な時期は不明で，どの絵図にも描かれていない。絵図に描かれていない屋敷内の小規模な溝，もしくは規模は小さいが高知市の調査で確認された丘陵裾部の溝跡と同様な性格であろうか。また，北側にはこの溝跡と主軸方向がやや異なる杭列が東西方向に伸びており，SD－23内にも東西方向の杭列，さらにこれらの杭列を繋ぐように南北方向の杭列も確認されている。杭列の時期は明らかではないが，明治絵図では「張付方」東側の石垣や通路と位置がほぼ重なっており，関連がある可能性もある。

(3) 井戸跡

井戸跡は調査区南部の2区でSE－1とSE－2の2基が確認されている。SE－1は素掘りで桶側が3段積まれていた。出土遺物は少ないが，底の玉砂利層の下より青花(654)が出土しており17世紀の可能性がある。17世紀の寛文絵図，明治絵図のいずれにおいても「作事方」に伴う井戸跡であるとみられる。SE－2はSE－1の南東約30mで確認した井戸跡である。この井戸跡も素掘りで掘方は幅6.98mを測る大型のもので，桶側は2段積まれていた。出土遺物より江戸後期のものとみられ，位置からみて明治絵図の「張付方」南の井戸に相当する可能性が高い。

(4) 大型土坑

大型土坑は先述したSD－13とほぼ同じ長軸方向を示すSX－2・4・6・12のほか，1区中央部でまとまって確認された18世紀中葉の大型土坑であるSX－7～10がある。これらの遺構は平面形態があまり整っておらず底も平坦ではないが，それぞれ隣接し整然と配置されていることから周りの建物等の施設に影響を受けているものとみられる。寛文絵図や明治絵図では何も描かれていない箇所であり，また遺物が多量に出土していることから廃棄土坑とみられる。寛文絵図と明治絵図を比較すると調査地北西の建物配置等が大きく変わっており，それらの建て替えに伴う廃棄土坑と考えられる。後述するが，これらの遺構からは色絵製品や肥前有田産の磁器など上手の遺物が僅かながら含まれていることや木簡なども出土しており，寛文絵図に描かれている藩の施設である「御作事場」

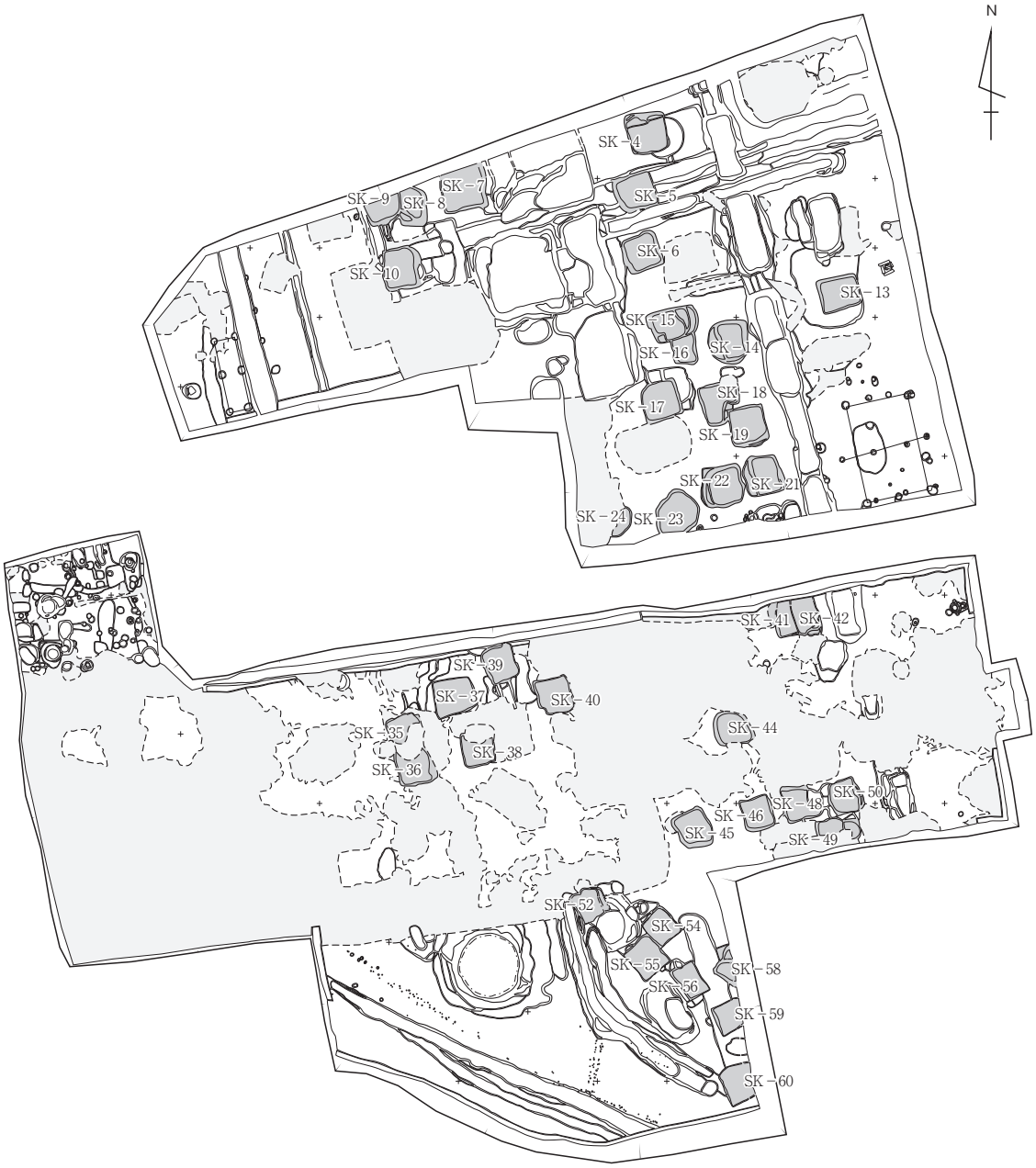


図179　方形土坑位置図(S=1/400)

や「馬渕八右衛門」の侍屋敷に関連する遺物である可能性が高い。

(5) 方形土坑(図179・表7)

今回の調査では39基の方形を呈する土坑(以下方形土坑)が検出された。方形土坑は平面形態が正方形または長方形で，一辺1.7～2.5m，深さは最も残存状態が良好なもので1.51mであった。土器や陶磁器などの出土遺物は少なく，中には瓦が多量に廃棄されているものや炭化物・腐植が堆積しているものが多くみられた。配置については，調査区北部の方形土坑は長辺または短辺がN－11～13°－Wを示し，ほぼ規則的に配置されている。調査区南部のSK－52・54～56・58～60はN－21～45°－Wとばらつきがあり，建物や地形に左右された可能性がある。調査区北部の方形土

表7　方形土坑計測表

調査区	遺構番号	規　模			長軸方向	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)		
1区	SK－4	2.51	2.27	0.97～1.07	N－11°－E	炭化物, 木片, 腐植
1区	SK－5	2.35	2.20	0.67～0.77	N－72°－E	瓦
1区	SK－6	2.21	2.05	0.96～1.05	N－18°－W	瓦
1区	SK－7	(2.36)	2.70	0.80～0.83	N－11°－W	腐植
1区	SK－8	(2.29)	(1.66)	1.10～1.18	N－1°－E	腐植
1区	SK－9	(2.20)	(1.42)	1.25～1.29	N－71°－E	腐植，蒂
1区	SK－10	2.45	2.26	1.32～1.51	N－7°－W	腐植
1区	SK－13	2.35	1.93	0.31～0.36	N－77°－E	
1区	SK－14	2.55	2.30	1.16～1.17	N－12°－W	
1区	SK－15	2.80	1.84	1.01～1.15	N－76°－E	瓦
1区	SK－16	(1.82)	1.44	0.25～0.27	N－13°－W	腐植
1区	SK－17	(2.25)	2.23	0.89～0.92	N－13°－W	瓦
1区	SK－18	2.43	2.32	0.65～0.78	N－13°－W	腐植
1区	SK－19	2.43	2.07	0.94～1.03	N－13°－W	瓦
1区	SK－21	2.30	2.22	0.60～0.65	N－13°－W	腐植，瓦
1区	SK－22	2.38	2.30	1.01～1.15	N－80°－E	瓦
1区	SK－23	(2.74)	2.26	0.87～0.94	N－37°－E	瓦
1区	SK－24	(1.96)	(0.92)	0.84～0.88	－	瓦
2区	SK－35	(1.60)	(1.78)	0.55～0.59	N－68°－E	腐植
2区	SK－36	(2.04)	(2.21)	0.53～0.61	N－13°－W	腐植
2区	SK－37	2.41	2.08	0.48～0.56	N－80°－E	腐植，瓦
2区	SK－38	(2.05)	1.91	0.70～0.82	N－10°－W	腐植
2区	SK－39	2.08	1.91	0.95～1.04	N－19°－W	炭化物，腐植
2区	SK－40	(2.06)	(2.04)	0.70～0.92	N－19°－W	瓦
2区	SK－41	(1.73)	1.38	0.55～0.70	N－16°－W	
2区	SK－42	(2.00)	(1.50)	0.66～0.79	N－15°－W	
2区	SK－44	(1.98)	(1.96)	0.75～0.80	N－13°－W	瓦
2区	SK－45	2.27	2.00	0.82～0.88	N－27°－W	腐植
2区	SK－46	1.93	1.75	0.93～1.04	N－17°－W	瓦
2区	SK－48	(2.18)	1.95	0.35	N－78°－E	
2区	SK－49	2.54	(1.68)	0.82～0.88	N－78°－W	腐植
2区	SK－50	2.02	1.96	0.83～1.01	N－17°－W	瓦
2区	SK－52	(2.02)	(1.90)	0.87～0.95	N－27°－W	腐植
2区	SK－54	1.91	1.75	0.90～1.15	N－45°－W	植物，木片
2区	SK－55	2.06	1.87	0.88～1.03	N－42°－W	腐植
2区	SK－56	2.70	1.90	0.30～0.39	N－34°－W	
2区	SK－58	(2.47)	(1.81)	1.02～1.06	N－30°－E	腐植，植物
2区	SK－59	1.73	(1.56)	0.87～1.06	N－63°－E	腐植
2区	SK－60	(1.98)	2.24	0.93～1.02	N－69°－E	腐植

坑は明治絵図の「作事方」と「作事方倉」の間の通路に位置し，調査区南部の方形土坑は「張付方」東側の「射場」や通路など建物がなかった箇所に造られたと考えられる。方形土坑は切り合っているものもあるが，規律ある配置が認められることからほぼ同時期に造られたものとみられ，溝跡との切り合いから17世紀中葉以降であることは明らかである。出土遺物には17世紀のものが多くみられるものの，僅かに江戸後期の遺物も出土している。

高知城は明治4(1871)年に廃藩置県により廃城となり，明治絵図によると明治6(1873)年には本丸以外の二ノ丸や三ノ丸では塀や櫓を残して建物をすでに撤去していることから，廃城に伴う廃棄土坑の可能性があるが，瓦が多量に廃棄されていた土坑は14基で，すべてが廃棄土坑ではないようである。また，埋土中に植物が堆積している層が認められる土坑が21基みられ，湧水が著しく地盤が緩いため地盤を固めるための粗朶としての利用を考えたが，SK－45・55・59の植物遺体分析によると葉や種実が多く含まれることから粗朶としての利用ではなく，やはり廃棄された可能性が高いようである。また,種実などの結実期である秋に短期間に廃棄されたことが指摘されている。『高知公園史』[(1)]には明治7(1874)年の項に「同年十月　公園内荒地開墾箇所　公園内居住面々へ通知北之御射場跡　御武具藏跡　北ノ口御門より西外輪堤防　舊米藏南詰より南御社地堤防　舊御証文藏床より北土手　御谷屋敷一圓」と書かれている。これらの場所は今回の調査地にあたり，荒地開墾箇所とあることから明治7年には荒地であったことがわかる。また，10月であり荒地に種実が付いた草木が生い茂り，開墾するために方形土坑が造られた可能性も考えられる。これらの状況からすると，方形土坑は明治4～6年の廃城に伴う廃棄土坑もしくは明治7年の開墾に伴う廃棄土坑の可能性が高いと思われる。

これらの遺構からみると17世紀中葉に建物や溝等の改編が行われた可能性があり，それ以後は米蔵や作事方などの藩の施設が造られたとみられ,その一部とみられるSB－1･2も確認されている。その後，明治期に入り方形土坑が多量に造られたものと考えられる。

3. 近世の遺物について

(1) 文字資料

木簡は18点が出土した。その多くは幅が3cm程度の荷札木簡で上部に円孔が見られる。その他,桶蓋木簡や長方形を呈するもの(496・710など)がある。496は表に「元禄己(ヵ)□　御門出入　正月□日」，裏に「川嶋(ヵ)八左衛門」の墨書がみられる。「御門出入」という文字と名前が書かれていることから，御門の通行手形のような使用がなされた可能性もある。また,「元禄己□」は元禄2(1689)年の干支が己巳で該当する。「川嶋八左衛門」は土佐藩士で明暦(1655～1658)から元禄(1688～1704)にかけて左官方に勤務した「川島八左衛門」という御用人とみられる。710は端材を利用した様な形状で「丑正月　甚大夫(ヵ)　平七」の墨書と数を確認したような線分が書かれている。荷札木簡では，地名が書かれたものとして高知市「秦泉(ヵ)寺(ヵ)」(44)や「杓(ヵ)田村善右衛門」(707),「三崎村弥九郎(ヵ)」(708)がある。「杓田村」は現在の高知市旭,「三崎村」は現在の土佐清水市三崎に該当する可能性がある。人名が書かれたものには587や613がある。587は「□佐(ヵ)守内　味元加大夫　宇賀孫惣」の墨書がみられる。味元加大夫と宇賀孫惣は土佐藩下級武士で，味元は御歩行格,宇賀は郷士より御用人に転じた。味元加大夫は天和3(1683)年～貞享2(1685)年，宇賀孫惣は天和3(1683)年～元禄5(1692)年にそれぞれ江戸買物役を勤め，天和3(1683)年～貞享2(1685)年の同時期に江戸買物役を勤めていた。[(2)]613は「塩鱈弐尾之内　上林味卜」の墨書がみられ，上林味卜から塩鱈二尾が送られたものと思われる。上林家は現在の京都府宇治市で茶業を代々営む家系で，上林権之祐(秀慶)が天正年間(1573～1592)に京都の宇治で茶業を始め，後に春松と改称したとされる。[(3)]上林家は宇治茶頭取および宇治郷などの代官を勤め，茶師の最高位である御物茶師の一員として将軍家や諸国大名家の御茶御用を勤めた宇治茶師の名家として知られ，現在でも第14代上林春松が茶

業を営んでいる。「上林味卜」は初代春松の兄弟の家系で代々上林味卜と名乗り茶業に携わっていたようで，この木簡に書かれた上林味卜が何代目の味卜であるかは不明である。茶は大名家における儀礼や行事を行う上で必要不可欠なものであり，多くの大名が宇治で茶を購入しており，土佐山内家も上林家と関わりがあったものとみられる。

土器・陶磁器にも墨書がみられるものがあり，その多くは外底に書かれていた。520は肥前有田産の磁器蓋物で，外底に「ふうあり(ヵ)　砂(ヵ)糖入　六拾貫」とあり，砂糖が入っていた可能性がある。その他，305は尾戸焼白土器皿で外底に「九」，605は肥前産の磁器水滴で外底に「五分人中」，630は肥前産の磁器香炉または火入で外底に「人足」の墨書がみられた。

(2) 土器・陶磁器の様相

今回の調査で確認された遺構は，17世紀中葉に埋没するSD－10～12などの溝跡，18世紀初頭に埋没するSD－13，18世紀中葉の大型廃棄土坑であるSX－7～10，明治初頭の廃棄土坑である39基の方形土坑群などがみられた。調査地は標高が0.9～1.1mと低く，また水を多く含んだ土壌であるため木製品が多く出土し，SX－8からは木製品箸が100点以上纏まって出土している。北曲輪は絵図に米蔵や武器庫・作事方など藩の重要な施設がみられる場所であり，出土遺物には女性が使用する化粧具等はみられなかったが，泥面子(87～90)や独楽(714)・舟形(93)・木刀(342)などの玩具や子供用の下駄(273・303・427・614)など子供が居住していたことが窺われる。寛文絵図には「馬渕八右衛門」のほか「平井」「松尾」「龍見」など多くの武家屋敷がみえることから，これらの屋敷に子供が居住していたものと思われる。

検出された遺構の中で遺物が纏まって出土したSX－8・9について組成等を検討し，これらの遺構の特徴をみてみる。SX－8・9は18世紀中葉の大型廃棄土坑で隣接し，SX－8がSX－9を切る。SX－8の器種別出土点数(表8)では木製品箸が100点以上出土しており，その他の器形組成比率が54.8%となっているが，それ以外では碗17.7%，皿7.9%と供膳具が多く，次いで擂鉢と焼塩壺が3.3%と調理具の割合が高い。SX－9も同様で碗や皿・小杯の供膳具が最も多く，調理具である焼塩壺が3.4%，壺・甕3.0%と貯蔵具も比較的多く出土している(表10)。器形からみると化粧具や玩具など女性や子供のみが使用するものはみられず，供膳具や調理具･貯蔵具･文房具と生活必需品のみであり，藩の施設に関連する廃棄土坑である可能性が高い。また，焼塩壺の比率が非常に高いことも特徴であり，多量の箸と焼塩壺の割合が多いことから大勢での食事などが行われたことも推測される。器種からみるとSX－8では木製品が最も多く，次いで陶器・磁器が多い。SX－9では磁器が47.8%と半数近くを占め，次いで陶器・土器の順である。SX－8・9はほぼ同時期の遺構とみられるが，遺構により器種の組成が大きく異なっていることがわかる。産地別では磁器・陶器共に肥前の割合が非常に高くなっている(表9・11)。磁器では中国製品が非常に少なくなっている。陶器では肥前に次いで京都・信楽系や備前焼が出土しているがその割合は3～4%と少ない。また，これらの遺構では瀬戸・美濃製品がみられず，産地の偏りが著しい。高級品としては京都・信楽系の色絵陶器碗(452)や肥前有田産の色絵磁器(479・549・571)など色絵製品が僅かながら含まれている。また，SX－8・9出土遺物で図示できた肥前産磁器70点のうち，有田産は23点で32.8%を占め，比較的高い割合となっている。しかしながら，城下町の武家屋敷跡の出土遺物等と比較すると茶の湯関連の遺物や上手の遺物は少なく，城内の藩の施設という性格を表していると考えられる。

表8　SX－8器種別出土点数

器形＼器種	磁器	陶器	土器 施釉土器 瓦質土器	石製品 木製品	器形別 出土点数 合計(点)	器形別 組成比率
碗	20	34			54	17.7%
皿	9	11	4		24	7.9%
中皿		5			5	1.6%
大皿		1			1	0.3%
小杯	5				5	1.6%
鉢	2				2	0.7%
猪口	1				1	0.3%
擂鉢		10			10	3.3%
瓶		3			3	1.0%
壺・甕	1	6			7	2.3%
蓋物・蓋		1			1	0.3%
火入・灰吹	2	2			4	1.3%
水滴	1				1	0.3%
鬢水入		1			1	0.3%
匣鉢		1			1	0.3%
餌鉢			1		1	0.3%
焙烙			1		1	0.3%
土器小皿			6		6	2.0%
焼塩壺・蓋			10		10	3.3%
その他・不明	17	15	19	116	167	54.8%
器種別出土点数合計(点)	58	90	41	116	305	100.0%
器種別組成比	19.0%	29.5%	13.4%	38.0%	100.0%	

註)瓦は除く。

表9　SX－8陶磁器産地別組成表

器形＼産地	磁器			陶器							
	肥前	中国	磁器計(点)	肥前	京都・信楽系	備前	堺・明石	丹波	尾戸か	不明	陶器計(点)
碗	20		20	7	2				2	23	34
皿	8	1	9	9						2	11
中皿			0	5							5
大皿			0	1							1
小杯	5		5								0
鉢	2		2								0
猪口	1		1								0
擂鉢			0	1		3	1			5	10
瓶			0							3	3
壺・甕	1		1		1			1		4	6
蓋物・蓋			0		1						1
火入・灰吹	2		2							2	2
水滴	1		1								0
鬢水入										1	1
匣鉢										1	1
その他・不明	17		17	2						13	15
計(点)	57	1	58	25	4	3	1	1	2	54	90
組成比	98.3%	1.7%	100.0%	27.8%	4.4%	3.3%	1.1%	1.1%	2.2%	60.0%	100.0%

表10　SX－9器種別出土点数

器形＼器種	磁器	陶器	土器 施釉土器 瓦質土器	石製品 木製品	器形別 出土点数 合計(点)	器形別 組成比率
碗	125	55			180	36.1%
皿	18	11	24		53	10.6%
中皿	2	9			11	2.2%
大皿		1			1	0.2%
小杯	39				39	7.8%
鉢	5	3			8	1.6%
猪口	8				8	1.6%
擂鉢		9			9	1.8%
瓶	2				2	0.4%
壺・甕		14	1		15	3.0%
蓋物・蓋	2	1			3	0.6%
灯明皿		1			1	0.2%
火入・灰吹	3	2			5	1.0%
花生		1			1	0.2%
仏飯器	1				1	0.2%
水滴	6				6	1.2%
餌鉢			1		1	0.2%
土器小皿			10		10	2.0%
焼塩壺・蓋			17		17	3.4%
その他・不明	27	14	46	40	127	25.5%
器種別出土点数合計(点)	238	121	99	40	498	100.0%
器種別組成比	47.8%	24.3%	19.9%	8.0%	100.0%	

註)瓦は除く。

表11　SX－9陶磁器産地別組成表

器形＼産地	磁器				陶器						
	肥前	中国	不明	磁器計(点)	肥前	備前	堺・明石	丹波	尾戸か	不明	陶器計(点)
碗	123	1	1	125	9					46	55
皿	18			18	11						11
中皿	2			2	9						9
大皿				0	1						1
小杯	39			39							0
鉢	4	1		5	2					1	3
猪口	8			8							0
擂鉢				0		4	1			4	9
瓶	2			2							0
壺・甕				0	3			1		10	14
蓋物・蓋	2			2						1	1
灯明皿				0		1					1
火入・灰吹	3			3						2	2
花生				0					1		1
仏飯器	1			1							0
水滴	5		1	6							0
その他・不明	21		6	27						14	14
計(点)	228	2	8	238	35	5	1	1	1	78	121
組成比	95.8%	0.8%	3.4%	100.0%	28.9%	4.1%	0.8%	0.8%	0.8%	64.5%	100.0%

4. 近世の瓦について

第Ⅲ章4の近世の瓦類でも述べたが，今回の調査で出土した近世の瓦は総点数49,930点，総重量14,125kgに及ぶ。出土した瓦の大半は，明治期の公園化に伴うと考えられる瓦の廃棄土坑から出土しており，幕末の高知城内の建物に使用されていた瓦が一括で廃棄されたとみられ，多量の瓦が出土しているが出土地点による時期差を認めることは出来ない状況であった。今回の調査で出土した瓦の特徴として，丸瓦と平瓦が出土瓦の約96%を占めており，本瓦葺の建物に使用した瓦を廃棄したと考えられる。また，桟瓦は出土瓦の0.1%と少なく，近代遺構や客土からの出土が大半を占めており，桟瓦は近現代のものである可能性がある。また，鯱が出土していることから，城内の主要建物に使用されていた瓦が含まれているものとみられる。

表12　出土瓦器形別組成表

器　形	丸瓦	平瓦	桟瓦	軒丸瓦	軒平瓦	鬼瓦	鳥衾瓦	道具瓦	不明	合計
重量(kg)	5,932.8	7,619.2	17.3	298.3	209.0	22.7	4.5	8.4	13.1	14,125.4
組成比	42.0%	53.9%	0.1%	2.1%	1.5%	0.2%	0.0%	0.1%	0.1%	100.0%

註)0.1%未満は0%で表示。

(1) 丸瓦凹面のコビキ痕

丸瓦凹面にみられるコビキ痕で，糸切りのものをコビキA，鉄線切りのものをコビキBとして出土したすべての丸瓦を分類した。今回の調査でコビキAがみられた瓦は，三ツ葉柏文軒丸瓦8点(720・721・735・738・746・749・756・761)と三巴文軒丸瓦2点(801・802)，丸瓦1,147点と一定量がみられた。丸瓦のうちコビキBが55%，コビキAは11%を占め，コビキBの1/5の量のコビキAが出土していることが分かる。高知城跡内でコビキAの瓦は，伝下屋敷や丸ノ内緑地では巴文軒丸瓦，御台所では三ツ葉柏文軒丸瓦，丸瓦では伝下屋敷で8点，丸ノ内緑地18点，本丸6点，三ノ丸15点，御台所48点がみられ，これらがすべてではないが城内では少量ながらも各調査地点で出土しており，城内の諸施設にコビキAの瓦が使用されたものと思われる。また，コビキBが全国に普及して行くのは豊臣政権後半期の1592～1600年とされ[4]，その出現にはそれぞれの地域で時期差があるようである。高松城跡では1588～1610年代の瓦はコビキAが圧倒的に多く[5]，岡山城跡ではコビキBの出現は慶長2(1597)年以降で，コビキBがコビキAを上回るのは17世紀第2四半期とされており[6]，17世紀初頭にはまだコビキAが使用されていたようである。高知城は藩主山内一豊が慶長6(1601)年に築城を開始し，本丸・二ノ丸は慶長8(1603)年，三ノ丸は慶長16(1611)年に完成したとされる。山内家の家紋である三ツ葉柏文軒丸瓦にコビキAがみられることから，高知城跡でも慶長6(1601)年以降もコビキAの瓦が使用されたことがわかる。また，コビキAの瓦に山内家が高知城に入城する以前の瓦が含まれている可能性も考慮する必要があろう。

表13　丸瓦凹面のコビキ痕

コビキ痕	A	B	不明	合計
点数	1,147	5,661	3,504	10,312
組成比	11%	55%	34%	100%

(2) 軒丸瓦

今回の調査で出土した軒丸瓦は，三ツ葉柏文と連珠三巴文である。三ツ葉柏文軒丸瓦は出土した軒丸瓦の13%を占め，大半は連珠三巴文軒丸瓦である。連珠三巴文軒丸瓦でコビキAであるものは先述したように2点(801・802)である。この2点の瓦は，他の連珠三巴文軒丸瓦よりも径が小さく，巴尾は細く長く伸び，珠文は18個と多く，珠文径は小さい特徴がある。また，周縁内側にナデ調

整を加えていることや瓦当に粗い離れ砂が付着することなど，古い様相を呈している。同様の瓦は高知城跡内では伝下屋敷で1点(1000)と丸ノ内緑地で1点(144)がみられるのみで非常に少ない。連珠文がないタイプは丸ノ内緑地で1点(143)がみられ，コビキＡである。今回の調査では連珠文がないタイプは出土していない。

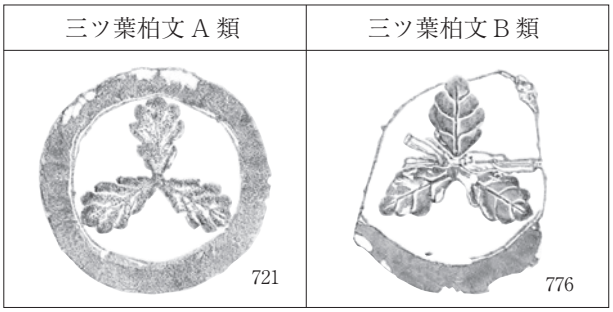


図180　三ツ葉柏文軒丸瓦分類(S=1/5)

三ツ葉柏文軒丸瓦はＡ類とＢ類の2種が確認できた。Ａ類は焼成がやや甘く灰白色を呈し，瓦当には粗い離れ砂が付着するものが多い。径は16.0～17.0cm前後で，瓦当に型のずれが見受けられるものが多い。文様は三ツ葉の先端が膨らみ，葉脈は中心が凸で，左右に伸びる葉脈が凹となる。さらに，型から外した後に文様や周縁内側にナデ調整を加え，端部を丸くしているものが多くみられる。Ａ類で三ツ葉の中心に珠文様の粒があるものをＡ－1類，珠文様の粒がないものをＡ－2類とした。図示したＡ類で丸瓦部凹面の調整が判明しているものは7点あり，すべてコビキＡである。Ａ類は周縁内側にナデ調整を加えていることや瓦当に粗い離れ砂が付着することなど，連珠三巴文軒丸瓦でコビキＡがみられるものに技法が似ている。三ツ葉柏文軒丸瓦Ｂ類は硬質で，色調は表面と断面中心部は暗灰色を呈する。文様はＡ類に比べシャープで，三ツ葉の先端が細く尖り，葉脈などの文様が明瞭である。葉脈は中心が凸で，左右に伸びる葉脈は片彫のように他の部分を凹ますことにより凸とし表現している。また，Ａ類に比べ文様と周縁が離れるものが多い。文様中心部が残存するものにはすべて三ツ葉の中心に珠文様の粒がみられる。Ｂ類の瓦当径は16.0～18.3cmを測り，瓦当径が約16cmのものをＢ－1類，約17cmのものをＢ－2類，18cm以上のものをＢ－3類とした。いずれのタイプにも離れ砂が付着するものとしないものがみられる。Ｂ類で丸瓦部凹面の判明しているものは2点のみであるが，いずれもコビキＢであることから，三ツ葉柏文軒丸瓦Ａ類からＢ類へ移行したと考えられる。また，Ａ類は城内のほとんどの調査地で出土しており，高知城築城当初の瓦である可能性が高い。さらに，山内家が土佐入国以前に居城としていた遠州掛川城跡では，三ツ葉柏文鳥衾瓦が1点出土している。[7] 掛川城跡では三ツ葉柏文軒丸瓦は確認されていないが，Ａ類が掛川城より運ばれた可能性も視野に入れておくことが必要であると思われる。

(3) 軒平瓦

軒平瓦の文様で最も多いのは三葉文で，文様が分かる軒平瓦の47%を占める。次いで橘文が37%，丁字文または花文が5%となっている。

三葉文軒平瓦は高知城跡では多くみられるものであり，各調査地点で出土している。今回の調査で出土した三葉文軒平瓦を，中心飾の下に珠点がないＡ類と珠点があるＢ類，橘文への過渡的な要素をもつＣ類に分けた。浦戸城跡や高知城跡出土の瓦は現在の大阪府堺との関係が以前より指摘されており，大高坂城築城の際には大坂から船で瓦を購入し，瓦工人も呼んでいる。[8]大坂では三葉文と橘文は主要な文様であり多く出土しているものの，Ａ－1類やＢ－1・4類の様な中心飾，Ａ－2～4・Ｂ－2類の様な唐草文の間に短い葉文が入るものなどは大坂では類例が認められず，Ａ類とＢ類は土佐で生産された可能性がある。なお，これらの瓦は長宗我部期の瓦ではないかという指摘も

<table>
<tr><td>三葉文Ａ－１類</td><td>三葉文Ｂ－１類</td></tr>
<tr><td>
854</td><td>
865</td></tr>
<tr><td>三葉文Ａ－２類</td><td>三葉文Ｂ－２類</td></tr>
<tr><td>
856</td><td>
869</td></tr>
<tr><td>三葉文Ａ－３類</td><td>三葉文Ｂ－３類</td></tr>
<tr><td>
858</td><td>
875</td></tr>
<tr><td>三葉文Ａ－４類</td><td>三葉文Ｂ－４類</td></tr>
<tr><td>
863</td><td>
878</td></tr>
<tr><td>三葉文Ｃ－１類</td><td>五葉文Ａ類</td></tr>
<tr><td>
882</td><td>
889</td></tr>
<tr><td>三葉文Ｃ－２類</td><td>五葉文Ｂ類</td></tr>
<tr><td>
883</td><td>
892</td></tr>
</table>

図181　軒平瓦分類1(S=1/5)

ある。[9]なお，Ｂ－3類の875は大阪市佐賀藩蔵屋敷跡で類似する文様構成の軒平瓦が出土している。[10]

五葉文軒平瓦は高知城跡では2種が確認でき，下屋敷や御台所で出土している。葉の先端が中実になるＡ類は下屋敷で，葉の先端が中空になるＢ類は下屋敷と御台所で出土しており，いずれも県外では同文はみられず，土佐産と考えられる。Ａ類は顎部が厚く，Ｂ類は文様が簡略化されていることからＡ類が先行するものと考えられる。

橘文軒平瓦も三葉文軒平瓦と同様に高知城跡では多くみられるものであり，各調査地点で出土している。橘文は三葉文と判別し難いものもあるが，中心飾中央先端が三又，花弁先端が二又に分離しており，唐草文の左右両端に二又に分かれる子葉が付くものを橘文とした。中心飾の外に細い

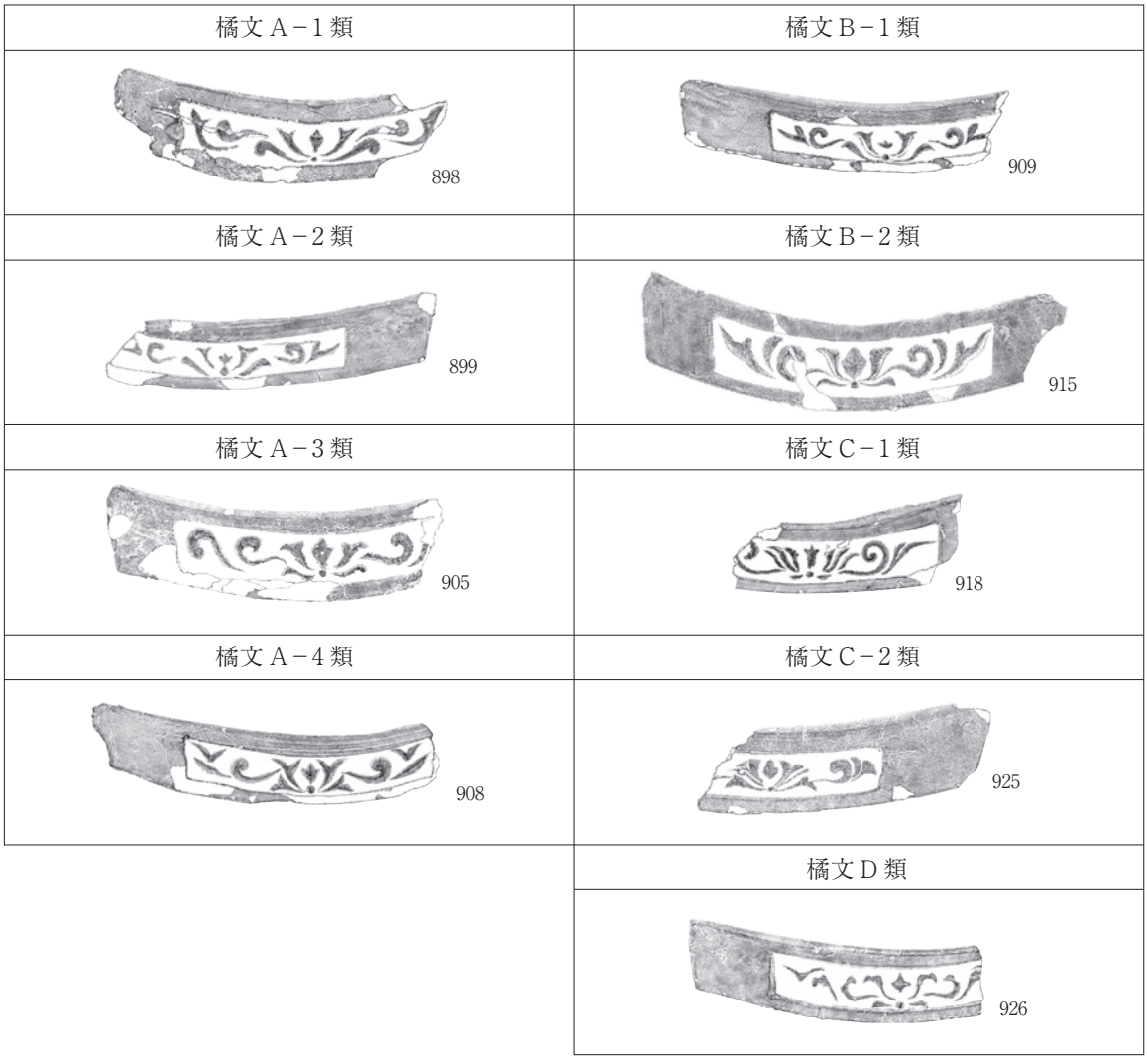


図182　軒平瓦分類2(S=1/5)

蕚が付かないＡ類，細い蕚が付くＢ類，細い蕚が2本付くＣ類，中心飾や唐草・葉文が括れを有し蔓草状になるＤ類に分けた。Ａ－1類の893～895は，1623年頃とされる大阪市四天王寺出土瓦と同笵である伝下屋敷出土瓦(897)と同文で，堺産である可能性が高い。[11]その他にもＡ－4類の907・908は大阪市住友銅吹所跡(967)，Ｂ－1類の914は住友銅吹所跡(975)など住友銅吹所跡[12]出土瓦と同文や文様構成が同様のものがあり，大坂産のものが含まれている可能性が高い。大坂式軒平瓦は慶長年間(1596～1615)には三葉文，元和年間(1615～1624)には花弁が二又に分かれるものや3回転目の唐草が二又に分かれ子葉となるものが出現し，元禄年間(1688～1704)頃には中心飾下部の蕚先端が二又に分かれ橘文が完成するとされている。[13]大坂式軒平瓦の年代観に今回出土した橘文軒平瓦を照らし合わせてみると，Ａ－1類が1620年代～17世紀中葉，Ｂ－1類が17世紀第3四半期，Ａ－4類が17世紀末～18世紀初頭に相当するものと思われる。またＣ・Ｄ類は大坂では類例がなく，土佐で生産された可能性がある。Ｃ－2類は珠点両側の蕚が二又に分かれていることから，Ｃ－1類からＣ－2類へ変化し，Ｃ－2類がＡ－4類と同様の時期とみられる。Ｄ類については珠点両側の蕚が分かれておらず，17世紀中葉の可能性がある。

<table>
<tr><td>丁字文または花文Ａ－１類</td><td>丁字文または花文Ｃ類</td></tr>
<tr><td>
935　936</td><td>
943</td></tr>
<tr><td>丁字文または花文Ａ－２類</td><td>蔦文</td></tr>
<tr><td>
937　939</td><td>
944</td></tr>
<tr><td>丁字文または花文Ｂ－１類</td><td>三ツ葉柏文</td></tr>
<tr><td>
941</td><td>
945</td></tr>
<tr><td>丁字文または花文Ｂ－２類</td><td>宝珠文</td></tr>
<tr><td>
942</td><td>
946</td></tr>
</table>

図183　軒平瓦分類3(S=1/5)

丁字文または花文軒平瓦としたＡ類は，線描のＡ－1類と中実のＡ－2類に分けた。Ａ－1類は西弘小路遺跡や帯屋町遺跡，追手筋遺跡など城下町でも多く出土している。Ａ－2類は唐草が雲文状を呈するのが特徴で，同様のものが堺環濠都市遺跡で出土している。[14]堺環濠都市遺跡出土のものは丁字先端が連続しているという違いがあるが，文様構成は同じである。Ｂ類は雄蕊と花弁が二重になるもので，Ｂ－1類が中実，Ｂ－2類が線描になっている。Ｂ－2類は高知城跡内では下屋敷や三ノ丸，御台所で出土しており，同文に桟瓦のものがあり，Ｂ類は軒桟瓦である可能性がある。また，Ｂ－2類と同文の軒桟瓦が帯屋町遺跡の19世紀中葉の廃棄土坑から出土している。蔦文は1点のみの出土であるが，城内で出土した蔦文は様々なバリエーションがあり，城下町でも出土している。蔦文も桟瓦の可能性がある。

三ツ葉柏文軒平瓦(945)は18世紀初頭に埋没した溝跡であるSD－13より出土し，初めて確認された。中心飾は，丸の中に三ツ葉柏文がみられ葉脈も表現されている。唐草文は三葉文Ａ－4類に類似性が認められる。

宝珠文軒平瓦は高知城跡で初めて確認され，県内では岡豊城跡で1点出土している。なお，堺の中世末の軒平瓦は宝珠文が主流であり，肉彫のものから安土・大坂城期には線描へ変化する。[15]今回の調査で出土した宝珠文軒平瓦は岡豊城跡出土の瓦より文様が簡素化されており後出するものとみられる。また，宝珠が線描で縮小し，宝珠文の末期のものとみられ，17世紀初頭の堺環濠都市遺跡出土瓦の宝珠文に比較的類似する。[16]

(4) 鬼瓦

鬼瓦は三ツ葉柏文と花文が確認された。三ツ葉柏文はこれまでに三ノ丸で1点が確認されており，文様は手捻である。[17]今回の調査で確認された三ツ葉柏文鬼瓦は3点(957～959)である。957は板状で裾部が巻き上がらず，裏面には把手が付く。中央の文様は剥離するため不明で，剥離した部分は円形にカキヤブリの痕跡が残り，径17.5㎝を測り，三ツ葉柏文軒丸瓦の瓦当の大きさとほぼ一致する。左右の袖部には型押の三ツ葉柏文がみられ，720の軒丸瓦と同笵である。720はコビキAであり，この鬼瓦も同様の時期に生産されたものと考えられる。958と959は同様の形状で，袖部は上方にやや巻き上がるものとみられ，裏面は上端を除き周縁に側板を貼付する。瓦当中央には三ツ葉柏文を貼付し，文様はすべて手捻で葉脈は線刻で表現されている。957と958は明治期の方形土坑であるSK－22，959は18世紀中葉の廃棄土坑であるSX－10より出土した。いずれも調査区北側の1区から出土しており，寛文絵図では「御米蔵」や「御作事場」などが近くにみられ，それらに葺かれた瓦の可能性もある。また，957はコビキAがみられる時期のものであり，築城当初に使用されたと考えられ，この時期に北曲輪に藩の施設が存在した可能性を示すものと思われる。

花文鬼瓦は初めて確認されたもので，明治期の廃棄土坑であるSK－50から出土した。明治絵図では何も記載されていない箇所で，近くには「射場」や「張付方」があり，寛文絵図では「人夫屋敷」のほか，調査区南東部に「平井」「松尾」といった侍屋敷があり，それらに使用されたことも考えられる。

(5) 刻印瓦

最も多くみられた刻印は「○」で丸瓦に2点，平瓦に13点が確認できた。1003は平瓦で，胎土分析では堺産とされた。[18]堺では17世紀中葉から18世紀初頭の資料に「○」，18世紀前半から中葉の資料に「㊎」の刻印がみられるようである。[19]三ツ葉柏文軒丸瓦で「○」の刻印がある782は胎土分析では産地不明とされているため[20]，すべてが堺産とは限らないが，「○」の刻印瓦には17世紀中葉から18世紀初頭の堺産の資料が含まれていると考えられる。また，「㊎」は今回の調査では確認されていないが，下屋敷の調査では出土している。1041・1042は方形枠に「堺大小路」の刻印がみられる。この刻印も堺環濠都市遺跡や下屋敷などで出土しており，堺産とみられる。これらの堺産の瓦は高知城跡内だけでなく西弘小路遺跡でも出土しており，藩関連の屋敷や近隣の上級武士の屋敷でも使用されている。[21]

1010～1013は陽刻となる刻印で，1010は「○に十字」，1011は「○に太」，1012は「○に大」，1013は「○に太」とみられる刻印が残る。いずれも大坂城跡などで同様な刻印瓦が出土しており，豊臣期から大坂城初期の瓦である可能性が指摘されている。[22]

(6) 鯱

鯱は2点が確認され，1075は18世紀中葉の大型土坑であるSX－9，1076は近代遺構から出土した。いずれも陶器製で尾鰭の一部が残存し，全面に錆釉を施している。寛文絵図で明確に鯱が描かれているのは天守と追手門のみで，城内の主要建物に鯱が使われていたものと思われる。『高知公園史』によると宝永4(1707)年の地震で北ノ口櫓門や塀・石垣が崩れ，正徳2(1712)年に修復している。[23]1075は18世紀中葉の大型土坑より出土しており，やや時期は異なるものの北ノ口櫓門に使われていた鯱が地震で倒壊し廃棄された可能性も一つの選択肢として考えられよう。

(7) おわりに

今回の調査で出土した瓦は，出土地点による時期差を認めることは出来ない状況であり，既存の

成果を援用し文様より分類を行ったため，正確な瓦の変遷や明確な時期を与えることはできなかった。しかしながら多量に出土した瓦を分類･整理することで，今後の研究の一助にはなったと考える。今後，さらに詳細な瓦の変遷や産地が明確になることを期待したい。

註

⑴ 高知県教育委員会　1982「高知公園史　武市佐市郎編」『史跡高知城跡　保存管理計画策定報告書』
⑵『四等士族上席勤役年譜』巻五十七，『御組入牒』2A　いずれも高知県立高知城歴史博物館蔵
⑶ 宇治市歴史資料館　2004『収蔵文書調査報告書6　上林春松家文書』
⑷ 山崎信二　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編　2008『近世瓦の研究』
⑸ 香川県教育委員会･財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　2003『高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ　第1分冊－サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊－』
⑹ 岡山市教育委員会　1997『史跡保存整備事業　史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告書』
⑺ 掛川市教育委員会戸塚和美氏にご教授頂いた。
⑻ 高知県教育委員会　1990『岡豊城跡－第1～5次発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財調査報告書第31集
⑼ ⑷に同じ。
⑽ 財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所　2012『佐賀藩蔵屋敷跡発掘調査報告書－大阪高地簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査業務報告書－』(図96－15)
⑾ ⑷に同じ。
⑿ 財団法人大阪市文化財協会　1998『住友銅吹所跡発掘調査報告書－住友銀行鰻谷新システムセンター建設に伴う発掘調査報告書－』
⒀ ⑷に同じ。
⒁ 堺市教育委員会　2000『堺市文化財調査概要報告第86冊』(第57図－1)
⒂ ⑷に同じ。P225
⒃ 堺市教育委員会　2001『堺市文化財調査概要報告第93冊』(第30図－382･383)
⒄ 高知県教育委員会･㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2010『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第114集(図40－93)
⒅ 岡山理科大学白石純氏に分析して頂いた。
⒆ ⒁に同じ。
⒇ ⒅に同じ。
(21) 高知市教育委員会　2010『西弘小路遺跡－総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知市文化財調査報告書第34集
(22) 櫻田小百合　2017「徳川期大坂城瓦の変遷試案」『大阪文化財研究所　研究紀要第18号』公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所
(23) ⑴に同じ。

参考文献

市川創　2015「徳川期大坂城の瓦」『大阪文化財研究所　研究紀要第16号』公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所
市川創　2017「大坂における近世瓦の生産と流通」『幕藩体制下の瓦－近世都市遺跡における生産と流通－』第66回埋蔵文化財研究集会発表要旨･資料集
財団法人大阪文化財研究所　2009『瓦屋町遺跡発掘調査報告書－新高津ビル建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
財団法人大阪市博物館協会　大阪文化財研究所　2012『佐賀藩蔵屋敷跡発掘調査報告書－大阪高地簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査業務報告書－』
高知県教育委員会　1994『史跡高知城跡1－御台所屋敷跡発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財調査報告書第37集

高知県教育委員会　2004『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書－』
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　1995『高知城跡−伝御台所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書−』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2002『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集
高知県教育委員会・㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2006『史跡高知城跡－丸ノ内緑地試掘確認調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第96集
高知県教育委員会・㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター　2010『史跡高知城跡－三ノ丸石垣整備事業に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第114集
高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2014『史跡高知城跡－追手門東北矢狭間塀石垣改修工事調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第141集
高知県・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2014『弘人屋敷跡－新資料館整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第140集
高知県教育委員会・高知市教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　2015『追手筋遺跡－図書館等複合施設建設に伴う発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第145集
高知市教育委員会　2010『西弘小路遺跡－総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知市文化財調査報告書第34集
高知市教育委員会　2017『帯屋町遺跡－高知県自治会館新庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知市文化財調査報告書第41集
高知県立図書館　1957『長宗我部地検帳　土佐郡上』

絵図所蔵

『寛文己酉高知絵図』　高知市立市民図書館平尾文庫所蔵
『高知城の圖』　高知市立市民図書館平尾文庫所蔵

遺物観察表

遺物観察表凡例

1.計測単位はcmまたはgで示している。数値は重量を除き復元値を含む。(　　)は残存値。
2.回転ナデ調整などの調整の文字は省略している。
3.胎土の赤色風化礫は赤礫と略している。

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
1	第Ⅰ層Ⅴ区	陶器碗	－	(5.1)	4.7	－	底部完存	にぶい黄橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。体部下半から高台は回転ケズリ，高台は削り出しで無釉。	肥前産1600～1610年代
2	第Ⅰ層Ⅴ区	陶器碗	－	(3.5)	4.9	－	底部ほぼ完存	浅黄橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台は削り出しで無釉。	肥前産1610～1630年代
3	第Ⅰ層Ⅶ区	陶器碗	－	(3.5)	4.1	－	底部完存	にぶい橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台は削り出しで無釉。	肥前産1590～1610年代
4	第Ⅰ層Ⅰ区	陶器中碗	－	(3.4)	4.7	－	1/3	にぶい褐色	灰釉透明釉	内外面に白化粧土による刷毛目文。	肥前産17世紀後葉～18世紀前半
5	第Ⅰ層Ⅲ区	陶器碗	－	(2.6)	5.2	－	底部完存	灰白色	灰釉	畳付を釉ハギ。	
6	第Ⅰ層Ⅳ区	陶器中碗	－	(4.3)	4.9	－	1/2	灰黄色	光沢のある灰釉貫入が入る	畳付を釉ハギ。	
7	第Ⅰ層Ⅴ区	陶器碗	－	(2.4)	5.9	－	1/2	灰白色	光沢のある灰釉	高台は削り出しで無釉。	瀬戸・美濃産
8	第Ⅰ層Ⅴ区	陶器皿	－	(1.8)	4.4	－	底部完存	灰白色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と畳付の一部に砂目痕。	肥前産1610～1630年代
9	第Ⅰ層Ⅰ区	陶器小皿	－	(1.6)	3.9	－	底部完存	灰褐色	灰釉か被熱し白色化	唐津系灰釉陶器。見込と高台内に砂目痕。	肥前産1610～1630年代
10	第Ⅰ層Ⅴ区	陶器皿	－	(1.6)	5.4	－	1/4	灰白色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と畳付に砂目痕。体部外面は回転ナデ。高台は削り出しで無釉。	肥前産1610～1630年代
11	第Ⅰ層Ⅴ区	陶器皿	－	(3.1)	6.0	－	4/5	灰黄色	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台は削り出しで無釉。	肥前産1600～1610年代
12	第Ⅰ層Ⅲ区	陶器鉢または瓶	－	(4.0)	8.4	－	1/4	灰黄色	外面灰釉内面の一部に灰釉	内面は回転ナデ。畳付を釉ハギし，砂付着。	
13	第Ⅰ層Ⅴ区	陶器擂鉢	23.5	(4.8)	－	－	1/6	褐灰色	－	焼締。内面に僅かに擂目。口縁部外面に凹線が２条。回転ナデ。	備前焼17世紀前葉
14	第Ⅰ層Ⅵ区	陶器擂鉢	33.0	(6.1)	－	－	一部残存	褐灰色	－	焼締。口縁部に片口。内面に10条単位の擂目。口縁部外面に凹線が2条と重ね焼痕。回転ナデ。	備前焼17世紀前葉
15	第Ⅰ層Ⅵ区	陶器擂鉢	－	(9.3)	12.3	－	一部残存	灰白色	－	焼締。内面に摩耗する擂目。体部は回転ナデ。体部下半は回転ケズリ。外底は無調整。	備前焼17世紀前半
16	第Ⅰ層Ⅰ区	陶器甕	19.2	(12.8)	－	胴径25.6	1/5	灰褐色	－	焼締。口縁部は受口状。胴部に沈線。回転ナデ。	備前焼か
17	第Ⅰ層Ⅵ区	陶器窯道具ハマ	9.4	1.6	5.5	－	1/6	灰黄色	口縁部に鉄釉	上面から体部は回転ナデ。底部は回転ケズリ。	
18	第Ⅰ層Ⅳ区	磁器染付小碗	9.7	(3.0)	－	－	1/8	灰白色	透明釉	内面に雷文，外面に草花文の染付。	肥前系19世紀
19	第Ⅰ層Ⅶ区	磁器染付碗	－	(4.0)	6.0	－	1/4	灰白色	透明釉	広東形。見込に亀文の染付とピン痕。外面に圏線と染付の一部が残る。高台内に「サ」銘。畳付を釉ハギ。	能茶山窯1820年代～幕末
20	第Ⅰ層Ⅳ区	磁器色絵皿	－	(2.4)	4.7	－	1/4	灰白色	透明釉	見込は二重圏線内に花文の染付，外面に蝶文とみられる朱色の色絵，高台外面に圏線と櫛歯文の染付，高台内に銘。	肥前産19世紀
21	第Ⅰ層Ⅳ区	磁器色絵皿	－	(5.2)	7.5	－	1/2	灰白色	透明釉	見込に朱色で菊文の色絵と染付，外面に圏線の染付と文様の一部が残る。畳付を釉ハギ。	肥前産19世紀前半
22	第Ⅰ層Ⅴ区	磁器色絵皿	－	(3.8)	9.4	－	1/2	白色	透明釉	口縁輪花形。型打成形。蛇ノ目凹形高台。内面に朱と茶色の色絵と菊文の染付，外面に染付。高台内に「年製」の銘。	肥前産　有田18世紀後半

遺物観察表 2

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
23	第Ⅰ層Ⅱ区	磁器染付小皿	－	(2.7)	6.3	－	底部完存	灰白色	透明釉	蛇ノ目凹形高台。見込に草花文，外面に花文と圏線の染付。	肥前産 19世紀
24	第Ⅰ層Ⅳ区	磁器色絵皿	15.9	(5.4)	－	－	1/6	灰白色	透明釉	口縁輪花形。内外面に朱色の花文の色絵，内面に窓絵と四方襷文の染付，外面に窓絵と四方襷文・源氏香の染付。	肥前産 19世紀
25	第Ⅰ層Ⅴ区	磁器中皿	－	(2.7)	－	－	一部残存	灰白色	青磁釉	青磁。内面に陽刻による文様，外面に陰刻による圏線。	肥前産 1650～1660年代
26	第Ⅰ層Ⅵ区	磁器皿	－	(1.5)	9.1	－	一部残存	灰白色	青磁釉	青磁。見込にヘラ彫による文様。高台内錆釉刷毛塗。	肥前産　波佐見 1640～1660年代
27	第Ⅰ層Ⅴ区	磁器中皿	－	(3.7)	15.0	－	一部残存	灰白色	青磁釉	青磁。高台内を蛇ノ目釉ハギし，錆釉。重ね焼痕。	肥前産　波佐見 1650～1660年代
28	第Ⅰ層Ⅳ区	磁器染付中皿	－	(2.8)	14.3	－	1/8	灰白色	透明釉	内面に土坡と草文・圏線，外面に文様と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 18世紀前半
29	第Ⅰ層Ⅱ区	磁器染付蓋物蓋	10.5	(3.7)	笠径 12.8	－	1/5 摘欠損	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線の染付。かえり部を釉ハギ。	肥前産　有田 18世紀前半
30	第Ⅰ層Ⅲ区	磁器小杯	5.8	3.8	2.4	－	底部完存	灰白色	白磁釉	白磁。端反形。外面に丸彫による縞文。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1640～1650年代
31	第Ⅰ層Ⅲ区	磁器染付小杯	7.0	(3.3)	－	－	1/4	灰白色	透明釉	端反形。外面に草花文の染付。	肥前産 17世紀後葉～18世紀前半
32	第Ⅰ層Ⅲ区	磁器色絵猪口	10.0	(3.5)	－	－	1/3	灰白色	透明釉	折縁形。口錆。口縁部内面に朱と黒色の花文，外面に朱と黒色の菊文の上絵付。	肥前産　有田 18世紀初頭
33	第Ⅰ層Ⅲ区	磁器染付蓋物	7.6	3.2	6.9	－	1/2	灰白色	透明釉	段重か。外面に山水風景文と圏線の染付。口縁部と外底脇を釉ハギ。	肥前系 江戸後期
34	第Ⅰ層Ⅱ区	磁器染付瓶	－	(11.6)	－	胴径 14.7	1/3	灰白色	口縁部内面から外面に透明釉	端反辣韮形。外面に梅樹と笹文の染付。内面は回転ナデで無釉。	肥前系 19世紀
35	第Ⅰ層Ⅰ区	磁器壺	6.8	(5.5)	－	胴径 11.2	1/2	灰白色	口縁部内面から外面に青磁釉	青磁。口縁端部を釉ハギ。胴部内面は回転ナデで無釉。煤付着。	肥前産　有田 18世紀前半
36	第Ⅰ層Ⅴ区	青磁碗	－	(2.7)	5.2	－	底部完存	灰白色	内面から高台内に青磁釉	見込はスタンプによる花文，内面に陰刻による圏線と文様。高台内を輪状に釉ハギし，輪状に粘土付着。	中国産　龍泉窯系 14世紀末～15世紀
37	第Ⅰ層Ⅴ区	土師質土器椀	－	(3.1)	4.8	－	1/5	灰白色	－	輪高台を貼付。回転ナデか。摩耗するため調整不明瞭。	
38	第Ⅰ層Ⅴ区	土師質土器杯	－	(2.1)	6.0	－	1/3	黄灰色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
39	第Ⅰ層Ⅴ区	土師質土器杯	－	(1.2)	6.2	－	1/3	暗灰色	－	著しく摩耗するため調整不明。	
40	第Ⅰ層Ⅴ区	土師質土器杯	－	(2.3)	2.5	－	底部完存	にぶい橙色	－	柱状高台。内面は回転ナデ。外面は著しく摩耗するため調整不明。	
41	第Ⅰ層Ⅵ区	土師質土器台付杯	－	(2.9)	6.3	－	1/3	浅黄橙色	－	高い脚が付く。脚は横方向のナデ。その他は著しく摩耗するため調整不明。	
42	第Ⅰ層Ⅲ区	土師器焼塩壺	－	(4.4)	4.0	(5.4)	底部完存	にぶい褐色	－	輪積成形。内面は粗雑なナデで布目痕，外面はナデで指頭圧痕，外底に板状圧痕が残る。	関西産 17世紀
43	第Ⅰ層Ⅴ区	土製品土錘	全長 3.6	全幅 1.5	全厚 1.4	重量 5.2	完存	にぶい黄橙色	－	紡錘形。須恵質。摩耗するため調整不明。孔径0.5cm。	
44	第Ⅰ層Ⅰ区	木製品木簡	全長 16.0	全幅 3.1	全厚 0.5	－	完存	－	－	長方形で上部左右に切り込み。表面に「秦泉(ヵ)寺(ヵ)□□」，裏面に「秦…」の墨書。両面に粗い加工痕。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
45	第Ⅰ層 Ⅵ区	金属製品 銭貨	銭径 2.44	孔径 0.57	銭厚 0.12	重量 3.14	完形	−	−	寛永通寶。新寛永。内径1.97㎝。	
46	第Ⅱ層 Ⅶ区	陶器 碗	−	(4.3)	4.5	−	底部完存	にぶい褐色	鉄釉	唐津系鉄釉陶器。外面体部下半は回転ケズリで無釉。	肥前産 17世紀前半
47	第Ⅱ層 Ⅰ区	陶器 中碗	−	(5.0)	5.2	−	1/3	灰黄色	灰釉	外面に錆絵。外面体部下半から高台は削り出しで無釉。	
48	第Ⅱ層 Ⅲ区	陶器 碗	−	(3.5)	5.4	−	底部完存	灰白色	灰釉	畳付を釉ハギし，砂付着。	
49	第Ⅱ層 Ⅳ区	陶器 皿	−	(3.1)	−	−	一部残存	淡黄色	長石釉	志野織部。内面に鉄錆による文様。	美濃産 17世紀
50	第Ⅱ層 Ⅰ区	陶器 小皿	−	(2.5)	4.3	−	底部ほぼ完存	にぶい褐色	灰釉	絵唐津。見込に錆絵と胎土目痕。外面は回転ナデ。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1600～1610年代
51	第Ⅱ層 Ⅰ区	陶器 小皿	−	(1.5)	3.8	−	1/2	黄灰色	内面灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。高台は削り出しで無釉。外面は回転ナデ。	肥前産 1590～1610年代
52	第Ⅱ層 Ⅳ区	陶器 小皿	−	(1.1)	4.7	−	1/2	にぶい橙色	内面灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。外面は回転ケズリで無釉。畳付に糸切痕。	肥前産 1610～1630年代
53	第Ⅱ層 Ⅰ区	陶器 小皿	−	(1.2)	4.5	−	底部完存	にぶい黄橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と畳付に砂目痕。高台は無釉。	肥前産 1610～1630年代
54	第Ⅱ層 Ⅳ区	陶器 皿	−	(1.9)	4.4	−	1/5	灰白色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と畳付に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
55	第Ⅱ層 Ⅰ区	陶器 角皿	(13.7)	(3.5)	−	−	一部残存	灰白色	脚裾部を除き灰釉	型打成形。脚が付く。	尾戸窯か
56	第Ⅱ層 Ⅰ区	陶器 中皿	−	(3.9)	10.4	−	1/2	にぶい赤褐色	内面灰釉	刷毛目二彩手。内面に白化粧土による刷毛目文と緑釉流し掛け。見込に砂目痕。外面は無釉。	肥前産 17世紀後半
57	第Ⅱ層 Ⅲ区	陶器 擂鉢	34.2	(7.2)	−	−	1/8	赤褐色	−	焼締。口縁部に凹線が2条。回転ナデで，体部外面は回転ケズリを加える。内面に密に擂目。	
58	第Ⅱ層 Ⅰ区	陶器 甕	11.8	(3.3)	−	−	一部残存	灰黄色	灰釉	外面肩部に沈線が3条。体部内面はナデで指頭圧痕が残り，無釉。	
59	第Ⅱ層 Ⅳ区	陶器 甕	−	(6.2)	−	−	一部残存	にぶい赤褐色	−	焼締。口縁部は玉縁形。回転ナデ。	備前焼
60	第Ⅱ層 Ⅳ区	陶器 甕か	−	(4.6)	34.4	−	一部残存	にぶい橙色 砂粒多含	−	焼締。内外面に横方向のナデ。	
61	第Ⅱ層 Ⅳ区	陶器 窯道具か	全長 (6.7)	全幅 (5.8)	全厚 2.8	−	一部残存	浅黄橙色	−	板状で半円形。径1.9㎝の円孔。両面にケズリ，側面はナデとケズリ，板状圧痕が残る。	
62	第Ⅱ層 Ⅰ区	磁器染付 中碗	−	(4.8)	4.4	−	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に圏線と染付の一部が残る。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 1660～1680年代
63	第Ⅱ層 Ⅰ区	磁器染付 小碗	12.0	(4.8)	−	−	1/3	灰白色	透明釉	広東形。内面に圏線，外面は区画割に草花文の染付。	肥前産 18世紀後半
64	第Ⅱ層 Ⅰ区	磁器染付 中碗	11.0	6.1	4.7	−	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に人物と建物・草花文，高台内に草花文と圏線の染付。	肥前産　有田 18世紀前半
65	第Ⅱ層 Ⅰ区	磁器染付 小碗	8.3	(6.5)	−	−	1/4	灰白色	透明釉	筒形。外面に梅文の染付。	肥前産 1610～1630年代
66	第Ⅱ層 Ⅳ区	磁器 碗	−	(2.6)	5.7	−	1/2	灰白色 黒色砂粒含	内面から高台外面に青磁釉	青磁。高台内に錆釉。	

遺物観察表 4

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
67	第Ⅱ層Ⅴ区	磁器色絵皿	13.5	(2.1)	−	−	一部残存	灰白色	透明釉	内面は濃地に唐草文の染付，外面に色絵の痕跡。被熱。	肥前産　有田 1650～1660年代
68	第Ⅱ層Ⅳ区	磁器染付変形皿	全幅 (11.8)	3.2	5.8	−	1/2	灰白色	透明釉	ロクロ成形後，型打成形。内面に斜格子地に蝶文，外面に点繋文の染付。畳付を釉ハギ。	肥前系 19世紀
69	第Ⅱ層Ⅱ区	磁器皿	−	(4.3)	−	−	一部残存	灰白色	青磁釉	青磁。内外面にヘラ彫による文様。	肥前産 1640～1660年代
70	第Ⅱ層Ⅰ区	磁器染付小皿	13.6	4.6	8.2	−	1/4	灰白色	透明釉	口縁輪花形。内面に草花文と圏線，外面に唐草文と圏線，高台内に銘と圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 18世紀前半
71	第Ⅱ層Ⅰ区	磁器染付五寸皿	14.4	4.0	8.2	−	1/4	灰白色	透明釉	内面に草花文と圏線，外面に唐草文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 18世紀前葉～中葉
72	第Ⅱ層Ⅰ区	磁器染付碗蓋	10.2	2.6	−	摘径 5.8	1/2	灰白色	透明釉	広東形。内面に「寿」字と二重圏線，外面に暦手文の染付。	肥前産　有田 1790～1810年代
73	第Ⅱ層Ⅰ区	磁器染付小杯	6.9	(3.5)	−	−	1/4	灰白色	透明釉	端反形。外面に松葉文の染付か。	肥前産 17世紀後半
74	第Ⅱ層Ⅰ区	磁器染付小瓶	−	(3.1)	2.4	胴径 4.2	底部完存	灰白色	外面透明釉	内面は回転ナデで無釉。外面に梅文と笹文の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 19世紀前半
75	第Ⅱ層Ⅰ区	青磁皿	−	(3.1)	−	−	一部残存	灰白色	青磁釉	口縁部内面に陰刻による圏線。	中国産
76	第Ⅱ層Ⅳ区	土師質土器椀	−	(1.3)	−	−	一部残存	橙色	−	輪高台を貼付。摩耗するため調整不明。	12世紀
77	第Ⅱ層Ⅳ区	土師質土器椀	−	(1.9)	6.3	−	1/3	灰白色	−	輪高台を貼付。高台は横方向のナデ，高台内はナデ，内外面は摩耗するため調整不明。	12世紀
78	第Ⅱ層Ⅶ区	土師質土器椀	−	(1.8)	6.6	−	1/4	灰白色	−	断面半円形の輪高台を貼付。著しく摩耗するため調整不明。	12世紀
79	第Ⅱ層Ⅶ区	土師質土器杯	−	(1.8)	5.0	−	1/4	淡赤橙色	−	水挽成形。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
80	第Ⅱ層Ⅰ区	土師質土器皿	11.5	1.5	7.5	−	1/3	橙色 金雲母含	−	回転ナデ。底部の切り離しは回転ヘラ切り。	古代か
81	第Ⅱ層Ⅱ区	土師質土器小皿	−	(1.0)	4.7	−	1/2	橙色	−	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	中世
82	第Ⅱ層Ⅰ区	土師器杯か	−	(1.7)	11.0	−	1/6	にぶい橙色	−	輪高台を貼付。摩耗するため調整不明。	古代
83	第Ⅱ層Ⅰ区	土師器焙烙	30.2	(5.7)	−	−	1/6	にぶい黄褐色 金雲母・赤礫含	−	底部は型押成形で無調整。口縁部と内面は回転ナデ。口縁部外面に煤付着。	関西系
84	第Ⅱ層Ⅶ区	須恵器椀	15.4	(5.5)	−	−	一部残存	灰白色	−	回転ナデ後，内面にミガキ。外面に火襷。	
85	第Ⅱ層Ⅱ区	須恵器壺	−	(7.0)	−	胴径 (13.9)	1/4 高台欠損	灰色	−	回転ナデ。	古代
86	第Ⅱ層Ⅶ区	瓦質土器鍋	19.2	(5.1)	−	胴径 20.7	一部残存	灰白色	−	口縁部は直立。内面は横方向のナデ。外面は指頭圧痕が残るが摩耗するため調整不明。	15世紀
87	第Ⅱ層Ⅳ区	土製品泥面子	全長 2.3	全幅 2.3	全厚 0.6	重量 3.2	一部欠損	にぶい黄橙色	−	型押成形。上面は型押による「福」字，下面はナデ。	
88	第Ⅱ層Ⅳ区	土製品泥面子	全長 2.3	全幅 2.5	全厚 0.7	重量 4.0	完存	にぶい橙色	−	型押成形。上面は型押による花文，下面はナデで指頭圧痕が残る。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
89	第Ⅱ層Ⅳ区	土製品泥面子	全長2.3	全幅2.4	全厚0.7	重量4.0	完存	にぶい黄橙色	－	型押成形。上面は型押による古銭文様か。下面はナデで指頭圧痕が残る。	
90	第Ⅱ層Ⅳ区	土製品泥面子	全長2.3	全幅2.4	全厚0.6	重量3.6	一部欠損	橙色	－	型押成形。上面は型押による「相原」字，下面はナデで指頭圧痕が残る。	
91	第Ⅱ層Ⅳ区	土製品箱庭道具	全長(3.4)	全幅2.9	全厚(2.9)	－	底部完存	橙色	透明釉	堂形。型押成形。一部ナデ。外面の下部は白色と緑色の釉で彩色。下面は凹み，ナデで指頭圧痕が残り，無釉。	
92	第Ⅱ層Ⅰ区	木製品木簡	全長(8.6)	全幅3.0	全厚0.4	－	一部残存	－	－	片面に「定来(米ヵ)」の墨書。	
93	第Ⅱ層Ⅰ区	木製品舟形	全長17.4	全幅5.6	全厚3.3	－	完存	－	－	刳物。上面中央に方形の凹み。凹み内に貫通しない0.3cmの円孔。船首と船尾に切り込み。全面に加工痕。板目。	
94	第Ⅱ層Ⅳ区	金属製品銭貨	銭径2.30	孔径0.64	銭厚0.10	重量1.76	完存	－	－	寛永通寶。古寛永か。内径1.93cm。	
95	第Ⅱ層Ⅳ区	金属製品銭貨	銭径2.24	孔径0.59	銭厚0.13	重量2.33	完存	－	－	寛永通寶。新寛永。内径1.74cm。	1697年以降鋳銭
96	第Ⅱ層Ⅳ区	金属製品銭貨	銭径2.41	孔径0.60	銭厚0.13	重量2.56	完存	－	－	寛永通寶。内径1.95cm。	
97	第Ⅱ層Ⅳ区	金属製品銭貨	銭径2.40	孔径0.60	銭厚0.19	重量3.82	完存	－	－	寛永通寶。内径1.98cm。	
98	第Ⅱ層Ⅳ区	金属製品銭貨	銭径2.41	孔径0.60	銭厚0.28	重量5.04	完存	－	－	2枚が癒着。1枚は寛永通寶で新寛永。内径1.88cm。	1697年以降鋳銭
99	第Ⅱ層Ⅳ区	金属製品銭貨	銭径2.46	孔径0.54	銭厚0.44	重量4.17	一部欠損	－	－	2枚が癒着。いずれも寛永通寶。1枚は新寛永か。内径1.95cm。	1697年以降鋳銭
100	第Ⅱ層Ⅳ区	金属製品銭貨	銭径2.81	孔径0.62	銭厚1.10	重量15.53	完存	－	－	4～5枚が癒着。寛永通寶。内径2.06cm。	
101	第Ⅲ層Ⅳ区	青磁碗	－	(1.8)	4.9	－	1/4	灰白色	内面から高台外面に青磁釉	高台内は削り出しで無釉。	中国産龍泉窯系
102	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器椀	－	(2.3)	7.0	－	1/4	浅黄橙色	－	平高台。回転ナデか。摩耗するため一部は不明瞭。底部の切り離しは回転糸切り。	10～11世紀
103	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器椀	－	(2.9)	6.3	－	底部完存	橙色	－	平高台。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切りで，板状圧痕が残る。	11～12世紀
104	第Ⅲ層Ⅳ区	土師質土器椀	－	(1.5)	－	－	一部残存	灰白色	－	輪高台を貼付。高台は横方向のナデ，内面は摩耗するため調整不明。	11世紀
105	第Ⅲ層Ⅴ区	土師質土器椀	－	(2.3)	5.7	－	1/3	明褐灰色	－	輪高台を貼付。高台脇は回転ケズリか。摩耗するため調整不明瞭。	12世紀
106	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器椀	－	(1.4)	6.0	－	1/2	灰白色	－	断面方形の低い輪高台を貼付。高台は横方向のナデ。その他は著しく摩耗するため調整不明。	
107	第Ⅲ層Ⅳ区	土師質土器椀	－	(1.7)	6.8	－	3/4	にぶい黄橙色	－	輪高台を貼付。高台は横方向のナデ。摩耗するため調整不明。	12世紀
108	第Ⅲ層Ⅴ区	土師質土器椀	－	(1.8)	7.8	－	1/4	にぶい橙色赤礫含	－	輪高台を貼付。高台付近は横方向のナデ。内面は摩耗するため調整不明。	12世紀
109	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器椀	－	(2.5)	5.4	－	1/2	灰黄色金雲母含	－	扁平な輪高台を貼付。高台は横方向のナデ，底部の切り離しは回転糸切り。内面と体部外面は摩耗する。	12世紀
110	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器杯	－	(2.2)	4.0	－	底部完存	浅黄橙色	－	摩耗するため調整不明。	

遺物観察表6

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
111	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器杯	－	(1.3)	6.4	－	底部完存	褐灰色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。底部に亀裂。見込に煤付着。	
112	第Ⅲ層Ⅳ区	土師質土器杯	－	(2.6)	8.2	－	1/6	灰色	－	回転ナデか。摩耗するため調整不明。	
113	第Ⅲ層Ⅳ区	土師質土器杯	－	(1.8)	4.8	－	1/4	灰色	－	底部の切り離しは回転糸切り。摩耗するため調整不明。	11～12世紀
114	第Ⅲ層Ⅳ区	土師質土器杯	－	(1.6)	5.6	－	1/2	にぶい黄橙色	－	平高台。底部の切り離しは回転糸切り。摩耗するため調整不明。	10～11世紀
115	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器小皿	10.0	2.2	6.0	－	1/2	灰黄褐色金雲母含	－	回転ナデ後，内面の一部にナデ。底部の切り離しは回転ヘラ切りで，のち一部ナデ。	
116	第Ⅲ層Ⅶ区	土師質土器台付小皿	－	(1.9)	－	－	一部残存	灰白色	－	摩耗するため調整不明。	
117	第Ⅲ層Ⅶ区	土師器製塩土器か	－	全幅(4.7)	－	－	一部残存	浅黄色	－	内面に布目圧痕が残る。外面はナデか。摩耗するため調整不明瞭。	
118	第Ⅲ層Ⅳ区	須恵器杯	－	(2.6)	6.6	－	1/5	灰白色	－	輪高台を貼付。回転ナデで，見込にナデ，外面に回転ケズリを加える。	9世紀
119	第Ⅲ層Ⅳ区	須恵器皿	－	(2.2)	－	－	一部残存	灰色	－	口縁部内面に僅かに稜を有する。回転ナデ。外底はナデか。	9世紀
120	第Ⅲ層Ⅳ区	須恵器蓋	－	(1.7)	－	－	一部残存	灰白色	－	回転ナデ。外面の一部にケズリを加える。口縁部に自然釉。	9世紀
121	第Ⅲ層Ⅶ区	須恵器甕	23.6	(5.5)	－	－	一部残存	黄灰色	－	頸部内面の一部は横方向のハケ後ナデ。口縁部は外面に平行タタキ後，回転ナデ。	
122	第Ⅲ層Ⅳ区	須恵器壺または瓶	－	(3.7)	5.3	－	1/6	灰白色粗砂多含	－	回転ナデで，外底に不定方向のケズリを加える。	6世紀
123	第Ⅲ層Ⅶ区	瓦器椀	13.7	(2.8)	－	－	一部残存	灰白色	－	口縁部内面に沈線。内面は密な平行ミガキ，外面は口縁部に横ナデ，体部にナデ後やや粗いミガキ。	楠葉型12世紀後半
124	第Ⅲ層Ⅴ区	瓦質土器鍋	22.0	(3.1)	－	－	一部残存	黄灰色	－	口縁部は受口状。体部内面は横方向のナデ，口縁部は横ナデ，体部外面に煤付着，調整不明。	畿内産13世紀後半
125	第Ⅲ層Ⅶ区	瓦質土器釜	19.0	(7.3)	－	胴径21.4	一部残存	黄灰色	－	断面三角形の鍔。ナデで，内面は一部ヘラナデ，口縁部は横ナデ，鍔は横方向のナデ，外面に指頭圧痕が残る。	土佐型15世紀前半
126	第Ⅲ層Ⅴ区	土製品土錘	全長4.9	全幅2.1	全厚1.9	重量22.7	完存	灰色	－	紡錘形。須恵質。ナデで指頭圧痕が残る。孔径0.6cm。	
127	第Ⅳ−6層Ⅳ区	土製品土錘	全長4.5	全幅1.3	全厚1.1	重量5.7	完存	にぶい橙色	－	紡錘形。ナデ。孔径0.4cm。	
128	第Ⅳ−6層Ⅳ区	木製品漆器椀	16.6	(5.3)	－	－	1/3	－	－	内外面赤塗。	樹種はクリ
129	SD－3	白磁皿	－	(1.6)	－	－	一部残存	白色	白磁釉	内面に陰刻による文様。	中国産
130	SD－3下層	土師器蓋	－	(2.0)	－	－	一部残存	灰黄色	－	回転ナデ。	8世紀
131	SD－3上層	土師器壺	－	(3.8)	11.5	－	1/6	淡橙色赤礫・チャート含	－	内面及び体部外面は横方向のナデ。外底は無調整か。摩耗するため調整不明。	
132	SD－3	須恵器甕	－	(5.3)	17.3	－	一部残存	黄灰色	－	内面はナデで指頭圧痕が残る。体部外面はタタキ後ナデ，外底は無調整とみられ，圧痕が残り，砂付着。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
133	SD－3 上層	瓦器 椀	15.2	(3.5)	－	－	一部残存	灰白色	－	口縁部内面に沈線。内面は緻密な平行ミガキ，口縁部外面は横ナデ，体部外面はナデで指頭圧痕のち分割ミガキ。	楠葉型 12世紀前葉
134	SD－3	土製品 土錘	全長 4.8	全幅 1.6	全厚 1.4	重量 7.6	ほぼ完存	にぶい橙色	－	紡錘形。ナデで指頭圧痕が残る。孔径 0.6cm。	
135	SD－3	土製品 土錘	全長 (5.4)	全幅 1.5	全厚 1.4	重量 8.5	ほぼ完存	にぶい黄橙色	－	紡錘形。ナデで指頭圧痕が残る。孔径 0.6cm。	
136	SD－4	白磁 碗	－	(2.5)	－	－	一部残存	灰白色	白磁釉	口縁部は小さな玉縁形。	中国産
137	SD－4 下層	白磁 碗	14.2	(2.7)	－	－	一部残存	灰白色	白磁釉	口縁部は玉縁形。	中国産 11～12世紀
138	SD－4 下層	白磁 碗	12.9	(2.4)	－	－	一部残存	灰白色	白磁釉	口縁端部を外へ細く摘む。	中国産
139	SD－4	白磁 皿	10.3	(2.4)	－	－	一部残存	灰白色	白磁釉	内面に陰刻による花文。	中国産 12世紀か
140	SD－4	白磁 皿	9.8	(2.6)	－	－	1/6	灰白色	白磁釉	内面に陰刻による花文。	中国産 12世紀か
141	SD－4	土師質土器 椀	－	(2.5)	6.4	－	一部残存	にぶい黄橙色	－	輪高台を貼付。回転ナデ。高台外側は回転ケズリ。高台と高台内は横方向のナデ。	12世紀
142	SD－4	土師質土器 椀	－	(4.0)	6.2	－	底部完存	灰白色	－	輪高台を貼付。ナデ後内面にヘラナデ，外面にミガキ。高台脇は回転ケズリ。高台は横方向のナデ，高台内はナデ。	12世紀
143	SD－4 下層	土師質土器 椀	－	(1.3)	5.4	－	底部完存	灰白色	－	断面方形の低い輪高台を貼付。内面は回転ナデ，高台は横方向のナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	12世紀
144	SD－4	土師質土器 椀	－	(1.7)	6.5	－	一部残存	淡赤橙色	－	輪高台を貼付。高台は横方向のナデ。内面は著しく摩耗するため調整不明。	12世紀
145	SD－4	土師質土器 杯	－	(1.8)	5.4	－	底部完存	灰白色	－	底部の切り離しは回転糸切り。著しく摩耗するため調整不明。	10～11世紀
146	SD－4	土師質土器 杯	－	(1.6)	6.8	－	1/4	にぶい黄橙色　赤礫・金雲母含	－	底部の切り離しは回転糸切りで，外底に板状圧痕が残る。著しく摩耗するため調整不明。	
147	SD－4 下層	土師質土器 杯	－	(2.2)	6.5	－	1/4	暗灰色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
148	SD－4	土師質土器 杯	－	(2.5)	8.0	－	1/3	にぶい橙色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
149	SD－4 上層	土師質土器 杯	11.7	3.4	6.0	－	1/6	にぶい黄橙色	－	著しく摩耗するため調整不明。	
150	SD－4 上層	土師質土器 杯	－	(1.5)	4.2	－	底部完存	褐灰色 赤礫・金雲母含	－	柱状高台か。回転ナデか。内面は摩耗するため調整不明。底部の切り離しは回転糸切り。	
151	SD－4 上層	土師質土器 杯	－	(2.2)	5.6	－	底部完存	灰白色	－	柱状高台。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
152	SD－4	土師質土器 杯	－	(2.5)	4.6	－	底部完存	灰白色	－	柱状高台。著しく摩耗するため調整不明。底部の切り離しは回転糸切り。	
153	SD－4 下層	土師質土器 杯	－	(2.7)	4.3	－	底部完存	灰色	－	柱状高台。著しく摩耗するため調整不明。底部の切り離しは回転糸切り。	
154	SD－4 上層	土師質土器 杯	－	(2.9)	6.0	－	底部完存	灰黄色	－	柱状高台。中空。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	

遺物観察表８

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
155	SD－4上層	土師質土器小皿	6.9	1.6	4.5	－	底部完存	灰黄色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転ヘラ切り。	
156	SD－4	土師質土器小皿	7.8	1.8	4.4	－	1/3	にぶい黄橙色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。見込に僅かに煤付着。	
157	SD－4	土師質土器小皿	8.1	1.4	5.9	－	1/2	にぶい黄橙色	－	回転ナデか。外面は摩耗するため不明。底部の切り離しは回転糸切り。	
158	SD－4	土師質土器小皿	8.9	1.6	6.4	－	1/6	灰黄褐色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
159	SD－4上層	土師器蓋	－	(1.2)	－	－	一部残存	にぶい黄橙色	－	著しく摩耗するため調整不明。	8世紀
160	SD－4	土師器甕	－	(3.7)	－	－	一部残存	にぶい黄褐色長石含	－	内面は横方向のハケ。外面は縦方向のハケか。著しく摩耗するため不明瞭。	8世紀搬入品か
161	SD－4	土師器甕	－	(3.0)	－	－	一部残存	にぶい橙色	－	口縁部内外面にハケ，口縁端部は横ナデ，頸部外面はナデ。	9世紀搬入品か
162	SD－4上層	須恵器杯	－	(1.8)	8.2	－	1/6	灰白色	－	回転ナデ。高台は横方向のナデ。高台内はナデ。	8世紀
163	SD－4	須恵器壺	－	(2.4)	－	－	一部残存	黄灰色	－	回転ナデ。	8世紀
164	SD－4下層	須恵器壺	－	(7.0)	11.0	－	1/8	灰黄色	－	高台貼付。内面は当具痕のちナデ，外面は格子目タタキ後，回転ナデで，一部に指頭圧痕。高台は横方向のナデ。	8世紀
165	SD－4	須恵器甕	－	(3.8)	－	－	一部残存	灰白色	－	回転ナデ。外面に自然釉。	
166	SD－4	須恵器甕	－	(7.5)	－	(28.5)	一部残存	灰色	－	内面はナデ，外面は横方向のケズリ。	8世紀
167	SD－4	瓦質土器鍋	－	(1.6)	－	－	一部残存	灰色	－	口縁部は受口状。横ナデ。外面に煤付着。	畿内産13世紀後半
168	SD－4	石製品砥石	全長(11.8)	全幅(5.7)	全厚(3.0)	重量320.1	一部残存	－	－	断面五角形。3面に使用痕。砂岩。	
169	SD－4	木製品加工木	全長25.9	全幅4.3	全厚3.9	－	完存	－	－	170と組か。先端は膨らみ丸く，基部は二又。断面は先端が三角形，軸部と基部は方形。組み合わせ式。一木造り。	
170	SD－4	木製品加工木	全長26.3	全幅3.9	全厚3.7	－	完存	－	－	169と組か。先端は膨らみ丸い。断面は先端が三角形，軸部は方形，基部はL字形。組み合わせ式。一木造り。	
171	SD－4	瓦平瓦	全長(9.8)	全幅(8.4)	全高(2.5)	重量198.0	一部残存	灰黄色	－	凹面に布目圧痕が残る。凸面は縄目状タタキ。	古代または中世
172	SD－6	土師質土器椀	－	(2.4)	6.1	－	底部完存	にぶい橙色　赤礫・金雲母含	－	平高台。底部の切り離しは回転糸切り。著しく摩耗するため調整不明。	10～11世紀
173	SD－7上層	陶器壺	－	(5.7)	13.4	－	一部残存	灰褐色	－	焼締。内面は粗雑なナデ，外面は横方向のケズリ，下部はナデで指頭圧痕が残る。外底は無調整で砂付着。	備前焼
174	SD－7上層	土師質土器椀	－	(2.2)	6.6	－	1/3	にぶい黄橙色	－	平高台。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	11～12世紀
175	SD－7上層	土師質土器椀	－	(2.7)	6.5	－	1/3	灰色	－	平高台。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	11～12世紀
176	SD－7上層	土師質土器小皿	7.4	2.3	4.2	－	一部欠損	灰黄褐色	－	回転ナデで，見込にナデを加える。底部の切り離しは回転糸切り。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
177	SD－7 上層	土師質土器 小皿	7.4	2.7	4.0	－	1/8	灰白色	－	柱状高台。回転ナデか。内面の調整は摩耗するため不明瞭。底部の切り離しは回転糸切り。	
178	SD－7 下層	土師器 釜	22.0	(4.3)	－	(24.0)	一部残存	にぶい褐色	－	口縁部外面に断面三角形の鍔。内面は横方向のナデ，口縁部は横ナデ，外面はタタキ。外面に煤付着。	播磨型 15世紀
179	SD－7 上層	土師器 釜	23.0	(3.6)	－	(26.0)	一部残存	にぶい赤褐色	－	口縁部外面に断面三角形の鍔。横方向のナデ及び横ナデ。外面に煤付着。	播磨型 15世紀
180	SD－7 上層	土師器 甕	30.8	(5.7)	－	－	1/10	明赤褐色 長石･チャート･金雲母含	－	内面は横方向のナデ及び横ナデ。口縁部外面はナデで，指頭圧痕と一部にハケが残る。	搬入品か
181	SD－7 上層	須恵器 椀	－	(2.2)	(6.3)	－	1/5	にぶい黄橙色	－	輪高台を貼付。回転ナデで，内面にナデ。高台は横方向のナデ，高台内はナデ。内面に火襷。	10～11世紀
182	SD－7 上層	須恵器 甕	－	(6.3)	－	－	一部残存	黄灰色	－	内面体部から頸部は横方向のナデ，口縁部は回転ナデ，体部外面は平行タタキ。	
183	SD－7 下層	須恵器 甕	－	(8.5)	－	－	一部残存	黄灰色	－	内面は横方向のナデ，頸部に指頭圧痕が残る。外面は細かい平行タタキ。	
184	SD－7 上層	土製品 土錘	全長 4.9	全幅 1.1	全厚 0.9	重量 4.7	ほぼ完存	灰黄色	－	紡錘形。摩耗するため調整不明。孔径 0.4cm。	
185	SD－7 上層	瓦 丸瓦	全長 (4.3)	全幅 (5.2)	全高 (6.2)	重量 73.0	一部残存	にぶい褐色	－	凹面に布目圧痕が残る。凸面は横方向のナデ。	古代または中世
186	SD－8 埋土1	陶器 鉢	－	(4.0)	－	－	一部残存	にぶい黄橙色	－	焼締。回転ナデ。	
187	SD－8 埋土4	白磁 碗	－	(5.5)	－	－	一部残存	灰白色	内面から外面下部に白磁釉	口縁部は僅かに外傾。体部下部は回転ケズリで無釉。	中国産
188	SD－8 埋土3	土師質土器 椀	－	(2.0)	6.0	－	底部完存	灰黄色 砂粒多	－	平高台。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	11世紀
189	SD－8	土師質土器 椀	14.6	(3.0)	－	－	1/8	灰黄褐色 赤礫･金雲母含	－	口縁端部は肥厚し外傾。著しく摩耗するため調整不明。	
190	SD－8 埋土2	土師質土器 椀	15.2	4.8	6.7	－	1/2	灰白色	－	輪高台を貼付。回転ナデで，見込にナデを加える。高台は横方向のナデ。	12世紀
191	SD－8 埋土2	土師質土器 椀	－	(2.1)	6.0	－	3/4	灰白色	－	輪高台を貼付。高台は横方向のナデ。底部の切り離しは回転糸切り。高台内に線刻。摩耗する。	12世紀
192	SD－8	土師質土器 椀	－	(1.8)	5.8	－	1/2	灰白色	－	輪高台を貼付。内面はヘラナデか。外面は回転ケズリ。高台は横方向のナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	12世紀
193	SD－8	土師質土器 椀	－	(1.8)	6.1	－	底部ほぼ完存	にぶい黄橙色 金雲母含	－	輪高台を貼付。回転ナデ。内面は摩耗するため調整不明。高台は横方向のナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	12世紀
194	SD－8 埋土3	土師質土器 椀	－	(1.3)	5.7	－	底部完存	灰白色	－	輪高台を貼付。回転ナデ。高台は横方向のナデ。底部の切り離しは回転糸切り。畳付に板状圧痕が残る。	12世紀
195	SD－8 埋土4	土師質土器 小皿	7.8	1.8	5.1	－	1/3	にぶい黄橙色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
196	SD－8 埋土4	土師器 釜	17.6	(3.0)	－	(20.6)	1/8	にぶい褐色 金雲母含	－	断面三角形の鍔を貼付。横ナデ。口縁部と鍔の下に煤付着。	播磨型 14～15世紀
197	SD－8 埋土2	須恵器 椀	15.8	4.9	6.7	－	1/3	明褐灰色	－	輪高台を貼付。回転ナデ。高台は横方向のナデ。底部の切り離しは回転糸切り。内外面に火襷。高台内に墨書。	12世紀
198	SD－8 埋土1	須恵器 杯	－	(1.8)	8.5	－	1/2	灰白色	－	輪高台を貼付。回転ナデで，見込にナデ。高台は横方向のナデ。高台内は回転ケズリか，放射状に鉋痕が残る。	8～9世紀

遺物観察表 10

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
199	SD－8 埋土1	瓦器 椀	16.4	(4.0)	－	－	1/8	灰白色	－	ナデで指頭圧痕が残り，口縁部に横ナデ。内面に緻密な平行ミガキ，外面は口縁部にミガキ。	楠葉型 12世紀後半
200	SD－8 埋土1	土製品 土錘	全長 (4.3)	全幅 1.2	全厚 1.1	重量 4.8	一部欠損	暗灰色	－	紡錘形。ナデで指頭圧痕が残る。孔径0.4cm。	
201	SD－8 埋土2	土製品 土錘	全長 4.7	全幅 1.5	全厚 1.4	重量 6.9	完存	にぶい黄橙色	－	紡錘形。ナデ。孔径0.6cm。	
202	SD－8 トレンチ	土製品 土錘	全長 7.9	全幅 2.1	全厚 2.0	重量 30.8	完存	褐灰色 赤礫・金雲母含	－	紡錘形。ナデ。孔径0.6cm。	
203	SD－8 埋土4	人骨 頭蓋骨	全長 (19.4)	全幅 13.7	全高 (10.4)	－	1/2	－	－	女性か。壮年後半から熟年程度。	
204	SD－9	瓦質土器 釜	19.8	(7.3)	－	胴径 22.8	1/8	黄灰色	－	断面三角形の扁平な鍔を貼付。ナデ。口縁部は横ナデ。外面はナデで指頭圧痕が残る。体部外面に煤付着。	土佐型 15世紀前半
205	SD－9	木製品 漆器椀	－	(7.3)	7.7	－	4/5	－	－	大振り。高台内の抉りは浅い。内外面黒塗。	樹種はクスノキ科
206	SK－3 埋土1	磁器染付 中碗	10.9	5.5	3.8	－	底部完存	灰白色	光沢のある透明釉	望料形。外面は土坡に草文，内面に四方襷文，見込に「恵」字と圏線の染付。畳付は釉ハギし，砂付着。	肥前産 18世紀後半
207	SK－3 埋土2	陶器 鉢	28.8	(7.3)	－	34.5	1/8	灰白色	白濁する貫入が入る	外面に陽刻による文様。	瀬戸・美濃産か
208	SK－3 埋土2	陶器 火鉢	－	(10.3)	11.3	胴径 15.1	底部完存	灰白色	口縁部内面から高台まで緑釉	小型。胴部外面に押印による花弁文，胴部と高台に陰刻による圏線。内面は回転ナデで布目圧痕が残り，無釉。	瀬戸・美濃産
209	SK－4	磁器染付 中碗	－	(5.0)	4.8	－	3/4	灰白色	透明釉	丸形。外面に染付。畳付は釉ハギ。高台内側に砂付着。	肥前産 1620～1630年代
210	SK－4	白磁 杯か	－	(1.0)	3.6	－	3/4	灰白色	畳付を除き光沢のある白磁釉	高台の4箇所をアーチ状に抉る。	
211	SK－4	青磁 中皿	19.7	(3.7)	－	－	一部残存	灰白色	青磁釉	器壁が厚く，端部は丸く収める。	中国産
212	SK－4	土師器 焼塩壺	5.5	(5.9)	－	6.4	1/2	にぶい橙色 金雲母含	－	輪積成形。内面はナデで指頭圧痕が残る。口縁部は横ナデ，外面は横方向のナデ。	関西産 17世紀
213	SK－6	陶器 小皿	－	(1.8)	4.8	－	底部完存	にぶい黄橙色	灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による文様。高台は削り出しで無釉。畳付に砂付着。	肥前産 1610～1630年代
214	SK－6	陶器 擂鉢	－	(3.5)	11.0	－	1/5	灰白色	鉄釉	外面は回転ケズリ，底部の切り離しは回転糸切り。内面に擂目。外面刷毛塗か。	
215	SK－6	磁器染付 小皿	－	(2.3)	5.1	－	1/2	灰白色	透明釉	内面に圏線と草花文の染付か。畳付は釉ハギし，砂付着。	肥前産 1650～1670年代
216	SK－6	青磁 皿	10.7	2.6	3.5	－	1/2	にぶい褐色	内面から高台に青磁釉	稜花形。口縁部内面にヘラ彫による陰刻文様。畳付と高台内は無釉。	中国産
217	SK－6	木製品 杓文字か	全長 19.0	全幅 6.0	全厚 1.0	－	完存	－	－	端部をすべて面取。身部は端を薄く加工。柄部に「×」の刻書。	
218	SK－6	木製品 杓文字か	全長 18.9	全幅 5.1	全厚 4.5	－	完存	－	－	端部を面取。柄の下端は黒色化。	
219	SK－7	陶器 中碗	10.8	6.6	4.2	－	1/3	灰白色	光沢のある鉄釉	天目形。外面下半から高台は削り出しで無釉。	瀬戸産 16世紀末～17世紀初頭
220	SK－8	陶器 小碗	－	(3.7)	3.2	－	2/3	褐灰色	鉄釉	唐津系鉄釉陶器。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀前半

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
221	SK－8	陶器小皿	－	(2.4)	4.7	－	底部完存	にぶい褐色	内面灰釉被熱し白色化	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。外面は回転ナデで，一部灰釉が流れる。高台は削り出しで無釉。	肥前産1610～1620年代
222	SK－8	磁器小皿	13.2	3.2	4.2	－	一部欠損	灰白色	青磁釉	青磁。見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出しで無釉。	肥前産　波佐見17世紀後半
223	SK－8	木製品漆器椀	－	(7.4)	6.6	－	2/3底部完存	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。外面に金彩で丸に花文。高台内を抉る。	樹種はトチノキ
224	SK－9	磁器染付小皿	14.0	3.0	5.3	－	1/3	灰白色	透明釉	折縁形。見込に扇文の染付か。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産1630～1650年代
225	SK－10	木製品漆器椀	－	(3.8)	5.5	－	1/2底部完存	－	－	腰丸形。内外面赤塗。	樹種はカツラ
226	SK－11	陶器小皿	－	(2.1)	5.5	－	底部完存	灰白色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に段。畳付を釉ハギ。	肥前産1610～1630年代
227	SK－14	陶器中碗	11.6	7.4	4.4	－	底部完存	灰白色	光沢のある灰釉貫入が入る	唐津系灰釉陶器。畳付を釉ハギ。	肥前産1610～1630年代
228	SK－14	陶器中皿	－	(3.3)	7.3	－	3/4	にぶい赤褐色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。高台は削り出しで無釉。	肥前産1600～1610年代
229	SK－14	土師質土器皿	10.6	2.4	5.6	－	1/3	暗灰黄色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。内外面に煤付着。	
230	SK－15	陶器中碗	12.6	8.2	4.9	－	1/3	灰白色	灰釉	丸形。切高台。高台付近は回転ケズリ後，施釉。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産1610～1630年代
231	SK－15	陶器擂鉢	30.4	(9.2)	－	－	1/8	にぶい黄橙色	鉄釉	口縁部は受口状。回転ナデ後，体部下半に回転ケズリ。内面に12条単位の擂目。	
232	SK－17	磁器染付小碗	－	(3.5)	3.4	－	1/2	灰白色	透明釉	外面に唐草文と圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産1640～1650年代
233	SK－17	土師器焼塩壺蓋	7.8	1.8	天井径5.3	－	4/5	にぶい赤褐色	－	ナデ，口縁部は横ナデ。天井部外面に板状圧痕が残る。	関西産17世紀
234	SK－18	陶器小皿	12.6	3.2	4.3	－	底部完存	灰白色	灰釉	溝縁形。唐津系灰釉陶器。見込と畳付に砂目痕。	肥前産1610～1630年代
235	SK－18	青花碗	－	(4.2)	5.3	－	1/6	灰白色	透明釉	見込に濃地に唐草文と圏線，外面は濃地に花と唐草文・圏線，高台内に圏線の染付。	中国産景徳鎮窯系
236	SK－18	土師器台付鉢	8.0	7.0	4.8	－	ほぼ完存	灰白色スサ多含	－	内面はナデで指頭圧痕が残る。外面は一部に横方向のナデ。摩耗するため調整不明瞭。窯道具か。	
237	SK－18	木製品漆器椀	12.2	5.6	6.6	－	4/5	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。	
238	SK－18	木製品杓文字	全長17.5	全幅6.8	全厚0.9	－	完存	－	－	端部をすべて面取。先端は若干摩耗。	
239	SK－18	木製品漆器栓	全長8.3	全幅2.6	全厚2.5	－	完存	－	－	断面は頭部が八角形，軸部が円形。縦方向に加工痕が残る。全面に薄く黒塗。	
240	SK－19	陶器甕	26.6	(4.6)	－	(30.2)	一部残存	灰褐色	口縁端部を除き錆釉	焼締。回転ナデ。	肥前産17世紀後半
241	SK－19	磁器染付中碗	－	(3.7)	4.2	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に圏線と染付の一部が残る。高台内は削り出しで無釉。	肥前産1640～1650年代
242	SK－19	土師器釜	－	(4.6)	－	－	一部残存	にぶい黄橙色　砂粒多，金雲母含	－	断面三角形の鍔を貼付。口縁部は横ナデ，外面はタタキ。内面は摩耗するため調整不明。	播磨型15世紀

遺物観察表 12

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
243	SK－21	陶器 匣鉢	18.0	7.3	17.6	－	1/4	にぶい 黄橙色	－	焼締。回転ナデで，内面に回転ケズリを加える。外底は無調整で砂付着，板状圧痕が残る。	
244	SK－23 上層	陶器 皿	－	(3.1)	4.2	－	1/3	にぶい 赤褐色	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台付近は削り出しで無釉。見込に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
245	SK－23 上層	陶器 皿	－	(2.8)	－	－	一部 残存	灰黄色	光沢のある 灰釉	折縁形。外面に凹線が2条。釉はオリーブ色に発色。	
246	SK－23 上層	磁器 中碗	－	(3.3)	4.4	－	1/3	にぶい 橙色	青磁釉	青磁。畳付と高台は削り出しで無釉。	肥前産 1640～1650年代
247	SK－24	陶器 中皿	－	(4.7)	10.7	－	底部 完存	橙色	灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による文様と砂目痕。畳付を釉ハギし，高台内側に砂付着。	肥前産 1610～1620年代
248	SK－24	陶器 擂鉢	37.1	(6.5)	－	－	一部 残存	灰赤色	口縁部外面に 鉄釉	焼締。回転ナデ。内面に10条単位の擂目。	備前焼 17世紀中葉
249	SK－24	磁器染付 小杯	－	(3.0)	2.3	－	底部 完存	にぶい 黄橙色	透明釉	外面に丸彫による縞文と染付が一部残る。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1640～1650年代
250	SK－28	陶器 瓶	－	(8.3)	5.8	胴径 6.7	4/5	橙色	外面錆釉	円筒形。回転ナデ。外底は削り出しで無釉。内面にも釉が流れる。	
251	SK－29	陶胎染付 丸碗	11.2	(5.7)	－	－	1/6	黄灰色	透明釉	外面に松文の染付か。	肥前産 17世紀後葉～18世紀前葉
252	SK－31	陶器 甕	－	(14.4)	－	－	一部 残存	にぶい 赤橙色	－	焼締。口縁部は接合箇所で剥離。玉縁状か。回転ナデ。肩部に線刻。	備前焼
253	SK－33 上層	陶器 擂鉢	－	(2.5)	－	－	一部 残存	にぶい 褐色	口縁部に鉄釉	口縁部はT字形。回転ナデ。	肥前産 17世紀前半
254	SK－33 下層	陶器 甕	－	(6.1)	26.4	－	1/6	にぶい 赤褐色	外面錆釉	焼締。内面は回転ナデ後，格子目の当具痕，ナデを加える。体部外面はタタキ後ナデ，外底は無調整。	肥前産 17世紀後半
255	SK－33 下層	磁器 碗	－	(3.9)	4.6	－	1/4	灰白色	白磁釉	白磁。器壁が薄く高台が細い。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 1680～1710年代
256	SK－33	磁器染付 小杯	7.4	4.8	3.4	－	底部 完存	灰白色	透明釉	端反形。外面に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。焼成不良。	肥前産 1680～1740年代
257	SK－33 下層	木製品 木簡	全長 (10.5)	全幅 2.8	全厚 0.3	－	一部 残存	－	－	上部は方形。両面墨書。表面は「岸(カ)」の墨書，裏面は解読不可。	
258	SK－33 下層	木製品 加工木	全長 20.8	全幅 8.5	全厚 0.5	－	一部 残存	－	－	隅切。中央に円孔。円孔の周囲は輪状に擦痕が残る。5箇所に釘孔。用途不明。	
259	SK－35	木製品 木簡	全長 12.7	全幅 2.0	全厚 0.2	－	完存	－	－	上部は方形，下部は細く尖る。片面に「北(カ)」の墨書。	
260	SK－36	磁器染付 壺	7.8	(4.8)	－	胴径 (11.1)	1/4	灰白色	透明釉	蓋物。外面に松と網目文・圏線の染付。口縁部内面を釉ハギ。外面に黒色の付着物。	肥前産 1650～1660年代
261	SK－36	青花 大皿	－	(2.7)	19.8	－	1/10	灰白色	光沢のある 透明釉 白濁する	見込に草文と圏線の染付。高台内中央部は無釉。畳付に粗砂付着。外面に虫喰。	中国産
262	SK－36	石製品 砥石	全長 (9.4)	全幅 4.5	全厚 0.9	重量 63.5	一部 残存	－	－	板状。表と裏の2面に使用痕。粘板岩か。	
263	SK－37	陶器 中碗	9.8	6.7	4.9	－	底部 完存	灰白色	内面から高台 付近に灰釉	京焼風。外面に染付。高台内に「清水」の銘印。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
264	SK－37	陶器 中碗	12.0	8.4	4.8	－	3/4	灰白色	灰釉 粗い貫入が 入る	丸形。畳付を釉ハギ。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
265	SK－37	陶器中皿	19.8	2.5	11.0	－	1/3	灰白色	灰釉	折縁形。畳付を釉ハギ。見込に砂目痕。高台内に砂付着。	
266	SK－37	陶器擂鉢	30.3	11.8	14.2	－	1/6	褐灰色砂粒多含	－	内面に10条，見込に米字状の擂目，口縁部外面に3条の凹線。回転ナデで，外面体部下端に回転ケズリと指頭圧痕。	
267	SK－37	磁器輪花皿	－	(4.2)	－	－	一部残存	灰白色	青磁釉	青磁。型打成形。口錆。外面に脚の剥離痕。	肥前産　波佐見1630～1650年代
268	SK－37	磁器皿	－	(7.0)	－	－	一部残存	灰白色	青磁釉	青磁。折縁形。口縁部は外面からの指頭圧により輪花状。内面に片彫による文様。	肥前産　波佐見1630～1650年代
269	SK－37	磁器蓋	3.6	(1.0)	笠径9.0	－	1/3摘欠損	灰白色	青磁釉	青磁。かえり部は釉ハギし，砂付着。	肥前産17世紀後半
270	SK－37	青花大皿	－	(2.3)	18.8	－	一部残存	にぶい黄橙色	透明釉白濁する	見込に染付。高台に粗砂付着。被熱。	中国産
271	SK－37	木製品漆器椀	13.2	7.4	5.4	－	3/4	－	－	外面黒塗，内面赤塗。外面に金色の丸文。内面に黒色の付着物。	
272	SK－37	木製品漆器蓋	10.8	4.4	－	摘径5.6	4/5	－	－	内外面赤塗。摘内に黒色の草文。	樹種はブナ属
273	SK－37	木製品下駄	全長14.8	全幅7.0	全厚2.7	－	完存	－	－	連歯。隅丸方形。子供用か。緒孔径0.7cm。	
274	SK－37	木製品下駄	全長22.4	全幅9.6	全厚(2.6)	－	歯欠損	－	－	連歯。隅丸方形。3箇所の緒孔に木材を補填。左側面の踵付近に3本の縦方向の刻線。緒孔径1.0cm。	
275	SK－37	木製品下駄	全長23.7	全幅9.9	全厚2.6	－	ほぼ完存	－	－	連歯。隅丸方形。横緒孔は斜前方向に穿つ。緒孔径1.1cm。	
276	SK－37	木製品傘	全長5.6	全幅(5.1)	全高(4.8)	－	一部欠損	－	－	手元ロクロか。中央に径2.0cmの孔が貫通。上面に放射状に多数の浅い溝。下方は細く仕上げる。	
277	SK－38	陶器壺	－	(3.8)	－	－	一部残存	褐灰色	－	焼締。口縁部は短く外上方に伸びる。回転ナデ。	
278	SK－38	木製品下駄	全長21.5	全幅8.0	全厚(2.1)	－	差歯欠損	－	－	露卯。楕円形。上・側面は黒漆塗。前歯に鉄釘痕。差歯孔は方形で1.6×1.2cm。緒孔は円形で径1.1cm。差歯幅1.6cm。	
279	SK－39	陶器小皿	13.4	(2.4)	－	－	1/5	灰白色	内面銅緑釉外面灰釉	見込は蛇ノ目釉ハギし，砂付着。底部外面は回転ケズリで，無釉。	肥前産内野山窯17世紀後半
280	SK－39埋土14	磁器小碗	－	(3.2)	3.0	－	底部完存	灰白色	白磁釉	白磁。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産18世紀前半
281	SK－39	磁器染付皿	－	(2.3)	5.6	－	1/3	白色	透明釉	内面に花文と圏線の染付。畳付を釉ハギし，僅かに砂付着。	肥前産1640～1650年代
282	SK－39埋土14	磁器染付皿	－	(1.2)	6.2	－	1/6	灰白色	透明釉	見込は圏線内に網目文の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産1640～1650年代
283	SK－39	木製品漆器椀	12.0	5.6	6.5	－	1/2	－	－	内外面赤塗。	
284	SK－39	木製品箸	全長(26.1)	全幅0.7	全厚0.8	－	完存	－	－	断面は円形。先端は細く尖らす。	
285	SK－39	木製品箸	全長29.3	全幅0.8	全厚0.8	－	完存	－	－	断面は多角形。両端を細く加工。	
286	SK－39埋土12	木製品下駄	全長21.0	全幅9.7	全厚6.7	－	前歯欠損	－	－	連歯。隅切方形。上面の後歯上に方形の貫通しない孔。287と組か。前緒孔径1.2cm。横緒孔径0.7～1.0cm。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
287	SK－39 埋土12	木製品 下駄	全長 21.1	全幅 9.9	全厚 6.5	－	ほぼ 完存	－	－	連歯。隅切方形。上面の後歯上に方形の貫通しない孔。286と組か。前緒孔径1.1cm。横緒孔径0.9cm。歯幅4.4cm。	
288	SK－40	陶器 小皿	11.5	3.8	4.0	－	1/4	橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面は回転ナデ。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
289	SK－41	木製品 下駄	全長 16.5	全幅 8.6	全厚 2.5	－	完存	－	－	連歯。隅丸方形。前歯は著しく擦り減る。前緒孔径0.7cm。横緒孔径0.7cm。	
290	SK－42	陶器 瓶	－	(11.5)	－	－	一部 残存	褐灰色	－	焼締。回転ナデ。頸部内面に絞目。	備前焼か
291	SK－43	陶器 小皿	－	(2.7)	5.5	－	1/4	にぶい 黄橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。外面体部下半は回転ナデ，高台は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
292	SK－44	白磁 皿	－	(1.0)	4.7	－	1/5	灰白色	内面から体部外面に白磁釉	内面にヘラ彫による陰刻文。外底は削り出しで無釉。	中国産 12～13世紀
293	SK－45	陶器 碗	－	(3.0)	5.2	－	底部 完存	灰白色	灰釉 貫入が入る	畳付を釉ハギ。	
294	SK－45	陶器 碗	－	(3.2)	5.1	－	底部 完存	灰白色	灰釉 貫入が入る	畳付を釉ハギ。	
295	SK－45	陶器 碗	－	(2.0)	4.8	－	底部 完存	灰黄色	鉄釉	畳付を釉ハギし，4箇所に砂目痕。高台内刷毛塗。	
296	SK－45	陶器 稜花皿	12.6	3.7	6.1	－	3/4	灰白色	光沢のある 緑釉	回転ナデ。見込に胎土目痕。外底は削り出しで無釉。	瀬戸・美濃系 黄瀬戸か
297	SK－45	陶器 匣鉢	18.4	11.2	17.8	－	1/5	黄灰色	－	焼締。回転ナデ。外面体部下端に指頭圧痕が残る。底部の切り離しは回転糸切り。内面に煤付着。	
298	SK－45	磁器 皿	－	(2.8)	－	－	一部 残存	灰白色	青磁釉	青磁。内面に丸彫による縞文。	肥前産　波佐見 1640～1660年代
299	SK－45	磁器染付 蓋物蓋	6.1	(1.7)	笠径 8.8	－	1/4	灰白色	青磁釉	青磁。天井部外面に菊花文と圏線の染付。かえり部と内面は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
300	SK－45	瓦質土器 火鉢	－	12.4	－	－	一部 残存	灰色 金雲母含	－	箱形。タタラ成形。脚内側に径0.5cmの円孔。円柱形の脚。見込ナデ，口縁部は横ナデ，コーナー部は縦方向のナデ。	
301	SK－45 最下層	瓦質土器 火鉢	－	(8.1)	32.0	－	一部 残存	灰色 金雲母含	－	円筒形か。円柱形の脚を貼付。脚内側に径0.7cmの円孔。内面は横方向のナデ，外面はナデ後，横方向のミガキ。3脚か。	
302	SK－45	木製品 蓋	5.9	1.8	笠径 6.9	－	完存	－	－	天井部は丸く傘状。下部は中央部が凹む。内外面に不定方向の加工痕が残る。	
303	SK－45	木製品 下駄	全長 (9.6)	全幅 5.7	全厚 (2.0)	－	1/2 差歯 欠損	－	－	露卯。子供用。楕円形。上面と側面は黒漆塗。差歯孔は方形で1.0×0.7cm。緒孔は円形で径0.7cm。	
304	SK－46	磁器染付 小皿	－	(1.4)	3.2	－	底部 完存	明緑灰色	透明釉	内面に草花文の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 1640年代
305	SK－47	土師質 土器 皿	－	(2.1)	7.4	－	1/4	灰白色	－	白土器。回転ナデで，内面にナデ，体部外面から外底に回転ケズリを加える。見込に「九」，外底に僅かに墨書。	
306	SK－49 埋土2	陶器 碗	10.2	5.8	4.2	－	1/4	灰白色	灰釉	外底は削り出しで無釉。	
307	SK－49 下層	陶器 中皿	20.9	(3.0)	－	－	一部 残存	灰色	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面体部下半は回転ナデで無釉。	肥前産 1600～1610年代
308	SK－49	陶器 片口鉢	9.5	(4.7)	－	－	1/5	黄褐色	鉄釉	側面に断面半円形の片口を貼付。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
309	SK－49 埋土1	磁器染付蓋物	10.4	(5.6)	－	－	1/4	灰白色	透明釉	口縁部を釉ハギ。外面に草花文と圏線の染付。	肥前産 17世紀後半
310	SK－49 埋土1	青花皿	18.3	4.0	9.7	－	1/5	灰白色	透明釉 貫入が入る	内外面に染付。畳付を釉ハギ。被熱。白化粧土のち施釉。	中国産
311	SK－49 下層	土師質土器小皿	10.1	2.1	5.9	－	1/3	灰黄褐色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。口縁部に煤付着。	
312	SK－49 埋土6	木製品下駄	全長 (22.1)	全幅 9.6	全厚 4.4	－	一部欠損	－	－	連歯。隅丸方形。上面に「△」の刻書。歯は擦り減り，指の部分は摩耗して凹む。緒孔径1.1cm。	
313	SK－50 下層	磁器色絵猪口	10.8	(3.6)	－	－	1/3	灰白色	透明釉	型打成形。内面に型による陽刻の梅と鶯文。外面に黒色の上絵付。	肥前産　有田 17世紀後半
314	SK－51	木製品漆器椀	12.1	(5.4)	－	－	ほぼ完存	－	－	外面黒塗，内面赤塗。	樹種はクスノキ科
315	SK－52	陶器皿	－	(3.6)	4.5	－	1/4	灰色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。外面体部下半は回転ナデ，高台は削り出しで無釉。	肥前産 1610～1630年代
316	SK－53 上層	陶器碗	－	(2.3)	5.9	－	底部完存	にぶい黄橙色	灰釉	畳付を釉ハギ。	
317	SK－53 上層	陶器中皿	－	(4.5)	－	－	一部残存	黄灰色	内面透明釉 外面灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による文様。	肥前産 1600～1610年代
318	SK－53 上層	陶器擂鉢	34.4	(5.1)	－	－	一部残存	灰色	－	焼締。口縁端部は肥厚し，凹線が巡る。回転ナデで，体部外面に指頭圧痕が残る。内面に6条単位の櫛描の擂目。	丹波焼 17世紀後半
319	SK－53	磁器皿	14.3	(2.5)	－	－	1/3	浅黄橙色	青磁釉	青磁。折縁形。見込は蛇ノ目釉ハギ。外面体部下半は回転ケズリで無釉。焼成不良で釉は溶けていない。	肥前産 17世紀後半
320	SK－53	土製品土錘	全長 5.4	全幅 2.0	全厚 1.9	重量 19.2	完存	灰黄褐色	－	紡錘形。ナデで指頭圧痕が残る。黒斑あり。孔径0.6cm。	
321	SK－53	金属製品小柄	全長 8.4	全幅 1.6	全厚 0.6	重量 23.1	柄は完存	－	－	銅製。錆化により文様不明。内部に鉄製の中茎。	
322	SK－54 埋土9	陶器皿	14.0	3.5	4.8	－	2/3	にぶい黄橙色	内面銅緑釉 外面灰釉	見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は無釉。外面は被熱。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
323	SK－54 埋土7	磁器染付皿	13.6	2.5	8.6	－	1/2	白色	透明釉	見込に草花と垣文，外面に唐草文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 17世紀後半
324	SK－54	磁器小杯	5.8	(2.9)	－	－	1/3	灰白色	光沢のある白磁釉	白磁。端反形。	肥前産 17世紀後半
325	SK－54 上層	磁器小杯	7.0	4.7	3.8	－	1/3	灰白色	光沢のある白磁釉	白磁。端反形。畳付を釉ハギ。	肥前産 17世紀後半
326	SK－54	磁器染付小杯	7.0	4.8	3.5	－	1/4	灰白色	透明釉	外面に圏線と染付の一部が残る。畳付を釉ハギし，粗砂付着。	肥前産 17世紀後半
327	SK－54	木製品漆器盤	16.7	6.2	12.4	－	1/3	－	－	刳物。高台が付く。内外面黒塗。	樹種はケヤキ
328	SK－54	木製品加工木	全長 (12.8)	全幅 (6.4)	全厚 (2.3)	－	1/2	－	－	329と同一個体か。板状で，ハート形か。側面に縦方向の加工痕が残る。用途不明。	
329	SK－54	木製品加工木	全長 (12.8)	全幅 (4.9)	全厚 (2.3)	－	1/2	－	－	未成品。328と同一個体か。板状で，ハート形か。周縁の内側に墨のライン。上部の抉りを途中まで切断。	
330	SK－54	金属製品煙管吸口	全長 6.1	全幅 1.0	全厚 0.9	重量 3.5	完存	－	－	全面に錆化。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
331	SK－55	陶器 碗	10.0	(4.0)	－	－	一部 残存	灰白色	鉄釉	天目形。	瀬戸・美濃産
332	SK－55	陶器 碗	－	(5.2)	4.9	－	底部 完存	灰白色	灰釉 貫入が入る	畳付を釉ハギ。	
333	SK－55	陶器 碗	－	(2.8)	5.5	－	底部 完存	灰白色	灰釉 御本が入る	高台は削り出し。畳付に砂付着。	尾戸焼か
334	SK－55 上層	陶器 甕	－	(8.0)	－	胴径 26.0	一部 残存	暗赤褐色	外面と 内面上部に 鉄釉	内面は格子状タタキ後ナデ。外面に多条沈線とヘラ描の波状文。	肥前産
335	SK－55	青磁 皿	－	(2.7)	－	－	一部 残存	灰白色	青磁釉	脚部。見込は陽刻の菊弁文か。脚外面に陽刻の花文。	中国産
336	SK－55	土師質 土器 皿	－	(1.9)	－	－	一部 残存	灰白色	－	内面から口縁部外面に金彩。体部外面はナデ。	
337	SK－55	木製品 漆器椀	13.4	(4.1)	－	－	1/6	－	－	内外面赤塗。	
338	SK－56	陶器 小皿	－	(1.2)	5.8	－	1/2	橙色	緑釉	口縁部内面に丸彫による菊弁文。見込は釉ハギ。高台内は無釉で，重ね焼痕が残る。	瀬戸・美濃産 16世紀末
339	SK－57	陶器 小皿	14.0	3.4	8.0	－	1/2	灰色	灰釉	見込にピン痕。高台内に重ね焼痕。	瀬戸・美濃産 17世紀後半か
340	SK－57 埋土9	陶器 擂鉢	31.5	(6.3)	－	－	1/10	にぶい 橙色	内面錆釉	焼締。回転ナデ後，外面の一部にケズリ。内面に4条単位の櫛描の擂目。	丹波焼 17世紀後半
341	SK－57	木製品 漆器蓋	12.5	(2.1)	－	－	1/3	－	－	外面黒塗，内面赤塗。外面に金色で丸に紅葉文，摘内は金色で薄文か。	樹種はトチノキ
342	SK－57	木製品 木刀	全長 (16.4)	全幅 8.7	全厚 8.7	－	一部 残存	－	－	玩具。刃部と鍔は別造。表面は黒漆塗。刃部は幅4.5cm，厚1.3cm。鍔は隅切方形で2.3×1.5cmの楕円形の孔，厚1.9cm。	
343	SK－58	陶器 皿	－	(2.4)	4.4	－	1/2	にぶい 赤褐色	内面灰釉 外面の一部に 釉が流れる	唐津系灰釉陶器。見込を蛇ノ目釉ハギ。外面は回転ナデ。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
344	SK－58	陶器 中皿	21.2	(3.2)	－	－	一部 残存	にぶい 赤褐色	内面透明釉 外面灰釉	溝縁形。内面に白化粧土による刷毛目文。	肥前産 1690年代～18世紀前半
345	SK－58 埋土2	陶器 中皿	－	(5.5)	11.7	－	1/2	赤褐色	内面灰釉	内面は白化粧土による刷毛目文と緑彩。外面は回転ナデ及び回転ケズリで無釉。見込に砂目痕。内面は被熱。	肥前産 17世紀後半
346	SK－58	磁器 小杯	－	(2.8)	2.1	－	3/4	白色	白磁釉	白磁。外面に丸彫による縞文。高台は削り出しで無釉。体部下半に粗砂付着。	肥前産 1630～1640年代
347	SK－58	木製品 下駄	全長 (20.7)	全幅 9.3	全厚 3.4	－	2/3 鼻緒 残存	－	－	連歯。隅丸方形。緒孔径1.1cm。	
348	SK－58	金属製品 小柄	全長 (10.3)	全幅 1.4	全厚 0.5	重量 27.9	柄は 完存	－	－	銅製。木目状の彫文様に丸文。丸文は魚子地に打ち出しによる桐文か。内部に鉄製の中茎。	
349	SK－58	金属製品 釘	全長 18.4	全幅 0.7	全厚 0.7	重量 37.2	完存	－	－	鉄製。平面は丁字形，断面方形。先端は細く尖る。湾曲し，錆化。	
350	SK－59	陶器 皿	－	(1.6)	4.4	－	1/2	灰黄色	内面灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。外底は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
351	SK－60	陶器 小皿	12.8	3.2	7.0	－	1/4	灰白色	灰釉	高台は削り出しで無釉。	瀬戸・美濃産 17世紀後半か
352	SK－60	陶器 小皿	13.7	3.7	4.5	－	1/3	灰白色	銅緑釉	見込は蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出しで無釉。被熱。	肥前産 内野山窯 17世紀後半

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
353	SK－60下層	木製品箸	全長26.8	全幅0.7	全厚0.6	－	完存	－	－	断面楕円形。先端を細く加工。	
354	SD－10上層	陶器中碗	12.8	(7.1)	－	－	1/3	にぶい黄橙色	被熱するため不明	丸形。	肥前産か
355	SD－10上層	陶器小皿	－	(3.4)	5.2	－	底部完存	にぶい黄褐色	灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による花文。高台は無釉。	肥前産1590～1610年代
356	SD－10最下層	青花皿	－	(1.3)	(9.9)	－	一部残存	灰白色	透明釉	見込と外面に圏線と染付の一部が残る。高台内は無釉。	中国産景徳鎮窯系
357	SD－10上層	土製品鞴羽口	全長(11.7)	全幅(10.5)	孔径(2.8)	－	一部残存	にぶい橙色	－	円筒形。外面は横方向のナデ，内面に棒状の圧痕が残る。先端に鉄滓付着。	
358	SD－10上層	土製品鞴羽口	全長(5.0)	全幅(8.3)	孔径2.5	－	1/2	灰黄色	－	円筒形。外面は横方向のナデ。内面はナデで，棒状の圧痕が残る。先端に鉄滓付着。	
359	SD－10上層	土製品鞴羽口	全長(7.0)	全幅(8.4)	孔径(2.7)	－	基部残存	にぶい橙色	－	円筒形。基部はナデ，内面に棒状の圧痕が残る。	
360	SD－10上層	木製品漆器椀	－	(3.9)	6.2	－	3/4	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。外面に朱色の文様。	樹種はクリ
361	SD－10上層	木製品漆器椀	12.7	5.9	6.3	－	3/5	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。外面に朱色の文様。	樹種はブナ属
362	SD－11下層	陶器小皿	14.3	4.2	4.6	－	底部完存	橙色	内面から口縁部外面に灰釉	溝縁形。唐津系灰釉陶器。体部外面は回転ナデ，高台は削り出しで無釉。見込と高台内側に砂目痕。	肥前産1610～1630年代
363	SD－11下層	磁器染付中碗	11.3	7.4	4.8	－	1/2	橙色	透明釉白濁する	丸形。外面に圏線と文字の染付。焼成不良。高台は削り出しで無釉。	肥前産1640～1650年代
364	SD－11下層	土師器焼塩壺	－	(6.4)	4.3	6.0	底部完存	にぶい褐色	－	輪積成形。内面に指頭圧痕が残る。外面は摩耗するため調整不明。	関西産17世紀
365	SD－12	陶器鉢	－	(3.6)	7.6	－	1/2	灰黄色	－	焼締。回転ナデ後，外面にナデ。外底は削り出し。	
366	SD－12	陶器壺	26.2	(21.2)	－	胴径34.0	一部残存	褐灰色	－	焼締。口縁部は受口状。回転ナデ後，内面体部下半にナデ。外面に沈線が1条。	備前焼
367	SD－13	陶器碗	－	(2.2)	4.3	－	底部完存	にぶい黄色	内面鉄釉外面の一部に釉が流れる	高台は削り出しで無釉。	肥前産17世紀後半
368	SD－13	陶器中碗	9.7	(5.1)	－	－	1/3	灰白色	内面鉄釉外面緑釉貫入が入る	丸形。	肥前産内野山窯17世紀後半
369	SD－13	陶器小皿	12.2	(2.7)	－	－	1/4	灰黄色	灰釉	絵唐津。内面に錆絵。外面体部下半は回転ケズリで無釉。口縁端部の一部と高台は無釉。	肥前産1600～1610年代
370	SD－13	陶器小皿	13.7	3.8	4.2	－	1/2	にぶい橙色	灰釉	丸形。絵唐津。内面に錆絵。見込に砂目痕。高台は削り出しで無釉。	肥前産1610～1620年代
371	SD－13	陶器小皿	10.2	3.2	3.4	－	1/3	褐色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。外面体部下半は回転ナデ。兜巾を削り取った痕跡。高台は削り出しで無釉。	肥前産1600～1610年代
372	SD－13	陶器小皿	－	(2.4)	4.1	－	底部完存	灰黄色	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下半は回転ナデで無釉。見込に砂目痕。高台は削り出しで無釉。	肥前産1610～1630年代
373	SD－13	陶器小皿	－	(2.1)	5.1	－	1/2	灰黄色	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台は削り出しで無釉。	肥前産17世紀前半
374	SD－13	陶器中皿	22.3	(4.2)	－	－	一部残存	灰白色	灰釉	端反形。口縁部は指頭圧により輪花形。	肥前産1640～1650年代

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
375	SD－13	陶器匣鉢	16.8	9.5	16.7	－	1/6	灰白色	－	回転ナデ。外底は無調整。体部に径1.4㎝の円孔。	
376	SD－13	陶器甕	－	(7.2)	－	－	一部残存	にぶい赤褐色	口縁部内面を除き鉄釉	焼締。口縁部はT字形。口縁部内面はナデで指頭圧痕が残り，無釉。	肥前産
377	SD－13	磁器染付碗	－	(7.2)	4.7	9.3	1/2	灰白色	透明釉	天目形。外面に蓮弁文と「福寿」「寿福」字・圏線の染付，丸彫による縞文。畳付は釉ハギ。	肥前産 1610～1630年代 初期伊万里
378	SD－13	磁器染付碗	－	(3.0)	4.9	－	底部ほぼ完存	灰白色	透明釉	外面に圏線などの染付。畳付と高台は削り出しで無釉。	肥前産 1640～1650年代
379	SD－13	磁器染付皿	－	(2.1)	5.5	－	1/3	灰白色	透明釉	見込に圏線と人物文の染付。畳付は釉ハギ。高台内に砂付着。	肥前産 1640年代後半
380	SD－13	磁器小杯	－	(2.4)	2.0	－	1/3	灰白色	内面から高台付近に白磁釉	白磁。外面に丸彫による縞文。高台は無釉。	肥前産 1630～1640年代
381	SD－13	磁器染付小杯	5.6	4.2	2.0	－	1/2	灰白色	透明釉	外面に染付と丸彫による縞文。外面体部下半と高台は無釉。高台は削り出し。	肥前産 1640～1650年代
382	SD－13	磁器染付猪口	－	(1.8)	－	－	4/5	灰白色	透明釉	外面に格子文と圏線の染付，高台内に「宣徳年製」の銘。	肥前産 17世紀後半
383	SD－13	磁器香炉	－	(4.4)	6.4	胴径11.9	1/2	灰白色	体部内面から外面に青磁釉	青磁。獣足形の脚を貼付。三足か。見込は回転ナデ及び回転ケズリで無釉。畳付は釉ハギし，錆釉。	肥前産 17世紀末～18世紀初頭
384	SD－13	土師質土器杯	12.8	3.9	5.4	－	底部完存	灰色赤礫・金雲母含	－	水挽成形。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。	
385	SD－13	土師質土器小皿	8.2	2.1	4.8	－	1/2	にぶい橙色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。口縁端部に煤付着。	
386	SD－13	土師質土器小皿	8.1	1.7	4.7	－	完存	灰白色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。内外面に煤付着。	
387	SD－13	木製品木簡	全長15.9	全幅3.4	全厚0.7	－	完存	－	－	短冊形。片面に「うしろ同々おあらため」の墨書。	
388	SD－13	木製品漆器椀	－	(5.5)	(5.3)	－	2/3	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面は黒色の下地に赤塗。	
389	SD－13	木製品漆器椀	－	(7.7)	6.8	－	1/6底部完存	－	－	腰丸形。内外面赤塗。高台内を抉る。	
390	SD－13	木製品蓋物	13.5	3.9	14.5	－	1/3	－	－	刳物。円筒形。口縁端部の外側を削り，受部とする。芯あり。	
391	SD－13	金属製品銭貨	銭径2.45	孔径0.55	銭厚0.11	重量2.93	完存	－	－	寛永通寶。古寛永。内径1.92㎝。	1636～1659年 鋳銭
392	SD－14	陶胎染付小皿	11.4	3.4	6.6	－	1/3	灰白色	内外面透明釉	太白手。白化粧土後，内面に鉄錆による花唐草文と圏線。高台は削り出しで無釉。高台内に砂目痕。	瀬戸・美濃産 18世紀末～19世紀初頭
393	SD－14	木製品漆器椀	－	(5.1)	6.1	－	2/3	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。外面に朱色で笹文か。	
394	SD－14	木製品漆器椀	－	(9.0)	7.4	－	4/5	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。外面は朱色の丸に紅葉文。歪む。	樹種はトチノキ
395	SD－16下層	土師質土器杯	9.7	3.6	4.8	－	1/2	黒色	－	小型。回転ナデ後，見込にナデ。底部の切り離しは回転糸切り。口縁部内面に煤付着。	
396	SD－22	土師質土器小皿	9.3	1.7	5.0	－	1/3	明褐灰色	－	回転ナデか。摩耗するため不明瞭。底部の切り離しは回転糸切り。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
397	SD－23下層	陶器碗	10.5	(6.1)	－	－	1/2	灰白色	長石釉貫入が入る	白天目。高台付近は削り出しで無釉。	美濃産17世紀中葉
398	SD－23上層	陶器小皿	10.8	3.2	4.5	－	1/2	灰黄色	灰釉貫入が入る	唐津系灰釉陶器。高台は削り出しで，一部に釉が掛かる。釉は溶けていない。	肥前産1590～1610年代
399	SD－23上層	陶器小皿	12.0	(2.9)	－	－	1/6	灰白色	灰釉	溝縁形。唐津系灰釉陶器。	肥前産1610～1630年代
400	SD－23下層	陶器皿	－	(2.8)	4.3	－	底部完存	にぶい橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面は回転ケズリ。見込と畳付に砂目痕。高台は削り出しで一部に釉。	肥前産1610～1630年代
401	SD－23下層	陶器皿	－	(1.7)	4.1	－	底部完存	灰褐色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に輪状の砂目痕。高台は無釉。高台に砂，内外面に煤付着。	肥前産1610～1630年代
402	SD－23下層	土師質土器椀	－	(2.2)	4.4	－	底部完存	にぶい黄橙色	－	平高台。回転ナデ後，見込にナデ。底部の切り離しは回転糸切り。見込に煤付着。	10～11世紀
403	SD－23上層	石製品砥石	全長(6.6)	全幅5.9	全厚(0.6)	重量32.4	一部残存	－	－	長方形か。裏面は剥離。残存面に使用痕。先端は著しい使用痕。	
404	SD－23上層	木製品栓	全長10.8	全幅2.0	全厚1.8	－	完存	－	－	断面は上部が方形，下部は円形。先端は細く加工。	
405	SD－23中層	木製品下駄	全長21.5	全幅8.1	全厚(2.2)	－	差歯欠損	－	－	露卯。楕円形。黒漆塗。断面六角形で，裏面の周縁部を斜に加工。差歯孔は方形で1.8×1.1cm。緒孔径1.2cm。	
406	SD－27	土師質土器杯	9.5	2.7	4.7	－	1/2	灰黄色	－	回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り。全面に煤付着。灯明皿か。	
407	SD－27	木製品漆器椀	14.3	(6.2)	－	－	1/3	－	－	外面黒塗，内面赤塗。外面に朱色で花文か。	
408	SD－27	木製品漆器椀	－	(6.5)	(6.4)	－	4/5	－	－	腰丸形。内外面黒塗。	
409	SX－1	陶器向付	－	(2.8)	9.5	－	1/4	灰白色	灰釉	内外面に鉄錆による文様。畳付と高台内は削り出しで無釉。	美濃産織部焼17世紀初頭
410	SX－1	磁器染付中碗	11.0	6.4	4.3	－	1/2	灰白色	内面と高台内に透明釉外面青磁釉	青磁。丸形。内面に四方襷文，見込に五弁花文と二重圏線の染付，高台内は方形枠に渦「福」銘。畳付に砂付着。	肥前産1750～1780年代
411	SX－1	木製品木簡	全長(18.7)	全幅(4.8)	全厚0.4	－	一部残存	－	－	両面墨書。表「御㋕あら㋕ため」，裏「□歳㋕屋　丙㋕戌㋕内□　山拾□」の墨書。	
412	SX－2	陶器中碗	12.5	(6.2)	－	－	1/3	灰白色	鉄釉	天目形。外面下部は回転ナデで無釉。高台付近は削り出しで無釉。	瀬戸・美濃産17世紀
413	SX－2	陶器大皿	－	(6.5)	－	－	1/5	にぶい赤褐色	口縁部は透明釉	折縁形。刷毛目二彩唐津。内面は白化粧土の後，櫛による波状文と錆絵，緑釉を流し掛け。	肥前産17世紀後半
414	SX－2	陶器小皿	－	(2.2)	4.1	－	底部完存	灰白色	白磁釉	白磁。見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出しで無釉。	肥前産17世紀後半
415	SX－3上層	陶器小皿	13.9	3.5	8.3	－	1/3	灰白色	灰釉	丸形。見込に重ね焼痕。外面下半から高台内は削り出しで無釉。	瀬戸・美濃産
416	SX－3上層	磁器染付小皿	13.4	3.1	5.0	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。内面に松葉文の染付。見込を蛇ノ目釉ハギ。高台内は無釉。	肥前産　波佐見17世紀後半
417	SX－3上層	磁器染付大皿	－	(2.5)	20.4	－	1/10	灰白色	透明釉	外面と高台内に圏線，見込に鳥と笹文・圏線の染付。高台内にピン痕。	肥前産17世紀後半
418	SX－3下層	陶器碗	－	(1.9)	4.5	－	底部完存	にぶい橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。畳付付近は削り出しで無釉。	肥前産1610～1630年代

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
419	SX－3 下層	陶器 碗	－	(6.2)	5.0	－	底部 完存	灰白色	灰釉	外面体部下半は回転ケズリ。高台内に渦状の鉋痕。畳付を釉ハギ。高台に砂付着。	
420	SX－3 下層	陶器 小皿	－	(2.1)	4.2	－	1/2	にぶい黄橙色	内面灰釉	唐津系灰釉陶器。外面は回転ナデ，外面下半から高台内は回転ケズリで無釉。見込に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
421	SX－3 下層	磁器 碗	－	(2.8)	－	－	一部 残存	灰白色	青磁釉	青磁。内面に陰刻による文様。	肥前産 1650年代
422	SX－3 最下層	磁器 三足中皿	21.0	6.2	－	－	1/4	白色	青磁釉	青磁。口縁輪花形。型打成形。陰刻文様のある脚を貼付。内外面に型打による菊弁文。口錆。	肥前産　波佐見 1640～1650年代
423	SX－3 下層	磁器染付 小杯	5.6	3.5	2.2	－	1/2	灰黄褐色	透明釉	杉形。外面に草文の染付。高台内は削り出しで無釉，砂付着。	肥前産 1640～1650年代
424	SX－3 下層	磁器染付 仏飯器	－	(3.9)	4.3	－	底部 ほぼ 完存	灰白色	透明釉	頸部に圏線の染付。高台は回転ケズリで無釉。高台内に墨書。	肥前産 17世紀後半
425	SX－3 下層	木製品 漆器椀	－	(3.7)	6.4	－	口縁部 欠損	－	－	平椀か。内外面赤塗。著しく歪む。	樹種はケヤキ
426	SX－3 下層	木製品 漆器蓋	10.1	3.1	－	摘径 5.1	4/5	－	－	内外面赤塗。摘内は黒色で文様。	樹種はブナ属
427	SX－3 下層	木製品 下駄	全長 16.8	全幅 6.9	全厚 3.4	－	完存	－	－	連歯。隅丸方形。下面に「×」の刻書。子供用。緒孔径0.8㎝。	
428	SX－4	陶器 碗	11.4	(3.7)	－	－	一部 残存	灰白色	透明釉	口縁部外面に鉄錆による文様。	美濃産 織部焼か 17世紀前葉か
429	SX－4	陶器 トチン	全長 8.1	全幅 (6.8)	－	－	1/2	灰白色	側面錆釉	上下面は無調整で砂付着。	
430	SX－4	磁器染付 小杯	6.4	2.8	2.2	－	一部 欠損	にぶい褐色	透明釉	端反形。外面に草文の染付。畳付に砂付着。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1640～1650年代
431	SX－6	陶器 小皿	－	(2.4)	4.9	－	底部 ほぼ 完存	にぶい赤褐色	灰釉	絵唐津。見込に鉄錆による植物文。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
432	SX－6	陶器 小皿	－	(3.0)	4.5	－	底部 完存	灰黄色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。外面体部下半は回転ナデで無釉。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1610～1630年代
433	SX－6	土製品 窯道具か	全長 14.0	全幅 13.8	全厚 4.8	－	ほぼ 完存	灰白色 スサ多含	－	円形で上面中央は円形に凹む。上面はナデ，側面は摩耗するため調整不明。下面は無調整。煤付着。	
434	SX－6	木製品 漆器椀	－	(8.2)	6.0	－	4/5 底部 完存	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。外面に朱色の丸に三鱗文か。	樹種はトチノキ
435	SX－7	陶器 中碗	－	(3.9)	5.1	－	1/2	灰白色	内面から高台付近に灰釉貫入が入る	丸形。京焼風。高台内に「清水」の銘印。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
436	SX－7 上層	陶器 碗	－	(3.2)	4.8	－	底部 完存	灰白色	灰釉 内面は貫入が入る	畳付を釉ハギ。外面は被熱。	
437	SX－7	陶器 中碗	－	(5.1)	5.0	－	底部 完存	灰白色	光沢のある灰釉 貫入が入る	畳付を釉ハギ。	
438	SX－7 上層	陶器 中碗	11.4	8.1	5.1	－	1/3	淡黄色	灰釉 粗い貫入が入る	丸形。畳付を釉ハギ。	
439	SX－7	陶器 匣鉢	－	(7.3)	17.2	－	1/3	にぶい黄橙色	－	焼締。回転ナデ。外面体部下端に指頭圧痕が残る。底部の切り離しは回転糸切り。	
440	SX－7	磁器色絵染付中碗	12.0	(3.8)	－	－	1/8	灰白色	透明釉	丸形。内外面に圏線の染付。外面に黒・朱色の上絵付。	肥前産　有田 1650～1660年代

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
441	SX－7 上層	磁器染付 小碗	8.6	5.1	3.1	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に唐草文と圏線の染付。畳付を釉ハギし，高台に砂付着。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
442	SX－7 最下層	磁器染付 中碗	14.4	7.2	5.2	－	1/4	灰白色	透明釉	丸形。見込に波文と圏線，内面に圏線，外面に荒磯文と圏線の染付。高台と畳付に砂付着。	肥前産 1660～1680年代
443	SX－7 中層	磁器染付 壺蓋	－	(3.9)	－	摘径 1.9	1/8	灰白色	透明釉	円形の摘を貼付。外面に東屋と松文・圏線の染付。摘上面に呉須。	肥前産 17世紀後半
444	SX－7	青花 皿	－	(1.3)	7.8	－	1/4	灰白色	内面から高台に透明釉	見込に梅樹文，外面に圏線の染付。高台内は無釉で，放射状の鉋痕。高台外面に粗砂付着。	中国産 景徳鎮窯系 17世紀初頭
445	SX－7	青花 大皿	35.1	(5.6)	－	－	一部残存	灰白色	透明釉	内面は区画割に窓絵，外面は草花文と圏線の染付。	中国産
446	SX－7 上層	土師器 焼塩壺	－	(4.4)	5.0	(7.6)	3/4	にぶい橙色	－	輪積成形。内面はナデで指頭圧痕と布目痕が残る。外面はナデ，底部は無調整。	関西産 17世紀
447	SX－7	土師器 焼塩壺	6.9	10.1	5.0	7.8	1/2	にぶい赤褐色	－	輪積成形。内面に布目痕，外面はナデ，口縁部は横ナデ。外面に方形枠の刻印。外底は砂が付着し，調整不明。	関西産 17世紀
448	SX－7	土師器 焼塩壺	6.1	9.2	5.0	7.4	一部欠損	にぶい橙色	－	板作成形。内面はナデ，外面は横方向のナデ後，一部にナデ。外底は剥離。外面に二重方形枠内「泉州麻生」の刻印。	関西産 17世紀後半～18世紀前葉
449	SX－7	土師器 焼塩壺蓋	7.5	1.9	天井径 7.3	－	7/8	灰白色	－	天井部はナデ，口縁部は横ナデで指頭圧痕が残る。	関西産 18世紀前半～中葉
450	SX－7	木製品 木簡	全長 22.0	全幅 5.7	全厚 0.7	－	ほぼ完存	－	－	長方形で下部はやや細く加工し，四隅を切る。上部に径2.5㎜の円孔。片面墨書。解読不可。	
451	SX－7	木製品 下駄	全長 21.3	全幅 8.2	全厚 2.9	－	ほぼ完存	－	－	連歯。長方形で隅を切る。6箇所に緒孔。当初の緒孔は木で埋め，後方へ作り直し。歯と上面は擦り減る。緒孔径1.0㎝。	
452	SX－8 上層	陶器色絵 中碗	10.3	(6.4)	－	－	1/5	灰色	灰釉	丸形。外面に朱色と金色とみられる桐文の上絵付の痕跡。	京都・信楽系
453	SX－8 上層	陶器 小碗	－	(1.3)	3.6	－	底部ほぼ完存	灰白色	光沢のある灰釉 貫入が入る	外面に山水文の錆絵か。高台内に「清水」の銘印。高台は削り出しで無釉。	京都・信楽系
454	SX－8 上層	陶器 中碗	－	(3.6)	4.6	－	1/2	灰赤色	透明釉または灰釉	内外面に白化粧土による刷毛目文。畳付を釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀
455	SX－8 上層	陶器 中碗	11.2	8.1	5.0	－	1/4	灰白色	灰釉	丸形。畳付を釉ハギ。	肥前産 17世紀後半
456	SX－8 上層	陶器 中碗	11.6	6.5	4.4	－	1/2	灰色	灰釉	丸形。白化粧土で内面に渦巻文，外面及び高台内に刷毛目文。畳付を釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀前葉
457	SX－8 上層	陶器 小皿	－	(2.1)	4.4	－	底部完存	にぶい橙色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込と高台に砂目痕が残る。外面下半から高台は削り出しで無釉。	肥前産 1610～1630年代
458	SX－8 上層	陶器 小皿	13.0	3.8	4.2	－	底部完存	にぶい褐色	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下半から高台は回転ナデ，削り出しで無釉。見込を蛇ノ目釉ハギ。	肥前産 17世紀後半
459	SX－8 上層	陶胎染付 皿	15.0	4.1	6.2	－	一部欠損	灰白色	灰釉 貫入が入る	口縁輪花形。見込に呉須による文様。畳付を釉ハギ。	
460	SX－8 上層	陶器 中皿	22.0	(4.5)	－	－	1/8	灰白色	内面銅緑釉 外面灰釉	折縁形。見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出しで無釉。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
461	SX－8 上層	陶器 中皿	－	(7.5)	10.0	－	1/6	にぶい赤褐色	灰釉	折縁形。二彩手。内面に白化粧土による刷毛目文と緑釉流し掛け。見込に砂目痕。体部下半は回転ケズリで無釉。	肥前産 17世紀後半
462	SX－8 上層	陶器 大皿	39.2	(5.3)	－	－	1/10	灰褐色	内面褐釉 口縁部外面灰釉	折縁形。二彩手。内面に白化粧土による刷毛目文後，褐釉。外面体部下半は回転ナデで無釉。	肥前産 17世紀後半

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
463	SX－8上層	陶器擂鉢	36.8	(11.9)	－	－	1/5	褐灰色	－	焼締。回転ナデ。口縁部外面に2条の凹線。内面に13条単位の放射状の擂目。外面に自然釉。	備前焼17世紀中葉
464	SX－8上層	陶器擂鉢	－	(4.8)	－	－	一部残存	灰黄褐色	口縁部は鉄釉	口縁部はＴ字形。回転ナデ。内面に擂目。	肥前産　有田17世紀中葉
465	SX－8上層	陶器匣鉢	18.1	9.3	17.8	－	1/3	にぶい赤褐色	－	焼締。内面から体部外面は回転ナデ。外底は無調整。	
466	SX－8上層	陶器壺	12.8	(4.6)	－	－	1/3	黄褐色	－	焼締。回転ナデ。外面に自然釉。	信楽焼
467	SX－8上層	陶器甕	20.9	(7.4)	－	－	1/8	灰黄色	－	焼締。回転ナデ。口縁端部に3条の凹線。肩部に多条の凹線。	丹波焼
468	SX－8上層	陶器鬢水入か	全長(4.6)	全幅(10.0)	全高(0.5)	－	底部2/3	橙色	赤褐色の釉のち内外側面に透明釉	底部は型押成形で，内外面に布目痕が残る。	江戸後期
469	SX－8上層	磁器染付小碗	8.7	5.2	3.9	－	1/4	灰白色	透明釉	丸形。外面に型紙刷による雨粒文，雨降と花卉文・圏線の染付，高台内に圏線の染付。見込に砂付着。	肥前産　有田17世紀末～18世紀初頭
470	SX－8上層	磁器染付小碗	8.1	5.0	3.5	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に唐草文の染付。呉須は青灰色。畳付を釉ハギ。高台内に砂付着。	肥前産18世紀前半
471	SX－8上層	磁器小碗	7.4	5.5	3.2	－	1/2	灰白色	光沢のある白磁釉	白磁。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田1680～1730年代
472	SX－8上層	磁器染付中碗	10.5	6.1	4.4	－	5/6	灰白色	透明釉	丸形。外面は窓に蘭文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産17世紀後葉
473	SX－8上層	磁器染付中碗	10.8	5.9	4.2	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に岩に植物文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田1680～1700年代
474	SX－8上層	磁器染付中碗	11.6	6.2	5.0	－	1/4	灰白色	透明釉	丸形。外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田1680～1700年代
475	SX－8上層	磁器染付中碗	10.9	6.0	4.4	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に墨弾の獅子文か。見込に梅文の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田1660～1680年代
476	SX－8上層	磁器染付碗	11.7	(5.7)	－	－	1/3	灰白色	透明釉	丸形。口錆。外面に草文の染付か。	肥前産17世紀後半
477	SX－8上層	磁器染付中碗	－	(3.0)	5.2	－	底部完存	灰白色	透明釉	外面に圏線と文様，見込に荒磯文と圏線の染付。畳付を釉ハギ。高台に砂付着。	肥前産1670～1680年代
478	SX－8上層	磁器染付碗	－	(3.2)	6.3	－	1/3	灰白色	透明釉	丸形。見込に圏線，外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産17世紀後半
479	SX－8上層	磁器色絵染付皿か	－	(0.9)	－	－	一部残存	灰白色	透明釉	内外面に染付と朱・黒色の上絵付。	肥前産17世紀後半
480	SX－8上層	磁器染付小杯	5.4	(3.3)	－	－	1/4	灰白色	透明釉	端反形。外面に染付と型紙刷による草花文。	肥前産　有田1680～1710年代
481	SX－8上層	磁器染付小杯	6.5	2.8	2.9	－	1/3	灰白色	透明釉	丸形。外面に草花文の染付か。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産18世紀前半
482	SX－8上層	磁器染付猪口	10.0	6.0	5.6	－	1/3	灰白色	透明釉	端反形。外面に風景と東屋，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産18世紀前半
483	SX－8上層	磁器火入	－	(5.5)	6.1	(9.4)	底部完存	明オリーブ灰色	外面青磁釉	青磁。内面は回転ナデで無釉。畳付と高台は削り出しで無釉。	肥前産1680～1710年代
484	SX－8上層	磁器染付鉢	－	(3.1)	6.1	－	底部完存	灰白色	透明釉	外面に圏線と文様，見込に草花文と二重圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。高台と畳付・見込に砂付着。	肥前産17世紀後半

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
485	SX－8 上層	磁器染付鉢	15.0	(5.9)	－	－	1/3	灰白色	透明釉	丸形。外面に風景文の染付。	肥前産 17世紀後半
486	SX－8 上層	磁器染付壺	－	(10.7)	8.0	胴径 (15.9)	底部完存	灰白色	透明釉	外面に風景文と圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 17世紀後半
487	SX－8 上層	磁器染付水滴か	全長 (4.6)	全幅 (3.3)	全厚 (1.7)	－	一部残存	灰白色	透明釉	竹形。底部は型押成形。節を表現し一部を呉須で彩色。内面と外底は無釉で布目痕が残る。583と同一個体か。	肥前産
488	SX－8 上層	青花皿	－	(0.9)	6.4	－	一部残存	灰白色	畳付を除き透明釉	見込に染付，外面に圏線の染付。畳付に砂付着。	中国産 景徳鎮窯系
489	SX－8 上層	土師器焼塩壺	－	(4.9)	5.1	7.2	底部完存	にぶい橙色	－	輪積成形。外面はナデ。外底に板状圧痕。内面は粗雑なナデで布目痕が残る。	関西産 17世紀
490	SX－8 上層	土師器焼塩壺	5.8	(9.4)	－	7.5	1/4	にぶい橙色 金雲母含	－	輪積成形。内外面をナデ。口縁部は横ナデ。内面に布目痕が残る。	関西産 17世紀
491	SX－8 上層	土師器焼塩壺	6.0	(9.0)	－	7.1	1/2	にぶい黄褐色	－	輪積成形。ナデ。口縁部は横ナデ。外面に「御壷塩師／堺湊伊織」とみられる刻印。	1682年～18世紀前葉
492	SX－8 上層	土師器焼塩壺蓋	7.6	2.2	天井径 5.0	－	ほぼ完存	にぶい橙色	－	ナデ。口縁部は横ナデ。天井部内面に布目痕，天井部外面に板状圧痕が残る。	関西産 17世紀
493	SX－8 上層	土師器焼塩壺蓋	7.6	2.4	天井径 7.6	－	ほぼ完存	橙色	－	断面凹字形。ナデ。口縁部は横ナデ。天井部内面に布目痕が残る。板作成形の壺に伴う蓋か。	関西産
494	SX－8 上層	土師器焼塩壺蓋	7.4	2.4	天井径 7.6	－	一部欠損	黒色	－	断面凹字形。ナデ。口縁部は横ナデ。天井部内面に布目痕が残る。板作成形の壺に伴う蓋か。	関西産
495	SX－8 上層	木製品木簡	全長 24.5	全幅 3.1	全厚 0.4	－	完存	－	－	長方形で下部を尖らせ，上部左右に切り込みと径0.2㎝の円孔。片面墨書。解読不可。	
496	SX－8 上層	木製品木簡	全長 9.5	全幅 6.4	全厚 1.0	－	完存	－	－	長方形で四隅を切る。上部に径0.3㎝の円孔。表「元禄己(カ)□／御門出入／正月□日」，裏「川嶋(カ)八左衛門」の墨書。	
497	SX－8 上層	木製品不明	全長 11.3	全幅 4.2	全厚 0.9	－	ほぼ完存	－	－	波形で端部は丸い。断面方形。調度品飾りか。	
498	SX－8 上層	木製品不明	全長 26.1	全幅 11.2	全厚 1.7	－	一部欠損	－	－	羽子板形。柄は断面方形。大型で厚い。叩板か。	
499	SX－8 中層	陶器中碗	－	(3.7)	5.3	－	3/4	灰白色	内面から高台付近に光沢のある灰釉	京焼風。高台内に「清水」の銘印。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
500	SX－8 中層	陶器火入	11.2	5.9	8.3	胴径 11.0	2/3	褐灰色	口縁部内面から体部外面まで錆釉	回転ナデで，外面体部下半は回転ケズリで無釉。外底はナデで無釉，砂付着。	
501	SX－8 中層	磁器染付変形皿	全幅 (7.4)	2.4	8.2	－	1/4	灰白色	透明釉	型打成形。口錆。外面に染付，見込は梅樹文，内面に四方襷文と窓絵の染付，高台内には二重方形枠に「福」銘。	肥前産　有田 1640～1650年代
502	SX－8 中層	土師器焼塩壺蓋	7.2	2.5	天井径 5.0	－	3/4	灰色 金雲母含	－	内外面ナデ。口縁部は横ナデ。	関西産 17世紀
503	SX－8 下層	陶器火入	12.4	6.1	8.7	胴径 10.9	1/2	灰黄色	－	焼締。手捻による把手を1箇所貼付。回転ナデで，外面体部下半にケズリ。外底は無調整。内面に煤付着。	
504	SX－8 下層	木製品漆器椀	－	(9.3)	6.6	－	2/3	－	－	腰丸形。内外面赤塗。高台内を半ばまで抉る。	樹種はブナ属
505	SX－9 上層	陶器中碗	－	(1.7)	5.7	－	1/2	灰白色	内面から体部外面に灰釉	京焼風。高台内に「小松吉」の銘印。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
506	SX－9 上層	陶器中碗	11.4	7.6	5.4	－	底部完存	灰白色 磁器質	灰釉貫入が多く入る	丸形。畳付を釉ハギ。	肥前産 17世紀後半

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
507	SX－9上層	陶器中皿	－	(2.7)	12.3	－	1/2	暗灰黄色	内面透明釉	内面に白化粧土による刷毛目文。見込に砂目痕。外面は回転ケズリで無釉。	肥前産 17世紀後半
508	SX－9上層	陶器中皿	－	(4.7)	9.5	－	底部完存	橙色	被熱するため不明	内面に施釉のち白化粧土による刷毛目文。見込に砂目痕。体部外面下半から高台内は回転ケズリ。外面は無釉。	肥前産 17世紀後半
509	SX－9上層	陶器大皿	37.0	3.6	－	－	一部残存	にぶい橙色	外面灰釉	溝縁形。二彩手。内面に白化粧土による刷毛目文。内外面に緑釉と褐釉を流し掛け。	肥前産 17世紀後半
510	SX－9上層	陶器鉢	－	(7.2)	14.3	－	1/3	灰褐色	内面錆釉のち灰釉 外面錆釉	見込に砂目痕。内面の灰釉と外面は刷毛塗。外面の一部に灰釉が流れる。	肥前産 17世紀後半
511	SX－9上層	陶器鉢	－	(9.5)	12.0	－	一部残存	にぶい赤褐色	灰釉	二彩手。内面に白化粧土による刷毛目文，褐釉を流し掛け。見込に砂目痕。高台は無釉。	肥前産 17世紀後半
512	SX－9上層	磁器染付小碗	8.7	4.6	3.3	－	底部完存	灰白色	透明釉	丸形。外面に花唐草文と圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 18世紀前半
513	SX－9上層	磁器染付小碗	10.0	(4.8)	－	－	1/3	灰白色	透明釉	丸形。外面にコンニャク印判による紅葉と梅文の染付。	肥前産　有田 18世紀前葉
514	SX－9上層	磁器染付小碗	－	(4.0)	3.7	－	底部ほぼ完存	灰白色	透明釉	外面に植物文と圏線の染付。畳付を釉ハギし，高台に砂付着。	肥前産 17世紀末～18世紀初頭
515	SX－9上層	磁器染付中碗	10.4	6.1	4.2	－	1/2底部完存	灰白色	透明釉	丸形。外面に草花文の染付。畳付を釉ハギ。高台に砂付着。	肥前産 18世紀前半
516	SX－9上層	磁器染付中碗	－	(5.4)	3.7	－	底部完存	灰白色	光沢のある透明釉	丸形。外面に草花文の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前系 18世紀
517	SX－9上層	磁器染付中碗	10.6	6.2	4.7	－	1/8底部完存	灰白色	透明釉	丸形。外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付。	肥前産　有田 17世紀末～18世紀前葉
518	SX－9上層	磁器三足小皿か	－	(1.5)	3.4	－	底部完存	灰白色	青磁釉	青磁。台形の三足を貼付。	肥前産 17世紀
519	SX－9上層	磁器中皿	－	(3.0)	－	－	一部残存	灰白色	青磁釉	青磁。折縁形。口縁部内面に片彫による文様。	肥前産 1650～1660年代
520	SX－9上層	磁器染付蓋物	10.8	8.2	6.0	－	1/4	灰白色	透明釉	体部外面に草花文と圏線の染付。外底は無釉で，「ふうあり㈲　砂㈲糖入六拾貫」の墨書。口縁部は釉ハギ。	肥前産　有田 17世紀後半
521	SX－9上層	磁器灰吹か	6.9	(4.0)	－	－	一部残存	灰白色	光沢のある青磁釉貫入が入る	青磁。口縁部が内側へ水平に伸びる。	肥前産 17世紀後半
522	SX－9上層	磁器染付鉢	12.6	7.1	4.9	－	3/4	灰白色	透明釉	見込に二重圏線と草文，外面に松と草花文・二重圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀前葉
523	SX－9上層	磁器染付鉢	15.4	8.3	5.9	－	底部完存	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 1680～1710年代
524	SX－9上層	土師器焼塩壺	－	(4.8)	5.0	(7.1)	底部完存	にぶい橙色 金雲母含	－	輪積成形。ナデ。見込に布目痕，体部内面に絞目と指頭圧痕，外面に工具痕，外底に板状圧痕が残る。	関西産 17世紀
525	SX－9上層	土師器焼塩壺	6.5	10.2	4.6	7.7	1/4	にぶい橙色 金雲母含	－	輪積成形。内面に絞目と布目痕が残る。口縁部は横ナデ，外面は横方向のナデ。外底はナデか。	関西産 17世紀
526	SX－9上層	土師器焼塩壺	6.6	(5.1)	－	7.3	1/8	橙色 金雲母含	－	輪積成形。ナデで，口縁部は横ナデ。外面に「御壷塩師／堺湊伊織」の一部とみられる刻印。内面に指頭圧痕が残る。	関西産 1682年～18世紀前葉
527	SX－9上層	土師器焼塩壺	6.4	(6.5)	－	7.4	1/3	にぶい橙色	－	輪積成形。内面はナデで絞目が残る。外面は横方向のナデで「御壷塩師／堺湊伊織」の一部とみられる刻印。	関西産 1682年～18世紀前葉
528	SX－9上層	土師器焼塩壺蓋	7.8	2.2	天井径 6.2	－	1/2	にぶい褐色	－	天井部内面に布目痕，天井部外面はナデで指頭圧痕が残り，口縁部は横ナデ。	関西産

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
529	SX－9 上層	土師器 焼塩壺蓋	7.4	1.9	天井径 6.0	－	1/2	にぶい橙色 金雲母含	－	ナデ。口縁部は横ナデ。天井部外面に板状圧痕，口縁部外面に指頭圧痕が残る。	関西産 17世紀
530	SX－9 上層	木製品 木簡	全長 16.8	全幅 9.0	全厚 0.9	－	完存	－	－	長方形で上部は圭頭。中央部に径0.2cmの円孔。片面墨書。解読不可。	
531	SX－9 上層	木製品 切匙	全長 25.6	全幅 4.3	全厚 0.7	－	完存	－	－	大型。端部を面取。刃部を薄く加工。	
532	SX－9 上層	木製品 下駄	全長 23.8	全幅 8.4	全厚 2.7	－	完存	－	－	連歯。無眼。隅丸方形。6箇所に鉄釘。	
533	SX－9 上層	木製品 刷毛	全長 17.0	全幅 5.0	全厚 2.7	－	完存	－	－	棕櫚を束ね，中央部を径0.4cmの縄で巻く。	
534	SX－9 中層	陶器 中碗	9.1	6.6	5.5	－	1/2	灰黄色	内面から体部外面に灰釉	丸形。京焼風。外面に呉須による山水文。高台内に「清水」の銘印の一部か。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
535	SX－9 中層	陶器 中碗	11.4	6.7	5.4	－	1/2	灰黄色	内面から体部外面に灰釉	丸形。京焼風。外面に呉須による山水文。高台内に銘印の一部。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
536	SX－9 中層	陶器 中碗	11.6	6.8	5.8	－	1/2	灰白色	内面から外面体部下半に灰釉	腰張形。高台内に「雲」とみられる銘印。高台は削り出しで無釉。	17世紀後半
537	SX－9 中層	陶器 中碗	13.0	8.6	5.1	－	1/4	にぶい褐色	灰釉 御本が入る	丸形。高台内兜巾状。著しく歪む。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀前半
538	SX－9 中層	陶器 中碗	－	(3.3)	5.5	－	1/2	浅黄色	灰釉	筒形。畳付を釉ハギ。	
539	SX－9 中層	陶器 中碗	－	(4.3)	5.4	－	底部完存	灰黄色	灰釉 貫入が入る	丸形。畳付を釉ハギ。	
540	SX－9 中層	陶器 小皿	13.2	3.3	4.8	－	1/6	灰黄色	内面銅緑釉 外面灰釉	丸形。見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出しで無釉。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
541	SX－9 中層	陶器 小皿	13.5	4.1	4.8	－	一部欠損	灰黄褐色	錆釉	端反形。見込を蛇ノ目釉ハギし，釉ハギ部分に砂付着。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
542	SX－9 中層	陶器 中皿	－	(5.2)	6.7	－	1/2	暗灰黄色	内面銅緑釉 外面灰釉	見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出しで無釉。	肥前産 内野山窯 17世紀後半
543	SX－9 中層	陶器 中皿	－	(9.0)	12.0	－	1/3	にぶい赤褐色	灰釉	折縁形。内面に錆絵，緑釉流し掛け。見込に砂目痕。外面下半は回転ケズリで無釉。高台は削り出しで無釉。	肥前産 17世紀後半
544	SX－9 中層	陶器 急須蓋	8.9	2.7	4.0	摘径 1.4	4/5	にぶい黄橙色	外面緑釉	丸い摘。底部の切り離しは回転糸切り。内面は無釉。	
545	SX－9 中層	陶器 鉢か	－	(4.5)	6.6	－	3/4	灰白色	錆釉 見込の一部に緑釉	内面は回転ナデ，外面は回転ケズリ。畳付に砂付着。高台は削り出し。	
546	SX－9 中層	陶器 擂鉢	27.5	(7.1)	－	－	1/6	灰褐色	－	焼締。回転ナデ。口縁部内面に1条，外面に2条の凹線。外面に自然釉。内面に10条単位の擂目。擂目は摩耗。	備前焼か
547	SX－9 中層	陶器 甕	35.9	(4.2)	－	－	一部残存	にぶい赤褐色	鉄釉	口縁部はT字形で，上面に浅い溝が5条。	肥前産 17世紀後半
548	SX－9 中層	陶器 花生	－	(15.0)	－	－	1/2	灰白色	灰釉	筒形。1箇所に把手状の耳を貼付。内面にロクロ目が顕著に残る。	尾戸窯か
549	SX－9 中層	磁器色絵 中碗	10.7	6.2	4.4	－	一部欠損	灰白色	透明釉	丸形。外面に鳥と草文の上絵付の痕跡。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 1680～1710年代
550	SX－9 中層	磁器 小碗	8.1	5.1	3.3	－	1/2	白色	白磁釉	白磁。丸形。畳付を釉ハギ。高台に砂付着。	肥前産 18世紀前半

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
551	SX－9 中層	磁器染付小碗	7.9	4.8	3.2	－	1/4	灰白色	透明釉	丸形。外面にコンニャク印判と染付による紅葉文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 1680～1710年代
552	SX－9 中層	磁器染付小碗	8.0	5.2	3.2	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に花唐草文と圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
553	SX－9 中層	磁器染付小碗	8.4	4.9	3.8	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に網目と笹文・圏線の染付。畳付を釉ハギ。高台内に砂付着。	肥前産 18世紀前半
554	SX－9 中層	磁器染付小碗	8.5	5.2	3.3	－	3/4	灰白色	透明釉	丸形。外面に網目文と圏線の染付。畳付を釉ハギ。高台内に砂付着。	肥前産 18世紀前半
555	SX－9 中層	磁器染付小碗	8.6	5.0	3.9	－	5/6	灰白色	透明釉	丸形。外面に松葉文と圏線の染付。畳付を釉ハギ。高台内に砂付着。	肥前産 18世紀前半
556	SX－9 中層	磁器染付小碗	8.5	5.1	3.0	－	4/5	灰白色	透明釉	丸形。内面に多重圏線，外面に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
557	SX－9 中層	磁器染付小碗	8.9	5.0	3.1	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に網目文と圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 18世紀前半
558	SX－9 中層	磁器染付小碗	9.6	5.6	4.2	－	3/4	灰白色	透明釉	丸形。外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 1680～1710年代
559	SX－9 中層	磁器染付小碗	10.4	5.8	4.4	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に草花文の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 18世紀前葉
560	SX－9 中層	磁器染付中碗	10.9	6.2	4.5	－	2/3	灰白色	透明釉	丸形。外面に菊花文と圏線，高台内に圏線の染付と「大明年製」の銘。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 1680～1710年代
561	SX－9 中層	磁器染付中碗	10.8	6.1	4.6	－	3/4	灰白色	透明釉	丸形。口縁部内面に縦方向の丸彫の痕跡。外面に山水文と圏線，高台内に圏線の染付と銘。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 1680～1710年代
562	SX－9 中層	磁器染付中碗	10.8	6.1	4.3	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に松と山・舟文・圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 1680～1710年代
563	SX－9 中層	磁器染付中碗	10.9	5.8	4.7	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に圏線と松文か，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 18世紀前半
564	SX－9 中層	磁器染付中碗	10.5	6.2	4.1	－	底部完存	灰白色	透明釉	丸形。外面に土坡と樹文・圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 18世紀前半
565	SX－9 中層	磁器染付中碗	11.0	6.5	4.4	－	2/3	灰白色	光沢のある透明釉	丸形。外面に草花と風景文か，圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 1680～1710年代
566	SX－9 中層	磁器染付小碗	9.7	6.9	4.4	－	1/2	灰白色	透明釉	端反形。外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 18世紀前半
567	SX－9 中層	磁器染付小碗	9.6	5.7	4.3	－	3/4	灰白色	外面青磁釉内面透明釉	青磁。丸形。口錆。見込に五弁花文と二重圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 18世紀前半
568	SX－9 中層	磁器染付小皿	－	(1.8)	6.0	－	底部完存	灰白色	透明釉	型打成形。見込に舟と魚・麒麟文・圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 1640～1650年代
569	SX－9 中層	磁器染付五寸皿	14.0	2.6	9.1	－	1/3	灰白色	光沢のある透明釉	見込は菊花文，内面は濃地に雲文か，外面に宝文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，高台に砂付着。	肥前産 1680～1710年代
570	SX－9 中層	磁器中皿	18.9	5.6	10.0	－	1/8	灰白色	白磁釉	白磁。口縁波縁状。畳付を釉ハギし，高台内に砂付着。	肥前産 17世紀後半
571	SX－9 中層	磁器色絵小杯	5.9	3.8	2.7	－	4/5	白色	透明釉	端反形。外面に黒・朱色の鳳凰と雲文の上絵付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 18世紀前半
572	SX－9 中層	磁器染付小杯	－	(1.0)	2.4	－	底部完存	灰白色	透明釉	外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付と「大明年製」の銘。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産　有田 1680～1710年代

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
573	SX－9 中層	磁器染付 小杯	－	(3.2)	3.5	－	底部 完存	白色	透明釉	外面に草花文と圏線の染付。外底に細かい砂付着。	肥前産 18世紀前半
574	SX－9 中層	磁器染付 小杯	4.8	3.9	2.4	－	1/2	灰白色	光沢のある 透明釉	桶形。外面に雨降文の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 18世紀前半
575	SX－9 中層	磁器 小杯	5.6	4.2	2.7	－	ほぼ 完存	灰白色	白磁釉	白磁。桶形。畳付を釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
576	SX－9 中層	磁器染付 小杯	6.3	3.6	3.0	－	3/4	灰白色	光沢のある 透明釉	丸形。外面に魚文と圏線，内面に圏線，見込に花文と二重圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 18世紀前半
577	SX－9 中層	磁器染付 小杯	6.5	3.8	3.0	－	1/4	灰白色	光沢のある 透明釉	端反形。外面に草花文と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 1680～1710年代
578	SX－9 中層	磁器染付 猪口	－	(3.9)	3.2	－	底部 完存	灰白色	透明釉	外面に圏線と文様の染付。畳付を釉ハギし，高台に砂付着。	
579	SX－9 中層	磁器色絵 猪口	－	(4.2)	5.0	－	1/3	灰白色	光沢のある 透明釉	外面に黒色で松文の上絵付か。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 17世紀後半
580	SX－9 中層	磁器染付 猪口	9.0	5.8	5.0	－	1/2	灰白色	透明釉	桶形。外面に型紙刷による雨粒文，雨降文と圏線の染付。高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産　有田 1680～1710年代
581	SX－9 中層	磁器染付 蓋物	4.8	3.4	2.5	－	1/3	灰白色	透明釉	多角形。型打成形。外面に型による区画に幾何学文と瓔珞文か，呉須で一部を彩色。口縁部は釉ハギ。高台は無釉。	肥前産　有田 18世紀前半
582	SX－9 中層	磁器染付 鉢	－	(7.4)	6.0	－	1/8	灰白色	透明釉 透明感なし	見込は二重圏線内に荒磯文，外面に圏線と染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 1660～1680年代
583	SX－9 中層	磁器染付 水滴か	全長 (11.9)	全幅 (2.3)	全厚 (1.9)	－	一部 残存	灰白色	内面上部と 外面に透明釉	竹形。節を表現し，一部を呉須で彩色。内面下部はナデで，無釉。487と同一個体か。	肥前産
584	SX－9 中層	土師質 土器 皿	17.5	3.1	9.8	－	1/3	灰色	－	回転ナデ。外底はナデ。内面に煤付着。	
585	SX－9 中層	土師器 焼塩壺蓋	6.7	1.8	天井径 5.2	－	ほぼ 完存	橙色 0.8㎝大の礫含	－	ナデ。口縁部は横ナデ。	関西産 17世紀
586	SX－9 中層	石製品 硯	全長 11.1	全幅 4.8	全厚 1.2	重量 96.2	一部 欠損	－	－	小型。陸部に使用痕。海部に墨付着。粘板岩。	
587	SX－9 中層	木製品 木簡	全長 (16.1)	全幅 5.6	全厚 0.9	－	一部 欠損	－	－	下端は方形で隅を切る。表「□佐守内味元加大夫　宇賀孫惣」，裏「□佐守内味許加大夫　宇賀孫惣」の墨書。	
588	SX－9 中層	木製品 漆器椀	10.5	4.0	5.0	－	2/3	－	－	内外面赤塗。外面に黒色で丸に三鱗文。	樹種はサカキ
589	SX－9 中層	木製品 漆器皿	－	(3.0)	(10.8)	－	1/3	－	－	内外面黒塗。低い高台が付く。	樹種はコシアブラ
590	SX－9 中層	木製品 下駄	全長 22.3	全幅 8.6	全厚 4.7	－	完存	－	－	連歯。長方形で四隅を丸く加工。欠けた前歯に木片を鉄釘で留めて補修。前緒孔径0.9㎝。横緒孔径0.4～0.6㎝。	
591	SX－9 中層	木製品 不明	全長 12.3	全幅 7.3	全厚 0.9	－	一部 残存	－	－	板状。隅を丸く加工。周囲に円孔。上面に斜格子状の刻目。下面は面取，溝状の糸痕か。両面に黒色の付着物。	
592	SX－9 中層	骨角製品 箆	全長 (12.9)	全幅 2.2	全厚 0.4	重量 9.6	一部 欠損	－	－	先端は薄く尖らせ，基部は細く加工。3箇所に径0.2㎝の円孔。片面に3本の直線状の陰刻文。	
593	SX－9 下層	陶器 中碗	12.5	(5.1)	－	－	1/6	灰白色	鉄釉	天目形。	
594	SX－9 下層	陶器 中碗	－	(4.2)	5.4	－	底部 完存	灰白色	灰釉 貫入が入る	畳付を釉ハギ。外面は一部被熱。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
595	SX－9下層	陶器中碗	12.5	8.2	5.5	－	1/8	灰白色	灰釉貫入が入る	丸形。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産17世紀後半
596	SX－9下層	陶器中碗	11.7	8.5	5.7	－	3/4	灰白色	灰釉貫入が入る	丸形。畳付を釉ハギ。	肥前産17世紀後半
597	SX－9下層	陶器中碗	11.0	7.5	5.2	－	1/4	灰白色	光沢のある灰釉貫入が入る	腰張形。畳付を釉ハギ。	
598	SX－9下層	陶器中碗	11.9	8.8	5.0	－	1/3底部完存	にぶい黄橙色	光沢のある灰釉貫入が入る	端反形。薄手。外面体部下半に丸彫による縞文。高台は削り出しで無釉。	
599	SX－9下層	陶胎染付火入	13.4	(5.6)	－	－	1/4	灰白色	口縁部内面から外面に透明釉	内面体部下半は回転ナデで無釉。外面に圏線の染付。口縁端部に敲打痕。	
600	SX－9下層	陶器擂鉢	－	(5.8)	13.0	－	1/4	にぶい赤褐色	－	焼締。回転ナデ。内面に放射状と斜方向の擂目。見込にも擂目。著しく摩耗。	備前焼17世紀前葉
601	SX－9下層	陶器甕	－	(19.4)	23.0	(36.5)	底部完存	明赤褐色	－	見込は放射状の当具痕，内面は格子状の当具痕後ナデ，外面は格子状のタタキ後ナデ，外底は無調整。	肥前産18世紀
602	SX－9下層	磁器染付中碗	10.4	(4.4)	－	－	1/8	灰白色	透明釉	丸形。外面に松文の染付。	肥前産18世紀前半
603	SX－9下層	磁器小杯	5.7	3.9	3.1	－	1/3	灰白色	白磁釉	白磁。桶形。口錆。畳付を釉ハギ。	肥前産18世紀前半
604	SX－9下層	磁器染付仏飯器	7.9	(4.1)	－	－	1/2	灰白色	透明釉	外面に笹文と圏線の染付。	肥前産17世紀後半
605	SX－9下層	磁器染付水滴	全長17.0	全幅4.2	全厚5.9	－	ほぼ完存	灰白色	外底を除き外面に透明釉	舟形。人物と俵を貼付。俵と舟底は型押成形。側面に陽刻文と染付。一部を呉須で彩色。下面に「五分人中」の墨書。	肥前産
606	SX－9下層	青花碗	－	(3.3)	4.7	－	底部完存	灰白色	畳付を除き透明釉	見込に圏線と「大明成化年製」の銘，外面に圏線の染付。	中国産景徳鎮窯系
607	SX－9下層	青花鉢	17.9	(7.4)	－	－	1/2	灰白色	透明釉	見込は雲龍と宝珠・圏線，内面に雲と宝珠・圏線，外面は区画割に「寿」字と雲龍，舟と人物文の染付。漆継の痕跡。	中国産景徳鎮窯系
608	SX－9下層	土師器焼塩壺	－	(5.2)	4.0	(6.8)	底部完存	橙色	－	輪積成形。外面はナデ，内面は粗雑なナデで絞目が残る。底部は無調整か。	関西産17世紀
609	SX－9下層	土師器焼塩壺	6.0	10.3	4.2	7.1	1/3	にぶい褐色	－	輪積成形。外面は横方向のナデ，口縁部は横ナデ，内面は粗雑なナデで絞目と布目痕が残る。	関西産17世紀
610	SX－9下層	土師器焼塩壺	－	(8.6)	5.5	(7.3)	底部完存	にぶい黄橙色	－	水挽成形。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切り後，板状圧痕が残る。	関西産
611	SX－9下層	土師器焼塩壺蓋	6.8	1.8	天井径5.3	－	1/2	にぶい橙色	－	ナデ。口縁部は横ナデ。天井部内面に布目痕，天井部外面には板状圧痕のち，ナデ。	
612	SX－9下層	土製品土錘	全長4.9	全幅1.5	全厚1.4	重量8.2	完存	にぶい橙色	－	紡錘形。外面に指頭圧痕。摩耗するため調整不明瞭。孔径0.4cm。	
613	SX－9下層	木製品木簡	全長21.2	全幅3.8	全厚1.0	－	完存	－	－	短冊形。上部に径0.2cmの円孔。両面に「塩鱒弐尾之内　上林味卜」の墨書か。	
614	SX－9下層	木製品下駄	全長15.0	全幅7.6	全厚4.2	－	完存	－	－	連歯。隅丸方形。5箇所に円孔。緒孔径0.8cm。横緒孔を後方へ作り直しか。子供用。	
615	SX－9下層	木製品剝物	全長34.2	全幅6.3	全厚2.7	－	ほぼ完存	－	－	板状。上面中央部を方形に5×20cm抉る。上面の両端を薄く加工。砥石台か。	
616	SX－9下層	金属製品不明	全長14.1	全幅0.9	全厚0.7	重量28.5	完存	－	－	断面方形。棒状で両端は細く尖る。	

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
617	SX－10上層	陶器中碗	10.7	6.7	4.9	－	1/2	にぶい黄橙色	灰釉貫入が入る	丸形。畳付を釉ハギ。	
618	SX－10上層	陶器中碗	11.6	7.5	4.8	－	1/4底部完存	暗灰黄色	灰釉貫入が入る	丸形。畳付を釉ハギし，砂付着。	
619	SX－10上層	陶器中皿	18.8	5.7	5.8	－	2/3	灰白色	内面銅緑釉外面灰釉	折縁形。見込を蛇ノ目釉ハギ。高台は削り出しで無釉。	肥前産内野山窯17世紀後半
620	SX－10上層	陶器瓶か	－	(7.4)	6.8	－	3/4	にぶい橙色	錆釉のち体部外面上半に鉄釉	回転ナデで，外面下半は回転ケズリ。	肥前産17世紀後半
621	SX－10上層	陶器擂鉢	29.7	12.3	13.0	－	1/4	明赤褐色	－	焼締。回転ナデ。口縁部外面に2条の凹線，内面に12条単位の擂目。底部は無調整。	
622	SX－10上層	磁器色絵中碗	－	(5.2)	4.6	－	底部ほぼ完存	灰白色	透明釉	外面に草文の上絵付の痕跡。畳付は釉ハギ。高台内側に砂付着。	肥前産　有田1680～1710年代
623	SX－10上層	磁器染付小碗	8.0	4.8	3.2	－	3/4	灰白色	透明釉	丸形。外面に松文の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産17世紀後半
624	SX－10上層	磁器染付小碗	8.8	(4.2)	－	－	1/3	灰白色	透明釉	丸形。外面に土坡と草文・圏線の染付。	肥前産17世紀後半
625	SX－10上層	磁器染付小碗	8.7	5.2	3.3	－	1/4	灰白色	透明釉	丸形。外面に唐草文の染付。畳付を釉ハギし，高台内に砂付着。	肥前産18世紀前半
626	SX－10上層	磁器染付小碗	10.2	5.9	4.2	－	底部完存	灰白色	透明釉	丸形。外面に草花文の染付。畳付を釉ハギし，高台内に砂付着。	肥前産18世紀前半
627	SX－10上層	磁器染付小皿	13.9	3.5	6.2	－	底部完存	灰白色	透明釉	型打成形。口錆。見込に舟と麒麟文・圏線の染付。内面に型による陽刻の唐草文，外面に舟文の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産1640～1650年代
628	SX－10上層	磁器染付中皿	－	(2.6)	－	－	一部残存	灰白色	青磁釉染付は透明釉	青磁。脚貼付。内面に笹文の染付。	肥前産　波佐見1640～1660年代
629	SX－10上層	磁器小杯	－	(2.8)	2.9	－	底部完存	灰黄色	高台内まで白磁釉	白磁。畳付を釉ハギ。高台は削り出し。	肥前産17世紀後半
630	SX－10上層	磁器香炉または火入	－	(4.4)	7.2	胴径9.4	底部完存	にぶい橙色	体部外面は白磁釉	白磁。内面は回転ナデで無釉，煤付着。高台は削り出し。外底に錆釉を刷毛塗。高台内に「人足」の墨書。	肥前産17世紀後半
631	SX－10上層	土師質土器皿	17.6	4.2	12.1	－	3/4	にぶい褐色	－	大型。回転ナデ。底部の切り離しは回転糸切りで，一部にケズリ。	
632	SX－10上層	土師質土器小皿	8.4	1.9	4.4	－	1/3	褐灰色	－	回転ナデ後，一部ナデ。内面に煤付着。底部の切り離しは回転糸切りで，一部にナデ。	
633	SX－10下層	陶器擂鉢	28.4	(8.8)	－	－	1/8	にぶい褐色金雲母含	－	焼締。回転ナデ。口縁部外面に2条の凹線，自然釉が掛かる。内面に擂目。擂目は著しく摩耗。	
634	SX－10下層	陶器甕	－	(14.5)	－	胴径26.7	一部残存	暗赤色	鉄釉	外面に多条の凹線と線刻による文様。内面に格子目状の当具痕。	肥前産17世紀後半
635	SX－10下層	陶器甕	－	(7.8)	－	31.8	一部残存	黄灰色	鉄釉	外面肩部に多条の凹線。手捻の不遊環貼付。	
636	SX－10下層	磁器染付小碗	11.1	5.8	4.7	－	1/4底部完存	灰白色	透明釉	丸形。外面に柳と草花文・圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産18世紀前半
637	SX－10下層	磁器染付大碗	14.3	(5.2)	－	－	1/6	灰白色	透明釉	丸形。内面と見込に圏線，外面に荒磯文と圏線の染付。	肥前産1660～1680年代
638	SX－10下層	磁器染付猪口	9.1	5.9	5.7	－	底部ほぼ完存	灰白色	透明釉	桶形。外面にコンニャク印判による菊花と丸文・圏線，高台内に「大明年製」の銘と圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田18世紀前半

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
639	SX－10下層	土師質土器皿	16.8	4.4	10.0	－	3/4	にぶい橙色	－	大型。回転ナデで，外面体部下端に回転ケズリ。底部の切り離しは回転糸切り。煤付着。	
640	SX－10下層	木製品木簡	全長9.7	全幅6.0	全厚0.8	－	一部欠損	－	－	長方形で四隅を切る。片面に「□拾貫入扣(カ)　六(三カ)月廿七日」の墨書。	
641	SX－10下層	木製品漆器蓋	10.8	2.5	－	摘径4.2	1/2	－	－	外面黒塗，内面赤塗。外面に朱色で丸に花文。桔梗か。	江戸後期 樹種はカツラ
642	SX－11下層	陶器中碗	10.8	(5.5)	－	－	1/5	灰白色	光沢のある灰釉	丸形。外面に緑彩。	肥前産か 17世紀後半か
643	SX－11下層	陶器碗	－	(3.3)	5.3	－	底部完存	にぶい褐色	灰釉 被熱のため光沢なし	高台内に渦状の鉋痕。畳付を釉ハギ。	
644	SX－11下層	陶器トチン	全長9.2	全幅9.0	全厚8.2	－	一部欠損	にぶい黄橙色	－	焼締。鼓形。側面はナデで指頭圧痕が残る。上下面は無調整。上面に茶色の付着物。下面に板状圧痕が残る。	
645	SX－11下層	磁器染付碗	－	(2.3)	5.7	－	1/2	灰白色	透明釉	筒形。外面に染付。畳付を釉ハギ。	肥前産 1610～1630年代
646	SX－11下層	磁器染付皿	－	(2.8)	6.0	－	1/5	灰白色	透明釉	見込に花文とみられる染付と圏線，内面に帯線の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産 1630～1640年代
647	SX－11下層	磁器染付五寸皿	15.5	2.8	9.4	－	1/6	白色	透明釉	内面に墨弾による文様，外面と高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産　有田 1660～1680年代
648	SX－11下層	磁器小杯	6.8	4.3	2.6	－	2/3	明緑灰色	白磁釉	白磁。端反形。畳付を釉ハギし，高台に砂付着。	肥前産 1640～1650年代
649	SX－11下層	金属製品火箸か	全長21.0	全幅0.4	全厚0.4	重量12.4	完存	－	－	鉄製。先端を細く尖らす。断面は円形。全面錆化。	
650	SX－12	陶器変形皿	全長(10.9)	全幅(16.0)	全高(1.5)	－	一部残存	にぶい橙色	内面と口縁部に灰釉	板作り。多角形か。1辺は縁が立ち上がる。内面に斜格子文の染付。外面は斜方向の板ナデもしくは鉄線切の痕跡。	尾戸窯
651	SX－12	陶器匣鉢	17.3	6.9	16.4	17.9	1/4	灰白色	内面を除き錆釉	回転ナデ。内面は無釉。外底に粘土塊が付着した痕跡と施釉前の板状圧痕が残る。	
652	SE－1埋土3	木製品箸	全長26.1	全幅0.9	全厚0.4	－	完存	－	－	断面楕円形。両端を細く加工。	
653	SE－1埋土6	石製品砥石	全長(11.6)	全幅(6.6)	全厚(3.0)	重量285.6	一部残存	－	－	表と裏の2面に使用痕。粘板岩か。	
654	SE－1埋土7	青花小碗	－	(2.7)	4.2	－	1/3	灰白色	畳付を除き光沢のある透明釉	見込に圏線と花文とみられる染付，外面に唐草文と圏線の染付。畳付に砂付着。	中国産 景徳鎮窯系か
655	SE－2	陶器小皿	11.1	2.4	5.8	－	1/3	灰白色	緑釉	高台内に重ね焼痕。	瀬戸産
656	SE－2	陶器猪口	6.1	2.4	3.5	6.1	1/6	灰白色	鉄釉	外面体部下端は回転ケズリで無釉。	瀬戸産
657	SE－2	白磁碗	－	(1.6)	5.3	－	1/2	灰白色	内面白磁釉	外面は削り出しで無釉。内面に汚れ付着。	中国産 11世紀後半～12世紀
658	SE－2	土師質土器椀	－	(1.2)	5.6	－	5/6	灰白色	－	断面方形の低い輪高台を貼付。著しく摩耗するため調整不明。	12世紀
659	SE－2	土師器十能	全長(7.1)	全幅(3.8)	全厚(4.9)	－	一部残存	橙色	－	ナデ。断面円形で，中空の把手が付く。	
660	SE－2	土師器焼塩壺	5.8	(5.4)	－	6.6	1/4	明褐灰色	－	輪積成形。ナデで，口縁部は横ナデ。内面に布目圧痕，口縁部外面に指頭圧痕が残る。	関西産 17世紀

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
661	SE－2	須恵器椀	－	(3.0)	5.9	－	1/2	にぶい黄橙色	－	輪高台を貼付。回転ナデ。高台は横方向のナデ。底部の切り離しは静止糸切り。	10～11世紀
662	SE－2	須恵器高杯	－	(2.4)	11.5	－	脚部1/8	灰色	－	回転ナデ。	8世紀
663	SE－2	瓦器椀	14.0	(3.5)	－	－	1/8	灰白色	－	口縁部内面に沈線。ナデと指頭圧痕のち，口縁部に横ナデを1段，内外面にミガキ。摩耗するため調整不明瞭。	楠葉型 12世紀後半
664	SE－2	木製品漆器椀	12.7	(5.2)	－	－	1/3	－	－	外面黒塗，内面赤塗。	
665	SE－2	木製品漆器椀	13.6	9.4	6.2	－	4/5	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。	樹種はトネリコ属
666	SE－2	木製品漆器椀	13.8	10.4	6.9	－	ほぼ完存	－	－	腰丸形。外面黒塗，内面赤塗。	樹種はカツラ
667	P－3	軟質施釉陶器色絵皿	－	(1.5)	8.3	－	1/4	灰黄色	緑釉	高台なし。内面に朱色で花文の上絵付。外面は回転ケズリ後，施釉。	
668	P－7掘方	陶器碗	－	(4.1)	6.2	－	1/2	にぶい黄橙色	灰釉	高台は削り出しで無釉。	尾戸窯 18世紀
669	P－8	陶器中碗	10.9	5.8	4.6	－	1/4	にぶい黄橙色	灰釉	丸形。唐津系灰釉陶器。畳付と高台内は無釉。	肥前産 1590～1610年代
670	P－10	陶器大皿	－	(5.9)	13.4	－	1/3	にぶい橙色	内面灰釉	施釉後，白化粧土と緑釉を流し掛けし，波状の刷毛目文。外面は回転ケズリで，一部白化粧土。見込に砂目痕。	肥前産　武雄系 17世紀後半
671	P－15	瓦器椀	12.8	(2.6)	－	－	一部残存	灰白色	－	口縁部内面に沈線。ナデと指頭圧痕のち，内外面にミガキ。摩耗するため調整不明瞭。	楠葉型 12世紀後半
672	近代遺構Ⅳ区	陶器色絵小碗	6.7	5.4	3.1	－	1/3	灰白色	灰釉	丸形。外面に朱色で「飛鶴千　尺雪」の上絵付。高台内は削り出しで無釉。	19世紀
673	近代遺構Ⅰ区	陶器小碗	6.9	(2.8)	－	－	一部残存	灰黄色	光沢のある長石釉	口縁部は緩やかに外反。	美濃産 志野焼 17世紀初頭か
674	近代遺構Ⅳ区	陶器碗	－	(2.8)	4.5	－	底部完存	灰白色	灰釉	唐津系灰釉陶器。高台内は兜巾が残る。畳付を釉ハギ。高台に砂付着。	肥前産 1610～1630年代
675	近代遺構Ⅰ区	陶器碗	－	(1.2)	5.5	－	底部完存	灰白色	内面灰釉	京焼風。外面は削り出しで無釉。高台内に「清水」の銘印。	肥前産 17世紀後半
676	近代遺構Ⅰ区	陶器碗	－	(3.9)	5.1	－	底部完存	にぶい黄色	内面から高台付近に灰釉	京焼風。高台付近は回転ナデ，高台は削り出しで無釉。高台内に「清水」の銘印。	肥前産 17世紀後半
677	近代遺構Ⅴ区	陶器小碗	－	(3.3)	3.6	－	1/2	にぶい赤褐色	透明釉	内外面に白化粧土による打刷毛目文。畳付を釉ハギ。	肥前産 17世紀末～18世紀前葉
678	近代遺構Ⅰ区	陶器小皿	－	(1.6)	4.5	－	1/4	にぶい褐色	灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。高台は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
679	近代遺構Ⅰ区	陶器小皿	－	(1.6)	4.5	－	1/2	にぶい黄橙色	内面と外面の一部に灰釉	唐津系灰釉陶器。見込に胎土目痕。外面下半から高台内は削り出しで無釉。	肥前産 1590～1610年代
680	近代遺構Ⅴ区	陶器小皿	－	(2.8)	4.1	－	1/3	灰黄褐色	灰釉	絵唐津。外面体部下半から高台内は削り出しで無釉。見込に鉄錆による文様。	肥前産 1590～1610年代
681	近代遺構Ⅳ区	陶器小皿	(12.2)	(3.7)	4.2	－	1/3	黄灰色	灰釉	絵唐津。畳付と高台内は削り出しで無釉。見込に鉄錆による文様。	肥前産 1590～1610年代
682	近代遺構Ⅴ区	陶器小皿	14.0	(4.0)	－	－	1/3	灰白色	灰釉	溝縁形。唐津系灰釉陶器。見込に砂目痕。外面下半は回転ケズリ。	肥前産 1610～1630年代

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
683	近代遺構Ⅰ区	陶器小皿	12.8	3.5	4.5	－	3/5	灰白色	灰釉	丸形。二彩唐津。内面に緑彩。見込に砂目痕。高台は削り出しで無釉。	肥前産1620～1640年代
684	近代遺構Ⅳ区	陶器小皿	12.9	3.0	8.0	－	1/3	灰白色	灰釉	外面下半は回転ケズリで無釉。見込に鉄錆による花文の摺絵。	美濃産　御深井18世紀中葉
685	近代遺構Ⅴ区	陶器擂鉢	－	(3.9)	－	－	一部残存	にぶい橙色	－	焼締。小型。回転ナデ。口縁部外面に２条の凹線，重ね焼痕。内面に擂目。自然釉が掛かる。	備前焼17世紀前葉
686	近代遺構Ⅱ区	陶器擂鉢	27.8	(6.0)	－	－	1/6	灰色	－	焼締。回転ナデ。口縁部外面に２条の凹線。内面に9条単位の斜方向の擂目。	備前焼17世紀前半
687	近代遺構Ⅴ区	陶器甕	－	(13.0)	24.0	－	1/5	褐灰色	内面錆釉外面灰釉	内面は格子目の当具痕後，ナデ。外面は格子目タタキ後，ナデ。外底は無調整で無釉。	肥前産17世紀後半
688	近代遺構Ⅱ区	磁器染付中碗	10.1	6.8	4.2	－	1/2	灰白色	透明釉	丸形。外面に風景文と圏線の染付。漆継の痕跡。高台は削り出しで無釉。	肥前産1640～1650年代
689	近代遺構Ⅰ区	磁器染付小碗	－	(3.8)	4.0	－	底部完存	灰白色	透明釉	丸形。外面に網目文と圏線，内面に網目文，見込は二重圏線内に草文の染付。畳付を釉ハギし，砂付着。	肥前産1650～1660年代
690	近代遺構Ⅱ区	磁器染付皿	－	(1.6)	5.8	－	1/4	灰白色	透明釉	見込に二重圏線内に菊花文の染付。畳付を釉ハギ。畳付と高台内側に砂付着。	肥前産1620～1640年代初期伊万里
691	近代遺構Ⅰ区	磁器染付小皿	－	(2.6)	7.4	－	1/3	灰白色	透明釉	外面に唐草文と圏線，内面に墨弾による植物文，見込にコンニャク印判の五弁花文，高台内に銘と圏線の染付。	肥前産　波佐見18世紀前半
692	近代遺構Ⅴ区	磁器皿	－	(2.3)	4.3	－	底部完存	灰白色	青磁釉	青磁。見込を蛇ノ目釉ハギ。体部外面下半から高台内は削り出しで無釉。	肥前産　波佐見18世紀前半
693	近代遺構Ⅳ区	磁器染付小皿	13.6	3.2	6.9	－	5/6	灰白色	透明釉	見込にコンニャク印判の五弁花文，内面に菊唐草文と圏線の染付。見込は蛇ノ目釉ハギし，砂付着。	肥前産　波佐見18世紀後半
694	近代遺構Ⅱ区	磁器染付中皿	19.6	(2.7)	－	－	1/8	灰白色	透明釉	見込に文様と帯線・圏線，内外面に圏線の染付。内面虫喰。	肥前産　有田17世紀後半
695	近代遺構Ⅰ区	磁器染付大皿	－	(2.8)	24.1	－	一部残存	灰白色	透明釉	見込に丸文と梅文，外面に唐草文とみられる染付と圏線，高台内に圏線の染付。畳付を釉ハギ。	肥前産19世紀前半
696	近代遺構Ⅰ区	磁器中皿	－	(1.7)	8.5	－	4/5	灰白色	青磁釉	青磁。高台内は蛇ノ目釉ハギ後，錆釉。見込に片彫による花文。	肥前産1650年代
697	近代遺構Ⅱ区	磁器染付碗蓋	－	(1.8)	－	摘径4.0	1/3	灰白色	内面と摘内は透明釉外面青磁釉	青磁。望料形。内面は丸に草花文と圏線，摘内は二重方形枠に渦「福」銘の染付。	肥前産1750～1780年代
698	近代遺構Ⅰ区	磁器染付蓋物蓋	3.9	1.6	笠径4.8	－	1/4	灰白色	透明釉	紐状の摘を貼付。外面に帯線と松文の染付か。かえり部は釉ハギ。	肥前産17世紀末～18世紀前半
699	近代遺構Ⅶ区	白磁碗	－	(2.4)	－	－	一部残存	にぶい黄橙色	白磁釉	口縁部は玉縁形。	中国産11～12世紀
700	近代遺構Ⅰ区	青磁水注か	－	(5.6)	－	－	一部残存	灰白色	内面の一部を除き青磁釉	型押成形。外面に型による陽刻文様と把手の剥離痕。内面に布目痕が残る。	
701	近代遺構Ⅳ区	青花皿	－	(0.9)	6.3	－	1/8	灰白色	畳付を除き透明釉	見込に染付。高台内に放射状の鉋痕。畳付は無釉。	中国産景徳鎮窯系
702	近代遺構Ⅳ区	土師質土器椀	－	(1.6)	7.0	－	一部残存	灰白色	－	輪高台を貼付。内面はナデ，外面から高台内は横方向のナデ。内外面に火襷。	11世紀
703	近代遺構Ⅳ区	土師質土器椀	－	(1.6)	6.2	－	1/5	灰白色	－	輪高台を貼付。著しく摩耗するため調整不明。	11～12世紀
704	近代遺構Ⅴ区	土師質土器焙烙	23.6	3.8	23.6	－	1/4	にぶい橙色　金雲母・石英含	－	回転ナデ。外底はナデで，板または縄目状の圧痕が残る。	関西産

図版番号	出土地点	器種器形	口径	器高	底径	最大径	残存	胎土	釉　薬	調整・文様・特徴	備　考
705	近代遺構 Ⅵ区	土師器 釜	20.8	(3.9)	−	26.0	一部残存	にぶい橙色　赤礫・長石含	−	口縁部外面に断面方形の鍔を貼付。口縁部は横ナデ。内面は摩耗するため調整不明。	摂津型 10〜11世紀
706	近代遺構 Ⅰ区	須恵器 蓋	15.2	1.9	−	−	1/5	灰白色	−	回転ナデか。摩耗するため調整不明瞭。	古代
707	近代遺構 Ⅰ区	木製品 木簡	全長 (11.1)	全幅 2.2	全厚 0.4	−	ほぼ完存	−	−	上端は方形か。上部に径0.1cmの円孔。表「杓(カ)田村善右衛門」, 裏「奉(カ)□荷(カ)八(カ)入(カ)」の墨書。	
708	近代遺構 Ⅰ区	木製品 木簡	全長 10.6	全幅 2.9	全厚 0.5	−	一部欠損	−	−	長方形の下部を細く加工。上部に径0.2cmの円孔。片面に「三崎村　弥九郎(カ)」の墨書。	
709	近代遺構 Ⅱ区	木製品 木簡	全長 21.5	全幅 6.9	全厚 1.2	−	完存	−	−	長方形の板材の両端を尖らせ, 上部左右に切り込み。片面に「九(丸カ)判」「拾三年」の墨書。	
710	近代遺構 Ⅰ区	木製品 木簡	全長 (10.7)	全幅 (9.4)	全厚 0.9	−	一部残存	−	−	台形。片面に「丑正月　甚大夫(カ)　平七」の墨書と線状の墨書。	
711	近代遺構 Ⅱ区	木製品 桶蓋木簡	全長 (9.4)	全幅 10.2	全厚 0.6	−	9/10	−	−	片面墨書。皮紐が残存。墨書は解読不可。	
712	近代遺構 Ⅴ区	木製品 木札か	全長 16.4	全幅 4.0	全厚 0.4	−	完存	−	−	板状。上部は方形, 下端は細く尖る。墨書は確認不可。	
713	近代遺構 Ⅱ区	木製品 漆器椀	12.8	(4.3)	−	−	1/3	−	−	平形。外面黒塗, 内面赤塗。	
714	近代遺構 Ⅱ区	木製品 独楽	全長 4.0	全幅 3.3	全厚 3.2	−	一部欠損	−	−	円錐形。上面中央部が凹む。下端に径0.3cmの金属製の棒を差し込む。芯持材。	
715	近代遺構 Ⅰ区	金属製品 煙管 雁首	全長 6.6	全幅 1.4	全厚 1.3	重量 10.0	ほぼ完存	−	−	銅製。側面に接合痕。火皿径1.5cm。羅宇接続部径1.3cm。全面錆化。	19世紀か
716	近代遺構 Ⅰ区	金属製品 煙管 吸口	全長 7.5	全幅 1.1	全厚 1.0	重量 4.7	完存	−	−	銅製か。側面に接合痕。外面の一部に金鍍金。	
717	近代遺構 Ⅲ区	金属製品 銭貨	銭径 2.55	孔径 0.60	銭厚 0.13	重量 3.42	完存	−	−	寛永通寶。新寛永。文銭。内径2.08cm。	1668〜1683年 鋳銭
718	近代遺構 Ⅲ区	金属製品 銭貨	銭径 2.50	孔径 0.60	銭厚 0.13	重量 3.97	完存	−	−	寛永通寶。新寛永。文銭。内径2.02cm。	1668〜1683年 鋳銭
719	近代遺構 Ⅲ区	金属製品 銭貨	銭径 2.55	孔径 0.60	銭厚 0.13	重量 3.33	完存	−	−	寛永通寶。新寛永。文銭。内径2.03cm。	1668〜1683年 鋳銭

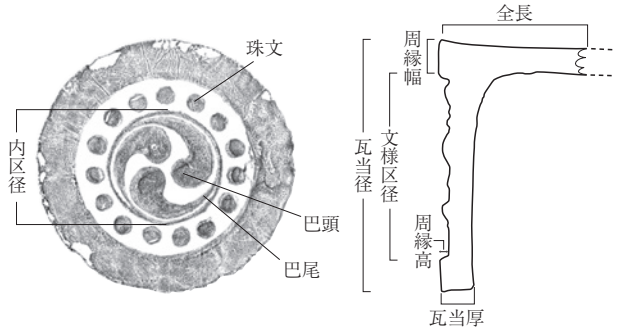
瓦観察表

瓦観察表凡例

1.計測単位はcmまたはgで示している。数値は重量を除き復元値を含む。(　　)は残存値。

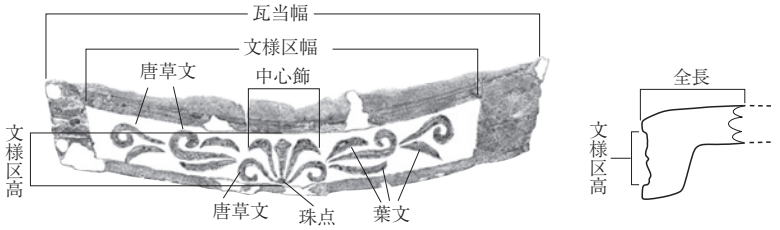
2.軒瓦の残存率は瓦当の残存率。

3.軒丸瓦の計測点及び文様名称

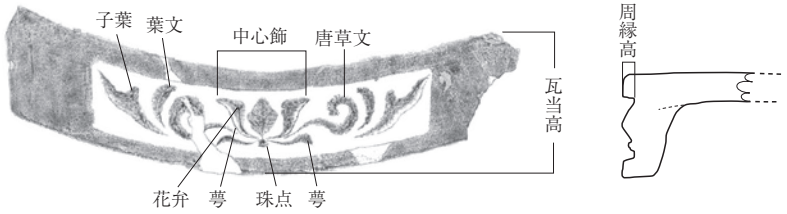


4.軒平瓦の計測点及び文様名称

三葉文軒平瓦



橘文軒平瓦



三ツ葉柏文軒丸瓦観察表

粒　：文様中心にある珠文様の粒の有無。○は有，×は無。
離れ砂：○は瓦当に粗い離れ砂が付着，×は付着しない。
コビキ：丸瓦部凹面の切り離し痕跡。Aは糸，Bは鉄線。
型のずれ：瓦当の型のずれの有無。○は有，×は無。

ナデ：型を外した後にナデ調整を加えるもので，
1. 周縁内側をナデ調整
2. 文様をナデ調整
3. 周縁内側と文様をナデ調整

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	分類	粒	離れ砂	コビキ	型のずれ	ナデ	備考
720	SX－8 上層	15.6	11.6	2.1	(1.8)	0.8	(15.1)	1,154	2/3	灰色 灰白色	A－1	○小	○	A	○	3	文様が小さく周縁と離れる。957の袖部文様と同笵。
721	SK－15	15.2	11.5	1.8	2.4	0.8	(9.2)	1,051	完存	灰色 灰白色	A－1	○	○	A	○		離れ砂顕著。周縁と文様が接する。
722	SK－44	15.7	11.7	2.0	2.6	0.5	(7.0)	1,032	ほぼ完存	灰色 黄灰色	A－1	○	○		×	3	
723	SK－44	16.5	12.1	2.2	(1.8)	0.7	(20.3)	1,344	3/5	暗灰色 灰白色	A－1	○	○		○	3	
724	SK－22	16.4	12.4	1.9	(2.5)	0.6	(9.8)	712	2/3	灰白色 灰白色	A－1	○	○	Aか	○	3	
725	SK－22	15.6	12.0	1.8	2.5	0.7	(5.8)	782	7/8	灰色 灰白色	A－1	○	○		○	3	周縁に板状圧痕。
726	SK－6	16.2	12.2	2.1	2.4	0.7	(5.0)	632	5/6	灰白色 灰白色	A－1	○	○		○	3	
727	SK－6	15.8	11.8	2.0	2.4	0.8	(4.1)	386	1/2	灰色 灰白色	A－1	○	○		○	1	
728	SK－6	16.0	12.0	2.0	2.5	0.6	(8.0)	484	1/2	暗灰色 灰白色	A－1	○	○		○	3	
729	SX－9 中層	16.0	12.0	2.0	(2.4)	0.8	(5.0)	405	1/2	灰色 灰白色	A－1	○	○		○	3	
730	SK－17	16.0	12.4	1.9	(2.2)	0.7	(2.9)	262	1/2	灰色 灰白色	A－1	○	○		○	2	丸瓦との接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
731	SK－22	16.2	12.0	2.1	2.5	0.6	(8.6)	1,051	完存	暗灰色 灰白色	A－1	○	○		○	1	
732	SK－46	16.2	12.4	1.9	2.5	0.8	(3.1)	356	1/2	灰色 灰白色	A－1	○	○		×	2	
733	SK－46	16.5	12.5	2.1	2.5	0.6	(3.2)	398	1/2	暗灰色 灰白色	A－1	○	○		○	3	丸瓦との接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
734	SK－46	16.3	12.4	1.9	2.5	0.7	(3.5)	450	2/3	灰色 黄橙色	A－1	○	○		×	3	
735	SK－22	16.6	12.5	2.0	(1.8)	0.6	(7.5)	779	2/3	暗灰色 灰白色	A－1	○	○	A	○	3	
736	SK－50	16.2	12.4	2.0	2.6	0.5	(6.2)	859	2/3	暗灰色 灰白色	A－1	○	○		×	3	
737	SK－58	16.4	12.2	2.1	2.4	0.5	(3.7)	585	5/6	暗灰色 灰白色	A－1	○	○		○	3	
738	第Ⅰ層 Ⅵ区	16.0	12.0	2.0	(1.9)	0.7	(13.3)	741	1/3	灰色 灰白色	A－1	○	○	A	×		丸瓦との接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
739	SK－50	16.4	12.2	2.2	2.5	0.7	(3.5)	403	1/2	灰色 灰白色	A－1	○	○		×	3	
740	SX－2	16.2	12.2	2.0	2.5	0.7	(4.0)	309	1/3	灰色 灰白色	A－1	○	○		○	1	
741	SK－46	16.5	12.5	2.1	2.4	0.6	(3.9)	321	1/2	灰色 灰白色	A－1	○	○		○	3	
742	SX－10	16.0	12.0	2.0	2.5	0.9	(3.6)	196	1/4	暗灰色 灰白色	A－1	○？	○		×	3	周縁と文様が接する。
743	SD－13	16.0	12.2	1.9	2.2	0.6	(2.8)	162	一部残存	灰色 灰色	A－1	○大	○		×		粒径2.0㎝。
744	SK－44	16.0	12.0	2.0	(2.3)	0.5	(7.3)	404	1/3	灰色 灰白色	A－2	×	○		○	3	
745	SX－9 中層	15.7	11.8	2.0	2.8	0.7	(5.0)	655	3/4	灰色 灰白色	A－2	×	○		×	3	
746	SK－23	15.7	11.7	2.0	2.7	0.7	(14.5)	1,243	完存	灰色 灰白色	A－2	×？	○	A	○	3	
747	SX－10	16.5	12.2	2.1	2.6	0.7	(6.1)	928	ほぼ完存	灰色 灰白色	A－2	×	○	Aか	○	3	
748	SK－7	16.2	12.0	2.2	(2.5)	0.8	(3.3)	364	1/2	灰色 灰白色	A－2	×	○		○	3	瓦当中央に接合痕。円弧状のカキヤブリの痕跡。

三ツ葉柏文軒丸瓦観察表２

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	分類	粒	離れ砂	コビキ	型のずれ	ナデ	備考
749	SK－50	16.2	12.2	2.0	2.5	0.8	(25.5)	2,123	ほぼ完存	灰色 灰白色	A－2	×	○	A	○	3	
750	SK－19	16.2	12.2	1.9	2.3	0.8	(2.9)	402	1/2	灰色 灰白色	A－2	×	○		○	3	周縁と文様が接する。
751	SK－15	16.0	12.0	2.0	(1.7)	0.7	(9.0)	388	1/3	灰色 灰白色	A－2	×？	×		○	2	周縁と文様が接する。
752	SK－22	15.8	12.0	2.0	(3.0)	0.5	(3.6)	406	1/2	灰色 灰白色	A－2	×	○		○	3	瓦当と丸瓦の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
753	SK－19	16.0	12.0	2.2	(3.0)	0.5	(3.3)	324	1/3	灰色 灰白色	A－2	×	○		×	3	瓦当と丸瓦の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
754	SK－17	16.2	12.2	2.1	2.2	0.7	(2.9)	249	1/3	灰色 灰白色	A－2	×	○		○	3	周縁と文様が接する。
755	SK－15	16.5	12.4	2.1	(2.2)	0.8	(7.2)	954	2/3	灰色 灰白色	A	×	○		○	3	
756	SK－40	16.0	11.8	2.0	(2.4)	0.5	(8.5)	644	1/3	暗灰色 灰白色	A	不明	○	A	○	3	周縁と文様が接する。
757	SK－40	16.7	12.2	2.2	(1.9)	0.7	(6.7)	577	2/3	灰色 灰白色	A	不明	○		○	3	瓦当と丸瓦の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
758	SX－7	16.5	13.0	1.8	(2.4)	0.7	(7.6)	561	1/3	灰色 灰白色	A	不明	○		○	3	丸瓦部が厚い。
759	SK－50	16.2	12.2	1.8	(2.2)	0.6	(5.0)	346	1/4	黄灰色 灰白色	A	不明	○		○	3	周縁と文様が接する。
760	近代遺構Ⅵ区	16.5	12.8	1.9	(2.2)	0.8	(2.8)	192	1/3	灰色 灰白色	A	不明	○		○	3	
761	SK－46	16.0	11.6	2.2	(1.8)	0.5	(22.5)	997	1/6	灰白色 灰白色	A	不明	○	A	○	3	円弧状のカキヤブリの痕跡。周縁と文様が接する。
762	SK－46	16.0	12.0	1.9	2.3	0.9	(4.2)	317	1/3	暗灰色 灰白色	A	不明	○		○	3	瓦当と丸瓦の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
763	SK－6	16.0	11.3	2.3	(2.1)	0.7	(4.2)	191	1/4	灰色 灰白色	A	不明	○		×	3	
764	SK－17	16.0	12.0	2.1	2.3	0.8	(2.7)	148	1/4	暗灰色 灰白色	A	不明	×		×	3	周縁と文様が接する。
765	SK－22	16.2	12.0	2.1	(2.2)	0.5	(3.5)	176	1/4	灰色 灰色	A	不明	○		×	3	瓦当と丸瓦の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
766	SK－50	16.0	12.0	2.0	(2.3)	0.7	(2.8)	197	1/3	黄灰色 黄灰色	A	不明	○		○	3	瓦当と丸瓦の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
767	SK－15	16.5	12.5	2.0	2.8	0.7	(3.3)	222	1/5	暗灰色 灰白色	A	不明	○		×	3	
768	SK－22	16.0	13.2	2.0	(2.6)	0.6	(5.2)	293	1/4	灰色 灰白色	A	不明	○		×	3	
769	第Ⅰ層Ⅲ区	16.0	12.0	2.0	(2.7)	0.6	(4.2)	203	1/5	灰色 灰白色	A	不明	○		×	3	
770	SK－40	16.5	12.5	2.1	(2.5)	0.6	(3.2)	146	1/4	灰色 灰白色	A	不明	○		○	3	瓦当と丸瓦の接合箇所に円弧状のカキヤブリの痕跡。
771	SK－50	16.2	12.0	2.1	(2.0)	0.6	(3.5)	195	1/5	灰白色 灰白色	A	不明	○		×	3	
772	SK－50	16.0	12.0	1.9	(2.5)	0.8	(2.8)	162	1/6	灰色 黄橙色	A	不明	○		×	3	
773	近代遺構Ⅵ区	17.0	13.0	2.0	(2.3)	0.4	(12.2)	753	1/3	暗灰色 灰白色	A	不明	○	Aか	×	3	
774	SK－50	17.2	13.2	2.1	2.5	0.7	(3.4)	351	2/3	灰色 灰白色	A	不明	○		×	3	
775	SK－50	全長 (5.2)	全幅 (7.2)	－	全厚 (1.9)	－	－	60	一部残存	灰色 灰白色	A	不明	○		×	2	
776	SK－19	16.7	12.6	2.1	2.6	0.7	(3.3)	566	2/3	暗灰色 灰色	B－1	○	○		×	2	
777	SX－8	16.2	12.2	2.1	(2.8)	0.8	(5.0)	319	1/3	灰色 灰白色	B－1	○	○		×		粒径1.2㎝でやや大きい。葉の丸味強い。
778	SX－8 上層	16.4	12.4	2.1	(2.5)	0.8	(9.7)	694	1/3	暗灰色 灰白色	B－1	不明	○	B	×		
779	SK－17	16.2	12.2	2.1	(2.2)	0.7	(3.6)	183	1/4	暗灰色 灰色	B－1	不明	×		×		
780	SK－17	16.6	12.8	1.9	(2.5)	0.8	(3.1)	187	1/5	灰色 暗灰色	B－1	不明	×		×		

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	分類	粒	離れ砂	コビキ	型のずれ	ナデ	備考
781	近代遺構Ⅰ区	16.0	12.2	1.9	(2.8)	0.7	(3.2)	246	1/4	暗灰色 灰色	B－1	不明	×		×		
782	SX－9下層	17.6	12.7	2.3	3.8	0.9	(4.9)	990	4/5	暗灰色 灰白色	B－2	○	不明		×		瓦当裏面に「○」の刻印。顎厚い。葉の丸味強い。
783	近代遺構Ⅴ区	16.9	12.8	2.0	3.2	0.7	(4.8)	752	4/5	暗灰色 灰色	B－2	○	×		×		丸瓦との接合箇所に放射状のカキヤブリの痕跡。
784	SK－21	17.0	12.8	2.1	(2.1)	0.7	(8.6)	669	1/3	暗灰色 灰白色	B－2	不明	○		○		
785	SX－8上層	17.2	12.8	2.2	3.0	0.8	(4.7)	410	1/3	暗灰色 灰白色	B－2	不明	○		○	1	
786	SD－13	17.0	12.4	2.3	2.9	0.8	(5.0)	370	1/3	暗灰色 灰白色	B－2	不明	×		×	3	
787	SD－13	17.4	13.2	2.1	(2.8)	0.9	(4.1)	329	1/3	灰色 暗灰色	B－2	不明	×		○		葉のくびれが明瞭。
788	SK－55	17.2	13.0	2.1	(2.2)	0.5	(3.0)	197	1/5	灰色 灰白色	B－2	不明	○		×	3	文様と周縁が接する。
789	SX－7	18.3	13.7	2.3	(2.0)	0.7	(17.0)	1,581	1/2	暗灰色 灰白色	B－3	○	○	B	×		
790	SX－8上層	18.3	14.8	1.8	(2.2)	0.6	(9.1)	669	1/3	暗灰色 灰白色	B－3	不明	×		×	3	断面に漆喰付着。
791	SX－10下層	18.3	14.0	2.1	2.7	0.8	(3.9)	319	1/3	暗灰色 灰色	B－3	不明	×		○	2	
792	SK－17	全長 (6.0)	全幅 (11.5)	－	全厚 (2.1)	－	全高 (3.0)	114	1/3	灰色 灰色	B－3	不明	×		×		

連珠三巴文軒丸瓦観察表

珠文数：復元値を含む。
離れ砂：○は瓦当に粗い離れ砂，△は細かい離れ砂が付着，×は付着しない。
コビキ：丸瓦部凹面の切り離し痕跡。Aは糸，Bは鉄線。

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	内区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	珠文径	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	分類	珠文数	離れ砂	コビキ	備考
793	SK－22	15.2	11.0	8.4	2.1	(2.1)	0.7	1.1	(11.0)	738	2/3	灰色 灰白色	A－1	15	○		隅巴瓦。
794	近代遺構Ⅵ区	16.0	11.8	8.5	2.1	1.9	0.7	1.0	(2.5)	366	2/3	灰色 灰白色	A－1	16	△		
795	SX－9中層	16.7	11.9	7.7	2.4	2.2	0.6	1.3	(11.1)	1,128	完存	灰色 灰白色	A－1	15	○	B	漆喰付着。
796	SX－3	16.2	12.0	7.8	2.1	(1.7)	0.7	1.2	(16.2)	847	2/3	灰色 灰白色	A－1	16	○	B	
797	SX－9中層	17.8	12.5	9.2	2.5	2.3	0.7	1.0	(14.0)	1,314	完存	灰色 灰白色	A－1	16	×	B	
798	SK－23	17.0	12.2	8.5	2.3	2.2	0.6	1.1	(21.7)	1,693	完存	暗灰色 灰白色	A－1	17	○	B	凹面に布目圧痕。
799	SD－11	18.2	13.0	8.6	2.6	(2.1)	0.7	1.3	(17.1)	1,215	2/5	灰白色 灰白色	A－1	16	△	B	凹面に布目圧痕。
800	近代遺構Ⅱ区	18.0	13.0	9.2	2.6	2.4	0.7	1.0	(3.1)	389	1/3	灰色 灰白色	A－1	19	○		
801	SK－44	14.8	10.6	7.9	2.1	2.1	0.6	0.7	(20.3)	1,715	完存	灰色 灰色	A－2	18	○	A	型のずれ。周縁の内側をナデ。
802	SK－44	14.6	10.8	8.3	1.9	2.4	0.9	0.7	(11.0)	1,244	ほぼ完存	灰色 灰白色	A－2	18	○	A	周縁の内側をナデ。
803	SK－17	15.6	11.7	8.1	2.0	2.6	0.8	0.7	(4.4)	565	4/5	灰色 灰白色	A－2	18	○		
804	SD－11	18.6	13.1	9.3	2.7	2.5	0.7	1.4	(10.6)	1,331	完存	暗灰色 灰色	A－2	14	○	B	
805	SX－8上層	17.7	14.0	8.7	1.8	2.5	0.7	1.1	(4.3)	625	1/2	灰白色 灰色	A－2	16	○		
806	SK－22	17.2	13.0	9.2	2.2	2.7	0.7	1.2	(10.1)	1,297	完存	灰色 灰白色	A－2	16	○	B	
807	SK－23	17.5	13.0	8.3	2.3	2.6	0.7	1.3	(6.6)	1,114	ほぼ完存	灰色 灰白色	A－2	16	○		

連珠三巴文軒丸瓦観察表２

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	内区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	珠文径	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	分類	珠文数	離れ砂	コビキ	備考
808	SK－44	17.4	13.0	9.1	2.2	2.4	0.6	1.3	(4.2)	675	4/5	暗灰色 灰白色	A－2	16	○		
809	SK－44	17.7	13.1	9.0	2.3	2.3	0.8	1.1	(3.7)	523	4/5	灰色 灰白色	A－2	17	△		
810	SK－46	18.1	12.8	9.0	2.7	(2.4)	0.6	1.3	(15.0)	1,207	1/2	暗灰色 灰白色	A－2	14	○	B	凹面に布目圧痕。
811	SD－11	18.0	13.1	9.0	2.4	2.4	0.6	1.3	(3.1)	508	1/2	暗灰色 灰白色	A－2	16	○		
812	SX－7	17.7	13.7	8.0	(1.9)	1.7	0.5	1.1	(9.5)	1,183	完存	灰色 灰白色	A－2	17	○	B	凹面に布目圧痕。
813	SD－11	17.5	13.4	8.0	2.0	2.3	0.5	1.0	(4.9)	1,054	完存	暗灰色 灰色	A－2	17	△		瓦当に型合わせの痕跡。814･815と同笵。
814	SK－46	17.2	13.0	8.4	2.1	1.7	0.5	1.2	(2.4)	273	1/2	灰白色 灰色	A－2	17	△		瓦当に型合わせの痕跡。813･815と同笵。
815	近代遺構Ⅵ区	17.4	13.4	8.0	1.9	(2.4)	0.4	1.2	(4.9)	532	1/2	灰色 灰色	A－2	17	△		813･814と同笵。
816	SK－46	18.0	13.0	9.0	2.5	(2.2)	0.7	1.3	(6.2)	756	3/4	暗灰色 灰白色	A－2	14	○		
817	SK－46	17.9	13.6	8.6	2.2	(1.6)	0.6	1.3	(5.7)	519	2/3	灰白色 灰白色	A－2	16	○		円弧状のカキヤブリの痕跡。型のずれ。
818	SK－46	16.5	13.3	8.9	1.6	2.2	0.7	1.2	(10.0)	584	1/2	灰色 灰白色	A－2	16	△	B	
819	SK－50	16.0	11.8	8.6	2.1	(2.1)	0.7	1.1	(12.4)	610	1/2	灰色 灰白色	A－2	16	△	B	
820	SK－17	17.2	12.6	8.7	2.3	2.0	0.8	1.3	32.2	2,560	ほぼ完存	灰色 灰白色	A－2	16	○	B	
821	SK－4	17.2	13.2	9.7	2.0	(2.0)	0.8	1.3	(20.4)	1,237	2/3	暗灰色 灰白色	A－2	14	○	B	凹面に僅かに布目圧痕。
822	SX－8上層	16.0	12.2	7.7	1.9	3.3	0.7	1.2	(4.6)	907	完存	暗灰色 灰白色	A－2	16	○		放射状の密なカキヤブリの痕跡。
823	SK－44	16.2	11.9	8.3	2.2	2.0	0.6	1.2	(7.7)	861	ほぼ完存	灰色 灰白色	A－2	16	○		
824	SK－4	16.7	12.5	8.5	2.0	2.0	0.6	1.3	(21.0)	1,604	完存	灰色 灰白色	A－2	16	○	B	
825	SX－8中層	16.9	12.5	8.5	2.2	2.0	0.7	1.3	(4.3)	753	完存	灰色 灰白色	A－2	16	×		
826	SX－8	16.5	12.4	8.1	2.1	(1.8)	0.8	1.3	(3.2)	216	1/4	灰色 灰白色	A－2	18	○		
827	近代遺構Ⅰ区	16.4	12.6	9.2	1.9	2.3	0.6	1.2	(3.5)	501	2/3	暗灰色 灰白色	A－2	15	○		
828	SK－58	16.6	12.6	8.5	1.9	2.0	0.6	1.3	(19.2)	1,586	完存	灰色 灰白色	A－2	16	△	B	
829	SK－50	16.6	12.0	8.2	2.3	2.1	0.7	1.3	(6.5)	943	一部欠損	暗灰色 灰白色	A－2	16	○		型のずれ。
830	SD－11	16.8	12.3	8.3	2.2	2.0	0.8	1.3	(2.5)	380	2/3	灰色 灰白色	A－2	16	○		
831	SX－8上層	17.0	12.5	8.5	2.2	1.9	0.6	1.3	(2.3)	372	2/3	暗灰色 灰白色	A－2	16	○		
832	SK－50	16.9	13.2	9.5	1.8	2.1	0.7	1.1	(5.1)	601	5/6	灰色 灰白色	A－2	15	○		
833	SX－8上層	17.5	12.3	8.7	2.6	1.8	0.6	1.4	(7.7)	1,018	完存	灰色 灰白色	A－2	16	△		瓦当に木目圧痕。
834	SX－8上層	17.8	13.2	8.6	2.3	(2.1)	0.9	1.2	(19.3)	1,391	1/2	暗灰色 灰白色	A－2	17	○	B	漆喰付着。
835	SK－21	18.0	13.2	9.4	2.4	(1.9)	0.6	1.4	32.9	2,344	1/3	暗灰色 灰白色	A－2	17	○	B	丸瓦部に径1.3㎝の円孔が2箇所。
836	SD－13	15.8	11.7	7.3	2.1	2.0	0.7	1.3	(9.2)	777	完存	灰色 灰白色	B－1	16	○	B	
837	SX－7	16.0	11.8	7.3	2.1	2.0	0.8	1.3	(7.4)	759	完存	灰色 灰白色	B－1	16	×	B	
838	SK－37	15.6	11.4	7.3	2.1	2.3	0.7	1.3	(3.6)	376	2/3	暗灰色 灰白色	B－1	16	△		
839	SX－10	15.8	11.5	7.3	2.1	2.4	0.8	1.3	(9.3)	909	完存	灰色 灰白色	B－1	16	○	B	

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	内区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	珠文径	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	分類	珠文数	離れ砂	コビキ	備考
840	SD－11	15.7	11.5	7.2	2.1	2.0	0.7	1.3	(3.0)	344	2/3	灰色 灰白色	B－1	16	○		
841	SK－50	15.8	11.6	7.1	2.1	(1.9)	0.7	1.3	(4.8)	418	1/2	灰色 灰白色	B－1	16	○		
842	SK－50	16.0	11.6	7.3	2.1	2.0	0.7	1.3	(8.7)	814	完存	灰色 灰白色	B－1	16	△	B	瓦当に木目圧痕。放射状のカキヤブリの痕跡。
843	SX－8 上層	17.0	12.5	8.7	2.2	(2.2)	1.1	0.9	(17.6)	1,153	1/2	暗灰色 灰白色	B－1	19	×	B	
844	近代遺構 Ⅵ区	16.4	11.9	8.8	2.2	2.2	0.6	1.3	(5.3)	856	完存	灰色 灰白色	B－2	16	○		
845	SX－8 上層	16.9	12.0	9.0	2.4	2.3	0.7	1.3	(3.4)	794	ほぼ 完存	暗灰色 灰白色	B－2	16	○		瓦当に木目圧痕。

三ツ葉柏文鳥衾瓦観察表

粒　：文様中心にある珠文様の粒の有無。○は有，×は無。
離れ砂：○は瓦当に離れ砂が付着，×は付着しない。

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	粒	離れ砂	備考
846	SX－10 下層	16.0	12.0	2.0	－	0.6	(8.9)	1,073	1/2	灰色 灰白色	○	×	周縁内側をナデ。文様は手捻。葉が1枚のみ大きい。
847	SX－9 中層	16.5	12.5	2.0	(1.8)	0.5	(4.5)	202	1/5	灰色 灰白色	不明	×か	葉の中央が凹む。文様は型。
848	SX－7	16.6	12.8	1.5	(2.4)	0.7	(10.5)	768	2/3	暗灰色 灰色	○	○	文様は三ツ葉柏文軒丸瓦B類と同じ。

連珠三巴文鳥衾瓦観察表

珠文数：復元値を含む。

図版番号	出土地点	瓦当径	文様区径	内区径	周縁幅	瓦当厚	周縁高	珠文径	全長	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	分類	珠文数	備考
849	SX－8 上層	17.0	12.5	8.5	2.2	(1.6)	0.6	1.3	(9.9)	845	3/4	灰色 灰白色	A－2	16	瓦当にキラ粉。硬質。
850	SX－7	18.3	13.0	8.8	2.0	3.2	0.8	1.4	(5.9)	725	2/5	暗灰色 灰白色	A－2	16	文様は820に似る。

軒平瓦観察表

図版番号	出土地点	全長	全幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁高	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	文様	分類	備考
851	SX－9 最下層	(10.1)	(19.7)	4.7	(17.2)	3.0	(0.6)	599	2/3	灰色 灰白色	三葉文	A－1	瓦当上縁中央のみ幅広の面取。
852	SX－4	(20.2)	(15.8)	4.8	(12.7)	2.8	0.5	907	1/2	灰色 灰白色	三葉文	A－1	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
853	SX－9 上層	(8.0)	(15.2)	4.7	(11.2)	2.8	0.6	370	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	A－1 か	瓦当上縁を面取。
854	SK－23	(10.3)	(23.6)	5.0	(19.1)	2.9	0.6	904	2/3	暗灰色 灰白色	三葉文	A－1	瓦当上縁中央のみ幅広の面取。瓦当と凹面に離れ砂。
855	SK－17	(5.9)	(12.1)	4.6	(9.6)	3.0	0.6	264	1/3	灰色 灰白色	三葉文	A－1	瓦当上縁を面取。
856	SK－22	(7.1)	(16.8)	4.5	(12.6)	2.4	0.4	586	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	A－2	瓦当上縁を面取。
857	SX－4	(8.1)	(11.7)	4.5	(10.6)	2.7	0.5	287	1/2	黄灰色 黄灰色	三葉文	A－2	瓦当上縁を面取。
858	SK－46	(5.0)	(12.1)	4.2	(11.9)	2.4	0.5	235	1/2	灰色 灰白色	三葉文	A－3	瓦当に離れ砂。
859	SD－16	(7.4)	(12.8)	(4.2)	(10.7)	(2.5)	0.5	325	1/2	灰色 灰白色	三葉文	A－3	

軒平瓦観察表２

図版番号	出土地点	全長	全幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁高	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	文様	分類	備考
860	SX－8 上層	(11.5)	(15.8)	4.4	(10.2)	2.2	0.3	442	一部 残存	灰色 灰色	三葉文	A－3	瓦当上縁を面取。
861	SX－4	(4.4)	(13.0)	4.2	(12.5)	2.7	0.6	239	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	A－3	瓦当上縁を面取。
862	SK－46	(8.2)	(17.6)	4.1	(11.5)	2.3	0.4	526	1/2	灰色 黄灰色	三葉文	A－4	瓦当に離れ砂。瓦当上縁中央のみ幅広の面取。
863	SK－46	(3.3)	(20.4)	(2.2)	(18.9)	(1.6)	0.4	168	1/2	黄橙色 灰白色	三葉文	A－4	剥離面にカキヤブリの痕跡。
864	SD－11	(14.0)	28.6	4.6	22.3	2.9	0.5	1,029	ほぼ 完存	暗灰色 灰白色	三葉文	B－1	瓦当上縁を面取。接合部に工具痕。
865	SK－22	(16.4)	27.3	4.6	21.7	3.0	0.4	1,545	完存	灰色 灰白色	三葉文	B－1	瓦当上縁中央のみ幅広の面取後ナデ。凹面に離れ砂。
866	SX－9 中層	(11.8)	(18.2)	4.8	(15.7)	2.6	0.4	637	2/3	灰色 灰白色	三葉文	B－1	瓦当上縁を面取後ナデ。
867	SK－46	(4.8)	(15.8)	3.6	(12.9)	2.5	0.5	273	3/5	黄灰色 灰白色	三葉文	B－1	瓦当に離れ砂。
868	SX－7	(11.7)	(18.9)	4.7	(12.6)	3.1	0.6	771	3/5	暗灰色 灰色	三葉文	B－2	
869	SX－8 上層	(16.9)	(23.3)	4.6	(15.6)	2.9	0.4	1,253	2/3	灰色 灰色	三葉文	B－2	870と同笵。
870	SK－40	(15.8)	32.2	5.1	19.5	3.0	0.5	1,389	1/2	暗灰色 灰色	三葉文	B－2	凸面に離れ砂。869と同笵。
871	SK－17	(11.1)	(21.5)	4.5	(15.5)	2.7	0.5	481	5/6	灰色 灰色	三葉文	B－2	隅瓦。凸面に離れ砂。接合面にカキヤブリの痕跡。
872	SK－37	(6.6)	(7.2)	3.7	(6.1)	1.7	0.3	122	1/4	暗灰色 灰白色	三葉文	B－2	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
873	SD－13	(8.3)	(12.1)	4.8	(11.4)	2.8	0.5	248	1/3	暗灰色 灰白色	三葉文	B－3	
874	SK－50	(8.1)	(19.3)	4.8	(14.4)	2.7	0.4	446	2/3	灰色 灰白色	三葉文	B－3	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
875	SX－8 上層	(9.1)	(16.3)	5.7	(13.8)	3.8	0.7	549	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	B－3	瓦当に離れ砂。
876	第Ⅰ層 Ⅰ区	(8.8)	(16.2)	3.4	(13.8)	1.6	0.4	364	2/3	灰色 灰白色	三葉文	B－3	小型。瓦当上縁中央のみ幅広の面取。
877	SK－50	(7.7)	(16.0)	4.7	(11.8)	(2.6)	(0.3)	368	1/2	黒色 灰白色	三葉文	B－3	
878	SX－9 上層	(11.1)	(18.1)	4.5	(12.4)	2.8	0.6	575	1/2	灰色 灰白色	三葉文	B－4	第1唐草の下に「寿」字。瓦当上縁を面取。
879	SK－37	(3.4)	(14.6)	4.3	(13.3)	2.7	0.6	172	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	B－4	第1唐草の下に「寿」字。
880	SK－50	(5.5)	(12.4)	4.4	(11.8)	2.8	0.7	166	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	B－4	第1唐草の下に「寿」字。
881	SK－50	(10.8)	(15.4)	4.8	(10.8)	(2.8)	0.6	400	1/2	灰色 灰白色	三葉文	B－4	瓦当上縁を面取。
882	近代遺構 Ⅵ区	(7.6)	(17.5)	4.9	(13.1)	(3.1)	0.5	387	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	C－1	
883	SK－44	(13.7)	28.3	4.8	18.7	(3.2)	0.7	899	完存	灰白色 灰白色	三葉文	C－2	瓦当上縁を面取。瓦当と平瓦部に離れ砂。
884	SK－23	(13.8)	(20.4)	4.6	(15.7)	3.1	0.6	684	2/3	灰白色 灰白色	三葉文	C－2	瓦当上縁を面取。
885	SK－17	(3.3)	(14.8)	4.7	(14.0)	3.0	0.7	169	1/2	暗灰色 灰白色	三葉文	C－2	瓦当に離れ砂。
886	SX－10 下層	(12.0)	(18.4)	4.6	(11.1)	3.0	0.6	486	1/2	灰白色 灰白色	三葉文	C－2	瓦当に細かい離れ砂。
887	第Ⅰ層 Ⅵ区	(11.2)	(11.0)	4.6	(8.7)	3.2	0.6	311	1/3	灰色 灰白色	三葉文	C－2	接合面にカキヤブリの痕跡。瓦当に木目圧痕。瓦当と凸面に離れ砂。
888	SK－44	(4.4)	(11.6)	4.7	(10.3)	3.2	0.7	167	1/3	灰色 灰白色	三葉文	C－2	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
889	P－14	(9.3)	(15.1)	5.2	(10.8)	2.9	0.4	423	1/2	暗灰色 灰白色	五葉文	A	
890	SK－43	(2.7)	(16.3)	(4.0)	(9.9)	(2.9)	0.5	168	2/3	灰色 灰白色	五葉文	A	
891	近代遺構 Ⅵ区	(13.3)	(20.2)	4.7	(14.8)	3.4	0.3	768	2/3	灰色 灰色	五葉文	A	珠点なし。

図版番号	出土地点	全長	全幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁高	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	文様	分類	備考
892	SX－9 中層	(13.0)	(17.0)	5.2	(11.8)	3.2	0.4	711	2/3	灰色 灰白色	五葉文	B	瓦当上縁を面取。
893	SK－6	(15.3)	(16.9)	5.6	(10.8)	3.3	0.6	526	1/2	灰白色 灰色	橘文	A－1	瓦当上縁中央のみ幅広の面取。瓦当に離れ砂。凸面に漆喰付着。
894	SK－44	(11.5)	(16.4)	(5.2)	(12.6)	3.2	0.5	283	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	A－1	瓦当上縁中央のみ幅広の面取。瓦当と平瓦部に離れ砂。
895	SK－40	(6.5)	(16.0)	5.1	(16.0)	3.2	0.7	344	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	A－1	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
896	SK－17	(14.7)	(19.0)	5.2	(14.0)	3.4	0.7	673	2/3	灰色 灰白色	橘文	A－1	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
897	近代遺構 Ⅵ区	(5.4)	(12.4)	4.9	(12.1)	(2.8)	0.6	186	1/3	暗灰色 灰白色	橘文	A－1	瓦当上縁を面取。
898	SK－23	(15.3)	(22.1)	5.4	(18.0)	3.1	0.4	912	4/5	灰色 灰白色	橘文	A－1	
899	SX－10	(12.4)	(22.6)	4.5	(16.0)	2.5	0.5	814	2/3	灰色 灰白色	橘文	A－2	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
900	SX－2	(10.4)	(15.4)	4.5	(9.6)	2.6	0.6	458	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	A－2	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
901	SK－50	(7.3)	(8.5)	4.3	(8.0)	2.5	0.5	156	1/3	灰色 灰白色	橘文	A－2	瓦当と凸面に離れ砂。
902	SD－12	(8.2)	(14.5)	4.1	(8.6)	2.3	0.6	411	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	A－2	瓦当上縁を面取。
903	第Ⅰ層 Ⅰ区	(8.6)	(15.5)	4.0	(8.8)	2.5	0.5	404	1/2	灰色 灰白色	橘文	A－2	凸面に離れ砂。
904	SK－44	(7.2)	(16.3)	6.0	(15.2)	(3.1)	0.5	552	2/3	灰色 灰白色	橘文	A－3	瓦当上縁を面取。瓦当と凸面に離れ砂。
905	SK－44	(4.1)	(22.5)	5.7	(18.0)	3.2	0.4	438	4/5	暗灰色 灰白色	橘文	A－3	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
906	第Ⅱ層 Ⅳ区	(2.4)	(7.7)	(3.9)	(7.3)	(2.5)	0.4	62	一部 残存	黄灰色 黄灰色	橘文	A－4	
907	SX－8 上層	(13.3)	(15.0)	4.3	(9.4)	2.6	0.4	634	1/2	灰色 灰白色	橘文	A－4	瓦当と凸面に離れ砂。
908	SK－17	(16.0)	(23.4)	4.6	(16.9)	2.7	0.4	769	4/5	暗灰色 灰白色	橘文	A－4	瓦当にキラ粉。
909	SK－22	29.4	(26.8)	4.1	(15.5)	2.5	0.6	2,448	2/3	灰色 灰白色	橘文	B－1	瓦当上縁を横方向のナデ。
910	SK－22	(8.2)	(19.0)	4.2	(12.5)	2.5	0.6	455	2/3	暗灰色 灰白色	橘文	B－1	瓦当上縁を横方向のナデ。
911	SK－23	(19.0)	(19.7)	4.2	(13.9)	2.6	0.7	674	2/3	暗灰色 灰白色	橘文	B－1	瓦当上縁を横方向のナデ。
912	SX－8 上層	(12.1)	(16.6)	4.2	(10.2)	2.6	0.5	591	1/2	灰色 灰白色	橘文	B－1	瓦当上縁を横方向のナデ。
913	SD－11	(9.2)	(15.5)	4.2	(9.2)	2.6	0.6	377	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	B－1	瓦当上縁を横方向のナデ。瓦当に離れ砂。
914	近代遺構 Ⅰ区	(3.2)	(9.5)	4.7	(6.8)	3.3	0.6	104	1/4	灰色 灰白色	橘文	B－1	瓦当に細かい離れ砂。
915	SK－40	(8.9)	28.5	5.6	18.7	3.5	0.6	826	ほぼ 完存	灰色 灰白色	橘文	B－2	
916	SK－40	(8.3)	(20.7)	5.9	(15.3)	3.8	0.7	560	2/3	暗灰色 灰白色	橘文	B－2	
917	SK－53	(3.6)	(10.3)	(5.5)	(8.9)	3.4	0.6	169	1/4	暗灰色 灰白色	橘文	B－2	瓦当上縁を面取。瓦当に離れ砂。
918	SK－19	(8.1)	(16.5)	4.8	(14.0)	3.2	0.5	309	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	C－1	瓦当上縁を面取。
919	SK－4	(13.7)	(15.5)	－	(10.9)	3.2	0.5	429	1/3	暗灰色 灰白色	橘文	C－1	瓦当上縁を面取。
920	SK－46	(2.2)	(9.5)	4.8	(8.0)	3.4	0.5	67	1/4	暗灰色 灰白色	橘文	C－1	
921	SK－6	(9.6)	(17.5)	4.6	(11.5)	3.2	0.5	447	1/2	灰色 灰白色	橘文	C－1	隅瓦。瓦当上縁を横方向のナデ。瓦当に離れ砂。
922	近代遺構 Ⅵ区	(9.2)	(18.2)	4.9	(11.3)	3.0	0.4	539	2/3	灰色 灰白色	橘文	C－1	瓦当と凸面に離れ砂。
923	SX－10 下層	(11.0)	(13.9)	4.8	(12.8)	2.8	0.5	378	1/3	暗灰色 灰白色	橘文	C－1	瓦当上縁を面取。

図版番号	出土地点	全長	全幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁高	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	文様	分類	備考
924	SX－8 上層	(14.2)	(21.5)	4.7	(14.3)	3.1	0.6	948	2/3	灰色 灰白色	橘文	C－1	隅瓦。平瓦部凸面に漆喰付着。
925	SX－9 上層	(8.1)	(19.6)	5.3	(12.5)	3.3	0.4	566	1/2	灰色 灰白色	橘文	C－2	瓦当に離れ砂。
926	SX－9 中層	(20.5)	(20.1)	4.8	(14.4)	3.0	0.5	1,092	2/3	暗灰色 灰白色	橘文	D	隅瓦。瓦当上縁を面取。平瓦部凹凸面に漆喰付着。釘孔あり。
927	SK－15	(11.0)	(19.0)	6.0	(13.7)	3.8	0.7	569	2/3	灰色 灰白色	橘文	D	瓦当上縁を面取。
928	SD－11	(13.9)	(18.5)	5.8	(13.4)	3.7	0.7	861	2/3	暗灰色 灰白色	橘文	D	瓦当上縁を面取。
929	SK－6	(5.3)	(13.2)	5.7	(12.2)	3.6	0.8	217	1/3	灰色 灰白色	橘文	D	瓦当上縁を面取。瓦当に木目圧痕。
930	SK－21	(13.1)	(18.0)	5.9	(14.3)	3.4	0.6	772	2/3	灰色 灰白色	橘文	D	瓦当上縁中央のみ幅広の面取。凸面に離れ砂。
931	SD－11	(16.0)	(20.2)	(4.5)	(13.2)	(3.4)	0.5	884	1/2	灰色 灰白色	橘文	D	瓦当上縁中央のみ面取。
932	SK－39	(5.8)	(8.8)	5.5	(8.0)	3.2	0.7	180	1/4	灰色 黄灰色	橘文	D	瓦当上縁を面取。
933	SK－50	(3.9)	(14.9)	6.0	(13.7)	3.4	0.6	261	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	D	瓦当上縁を面取。瓦当に細かい離れ砂。
934	近代遺構 Ⅵ区	(7.4)	(16.2)	(5.5)	(13.0)	(3.2)	(0.7)	428	1/2	暗灰色 灰白色	橘文	D	瓦当上縁中央のみ幅広の面取。
935	SX－1	(4.5)	(15.9)	(4.1)	(9.9)	2.7	0.3	171	1/2	灰色 灰白色	丁字文	A－1	瓦当にキラ粉。
936	近代遺構 Ⅰ区	(7.7)	(10.3)	4.7	(9.5)	2.9	0.5	218	一部 残存	灰色 灰白色	丁字文	A－1	瓦当上縁を面取。瓦当にキラ粉。
937	SK－17	(8.5)	(11.2)	4.9	(11.0)	3.0	0.4	226	1/3	灰色 灰白色	丁字文	A－2	
938	SK－22	31.1	(27.5)	4.9	(11.2)	3.0	0.6	2,147	2/5	灰色 灰白色	丁字文	A－2	
939	SK－22	(8.3)	(15.1)	5.3	(11.5)	3.2	0.5	454	1/2	暗灰色 灰白色	丁字文	A－2	瓦当上縁を横方向のナデ。
940	SK－46	(10.5)	(12.0)	(5.0)	(6.8)	(2.9)	0.7	470	1/3	灰色 灰白色	丁字文 か	－	瓦当に離れ砂。瓦当左上に文字。
941	SX－1	(11.7)	(16.7)	4.3	(13.1)	2.7	0.5	452	2/3	灰色 灰色	花文	B－1	瓦当上縁を面取。凸面に漆喰付着。瓦当右上には「厄」とみられる文字。
942	近代遺構 Ⅱ区	(4.2)	(7.5)	4.4	(7.4)	2.9	0.5	93	1/4	暗灰色 灰色	花文	B－2	瓦当上縁を面取。瓦当にキラ粉。堅緻でシャープ。銀化。
943	SK－21	(11.1)	(17.9)	4.1	(14.0)	1.9	0.5	523	2/3	灰色 灰白色	花文	C	瓦当上縁を面取。
944	SX－1	(2.2)	(12.2)	4.2	(10.7)	2.7	0.4	98	1/3	灰色 灰色	蔦文	－	瓦当上縁を僅かに面取。
945	SD－13	(11.2)	(20.6)	5.0	(15.8)	3.0	0.6	768	3/4	灰色 灰白色	三ツ葉 柏文	－	瓦当上縁を横方向のナデ。
946	SX－9 最下層	(8.1)	(13.7)	3.5	(6.7)	1.8	0.3	238	1/2	灰白色 暗灰色	宝珠文	－	摩耗するため調整不明。顎部厚1.9㎝。
947	SX－8 上層	(14.7)	(14.2)	3.8	(10.3)	2.1	0.5	326	1/3	灰色 灰色	不明	－	中心飾Ｔ字形。顎部厚1.5㎝。
948	SX－8 下層	(11.8)	(23.8)	4.6	14.6	2.4	0.5	835	5/6	灰色 灰白色	－	－	中心飾なし。瓦当上縁を横方向のナデ。
949	SK－50	(6.7)	(10.5)	(3.6)	(7.5)	(1.7)	0.4	207	1/3	褐灰色 黄橙色	－	－	中心飾なし。
950	SK－46	(5.6)	(13.3)	(4.8)	(9.0)	1.9	0.3	369	1/3	灰白色 灰白色	－	－	中心飾なし。瓦当上縁中央のみ幅広の面取。
951	SX－9	(5.9)	(8.5)	－	(2.2)	(2.6)	0.5	148	一部 残存	暗灰色 灰白色	－	－	瓦当左側に九曜文の刻印。

軒桟瓦観察表

図版番号	出土地点	全長	全幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁高	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	文様	分類	備考
952	近代遺構 Ⅱ区	(18.7)	(22.4)	4.5	(14.3)	3.0	0.6	1,230	2/3	灰色 灰白色	三巴文	A－1	瓦当上縁を面取。瓦当右側に「御瓦師」の刻印。全面にキラ粉。高知県安芸市産。

図版番号	出土地点	全長	全幅	瓦当高	文様区幅	文様区高	周縁高	重量	瓦当残存率	表面色 断面色	文様	分類	備考
953	SX－1	(9.1)	(18.5)	4.8	(14.3)	3.2	0.4	261	1/2	黒色 灰色	三巴文	A－1	瓦当上縁を面取。瓦当右側に方形枠に「片菊」の刻印。全面にキラ粉。香美市産。
954	SX－1	(9.3)	(24.3)	4.9	(15.3)	2.8	0.3	529	完存	灰色 灰色	三巴文	A－2	瓦当右側に「アキ丑」の刻印。瓦当に木目圧痕。凹面にキラ粉。高知県安芸市産。
955	近代遺構Ⅶ区	(7.4)	(12.4)	4.1	(9.5)	2.8	0.4	179	1/2	灰色 灰白色	二巴文	B	左巻。瓦当にキラ粉。
956	SX－1	(11.8)	(10.8)	－	(5.9)	3.6	0.4	242	一部残存	灰色 灰白色	蔦文か	－	瓦当右側に小判形枠に「中己」の刻印。全面にキラ粉。香南市中山田産か。

鬼瓦観察表

図版番号	出土地点	全長	全幅	全高	瓦当厚	把手幅	重量	残存率	表面色	断面色	文様	備考
957	SK－22	37.7	(45.0)	(10.7)	4.8	3.7	6,715	2/3	灰色	灰色	三ツ葉柏文	板状。袖の三ツ葉柏文は型押で720と同笵。文様部分に離れ砂。
958	SK－22	(29.0)	(33.3)	(11.1)	8.5	3.2	4,480	1/3	灰色	灰白色	三ツ葉柏文	文様は手捻。縁帯貼付。
959	SX－10	(41.0)	(43.6)	(9.4)	(7.3)	5.4	6,650	3/5	灰色	灰白色	三ツ葉柏文	文様は手捻。縁帯貼付。
960	SK－50	(11.3)	(18.5)	(4.2)	－	－	549	一部残存	灰色	灰白色	花文	裏面に弧状に粘土を貼付。接合面にカキヤブリの痕跡。961と同一個体か。
961	SK－50	(26.4)	(17.5)	(5.4)	－	－	955	一部残存	暗灰色	灰白色	－	960と同一個体か。
962	SK－17	(24.1)	(11.6)	(5.4)	－	－	1,355	一部残存	灰色	灰白色	－	板状。
963	SK－40	(11.0)	(8.3)	(3.5)	－	－	214	一部残存	灰色	暗灰色	－	板状。ヘラ彫による文様。瓦当に離れ砂，裏面に漆喰付着。
964	SK－22	(16.2)	(9.7)	(4.6)	－	－	508	一部残存	灰色	灰白色	－	縁帯と側板貼付。
965	SE－2	(10.8)	(9.7)	(4.0)	－	－	321	一部残存	暗灰色	灰白色	－	縁帯と側板貼付。
966	SX－8上層	(13.7)	(5.9)	(5.8)	－	－	359	一部残存	灰色	灰白色	－	縁帯と側板貼付。
967	SK－21	(9.9)	(19.6)	(6.0)	－	－	818	一部残存	灰色	灰白色	－	縁帯と側板貼付。瓦当に離れ砂。
968	SK－44	(8.5)	(7.0)	(4.4)	－	－	133	一部残存	灰色	灰白色	－	側板貼付。全面にキラ粉。
969	SX－9上層	(11.5)	(10.4)	(4.0)	－	－	279	一部残存	灰色	灰白色	－	下部に半円形の抉り。
970	近代遺構Ⅳ区	(6.0)	(7.3)	(5.8)	－	－	141	一部残存	暗灰色	灰白色	－	半球形。内側に段を有する。一部銀化。

丸瓦観察表

コビキ：丸瓦部凹面の切り離し痕跡。Aは糸，Bは鉄線。

図版番号	出土地点	全長	筒部幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	コビキ	備考
971	SK－22	34.5	15.7	8.7	2,514	一部欠損	暗灰色	灰白色	A	凹面に吊紐痕。
972	SK－23	(29.3)	16.1	(8.2)	1,769	4/5	灰色	灰白色	A	凹面に布目圧痕と吊紐痕，棒状圧痕。
973	SK－44	(32.1)	16.5	8.3	1,812	2/3	灰色	灰白色	A	凹面に布目圧痕と吊紐痕。
974	SK－37	(26.1)	(16.6)	8.4	1,526	2/3	灰色	灰白色	A	凹面に布目圧痕と吊紐痕。
975	SK－58	(23.0)	(16.6)	8.5	1,570	2/3	暗灰色	灰色	A	孔径1.5cmの円孔。凹面に布目圧痕と金色の付着物。
976	SX－8	(21.6)	12.5	(5.4)	766	1/2	灰色	灰色	A	凹面に漆喰付着。
977	SD－13	31.6	15.5	7.6	1,865	ほぼ完存	暗灰色	灰白色	B	凹面に布目圧痕。

図版番号	出土地点	全長	筒部幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	コビキ	備考
978	SK－22	30.2	15.5	7.2	1,390	一部欠損	暗灰色	灰白色	B	凹面玉縁部に布目圧痕。
979	SK－23	(32.5)	16.3	8.0	2,146	一部欠損	灰色	灰白色	B	一部銀化。
980	SK－15	29.8	16.4	8.5	1,372	4/5	灰色	灰白色	B	凹面に棒状圧痕。
981	SD－13	25.9	13.6	6.9	1,278	ほぼ完存	灰色	灰白色	B	
982	SX－8 上層	33.9	16.3	7.9	1,814	5/6	灰色	灰白色	B	凹面に漆喰付着。
983	SK－17	(21.4)	(13.1)	(8.1)	727	1/2	灰色	灰白色	－	凹面に布目圧痕と棒状圧痕。玉縁に「○」の刻印。
984	SK－31	(17.6)	(16.4)	(7.9)	846	1/3	灰色	灰色	B	玉縁に「○」の刻印。
985	第Ⅱ層 Ⅳ区	(5.7)	(5.4)	(2.2)	49	一部残存	灰色	灰白色	B	凸面に小判形枠に「中己」の刻印。香南市中山田産か。
986	SX－7	(17.4)	(9.8)	(3.6)	448	一部残存	灰色	灰白色	－	凹面に布目圧痕と「長拾(ヵ)年」の刻書。
987	SK－46	(12.4)	(11.8)	(4.3)	283	一部残存	灰色	灰白色	－	凹面に布目圧痕と刻書。
988	SK－40	(3.2)	(3.8)	(3.8)	23	一部残存	灰白色	灰白色	Aか	凸面にヘラ描による文様。

平瓦・桟瓦観察表

桟瓦は備考欄に記載。それ以外は平瓦。

図版番号	出土地点	全長	全幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	備考
989	SX－2	28.4	(25.3)	4.9	2,482	一部欠損	灰色	灰白色	凹凸面に離れ砂。
990	SK－23	31.4	(26.6)	5.5	2,631	一部欠損	灰白色	灰白色	凹凸面の一部に離れ砂。
991	SK－22	34.7	(31.3)	6.0	3,920	一部欠損	灰色	灰色	
992	SX－2	30.5	(27.1)	5.1	2,580	一部欠損	灰白色	暗灰色	凹凸面に離れ砂。
993	SK－46	(26.4)	(17.2)	(3.7)	1,110	1/3	灰色	灰白色	凹面に貫通しない方形の孔, 離れ砂。
994	SK－31	(6.8)	(12.7)	(2.2)	189	一部残存	灰色	灰色	凹面に直線上の線刻。
995	SK－58	(18.5)	(16.1)	(2.5)	447	一部残存	灰色	灰白色	隅切。全面にキラ粉。
996	SK－17	(25.4)	(16.1)	(4.9)	1,126	1/3	灰色	灰色	側面に「○」の刻印。
997	SK－17	(9.6)	(6.7)	(2.1)	141	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
998	SK－23	(9.5)	(13.0)	(2.0)	283	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
999	SX－8 上層	(12.4)	(18.1)	(2.2)	589	1/6	暗灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
1000	SK－22	(29.0)	(14.6)	(2.7)	1,183	1/3	暗灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
1001	SK－19	(9.7)	(7.1)	(2.2)	163	一部残存	暗灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
1002	SD－13	(12.5)	(15.3)	(2.9)	366	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。漆喰付着。
1003	SX－9 中層	(16.7)	(11.4)	(2.2)	447	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
1004	SX－8 上層	(17.5)	(12.2)	(2.2)	386	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
1005	第Ⅰ層 Ⅴ区	(8.4)	(5.9)	(2.2)	111	一部残存	灰色	灰色	側面に「○」の刻印。
1006	SK－37	(6.0)	(11.5)	(2.6)	157	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。凹面端部を中央幅広の面取。

図版番号	出土地点	全長	全幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	備考
1007	SK－50	(10.4)	(12.9)	(2.4)	240	一部残存	灰色	灰色	側面に「○」の刻印。
1008	SK－50	(8.5)	(10.6)	(2.8)	200	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○」の刻印。
1009	SK－44	(7.7)	(5.5)	(2.4)	115	一部残存	灰色	灰白色	側面に半円形の刻印。
1010	SX－10	(12.7)	(10.5)	(2.8)	348	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○に十字」の刻印。
1011	SK－22	(7.5)	(7.6)	(2.4)	131	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○に太」の刻印。凸面に離れ砂。
1012	SX－8 上層	(8.4)	(10.2)	(2.0)	158	一部残存	灰色	灰白色	側面に「○に大」の刻印か。
1013	近代遺構 Ⅵ区	(17.9)	(16.4)	(3.5)	610	一部残存	暗灰色	灰白色	側面に「○に太」の刻印か。凸面に離れ砂。
1014	SD－13	(9.9)	(10.7)	(2.1)	210	一部残存	灰色	灰白色	側面に九曜文の刻印。
1015	近代遺構 Ⅱ区	(16.5)	(10.6)	(2.3)	463	1/6	灰色	灰白色	側面に九曜文の刻印。
1016	SK－6	(12.8)	(19.2)	(3.4)	630	1/8	暗灰色	灰白色	側面に九曜文の刻印。
1017	SK－37	(9.5)	(5.6)	(2.1)	131	一部残存	灰色	灰色	側面に九曜文の刻印。
1018	SK－29	(8.7)	(13.7)	(3.1)	299	一部残存	灰色	灰白色	側面に「安」とみられる刻印。高知県安芸市産。
1019	近代遺構 Ⅳ区	(4.9)	(7.8)	(2.1)	67	一部残存	灰色	灰色	側面に「アキ」とみられる刻印。高知県安芸市産か。
1020	第Ⅱ層 Ⅳ区	(4.5)	(7.8)	(1.9)	56	一部残存	灰色	灰白色	側面に「アキ」とみられる刻印。高知県安芸市産か。
1021	近代遺構 Ⅳ区	(6.2)	(9.0)	(2.5)	99	一部残存	灰色	灰色	側面に「アキ」とみられる刻印。凹凸面にキラ粉。高知県安芸市産か。
1022	SK－28	(14.6)	(14.5)	(3.4)	463	一部残存	灰色	灰白色	側面に「アキ」とみられる刻印。凹面にキラ粉。高知県安芸市産か。
1023	第Ⅱ層 Ⅳ区	(7.4)	(8.4)	(3.0)	128	一部残存	灰色	灰色	側面に「□喜」の刻印。凹凸面にキラ粉。高知県安芸市産か。
1024	第Ⅱ層 Ⅳ区	(10.4)	(12.2)	(2.8)	231	一部残存	灰色	灰色	側面に「御瓦師」の刻印。全面にキラ粉。高知県安芸市産。
1025	近代遺構 Ⅱ区	(12.0)	(17.7)	(3.4)	352	一部残存	灰色	灰白色	型による陽刻で「商標　アキ貞　佐々木製瓦工場　□佐安藝町　□一〇八□」。凸面にキラ粉。
1026	第Ⅰ層 Ⅳ区	(8.8)	(8.8)	(2.3)	136	一部残存	にぶい橙色	にぶい橙色	側面に「ヤス弘」の刻印。高知県香南市夜須町産。
1027	第Ⅰ層 Ⅶ区	(14.5)	(12.6)	(2.8)	300	一部残存	灰色	灰色	側面に「ヤス弘」の刻印。全面にキラ粉。高知県香南市夜須町産。
1028	第Ⅰ層 Ⅶ区	(18.3)	(13.9)	(3.2)	415	一部残存	暗灰色	灰色	桟瓦。側面に「ヤス伊」の刻印。凹凸面にキラ粉。高知県香南市夜須町産。
1029	第Ⅰ層 Ⅶ区	(12.7)	(16.0)	(3.7)	345	一部残存	暗灰色	黄灰色	側面に「ヤス安」の刻印。全面にキラ粉。高知県香南市夜須町産。
1030	第Ⅱ層 Ⅳ区	(7.7)	(12.9)	(3.0)	219	一部残存	灰色	灰色	側面に方形枠に「片菊」の刻印。高知県香美市片地産。
1031	第Ⅰ層 Ⅶ区	(9.2)	(9.9)	(2.9)	126	一部残存	灰色	灰白色	桟瓦か。側面に方形枠に「片菊」の刻印。凹面にキラ粉。高知県香美市片地産。
1032	第Ⅰ層 Ⅵ区	(11.9)	(7.9)	(2.3)	194	一部残存	橙色	橙色	側面に方形枠に「片清」の刻印。凸面に細かい離れ砂, 凹面に漆喰付着。高知県香美市片地産。
1033	第Ⅱ層 Ⅳ区	(6.8)	(5.8)	(2.0)	76	一部残存	灰色	灰白色	側面に方形枠に「片□」の刻印。凹凸面にキラ粉。高知県香美市片地産。
1034	第Ⅰ層 Ⅳ区	(6.2)	(8.8)	(2.4)	107	一部残存	にぶい橙色	灰色	側面に方形枠に「王桂」の刻印。
1035	第Ⅰ層 Ⅴ区	(8.0)	(7.5)	(2.1)	88	一部残存	にぶい黄橙色	灰白色	側面に「仁ろ戈(才ヵ)」の刻印。凹凸面にキラ粉。
1036	SK－28	(13.5)	(12.7)	(3.1)	401	一部残存	灰色	灰白色	側面に方形枠に刻印。
1037	第Ⅱ層 Ⅳ区	(6.6)	(9.5)	(2.0)	72	一部残存	灰色	灰白色	側面に「二赤」とみられる刻印。
1038	SK－32	26.0	(20.0)	(5.2)	1,194	2/3	灰色	灰白色	切込桟瓦か。2隅を切る。側面に「二赤」とみられる刻印。

図版番号	出土地点	全長	全幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	備考
1039	SK－32	26.1	(22.0)	(4.5)	970	2/3	灰色	灰白色	切込桟瓦。2隅を切る。側面に方形枠に「二赤」とみられる刻印か。
1040	第Ⅱ層 Ⅳ区	(7.4)	(9.5)	(2.5)	186	一部残存	灰色	灰白色	側面に方形枠に「大坂瓦師六兵衛」の刻印。凹凸面にキラ粉。
1041	第Ⅱ層 Ⅳ区	(7.3)	(4.7)	(1.9)	109	一部残存	灰色	黄灰色	側面に方形枠に「堺大小路」とみられる刻印。大阪府堺産か。
1042	P－4	(7.9)	(4.8)	(1.8)	87	一部残存	灰色	灰白色	側面に方形枠に「□大小路」の刻印。大阪府堺産か。
1043	SK－17	(14.5)	(9.9)	(2.5)	263	一部残存	暗灰色	灰色	凸面に刻書。
1044	近代遺構 Ⅵ区	(6.0)	(4.8)	(2.5)	56	一部残存	灰色	灰白色	凸面に刻書。

道具瓦観察表

図版番号	出土地点	器形	全長	全幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	備考
1045	SK－15	丸瓦系道具瓦	(24.1)	15.6	7.3	1,288	4/5	暗灰色	灰白色	谷丸瓦。コビキB。径1.1㎝の円孔。
1046	SK－22	丸瓦系道具瓦	(21.9)	(14.8)	7.2	821	1/2	暗灰色	灰白色	谷丸瓦。コビキB。
1047	SK－17	丸瓦系道具瓦	(21.1)	(15.9)	8.1	861	一部残存	暗灰色	灰白色	谷丸瓦。コビキB。
1048	SK－15	丸瓦系道具瓦	(13.9)	(12.6)	(6.9)	447	一部残存	暗灰色	灰白色	谷丸瓦。凹面に僅かに布目圧痕。
1049	SX－4	平瓦系道具瓦	(15.4)	(17.2)	(4.9)	771	一部残存	暗灰色	灰白色	隅切。凸面に粘土板貼付。谷平瓦か。
1050	SK－22	平瓦系道具瓦	(13.6)	(13.2)	(3.7)	393	一部残存	灰色	灰白色	隅切。凸面に粘土板貼付。谷平瓦か。
1051	SK－6	平瓦系道具瓦	(14.7)	(11.1)	(4.2)	386	一部残存	暗灰色	灰白色	隅切。凸面に粘土板貼付。谷平瓦か。
1052	SX－12	平瓦系道具瓦	(12.3)	(12.2)	(3.2)	204	一部残存	灰白色	灰白色	隅切。凸面に粘土板貼付。谷平瓦か。
1053	SX－12	平瓦系道具瓦	(11.6)	(13.0)	(4.4)	305	一部残存	暗灰色	暗灰色	隅切。凹面に粘土板貼付。
1054	SK－22	平瓦系道具瓦	(8.0)	(16.7)	(6.5)	332	一部残存	暗灰色	灰白色	隅切。凹面に粘土板貼付。谷瓦か。
1055	SX－10 上層	平瓦系道具瓦	(22.5)	(20.4)	(4.7)	1,041	2/3	灰色	灰白色	隅切。凸面に粘土板貼付。
1056	SK－23	平瓦系道具瓦	(24.4)	(14.5)	(5.2)	1,064	1/2	灰白色	灰白色	隅切。凹面側に一辺が屈曲。
1057	SK－17	平瓦系道具瓦	(13.7)	(8.7)	(3.6)	224	一部残存	灰色	灰色	凹面側に一辺が屈曲。凹面に粘土板貼付。径0.6㎝の円孔。
1058	SX－8 上層	平瓦系道具瓦	(13.4)	(7.6)	(4.3)	363	一部残存	灰色	灰白色	凹面側に一辺が屈曲。凹面に粘土板貼付。
1059	近代遺構 Ⅳ区	平瓦系道具瓦	(4.9)	(12.5)	(3.6)	160	一部残存	暗黒色	黄灰色	凹面側に一辺が屈曲。凹面に粘土板貼付。全面にキラ粉。
1060	SX－10	平瓦系道具瓦	(11.2)	(6.5)	(3.9)	205	一部残存	暗灰色	灰白色	凹面側の一部に粘土板を貼付し屈曲させる。
1061	第Ⅱ層 Ⅳ区	平瓦系道具瓦	(5.6)	(8.1)	(1.8)	104	一部残存	灰色	灰白色	接合面にカキヤブリの痕跡。側面にキラ粉。
1062	SK－19	平瓦系道具瓦	(22.4)	(18.5)	(4.7)	1,093	2/3	灰白色	灰白色	凹面側に一辺が湾曲。凸面に離れ砂。
1063	SK－21	平瓦系道具瓦	(13.3)	(15.7)	(4.2)	677	一部残存	灰色	灰白色	凹面側に一辺が湾曲。凸面に離れ砂。
1064	SX－9 上層	平瓦系道具瓦	(7.8)	(12.3)	(3.0)	214	一部残存	灰色	灰白色	凹面側に一辺が湾曲。
1065	SK－50	平瓦系道具瓦	(11.7)	(9.7)	(4.0)	340	一部残存	灰色	黄灰色	凹面側に一辺が湾曲。凸面に離れ砂。銀化。
1066	SD－11	平瓦系道具瓦	(14.0)	(17.2)	(3.4)	582	一部残存	灰色	灰白色	L字状に突帯貼付。突帯内側に一辺1㎝を測る方形の孔。
1067	SX－8	平瓦系道具瓦	(8.7)	(11.5)	(2.7)	214	一部残存	灰色	灰白色	突帯貼付。

図版番号	出土地点	器形	全長	全幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	備考
1068	SX－5	平瓦系道具瓦	(13.0)	(16.9)	(4.1)	652	一部残存	灰色	灰色	一辺が屈曲した後，水平に伸びる。凸面に細かい離れ砂。
1069	SK－27	平瓦系道具瓦	(12.6)	(9.1)	(4.1)	204	一部残存	灰色	灰色	一辺が屈曲した後，水平に伸びる。
1070	第Ⅰ層 Ⅴ区	平瓦系道具瓦	(7.1)	(8.5)	(3.8)	146	一部残存	暗灰色	灰色	一辺が屈曲した後，水平に伸びる。漆喰付着。
1071	第Ⅰ層 Ⅶ区	平瓦系道具瓦	(14.2)	(11.7)	(5.5)	482	一部残存	暗灰色	灰白色	凸面に粘土板貼付。凹凸面にキラ粉。袖瓦か。
1072	第Ⅰ層 Ⅶ区	平瓦系道具瓦	(12.6)	(15.7)	(7.5)	659	一部残存	暗灰色	灰白色	側面に台形の粘土板を貼付。舟の線刻。側面にキラ粉。袖瓦か。
1073	SX－9 中層	平瓦系道具瓦	(11.5)	(17.6)	(4.2)	691	一部残存	灰色	灰白色	厚い平瓦。
1074	第Ⅱ層 Ⅳ区	道具瓦か	(6.7)	(6.2)	(2.7)	54	一部残存	灰色	灰色	孔径1.4cmの円孔。

鯱観察表

図版番号	出土地点	全長	全幅	全高	重量	残存率	表面色	断面色	備考
1075	SX－9 中層	(18.1)	(31.0)	(10.1)	3,310	尾鰭の一部残存	暗褐色	灰白色	陶器。全面に錆釉。
1076	近代遺構 Ⅳ区	(3.7)	(8.5)	(3.7)	110	尾鰭の一部残存	黒褐色	浅黄橙色	陶器。全面に錆釉。断面菱形。

写真図版

1区調査前風景(東より)

1区調査前風景(北東より)

図版2

Ⅰ区遺構検出状態（南より）

Ⅰ区遺構完掘状態（南より）

Ⅰ区遺構完掘状態（西より）

Ⅰ区北東部遺構完掘状態（南より）

図版4

Ⅱ区遺構完掘状態（南より）

Ⅱ区東部遺構完掘状態（南より）

Ⅲ区遺構検出状態（南より）

Ⅲ区遺構完掘状態（南より）

図版6

Ⅰ区下層確認トレンチセクション（北西より）

Ⅲ区下層確認トレンチセクション（南西より）

2区調査前風景（西より）

2区調査前風景（南東より）

図版8

Ⅳ区上面遺構検出状態(東より)

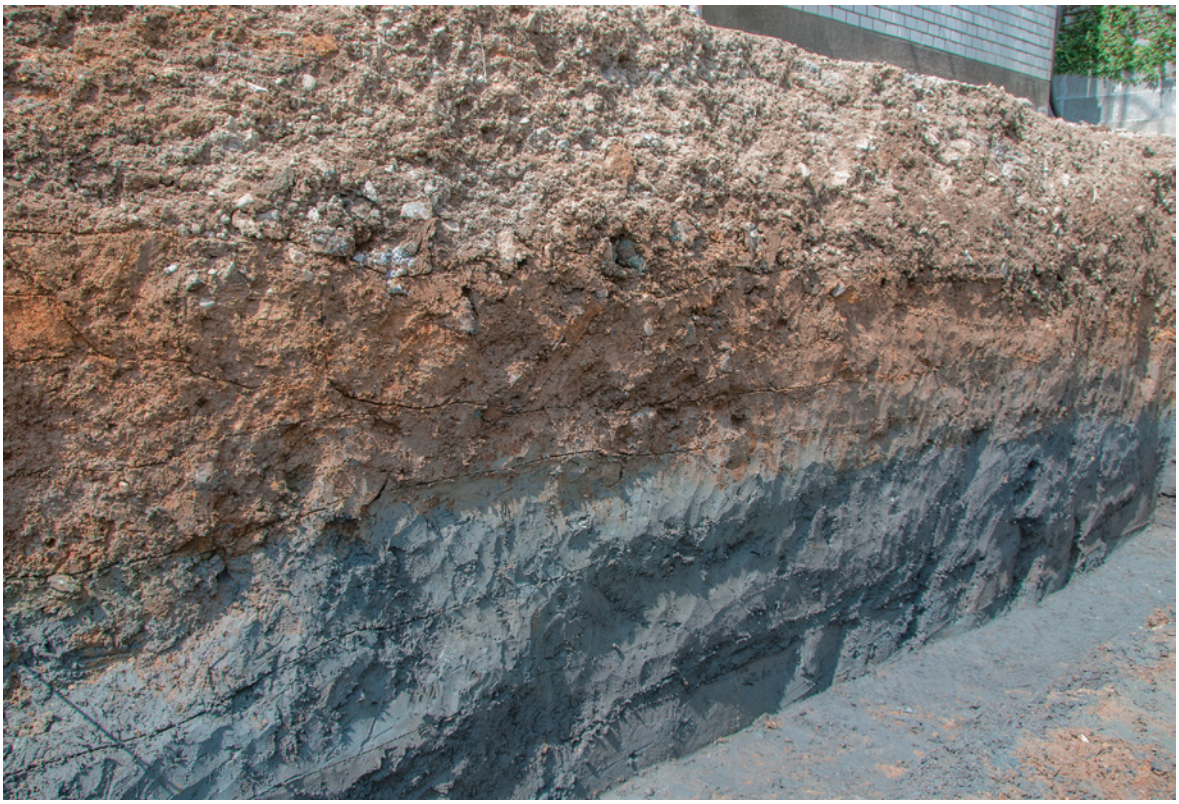
Ⅳ区上面遺構検出状態(南より)

Ⅳ区上面遺構完掘状態(東より)

Ⅳ区下面遺構検出状態(東より)

図版10

Ⅳ区下面遺構完掘状態(東より)



Ⅳ区下層確認トレンチセクション(南東より)

Ⅴ区上面遺構検出状態(西より)

Ⅴ区上面遺構完掘状態(東より)

図版12

Ⅴ区下面遺構検出状態(東より)

Ⅴ区下面遺構完掘状態(西より)

Ⅵ区遺構検出状態（西より）

Ⅵ区遺構検出状態（北より）

図版14

Ⅵ区遺構完掘状態(西より)

Ⅵ区遺構完掘状態(北より)

Ⅶ区上面遺構検出状態(西より)

Ⅶ区上面遺構完掘状態(西より)

図版16

Ⅶ区上面遺構完掘状態(北東より)

Ⅶ区下面遺構検出状態(西より)

Ⅶ区下面遺構完掘状態(西より)

Ⅶ区下面遺構完掘状態(北より)

図版18

SD－3・4・7完掘状態（南東より）

SD－4・7東部セクション（西より）

SD－8・9・27・28完掘状態（東より）

SB－1，SA－1完掘状態（南より）

図版20

SK－9腐植・蓆出土状態(南より)

SK－11，SX－3・4完掘状態(南より)

SK－14～19・21～23，SX－10完掘状態（南西より）

SK－17セクション（南西より）

図版22

SK－19・21・22完掘状態（南より）

SK－39セクション（南より）

SK－45～50完掘状態（西より）

SK－50セクション（西より）

図版24

SK－54セクション（東より）

SK－60セクション（西より）

SD－10セクション（北西より）

SD－10，SX－2セクション（南より）

図版26

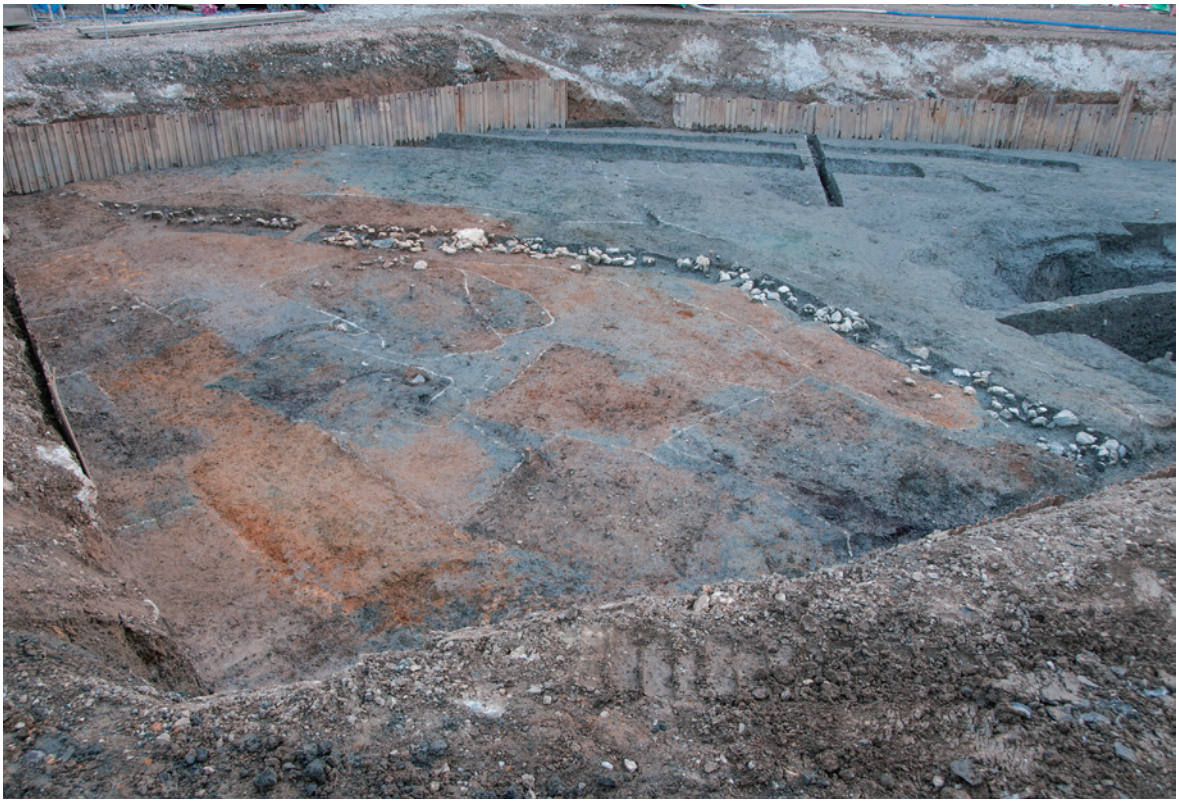
SD－10～12完掘状態（南より）

SD－11・12セクション（東より）

SD－13，SX－4セクション（南東より）

SD－13南部完掘状態（北より）

SD－22～24完掘状態（北より）



SD－23石列検出状態（北東より）

SX－3セクション（南より）

SX－7完掘状態（北より）

SX－8～10完掘状態1(南より)

SX－8～10完掘状態2(北より)

SX－10セクション（北より）

SE－1桶側出土状態（西より）

図版32

SE－1完掘状態（北より）

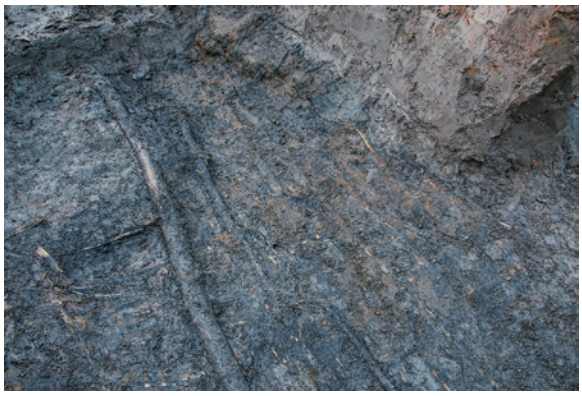
SE－2桶側出土状態（北より）

SD－3西部セクション（南東より）

SD－3・4西部完掘状態（西より）

SD－3東端腐植出土状態1（南より）

SD－3東端腐植出土状態2（南より）



SD－3東端腐植出土状態3（東より）

SD－4西部セクション（東より）

SD－4中央部セクション（北東より）

SD－4腐植出土状態（東より）

SD－4土師質土器椀(142)出土状態

SD－4木製品(170)出土状態

SD－5セクション(北より)

SD－7セクション(東より)

SD－8・9セクション(東より)

SD－8人骨頭蓋骨(203)出土状態

SD－9木製品漆器椀(205)出土状態

SK－3セクション(南より)

SK－3桶検出状態(西より)

SK－3桶出土状態(南より)

SK－5，SD－12セクション(西より)

SK－7蓆出土状態

SK－8完掘状態(北より)

SK－8陶器碗(220)出土状態

SK－10セクション(西より)

SK－10完掘状態(南より)

SK－10木製品漆器椀(225)出土状態

SK－12桶・木枠検出状態(北より)

SK－14セクション(北より)

SK－16木製品漆器椀出土状態

SK－17木製品漆器椀出土状態

SK－18セクション(北より)

SK－19セクション(北より)

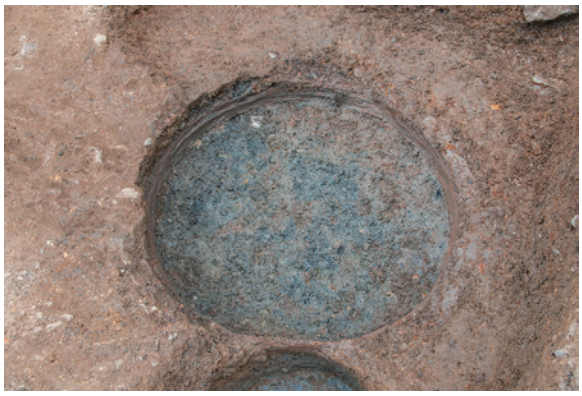
SK－21セクション(北より)

SK－23セクション（北東より）

SK－29セクション（北より）

SK－31セクション（南より）

SK－31桶出土状態（東より）



SK－33桶出土状態（北より）

SK－35セクション（南西より）

SK－35・36完掘状態（東より）

SK－37セクション（南より）

SK－37炭化物出土状態(南より)

SK－37陶器碗(264)出土状態

SK－37木製品漆器椀(271)出土状態

SK－38セクション(南より)

SK－38完掘状態(東より)

SK－38腐植出土状態(東より)

SK－39完掘状態(南より)

SK－39炭化物出土状態(西より)

SK－39木製品下駄(286)出土状態

SK－40セクション(東より)

SK－41・42セクション(南東より)

SK－41・42完掘状態(北より)

SK－42陶器瓶(290)出土状態

SK－44セクション(北より)

SK－45セクション(東より)

SK－45完掘状態(西より)

SK－46セクション（南より）

SK－46完掘状態（西より）

SK－47・48セクション（北西より）

SK－48～50完掘状態（西より）

SK－49セクション（北西より）

SK－51・52セクション（北西より）

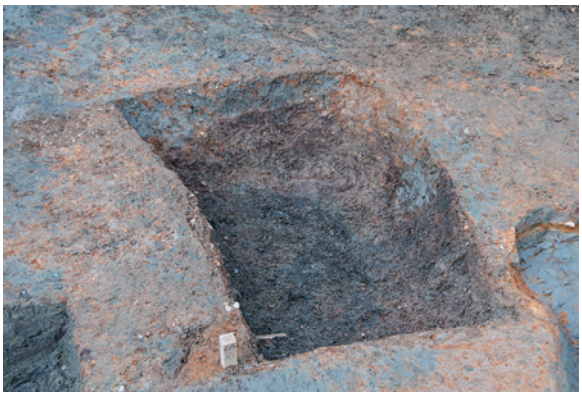
SK－51木製品漆器椀（314）出土状態

SK－53セクション（南東より）

SK－53完掘状態（北より）

SK－53腐植出土状態（西より）

SK－54・55完掘状態（東より）



SK－54腐植出土状態（南より）

SK－55セクション（南東より）

SK－55完掘状態（東より）

SK－57セクション（南より）

SK－57完掘状態（北より）

SK－58セクション（南より）

SK－58完掘状態（西より）

SK－58陶器皿（343）出土状態

SK－59セクション（西より）

SK－59腐植出土状態（北より）

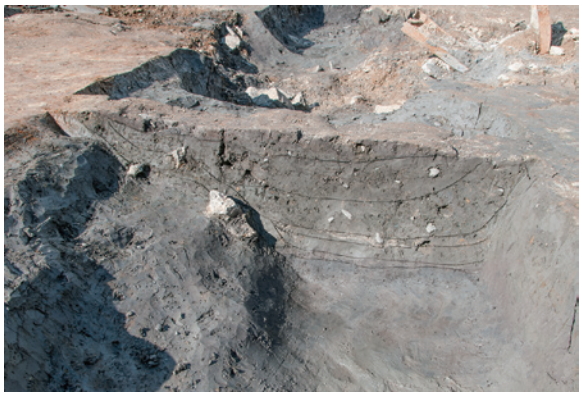
SD－10陶器皿（355）出土状態

SD－11磁器碗（363）出土状態

SD－12西部セクション（東より）

SD－12東部セクション(西より)

SD－13北部セクション(北より)



SD－13南部セクション(南より)

SD－13，SX－12セクション(南より)

SD－13陶器皿(370)出土状態

SD－14木製品漆器椀出土状態

SD－15セクション(南より)

SD－15完掘状態(北より)

図版44

SD－16セクション（南より）

SD－16完掘状態（北より）

SD－20セクション（南より）

SD－23・24セクション（北より）

SD－23・25セクション（西より）

SD－23石列検出状態（西より）

SD－27西部セクション（東より）

SD－27木製品漆器椀（407）出土状態

SX－1磁器碗(410)出土状態

SX－3木製品漆器椀出土状態

SX－3木製品曲物出土状態

SX－3木製品漆器蓋(426)・下駄出土状態

SK－13，SX－5セクション(南より)

SX－7セクション(西より)

SX－8陶器皿(457)出土状態

SX－8陶器火入(503)出土状態

SX－9陶器碗(595)出土状態

SX－10完掘状態(南より)

SX－10陶器擂鉢(621)出土状態

SX－10磁器香炉(630)，木製品曲物出土状態

SX－12完掘状態(北より)

SE－1セクション(西より)

SE－1桶側検出状態(西より)

SE－1桶側半裁状態(西より)

SE－1桶側出土状態(西より)

SE－2セクション(南より)

SE－2桶側半裁状態(北より)

SE－2桶側出土状態(北より)

SE－2木製品漆器椀(666)出土状態

P－5桶出土状態(北より)

P－6板材出土状態(西より)

P－11礎板出土状態(南より)

瓦（鬼瓦）

瓦（鬼瓦）

263

448

496

496

640

710

陶器(碗)，土師器(焼塩壺)，木製品(木簡)

図版50

720

722

746

749

757

757

瓦(軒丸瓦)

776

793

801

822

836

845

瓦(軒丸瓦)

846

957

958

958

959

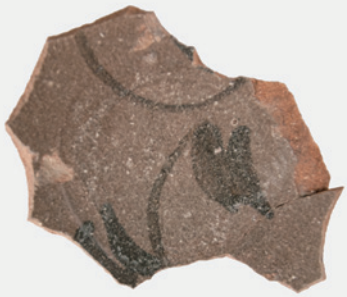
975

瓦（鳥衾瓦・鬼瓦・丸瓦）

23

24

36



50

70

219

171

171

陶器(天目碗・皿)，磁器(染付小皿・色絵皿)，青磁(碗)，瓦(平瓦)

図版54

203

203

203

203

220

223

250

263

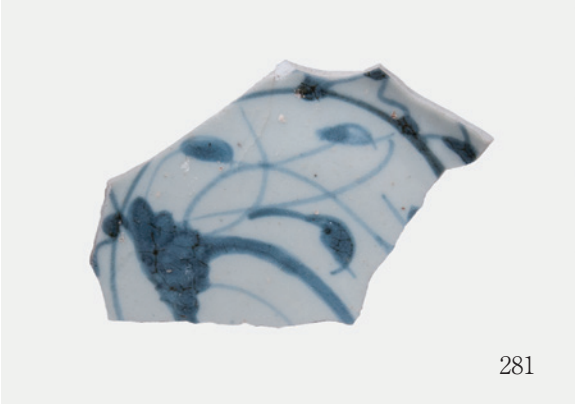
陶器(碗・瓶)，木製品(漆器椀)，人骨(頭蓋骨)

264

266

265

265


281

290

296

306

陶器(碗・中皿・稜花皿・瓶・擂鉢)，磁器(染付皿)

318

322

347

352

355

357

361

370

陶器(皿・小皿・擂鉢)，土製品(鞴羽口)，木製品(漆器椀・下駄)

379

394

397

419

432

434

441

472

陶器(碗・小皿)，磁器(染付碗・染付皿)，木製品(漆器椀)

図版58

499

501

504

508

510

568

591

591

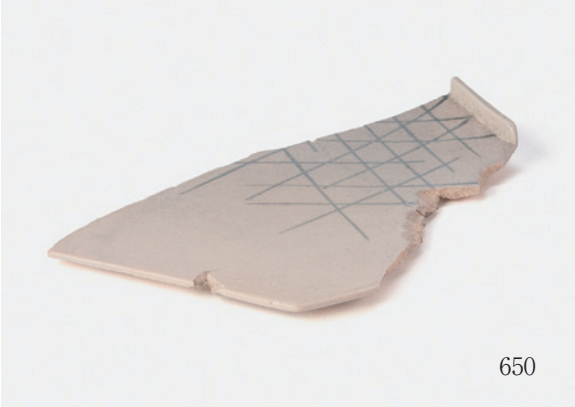
陶器(碗・中皿・鉢)，磁器(染付小皿・染付変形皿)，木製品(漆器椀・不明)

607

620

627

633


650

666

676

690

陶器(碗・変形皿・瓶か・擂鉢)，磁器(染付皿・染付小皿)，青花(鉢)，木製品(漆器椀)

789

797

798

825

960

960

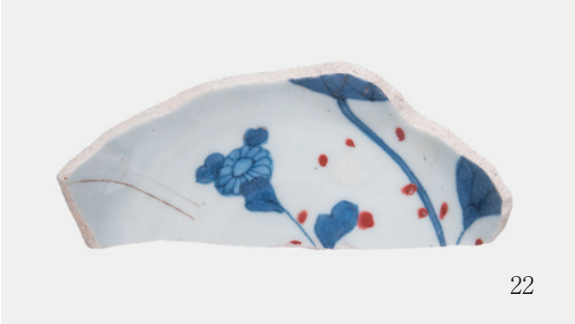
1043

1075

陶器(鯱)，瓦(軒丸瓦・鬼瓦・平瓦)

2

21


22

43 126 127

45

46

49

59

67

68

陶器(碗・皿・甕)，磁器(染付変形皿・色絵皿)，土製品(土錘)，金属製品(銭貨)

図版62

84

87 88 89 90

91

93

94 95 96 97 98 99

107

122

123

129

132

白磁(皿)，土師質土器(椀)，須恵器(椀など)，瓦器(椀)，土製品(箱庭道具など)，木製品(舟形)など

133

133

137

139

140

142

176

190

191

197

白磁(碗・皿)，土師質土器(椀・小皿)，須恵器(椀)，瓦器(椀)

図版64

204

214

224

225

239

252

253

256

260

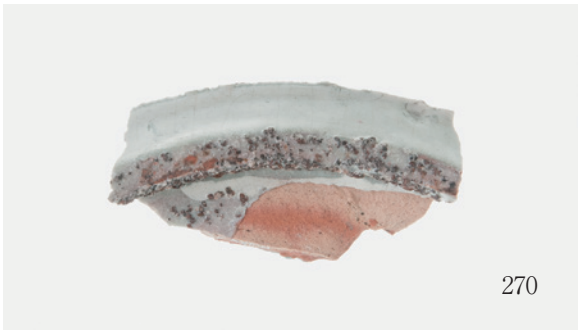
261

陶器(擂鉢・甕)，磁器(染付小皿・小杯・壺)，青花(大皿)，瓦質土器(釜)，木製品(漆器椀・漆器栓)

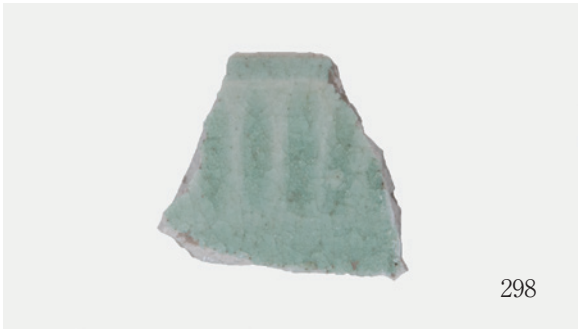
267

268

270


270

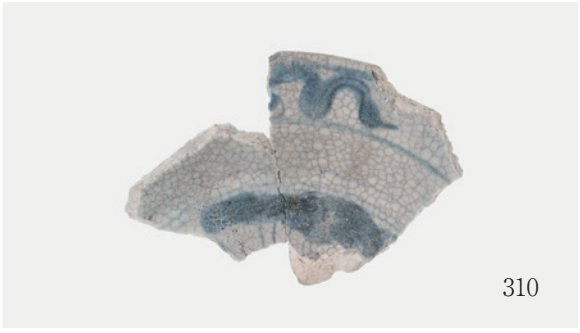
292


298

299

305

308


310

陶器(片口鉢)，磁器(皿・輪花皿・染付蓋物蓋)，白磁(皿)，青花(皿・大皿)，土師質土器(皿)

図版66

336

339

340

343

348

360

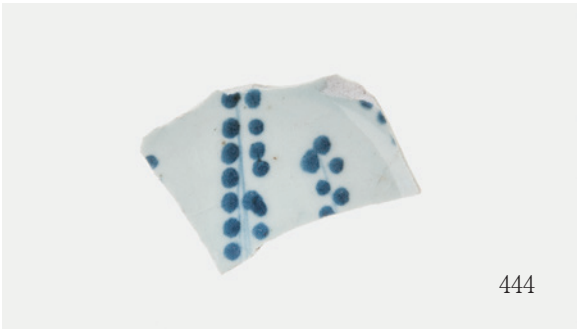
362

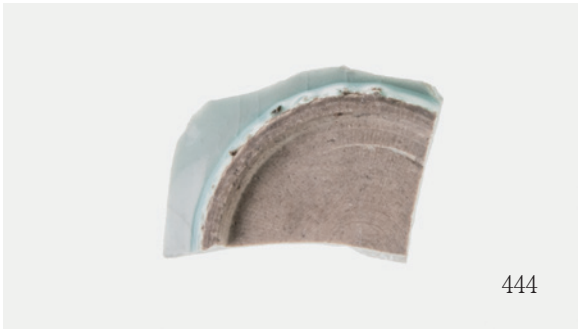
371

393

443

陶器(皿・小皿・擂鉢)，磁器(染付壺蓋)，土師質土器(皿)，木製品(漆器椀)，金属製品(小柄)


444


444

449

451

459

480

479

479

487

505

陶器(碗・皿)，磁器(色絵染付皿か・小杯・水滴か)，青花(皿)，土師器(焼塩壺蓋)，木製品(下駄)

図版68

531

532

533

579

581

583

588

590

602

614

磁器(碗・色絵猪口・染付蓋物・染付水滴か)，木製品(漆器椀・切匙・刷毛・下駄)

615

619

641

655

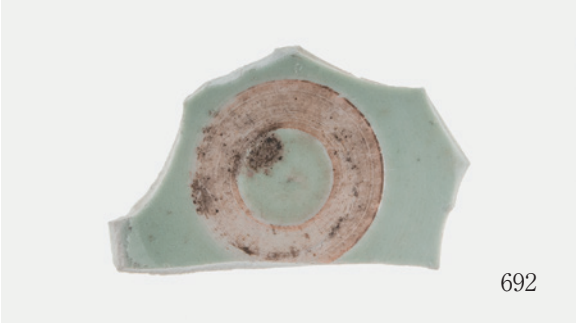
670

672

677

682

684


692

陶器(色絵碗・碗・皿)，磁器(皿)，木製品(漆器蓋・刳物)

図版70

693

700

701

858

860

862

864

871

876

877

磁器(染付皿)，青磁(水注か)，青花(皿)，瓦(軒平瓦)

881

889

891

892

897

901

905

906

911

915

瓦(軒平瓦)

図版72

918

926

945

946

947

949

950

970

988

1017

瓦(軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦)

1044

1045

1049

1056

1069

1070

1071

1072

1076

陶器(鯱)，瓦(平瓦・丸瓦系道具瓦・平瓦系道具瓦)，貝類

図版74

217

238

257

259

387

708

木製品(木簡・杓文字)

44

613

411

411

木製品(木簡)

図版76

587

587

707

709

木製品(木簡)

報告書抄録

ふりがな	こうちじょうせききたくるわ
書名	高知城跡北曲輪
副書名	高知県保健衛生総合庁舎建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	徳平涼子
編集機関	公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所在地	高知県南国市篠原1437－1
発行年月日	2019年3月22日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
高知城跡北曲輪（こうちじょうせききたくるわ）	〒780－0850 高知県（こうちけん）高知市（こうちし） 丸ノ内（まるのうち）2丁目（ちょうめ）34	392014	010082	33° 33′ 45″	133° 31′ 56″	2015.9.28〜2015.12.18 2017.8.30〜2017.12.15	2,190㎡	高知県保健衛生総合庁舎建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高知城跡北曲輪	城館	古代 中世 近世	掘立柱建物跡 2棟 塀・柵列跡 2列 土坑 77基 大型土坑 12基 溝跡 35条 井戸跡 2基 ピット 231個	陶器 磁器 土師器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 青磁 白磁 青花 瓦 木製品	絵図に描かれた藩の施設とみられる建物跡や廃城に伴う瓦の廃棄土坑などが確認されており，藩主山内家の家紋瓦が多数出土した。

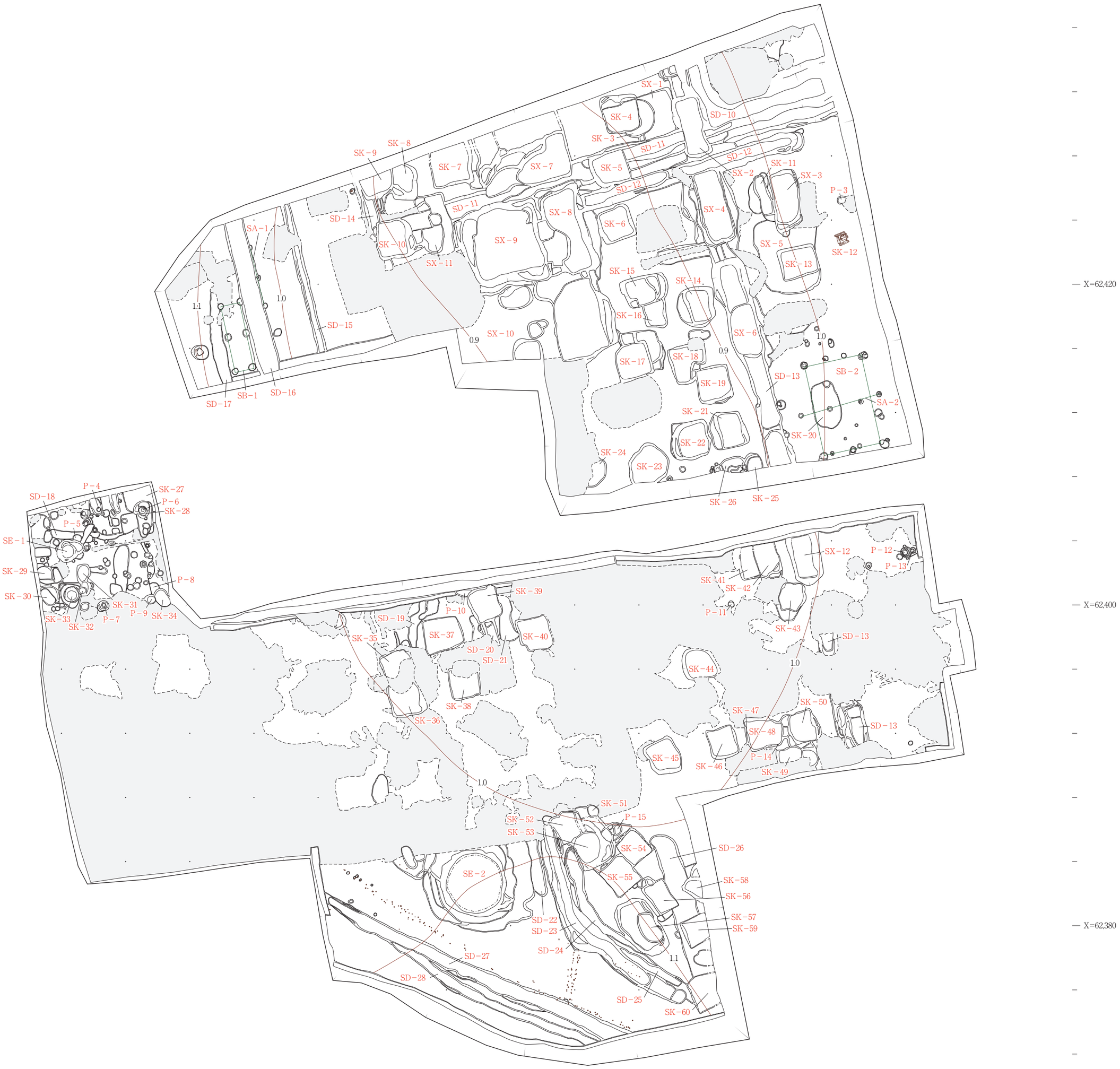
要約

高知城跡北曲輪は大高坂山北側の平地部に位置し，絵図によると江戸時代には武家屋敷や武器庫方や作事方・米蔵などの藩の施設があった場所である。

調査では，大高坂山に近い丘陵裾部で古代から中世にかけての溝跡が確認された。溝跡は大規模で，丘陵に沿って3条が並走しており，1条には底に木の枝や植物が格子状に組んで敷かれていた。これらの溝跡は大高坂城期以前の集落などの存在を示す貴重な資料となった。

江戸時代の遺構は，絵図に描かれていた藩の施設とみられる建物跡のほか，溝跡や井戸跡も確認した。また，明治期の廃城に伴う廃棄土坑からは多量の瓦が出土し，藩主山内家の家紋である三ツ葉柏文鬼瓦や陶器製の鯱も出土した。

X=62,440m
X=62,420
X=62,400
X=62,380
Y=2,960m
Y=2,980
Y=3,000



付図1　高知城跡北曲輪上面遺構平面図（S＝1/200）

付図2　高知城跡北曲輪下面遺構平面図（S=1/200）

本書作成データ
システム：MacOS X（10.8.5）
ソ フ ト：Adobe Photoshop®13.0.6，Adobe Illustrator®16.0.4，Adobe Indesign®8.0.2など
フォント：モリサワOTF基本7書体，Times New Roman Italic
デ ー タ：すべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第152集

高 知 城 跡 北 曲 輪

高知県保健衛生総合庁舎建設に伴う発掘調査報告書

2019年3月22日

発行　高知県
㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437－1
Tel. 088－864－0671

印刷　川北印刷株式会社